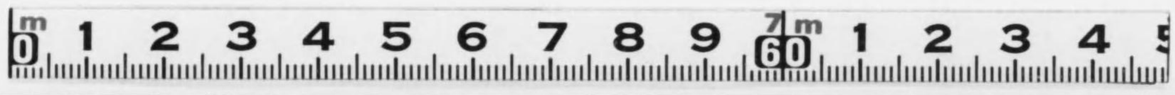


913.45
K.48
913. 45-K0487
1200500757408

J.13
29
24315
國立中央圖書館藏書

다ㄴ91
坂倉庭書
913.45
K048
(5)

采家物語

全

興承久記

國立圖書館
昭和 24. 3. 15
寄贈

内閣文庫所蔵古写本

緒言

平家物語十二巻は、平家一門の榮枯盛衰を描ける一篇の大悲劇詩なり。結構雄大、文辭流麗、ことに情を寫し恨を傳ふるところ、語々痛切、句々哀婉、眞に一聲一涙の妙あり。

敍述の精細なるは、盛衰記に於てこれを見るべし。文章の華美なるは太平記に於てこれを見るべし。されども、含蘊際なく、詩味饒なるは、平家物語を措きて他に覓むべからず。平語は實に戰記中の傑作にして、鎌倉文學の白眉なり。

承久記二巻は、また承久兵亂記ともいふ。作者詳ならず、隨つてその世に出でたる年代もあきらかならざれども、太平記以前のものなりとは信ぜらる。專ら承久の變の顚末を敍せるものにして、史料として、世に重せ

らる。

平家物語の作者、傳說區々なるがなかに、信濃前司行長なりといふ彙好法師の說、最信ずべきが如し。なほ徒然草に、「行長入道平家物語をつくりて、生佛といひける盲目に敎へてかたらせけり。（中略）かの生佛が生れつきの聲を、いまの琵琶法師はまなびたるなり」と傳へたる如く、この物語は、琵琶法師によりて諷誦せられしものにして、實に語りもの、權輿なり。

語りものとして傳へられたる平家物語は、諸本おのづから異同を生じて、參考源平盛衰記にひく所、一方本、一本、伊藤本、八坂本、鎌倉本、如白本、佐野本、南都本、南都異本、東寺本、長門本の十一種を數へ、なほこのほかに、延慶本、嵯峨本、梵舜本等の數本あり。此の如く、平家物語には異本頗る多しと雖も、これを大別すれば、一方檢校の傳へたる一方流本と、城方檢校の傳へたる城方流本（また入坂本ともいふ）との二類に分たる。（平曲の分類は山田氏の研究に據る）

一方流に屬する流布本には、寬永、正保、明曆、寬文、延寶、天和等の諸版ありて、洽く世に行はれたれども、城方流本にいたりては、未だ刊行せられたるものなし。

本書は、實にこの城方流の古寫本を上梓せるものにして、原本は內閣文庫の所藏なり。

本書の字間に施せる黑點は、（原本は朱點なり）重訂御書籍來歷志、八坂本平家物語の條に、「古寫本ニシテ城方流ノ句讀アリ」と載せられたる、斯流特殊の句讀點にして、一方流本に於ては見ることを得ざるものなり。但、本書卷四、一百七十二頁より二百四頁に至る三十三頁間と、同卷、二百九頁より二百十三頁に至る五頁間と、卷五、二百三十四頁より二百三十六

頁に至る三頁間とに、普通の句讀點を施せるは、原本その箇所に句讀を脫せるが故なり。

本書を流布本に對比するに、字句の異同、事實の詳略等、一々擧ぐるにたへず。また語り本の特徴とも見るべき音便のごときも、彼に比して一層その夥しきをおぼゆ。卽、「いひてん」しかば」、「見さうざつし」、「入相ばかんの事なれば」、「まんだ朝」、「たんだ今」、「しんばしさゝへて」、「みどん(緣)の薄樣」、「參らつさせ」、「おもひあるでもなうて」、「切つてんげり」、「見てんげれば」の如き語句を隨所に見るなり。

本書、章段の立て方、またかの流布本と同じからず。ことに灌頂卷は、彼に立てて此に立てず、あひの物は此に立てゝ彼に立てず。これその殊異の點なり。

平曲の大秘事たる、宗論、寶劍、神鏡の三章は、流布本八坂本ともにこれを

載せず。(但本書卷十一內侍所の歸洛の次に「爰に劍あり」と註記せり)嵯峨本には、宗論一章を高野御幸の條(卷十)に、劍鏡の二章を內侍所入洛の條(卷十一)に併載す。本書、今これを謄寫して附錄とせり。

本書を校訂するにあたりては、特に原本を尊重して、毫も私意を混へざらん事を期せり。されどもまた、原本には傳寫の誤とおぼしきもの少からず見ゆれば、其誤脫の次の如く明白なるものに限りてこれを補正せり。卽「闕官停(任字を脫す)に行はる」、「涙も(ぜ字を脫す)きあへず」、「御日安鴈(ひあんがと振假名もあれど御晏鴈の誤)」、(以上卷一)參せら(れ字を脫す)ね、(卷二)陽(成字を脫す)院(卷四)、帝都各(名の誤)利の地(卷七)、立鳥(帽字を脫す)子(卷十)等の如し。その他疑を存して其旨を註記せるところも少からず。また、當字借字の類も、概ね本の儘ながら、御節(五節)、神祇館(神祇官)、祇公(祇長)、上略(上洛)等の如く、紛はしきものは多少これを改めたるものなき

あらず。そのほか、意のとり難き所には大概異本をひき、振假名は諸本を參照してそのよろしきに隨へり。

承久記には、刻本のほかに異本とも見るべき古寫本あり。寫本は刻本に比すれば事實やゝ詳密なるをもて、本書にはこの寫本を採り、これを校訂するに、帝國圖書館なる元和四年の版本と、帝國大學圖書館所藏の版本とを以てせり。

終に臨み、城方流の原本を發見して其刊行を勸められたる、山田孝雄氏の厚意を謝す。

明治四十四年晩春

校訂者　古谷知新識

平家物語目次

卷第一……一
祇園精舍（序分）　一
殿上闇打　二
清盛昇進の沙汰（あひの物）　五
童のさた　七
我身の榮花　八
義王　一〇
二代の后　二一
額打論　二四
清水炎上　二六
春宮立（あひ）　二九
殿下の乘合　二九
德大寺嚴島詣　三四
鹿谷（あひ）　三七
鵜川合戰　三九
願立　四一
御輿振　四六
內裏炎上　五〇

卷第二……五二
座主流　五三
西光がきられ　六〇
小教訓　六七
あひ　七二
少將の乞請　七四
教訓狀　七九
烽火の沙汰（あひ）　八六
大納言の流され　八九
阿古屋の松　九二
大納言の死去　九五

卷第三……一〇〇
山門滅亡　一〇〇
康賴祝　一〇四

平家物語
卒都婆流し　一〇七
蘇武　一一〇
ゆるしふみ　一一三
あひ　一一八
御産の巻　一一九
公卿揃(あひ)　一二三
頼豪　一二五
大塔建立　一二七
少將の都がへり　一二九
蟻王が島くだり　一三五

卷第四……一六八
新院嚴島御幸　一六八
源氏そろへ　一七一
鼬の沙汰(あひ)　一七四
信連合戰　一七六
競　一八一
三井寺より山門へ牒狀　一八六
三井寺より南都への牒狀　一八八
南都より園城寺への返牒　一八九

卷第五……二一四
都遷　二一四
月見　二一九
辻風の沙汰(あひ)　一四三
無紋かれわたし　一四七
あひ　一五〇
法印問答　一五一
大臣流罪(あひ)　一五五
妙音院の琵琶ひき　一五六
院の流され　一五九
あひ　一六四
城南の離宮　一六四

卷第六……二五五
新院の崩御　二五五
紅葉　二五六
葵の前(あひ)　二五九
小督　二六一
九州の早馬(あひ)　二六七
入道の死去　二七〇
慈心坊　二七三

卷第七……二八九
清水の冠者のさた　二八九
經政の竹生島詣　二九一
火打合戰　二九三
木曾の願書　二九五
倶利伽羅　二九八
實盛が最後　三〇一
玄昉の沙汰(あひ)　三〇四
物怪　二二三
大場がはや馬(あひ)　二二六
朝敵揃　二二七
咸陽宮　二二九
文覺の勸進帳　二三四
文覺の流され　二三六
福原院宣　二三九
富士川合戰　二四二
五節の沙汰(あひ)　二四八
奈良炎上　二五〇
祇園女御　二七五
あひ　二七八
國綱の死去　二七八
行高の沙汰(あひ)　二八一
墨俣合戰　二八二
横田河原合戰　二八六
木曾山門の牒狀　三〇六
山門よりの返牒　三〇九
平家の一門日吉の社へ連署の願書　三一〇
主上都落　三一三
あひ　三一六
維盛の都落　三一七
池の大納言都に留る事(あひ)　三二〇

目次

巻第十……四三五

熊谷平山が二の懸……四四〇
輪三草の夜合越……四四〇
六箇口曾原の合戦……四五二
木河宇治川……四五四
曾原の合戦……四五四
口の度が切最後……四五六
箇れ戦……四五八
三草の夜討……四六〇
木と梶原と先陣……四六二
佐々の沙汰……四六二
拝賀の沙汰……四六四

巻第九……四六七

征夷大将軍の院宣……四六八
太宰府落……四七二
大蛇の沙汰……四七二
名虎……四七七
法皇の山門御幸……四七八

巻第八……四八三

薩摩守の都落……四八三
経政の都落……四八三

巻第七……四八四

法住寺合戦……四八五
住山寺合戦……四九〇
法皇妹尾が最後……四九四
法皇鳥羽殿……四九七
水練……四九七
橋間（あひ）……四九八

巻第六……五〇九

小等相の身投……五〇九
敦盛最期……五一一
備中守の最後（あひ）……五一二
知章の演軍……五一四
薩摩守の最後……五一八
越中の前司が最後……五一八
坂落……五二一
あしひ……五二一
梶原が二度の懸……五二二

巻第五……五二五

大地震の沙汰（あひ）……五二五

巻第四……五三七

福原落……五三七
都帰……五四二

巻第三……五四四

五節の沙汰（あひ）……五四四
千手の前……五四八
重衡の北方の出家（あひ）……五五三
池大納言頼盛下向（あひ）……五五四
藤戸……五五六
藤盛の入水……五五八
藤盛熊野参詣……五五八
藤盛の熊野出家……五六〇
高野の巻……五六二

巻第二……五六五

大臣殿被斬……五六五
大納言被流……五七〇
大納言死去……五七二
丹波少将成経……五七四
教訓状……五七六
少将都帰……五七八
有王……五八〇
僧都死去……五八二
一行阿闍梨之沙汰……五八四
善光寺如来事……五八六
阿古屋松……五八八
祇王……五九〇
祇女……五九二
仏御前……五九四
横笛……五九六
滝口入道……五九八
三井寺炎上……六〇〇
飛脚到来……六〇二
入道死去……六〇四

巻第一……六〇七

祇園精舎……六〇七
鱸……六〇七
殿上闇討……六一〇
禿髪……六一二
吾身栄花……六一四
願立……六一六
祖父清盛公……六一八
二代后……六二〇

承久記目次

平家物語
平大納言の流
小原入
參河守の最後（あひ）
土佐坊が夜討
吉野軍
十郎藏人の沙汰（あひ）
附錄大秘事……五九五
宗論
寶飯

上巻……六〇三

後鳥羽院御事
賴家實朝昇進并薨去事
義時追討御評定事
光季親廣被召事
官兵攻光季事
公繼公意見事
方々被下宣旨事
二位殿口說事并引出物事
關東合戰評定事
義時宣旨御返事
京都方々手分事
高重討死事
尾張國而官軍合戰事
秀康胤義落行事
阿曾沼小次郎渡大豆戶事

下巻……六四二

官軍敗北事
重忠防戰事
相模守帥參議方々手分事
朝時從北陸道上洛事
一院坂本御出事
方々責口御固事
勢多合戰事
宇治橋合戰事
信綱兼吉渡宇治河事
關東大勢溺水事
宇治手敗事
秀康胤義等都歸入事
被下院宣於泰時事
胤義自害事
京方兵誅戮事
京都飛脚人々評定事
公卿罪科事
一院隱岐國被流給事
新院宮々被流給事
廣綱子息被切事
胤義子供被切事
中院移阿波國給事

目次終

平家物語（八坂本）

卷第一

祇園精舍（序分）

祇園精舍の・鐘のこゑ・諸行無常の・ひゞきあり・娑羅双樹の・はなの色・盛者必衰の・理を・あらはす・驕れる者も・久からず・たゞ春の夜の・夢のごとし・武き者も・終には・亡びぬ・偏に・風の前の塵に・同じ・とほく異朝の・先蹤を訪に・秦の趙高・漢の王莽・梁の周伊・唐の祿山・これらは皆・舊主先皇の・政にも隨はず・樂を極て・天下の亂むことをも・悟られ・諫をも・思ひよらず・民間の・愁る所をも・知ざりしかば・久からずして・亡にし・もの也・近く本朝を・伺に・承平に將門・天慶に純友・康和の義親・平治に信頼・これらは・皆・奢れることも・武き心も・取々成しかども・まちかくは・前太政大臣平朝臣清盛公と・申し人の・有樣を・傳承こそ・心も詞も・及ば

れね・其先祖を尋るに・桓武天皇第五の皇子・一品式部卿・葛原の親王・九代の後胤・讃岐守正盛の孫・刑部卿忠盛・朝臣の嫡男なり・彼親王の・御子高視の王は・無官無位にして・うせ給ひぬ・其御子・高望の王の・ときより・始て・平の姓を・給はつて・上總守に・成給ひしより・此かた・忽王氏を出て・久しく・人臣に・つらなる・其御子・鎭守府の將軍義茂・後には・常陸大丞國香と・改む國香より・貞盛・維平・正敎・正平・正盛に・至る迄・六代は・諸國の受領たりと・いへどもいまだ・殿上の・仙籍をば・ゆるされず

殿上闇打

然るを忠盛の・いまだ・備前守たりしとき・鳥羽院の御願・得長壽院を・造進して・三拾三間の・御堂をたて・一千一體の・御佛をする奉る・供養は・天承元年三月十三日也・忠盛勸賞には・闕國を給ふべきよし・仰下され候をりふし・但馬國の・明たりけるをぞ・給はりける・上皇・猶叡感に・たへずして・內の昇殿をぞ・ゆるされける・忠盛・歲三拾六にして・始て・昇殿す・雲の上人・是を猜み憤て・同き年の十一月廿三日・五節・豐明節會の夜・忠盛を・殿上にして・闇打に・せんとぞ・擬せられける・忠盛此事をほのぎいて・われ・右筆の・身にあらず・武勇の・家にむまれて・不慮の恥に・あはん事・家の爲・身のため・心うかるべし・詮する所・身を全して・君に・仕へよと・いふ・本文ありとて・兼て・其用意をいたす・參內の・始より・衣冠の下に・大なる鞘卷を・しどけなげに・指つゝ・火の・ほのくらきかたに・向ひては・やはら彼刀をぬき出し・鬢に・ひきあて・ひきあて・しき給ひけるが・餘所よりは・氷なんどのやうにぞ・みえし・諸人目をすます・又忠盛の・一郎等に・もとは・一門たりし・木工頭平の貞光が・孫・新三郎大夫家房が子に・左兵衞尉家貞と申・者あり・木賊の・狩衣の下に・萌黃の・腹卷を・着・衞府の太刀・わきばさんで・殿上の小庭に・畏てぞ・候ひける・貫主以下・あやしみをなし・六位を以・いはせけるは・うつぼ杜よりうち・鈴の・つなの邊に・布衣の者の・候は・なにものぞ・狼藉也・罷出よと・いはせければ・家貞・畏て申けるは・是は相傳の主・備前の督殿の・今夜・これにて・闇打に・せられ給ふべきよしを・傳承て・ならん樣を・見んとて・かくて・候へば・えこそ・罷出まじけれとて・畏てぞ・候ひける・これらをよしなしとや・思はれけん・其夜の闇打・なかりけり・忠盛・御前の・召に・付て・まはれけるに・人々・拍子をかつて(イかへて)・伊勢平氏は・すが目なりけるとぞ・はやされける・此人・忝も・柏原の天皇の・御末にては・おはしけれ共・まぢかくは・無下にくだつて・官途も・淺う・都の・住居もうと〳〵敷・伊賀・伊勢に・のみ・住國ふかき・人にて・おはしければ・彼國の器・瓶子にたとへて・伊勢平氏とは・はやされけり・其上・忠盛のかた目の・少・すがまれ・たりければにや・か樣には・はやされけり・忠盛・いかに・すべきやうも・なうて・未・御遊も・をはらぬ・さきに・御前を・罷出られけるに・いかゞは・

思はれけん・よこたへ・さゝれたりつる・刀をば・紫宸殿の・御後にして・主殿司に・預け置てぞ・出られける・案のごとく・家貞・待うけ奉つて・さて・いかに候と・申ければ・忠盛此事ありのまゝにいひつる程ならば殿上までも・きりのばらん・ほどの者の・つらたましひ・なりければ・いまは・別の事なしとて・引具してぞ・出られける・五節には・白薄様・こせんし（イとうせんし）の紙・巻上の筆・鞆絵・かいたる・筆の軸なんど・か様に・さまん〳〵・おもしろき事を・のみこそ・うたひ・はやされしに・中比・大宰權帥季仲卿と・申す人・色の黒かりければ・人・黒帥とぞ・申ける・此人のいまだ其比・藏人頭たりしとき・御前の・召に付て・まはれたるに・人々拍子を・かへて・あなくろ〳〵・黒き頭かな・いかなる人の・漆ぬりけんとぞ・はやされける・幷に・白髪なる・殿上人の・まはれけるに・此人の方人と・おぼしくて・あなしろ〳〵・しろき・ぬしかな・たれ・とらへて・箔を・おしけんとぞ・はやされける・上古には・か様のこと共・ありしかども・いまだ・事・出こず・末代・いかゞ・あらんずらん・覺束なしとぞ・人申ける・案の・ごとく五節・はてにしかば・殿上には・公卿僉議あり・それ・雄劔を・帶して・公宴に・つらなり・兵杖を・給はつて・宮中を・出入する事・これ格式の・例をまぼる・綸命・よしある・先規たり・然るを・忠盛・相傳の・郎從を・布衣の・兵と・號して・殿上の小庭に・めしおき・其身は・腰の刀を・よこたへ・さいて・節會の・座に・つらなる・雨條・希代未聞ざる・狼藉なり・事既重疊せり・罪科・尤・のがれがたし・早・御札を削て・闕官停任に・行はるべき・かと・各〳〵・訴へ申され・たりければ・上皇も・大きに・驚思召て・いそぎ・忠盛を・召て・御尋ありければ・忠盛・畏て・陳じ申されけるは・まづ・郎從・小庭に・祇候の事・忠盛・覺悟つかまつらず・但・近日・人々相たくまるゝ・子細あるかの間・相傳の郎從・こと を・傳承て・主の恥を・たすけんが爲に・參候の條・力及ばざる次第なり・猶其咎・あるべくは・其身を・召遣すべきは（イか）・次に刀の事は・主殿司に・預置畢・彼刀を・召出し・刀の實否に・任て・咎の・左右・可〻有かと・申されたりければ・上皇・此儀 尤とて・いそぎ・彼刀を・召出して・叡覽あるに・上は鞘巻の・くろう・ぬつたりけるが・中は・木刀に・銀箔をぞ・おしたりける・當座の・恥辱を・のがれむが・爲に・腰の刀を・帶するよし・あらはす・といへども後日の・訴訟を・存知しつて・木刀を・帶しける・用意の・ほどこそ・神妙なれ・次に・郎從・小庭に祇候の事且は・武士の・郎等のならひなり・されば・是は・忠盛が・咎にはあらず・とて・還て叡感に・あづかつし上は・敢て・罪過の沙汰は・なかりけり

清盛昇進の沙汰（あひの物）

其子共・諸衞の佐を・經て・昇殿せしに・人・殿上の 交を・嫌ふに及ばず・或時忠盛・明石のうらの・月見むとて・播磨へ・下向せられたりけるが・程なう・歸りのぼられ・たりければ・人々・明石

のうらの・月はいかにと・とひたまへば・忠盛の返事には

有明の月もあかしのうら風に波ばかりこそよると見えしか

と・申されたりければ・上皇も・大きに御感あつて・やがて此歌をば・金葉集にぞ・入られたる・又忠盛・仙洞に・通うて・あそばれける・女房の・もとに・皆紅の扇の・つまに・月出したりけるを・取わすれて・出られければ・かたへの女房たち・あれは・いづくよりの・月かげぞや・出所・覺束なし・なんど・わらひ・あはれければ・此女房

雲井よりたゞもり來る月なればおぼろけにてはいはじとぞおもふ

事を・友とかや忠盛の・すいたりければ・この女房もいふなりけり・かくて・忠盛・仁平三年・正月十五日に・歳五十八にて・うせ給ふ・清盛・嫡男たるによつて・その跡をつぐ・保元元年の・七月に・主上・上皇の・御國あらそひの・ありしとき・清盛・主上の・御咏方に・さふらひて・勳功あり・次の年播磨守に・移つて・同き三年に・大宰大貳になる・又平治元年十二月に・信頼・義朝が・謀叛のときも・清盛猶・咏方に候ひて・勳功あり・勳功ひとつにあらず・恩賞是なほ重かるべしとて・やがて・正三位して・打つゞき・宰相衞府督・檢非違使別當・中納言・大納言に・經あがり・剩丞相の位に至る・内大臣より・左右を・へず・太政大臣・從一位に・あがり・給ひけり・大將には・あらね共・兵杖を給て・隨身を召具す・輦車に・のつて・宮中を・出入事・偏に・執政の人に・おなじ

童のさた

太政大臣は・一人に・師範として・四海に・龜鏡せり・道を論じ・國を治め・陰陽を・和給へり・其人に・あらずんば・卽闕の官とも・名づけられたり・清盛・其人にはあらね共・かやうに・一天四かいを・掌に・握給ひし上は・人とかう申すに・及ばず・角て・仁安三年・十一月十二日に・清盛・病に・侵れ五拾一にて・出家し・法名・淨海とぞ・名乘られける・されば・其しるしにや・宿病立所に・いえて・天命を・全し・人の・隨ひ・付奉る事は・吹風の草木を・なびかすが・ごとし・世のあまねく・あふげることも・ふる雨の・國土を・潤すに・異ならず・六波羅殿の・一家の公達と・だにも・いひてんしかなし・されば・入道のこじうと・平大納言時忠卿の・この一門・たらざらん人は・みな・人非人・たるべしとぞ・の給ひける・されば・いかにもして・此縁ゆかりに・むすばほれむとぞ・しける・衣紋の・かきやう・烏帽子の・ためやうに・至るまで・何事も・みな・六波羅やうとだに・いひてんしかば・一天四海・これをぞ・まなびける・いなにとなく・世に・あまされたるものゝ・そしり・かたぶき・申事は・つねの・ならひなれども・此禪門・世さかりのあひだは・聊・いるがせに・申者なし・其故は・入道の・はかり事に・十四五六の童部

を・三百餘人・召あつめ・髮を・童に・きりまはし・あかきひたゝれを・きせ・かぶろと・名付て・召つかはれけるが・京・白河に・みち〳〵て・往反しけり・されば・聊も・平家の・ことを・いるがせに・申者あれば・一人・きゝいださん・ほどこそ・ありけれ・輿黨に・ふれめぐり・其家に・亂入し・資財雜具を・追捕し・其奴を・からめとつて・六波羅へ・具して・參る・入道・請とらせ・卽時に失はれけり・されば・道を過る・馬車も・六波羅どのゝ・童と・だにも・いひてんしかば・みなよきてこそ・とほしけれ・されば・宮門を・出入すと・いへども姓名をたづねらるゝに・及ばず・京師の・長吏・これがために・目を側とも・見えたり

我身の榮花

我身の榮花を・極るのみならず・嫡子重盛・內大臣の・左大將・次男・宗盛・中納言の右大將・三男知盛・三位の中將・四男重衡藏人頭・嫡孫維盛・四位少將とて・凡・一門の公卿・十六人・殿上人・三拾餘人・其外諸國の受領・衙府・諸司・都合・六十餘人なり・世にはまた・人なくぞ・見えられける・昔奈良の御門の御時・神龜五年に・朝家に・近衞の大將を・はじめ置給ひしより・此かた・兄弟左右に・あひならび・給ふ事・幾に・三四ヶ度なり・文德天皇の御ときは・左に・良房・內大臣の左大將・右に・良相・大納言の右大將・是は・閑院の左大臣冬嗣の御子なり・朱雀院の御ときは・左に實賴・小野宮殿・右に師資・九條殿貞仁公の御子なり・後冷泉院の・御時は・左に・敎通・大二條殿・右に・賴宗・堀川殿・御堂の關白の御子也・二條院の・御時は・左に・基房・松殿・右に・兼實・月輪殿・法性寺殿の御子なり・これみな・攝籙の臣の御子孫・凡人においては・其例なし・日來は・殿上の交を・だにもきらはれ・給ひし人の・子孫の・いまは・禁色雜袍を・ゆり・綾羅綿繡を・身にまとひ・剩・大臣の大將に至て・兄弟・左右に・相並給ふ事・末代とは・申ながら・ふしぎ成し・事どもなり・又・入道相國は・御娘も・八人・まし〳〵けり・それもみな・とり〴〵に・さいよはひ（イさいはひ）給ふ・一は・櫻町の中納言重敎卿に・八歲より・御約束ありしが・平治の亂に・引ちがへ奉て・後には・花山院の・左大臣殿の・御臺盤所に・ならせ給ふ・君達あまた・まし〳〵けり・抑・此櫻町の中納言重敎卿と・いふは・故少納言入道信西の・次男なり・殊に・心・數寄て・おはしければ・常は・吉野の山を・戀つゝ・町に櫻を栽置・その內に・屋を造つて・すまれければ・來る年の・春ごとに・見る人・櫻町とぞ・申ける・櫻は唉て・七ヶ日にちる・中納言・はなの餘波を・惜給ひて・常は・天照御神に・いのり申されければにや・三七日まで・名殘あり・君も・賢王にて・ましませば・神も・神德を・かゝやかし・花も・心あればにや・廿日の齡を・たもちけり・二は・后にたゝせ給ひ・王子・御誕生あつて・皇太子に・たゝせ給ひしかば・人とかう申に・及ばず・三は・六條の・攝政殿の・北の・政所に・ならせ給ふ・高倉院・御在位の御とき・御母代とて・三后に準る・宣旨を・蒙らせ給ひ・白川

殿と・申て・世には・又・おもき人にてぞ・ましく〳〵ける・四は・冷泉の大納言隆房卿の・北方・五は・普賢寺殿の・北の政所に・ならせ給ふ・六は・七條の修理大夫信隆卿に・相具し給へり・七は・後白川の法皇へ・まゐらせ給ひて・ひとへに・女御のやうにてぞ・ましく〳〵ける・これは・安藝國嚴島の・内侍の腹の・御娘なり・其外・九條院の雜仕・常葉が腹にも・姫君一所・ましく〳〵けり・これは・のちには・御姉花山院殿へ・まゐらせ給て・上臈女房にて・臈の御方とぞ・申ける・日本秋津島は・纔に六拾六ヶ國・平家知行の國・卅餘ヶ國・既に・半國に及べり・その外・庄園田畠・いくらといふ・數を知らず・綺羅充滿して・堂上・はなのごとし・軒騎群集して・門前に市をなす・楊洲の金・荆洲の珠・呉郡の綾・蜀江の錦・七珍萬寶一として・かけたる事ぞ・なかりける・歌堂舞閣の基・魚龍爵馬の翫び物・恐らくは・帝闕も仙洞も・これにはすぎじとぞ・見えし

城方流　古写本

義王

昔は・源平兩家・朝家に・召仕て・王化にも・隨はず・朝權を輕ずる者あれば・互に・誡を・加へられしかば・代のみだれも・なかりしに・保元に爲義きられ・平治に義朝誅せられしのちは・末々の源氏・ありといへども・或は・流され・或は・誅せられしかば・一向平家の・一類のみ・繁昌して・かしらを・さし出す者も・なし・されば・するの世に・なに事か・あらんとぞ・見えし・かやうに入道相國・一天四海を・掌に・握り・給ひし上は・世の謗をも・憚ず・人の・嘲をも顧ず・ふしぎの事をのみ・し給ひけり・譬ば・其比・京中に・聞えたる・白拍子・義王・義女とて・おととい有・これは・閇と申す白拍子の娘也・入道中にも姉の・義王を最愛して・西八條の宿所に・取する〻てぞ・おかれたる・懸りければ・妹の義女をも・人重して・もてなすことは・限りなし・母の・閇をも・入道・大事の物にし給ひて・よき屋・作つて・とらせ・毎月朔日ごとに・百石・百貫を・車にて・送られければ・家の内も・富貴して・たのしいことは・限なし・懸りければ・京中の・白拍子ども・義王が・最愛を・うらやむ者もあり・又・そねむ者も・多かりけり・うらやむ者は・あな目出度の・義王御前の・幸や・同じ・あそびものと・ならば・尤・かくこそ・あらまほしけれ・いかさまにも・これは・義といふ・文字を・名に・つきて・角は・めでたきやらむ・いざや・われらも・つきて見んとて・あるひは・義一と・つく者もあり・或は義二と・付者も・あり・義徳・義福・義壽・義寶・なんど・付けり・猶むものは・何條・名により・文字には・よるべき・果報は・たゞ・なに事も・生がらにてこそ・あれとて・つかぬものも・多かりけり・抑・我朝に・白拍子の・はじまりける事は・鳥羽院の御とき・島の千歳・和歌の前とて・彼二人が・まひはじめたりけるとかや・始は・水干に・立烏帽子・白き鞘巻を・さして・舞ければ・男舞と・名づけられたりしを・中比より・刀・烏帽子を・のけられて・白き・水干ばかりにて・舞ければ・白拍子とは・

名づけられけり・かくて・義王・とりする程に・まゐらせて・三とせと・申しし・春のころ・又佛と申て・優なる・あそびもの・一人・出來にけり・これは・加賀の國の・ものとぞ・きこえし・其比の・京中の上下・昔より・おほくの・あそびものありつれども・かやうのものは・いまだ・なしとて・擧てこれをぞ・もてなしける・或時・佛御前・申けるは・われ・天下に・隱なしと・雖・當時・ときめき給ふ・平家・太政入道殿へ・めされぬ事こそ・ほに(イほい)なけれ・遊び者の・推參は・何かは・くるしかるべきとて・或時・佛車に乘て・西八條殿へぞ・參りたる・人まゐつて・ほとけと申て・優なる・遊び者の・參て候と・申たりければ・入道・何條・さやうの・遊者は・人の・召に・付てこそ・參る事にては・あれ・召もなき所へ・推參しかるべからず・其上義王が・あらむ・限は・神ともいへ・佛ともいへ・とう〳〵・罷出よと・いへ・佛すげなう・仰を蒙て・はる〳〵と・出たりけるを・義王御前申けるは・遊び者の推參は・つねのならひ・年も・いまだ・をさなしとこそ・承りさふらへ・たま〳〵・思立て・參りて・さふらふに・すげなう仰を・蒙つて・いかばかりか・恥かしう・かたはらいたくも・さふらはん・わが・立し道なれば・人の上とも・おぼえず・縱・舞を・御覽じ・歌をこそきこしめさず共・召れて・御對面あつて・かへさせ・おはしまさんは・有がたき・御情にてこそ・さふらはんずれ・たゞめさるべしと・申たりければ・入道さらば・よべとて・よびかへさせ・出あひ・對面し給ひて・いかに佛・けふの見參は・いかにも・あるまじかりつれ共・義王が・何と思てやらん・頻に・申間・召たるなり・かやうに又・召れて・こゝを・きかざらんは・無念なるべし・何事にても・いまやう一・うたへかしと・の給へば・佛承つて・いまやうひとつぞ・うたうたる・君をはじめて・みる時は・千世も經ぬべし・姫小松・御前の池なる・龜岡に・鶴こそ・群居て・あそぶめれと・これを・二三反・うたひすまし・たりければ・みな人・かんじあはれけり・入道相國も・面白げに・思ひ給ひて・わう・わ御前は・いまやうは・上手にて・有けるや・いまやうが・おもしろければ・舞も定て・面白かるらん・何事にても・一番さうらはん・ばや・鼓うち・めせとて・めされて・一番・まはせらる・凡・此御前・としも十六・なる上・みめ・かたち・ならびなく・髮のかゝり・舞すがた・こゑよく・ふしも・上手なれば・なじかは・舞も・そんすべき・心も及ばずぞ・まうたりける・見聞の人々も・みな・耳目を・おどろかさずと・いふ事なし・入道・舞にや・めで給ひけん・佛に・心をぞ・うつされける・天性此入道殿は・いら〳〵しき人にて・おはしければ・舞のはつるをおそしとや・思はれけん・始の和歌一・うたはせ・せめの和歌・いまだ・うたひも・はてざるに・佛を・抱いて・入給ふ・佛御前申けるは・わらは・もとより・推參のものにて・人望なう・仰を蒙て・はる〳〵と・出さふらひしをも・義王御前の・申狀に・よつてこそ・めされまゐらせても・さふらへ・思食わすれぬ・御事ならば・めされて又は・參りさふらふ共・けふは・たゞ・いとまをたうで・いださせおはしませと・申ければ・入道都て・くるしかるまじ・たゞ・とも角も・淨海が・ままぞとよ・但・義王

に・憚か・其儀ならば・義王をこそ・出さめと・の給へば・佛御前・それまた・心うく・さふらふべし・わらは・もろともに・召おかれ・參らせんだにも・いかばかりか・恥かしう・かた腹いたくも・さふらふべきに・まして・さやうに・義王御前を・いださせおはしまさんは・いよ〳〵・心うかるべしと・申けれ共・入道・是非をも・いはせず・義王・とう〳〵罷出よとの・使・しきなみに・三度まで・たちければ・義王・すこしも・やすらふべきに・あらずとて・はきのごひ・塵ひろはせ・みぐるしき物ども・したためて・すでに・いづべきにぞ・定りける・日比より・懸るべしとは・思ひまうけし・事なれども・さすが・きのふけふ共・おぼえず・此三とせが間・住なれし・障子のうちを・いづるにぞ・名殘もをしく・悲しくて・甲斐なき涙ぞ・ながれける・義王・出けるが・さるにてもとて・また立かへり・住なれし障子に・かうぞ・かきつけたる

もえいづるもかるゝもおなじ野べの草いづれかあきにあはではつべき

義王・車に乘つて・出けるが・しきりになみだのすゝみければ

今さらに行べき（いづちともいづべき）かたもおぼえぬになにと涙のさきにたつらん

と・詠じつゝ・義王・宿所に歸り・障子の內に・たふれふし・なくより外の・ことぞなき・母これを・あやしみて・いかにや・いかにと・とひけれ共・返事を・するに及ばず・具したる女に・尋てぞ・さる事ありとは・しりてんげる懸りければ・京中の・上下・あはや・義王こそ・西八條殿より・暇たうで・いだされたんなれ・いざや見參して・遊ばんとて・或は文をつかはす・人もあり・或は・使者を・遣すものも・ありけれ共・義王今さら・人に見參して・あそび・たはぶるべきにあらずとて・文を・とりあげ・見るに及ばねば・まして・使を・あひしらふまでの・ことは・なかりけり・角て其としもくれ・春の比にも・成しかば・入道・義王がもとへ・使者をたてゝ・いかに義王・其後は・なに事か・有し・佛が餘に・つれ〳〵げ成に・參て・舞をも・まひ・今樣をも・うたうて・佛なぐさめよと・の給ひ・つかはされたりければ・義王・あまりの心うさに・返事にも・及ばず・入道・重ての給ひけるは・いかに・義王・など・御返事をば・申さぬぞ・參るまじきか・參まじくは・聊・其やうを・速に申せ・入道も・聞きつて・はからふむね・有とぞ・の給ひける・母の閨・あれ程の・仰なるに・など・御返事をば・申さぬぞ・義王・參らんとおもふ道ならばこそ・やがて・參るとも・申さめ・參ざらんものを故に・何とか・御返事をば・申べき・召に參らずは・はからふむねありと・の給ふは・都の內を・出さるゝか・さらずは・命を・めさるゝか・これふたつには・よも過じ・縱・都の內を・出さるゝ共・いづくかつひの・すみかなる・縱・命を・うしなはるゝとも・をしかるべき・又命かは・一度うき者に・思はれ參らせて・再おもてをむかふべきに・あらずとて・猶・返答にも・及ばず・母重て・申けるは・男女の緣・宿世・いまだはじめぬ・事なれや・千年末代と・契れ共・やがて・わかるゝ中もあり・かりそめと・思へ共・ながらへはつる・人もあり・たゞ世に・定なきは・男女の・中ひなり・

いはんや・わ御前たちは・遊者の・一日二日・召おかれ・參らせんだにも・いかばかりか・有がたう・さふらふべきに・まして・此三とせが・間・召おかれ參らせぬれば・今生のおもひ出・何事か・これに過べき・めすに・參らずば・はからふむねありと・の給ふは・都の・内をこそ・出されんすらめ・命を・めさるゝまでの事は・よも・あらじ・縦・都のうちを・出さるゝ共・わ御前たちは・わかければ・いづくの・浦わ・岩木の上にても・すぐさんことは・やすかるべし・わらはが・とし老衰へたる身の・ならはぬひなずまゐを・かねて・おもふこそ・かなしけれ・たゞわらはを・都の内にて・すみはてさせんと・おもひ給へ・それぞ・なににも・すぐれたる・今生後世の・孝養にて・あるべけれと・なみだも・せきあへず・申たりければ・義王さらば・參るまでにてこそ・あれとて・なく〳〵立出・けるがひとり・參らんも・物うければとて・妹の・義女をも・具しけり・おなじやうなる・白拍子・二人・惣じて・四人・ひとつ車に・とりのつて・西八條殿へぞ・參りたる・入道・日比・召れしところより・はるかに・さがりたる所に・座敷してこそ・おかれたれ・義王・こは・なに事の・咎ぞや・はては・座敷を・さへ・さげられつる事の・こゝろうさよ・これに・つけても・なにしにか・參りけんと・おもふに・けしきを・人に・見えじと・おさふる袖の・下よりも・あまりて涙ぞ・ながれける・佛御前・日ごろ・めされぬ所にても・さふらはず・たゞ・是へめさるべし・さらずは・出て・見參せんと・申けれ共・入道・何條と・鼻つくあひだ・ちから及ばず・其後入道・出あひ・對面し給ひて・いかに義王・其後は・何事かありし・佛が・あまりに・つれ〴〵げなるに・なに事にても・今様ひとつ・うたへかしと・の給へば・義王・參るほどにては・たゞともかうも・入道殿の・仰にこそと・思ひければ・おつる涙を・おさへて・今様・ひとつぞ・うたうたる・月更・風をさまつて後・心のおくを・尋ぬれば・佛も昔は・凡夫也・われらも・おもへば・佛なり・いづれも・佛性具せる身を・隔つるのみこそ・おろかなれと・是を二三反・うたひすましたりければ・みな人・あはれをぞ・もよほしける・入道相國・いしうも・諸たり・やがて・舞をも・みるべけれ共・聊まぎるゝ事・出來たり・此のちは・めさず共・常に・參つて・舞をもまひ・いまやうをも・うたうて・佛なぐさめよ・えいとぞ・の給ひける・義王宿所に・歸り障子の・内に・たふれふし・なくより外の・事ぞなき・親の命を・そむかじと・再・うき道に・おもむき・はては・座敷を・さへ・さげられつる事の・心うさよ・猶も・うきよに・ながらへ・あるならば・かさねて・角・うき事をこそ・見きかんすらめ・かゝるついでに・火の中水の・底へも・入なばやとぞ・かなしみける・姉身をなげば・妹の義女も・ともに身をなげんと・いふ・母の閇・うらむるもことわり也・日比は・これほどまで・情なかりける・人とは・露おもひよらずして・とかう・數訓して・參らせつることの・心うさよ・姉・身を投ば・妹の義女も・ともに身を・なげんと・いふに・わらはが・とし老衰たる身の・一人・のこり留て・何にかせん・ともに・身をこそ・なげんすらめ・但・死期も・來ぬ・親に・身をなげさせんは・五逆罪にてもや・あらむ

ずらん・彌陀如來は・西方淨土を・莊嚴し・一念十念をも・きらはず・十惡五逆罪をも・導かんといふ・悲願・ましますなる四拾八の・誓願の中に・第三拾五の願には・我等が・やうに・愚痴文盲なる者を・導かむといふ・悲願まします也・われら此度・おもひでもなうて・再・三途に・沈なば・又・いつの世にかは・うかぶべき・かほどめでたき・名號に・すがつて・極樂淨土の・ふたいの・寶土に・參らんとは・思ひ給はずやと・なみだも・せきあへず・いひければ・義王・まことに・死期も・來らぬ・おやに・身をなげさせんは・五逆罪・うたがひ・あらずとて・身をなげん事をば・おもひとゞまり・二十一にて・さまかへけり・妹の・義女も・ともにと・ちぎりし・事なれば・十九にて・さまかへけり・母の閨・あれほどに・さかんなる・ふたりの娘の・さまを・かふる・世中に・わらはが・歲老衰たる身の・しらがを・付ても・なにかはせんとて・四十五にて・樣かへけり・三人・嵯峨の奥なる・山ざとに・念佛申し・往生決定・臨終正念とぞ・いのりける・角て・春過・夏たちぬ・秋の初風・立ぬれば・星あひの空を・ながめつゝ・あまの・渡わたる・梶の葉に・おもふことかく・比なれや・ものおもは・ざらん人だにも・くれ行秋の・夕べは・かなしかるべし・いはんや・ものおもふ人の・心のうち・おしはかられて・あはれなり・にしの山の端に・かゝる日を・みては・あれこそ・西方の淨土にて・あんなれば・いつか・われらも・彼所に生て・ものを・おもはで・すごすらん・これにつけても・昔のことの・わすられて・つきせぬものは・なみだ也・日もやう〳〵しぐれければ・

三人の者共・ひとつ所にさしつどひ・佛前に・花香備へ・ともしび・かすかに・かゝげつゝ・念佛して・居たる所に・閨塞たる・竹のあみ戸を・ほと〳〵と・たゝく音しけり・三人の者共・念佛を・留て・いか樣にも・これは・われらがやうに・愚痴文盲なるものゝ・念佛して・居たるを・犯さんとて・魔緣の・來れるにこそ・但・まえんならば・あれほどの・竹のあみどを・推あけて・いらむ事は・やすかるべし・たゞ速に・明たらん程に・たすけば・一ぶつ・たとひ・命を・うしなはるゝとも・此程・たのみ奉る・念佛・相構て・おこたるなよと・心に・心をいましめて・三人・手にてを・とりくみ・閉塞たる・竹の編戸を・おもひきつて・明たれば・魔緣にては・なかりけり・佛御前ぞ・出きたる・義王・はしりいで・佛が袂に・とりついて・こは・さらに・うつつ共・おぼえさふらはぬものかな・晝だにも・人目まれなる・山里へ・たゞいま何として・きたり給へると・いひければ・佛御前・いまさら申せば・事あたらしきに・にたり・申さねば又・おもはぬに・にたれば・初より・申ぞよ・わらは・もとより・推參の者にて・人望なう・仰を蒙て・遙々と・出さふらひしをも・わ御前の・申狀に・よつてこそ・めされまゐらせても・さふらへ・やがてわ御前の・いだされ給ひし事・かならず人の・上共・覺えず・いつか又・我身の上にて・あらんずらんと・おもひしに・あはせて・障子に・いづれか・秋にあはではつべきと・かき置給ひし・筆の跡・頓て・おもひしられてこそ・さふらひしか・いつぞや又・わ御前の・めされまゐらせて・いまやう・うたひ給ひしとき・ざしきをさへ・さげ

られ・給ひし事の・心うさ・申ばかりも・さふらはず・其後は・いづくにとも・承はらざりしが・此程・聞出し・奉て・うらやましきことに・おもひ參らせ・いかに・暇を・申せども・大かた・ゆるされ・まゐらする事も・さふらはず・つく〳〵物を・あんずるに・娑婆の榮花は・夢の夢・たのしみ・榮えも・なにかせん・人身は・うけがたく・佛敎には又・あひがたし・出るいき・いるをまたず・かげろふ・いなづまよりも・なほあやうし・かやうの事を・おもふにも・いとゞ心の・とゞまらずして・此ひる・おもひも・かけぬ・ひまのありつるに・にげ出て・角なりてこそ・參りたれとて・かづきたる・きぬを・うちのけ・たるを・見ければ・さしも・はなやかなりし・榮花のたもとを・ひきかへて・尼になりてぞ・出來る・日比の・とがは・これに・ゆるしたまへ・ゆるさんと・の給はゞ・おなじ庵室に・念佛申・ともに・後生を・いのるべし・なほゆるさじと・の給はばこれよりいづかたへも・足にまかせて・まよひ行・いかなるらん岩のかど・苔の莚・松が根に・たふれふすまでも・念佛申彌陀三尊の・來迎に・あづからんと・涙も・せきあへず・申たりければ・義王・あな耻かしの・わ御前の心の底の・潔さよ・日比は・これ程まで・おもひ給ふ人とは・いかでか・露程も・しるべき・なに事も・うきよの中の・さがなれば・かならず・人を・うらみと・おもふべからず・身のうき事をこそ・しるべきに・やゝもすれば・わ御前の事のみ・忘られで・かた心に・かゝつて・今生も後生も・中々に・しそんじたるやうに・おぼえて・やるかたも・なかりつるに・わ御前は・なに事をも・おもひ給はず・としもいまだ・十七とこそ・きくに・穢土をば・厭・淨土をば・ねがふべしとの・心こそ・まことの・道心者にては・おはしませ・わらはが・廿一にて・さまかへしをこそ・人も・ありがたき・ことに申し・身ながらも・ふしぎの事に・おもひしに・いま・わ御前の・出家に・くらぶれば・ことの數にてあらざりけり・ひごろのとがは・なにしにか・露程も・殘るべき・いざやさらば・おこなはんとて・四人・同じ庵室に・念佛申・ともに・後生を・いのりけるが・遲速こそ・ありけれども・終には・往生の・素懷を・遂けるとぞ・承る・そののち入道・佛を・うしなうて・てんてを・わかつて・たづねさせられけれ共・なかりければ・淨海が・佛はあまりに・みめがよかりつれば・てん狗が・とりたるに・こそとぞ・の給ひける・其後・半年ばかりあつて・きゝいだされたりけれども・左樣になりたらんずるものをばとて・後には・たづねさせられず・されば・後白川の法皇の・長講堂の・過古帳にも・義王・義女・佛・閉等が・尊靈と・一所に・入られけるとぞ・承る・あはれなりし・事共也

二代の后

鳥羽院・御晏駕の後は・兵革・打續て・死罪流刑・闕官停任・常に・行はれて・海內も・靜ならず・世間も・いまだ・落居せず・應保・長寬の・ころほひは・院の・近習者をば・內より・いましめら

れ・内の・近習者をば・院より・いましめられしかし給はず・たゞ・深淵に・のぞんで・薄氷を踏に・おなじ・其比の・主上と申は・二條院・上皇と申は・後白川院の・御事也・主上・上皇・父子の・御間なりければ・なに事の・御隔かわたらせ給ふべき・なれども・おもひの外の事共・あつて・主上・常は・院の仰をも・申かへさせ・おはします・これもたゞ・澆季に及で・人・梟悪を・先とするゆゑなり・其比・人・耳目を驚し・世以て・大きに・そしり・傾き申ことあり・其故は・近衞院の后・大皇太后宮と・聞えさせ給ひしは・大炊の御門の・右大臣公能公の・御娘なり・先帝に・おくれ・參らつさせ・給ひて後は・九重のほか・近衞河原の・大宮の御所に・移りぞ・住給ひける・いつしかさきの・きさいの宮にて・ふるめかしう・かすかなる・御すまひにてぞ・わたらせ給ひける・長寛の・比ほひは・御年・廿二三にもや・ならせ・おはしましけん・御盛も・すこし・すぎさせ給ふほど也・され共・天下第一の・美人の・聞え・わたらせ給ひしかば・主上・常は・色にのみ・染たる・御ありさまにて・窃に高力士に・詔し・外宮に・ひき・もとめしむるに及で・竊に・大宮へ・御艶書有・大宮敢て・御返事も・なかりければ・主上ひたすら・穂に・あらはれて・后・入内あるべきよしを・大臣家へ・仰下さる・此事・天下に・おいて・異なる・勝事なりければ・公卿・僉議あつて・各意見にいはく・彼則天皇后は・大宗の后・高宗皇帝の繼母也・太宗・崩御の後・高宗の后に・立給へる例は・きけ共・それは・異朝の・先規たるうへ・別段の事・我朝には・神武天皇より元來・人皇七拾餘代に・いたらせ給ふまで・いまだ二代の后の・例をきかずと・諸卿一同に・うつたへ・申されたりければ・上皇も此義・大きに・然るべからざるよし・仰ければ・主上仰ありけるは・天子に・父母なし・我十善の・餘薫に・よつて・今・萬乘の寶位を・たもつ・これらほどの事を・叡慮に・まかせざるべきとて・既に・御入内の日を・御さだめありける上は・力及ばせ給はず・大宮・此由・聞食れし・日よりして・斜ならず・御歎に・沈ませ・おはします・先帝に・おくれまゐらせし・久壽の秋の・はじめ・同じ・草葉の露とも・きえ・やがて・いへをも・いで世をも・遁たらましかば・今・かかる・うき事を・きかざらましとぞ・仰ける・其後・父のおとゞ・參らせ給ひて・やう〳〵に・こしらへ・申させ給ひけるは・世に・隨がはざるを・もつて・狂人とすと・見えたり・既に・詔命を・下されぬる上は・子細を・申に・所なし・はや〳〵・御入内・あるべし・是偏に・愚老を・助させ・おはします・御孝行の・御至り・なるべし・なんど申さ給ひたり・けれ共・大宮敢て・御返事も・なかりけるが・良あつて・父の・おとゞの・御返事かと・おぼしくて・御硯のふたに・かうぞ・あそばされける

うきふしにしづみもやらで(イはてぬよ)川竹の世にためしなきなをやながさむ

世には・いかにしてかは・もれにけむ・優に・やさしき・ためしにぞ・申侍りける・既に御入内の・日にも・成しかば・父のおとゞ・供奉の・かんたちめ・出車の儀式・心殊に・いだし參らつさせ・給

ひけり・大宮 懶 御出なりければ・とみにも・出させ給はず・遙に・夜更小夜も・半過て後・大宮・なく〳〵・御車に・助・のせられさせ・給ひけり・物うき・御出なりければ・いろある・御衣をば・召ず・しろきおんぞ・十五計ぞ・めされける・内へ・まゐらせ給ひては・麗景殿に・移りぞ・住せ給ひける・御あさまつりごとを・すゝめ・まゐらつさせ・給ふばかりなり・彼紫宸殿の・皇居には・賢聖の・障子をたてられたり・伊尹・鄭五倫・虞世南・太公望・用里先生・李勤司馬・李將軍が・姿を・さながら・うつせる・障子もあり・手なが・足なが・馬形の障子・鬼間・尾張守・小野道風が・七廻賢聖の・障子と・書流せるも・理なり・彼清涼殿の・畫圖の御障子には・昔・金岡が・寫せる遠山の・有明の月も・有とかや・故院の・未・幼稚に・渡らせ給ひし・そのかみ・何となき・御て・まさぐりに・かき・くもらかさせ給ひしがありしながらに・かはらぬを・御覽じて・さすが・先帝の・御面影・御戀しうや・おもひまゐらつさせ給けむ・かうぞ遊されける・

おもひきやうき身ながらにめぐりきておなし雲井の月を見んとは

其御間の・御なからひいひしらず・何となく・物哀成し・御事也

額打論

角て主上は・永萬元年の・春の比より・常は・御不豫の御事と・聞えさせ給ひしが・夏の比にも・なりしかば・ことの外に・おもらせ たまひけり・是に・よつて・大藏大輔・伊吉の兼盛が・娘の腹に・今上一の宮の・今年・二歳に・ならせ・給ふが・渡らせ給ひけるを・太子に・たて參らすべしなんと聞えさせ給ひしが・同き 六月廿五日に・俄に・親王の宣旨を・蒙らせ給ひ・其夜・頓て・受禪あり しかば・天下・何となう・物あわてたる・さま也けり・其比の有識の人々の・申あはれけるは・本朝に・童帝の例を・たづぬるに・清和天皇・九歳にて・文德天皇の・御讓を・うけさせ給ひしは・彼・周公旦の・成王に・かはり・南面にして・一日萬機の・御政を・治給ひしに・准て・外祖忠仁公幼主を扶持しまゐらつさせ・給ひし・是攝政の・はじめなり・鳥羽院五歳・近衛院三歳・それをこそ・人いつしか・なりと・申しに・是は纔に・二歳に・ならせ給ふ・先例なし・物さわがし共・おろか也・同き七月廿七日に・新帝・大極院にして・御卽位あり・天下の・憂喜ともに・相交て・よろづ何事も・とり敢ぬ・御事共にてぞ・渡らせ給ひける・同き廿九日に・上皇終に・崩御ならせ給ひけり・御位をさらせ給ひては・纔に卅餘日ぞ・まし〳〵ける・今年は廿三に・ならせ おはします・つぼめる花の・ちれるがごとし・人々・御餘波を惜み 奉て・八月七日まで・置 奉りたりしかども・扨しも渡らせ給ふべきならねば・廣隆寺の・艮・蓮臺野の奥・船岡山の麓に・おくりをさめ 奉る・大宮・二代の后には・たゝせたまひしか共・さまでの・御幸も渡らせたまはず・又此君に・さへ・おくれ・まゐらつさせ・給ひたりしが・終に・御ぐし・おろさせ・給ひけり・中にも・祇園の別當澄憲法印の・未

權大僧都にて・山より・下られけるが・御葬送の・煙を見奉つて・かうぞ・詠じ・給ひける

つねにみし（イきのふみし）君が御幸をけふとへばかへらぬたびと聞ぞかなしき

懸りける・御葬送の夜・延暦・興福・雨寺の大衆・額打論と・いふ事を・仕出して・たがひの狼藉に及ぶ・一天の君・崩御の時は・南北二京の・大衆・悉・供奉して・御墓所の・めぐりにわが寺々の・額を打事あり・先・聖武天皇の御願・あらそふべき寺なければとて・東大寺の額を打・次に・淡海公の・御願とて・興福寺の・額を打・北京には・興福寺にむかへて・延暦寺の・額をうつ・次に・天武天皇の御願・智證大師の草創とて・園城寺の額をうつ・しかるを・今度・山門に・いかゝはおもひけむ・先例を・背て・興福寺の・上に・延暦寺の・額をうつ間・南都の・大衆・憤り・興福寺の・西金堂衆に・觀音房・勢至房とて二人の惡僧あり・觀音房は・萠黃の腹卷に・白柄の大長刀の・鞘をはづし・勢至房は・黑糸威の・鎧に・大太刀を・ぬき・二人・はしり懸り・延暦寺の・額を・切て・落す・清水法師に・智門房・はしりよつて・額を・さん〴〵に・切破てんげり・うれしや水・なるは瀧の水日は・てるともたえず・とうたへ・つねに・とうたへと・はやしあげて・わが方へぞ・走り歸りける

清水炎上

一天の君・御代を・はやう・せさせ・おはしまさん時は・いかなる・心なき・草木までも・愁たる色をこそ・あらはすべきに・此淺ましさに・上下みな・四方へ・にげちりぬ・同き八日の日・例の山門の大衆・又下洛すと・きこえしかば・內裏ならびに・院の御所へ・軍兵・めされけり・京中の・騷動・斜ならず・又・何者か・申出しけん・一院・山の大衆に仰て・平氏追討あるべき由・きこえしかば・平家の人々こは・いかゝせんとぞ・さわがれける・小松殿の・末其比・左衞門督にて・おはしけるが・當時・何事によつてか・さやうの御事の・渡らせ給ふべきとは・制せられけれ共・餘に・あわてゝ・さわぎ・のゝしる事・斜ならず・同き九日の日・例の山門の・大衆既に・下洛する間・武士檢非違使・西坂本に・行向ふを・大衆・事共せず・打破て・亂入しける間・一院・六波羅へ・御幸なる・平相國も・さわがれけり・され共・大衆そゝろなる・清水寺に・おしよせたり・追手は・坂面・搦手は清閑寺・歌の中山より・よせ來る・清水法師・城郭構て・楯籠る・大衆・押よせたりければ・分內は・狹かりけり・一たまりも・たまらず・落けり・防ぐ處の・大衆・卅餘人・打殺さる・其後・寺中に・亂入て・火を放つ・堂舍塔廟・佛閣僧坊・一宇も・殘さず・燒拂・清水寺と申は・興福寺の・末寺成に・よつて・是は・去ぬる・御葬送の夜の・會稽の・恥を・雪めんが・爲に・やくなりとぞ・申ける・大衆・歸のぼりての・後朝に・觀音や・火坑變成池は・いかにと・札に書て・大門に・たてたりければ・歷劫不思議と・これを・いふなりとぞ・返札にぞ・たてたりける・いかなる・あとなし者の・しわざにてか・ありけむ・をかしかりし・事共也・さるほどに・事しづまりしかば・一院・法住寺殿

へ・還御なる・左衞門督・御供に・參られたり・父の・おとゞは・留給ふ・此は・猶六波羅の・要心の爲とぞ・覺えたる左衞門督・ほどなう・歸り參られにても・一院の・御幸こそ・大きに恐入て・おぼゆれ・いかさまにも是は・仰合らるゝ旨の・あるに・こそと・の給へば・左衞門督・努々左樣の御事・御ことのはに・出させ給ふべからず・人に・ちるつけがほに・中々・あしう・候ひなんず・たゞ幾度も・叡慮に・背かせ給はで・人の爲に・善をほどこさせ・おはしまさば・御身の・恐・あるまじう候とて・たゝれければ・哀この・重盛ほど・何事に・つけても・大やうなる人は・なかりけりと・父一院・還御の後・御前に・うとからぬ人々を・召てさるにても・露・思召よらぬ・御事を・何者か・父のおとゞも・宣ける・去程に・法住寺殿には・申出したりけむ・夢の・やうなる事かなと・仰ければ・西光が・申けるは・天に・口なし・人にいはせよと・申事の候なれば・平家・あまりに・過分に・なり行・候の間・ほろぶべき・先表にて・天の・告にてもや・候らんと・申たりければ・人々・是・よしなし・かべに・耳ありとて・各々口をぞ・とぢられける・今年は・諒闇なればとて・御禊・大嘗會をも・おこなはれず・建春門院の・未其比・ひんがしの御方とて・わたらせ給ふ・御腹に・一院の・みことの・今年・五歳に・ならせ給ふが・わたらせ給ひけるが・俄に親王の・宣旨を・蒙らせ給ひ・明ければ・改元あつて・仁安元年とぞ・申ける

春宮立（あひ）

去年・親王の・宣旨・蒙らせ給ひたりし・王子・同じき八月十日の日・東三條殿にして・春宮に・たゝせ給ふ・春宮と・申は・常は帝の御子なり・又・太子と申て・主上の・御弟の・儲君に・備はらせ給ふ事あり・是をば・たいていとも・申・然に主上・御をひ・三歳・春宮・御伯父・六歳・昭穆あひかなはせ・給はず・但・一條院七歳・三條院十一歳にして・春宮に・たゝせ給ふ・されば・先例なきには・あらずやとぞ・人申ける・然るに・主上・二歳にて・御位に・つかせ給ひ・五歳と・申し・仁安三年二月十五日に・御位を・さらせ給て・いつしかなくして・太上天皇の尊號・漢家・本朝に・これや・始なるらん・六條院の御事也・同き三月十日の日・新帝・大極殿にて・御卽位あり・今年は・八歳に・ならせ・おはしますしろしめされける事は・一向・平家の繁昌とぞ・みえし・中にも・平大納言時忠卿は・御門の・御外戚にて・おはしければ・彼楊貴妃が・幸し時・楊國忠が・榮たりしが・ごとし仁安四年・六月十四日に・改元あつて・嘉應元年とぞ・申ける

殿下の乘合

同き・六月十七日に・一院・御年四十三にて・御出家あり・院・御出家ののちも・なほ・萬機の御政を・しろしめされければ・院に・候はれける・公卿殿上人や・上下の北面にいたるまで・官位俸祿・身にあまり・たり・され共・人の心の・ならひにて・なほあきたらず・平家の人々の・國をも庄をも・賜たる事をば・世に・めざましき事に・おもひあはれ其人・亡なば・其國は・あきなむ・其官には・成なん・なんど・うとからぬどちは・さしつどひ・さゝやく時も・ありけり・法皇も・內々・仰けるは・昔より・朝敵を・たひらぐる者・おほしと・いへども・かゝるれいは・いまだなし貞盛・秀里が・將門を・亡し・賴義が・貞任・宗任を・せめ・義家が・武平・家平を・討たりしにも・勸賞行はる事・纔に・受領には・過ざりき・然を・清盛入道が・角・心のまゝに・振舞事こそ・然べからね・是もたゞ・世するゑに・なつて・王法の・つきぬるにこそと・思召しけれ共・次でも・なければ・御いましめも・なし・平家も又・別して・朝家を・うらみ奉る事も・なかりけるに・世の亂れ・そめける根本は・小松殿の次男・新三位の中將資盛の・いまだ其比・越前守とて・生年十三に・ならせけるが・いんじ嘉應二年・十月十六日に・雪ははだれに・ふりたりけり・枯野の・けしきの面白さに・わかき侍・二三十騎・召ぐして・鷹共・あまた・居させつゝ・右近の馬場・紫野・北野の邊に・打出て・鶉・雲雀・追立々々・終日に・狩暮し・薄暮に及で・大宮の大路より・小路きりに・六波羅へこそ・歸られけれ・其時の攝籙・松殿・中御門・東洞院の・御宿所を・御出あつて・郁芳門より・入御なるべきにて・東洞院を・くだりに・大炊の御門を・にしへ・御出なる・堀川・猪熊の邊にて・資盛・殿下の御出に・鼻つきに・參りあふ・餘に朝恩に・のみ・ほこつて・世を・世共・人を・人共・せざつし上・召具したりける・侍みな・わかき者共にて・禮儀・骨法をも・存せず・一切に・下馬も・せず・前駈御隨身ども・何者ぞ・狼藉也・御出・のなるに・おりさふらへ〳〵と・いらひけれども・耳にも・聞いれず・かけわつてこそ・通りけれ・殿の御供の・人々・くらさはくらし・入道の孫とも・つやつや・存せず・馬より・とつて・引おとし・あて落し・顚・恥辱に及けり・資盛・はふ〳〵六波羅に・おはして・祖父・大政の入道殿に・此よし訴申されければ・入道・大きに・嗔て・縱・いかなる・殿下にても・渡らせ給へ・入道が・あたりをば・一度は・などか・思食・憚らせ給は・ざるべきに・左樣に・おいさきある・をさなき者共に・情なう・恥辱を・あたへられける・事こそ・返々も・遺恨なれ・かゝる事よりして・人にも・あざむかるゝぞ・此事・思ひ知せ申さでは・えこそ・有間敷けれとの給へば・小松殿の・いまだ・其比大納言の右大將にて・御前に・おはしけるが・此よしを・聞給ひ・努々・さやうの御事・思召よらせ給ふべからず・重盛が・子共なんど・いひたらむする者の・殿下の御出に・參會て・のり物より・おり候はざりつる事こそ・返々も・尾籠には・候へ・其上・賴政・光基なんどいふ・源氏共に・あざむかれても・候べけれ・是は少も・くるしう候まじ・いかさまにも・殿下へ・無禮の由をこそ・申たう候へとてぞ・たたれける・

其後入道・小松殿には・の給ひも・合られずして・かたゐなかの・侍の・きはめて・こはらかなるが・入道の・仰より外は・おそろしき・事なしと・おもひける・伊勢守景綱を・先として・都合六十餘人を・召て來廿一日に・主上・御元服・御定の・御ために・殿下・參內あらんずる・道にて・前駈御隨身共が・もとどり・きり・資盛が・恥すゝげと・宣へば・これら畏て承り・都合其勢・三百餘騎にて・殿下の御出を・今や〳〵と・待うけ奉る・殿下は・此事・夢にも・しろしめされず・主上・御元服・御定・御加冠・拜官の御爲に・けふより・御直廬に・渡らせ給ふべきにて・常の御出よりは・ひきつくろはせ給ひて・前駈御隨身共に・至るまで・花やかにこそ・出立たれ・今度は・待賢門より・入御なるべきにて・中の御門を西へ・御出なる・堀川・猪熊の邊にて・兵共・殿下の・御出を・待得奉り・御車の・前後左右にて・時を・どつとぞ・作りける・けふを・はれと・出立たりける・前駈御隨身共・爰に追詰・かしこにおさへて・本どりきる・前駈六人が內・藤藏人大夫武教が・もとゆりを・きるとては・是は・汝が・もとゆりと・おもふべからず・主の・もとどりと・思ふべしと・云含てぞ・きつたりける・隨身十人が・內・右府生武基が・もとゆりも・きられにけり・供奉の公卿・殿上人・車の・物見・うちわり・胸懸・鞦・きり・はなつたり・ければ・くもの子を・ちらすが・ごとくにぞ・成にける・簾かなぐりおとし・殿の・御車の・うちへも・弓の・はず・つきいれ・なんどしければ・殿下・あまりの・おそろしさにや・御車より・こぼれ・落させ・給ひて・あやしの・賤が・小屋に・なく〳〵・立ぞ・忍ばせ・給ひける・つはものども・兵共・かやうに・さん〴〵に・しちらし・六波羅に・歸り參て・此由・申たり・ければ・入道・神妙なりとぞ・宣ひける・其後・御車・つかまつる・者も・なかりければ・因幡の・さい使・鳥羽の・國久丸は・下臈なりけれども・さが〳〵しきによつて・御車・つかまつる・攝政殿は・さてしも・わたらせ給ふべきならねば・御なほしの・袖にて・御涙・おさへ・させ・給ひつゝ・還御の儀式の・淺ましさ・申ばかりも・なかりけり・大織冠淡海公の御事は・中々申に・及ばず・忠仁公・昭宣公より・此かた・攝政・關白の・かゝる・御目に・あはせ給ふ御事は・是・はじめとぞ・承はる・是ぞ平家の惡行の・はじめとは・承はる・其後・小松殿・此由を・きゝ給ひて・其時・行向うたりける・伊勢守景綱を・先として・都合・六十餘人を・勘當せらる・縱入道・ふしぎを・下知し給ふ共・など・重盛に・夢をば・みせざりけるぞや・凡は・資盛・奇怪なり・旃檀は・二ばより・かうばしとこそ・みえたれ・重盛が・子どもなんど・いひたらんずる者の・ことしは・十二か三に・なるとこそ・おぼゆるに・今は・禮儀骨法をも・存じてこそ・振舞べきに・かゝる・言甲斐なき者を・召具して・祖父・入道の惡名をたつ・不孝の至り・汝獨に・ありとて・資盛をも・勘當し・伊勢國へぞ・追下されける・其比の・京中の・上下・哀此・大將程・何事に・つけても・優に・やさしき人は・なかりけり・ほめぬ人こそ・なかりけれ・去程に・主上の御元服も・其夜は・のびぬ・同き二十五日に・院の殿上にしてぞ・御元服・御定は・わたらせ給ひける・攝政殿は・

さてしも・わたらせ給ふべき・ならねば・同き十一月九日の日・兼宣旨を・承らせ・給ひ・同き十三日に・太政大臣に・あがり給ふ・同じき十二月二十七日に・御拜賀の・聞え・ありしかども・世の中・にが〳〵しうぞ・みえし・去程に・年暮て・嘉應も・三年に・なりにけり・

德大寺嚴島詣

嘉應三年・正月五日の日・主上・朝覲の御爲に・法住寺殿へ・行幸なる・これは・鳥羽院七歳迄行幸なりたりし・今度・其例とぞ・聞えし・今年十一歳に・ならせおはします・初冠の御姿・法皇も・女院も・いかばかりか・めでたく・おもひ・參らつさせ・給ひけん・去程に・妙音院の・太政大臣師長の・いまだ其比・内大臣の左大將にて・おはしけるが・大將を・辭せさせ給ふ事あり・時に・德大寺殿・其順に・あたり給へりと・いへり又花山院の・中納言兼雅卿も・所望あり・中御門の新大納言成親卿は・當時・きみの・御寵臣なる上・此事しきりに・望申されけるが・さまざまの・御祈共を・ぞ・はじめられける・先・八幡に・僧をこめて・眞讀の・大般若を・よまれけるに・半部に及で・男山のかたより・山鳩二・飛來り・甲良の明神の・御まへにて・くひあひてこそ・死にけれ・鳩は・大菩薩の・第一の・使者なり・時の檢校・逆清法印(イ長清法印)・内へ・此よし・奏聞す・やがて・神祇官にて・御占あり・天下の騒と・占申す・但・朝家の・御事には・あらず・臣下の・愼とぞ・占申ける・大納言・これにも・恐給はず・晝は・人目をつゝみ歩行にて・よな〳〵・賀茂の・上の社へ・參られけるに・第三日に・あたりける夜・下向して・苦さにや・打ふされたりける夢に・中の社へ・參りたるかと・おぼしくて・御寶殿の・御戸おしひらき・内よりゆゝしうけだかき・御聲にて・一首の歌をぞ・あそばされける

櫻花かもの川かせうらむなよちるをばえこそとゞむまじ（イとゞめざり）けれ

大納言是にも・猶・恐給はず・中の社に・僧をこめて・七日・秘法を行はせられけるに・結願・ちかうなつて・若宮の・後なる・大杉に・雷・落かゝり・火・もえつきて・社壇も・あやうく・みえければ・神人・宮人・悉・おこつて・是を・うちけつてんげり・神は・非禮を・うけさせ給はず・大納言・非分の・大將を・いのり申されければにや・かゝるふしぎぞ・出來にける。其比の・叙位除目は・院・内・攝政關白の・御成敗にも・あらず・一向・平家の・まゝ・なりければ・德大寺・花山院も・なり給はず・入道相國の嫡子・小松殿・左に・移て・御弟の・宗盛・中納言にて・おはしけるが・數輩の上臈を・超越して・右に・加給ふこそ・心も・ことばも・及ばれね・德大寺殿は・一の・大納言・花族・榮耀・才覺優長にて・こえられ給ふぞ・遺恨なる・されば・德大寺殿は・世の・成行やうを・御覽せんとや・おぼしめされけん・大納言をば・辭し申されて・しばらく・籠居とぞ・聞えし・かの・大納言に・奉公の・輩共の中に・藏人大夫敎治と・申者あり・ある夜・大納言に・申けるは・

君・御出家・なんども候はゝ・奉公の輩共・みな・まどひ者と・なり候ひなんず・さらむに・とつては・當時・安藝の嚴島をば・一向平家の・崇申され候・かれへ・御參あつて・大將の・御祈誓なんども・候へかし・件の社には・內侍とて・優なる・舞姫共の・數十人候なる・是等を・御もてなし候はゝ・入道相國・かへり聞給て・定て・はからはるゝ旨もや・候はんずらんと・申たりければ・德大寺殿・さらばとて・西八條殿へぞ・參られける・七日・參籠・ことゆゑなうとげさせ給ひて・後・都へ歸り上らせ給ひけるに・內侍達・德大寺殿の・御名殘を・惜たてまつて・一日路まで・送奉る・德大寺殿・內侍達に・あまりに・餘波の・をしう・おぼゆるに・さらば・都へのぼり給へかしとて・其中に・然るべき・內侍・十餘人・召ぐして・都にのぼり・やう〳〵の御もてなし・さま〴〵の・御引で物・あつて・かへされけり・內侍達・歸るとて・いさや・我等が・平家へ・參らんとて・西八條殿へぞ參りたる・入道相國・聽て・出合對面し給て・いかに內侍達・何事の・列參ぞと・宣へば・さん候・これは・當時・德大寺殿の・大將・御祈誓の御爲に・嚴島へ・參せ給て・さふらひつるが・召具せさせ・給て・やう〳〵の・御もてなし・さま〴〵の・御引手物の・さふらひつると・申たりければ・入道淨海が・崇奉る・安藝の嚴島・德大寺殿の・さやうにたつとみ・給ふこそ・なによりも・ゆうに・有がたう覺ゆれ・神明も・などか・感應なかるべきとて・入道相國の嫡子・小松殿・大納言の左大將にて・おはしけるを・大將を・辭せさせ奉て・德大寺殿へこそ・渡されけれ・されば・敎治が・はかりごと・かしこかりける・高名かな

鹿谷（あひ）

德大寺殿は・かくこそ・ゆゝしう・おはせしに・中御門の・新大納言成親卿は・德大寺・花山院に・越られたらむは・いかゞせん・平家の・宗盛に・越られぬるこそ・遺恨なれ・これも・たゞ・平家の・おもふさまなるが・いたす所也・されば・いかにもして・平家を・亡し・我・本望をとげばやと・思はれけるこそ・おそろしけれ・父の卿は・此齡にては・纔に中納言にてこそ・おはしゝに・是は・其末子にて・位・正二位・官・大納言にあがり・大國あまた・給て・子息所從に・至るまで・官位俸祿・身にあまり・たり・されば・なんの・不足にか・かゝる心の・つかれけむ・是偏に・天魔の・所爲とぞ・覺たる・常は・外人なき所に・寄合・よりのき・平家を・亡さんとの・いとなみの外は・他事なしとぞ・聞えし・東山鹿谷は・俊寬僧都が・領也けるが・後は・三井寺へ・つゞいて・究竟の・城郭なりければ・平家を・亡し・かしこに・引籠らんとぞ・議せられける・或時・法皇も・淨憲法印ばかりを・召具して・ひそかに・かしこへ・御幸なり・扨此事・いかゞ・あるべきと・仰ければ・法印・あな・淺ましと・人あまた・承候・若・此事の・天下へ・洩聞え候はゞ・唯今・世の亂れ・出來候んずる物をと・申されたりければ・大納言・氣色・大きに・かはつて・御前を・罷出られけるが・い

かゝは・せられたりけむ・御前に・立られたりけるたり・法皇・あれは・いかにと・仰ければ・大納言・立歸り・平氏・たをれ候ひぬとぞ・申されける・法皇・大きに・ゑつぼに・いらせ・おはしまして・物共・參つて・猿樂仕れと仰ければ・平判官康頼・御前に・つゝと參り・平氏の・あまり・おほう候に・もてゑひてこそ候へ・俊寛が・さてそれをば・何とか仕候べき・例の西光がつゝと參・瓶子をば・頸とるに・しかじとて・瓶子の口をとつて・あなたへは渡す・こなたへは・渡すとてぞ・入にける・法印・餘の淺ましさに・法王を・すゝめ奉て・いそぎ・法住寺殿へ・還御なし申されけり・與力の衆には・近江中將入道蓮淨・山城守基兼・式部大輔雅綱・宗判官信房・新平判官資行・平判官康頼・法勝寺の執行俊寛僧都・攝津國源氏・多田藏人行綱を・先として・北面の輩共・多・與力してんげり・中にも多田藏人行綱をば・大納言・大事の者に・し給ひて・若此事・しおふする・程ならば・國にても・庄にても・乞によるべし・まづ弓袋の・料にとて・白布五十端・送りつかはさる・そも・上古には・北面は・なかりけり・白河院の御時は・季重・童より・千手丸・今犬丸とて・是等は・左右なき・きりもの也・又・鳥羽院の御時は・季頼・季教・父子共・つねは・傳奏する事も・ありなんど・きこえしかども・是等は・身の程を・存じてこそ・振舞しに・此御時北面は・以の外に・過分にて・下北面より・上北面に・上り・上北面より・殿上の・交をゆるさるゝも・有けり・角のみ・振舞し程に・是等は・驕れる者共にて・かやうの事にも・與してんげり

鵜川合戰

彼・北面の輩共の中に・師光・成景と・申者あり・是は・故少納言入道信西のもとに・健兒童・もしは・恪勤者にて・けしかる・者にてぞ・候ひける・され共・さか〳〵しきに・よつて・常は・院の・御まちにも・懸り・師光左衞門尉・成景右衞門尉とて・一度に・靭負尉に・成て・信西・ことに・あひし時・共に・出家して・左衞門入道西光・右衞門入道西敬とて・出家の後も・なほ・院の御藏預りにてぞ・候ひける・彼西光が子に・師高と・申者あり・是も・左右なき・寵物なりければ・檢非違使・五位尉まで・經上り・剩・安元元年十二月二十九日の・追儺の除目に・加賀守にぞ・ふせられける・隨て・國務を・おこなふ間・非ほう非例を・張行し・神社佛寺・權門勢家の・庄園を沒倒して・さんざんの事共にてぞ・候ひける・縦又・せう公（イてうこう）が・跡をこそ・へだつと・いふとも・穩便の政をこそ・行べきに・かくのみ・振舞し程に・同き二年の夏の比・弟近藤判官師經を・加賀の・目代に・指下さる・師經・下著のはじめ・國府の邊に・鵜川の・寺僧共の・湯あびけるを・追上・我身も・あび・家の子郎等をも・おろし・剩・雜人原を・いれて・馬の湯洗なんどを・せさせければ・寺僧等・大きに・いかつて・昔より・此所に・國方の者の・入部

する・やう・なしと・いひければ・師經申けるは・前々目代は・不覺にてこそ・いやしまれたれ・當目代に・於ては・全・其儀・あるまじ・只・先例に・任て・入部の押妨を・とゞめよと・いひければ・寺僧等・は・國方の者を・追出せんとす・國方の者は・又・次を以て・亂入せんと・せし程に・互に・打あひ・はりあひなんど・しける程に・師經が・さしも・秘藏しける・馬の足を・打をる・のみならず・尾がみを・さへに・切てんげり・師經・大きに嗔て・只法に・任よといふ間・寺僧等・弓箭兵杖を・帶して・互に射合・切合なんどしける程に・師經・叶はじとや・思ひけむ・夜に入て・宿所に引退・次の日・師經・當國の・在廳官人・三千餘騎を・引率して・鵜川に・おしよせたり・ふせぐ所の大衆・三百餘人・打殺さる・其後・寺中に・亂入て・火を放つ・堂社塔廟・佛閣僧坊・一宇も・殘さず・燒拂・鵜川と申は・白山の・中宮の・末寺なるによつて・三社幷に・八院の衆徒・騒動す・八院の衆徒の・張本に・智釋・學明・寶臺坊・正智・學意・土佐の阿闍梨ぞ・進だる・都合其勢・二千餘人・同き七月九日の日の・酉刻には・目代師經が・館ぢかくこそ・押寄たれ・けふは日くれぬ・勝負は・決せしとて・大衆・その日は・其邊なる所に・ひかへたり・露吹むすぶ・秋風は・射向の袖を・飜し・雲間を・てらす・稻づまは・甲の星を・かゝやかす・師經・かなはじとや・思ひけむ・夜逃に・してこそ・のぼりけれ・次の日の・まんだ朝・大衆・おしよせたりけれども・師經・落て・なかりければ・力及ばず・本山へ・引返す・詮ずる所・此よしを山門へ・訴て・公家へ・奏聞せんとて・白山妙理權現の・神輿を・比叡山・東坂本へ・ふり奉るとぞ・きこえし・同き八月十一日の・午剋ばかりに・妙理權現の・神輿・比叡山・東坂本へ・つかせ給ふと・申ほどこそ・ありけれ・俄に・空かきくもり・北國の方より・雷おびたゝしう・鳴さかり・都をさして・鳴て行に・白雪・降て・地を埋み・山上洛中・おしなべて・ときはの・山の・梢までも・みな・白妙にぞ・成にける・三千の大衆・東坂本に・おりくだり・神輿を・拜し奉り・すなはち・客人の社へ・いれ奉る・山門に・客人權現と申は・白山權現の御事也・沙汰の成否は・しらねども・生涯の面目・たゝ此事のみに・あり彼・浦島が・七世の孫に・あへりしが・ごとし・たい〳〵（いたりない）の・者の・靈山の・父をみしに・同じ・三千の大衆・踵を・つぎ・七社の神人・袖を・つらね・時々刻々の・祈念法施・心もことばも・およばれず

願立

山門の大衆・奏狀を捧て・歎けれ共・いまだ・御承引なき間・さも然るべき・公卿殿上人の・宣あはれけるは・哀・この事・とうして・御裁許あるべき物を・山門の訴訟は・他に異なり・大藏卿爲房・大宰の帥季仲は・朝家の・重臣たりしかども・山門の訴訟によつて・流罪せられき・されば・師高・師經なんどが・事は・事の數にや・あるべきなんど・宣あはれけれ共・大臣は・祿をおもんじて・諫ず・小臣は・罪に恐て・申さずと・いふ事なれば・各〳〵・口をぞ・閉られける・賀茂川の水・雙六

の賽・山法師・是ぞ・まろが・心には・かなはぬと・白河院も・仰なりけむなる・又鳥羽院の御時・越前の平泉寺を・山門へ・附られける事も・當山の御歸依・淺からざるに・依て・山門の訴訟は・非を以て・理とせよと・僉議せられてこそ・院宣をも・下されけむなれ・げにも・江帥匡房卿の・申さるゝ・やうに・大衆・神輿を捧奉つて・訴訟を・致さんに・おいては・君も・いかゞは・せさせ・おはしますべきとぞ・法皇も・仰なりけむなる・又堀川の天皇の御宇・嘉保元年の・冬の比・美濃守源の義綱朝臣・當國新立の庄を・たをすに・よつて・山の久住者・圓應を殺害す・これによつて・日吉の社司・延暦寺の寺官・都合三十餘人・仔細を・關白殿・大和源氏・中務少輔賴春に・仰て・これを・奏聞の爲に・陣頭へこそ・發向すれ・後二條の關白殿・大和源氏・中務少輔賴春に・仰て・これを・ふせがせらる・賴春が郎等・矢をはなつ・疵を・被る者八人・死するは・四人なり・社司諸司等・をめきさけんで・四方へみな・にげちりけり・是に依て・山門・大きに憤り・七社の神輿を・根本中堂へ・振上奉て・後二條の關白殿を・さま〴〵に・咒咀し奉りけるとぞ・聞えし・或時又・三千の大衆・みな・東坂本に・おり下・八王子權現の・御前にて・眞讀の大般若を・よまれけるに・仲胤法印の・いまだ其比・仲胤供奉にて・おはしけるが・高座に・のぼり・敬白の・かね打ならし・敎化の・ことばこそ・おそろしけれ・我等が・なたねの・二ばより・おほしたち給ふ・神達と・知ながら・むし物にあうて・こしからふたまふ（イこしからみたまふ）・後二條の關白殿に・鏑矢・一・放ちあてたべ・大八王子權現と・高聲に・のゝしつたりけるにぞ・

人みな・身の毛・よだつて・覺たる・やがて・其夜の・子刻ばかりに・八王子權現の・神殿より・鏑矢のこゑ・出て・都をさして・鳴て行とぞ・人の耳にも・聞えける・次の日の・まんだ朝・都には・關白殿・御宿所に・御格子の・役仕けるが・只今・山より・おりて・下たるが・ことゝ〳〵なる・樒の花一枝・露に・ぬれたるが・生出たり・是大きに・不思議の瑞相と・申し程に・聽て其比・後二條の關白殿・山王の・御とがめとて・御重病を・受させ給ひ・やう〳〵の・御願樣々の・御祈あり・まづ・日吉の社に・おいて・百番の・一物・百番の・しは田樂・競馬・流鏑馬・相撲・各・百番延曆寺に・おいて・百座の・仁王講・百座の藥師講・等身の藥師の像・七體・釋迦・阿彌陀一搆手半の像・おの〳〵百體作り・供養し奉らる・中にも・關白殿の・御母儀は・京極の大殿の・北の政所にて・最愛の・御一子にて・渡らせ給へば・御母儀殊に・御歎あつて・忍つゝ・日吉の社へ・御まゐりあつて・七日是に・御參籠あつて・祈申させ給ふ・人・こゝに・これをしり奉らず・いかでか・人・是を・知奉るべき・ある夜・貴賤上下參り・あつまれる中に・陸奥より・はるばると尋上りたりける・童神子の・今夜始て・此御社へ・まゐりたりけるが・夜半ばかりに・俄に・絕入す・上下・こは・いかにと・みる所に・やがて生かへり・われに・八王子權現の・乘・ゐさせ・給へりとて・託宣して・いはく・當時・關白殿・神の・御とがめとて・御重病を・うけさせ給ひ・やう〳〵の・御願を・たて・さま〴〵の・御いのりあり・御母儀殊に・御歎あつて・忍つゝ・此御社へ・參

らせ給ひ・七日これに・御參籠あつていのり・申させ給ふ・人・是を知奉らず・況・御心中の・三の御願をや・いかでか・人これをしり奉るべき・先・第一の御願には・今度・關白殿・御重病・立所に・愈させ給て・大鳥居より・始て・社々の寶前・第二の御願には・今度關白殿・御壽命長遠の・御事ならば・われ・さまをやつし・八王子の・下殿なる・もろ〳〵の・かたわうどの・中に・まじはり・庭の塵を拂・千日の・御みやづかひと・承はる第三の・御願には・今度關白殿の・御重病・たち所に・愈させ給て・八王子權現の・御前にて・毎日・法花問答講・おこたりあらじと・承はる・いづれも・〳〵ありがたうこそ・聞召せ・誠に・參詣の輩共の・朝には・きりをはらひ・ゆふべには・露をしのぐに・廻廊あらん事・あらまほしうこそ・思召せ・但・此衆徒は・難行苦行の功・つもつて・今度・生死をはなれんと・なれば・今更に・廻廊を・喜ぶべきにも・あらず・第二の御願・庭の塵を・はらひ・千日の・御みやづかひと・承はる・神は・一切衆生を・思召すもたゝ・親の・子を思ふが・ごとし・日比は・京極の大殿の・北の政所にて・玉の簾の・うち・錦の帳に・まとはれて・妙なる御身にて・渡らせ・給ひしか共・子を思ふ道には・まよはせたまふにや・誠に・みるも・いぶせく・淺ましげなる・かたわうどの・なかに・まじはり・一日二日の事ならず・一千日までの・御みやづかひをば・神としても・いかでか・憐み・奉らざるべき・さこそは・おぼしめすらめと・哀なり・これも・さる御事にては・候へども第三の御願・法花問答講

こそ・誠に・ありがたう候へ・われ此山のふもとに・あとをたれ・一切衆生を・度するも偏に・一乘結緣の爲なり・一偈一句の・法門だにも・いかばかりか・ありがたかるべきに・まして・毎日・おこたりながらん事の・めでたさよ・まことに・さもあらば・今度・關白殿の御重病・定業かぎりとは・申せ共・神・彼・御身に・あひかはつて・みとせの・いのちを・たすけ申さうするは・いかに・但・關白殿の・社司諸司等に・はなち・あて給ふ・矢は・神の此體に・あたれりとて・左の袖を・ひきあげたるを・みければ・實も・矢目と・おぼしくて・大きなる跡・あざやかにみゆ・上下・目を驚し・みな・隨喜の涙をぞ・ながしける・其時・北の政所・山王の・御詫宣・眞實に・思食て人目を・つゝませ給はず・貴賤の中に・顯出させ給ひて・御涙に・むせばせ・おはします・誠に・たて申所の・三の願・いづれも・たがひさふらはず・一日二日のびんだにも・いかばかりか・ありがたかるべきに・まして・三年が間とうけたまはる・今度の・參りの・御利生・只此事にこそ・さふらへ・法花問答講に・おきさふらひては・御疑さふらふまじと・涙も・せきあへず・申させ給ひ・たりければ・御供の人々・さて・いかなる御事の・わたらせ給てか・猶も御命の・のびさせ給ひ候べきと・申あはれければ・神も・三年の後は・力及ばせ・給はずとて・權現・あがらせ給ひけり・驚て次の日・都へ・御下向あつて・關白殿・御重代の・御家領・紀伊國田中の庄と・いふ所を・八王子へ・御寄進あつて・毎日・法花問答講・末代の・いまに・たえずとこそ・承はる・神感は・つきさせ給はずと・

ありがたかりし・御事也・一日二日と・せし程に・三とせの過るは・夢なれや・康和元年六月二十一日の・夕べより・關白殿・又御重病に・うちぞ・ふさせ給ひける・山王の御約束・今の月日をかぎらせ給ふ・事なれば・唯時刻到來を・またせ給ふほどに・同き二十九日の・あかつきがた・御とし・三十八にて終に・かくれさせ給ひけり・御心の武さ・理の・つよさ・さしもたゞしき・人とこそ・聞えさせ給ひたりしかも・まめやかに・事の急にも・成しかば・御いのちを惜ませ給ひけり・誠に・惜かるべし・いまだ四十をだにも・みたさせ・給はで・大殿にさきだち・まゐらつさせ・給ふぞ・淺ましき・かならず・親に・さきだつべしと・いふ事には・あらねども・生死の・おきてに・隨ふならひ・萬德圓滿の・世尊・十地究竟の・大士たちも・力及ばせたまはず・慈悲具足の・山王大師・利物の方便なれば・とがめさせ給はざるべしとも・おぼえず・されば・山門の訴訟は・おそろしき・事に・のみこそ・申傳へたれ・去程に・年暮て・安元も・三年に・なりにけり

御輿振

安元三年三月五日・の日・妙音院殿・太政大臣に・てんじ給ふ・かはり・小松殿・大納言貞房卿を・越て・内大臣に・あがり給ふ・妙音院殿・おしあげられさせ・給ひけり・一のかみこそ・せんど・なりしかども・父・惡左府の・御靈・其憚ありとぞ・きこえし・同き十三日に・小松殿には・大臣の・日吉の祭禮を・押とめ・同き十三日に・大宮樓門の前に・三塔會合して・國司・加賀守・師高・流罪に處せられ・目代師經・禁獄せらるべきよし・度々の奏聞に・及といへども・御裁斷・おそかりければ・十禪師・客人・幷に・八王子三社の・神輿を・かきたてまつり・發向すれ・西坂本・さがり松・きれ堤・たゝず・梅たゝ・柳原・東北院の邊に・獅子鼓の・音おびただしく・聞ゆ・神人・宮司・しら大衆・加茂河原に・みち〳〵たり・神輿は・一條を西へ・御幸なる・御神寶は・天に・かゝやき・きらめき・わたつて・日月地に・落させ・給へるかとぞ・覺たる・皇居には・源平兩家の・大將軍・勅を・承て・四方の門を・かためて・大衆を・ふせぐ・平氏には・小松殿・三千餘騎にて・東面の陣・陽明・待賢・郁芳門・三の門を・かためらる・右衞門督賴盛・一千餘騎にて・南面の陣を・かためらる・平宰相教盛・これも一千餘騎にて・西面の陣を・かためらる・源氏には・大内守護の・源三位賴政・渡邊の・省・授を・先として・都合其勢・三百餘騎・北面・縫殿の陣を・堅めて・大衆を・ふせぐ・大路は・ひろし・勢は・すくなし・まばらにこそは・みえたりけれ大衆・無勢たるに・目をかけて・北面縫殿の・陣より・神輿を・振入奉らんとす・既に・かうと・みえけるに・賴政卿・いかゝは・思はれけん・弓をばはづし・甲を・ぬいで・神輿を・拜し奉らる・大將の・かく・しける上は・家子郎等共も・みな・隨つて・かくのごとし賴政卿・しばらく・

衆徒の御中へ・申べき旨ありとて・使は・渡邊の長七唱とぞ・聞えし・唱が・其日の・裝束には・きちんの直垂に・小櫻を・黄に・かへしたる・鎧を・著・黒漆の・太刀を・はき・二十四さいたる・大中黒の矢・負・ぬり籠籐の弓・脇にはさみつゝ・甲をば・ぬいで・高紐に・かけ・おき・道より・あゆみいで・大衆の前に・畏り・是は・源三位殿より申せと・候・今度山門の・御訴訟・理運の條・勿論に・候・但・御裁斷遲々こそ・餘所にても・遺恨に存候へ・さては・神輿を・此陣より・明て・いれまゐらせん事・いとやすき御事にては・候へども・しかも・あけて・いれ參らせん陣より・いらせ・おはしましたらむは・山門の・大衆・大勢には・恐て・目だれがほを・しけるよなんど・京童部の・申さん事・後日の・難にてもや・候はんずらん・又ふせぎ・參らせ候へば・年來・醫王山王に・頭を・かたぶけ・まゐらせたる賴政が・けふよりして・ながく・弓矢の道に・別はて・候ひなんず・又明て・とほし參らせ候へば・宣旨をそむくに・似たり・かれといひ・これといひ・旁・難治の・やうに候・東面の陣をば・小松殿の・三千餘騎にて・堅めさせられて候・あの陣より・いらせおはしましたらむ・は・山王の御威光も・いよ〳〵めでたく・衆徒の・御意趣も・あらはれて・御訴訟・やがて・達しぬと・覺候といひ・送りたりければ・唱が・かく申に・ふせがれて・神人宮司・しばらく・ゆらへたり・若大衆・惡僧共は・何條たゞ・この陣より・神輿を振入奉れやと・僉議す・既に・かうと・みえけるに・爰に・三千の張本・攝津の・堅者豪運・進出て・申けるは・我等今度・神輿を・捧奉て・訴訟を・いたさんに・おいては・大勢の・中打破て・いつたらむこそ・後代の聞えも・あらんずれ・其上・この賴政卿と申は・六孫王より・このかた・源氏嫡々の・正統・弓矢を・とつて・天下に・名をあぐる・のみならず・やまとことばにも・優に・やさしかんなるぞ・一とせ近衞院の御時・當座の御會の・ありしに・深山花と・いふ題の・出たりしを・隨分の人々の・讀わづらはれたりしをも・此賴政卿こそ・秀歌には・讀たりしかと・申す・名歌仕て・御感に預し・其艶男が・堅めたる・門にこそ・あんなれ・いかゞ・情なう・恥辱をば・與ふべき・只其神輿・かきかへし・奉れやと・僉議しければ・先陣より・後陣に至るまで・みな・尤々とぞ・同じける・其後・北野の神輿を・先だて奉て・東の陣へ・まはる・武士どもも・しんばし・さゝへて・ふせぎけれども・大衆・事ともせず・打破て・亂入しける間・忽狼藉いできて・待賢門堅めたる・武士六人・矢をはなつ・其矢・十禪師權現の・御輿に・たつ・神人宮司・射殺され・衆徒・おほく・疵を蒙て・をめきさけぶ聲・上は梵天までも・聞え・下は・堅牢地神までも・驚騷給ふらんとぞ・覺たる・其後・三社の神輿をば・陣頭に・振捨奉て・なく〳〵・本山にこそ・歸り上りけれ

内裏炎上

今度・御輿に・たつ所の・矢をば・神人して・ぬかせらる・其後・内裏には・藏人の左小辨兼光に・仰て・先例を・大外記師久に・御尋ありければ・師久申けるは・先・保安四年四月に・神輿入洛の時は・祇園の別當・座主に・仰て・せきさんの社へ・いれ奉らる・又保延四年四月に・神輿入洛の時は・祇園の別當に仰て・祇園の社へ・入奉りたる由をそうもんす・しからば・今度は・保延の・例たるべしとて・祇園の別當澄憲に・仰て・祇園の社へ・入奉らる・彼社の・社司諸司等秉燭に・及で・神輿を・請取奉て・御社へ・入奉る・いんじ永久より・安元の今に・至るまで・大衆・神輿を・捧奉て・訴訟を・いたす事・六度也・毎度・武士を・もつてこそ・ふせがせらるゝに・神輿に・矢射かけ奉る事・是始とぞ・承はる・靈神・いかりをなす・時は・災害・ちまたに・みつとも・いへり・おそろしおそろしとぞ・人申ける・同き十四日に・例の山門の大衆・又・下洛すと・聞えしかば・内裏並に・院の御所へ・軍兵・めされけり・京中の騒動・斜ならず・山門には・神人宮司・射殺され・衆徒おほく・疵を被しかば・日吉の大宮・二宮・延暦寺の・中堂・講堂・都て・諸堂を・燒拂て・みな・山林に・交はるべしとぞ・三千一同に・僉議しける・君もこの事・御承引あるべきよし・聞えしかば・山門の上綱等・門徒の大衆に・此由・ふれんとて・登山しけるを・大衆大きにいかつて・西坂本より・おつかへす・同き二十日の日・平大納言時忠卿の・いまだ其頃・左衛門督にて・上卿に・たゝる・山門の大衆・大講堂の・庭に・集會して・僉議しけるは・詮ずる所・上卿を・とつて・ひつばり・冠を打おとし・湖へ・沈よなんどぞ・申ける・既にかうと見えけるに・左衛門督・しばらく・衆徒の・御中へ・申べき・旨ありとて・懐より・小硯疊紙を・とり出し・一句を・書て・大衆の中へぞ・送られける・衆徒・濫惡を・いたすは・魔緣の所行・明王の制止を・くはふるは・善逝の加護なりとぞ・かゝれたる・大衆・尤々とて・谷々に・くだり・坊々へこそ・入にけれ・一紙一句を以て・三塔三千の・憤を・休め公私の恥を・雪め給ふ・時忠卿こそ・やさしけれと・山上・洛中・おしなべて・譽ぬ人こそ・なかりけれ・同き二十三日に・堀川の・大納言忠親卿を・上卿にて・國司・加賀守師高・流罪に・處せられ・目代師經禁獄せらる・今度神輿に・矢射かけ奉る・武士六人・獄定せらる・是は・小松殿の・めしつかはれける・ところの・軍兵ども也・同き二十八日の夜の・子刻ばかりに・都には・樋口・富小路より・火いで來て・折節・巽のかぜはげしう吹て・京中おほく・燒にけり・北野の天神の・紅梅殿・具平親王の・千種殿・西三條鴨居殿・東三條・染殿冬嗣のおとゝの・閑院殿・貞仁公の小一條・昭宣公の・堀河殿・橘の逸勢が・はい松殿・鬼殿に・いたるまで・昔今の・名所舊跡・二十餘ケ所・公卿の宿所だに・十七ケ所まで・やけにけり・其外・諸太夫侍のいへ〳〵は・中中申に及ばず・車輪のやうなる・ほむらが・三町五町を・隔つゝ・飛越々々・乾をさして・やけゆけ

ば・おそろしなんどもおろかなり・はては・大内に吹付たり・朱雀門より・始て・應天門會昌門・大極殿・諸司八省・豐樂院・あいたん所・官の廳・大學寮に・いたるまで・只一時が間の・灰燼の・塵とぞ・成にける・家々の日記・代々の文書・七珍萬寶・さながら塵灰と・なる・其外の・費・いくばくぞや・人の燒死ぬる事・數百人・牛馬の類・數を知す・是只事に・あらず・比叡山より・大きなる・猿共が一二千・おり下りてん手に・續松を・とぼして・燒とぞ・人の夢には・見えにける・およそ・大極殿の・燒にけるこそ・淺ましけれ・大極殿は・清和天皇の御宇・貞觀十八年に・燒たりしかば・同き十九年正月三日の日・陽成院の・御卽位は・豐樂院にてぞ・とげられける・元慶元年正月に・事始あつて・同き二年四月に・作り出し奉て・遷幸・なし奉たりしを・又後冷泉院の・御宇・天喜五年・二月二十六日に・燒たりしかば・治曆四年八月に・事始あつて・同き十月十日の日・御棟上とは・定られたりしかども・後冷泉院・作りも出されずして・崩御なりぬ・しかるを後三條院の御宇・延久四年四月に・作りいだし奉つて・同き十五日に・遷幸なし奉り・伶人・樂を・奏し・文人・詩を奉る・いまは・國の力も・衰て・其後は・作りも・出されず

卷第二

座主流

安元三年五月五日の日天臺座主明雲・大僧正公請をとゞめて・闕官・せられ給ふ上・藏人を御使にて・如意輪の・御本尊を・めし返し奉て・御持僧を・改易せらる・則使廳の使を・つけて今度・內裏へ・神輿ふり奉し・衆徒の・張本をぞ・めされける・又加賀國に・座主の御坊領あり・師高・是を・停廢の間・門徒の・大衆を・語て・訴訟を・致す・是既に・朝家の・御大事に・及ぬべき由・西光法師・父子が・無實の・讒奏に依て・法皇・つみなきに・鳥羽院の・七の宮・覺快法親王・天臺座主に・なし奉て・明雲を・重科に・思召・定けり・明雲も・又御弟子也・同き十二日に・先座主をば・既に・水火の責に及ぬべきよし・聞えしかば・同き十三日に・太政大臣以下の・公卿十六人・參內あつて・陣の座につき・前の座主・罪科の事・議定あり・中にも・八條の中納言長方卿の・いまだ・其ころ左大辨の宰相にて・末座に・候はれけるが・進出て・申さ・れけるは・法家の・勘狀に・まかせ・死罪・一等を・減じ・遠流・せらるべしとは・見えて候へども・

此明雲は・淨行・持律なる上・顯密・兼學・して・一乘妙經を・公家に・授奉り・三種・淨戒を・法皇に・たもたせ奉る・或は・御戒の師なり・重科の遠流に・行れん事・冥の・照覽・はかりがたし・されば・還俗遠流をも・ともに・宥申さるべきかと・聊・憚る所もなう・申されたりければ・當座の・公卿・尤・長方卿の・議に・同ずとは・宣ひあはれけれども・法皇の・御憤り深かりければ・なほ重科に・思召定けり・僧を・つみするならひとて・度緣をとつて・還俗せさせ奉り・大納言の大輔藤井の松枝といふ・俗名を付けられけるこそ・うたてけれ・同き廿日の日・先座主をば・既に・伊豆の國へ・流し・奉らるべきよし・聞えしかば・入道相國も・此事・宥申さんとて・院參・申されめされ・たりけれども・法皇・御風の・心地とて・御前へも・ざりければ・憤りふかげにてぞ・出られける・同き廿二日に・先座主をば・けふ既に・都の內を・追出し・奉るべしとて・追立の官人・兩送使等・白川の・御坊に・參り向ひ・此由・申たりければ・先座主・少も・やすらふべきにて・あらずとて・急・御坊を・出させ給ひ・其日は・粟田口のほとり・一切經の・別所に・なく〳〵立ぞ・忍ばせ給ひける・去程に・山門の・大衆・大講堂の・庭に・集會して・僉議しけるは・抑我等が・かたきは・西光法師・父子なりとて・彼等・親子が・名字を書て・根本中堂に・おはします・金毘羅大將の・左の御足の下に・ふませ奉り・願は・十二神將・七千夜叉・時刻を・めぐらさず・西光法師・父子が・命を・召とらせ・給へやと・をめきさけんで・咒咀しけるこそ・おそろしけれ・同き廿三日に・先座主・一切經の別所を・泣々立ぞ・出させ給ひける・さしもの・法務の・大僧正・ほどの人に・香染の・御衣をば・きせ奉りながら・傳馬の・うたてげなるに・のせ奉り・追立の官人・兩送使等が・先に・蹴たて奉て・けふを・限りに・關の東へ・越られける・御心の中・推量られて・哀なり・大津の・打出の濱にも・成しかば・文殊樓の・軒端の・白々として・見えけるを・二目とも・見給はず・袖を・顏に・おしあてゝ・泣々・そこをぞ・過られける・中にも・祇園の・別當澄憲法印の・いまだ其比・權大僧都にて・おはしけるが・先座主の・御名殘を惜み奉り・粟津まで・送り奉て・歸られけるに・先座主・澄憲の・遙々と・是まで・訪ひ來り給へる・志の程を感じ給ひて・年來御心中に・秘せられける・天台・圓珠の・秘法・一心・三觀の文・竝に・血脈・相承の・次第を・澄憲に・授らる・抑・此秘法と申は・釋迦・附屬の弟子・波羅奈國の・馬鳴比丘・南天竺の・龍樹菩薩・より以來・次第に・相傳し・來れり・然るをけふの情に・澄憲に・是を・授らる・さすが・我朝は・粟散邊地の・境とは申ながら・澄憲是を・附屬して・有がたさに・法衣の袖を・顏にあて・泣々かへり給ひけり・抑此・明雲と・申奉るは・村上の天皇に・第七の皇子・具平親王に・五代の孫・久雅の・大納言顯通卿の・御子也・淨行持律なる上・顯密兼學して・ならびなき・高僧にて・まし〳〵ければ・六勝寺・竝に・天王寺の・別當をも・かね給へり・仁安三年二月十五日に・天台座主に・ならせ給ふ・其時・安倍の泰親・此明雲を・

見奉て・行德の程は・有がたけれども・但御名こそ・心得られね・明雲は・上に・日月の・光をならべて・下に・雲ありとぞ・難じ申ける・昔・傳敎大師・中堂の・寶藏に・籠られたりけるの・箱あり・白き絹にて・つゝまれたり・彼中に・黃紙に・かける文一卷あり・是は傳敎大師・末代の・座主の・次第を・かねてあそばし・おかれたり・されば・代々の座主・御拜堂の御時・彼匣をあけ・文をひらいて・見給ふに・我名の・有所までは・見給て・それより・おくをば・見ずして・卷をさめて・おかるゝ・ならひあり・されば・此明雲も・御拜堂の・御時・彼匣をあけ・文をひらいて・見給ふに・義親和尙より・此かた・天台座主はじまつて・五十五代・明雲と申・御名あり・か程・めでたき・高僧にて・ましく〳〵けれども・いかなる罪の・むくいにか・今流罪・せられ給ふらん・去程に・山門の大衆・大講堂の・庭に・集會して・僉議しけるは・傳敎・慈覺の・御事は・中々・申に及ばず・義親和尙より・此かた・天台座主・始て・五十五代・いまだ・流罪の例を・きかず・倩事の心を・案ずるに・去ぬる・延曆の・ころほひ・桓武天皇・傳敎大師と・御契りを・結ばせ給ひ・皇帝は・帝都をたて・大師・當山に・よちのぼり・此所に・四明の・敎法を・ひろめ給ひしより・此かたながく・五障の・女人・跡たえて・三千の・淨侶・居をしめたり・嶺には・一乘讀誦・年ふりて・麓には・七社の・靈驗・あらたなり・彼・月氏の・靈山は・帝都の・東北に・そばだつて・大聖の・幽嶋たり・日域の叡岳は・王城の・鬼門に・あたつて・護國の・靈地たり・されば・代々の・賢王・智臣・みな・此所に・壇場をしむ・こは・末代と・いはぬからに・いかでか・我山の・貫首を・他國へは・移さるべき・こは・心うしなんど・をめきさけぶ・程こそありけれ・三千の・大衆・一人も殘らず・みな東坂本に・おり下る・其後・三千の大衆・十禪師權現の・御前に・集會して・僉議しけるは・追立の官人・兩送使等が・あんなれば・我等・今度・粟津に・行向・流人を・奪留奉らん事・有がたし・今は・十禪師權現の・御力の・外は・又たのみ奉る・方なしとて・肝膽を・くだいて・祈奉りけるに・爰に・乘圓律師が・童に・鶴丸とて・生年・十八歲に・なりけるが・身心を・苦しめ・五體に・汗を流し・我に・十禪師權現の・乘居させ給へりとて・詫宣して・いはく・生々世々に・心うし・こは・末代と・いはんからに・いかでか・我山の・貫首を・他國へは・移すべき・さらんにとつては・我この山の・麓に・跡を垂ても・何にかはせむとなり・大衆・隨喜の淚を・ながし・まことの・靈驗にて・ましまさば・我等しるしを・奉らん・まづ・ひとつの・瑞相を・見せしめ給へとて・おもてに・立ならびたる・老僧・千余人が・てん手に・持たる・數珠共を・大床の・上へぞ・投あげたる・件の物つき・走りめぐり・つかのごとくに・執あつめ・少もたがへず・元のぬしに・賦・渡す・大衆今は・十禪師權現の・靈驗あらたにまし〳〵けり・我ら今度・粟津に・行向ひ・流人を・奪留奉らん事・疑なしと喜て・勇をなしてぞ・向ひける・或は・澁々たる・志賀・唐崎の・濱路に・歩つゞける・大衆もあり・或は・山田・やばせの・湖上に・舟おし出す・衆徒もあり・大勢

雲霞のごとくに・むかひければ・さしも・きびしげなりつる・追立の官人・兩送使等・座主をば・粟津の・國分寺の・御堂の前に・捨置奉て・みなちり〳〵にこそ・成にけれ・大衆・參りければ・先座主・宣ひけるは・けふ既に・都の中を・追出さるべしといふ・院宣・宣旨の・なりぬる上は・少もやすらふべきに・あらずとて・はしぢかう・居出で・宣ひけるは・我三臺槐門の・家を出・四明けいの・窓にいつしより・此かた・ひろく・圓宗の・敎法を學し・顯密・兩宗を・學べり・偏に我山の・興隆をのみ・おもへり・衆徒を・育・心ざしも・深かりき・又國家を・祈・奉る事も・淺からざりき・兩所・山上・山王・七社も・定て照覽し給ふらん・罪なくして・咎を蒙る事・是偏に・前世の宿執とのみ・思へば・全世をも・人をも・神をも・佛をも・恨・奉らず・衆徒の・是まで・はるばると・とぶらひ來り給へる・芳志こそ・いつの世まで・忘がたけれとて・香染の・御衣の・袖しぼるばかりに・見えられければ・大衆も・みな鎧の袖をぞ・ぬらしける・大衆・御こしさしよせ・今はとう〳〵・めさるべう候と・申たりければ・先座主・宣ひけるは・我既に・流人の身として・いかでか・智惠ふかき・修學者・やごとなき・大德達に・かき棒られては・上べき・縱歸り登とも・同じう・あゆみ・つゞきてこそは・上べけれとて・さうなう・乘給はず・爰に・西塔の住侶・戒淨坊の・阿闍梨祐慶とて・其長・七尺ばかりありけるが・摺繩目の鎧の・かねませたるを・草摺長に着なし・鍬形打たる・三枚甲の緒をしめ・白柄の大長刀の・さやをはづいて・杖につき・遙の後陣に・立たりけるが・甲をば・ぬいで・後へかつばと・投けるを・下人の法師・取てんげり・其後・大勢の中を・押分押分・先座主の・御まへに・つゝとまゐり・大の眼に・かどをたて・座主を・はつたと・睨奉て・あな淺ましと・其御心にて・渡らせ給へばこそ・今かゝる・うきめには・あはせ給へ・とうべう候とて・御手をとつて・あらけなく・ひつたてまゐらせければ・座主・あまりの・おそろしさにや・いそぎ・御輿にぞ・めされける・大衆先座主・執得奉たる事を・喜て・いやしき・法師原に・あらず・智惠・ふかき・修學者・やごとなき大德達・かき捧てぞ・のぼりける・聽て・先輿をば・祐慶かく・人は・かはれども・祐慶はかはらず・後陣は・よわれ共・先陣は・つかれず・輿の轅も・長刀の柄も・をれよ・碎よと・持まゝにさしも・さかしき・東坂・平地をゆくがごとくにて・大講堂の庭にぞ・かきすゑたる・其後・三千の大衆・又大講堂の・庭に・集會して・僉議しけるは・我ら・今度・流人を・奪留奉て・いかでか・我山の・貫首とは・崇奉るべきと・僉議しける所に・祐慶・又さきのごとくに・進出て・それ我山は・日本無双の・靈地・鎭護國家の・道場也・されば・衆徒の意趣も・餘山にこえ・いやしき・法師原に・至るまで・世以て・是をかろんせず・智惠・高貴にして・三千の・貫主たり・德行重して・一山の和尙たり・我等・今度・顯密の・あるじを・うしなひ奉て・盤雪の・つとめ・おこたらん事・東大・興福・園城の・嘲・山上・洛中の・憤に・あらずや・祐慶今度・張本に・稱られ・禁獄・流罪・頭を・はねられ・參らせむ事・今生の面目・冥途の

おもひ出なるべしとて・双眼より・涙を・はら〳〵とながしければ・大衆・尤・とて・又御輿・舁・奉て・東塔の・南谷・妙光坊へ・いれ奉る・それよりしてぞ・祐慶をば・いかめ坊とは・申ける・されば・時の横災をば・いかなる・權化の人も・逃給はざるにや・大唐の・一行阿闍梨は・玄宗皇帝の・御持僧なり・皇帝の・后・楊貴妃に・名だち給へる事あり・是・跡かたなき・無實の・咎なりけれども・果羅國へぞ・流されける・件の國へは・三の道あり・幽地道・輪地道・暗穴道とぞ・申ける・幽地道は・御幸道・輪地道は・雜人の・通路・中にも・暗穴道と申は・重犯の者を・つかはすに・七日七夜が間・月日の・光を見すして・ゆく道なり・一行重犯の人なればとて・彼暗穴道よりぞ・なをされける・瞑々として・ひとりゆく・高峯に・千度・まよひ・しん〳〵として・山ふかく・只寒谷に・鳥の一聲・ばかりにて・苦の・ぬれぎぬ・ほしあへず・天道・無實の・咎を・あはれませ給ふ事なれば・九曜の・かたちを・現じて・一行を・照し給ふ・時に一行・右の指を・くひきつて・左の袖に・九曜の・かたちをぞ・うつされける・和漢・兩朝に・眞言の・本尊たる・九曜の・曼陀羅・是也

西光がきられ

今度・山門の大衆の・先座主・取留奉たる事を・法皇・聞召れて・大きに・安からずとぞ・仰ける・例の西光が申けるは・昔より・山門の大衆の・みだりがはしき訴訟候事・今に始ずとは・申ながら・此等程の・狼藉をば・いまだ・承り及ばず・世は・世にても・候まじと・我身の・たつた今・ほろびんずるをも・しらず又・山王大師の・神慮にも・憚らず・かやうに申て・宸襟を・なやまし奉る・叢蘭茂からんとすれば・秋の風・是をやぶり・王者・明ならんとすれば・讒臣・是をくらうすともいへり・讒臣は・國をみだり・妬婦は・家を破るとも・かやうの事をや・申べき・さる程に・法皇は・新大納言成親卿以下・御近習の人々・其外・北面の輩に・仰て・山責らるべしとぞ・聞えし・山門の大衆此由を・傳へ承つて・我ら・王土に・はらまれながら・さのみ・詔命を・對捍すべきに・あらずとて・內々は・院宣に・したがひ・つき奉る・衆徒も・少々有なんど・聞えしかば・先座主は・妙光坊に・おはしけるが・此由を・聞給ひて・又いかなる・うき目にか・あはむずらんとて・やすき心も・し給はず・去程に・新大納言成親卿は・當時・山門の・騒動によつて・私の・宿意をば・しばらくおさへられたり・抑・內儀支度は・さま〴〵成しかども・大かたの・義勢ばかりにては・いかにもかなふべうも・見えざりけるに・むねと・たのまれたりける・攝津の國源氏・多田の藏人行綱・此事無益なりと・思ふ心ぞ・出來にける・倩平家の・繁昌を見るに・たやすく・かたぶけがたし・又大納言殿の・かたらはるゝ所の・軍兵・いく程なし・行綱よしなき事に・與したり・此事天下に・もれなば・まづ・行綱・さきに・失なはれなんず・さればとて・人の口より・もれぬ・さきに・此事平家へ申・我身の・災難を・逃ばやと・思ひければ・同き五月廿九日の・夜にいつて・入道相國の・宿所・西八條殿へぞ・

參りたる・入道やがて出あひ・對面し給ひて・此夜は・はるかに・更ぬらんに・そも何事ぞと・宣へば・行綱さん候・當時・御近習の人々の・兵具を・調軍兵・集られ候をば・いまだ・しろしめされ・候ぬやらんと・申たりければ・入道世にも・事もなげにて・わうそれは・法皇の・山責らるべしとこそ・きけと宣へば・行綱・居寄て・いや・其義にては候ず・當時・御近習の人々の・御一門を・かたぶけ・參らせんとこそ・議せられげに・候へと・申たりければ・入道・以外に・驚給ひて・さてさやうの・事共をば・院にも・しろし・めされたるか・申にや及候・執事の別當・新大納言殿の・軍兵あつめられ候ひしにも・院宣とてこそ・催され・候ひしか・其外・西光が・と・申て・俊寛が・かう申てなんど・あるままにも・さしすぎて・申ちらし・暇申て・罷りいづ・入道もつての外の・大聲をもつて・侍ども・呼・のゝしり給ふ・こゑ・おそろしく・行綱も・憖なる事・申出し・我身も・其證人にや・ひかれつらんと・思ければ・人もおはぬに・とりはかまし・大野に・火をはなつたる心地して・門前にはしり出・馬場なる馬に・打乘て・いそぎ宿所へ・逃歸る・入道・貞能とめす・筑後守貞能・御まへに・參り畏る・入道・やゝ貞能・京中に・謀叛の輩共が・みち〳〵たんなるぞ・人人にも・ふれ申せ・侍共・めすべしと・宣へば・貞能承はつて・京中を・催しけるに・小松殿計こそ・何事にも・騒給はぬ人にて・參せられね・其外の人々には・藤の中將藏人頭・左馬頭以下の・公卿殿上人・みな我も〳〵と・馳參らる・其外・侍軍兵共・我も〳〵と・馳たりけり・夜のほどに・

西八條殿には・四五千騎にこそ・成にけれ・明れば・六月一日の・まだくらかりけるに・入道・檢非違使安倍資成を・めして・やよ資成・院の御所に參り・大膳大夫・呼出し・奏せうずるやうよな・御近習の・輩共が・あまりの・過分にて・剩・淨海を・かたぶけんと・結構仕り候を一々に・召取て・事の子細を・尋承り・申さうするをば・院には・しろし・めさるまじう候と・申せとて・つかはさる・資成・院の御所にまゐり・大膳大夫を・呼出し・此由申たりければ・法皇・あはれ是は・日比・はかりし事の・はや・もれ聞えたるに・こそと・おぼしめすより・淺ましくて・こは・何事ぞと・計にて・分明の御返事も・なかりければ・資成・さればこそと・無益にて・いそぎ・歸り參るべき由を・いひいれつゝ・西八條に・歸り參て・此由・申たりければ・入道・さればこそ・よも御返事は・あらじ・行綱は・まことを・いひけり・此事・告しらせずは・入道安穩にてや・あるべきとて・やがて・難波瀨尾を・めして・謀叛の・輩共・搦捕べきやうを・一々次第に・下知せらる・中の御門・烏丸の・新大納言成親卿の・許へ・雜色をもつて・急度立よらせ候へ・聊・宣ひ合べき事の・候と宣ひ・つかはされたりければ・大納言・あはれ是は・當時・山門の・騒動の事を・院へ・奏せんとにやらん・其儀ならば・御憤・もつての外げなる物をとて・我身の上とは・露・しり給はず・ないきよげなる・袍衣・たをやかに・着なしつゝ・八葉の車の・あざやかなるに・乘給ふ・牛飼雜色に・至るまで・みなきよげにてぞ・出られける・そも最後とは・後にぞ・おもひしられける・大納言・西八條・ちかうな

るまゝに・其邊を・見給へば・物具したる兵共が・四五町・十町に・所もなくぞ・みち〳〵たる・大納言・こは・何事やらんと・胸打さわぎ・門を・さし入て・見給へば・中門の外には・おそろしげに・よろうたる・武者・二人・大納言殿の・左右の手を・とつて・ひつばり・庭へ・引おとし奉て・こは・いましめ奉るべうもや・候らんと・申たりければ・入道・すこし腹ゐて・有べからずと・宣へば・承はつて・兵數十人が中に・取籠奉て・一間なる所に・押籠奉る・大納言たゞ・夢の心地ぞ・し給ひける・御供に候ひける・諸大夫・侍共・いくらも・有けれども・大勢に・おしへだてられて・物をだにも・申さず・牛飼雜色に・至るまで・車をすてゝ・みなちりぢりにこそ・成にけれ・是を始として・平家の・侍共・二百余騎・三百余騎・所々に・押寄々々・謀叛の・輩共・一々次第に・搦とり・まづ・近江中將入道蓮浄・山城の守基兼・式部大輔正綱・宗判官信房・新平判官資行・平判官康頼・法勝寺の執行俊寛僧都も・からめられてぞ・出來たる・西光・是も・此事・院へ奏せんとて・急・鞭鐙あはせて・馳參る・平家の侍共・道にて・行あうたり・いかに・御邊・西八條殿より・召のさうぞ・急度・參り給へと・いひければ・西光これも・聊・院へ奏すべき・やうあつて・參り候・いかさまにも・やがて・まゐらむずる候とて・打過んとす・につくい・入道の・なに事をか・奏すべき・さな・いはせそと・いふまゝに・馬よりとつて・あておとして・搦とる・日の始より・同意與力の・者なりければ・したゝかに・いましめて・入道相國の宿所・西八條へ・具して參り・御坪の内にぞ・ひつすゑたる・入道御覽じて・あはれ・此日比・いかにもして・淨海を・かたぶけんとせし・奴原共の・なれる姿の・おもしろさよ・しやつ・爰へ・ひきよせよやとて・緣のきはに・引ふせさせ・先・大きなるむちをもつて・心のゆく〳〵・打て・宣ひけるは・やれおのれが・やうなる・下臈のはてを・君の・召つかはせ給ひて・なさるまじき・官職を・たうで・父子共に・過分の・ふるまひせし・奴原と・みしにあはせて・あやまらぬ・天台座主・流罪に・申行ひ・剩・淨海をかたぶけんとせし・謀叛人・日の始より・みな人・しつたり・いさゝか・其やうを・速に申せ・につくい・入道のと・宣へば・西光・ちつとも色も・變せず・わるびれたる・氣色もなく居なほり・いでいで・さらば・のち事・ひとつはなさんとて・いゝや・さもさうぬぞとよ・執事の別當・新大納言殿の・軍兵・あつめられ候ひしかば・院中に・めしつかはるゝ者の・身なれば・くみせぬとは・申まじ・それは・與したり・但御邊は・耳に・とゞまる事をも・宣ふ物かな・他人の前はしらず・西光なんどが・前にては・さやうの過分の・詞をば・えこそ・の給ふまじけれ・見さうざつし・事か・御邊は・故刑部卿の子にては・ありしかども・十四五までは・出仕もなく・故中の御門の・藤中納言家成卿の許に・立より給ひしをば・京童部は・例のたか平太とこそ・わらひしか・いんじ保延の・ころかとよ・御邊の父・忠盛の・はかりごと・いみじうして・海賊の・張本人・四十餘人・召進せられたりし・勳賞に・御邊のいまだ・其比・十八か・九にて・四位して・四位の兵衛佐と・いはれ給ひしをば・人い

つしかなりと・申しゝが・日比は・殿上の・交をだにも・きらはれ・給ひし人の・子孫の・今は・きんじき・ざつはうをゆり・綾羅錦繡を・身に纏ひ・剰・大臣大將に・いたつて・君をも・君とはせず・臣をも・臣とせぬをこそ・過分とはいへ・侍ほどの者の・受領檢非違使になる事・先例・法例・なきにあらず・されば・何事か・過分なるべき・入道殿といひければ・入道あまりに・腹をすゑかねて・しばしは・物をも・の給はず・やゝあつて・入道相國・宣ひけるは・しやつ・爰へ引寄よやとて・緣のきはに・あをのけに・引伏させ・西光が・しやつらを・物はきながら・むんず〳〵と・ふんで・しやつに・物ないはせそ・舌をぬけ・口をさけとぞ・いかられける・松浦の太郎家俊と・申者・ちうにくゝつて・出にけり・其後・足手を・はさみ・がうきにかけ・さま〴〵に・いため・とふ・西光もとより・あらがひざつし上・糺問は・きびしかりけり・事の仔細・殘りなうこそ・おちたりけれ・白狀を・紙四五枚に・記せられけり・其後・五條西の朱雀に・引出し・舌をぬき・口をさき・終に・頭をはねられけり・次男・近藤判官師經・禁獄・せられたりけるをも・召出し・弟・左衞門尉・師平・ともに・頭を・刎られけり・竝に・郎等三人・誅せらる・嫡子・加賀守師高をば・尾張の・井戸田へ・流され・たりけるをも・討手をつかはして・ほろぼさる・師高・散々に・たゝかひけるが・かなはじとや・おもひけむ・館に・火かけ・自害してこそ・失にけれ・これらは・都て・云甲斐なき・ものゝ・秀て・あやまらぬ・天台座主・流罪に・申行ひ・山王大師の・神罰冥罰を・立所に・得て・わが身も・

子孫も・悉・亡びぬるこそ・淺ましけれ

小教訓

去程に・大納言は・一間なる所に・押籠られて・おはしけるが・哀これは・日ごろ・はかりし事の・はや洩・聞えたるにこそ・たれ漏しけむ・いかさまにも・是は・北面の・輩共の・中にもや・有らんなんど・おもはしなき・事もなう・案じつゞけて・おはしける處に・後のかたより・足音・たからかに・人の・きたる音の・しければ・大納言・只今是にて・失はれんずるに・こそと・思はれけるに・さはなくて・入道相國・素絹の衣の・裳・短なるに・しろき・大口・ふみふくみ・ひじりづかの・刀・おしくつろげて・さすまゝに・大納言の・おはしける・うしろの・障子を・あらゝかに・さつとあけて・しばらく・にらまへてぞ・たち給ひける・やゝあつて・入道・宣ひけるは・いかに・御邊去ぬる・平治に・信頼卿が・謀叛の・同心によつて・うゝに申て・頸を・つぎ給ひし・人ぞかし・いつしか・其恩をわすれて・剰・淨海を・かたぶけむとの・御結構ぞや・日比の・謀叛・結構の・次第を・たづね承はり・申さうするは・いかにと・宣へば・なまじひに・大納言・いかさまにも・それは・人の・讒言にてぞ・候らん・委御尋あるべう候と・いはせも・はてず・それなりつる・西光が・白狀もつて・まゐれと・宣へば・承はつて・

紙四五枚に・かいたる物を・もつて・參りたり・入道ひきひろげ・二三反がほど・たからかに・よみきかせ・あらにくや・此上は・爰を何とか・あるべき・それよく・見給へとて・大納言の・顔に・さつと・なげかけて・急・障子を・ちやうどたてゝぞ・入給ひける・其後・入道・難波瀬尾と・めされければ・經遠・兼康・參りたり・あの男・とつて・ひつばり・庭へ引おとし・とつて ふせて・をめかせよと・宣へば・二人の者ども・小松殿の・かへり聞食れんする所も・いかゞ・候べかるらんとて・ふかう 畏てぞ候ひける・入道・よし〳〵・さ聞つ・淨海が・命をば・かるんじて・內府はなほ・おそろしいとや・其儀ならば・其旨をこそ・心得めと・宣へば・二人の者共・あしかりなんとや・おもひけん・大納言殿の・左右の手を・とつて・ひつばり・庭へ・引落し 奉て・左右の御耳に・口をよせて・いかさまにも・御聲の・いづべう 候 とて・あげては・どうとおき・〳〵・二三度・あげおろしたりければ・御聲二聲三聲ぞ・出されたる・なほいましめ・奉るべうもや・候らんと・申たりければ・入道・すこし・腹ゐて・今はとう〳〵・やすめ申せと・宣へば・承はつて・兵數十人が・中に・取籠奉つて・又・一間なる所に・押籠奉る・大納言・只夢の心地ぞ・し給ひける・その體・冥途にて・罪人共が・罪の輕重によつて・或は・業のはかりにかけられ・或は・淨玻梨の・鏡に・引向られ・所作の業に・よつて・呵責をくはへ・刑罰を・行はるらんも・是には・過じとぞ・見えし・蕭樊囚はれ・とらはれて・韓彭にらき・すされたり・龜錯戮をうけ・周儀・つみせらる・たとへば・

彼蕭何・樊噲・韓信・彭越・これらはみな・高祖の・功臣たりしか共・小人の・讒によつて・過敗の恥をうくとも・か樣の事をや・申べき・去程に・大納言は・一間なる所に・押籠られて・おはしけるが・嫡子・丹波の少將も・今は・めしや籠られぬらん・殘りとゞまる・跡のありさま・さこそはあるらめなむと・おもはじなき事もなう・案じつゞけて・おはしける・程に・さしもの・極熱に・裝束をだにも・くつろげ給はねば・汗も・涙も・あらそひてぞ・見えられける・大臣は・いまだ・おはせぬやらん・さりとも・よも捨置・給ふべきとは・おもはれけれども・たれして・の給ふべきとも・覺えねば・暮をもまたで・露の身の・きえぬべうこそ・思はれけれ・小松殿は・なに事にも・騷給はぬ人にて・おはしければ・はるかに・日たけて・後・衞府四五人・隨身三四人ほど・めし具して・のどやかげにてぞ・おはしたる・入道世にも・あしげに・見給へば・筑後守貞能・御まへをついたつて・大臣に・參むかひ奉り・是ほどの・御大事に・など・軍兵共をば・一人も・召具・せられ候はぬやらんと・申たりければ・大臣・大事とは・天下の・事のあるべきとて・入給へば・甲冑を・よろひける・其後・大臣・中門に・おはして・大納言の・おはする所は・いづくやらんと・かしこ爰の・障子を・引明々々〳〵・見給へば・爰に・くもでゆうたる・所あり・是や・そなるらんとて・引明て・見給へば・をりふし・大納言は・大臣の事・思召出し・涙にむせび・うつぶして・おはしけるが・大臣・

さていかにやと。の給ふ聲を。聞つけて。目をもちあげ。うれしげに。おもはれたる。けいき。極惡深重の。罪人が。地藏菩薩に。逢奉るらんも。是には。すぎじとぞ。みえし。大納言は。こは何事にて候やらん。身には。一切。あやまつたる。事も候はねども。けさより。かやうに。召籠られ。まゐらせて。ゆふさり。既に。失はるべしとやらん。承はり候。去ぬる。平治に。命たすけられ。まゐらせて。其御恩。いまだ。報じ。つくしがたうて候。今度も。よきやうに。申て。たすけさせ。おはしまし候へかし。甲斐なき。命だにも。閉籠り。一筋に。後生菩提の。營をも。仕り候はんと。思ひなつて。こそ候へと。の給へば。大臣。いかさまにも。それは。人の。讒言にてぞ。候らん。さりながら。今度も又。よきやうに。申てたすけ。奉らばやとこそ。存候へ。御心やすく。おぼしめされ候べしとて。出られければ。大納言。大臣の。おはしつるほどは。いさゝか。たのもしう。おもはれつるに。大臣。出給ひて後は。大納言。世にも。心ぼそくぞ。思はれける。其後。大臣。父の御まへに。おはして。扨あの。大納言をば。きられんずるにて。候やらんと。申されたりければ。入道。子細にや。およぶ。此暮を。待なりとぞ。宣ひける。大臣。あの大納言。さうなう。失はるべからず。其故は。彼が先祖。六條の修理大夫顯季卿。白川院に。召つかへてより。このかた。家久しう。經のぼり。位。正二位。官。大納言に。あがり。殊には。當時の。君の。無双の御いとほしみにて。候なる物を。さうなう。失はるべき事。いかゞ候べかるらん。かやうには。又。聞しめされて候とも。もし此事の。ひが事ならば。いよいよ不便の。至りなるべし。北野の天神は。時平の大臣の。讒言によつて。うき名を。西海の波に流し。西の宮の大臣は。多田の新發が。讒奏に依て。其身を。山陽の。雲にかくし給ふ。是みな。延喜の聖主。安和の御門の。御ひが事とぞ。申傳たる。上古もつて。かくのごとし。況。末代に。おいてをや。よく〳〵。御案も。あるべし。くはしう。御尋も。候べし。後悔。さきにたゝずとこそ。承候へ。刑の疑はしきをば。かるんぜよ。功のうたがはしきをば。おもんぜよとこそ。見えて候へ。かやうに申候へば。重盛。彼大納言が。妹に。相具したり。維盛父。聟なり。旁親しければ。申とや。おぼしめされ候らん。全。其儀にて候はず。只世の爲。家の爲に。存じて。かやうには。申候なり。昔嵯峨の皇帝の御時。左兵衛尉藤原の仲成が。誅せられてより。このかた。死たる者の。再。歸る事なし。是不便の。至なるべしとて。保元までは。君。廿五代。たえて久しかりし。死罪を。信西入道。執權の時に。あひ當て。宇治の左府の。死骸を。ほりおこし。頭を刎。大路を渡し。實檢せられし事。なんどは。無道なる。至。あまりなる。政とこそ。見候ひしか。されば。故人の言葉にも。あまりに。死罪を。行へば。海内に。謀叛の。輩たえずと。申しに。合て。中。二年あつて。平治に。事出來。信西。都の内を。出され。生ながら。埋まれ。幾程なうて。ほりおこし。頭を刎。大路を。渡され。首を獄門に。かけられし。事

なんどは・いつしか・其酬かと・覺て・返々おそろしう・こそ候へ・是は・させる・朝敵にても・候はず・せめては・都の内を・出されたらんに・ことたり候ひなんず・太政大臣までも・きはめさせ給ひぬれば・御榮花・殘る所は 候 ねども・子々孫々までも・繁昌こそ・あらまほしう候へ・父祖の・善惡は・子孫に及び・積善の家に・餘慶あり・積惡の門に・餘殃とゞまるとこそ・承はり候へなんど・やう〳〵に・申されたりければ・ゆふさり大納言・きられん事をば・思召とゞまり・給ひける

あひ

其後大臣・中門に出・侍共に・むかつて・宣ひけるは・縱入道・不思議を・下知し給ふとも・あの大納言・さうなう・きるべからず・御腹立のまゝに・物さわがしき・御事ならば・定て・御後悔あるべし・さるにても・經遠・兼康が・けさあの・大納言に・あらけなく・當りつる事こそ・返々も・奇怪なれ・かた井中の者共は・萬の事に・かゝるぞとよと・宣へば・二人の者共・されば こそ・けさ・我らが・申つる所も・爰ぞかしとて・ふかう・恐入つてぞ・候ひける・大臣は・かやうに・下知しつつ・小松殿へぞ・歸られける・去程に・大納言の供に・候ひける・諸大夫 侍共・中の御門・烏丸の大納言成親卿の・御宿所に・歸り參つて・上には・けさよりして・西八條に・召籠られ・參らつさせ給ひて・夕さり既に・失はれ・させ給ふべきと・やらん・うけたまはり候・又少將殿を・始奉つて・

君達たちをも・みな・むかへ參らつさせ・給ふべしと・やらん・傳へ 承 はつて 候 と・申たりければ・北方乳人の女房を・始奉つて・家の内に・ありとし・ある人・みな・きも玉しひを・失つて・こゝをあげてぞ・なかれける・女房達・いまは六波羅より・追捕の官人共の・參り向ひ 候らんに・こはいづくへも・忍ばせ給ひてと・申あはれければ・北方・今是程に・なりぬる上は・何方へか・忍ぶべき・たゞひと所にて・ともかうも・成たらんこそ・本意なれ・さるにても・けさをかぎりと・しらざりつる・事こそ・かなしけれとて・ふしし づみてぞ・なかれける・去程に・六波羅より・追捕の官人共の・參りむかふよし・聞えしかば・北方・今さればとて・恥がましく・うき目を・見むよりは・忍ばむとて・北方・車に乘給ふ・十歳の若公・八歳の姫君・ひとつ車にのせ・奉つて・大宮をのぼりに・北山のほとり・雲林院へ・いれ奉り・淺ましげなる・僧坊に・おろし置奉る・御供の人々は・身の捨がたさに・暇申て・みなちり〳〵にこそ・成にけれ・北方・君達ばかり・殘りとゞまらせ給ひて・暮行かげを・見給ふにつけても・哀や大納言は・夕さり既に・失はれさせ給ふべき・なればこそ・露の御命・いまいくほどぞやと・思ひやるにも・消ぬべし・去程に・大納言の年比・召つかはれたる・局の女房めのわらは・物をだにも・打かつがず・かちはだしにて・門前に・走出・みなちりぢりにこそ・成にけれ・門をだにも・おしたてず・厩には・馬共なみたちけれども・草飼ものもなし・夜明れば・門前には・馬車の隙なく・内には・賓客・座に列つて・世を世ともせず・道をすぐる・者

ども・おぢおそれてこそ・昨日までも・ありつるに・夜の間にかはる・世のならひ・盛者必衰のことわり・は・目のまへにこそ・あらはれたれ・樂つきて・かなしみきたると・書れたる・江相公の・筆の跡・今こそ・おもひしられけれ

少將の乞請

去程に・新大納言成親卿の嫡子・丹波の少將成經は・きのふより・院の御所に・うへぶしして・いまだまかりも・出られざりけるに・人參つて・此由申たりければ・少將など・是ほどの事を・眞・宰相の許よりは・告られぬやらんと・の給ふ所に・眞宰相の許より・使あり・西八條より・具し奉つて・急度きたれと候・とう〳〵と・宣ひつかはされたりければ・少將・早心得給ひて・御所中の・女房達を・呼出し奉て・かゝる事こそ候へ・昨日より・世間・何となう・そう〳〵に候ひつるを・例の山の・大衆の・くだるかなんど・餘所に・存じて候へば・はや成經が・身の上にて・候ひけり・扨も・八歳より・御目にかゝり・十二より・此御所に・祇候仕つて・朝ゆふは・不便の仰・罷蒙り・候ひしに・夕さり・あの大納言・失はれ候はゝ・定て成經も・同じ道にぞ・行はれ・候はんずらん・今一度・君をも・見參らせたくは・候へども・かゝる身に・罷成候ひぬる上は・世に恐てこそ・罷出候へと・申されたりければ・女房達・御前に參り・此由奏し・申されたりければ・法皇・何かはくるしかるべき・今一度是へと・仰ければ・少將なく〳〵・御前へは・參られたりけれ共・申出さるゝ旨もなし・法皇も又・仰出させ給ふかたも・なかりけるに・さてしも・あるべきならねば・少將御暇申て・出られけり・法皇は・少將の・後を・はる〳〵と・御覽じ送らせ給ひて・只末代こそ・心うけれ・又も御覽せられぬ・御事もや・あらんずらんとて・御涙に・むせばせ・おはします・其外御所中の人々・少將の・袖に・すがり・たもとにとりつき・みな涙をぞ・ながされける・少將は・けさ院の御所を・出るより・ながるゝ涙も・つきざるに・しうと宰相の許に・おはして・まづ・北方の・御ありさまを・見給ふに・せんかたなし・ちかう產し給ふべきにて・月比も・何となう・打なやみ給ひけるが・又この事さへ・打そひて・ふし沈てぞ・おはしける・又少將の乳人に・六條と申・女房あり・少將の・袖をひかへ奉つて・君のちの中に・渡らせ給ひしを・取あげいだき・そだて・參らせてより・此かた・わが身の年の・老行をもしらず・いつかとくして・おとなしく・ならせ給はんずらんと・申明し・申くらし・ことしは・廿一まで・そだて參らせて・院へも・內へも・御參あつて・おそう出させ給ふ時は・かつうは・御こひしうも・かつうは又おぼつかなうも・おもひ參らせつるに・只今出させ給ひて・いかなる御目にか・あはせ給はんずらんとて・泣ければ・少將いたうな・歎そ・宰相さてましませば・命ばかりをば・申て・たすけ給はぬ・事あらじとは・宣へども・乳人の・六條・只もだえこがれ・たをれふし・なくより外の・事ぞなき・去程に・西八條より・使しきなみに・立け

れば・宰相さらば・出てこそ・ともかうも・ならめとて・車に乗つてぞ・出られける・少將も同車して・こそ出られけれ・宰相の内の・上下・男女みな・車よせまで・はしり出・なき人を・いだすがやうに・聲をあげてぞ・なかれける・保元平治より・此かた・平家の人々の・たのしみさかえは・ありしかども・うれへなげきは・なかりしに・此宰相ばかりこそ・よしなき・聟ゆゑに・かゝる歎は・し給ひけれ・さる程に宰相・西八條におはして・案内を・申されたりければ・入道・少將をば・うちへは・かなふまじと・宣ふ間・其邊ちかき・侍の許に・おろしおき奉つて・宰相ばかり・入給ふ・いつしか兵共・少將を・打圍奉つて・守護し奉る・宰相・中門におはして・いであはるゝかと・對面を・待れけれども・入道・とみにも・出られざりければ・源太夫の判官季貞をもつて・申されけるは・敎盛・よしなき者に・むすぼほれて・今更・くやしう候へ共力及び候はず・又かれに・相具せさせて・候ものゝうちなやむ事の候が・又此事さへ・打そへて・命も・あやうくこそ候へ・哀かれが・いかにも・ならんほど・丹波の少將を・敎盛に・あづけさせ・おはしまし・候へかし・なじかは・僻事・せさせ候べきと・申されたりければ・季貞・御まへに・參つて・此よし・申たりければ・入道あはや・又・例の宰相の・者にも・心得ぬ事を・宣ふ物かなとて・大きに・怒つて・しばしは・物をも・宣はず・やゝあつて・入道相國・の給ひけるは・抑彼・新大納言成親卿と・いつば・謀叛をおこして・當家を・傾けむとす・されども・此一門いまだ・運つきざるに依て・此事はやく・あらはれたり・若此謀叛・とげましかば・其御邊とても・安穩にや・おはすべき・うとうも・おはせよ・したしうも・おはせよ・えこそ・宥・申まじけれ・聟も・子も・まことの時は・只・身に・まさる事や・ある・とぞ・宣ひける・宰相重て・申されけるは・保元・平治より此かた・大小事・御命にかはり・參らせて・あらき風をば・まづふせぎ・參らせんとこそ・仕り候びしが・今より後も・たとひ敎盛こそ・年老て候共・子供あまた・持て候へば・などか一方の・御かためには・成參らせでは・候べき・それにしばらく・少將を・敎盛に・あづけさせ・おはしませと申を・御ゆるされも・なきはよく・敎盛をも・ふた心ある者に・おぼしめされたる・にてこそ候へ・左樣に・後めたい物に・おもはれまゐらせて・敎盛・世にありても・何にかはし・候べき・あはれ出家のいとまを給はつて・高野・粉川にも・閒籠・一筋に・後生・菩提の・いとなみを仕り候ばや・よしなき・浮世の・交なり・世にあればこそ・望もあれ・望のかなはねばこそ・恨もあれ・しかじうき世をいとひ・まことの道に・入なんには・とぞ・申されける・季貞又・御まへに・參つて・此由・申たりければ・入道もつての外に・驚給ひて・さては左樣に・宰相の・出家入道なんど迄・申さるなるこそ・けしからね・さらば暫く・少將を・宿所にも・おかれ候へかしと・世にも・しぶ〳〵にこそ・宣ひけれ・宰相涙を流し・あはれわが子に・むすぼほれざらんには・何しにか・是ほどに・心を碎くべき・よしなかりける・女子かなとて・涙に咽てぞ・出られける・少將待うけ奉て・扱いかにも・かなと・候と・宣へば・宰相さればこそ・いかにも・かな

ふまじかりつるを・教盛が・出家入道なんどまで・申たればにやらん・しばらく宿所に・おき奉れとは宣へども・行末とても・たのもしからずと・宣へば・少將さては・御恩をもつて・しばらくの・命のたすかり候ごさんなれ・さてあの・大納言殿の御事をば・何とか・聞し・めされたるやらんと・宣へば・宰相・いさとよ・いかにもしてぞ・此事をこそ・申さばやと・しつれ・それまでの・事は・思ひも・よらずと・の給へば・さてあの・大納言殿・ゆふさり・失はれ給候はゞ・うきもしづみも・成經をも・同じみちには・申させ給はでと・の給へば・宰相世にも・心ぐるしげにて・いさとよそれも・小松の內府の・けさよりして・やう〳〵に・とり申さるなるが・それもしばらくの・命の助からせ給ふやうにこそ・承はりつれと・宣へば・少將手を合てぞ・よろこばれける・まことの・子ならざらむ人の・我身の・上をさしおきて・たれかは・かやうに・よろこぶべき・誠の契は・親子の中にぞ・ありける・されば子に・過たる・たからなしと・やがて・思ひぞ・かへされける・去程に・宰相は・車にのつてぞ・出られける・少將もまた・けさのやうに・同車してこそ・歸られけれ・人さきに參つて・少將殿は・別の御事も・渡らせ給はで・歸らせ給ひて候と・申たりければ・宰相の內の・上下男女みな・車よせまで・走り出・死たる人の・いきかへりたる心ちして・皆よろこびの涙をぞ・流されける

教訓状

入道相國・新大納言成親卿以下・御近習の人々・其外・北面の輩共に・至るまで・おほくいましめおかれても・猶心ゆりすや（イ心ゆかすや）・思はれけむ赤地の錦の直垂に・黒糸威の・腹巻の・胸板せめ・昔日未だ・安藝守たりし時・嚴島の大明神より・靈夢蒙り・うつゝに給はられたりける・白柄の小長刀・つねの枕をはなたず・立られたりけるを・脇にはさみつゝ・中門の廊へぞ・出られける・大かた其氣色・ゆくしうぞ見えし・入道・貞能とめす・筑後守貞能・木蘭地の・直垂に・緋威の・鎧きて・御前にまゐり・畏る・入道・やゝ・貞能・いかゞはからふ・去ぬる保元に・叔父平馬助忠政を先として・一門なかばすぎ・新院の味方に・まゐりたりき・一宮の御事は・故刑部卿の殿の・養君にて・渡らせ給ひしかば・旁・見はなち參らせがたうは・おもひしかども・故院の・御遺誡に任て・この御かたに・參り・さきをかけたりき・是一の・奉公にあらずや・又平治元年十二月に・信頼・義朝が・謀叛の時・院内おしこめ奉つて・天下は・くらやみと成たりしにも・入道・命を・捨ずしては・いかにも・かなふまじかつし間・咏方にて賊徒を・打・たひらげ・信頼・義朝を・誅戮し・經宗・維方をめし・いましめしに至るまで・君の御爲に・命を捨る事・度々に及ぶ・されば人・いかに申とも・此一門をば・いかでか・七代までも・思召すてさせ給ふべきに・それに成親といふ・無用のいたづら者・又

西光といふ・下賤の不當人が・申す事に・君のつかせ・おはしまして・當家をかたぶけんとの・御結構こそ・然るべからね・なほも・讒奏するものあらば・重て院宣・くだされつと・おぼゆるなり・朝敵と成なん後は・いかに悔とも・益あるまじ・されば・しばらく世をしづめむほど・法皇を・鳥羽の・北殿へ移し・參らするか・しからずば・また・御幸を・これへなりとも・なしまゐらせばやと・思ふはいかゞあるべき・さらむにとつては・北面の輩共の・中に・矢をもひとつ・射つとおぼゆる者のあるぞとよ・侍共に・其用意・せよと・ふるべし・大かた入道・院方の奉公に・おいては・おもひ切たり・馬に鞍おけ・着背長・とり出せよとぞ・ひしめかれける・其後・主馬の判官盛國・急小松殿に・馳參て・申けるは・世ははや既に・かうとこそ見えさせおはしまし候へ・其故は・上に・御きせながを・召れ候上・兵共皆・うつたつて・唯今既に・院の御所・法住寺殿に・よせ候ぞや・法皇をば・鳥羽殿にと・御披露あつて・內々は・西國のかたへ・流し參らすべしとこそ・承はり候へと・申たりければ・大臣いかでか・さる御事の・渡らせ給ふべきとは・思召れけれ共・けさの禪門の・振舞・さる物狂はしう・おはしつれば・もし・さやうの事もや・おはすらんとて・急・御車にめし・西八條に・おはして・門前にて・車よりおり・門をさし入て・見給へば・げにも・入道・腹卷を・着し給ふ上・一門の卿相雲客・數十人思ひ〳〵の直垂に・色々の鎧きて・中門の廊に・二行に着せられたり・其外諸國の受領・衙府所司なんどは・緣にも居こぼれて・庭にもひしと・なみ居たり・兵共旗棹を・引

そばめ〳〵・馬の腹帶を堅め・甲の緒をしめて・唯今既に・うつたゝうずる・きそくなるに・大臣は又・けさのやうに・ゑぼし・なほしに・大紋の・指貫のそばとつて・さやめき入給ふ・ことの外にぞ・みえられける・入道相國・此由を見給ひて・あはまた・例の內府が・世を表するやうに・ふるまふ物かな・ついでをもつて・大きに・諫ばやと・おもはれければ・長刀・膝の下におき・居長高に・なつて・おはしけるが・さすが內府は・子ながらも・內には・五戒をたもつて・慈悲を先とし・外には又・五常をみだらず・禮義をたゞしうし給ふ・人なり・あのすがたに・腹卷を着して・むかはん事・さすがおもはゆう・はづかしくもや・おもはれけん・障子を・すこし引たて・素絹の・衣をとつて・腹卷の上に・あわてぎに・き給けるが・胸板の金物のはづれて・すこし見えける・を・かくさんと・衣の胸をとつて・しきりにひきちがへ〳〵ぞ・し給ひける・大臣は・御弟・右大將宗盛の・座上に・着せられけり・入道相國も・宣ひ出させ給ふ旨もなし・大臣も又・申出させ給ふかたも・なかりけるに・やゝあつて・入道相國・宣ひけるは・抑・彼・新大納言成親卿が・謀叛は事の・數ならず・一向是は・大方・法皇の・御結構にて・候ひけるぞや・それ入道が・くわたいは・涯分に・官途を・すゝむばかり也・それ・弓矢とるならひ・先例なきにあらず・田村丸は・刑部卿・坂の上の・かつたまろが・子なりしかども・わづかに・東夷をたひらげし・勸賞に・大納言にて・左近の大將を・けんじき・聖代上古にも・わづかに・東夷邊土をかせし・勳功かくのごとし・況・入道・王位を奪はれ・給はんとせ

し・二ケ度の・勳賞・捨がたし・加之・功臣嫡々の身として・朝廷度々の・恥を雪めき・それに成親といふ・無用の・聞者・西光といふ・下賤の不當仁が・申す事に・君のつかせおはしまして・當家追討の・御結構こそ・然るべからねど・なほも・讒奏する者あらば・重て・院宣くだされつと・おぼゆる也・朝敵と・成なん後は・いかにくゆとも・益あるまじ・さればしばらく・世をしづめむほど・法皇を・鳥羽の・北殿へ・移し參らするか・然らずは又・御幸を・これへなり共・なし參らせばやと・思ふは・いかゞあるべきと・宣へば・おとゞ・此事・聞もあへ給はず・まづさめ〴〵とぞ・なかれける・入道さてはいかにや・いかにと・あきれ給へば・やゝあつて・大臣涙をおさへて・申されけるは・此仰うけ給候に・御運ははや・末になりぬと・おぼえて・まづ・重盛が・不覺の涙の・先だち候也・人は必・運命つきむとては・かゝる惡行を・おもひたつ事にて候也・さすが我朝は・粟散邊地の・堺とは申ながら・天照太神の・御子孫・國のあるじとして・天津兒屋根の・尊の・御苗裔・朝の政を・務給ひしより・此かた・太政大臣の官に・至給ふ程の人の・甲冑をよろひ・まします事・是禮義を・背にあらずや・就中出家の御身也・それ三世の諸佛・解脫同相の・法衣をぬぎすてゝ・忽に甲冑をよろひ弓箭をたいしまします事・內には・破戒無慚の・罪を招かせ・給ふのみならず・外には又・仁義禮智信の・法にも・既に・背ぬらんとこそ・見えて候へ・旁〴〵恐ある申事にては候へども・しばらく・御心をしづめて・重盛が・申狀を・具にきこしめさるべうもや・候らん・かつうは・最後の・申狀也・心の內に・旨趣を・殘すべからず・まづ世に四恩候・諸經の說相・不同にして・內外の存知・格別なりとは・申せども・心地觀經の文にも・とかれて候が・天地の恩・國王の恩・父母の恩・衆生の恩・是也・知をもつて・人倫とす・其中に・もつともおもきは・朝恩なり・普天の下・悉・王土にあらずと・いふ事なし・されば・潁川の水に・耳をあらひ・首陽山に・蕨ををつし・賢人も・勅命背がたき・禮義をば・存知すとこそ・うけ給はれ・いまだ先祖にも・きかざりし・太政大臣の官を・極めさせ給ふのみならず・いはゆる・重盛なんどが・無才愚暗の・身をもつて・蓮府槐門の・位にいたる・しかのみならず・國郡半・一家の所領たり・田園は・悉・一門の進止たり・是希代の・朝恩にあらずや・いま莫大の・御恩を忘れて・みだりがはしく・君をなみし・參らつさせ給はん御事・神慮のほども・はかりがたし・それわが朝は・神國也・神は非禮を・うけさせ給はず・凡朝敵となりなん者は・ちかくは百日・とほくは・三年を・すごさずとこそ・承はり候へ・是は君の・思召立ところ・道理なかば・なきにあらずや・凡・此一門は・代々の・朝敵を・たひらげて・四海の・逆浪を靜むる事・無双の忠とは・申ながら・其賞に誇る事・還て・傍若無人共又・申つべし・家の命をもつては・君の命を辭せざれ・わうふの命をもつては・父の命を辭せよとこそ・見えて候へ・仰合らるゝ・大納言以下の・輿黨の輩に・所當の罪科・行はれぬる上は・何の恐か候べき・今は退て・此子細を陳じ・申させ給はゝ・君の御爲には・いよ〳〵奉公の忠勤を致し・民の爲には・ますます・撫育の・哀憐を・

ほどこさせおはしまさば・神明の・加護に・あづかつて・佛陀の・冥慮にも・背べからず・神明佛陀の・感應あらば・君もなどか・思召なほさせ給はでは・候べき・されば・聖徳太子の・十七ケ條の・御憲法にも・みな人心・まち〳〵也・おの〳〵しふあり・われを是し・かれを非す・かれを非す・われを是し・是非のことわりを・たれかよく・定むべき・あひともに・賢愚なり・はしなくして・たまきのごとし・縦かの人・いかるといふ共・かへりて・わがしつを・をさめよとこそ・見えて候へ・君と・臣とを・ならぶるに・親疎わくかたなし・君につき奉るは・忠臣の法・道理と・僻事を・くらべんに・いかでか・道理につかざるべき・是は君の・御ことわりにて候へば・重盛はかなはぬまでも・院中を・守護し参らせんとこそ・存知候へ・其故は・重盛はじめ・叙爵より・いま大臣の大將に・至るまで・一として・朝恩ならずと・いふ事なし・その恩の・おもき事を・おもへば・千顆・萬顆の・珠にもこえ・其ふかき色を・論ずれば・一入再入の・紅にもなほ・過たらん・重盛が・身にかはらむ・命にかはらむと・ちぎつて候・侍共・少々候らん・彼等を・めしぐして・院の・御所に參り・門々をかためて・防ぎ參らせんは・ゆゝしき・御大事にてこそ・候はんずれ・かなしきかな・君の御爲に・奉公の忠勤を・致さんと・すれば・迷盧八萬の・頂よりなほ高き・父の恩・忽に忘れなんとす・痛哉・不孝の罪を・逃れんと・すれば・君の御爲には・不忠の・逆臣ともなりぬべし・進退これ極れり・是非いかにも・わきまへがたし・詮ずる所・君をも・守護し・參らせ候まじ・又院參の・御供をも・仕るべからず・せんは只・申うくる所・重盛が・頸をめさるべし・老子の詞こそ・思出て候へ・功名かなひ遂て・身を退けず・位をさらざれば・則・害にあふとも申す・彼蕭何は・大功かたへに・こえたりしによつて・官・大相國にあがり・劔を帶し・履をはきながら・殿上へのぼる事を・ゆるされたりしかども共・ひとたび・叡慮に背事・有しかば・高祖是を・いましめて・重うつみせられき・かやうの事を・おもふにも・富貴といひ・榮花といひ・朝恩と申し・重職といひ・旁きはめさせ・給ひぬれば・いまは御運の・つきさせ給はん事も・かたかるべしとも・おぼえず・富貴の家には・祿位重疊せり・なほふたゝび・みなる木は・其根かならず・いたむとも申す・いつまでか・ながらへて・かやうに・みだれむ・世をも・見候べき・只末代に・生をうけて・かゝるうきめに・あひ候・重盛が・果報のほどこそ・拙う候へ・侍一人に・仰つけ・お坪の內に・めし出し・重盛が・頸をめされんは・いとやすき・御事にてこそ・候んずらめ・これや各・聞給へとて・なほしの袖を・ぬらされければ・入道相國を・始奉て・一門の卿相雲客・みな鎧の袖をぞ・ぬらされける・入道相國・賴みきつたる・內府は・かやうに・の給ふ・よろづ・ちからも・なげにて・いや〳〵それまでの・事は・おもひもよらず・惡黨共の・申す事に・君のつかせおはしまして・もし御僻事なんどもや・いでこん・ずらんなと・思ふばかりにてこそ・あれと・宜へば・大臣・縦ひ・いかなる・御ひが事・わたらせ給ひ候共・君をば・何とかし・參らつさせ給ふべき(イべきとて)・御前を・つい立て・中門にいで・侍共に向つて・宣

ひけるは・今御まへにて・申つる事共をば・汝等は承はらずや・今朝よりこれにありて・かやうの事共をも申・宵べかりつれども・是體に・ひたさわぎ・なりつれば・歸りたりつるなり・又院參の御供に・おいては・重盛が・頸をめされんを見て・申べしと・さらば各・まゐれとて・小松殿へぞ・歸られける・されども・當家重代・からかはといふ・鎧・小烏といふ太刀をば・忍びつゝ・御車に・いれられけるとぞ・承る・用意の程こそ・おそろしけれ・其後・小松殿には・大臣・歸り給ひて後・主馬判官盛國をもつて・催されけるは・重盛こそ・別して・天下の大事・聞出したれ・重盛を・重盛と・おもひあはれんずる人々は・みな・物具して・馳參るべしと・觸られ・たりければ・日ごろは・おぼろけにても・さわぎ・給はぬ人の・今かやうに・仰なるは・別の子細ぞ・あるらん・いざや・參らんとて・或は・淀はつかし・宇治をかのや・醍醐・うぐるす・日野・勸修寺・おはら・しづ原・せれうの里・梅津・桂に・あふれゐたりける・兵共・或は鎧きて・甲・きるもあり・きぬもあり・矢負て・弓とるもあり・とらぬもあり・我さきに・さきにと・小松殿へぞ・はせたりける・さる程に・西八條に・數千騎ありつる・兵共も・小松殿に・大事出來たりと・聞てんげれば・入道相國に・此由かくとも・申さず・みな・さやめき・つれて・小松殿へぞ・參りける

烽火の沙汰（あひ）

去程に・西八條には・筑後守貞能が・外は・弓箭に・たづさはりぬべき・人・一人もなし・たゞ老たる尼・あを女房・筆とりなんどぞ・候ひける・入道・貞能とめす・筑後守貞能・御まへに參り・畏る・入道・やゝ貞能・何とて內府は・これらをば・かやうにて・いひつるやうに・入道が・許へ・討手なんどや・向んずらんなど・の給へば・貞能申けるは・いかでか・さる御事の・渡らせ給ひ・候べき・けさ御前にて・御後悔ぞ・候らんと・申たりければ・入道いや〳〵・內府と・中たがうては・ゆゝしき・大事ぞとて・物具ぬぎ捨・素絹の衣に・袈裟うちかけ・長數珠つまぐつて・いと心も・おこらぬ・念誦してこそ・おはしけれ・ひとへに物ぐるひの・くるひさめたに・異ならず・其後・小松殿には・主馬の判官盛國承はつて・着到つけゝり・參り籠る兵・一萬餘人と注し申す・着到披見の後・大臣・中門に出・侍共にむかつて・宣ひけるは・日比の契約たがへず・みな・神妙に參りたり・但異國にさるためしあり・昔周の幽王と・申し人・褒姒とて・最愛の・后を・持給へり・天下一の・美人・されども・此后・いさかわらふ事を・し給はず・彼國のならひにて・天下に・事の出來たる時は・烽火とて・都より始て・火をあげ・太鼓をうつて・國々の・兵を・めさるゝならひあり・有時・天下に事出來にしかば烽火を・あげたりければ・后これを御覽じて・不思議や・火もさされば・あれほどに・たかうもあがる・事かやとて・始て笑給ひけり・一度ゑめば・百の媚・ありとかや・幽王ふしぎや・此后は・烽火を・愛し給

入りとて・つねはその事となく・火をあげ・太鼓をうつて・后をなぐさめ奉る・諸侯來るに・あたなし・あたなければ・ほどなくさる・かやうにする事・度々におよぶ・ある時・隣國より・凶賊おこつて・幽王の都を・かたぶけんとせし時・火をあげ・太鼓をうちけれ共・例の后の・火にならつて・參りちかづく・者もなし・則・都かたぶいて・幽玉討れ給ひけり・其後・この后は・九尾の・赤狐となつて・かきけすやうにぞ・失られける・世にはかゝる・ためしの・有ぞとよ・重盛も・別して天下の・大事聞出したり・つれ共・又ひが事に・聞なしたりと・自今以後も・是よりめさば・かくのごとく・參るべし・さらば・おの〳〵かへれとて・侍共をぞ・歸されける・凡・此大臣・誠に・父と軍を・す可には・あらず・又天下の大事をも・聞出されざりけれ共・かやうにして・我身に・勢のつくや・つかぬをも見・又は入道相國の・惡心をも・やはらげんの爲の・大臣の・はかり事とぞ・承はる・君々たらずと・いふ共・臣もつて・臣たらずんば・あるべからず・父々たらずといふとも・子もつて・子たらずんば・有べからず・況や此大臣は・君の御爲には・忠あつて・父の爲には・孝あり・是文宣王の詞に・たがはず・法皇も・內々聞しめされて・今に始ぬ事なれ共・內府が心の內こそ・はづかしけれ・あたをばはや・恩をもつて・報じけりとぞ・仰ける・國にいさむる・臣あれば・其國かならず・やすし・家にいさむる・子あれば・其家かならず・たゞしともいへり・上古にも・末代にも・ありがたかりし・大臣なり

大納言の流され

同き六月二日の日・新大納言成親卿をば・西八條の・公卿の座に・出し奉つて・御物參らせたりけれ共・胸ふさがつて・御手をだにも・かけられず・さてしもあるべき・ならねば・兵共・御車よせて・今はとう〳〵・めさるべう候と・申たりければ・大納言・心ならずのり給ふ・車の・前後左右を・見給へば・物具したる・兵共が・所もなく・みち〳〵て・日比見なれたる・人・一人もなし・たゞ身にそふ物とては・つきせぬ・涙ばかりなり・朱雀を・南へ行ば・大內山も・今は餘所にぞ・成にける・鳥羽殿を・過られけるに・日來・此御所へ・御幸なりしには・一度も御供には・はづれ・ざりつる物をと・わが山庄・すはま殿をも・餘所に・してこそ・とほられけれ・鳥羽の南の門にて・兵共・船をおそしと・いそがすれば・大納言・こはいづくを・さして・行やらん・とても・失はるべくは・都ちかき・此邊にても・あらばやと・宣ひけるぞ・いとほしき・大納言・ちかう候・武士は・たそと・問給へば・難波の二郎經遠と・申す・大納言さて・此邊に・わが方樣の・ものやある・尋て・得させよと・宣ひければ・承はつて・尋け れ共・なかりければ・候はずと申す・大納言・無慚やな・我世に・ありし時は・きのふまでも・したがひ付たりし・上下・一二千人もこそ・ありつらんに・今は餘所にてだにも・とぶらふものゝ・なき事よと・宣ひけるぞ・いとほしき・日ごろ・熊野詣・天王寺詣・な

んどの・ありしには・ふたつがはら・みつむねに・つくつたる船・又次のふね・凡二三十艘・漕つゝけ・させてこそおはせしに・今はいつしか・けしかる・かきするゑ・やかたぶねの・ともへあれたるに・大幕・引まはさせ・みもなれぬ・兵共と・のりぐして・けふをかぎりに・都の内を・出られける・心の中・おしはかられて・哀なり・淀の入江を・漕過て・こつどのうとの・はしらもと・きんや・かた野の・渚の岡・入江々々を・漕過て・其日は・攝津國・大物の浦にぞ・つき給ふ・又嘉應元年の冬の頃・此卿・いまだ其比・中納言にて・美濃國を・知行せられたりけるに・目代・左衞門尉正友・山門の所領・平野の庄の・神人と・事をしいだし・たりしによつて・山門大きに・憤り・國司成親流罪に處せられ・目代正友・禁獄・せらるべきよし・奏聞申たりければ・其時も・此卿の・山門の・訴訟によつて・備中へ・流さるべきにて・西の京まで・出られたりしをも・君いかゞは・思召されけん・中五日あつて・やがて・召還されさせ・給ひけり・是によつて・山門大きに・憤り・成親卿を・さまざまに・呪咀し奉りけるとぞ・聞えし・されども・承安二年正月十二日に・准二位し給ふ・同き三年三月十三日に・右兵衞の督を・兼じて・檢非違使の別當にぞ・あがられける・其時は・按察の大納言資方・花山院の中納言兼雅卿・こえられさせ給ひけり・按察の大納言は・清花の人・家嫡にて・こえられ給ふぞ・遺恨なる・これは・三條殿・造進の・賞とぞ・聞えし・又安元々年七月五日の日・正二位し給ふ・其時は・中の御門の中納言宗家卿・こえられさせ・給ひけり・同き二年十月廿二日に・檢非違使の別當より・權大納言にぞ・あがられける・かくのみ・さかえ給ひしかば・人嘲て・あはれ山門の大衆には・のろはるべかりける物かなとぞ・申ける・され共・神罰・冥罰は・疾もあり・遲もありし・ならひにて・終には・かゝるうき目に・あはれけるとぞ・あさましけれ・同き三日の日・大物の浦には・都より御使ありとて・ひしめきけり・大納言・只今是にて・うしなへとの・使やらんと・聞給へば・備前の・兒島へ・流し奉れとの・使也・又小松殿より・御文あり・ひらきて見給へば・都ちかき・片山里にも・おき參らせんとて・やう〳〵に・申候ひしかば共・かなはぬ事こそ・世にある・甲斐も候ね・さりながら・御命ばかりをば・よきやうに・申てこそ候へ・御心やすく・おぼしめされ候べし・又難波がかたへも・相構て・御心にたがひ奉らで・能々御みやづかひ・仕れと・あそばされたる・大納言さても・かたじけなう・思はれ・參らせつる・君にも・捨られ奉り・又つかのまも・はなれがたき・北の方・君達だちをも・ふり捨て・こはいづくを・さして・ゆくやらん・一とせも・備中へ・流さるべきにて・西の京まで・出たりしをも・やがて・めしこそ・歸されたれ・今度は・命ながらへて・戀しき者共を・今一度・見みえむ事も・かたかるべしとて・明ければ・舟にのつてぞ・出られける・道すがらも・涙にくれて・行さき更に・見えわかず・あとのしら波・へだつれば・都は次第に・遠ざかり・遠國は又・ちかくなる・去程に・大納言・備前の兒島に・着給ふ・たひの浦と・いふ所の・淺ましげなる・柴のいほりに・置奉る・是や此・しづが

すむなる・埴生小屋も・これなるらん・島のならひ・後は山・まへは・磯なれば・きしうつ波の音・松ふく風・あはれいづれも・つきざりけり

阿古屋の松

同き六月五日の日・謀叛の輩共・國々へ・流しつかはさる・まづ・近江中將入道蓮浄・佐渡國・山城守基兼・隱岐國・式部大輔正綱・備後國・宗判官信房・伊豫國・新平判官資行は・美作國とぞ・聞えし・入道相國・かやうに・散々に・しちらし・わが身は・急・福原へこそ・下られけれ・同き廿日の日・攝津左衛門盛澄を・使者にて・弟門脇殿の許へ・今は・丹波の少將をも・とう〳〵・下され候へかしと・宣ひつかはされ・たりければ・宰相・さらば・有し時・ともかうも・成給はで・再物を・思はする事よと・宣へば・女房達・あはれ・宰相の・今一度・よきやうに・申させ給へかしなんど・宣ひあはれければ・宰相今は・敎盛が・世をいとふより・外の事をば・何事をか・申べき・さりながら・いづくの浦わにも・おはせよ・敎盛が・命のあらんかぎりは・はぐくむべしとぞ・宣ひける・又少將の・若公三歳に・なり給ふおはしけり・日比は・わかき人にて・いとこまやかなる・事も・おはせざりしかども・いまはの時にも・なりしかば・さすが心にかゝつてや・おもはれけん・あはれ・をさなき者を・今一度・見ばやと・宣へば・乳人いだいて參りたり・少將・ひざにおき・若君の・かみ

かきなでて・宣ひけるは・無慚や・汝七歳にもならば・元服させ・院へまゐらせんとこそ・おもひしに・今は・甲斐なし・若又・命ながらへて・おとなしく・なりたらば・成經が・後世とぶらうて・得させよと・おとなしき人に・むかつて・の給ふやうに・かきくどきて・宣へば・此若君・うちうなづき・給ひけり・さてこそ・女房達も・いとど袖をぞ・ぬらされけれ・おつかひ・今夜は・鳥羽まで・と・申ければ・少將とても・叶はぬ・ものゆゑに・今夜はこれにありて・曉と〳〵・出んと・宣へども・お使ゆるし奉らず・同き廿三日に・攝津左衛門・少將殿を・具足し奉て・福原に下り・入道相國に・此よし申たりければ・入道・少將をば・備中の國の住人・瀬尾の太郎兼康に・仰て・備中の瀬尾へこそ・くだされけれ・兼康・門脇殿の・かへり聞し・めされんずる・所をも・憚におもひければ・少將殿を・やう〳〵に・もてなし奉る・され共・少將は・いさゝか・くつろぐ心地も・し給はず・たゞ明暮・佛の御名を・唱へても・父大納言殿の・事をのみぞ・いのられける・去程に・大納言は・備前の兒島に・おはしけるが・爰はなは・舟つきなれば・びんぎ・あしかりなんとて・それより・（イこなたの）地に渡し奉る・備前・備中・兩國の堺・難波に・かせに・おき奉る・それより・少將のおはしける・備中の瀬尾へは・わづかに・五十餘町の・間なり・あ
る時少將・兼康をめして・是より・父大納言殿の・おはしける・有木の別所とかやへは・いかほどの・道ぞと・問給へば・兼康・ちかき・由を・申上ては・あしかりなんとや・おもひけむ・十二三日に・

ゆく所にて候と。申。少將こはいかに。日本は。むかし。三十三ヶ國成しを。天智天皇の御時。六十餘州には。わけられたり。されば東に。聞ゆる。奥州も。昔は。六十六郡なりしを。文武天皇の御宇。大寶慶雲に。十二郡。さきわかつて。出羽國とは。名付られたり。中比。實方の中將の。東へ流されたりしに。陸奥に。阿古屋の松といふ。名所あり。中將かれを。みんとて。國の內を。まはつて。尋られけれども。なかりければ。ちから及ばず。歸られける。道にて。老翁。一人行あうたり。中將。老翁の。袖をひかへて。やゝ御邊。みちのくに。阿古屋の松といふ。名所や。しり給ひたると。問給へば。當國の內には。候はずと。申す。中將。ふしぎや。世の末になれば。名所をも。はや。讀うしなへるに。こそとて。歸られければ。老翁。中將の袖をひかへて。やゝ君は

みちのくのあこやの松に木がくれて出べき月も(イの)出もやらぬか

と。よめる歌の心をもつて。當國の內とは。しろしめされて候か。さればそれは。いまだ彼國の。六拾六郡なりし時。よめる歌の心也。もし。出羽の國出羽の國に。もや候らんと。いひければ。まことにもとて。國に。こえてこそ。阿古屋の松をも。見たりしか。既に。十二三日は。殆都より。鎭西下向ほどござんなれ。鎭西より。はらかの。使の上るこそ。歩路。十四五日とは。きけ備前。備中。備後も。むかしは。一國なりしを。三ヶ國には。わけられたり。就中。山陽道に。それ程の。大國ありとは。きかぬ物を。備前。備中兩國の堺。いかにとほしといふ共。兩三日には。よも過じ。ちかきを。とほきに。申なすは。しらせじ。とにこそとて。のちには。戀しけれ共。問給はず。中にも。平判官康頼。法勝寺の執行俊寛僧都をば。薩摩がた。鬼界が島へぞ。流されける。丹波の少將をも。あひそへてこそ。下されけれ。中にも。康頼は。周防。むろつみと。いふ所にて。出家し。法名。性照とぞ。名乘ける。出家は許よりの。望なりければ。かうぞ。おもひつゝけ。たる

終にかくそむきはてける世中をとくすてざりし事ぞ悔しき

鬼界が島と申は。都を出て。程とほく。海を渡て。ゆく島なり。船なんども。輙かよふ事なければ。島には。人稀也。男は。烏帽子きず。女は。髪もさげず。身には。しきりに。毛おひつゝ。色黑して。牛のごとし。衣裳なければ。人にも似ず。食する物も。無れば。たゞ。殺生をもつて。先とす。しづが山田を。うたざれば。米穀の。類もなく。園の桑をも。採ざれば。絹帛の類。更になし。さつま潟とは。惣名也。昔は。鬼が。すみければ。鬼界が。島とは。名付られけり。又硫黃といふ物。多かりければ。硫黃が島とも申す。島の中には。高き山あり。山の頂には。鎭に。火燃つゝ。つねは。雷の鳴あがり。鳴さがれば。ふもとの里に。雨しげし。一日片時。露の命。ながらふべし共。見えざりけり

大納言の死去

去程に・大納言は・備前國・有木の別所に・おはしけるが・聊くつろぐ事もやと・思はれけるに・さはなくて・嫡子・丹波の少將も・鬼界が・島へなんど・聞えしかば・よろづ・心ぼそくや・思はれけん・小松殿へ出家のいとま申・御年四十三にて・うき世を餘所に・墨染の袖と・なられけるこそ・哀なれ・去程に・大納言の北方は・都北山のほとり・雲林院に・在しけるが・さらでだに・住もならはぬ・かた山里は・さびしきに・いとどしのばれければ・おのづから・過行・月日を・暮しかね・明しわづらふ・御樣なり・去程に・大納言の・年ごろ・めしつかはれける・諸大夫・侍共・いくらも・ありけれ共・あるひは・世に恐・あるひは・平家に・はゞかつて・參りちかづく・者もなし・中にも・源左衞門尉信俊ばかりぞ・つねは・まゐりける・ある時・北方・信俊を・めして・やゝ信俊や・まことや・殿は・備前の有木の・別所とかやに・おはすなる・せめて・文を奉つて・返事をなり共・見てなぐさまばやと・思ふは・いかゞあるべきと・宣ひければ・信俊・申けるは・是は・幼少より・君の・御恩あくまで・罷蒙り・候ひしかば・つねは・いさめられまゐらせし・御事の・肝に銘じ・其都までも・めされたりし・御聲の・はるかに・耳の底に・とゞまつて・かた時・忘まゐらする事も・候はず・都を・御出の時も・尤御供仕るべう・存じ・候ひつれ共・平家許され・候ねば・ちから・及候はず・今度は・縦・いかなる・うきめにも・あひ候へ・御行衞を・したひ參らせて・尋參らばやとこそ・存じ候へ，御文給はらむと・申たりければ・北方・斜ならず・喜給ひて・聽て・御文あそばしてぞ・たうだりける・信俊・御文給はつて・夜を日についで・下程に・ほどなう・備前國・有木の別所に・くだりつき・守護の・武士に・むかつて・申けるは・是は・大納言殿の・年ごろ・めしつかはれし・侍に・源左衞門尉信俊と・申者にて候・御行衞を・したひまゐらせて・尋參りたるよしを・申たりければ・難波次郎信俊が・はる〳〵と・是まで・尋下りたる・心ざしの程を・感じて・大納言殿に・此よし・申たりければ・折節大納言は・都の御事・思召出し・涙に・咽び・うつぶして・おはしけるが・信俊が・是へ〳〵と・宣へば・信俊・御そばちかう・參つて・見奉るに・おはする所の淺ましげなるも・さる事にて・はや御さまかへておはしけるを・見奉るにつけても・つきせぬ物は・涙也・大納言さて・都の事は・いかにと・宣へば・都の御事は・中々・思食・やらせ給ふべし・北御方よりの・御文とて・取出して奉る・大納言・ひらいて・見給へば・北方の・みづぐきの・跡は涙に・かきくれて・とかく・恨くどきて・かゝれたるより・をさなき人々の・いまだいとけなき・筆のすさび・なるに・戀し〳〵と・かゝれたるを・見給ひてぞ・いとゞ・せんかたなくは・思はれける・其後・五六日ありて・信俊申けるは・今しばらくも・候へ共・北方よりは・相構て・御返事・給はつて・急・まゐり上るべきよしを・仰られ候ひしに・跡もなく・行衞もなく・候はん事・大きに・恐入て・覺候へば・今度は・まづ・罷上り・やがて・參るべきよしを・申たりければ・大納言・今度・汝が・下らんまで・命いきて・見みえん事もかたかるべし・相構て・成

親が・後世とぶらうて・得させよと・宣ひぬべき・事はみな・かねてより・はやつきけれ共・せめての・したはしさにや・はる〳〵と・出たりける・信俊を・今しばしや・しばしとて・たび〳〵めしぞ・かへされける・信俊・御返事給はつて・のぼる程に・程なう・都にのぼりつき・雲林院に・まゐり・大納言殿の・御返事を・北方へ奉る・北方・珍らしき・文をも・見る物かなとて・若公・姫君・三人ひとつ所に・さしつどひ・此文を・ひらいて・見給ひて・涙に・むせび・給ひけり・文のおくに・鬢の髪を・一むら・まき・具せられたり・けるを・見給ひてぞ・はやさまかへて・おはしけるをも・しられける・安元三年八月十六日に・改元あつて・治承元年とぞ・申ける・同き廿二日に・大納言・有木の別所にて・うせ給ふ・そも最後のありさま・さま〴〵に・聞ゆ・はじめは・酒に・ぶすを・入て・進め奉りけれ共・其しるしも・なかりければ・後には・二丈ばかりありける・崖の下を・堀にほり・ひしをうゑ・上より・つきおとし奉て・失ひ奉りけるとぞ・聞えし・去程に・大納言の・北方は・雲林院に・おはしけるが・此よしを・傳へ・聞給ひて・やがて・菩提院より・聖を請じ・御年三十九にて・さまをかへ・一向大納言の・後生善所をぞ・いのられける・此北方と・申は・山城守敦方の卿の・御むすめなり・若公・姫君・北方・野邊に出ては・花を手折・澤邊におりては・水をむすび・一向大納言の・後世・菩提をぞ・祈られける・去程に・時さり・時うつり・世のかはりゆく・ありさま・たゞ天人の・五衰とぞ見えし・同き十月廿五日に・彗星東方にいづ・又は・赤氣あり・蚩尤旗共・申す・天文博士・是をうらなひ申す・内には・大兵（亂字脫歟）あるのみならず・外には又・大きなる・うれへとぞ・申ける・去程に・とし暮て・治承も・二年に・なりにけり

19140

巻第三

山門滅亡

治承二年・正月一日の日・主上・朝覲の御爲に・法住寺殿へ・行幸なつて・何事も・例にかはりたる事は・なけれ共・去年の夏・新大納言成親卿・以下・御近習の人々・其外北面の・輩共に・至るまで・多流し・失はれし・事共を・法皇やすからず・思食れければ・世の・御政をも・物うく・思召れけり・入道相國も・行網が・告知せし後は・君をもうしろめたい事に・思ひ參らせ・上には事なき・やうなれ共・下には・心要心常にして・にが笑ひて・のみぞ・おはしける・そのころ・法皇は・三井寺・の・公顯僧正を・御師範として・眞言の・秘法・こんねむ・大日經・金剛頂經・蘇悉地經・三部の秘經を・御傳受有て・同き二月五日の日・三井寺にて・御灌頂・有べき由・聞えしかば・山門大きに・憤り・昔より 代々の・御門の・受戒灌頂は・わが山にて・遂させ給ふ事・是先規也・中にも・山王の・化導は・受戒・灌頂の爲なり・しかるを・今度・三井寺にて・遂させ給はゝ・園城寺を・燒拂べしとぞ・僉議しける・法皇此由を・傳へ聞し召れて・やう〳〵に・こしらへ・宥・仰られけれ共・

例の・山門の・大衆・院宣にも・かゝはらず・いよ〳〵蜂起すと・聞えしかば・法皇是大きに・無益なりとて・急・御加行を・御結願あつて・三井寺にての・御灌頂をば・思召・とゞまらせ・給ひけり・されども・御本意なりければ・公顯を・召具して・天王寺へ・御幸なり・五智光院を・作らせたまひ・龜井の・水をもつて・五瓶の・池水と・さだめ・佛法・最初の・靈地にてぞ・傳法・灌頂をば・遂させ給ひける・さる程に・法皇は・山門の・騒動事を・やめさせ・給はんが爲に・三井寺にての・御灌頂をば・思召とゞまらせ・給ひたりけれ共・其比山門には・堂衆と・學生の間に・不快の事・出來て・合戰・度々に・及ぶ毎度に・學侶・打おとさる・山門の・滅亡・是偏に朝家の・御大事とぞ・見えし・堂衆と・申すは・學生の・召つかひける・わらんべの・法師になりたる也・もしは・中間法師原や・金剛壽院の・座主・覺尊・權僧正・治山のとき・三塔に・結番して・夏衆と・號して・學生をも・事共せず・度々の軍に・勝にけり・堂衆・師主の・命を背て・合戰の 企 あり・太政の入道殿も・院宣を・うけ給つて・紀伊國の住人・湯淺七郎兵衛宗光に・仰て・畿内の兵・二千餘人・大衆に差添て・堂衆を・責させらる・堂衆日比は・東陽坊に・候ひけるが・近江國・三箇の庄に・下向して・國中の惡黨等を・かたらひ・數多の・勢を引率して・今度は・さうおい坂の城に・たて籠る・大衆・官軍に・五千餘人にて・おしよせたり・大衆は・官軍を・先だてんとす・官軍は又・大衆を・先だてんとせし程に・おもひ〳〵心々になつて・今度の軍も・はか〴〵しうは・せざりけり・堂衆が・かたらふ所の・

惡黨と申は・諸國七道の・竊盜・強盜・山賊・海賊等なれば・欲心・熾盛にして・死生不知の・奴原なりければ・命も惜まず・攻戰・今度もみな・學生軍に・まけにけり・世するになれば・惡人は・いよ〳〵つよく・善人は又・よわく成こそかなしけれ・其後・山門いよ〳〵・あれはてゝ・十二神・所所の外は・止住の・僧侶まれ也・谷々の・講演・魔滅して・堂々の・行法も・退轉す・修學の・窓を閉・座禪の床も・むなしくせり・四敎・五時の・春のはなも・匂はず・三諦・卽是の・秋の月も・曇れり・三百餘歲の・法灯かゝぐる・人もなく・六時不斷の香の煙も・たへやしぬらん・堂舍高く聳ては・三重のかまへを・青漢の・內にさしはさみ・棟梁はるかに・秀ては・四面の椽を・白霧の間に・懸たりき・され共・今は・供佛は・嶺の嵐に・まかせ・金容を・紅漉に・うるほし・夜の月・ともし火をかゝげ・曉の露・玉をたれ・蓮座の・粧を・そふとかや・それ末代の・俗に・及んで・三國の佛法も・次第に・衰微しけるにや・遠く天竺の・佛跡を・とぶらふに・祇園精舍・竹林精舍・給孤獨園・鷲の・たかねも・此ごろは・狐狼の栖と・あれはてゝ・礎のみや・のこるらん・白鷺池には・水たえて・草のみ・ふかくしげれり・退凡・下乘の・卒都婆も・苔のみ・むして・かたぶきぬ・震旦には・天台山・五臺山・白馬寺・玉泉寺も・此ごろは・住侶・なきさまと・あれはてゝ・大小乘の・法文も・箱の底にや・朽ぬらん・我朝・愛宕・高雄の・堂塔も・昔は・軒をならべて・ありしかども・一夜の內にあれはてゝ・天狗の栖となりにけり・南都の七大寺も・此ごろは・東大・興福・雨寺の外は・殘れる・堂舍もまれ也・八宗九宗も・あとたえて・法相・三論・二宗の外は・のこれる・法文稀なり・さしも・やごとなかりし・天竺の・佛法も・治承の・今におよんで・ほろびぬるにやと・心有人の・是をかなしまずと・いふ事なし・離山しける・僧の中にや・よみたりけん・ふるき坊の・柱に・一首の歌をぞ・かきつけける

祈こしわが立そまの引かへて人なき嶺とあれやはてなん

是は・傳敎大師・當山・草創の・いにしへ・阿耨多羅・三藐・三菩提の・佛達に・祈申されたりし・其心をやおもひ出てや・よみたりけん・いと・やさしうぞ・聞えし・八日は・藥師の・日なれ共・南無と・唱る聲もせず・卯月は・垂跡の月なれども・幣帛を・捧る人もなし・緋の玉垣・神さびて・しめ繩・のみや・殘るらん・されば古き人々の・申あはれけるは・王法つきんとては・まづ・佛法さきだつて・亡ずと・いへり・されば・信濃國・善光寺も・去ぬる・三月十三日に・炎上の・聞えあり・此如來と申奉るは・むかし・中天竺・毘舍利國に・おいて・五種の・惡病・おこつて・人民悉・ほろびし時・毘舍利國の・月盖長者と・釋尊・目連・御心を・一にして・閻浮壇金にて・手づからみづから・鑄うつし・參らつさせ給へる・一樓手半の・彌陀の三尊・閻浮第一の・靈像なり・されば・佛法・東漸の・ことわりに答て・中天竺にて・五百歲・百濟國にて・一千餘年・其後吾朝・攝津國・難波の・堀江にして・しばらく・休らひ給ひしを・おほみの・あづまうど・本太善光・とり奉つて・

信濃國・みのちの郡に・安置したてまつる・治承の比迄は・五百五十餘年也

康頼祝

鬼界が島の・流人共・露の命・草葉の末に・すがりても・惜むべきにはあらね共・丹波の少將の・舅・平宰相・教盛の・所領・肥前の・鹿瀬の庄より・衣食を・常に送られしかば・俊寛も・康頼も・命をいきては・ながらへけり・丹波の少將成經・平判官康頼入道と・二人は・熊野信し(イ信心)の・人にてお はしければ・いかにもして・當島の内に・熊野三所權現を・勸請し奉りて・歸洛の事を・祈らばや といふに・俊寛は・もと・山僧なる上・不信の・人にて・山王の・御事ならば・さもありなん・權現の・御事は・あながち・信も・おこらずとて・此儀に・同心をも・し給はず・二人は・同じ心に・もし島の内に・熊野に似たる・所やあると・尋まはるに・或は・林塘の・妙なる所もあり・或は・紅錦繡の・山もあり・山の氣色・木の・こだちほかより・なほすぐれたり・南をのぞめば・海漫まんとして・雲の波・煙の浪・いとふかく・水は・碧潭を・帶(イたゝへ)たれば・彼長安・商家が・娘の・紵の德を・あらはせし・潯陽の・江・のほとりも・是には・過じとぞ・見えし・北をかへりみれば・又・山嶽の・峨々たる中より・百尺の・瀧水・懸落たる・瀧の音・ことに冷じく・松風・神さびたる・けしき・誠に・飛瀧權現の・おはします・那智の・お山に・さ(も字脱歟)似たりけり・扨こそ・やがて・そこをば・那智山とは・名付られけれ・彼みねは・本宮・是は・新宮・かれは・そんぢやう・その王子・どの王子・この王子と・王子々々の・名を申し・康頼入道・先達にて・歸洛の・事をぞ・祈られける・南無權現・金剛童子・ねがはくは・我等を・今一度・故郷へかへさせ給ひて・戀しき・者共を・みせしめ給へと・二とせが・間ぞ・祈られける・日數積つて・たちかへるべき・ふべの・王子の・那木の葉を・稻荷の社の・杉の葉には・手向つゝ・くろめに・つくとぞ・觀じける・けがらはしき・心ある時は・澤邊の・水を・こりにかき・岩田河の・清き流れと・おもひやり・たかき所に・のぼりては・發心門とぞ・觀じける・去程に・康頼入道は・日に六十六度・まゐり・御幣紙の・なければ・花を手折て・幣とさゝげ・本宮・證誠殿の・御まへにて・常はのつとをぞ・申ける・それあたりきたれる・歳次・治承二年・戊戌の年・月のならひは・十月・二月(イ十二月)・日の數・三百五十餘ケ日・吉日良辰を・撰て・かけまくも・忝・ましまします・日本第一・大靈驗・熊野三所・權現・飛瀧・大薩陲の・教令・うづの・廣前にして・信心心清淨の・誠を致し・三業相應の・志を・抽て・謹以て・敬て白す・それ・證誠大菩薩は・濟度苦海の・教主・三身圓滿の・覺主也・兩所權現は・或は・東方・淨瑠璃・醫王の主・衆病悉除の・如來たり・或は・南方補陀落・能化の主・入ちう・玄門の・大士・若王子は・娑婆世界の・本主・施無畏者の大士・頂上の・佛面を・現じて衆生の所願を・みてしめ給ふ・愛をもつて・上一人を・はじめ奉つ

て・下萬民に・至るまで・或は・現世安穩の爲・或は・後生・善處の爲に・朝には・淨水を・むすんで・煩惱の・垢を・すゝぎ・夕には深山に・すむかつて・寶號を・となふるに・感應おこたる事なし・峨々たる・峯のたかきをば・神德の・高きに・たとへ・れい〳〵たる・谷のふかきをば・弘誓の・深きに・なぞらふる・雲をわけて・のぼり・露を凌て・くだる・こゝに・利益の・地を・たのまずんばいかゞ歩みを・嶮難の道に・運むや・それ・權現の・威德を・仰ずんば・なんぞ・必しも・幽遠の堺に・ましまさむや・仍て・證誠大權現・飛瀧大薩陲・靑蓮・慈悲の・御眸を・相ならべ・われらが・無二の・丹誠を・知見して・一々に懇志を・納受せしめ給へ・まゝのみ（イまゝのみ四字ナシ）抑むすぶはやたまの・兩所權現は・おの〳〵機に・したがつて・或は・有緣の・衆生を・みちびき・或は・無緣の・群類を・濟はんが爲に・七寶莊嚴の・栖をすて・八萬四千の・光を・和げ・かりに・垂跡と・あらはれて・六道三有の・塵に・同じ給へり・されば・定業亦能轉・求長壽・得長壽の・禮拜・袖をつらね・幣帛禮奠を・捧る・事ひまなし・忍辱の衣を・かさね・覺道の花を・捧て神殿の床を・うごかし・信心の・水を澄ては・利生の・池を・湛たり・神明・納受し給はゝ・所願なんぞ・成就せざらんや・あふぎ・ねがはくば・十二所權現・おの〳〵・利生の翅を・ならべ・はるかに・苦海の・空に翔り・左遷の・うれへを・やすめて・速に・歸洛の・本懷を・遂しめ給へ・再拜々々・とぞ申ける

卒都婆ながし

去程に・二人の人々は・ある夜・本宮證誠殿の・御まへに・通夜して・よもすがら・念誦せられけるに・奥の嵐・ことに・はげしかりけるに・何方よりとも知す・木葉ふたつ・二人の・人々の・袖のうへに・吹かけたり・判官入道・何となう・是をとつて・見けるに・さしも・此間賴みを・かけ奉る・御熊野の・椰の葉にてぞ・候ひける・この木葉に・一首の歌を・むしくひにこそ・したりけれ

ちはやぶる神に祈のしげければなどか都へかへらざるべき

權現の・御納受・疑なしとぞ・覺たる・あるよ又・二人の・人々西の・御前の御まへに・通夜して・念誦・せられけるに・奥のかたより・かざり・じんじやうに・したる・小舟を・一艘・渚によせ・世にうつくしき・女房達・十餘人・舟よりあがり・鼓・調拍子を・もたせつつ・西の御前の・御まへにて・いまやうをこそ・うたはれけれ・よろづの佛の・願よりも・千手の・ちかひぞ・たのもしき・かれたる・草・木にも・忽に・花さき・實のるとこそ・きけと・是を・二三度・うたふかと・おぼしくて・かきけすやうにぞ・失られける・西の御前の・御本地・千手千眼にて・おはします・龍神は・廿八部衆の・其ひとつなれば・定て・御影向成らんと・賴もしかりし御事也・中にも・康賴入道は・都の戀しさの・切なるまゝに・千本の・卒都婆を・作り・阿字の・梵字をかき・

假名・實名・年號・月日の下には・二首の・歌をぞ・書付ける・

薩摩潟奥の小島に我ありと・親にも告よやへのしほ風

思ひやれしばしと思ふ旅だにも・猶故郷は戀しき物を

是を浦に・もつて・出・日本のかたを・ふしをがみ・南無・歸命頂禮・梵天・帝釋・四大天王・堅牢地神・惣じては・日本・六拾餘州の・大小の神祇・冥道・別しては・熊野三所・權現・海龍王等・まても・憐みを・垂させ給ひて・二の中に・一本なりとも・故郷へ・傳へてたばせ・給へと・祈誓して・奥津白浪の・よせては・かへす・たびごとに・卒都婆を・海にぞ・浮べける・卒都婆は・作出すに・したがつて・海に入ければ・ひかす・つもれば・卒都婆の・數も・つもりにけり・おもふ心や・たよりの風とも・成たりけん・又神明佛陁や・送らせ・おはしましけん・千本の・卒都婆の中に・一本はるゝ〳〵と・八重のしほ路を・ゆられきて・安藝國・嚴島の・大明神の・おまへの渚に・打あげたり・是に・康頼が・ゆかり有ける僧・一人・山陽道・修行しけるが・有時・嚴島に・參り・社壇の體を・をがみ奉るに・心も詞も・およばれず・八社の・御殿は・甍をならべ・百八十間の・廻廊あり・社頭は・海にのぞめる・所にて・鹽の・滿干に・月ぞすむ・鹽の・さす時は・奥の鳥居・內の廻廊・緋の玉垣に・至るまで・悉みな・瑠璃のごとし・又鹽のひくときは・夏の夜なれども・お前の・白砂に・霜ぞおく・それ・和光同塵の・垂跡は・いづれも・とりゝ〳〵なりとは・申せ共・いかなれば・この御神は・

海漫の・鱗に・緣をばむすばせ・給らんと・御本地を・宮人に・尋たてまつれば・娑羯羅・龍王の・第三の・姫宮・胎藏界の・垂跡とぞ・申ける・此僧いよ〳〵・たつとくおもひ・奉つて・終日に・法施參らせ・やう〳〵・日くれ・月さし出て・お前の渚に・立出漫々たる海上を・見けるに・そこはかとなく・打よせける・もくづの・中に・卒都婆のかたの見えけるを・此僧何となう・是をとつて・みけるに・薩摩がた奥の・小嶋と・かきながせる・言の葉は・康頼入道が・しわざなり・文字をば彫れ・刻み付たりければ・浪にも・磯にも・あらはれずして・世にも・あざやかにこそ・見えにけれ・此僧あはれにも又・不思議におもひ・笈のかたはらに・さし・都に・上り・康頼が・母や・妻子共の・一條の北・紫野の邊に・忍うで候ひけるに・とらせければ・老母・是を請取・涙をはら〳〵と・ながいて・あはれ此卒都婆の・もろこしのかたへも・ゆられもゆかで・何しに是までつたはりきて・ふたたびものを・おもはする事よ・とて・泣ければ・妻子共も・流されし時の・おもひより・今此卒都婆を・見けるにぞ・いとゞ思ひは・深かりける・其後はるか・叡聞に・およんで・法王・彼卒都婆を・召寄・えい覽あつて・あな無慚・此者共は・未鬼界が島に・ながらへて・有にぞとて・龍顏に御涙せきあへさせ給はず・其後・內のおとゞの許へ・つかはし・おはします・內府は又・父の禪門に・見せ奉らる・入道も岩木ならねば・世にも・哀げにこそ・宣ひけれ・其比・京中に・あやしの・賤男・賤女に・至るまで・康頼が・二首の歌とて・口ずさまぬは・なかりけり・柿本の人丸は・島がくれ行・

舟を思ひ・山邊の赤人は・葦べのたづを・ながめ給ふ・住吉の明神は・かたそぎの・思ひをなし・三輪の明神は・杉たてる門をさす・むかし・素盞烏尊の・三十一字を・始おき・給ひしより・此かた・もろ〳〵の神明・佛法・其詠吟をもつて・百千萬の・おもひをのぶ・千本の・卒都婆なれば・さこそは・ちひさくも・有けめに・薩摩がたより・都まで・傳はりけるこそ・不思議なれ

蘇武

餘に・人のおもふ事は・かくしるしありけるにや・昔・漢朝の御門・胡國を・攻させ給ひしに・始は・李陵と申・將軍の・十八歳に・成けるに・漢王の・旗をたうで・十萬騎を・さし添て・胡國へ・むけられたりけるに・胡國の軍こはく・漢王の軍・よわくして・味方程なく・追返さる・次の年・又蘇武と申す・將軍の・十六歳に・成けるに・漢王の旗をたうで・卅萬騎を・差副て・胡國へ・むけられたりけるに・今度も又・胡國の軍・こはく・漢王の軍・よわくして・味方・戰ひ負にけり・蘇武を・始て・兵千餘人を・虜にし・洞に追籠・三年といふに・取出し・蘇武を・始て・兵六百餘人が・片股を・一におしきつて・廣き野邊へ・追放つ・やがて死するもあり・その中に・蘇武一人は・死なざりけり・野べに出ては・草の實をとり・山田におりては・落穗をひろひ・澤邊の・水を・緣として・露の命を・さゝへけり・さるまゝには・たのむの雁・はじめは・蘇武に・恐けるが・次第に・みなるゝまゝに・おそるゝ事こそ・なかりけれ・あるとき・蘇武・ゆびのさきより・血をあやし・一句をかいて・雁の翅に・むすびつけ・是を漢朝に・もつて渡り・御門の御見參に・いれよやと・いひ含てぞ・はなちける・かひ〴〵しくも・田面の雁・秋は必・胡國より・都へ通ふものなれば・漢の・昭帝・上林園に・御幸なつて・御遊あり・ゆふされの空・うす曇て・何となく・物哀なる・をりふし・一行の雁飛わたる・其中に・雁ひとつとびさがつて・おのが翅に・むすび・つけたる・玉章を・くひきつてぞ・落しける・官人あやしみをなし・是をとつて・御門へ奉る・御門ひらいて・叡覽あるに・蘇武が・ほまれの・跡なれや・昔は・岩窟の・洞に・こめられて・徒に・三春の・愁歎を・送りき・今は荒田の・畝に・放たれて・むなしく・胡狄の一足と・なれり・縱骸は・此地に・ちらすとも・いふ共・魂は還て・再君邊に・仕へん・蘇子卿とぞ・書たりける・御門・あな無慚是は・一年・蘇武と・いつし者を・胡國へ・むけたりしが・未ながらへて・あるにこそ・とて・今度は・楊李と申す・將軍の・十九歳に・成けるに・漢王の・旗をたうで・百萬騎を・さしそへて・胡國へぞ・むけられける・楊李は・蘇武が・子なりけり・楊李・百萬騎を・給はつて・胡國にむかひ・責けるに・今度ぞ・胡國の軍よわく・漢王の軍・こはくして・胡國程なく・破にけり・其後・蘇武をば・廣野の中より・尋出す・片足は・きられながら・十九年の・星霜を・送り・年卅四と申すには・漢宮萬里の・波のうへ・二度・舊里へ・歸りけり・それよりしてぞ・文を雁書と・名付・つかひを・雁使

と申す也・漢家の・蘇武は・書を・鴈につけて・舊里へ・おくり・本朝の・康頼は・歌を波の・便に・故郷へ・傳ふ・かれは・雁のつばさの・一句の詩・是は・卒都婆の・面の二首の歌・かれは・漢朝・これは・本朝・かれは・上代・これは・末代さかひを・へだて・代々は・かはれ共・風情は・いづれも・おなじ・哀なりし・事共也

ゆるしふみ

入道相國の・第二の御娘・中宮とて・内裏に渡らせ給ひけるが・治承二年の・春の頃より・御惱と・聞えさせ給ひしかば・雲の上・天が下の・さわぎなる上・平家の人々・ことにさわぎ・あはれけり・醫家・藥を・つくし・陰陽・術を・きはむ・諸寺に・御讀經・始て諸社へ・官幣を・奉らる・され共・御惱・たゞにも・渡らせ給はず・御懷姙と・聞えさせ給ひしかば・いつしか・引替たる・御喜にてぞ・わたらせ給ひける・主上・今年・十八歳・中宮・廿二に・ならせ給ふまで・王子・一ところも・出來させ給はず・哀今度・王子にて・渡らせ給はゝ・いかばかりか・めでた・からましと・たんだ今・王子・御誕生なんどの・あるやうに・みな人・あらまし事をぞ・申されける・星宿・佛・菩薩に・つけては・御産・平安・貴僧高僧に・仰ては・王子誕生とぞ・禱申されける・同き・六月一日の日・中宮・御着帶あり・仁和寺の宮・是を御加持あり・座主の宮は・七佛・藥師の法・幷に・變成・男子の・法をぞ・修せられける・后は・月の・かさなるに・隨て・御身をのみ・くるしう・せさせ給ひて・供御をも・つや〳〵・聞しめされず・ひすゐの・御かんざしは・御めのうへに・所せく・おもやせさせ給へる・御ありさま・猶いたはしき・御さまなり・さるまゝには・漢の・李夫人・昭陽殿の・病の・床に伏・唐の・楊貴妃・李花・一枝・春の・雨を・帶・芙蓉の・風に・しをれつゝ・女郎花の・露おもげなるより・なほうつくしき・御さま也・かゝりける・折をえて・こはき・御物憤ども・とりいれ・參らせ・御驗者・しきりなり・まづは・讃岐院の・御靈・宇治の・惡左府の・憶念・成親卿・西光法師・父子が・死靈・別しては・鬼界が島の・生靈・なんどぞ・うらなひ申ける・きくも世に・おどろおどろしう・おそろしかりし・御事共也・近年・不慮なる・事も・是偏に・御靈の・故也とて・讃岐院の・御追號あつて・崇德天皇と・號し・宇治の・惡左府の・贈官・贈位・太政大臣・正一位を・つかはさる・勅使は・小内記・維長とぞ・聞えし・件の・墓所は・大和國・添上郡・河上の村・般若野の・五三昧なりしを・保元の・昔ほりおこして・捨られし・後は・死骸・道の邊の・土となつて・年々に・春の草のみ・茂れり・しかるを・今勅使・たづね下つて・勅命を・授られけれ共・亡魂いかゞ・思はれけん・覺束なしとぞ・人申ける・昔も怨靈は・かくおそろしき・事にのみこそ・申傳へたれ・花山院の・御世を・いとはせ給ひたりしは・基方の・民部卿が・靈・冷泉院の・御物ぐるはしう・三條院の・御めも・御覽せ・ざりしは・寛算・供奉が靈とかや・ゐ

かみの内親王をば・崇道天皇と・號し・早良の・廢太子を
號しかみの内親王を）かゝりける・折をえて・門脇の・平宰
ば皇后の職位に補す
やらん・承候へば・中宮・御産・平安の・御驕の・御
なにと申共・大赦に・過たる・事は候まじ・さらんにとつては・鬼界が島の・流人共・召還されたら
んずる程の・功徳・善根は・又何事か・候べきと・申さ
色を・うかゞうて・こそ・み候はめとて・或時大臣・父の御前に・おはして・中宮・御産・平安の・御
驕の御爲には・なに〳〵と申す共・大赦に・すぎたる事は・候まじ・さらんに・とつては・あの・丹
波の少將が事を・宰相の・いたう・歎き・申され候が・まことに・不便に候・成親卿が・死靈を・な
だめられんに・つけても・生て候・丹波の少將を・召還されたらんずる程の・功徳・善根は・何事か・
候べき・人の思ひをやめさせ給はゞ・御願も・かならず・成就し・人の・ねがひを・みてさせ給はば・中宮やがて・御産・平安王子・御誕生あつて・家門の・榮花・彌〳〵ひらけ候べしと・申されければ・入道相國・日比は・さしも・横紙を・やられたりしが・今度は・おもひの外に・やはらぎ・給ひて・丹波の少將をば・召還すべき・ごさんなれ・あの・俊寛や・康頼法師が・事は・いかにとの給へば・大臣・それも・同罪にて・ひとつ配所に・候へばとも・一人も・殘されたらんは・中々〳〵・罪業の・因縁なるべう候と・申されたりければ・入道・いや〳〵・康

頼法師が事は・さもやありなん・俊寛は・隨分・入道が・口入によつて・人と成たる・者ぞかし・し
かるに・東山・鹿の谷に・城郭を・かまへて・淨海が・事をおろかに・いひけるときくが・奇怪な
れば・俊寛に・おいては・思ひもよらずとぞ・の給ひける・其後・大臣宰相の・許に・おはして・丹
波の少將をば・めし還さるべきにて候也・御心やすく・おぼしめされ候べしと・宣へば・宰相斜
ならず・喜給ひて・敷盛が・御一家のかたはしに・なり參らせたる・しるしにや・などか・この事・
今一度・よきやうに・申さるべきと・おもひてやらん・かれに・相具・せさせて候ものゝ・敷盛が・か
たを見候・たびごとに・涙に咽候が・餘に不便に存じて・あながちに・かくは申候也・大臣それ
はさぞ・おぼしめされ候らん・子はたれとても・かなしければ・あの・成親卿が事をも・隨分とり
申候ひしかども・歸洛を・またすして・配所にて・うせ候ひぬる上は・力及ばず・いきて候・丹波
の少將に・おいては・御心やすく・おぼしめされ候べしと・宣へば・宰相・手を合てぞ・よろこば
れける・去程に・鬼界が島の・流人とも・既に・召還さるべきに・定りしかば・入道相國より・御ゆ
るし文あり・宰相の許よりも・別して・喜の・使をぞ・つかはしける・使は・丹左衞門尉・基康とぞ・
聞えし・七月下旬に・都をたつ・相構て・夜を日に・續で・下るべしとは・宣へ共・心に任ぬ・海路
なれば・長月廿日比にぞ・薩摩がた・鬼界が島には・着にける・お使・舟より・上り・是に・去年都
より・三人・流され給ひし・丹波の少將殿や・平判官康頼・法勝寺の・執行・俊寛僧都の・御房の・

おはする・所は・いづくやらんと・聲々に・よばはつたりければ・二人の・人々は・例の・熊野詣し
て・おはせざりけり・僧都一人・柴の庵に・おはしけるが・聞給ひて・はしる共なく・たをるゝ共な
く・いそぎ・舟つきに・おはして・是こそ去年・都より・流されし・俊寛よ・そも何事ぞと・宣へ
ば・お使・別の子細にては候はず・都よりの・御ゆるし文候とて・頸にかけたる・文袋より・取出
して・奉る・僧都・斜ならず・喜給ひて・急・柴の庵に・かへり・此文を・ひらいてみ給へば・重
科は・遠流に・めんず・はや〳〵・歸洛の・おもひをなすべし・中宮・御産・平安の・御禱の御爲に・
大赦・行はるゝに・よつて・鬼界が島の・流人・丹波の少將成經・平判官康頼・二人・赦免と・ばか
りにて・其中に・僧都一人・もれにける・こそかなしけれ・裏にもや・あるらんとうらを・みなふに
もなし・又禮紙にもや・あるらむと・禮紙を見給ふにも・なかりけり・去程に・二人の・人々も・や
うやう・下向せられたる・少將の・よまれけるにも・康頼が・よみけるにも・二人赦免と・ばかりに
て・三人とは・いれられず・僧都・こはいかに・つみも・同じつみ・配所も・ひとつ・所ぞかしと・う
きも・しづみも・ともにこそ・行はるべきに・されば・執筆の・あやまりかや・又は・平家の・お
ぼしめしわすれかや・冥見は・こはいかに・し給ひつる・事ぞや・とて・文を・はしより・おくへ・ま
き・奥より・端に・巻かへし・天に仰ぎ・地にふし・悲み給へど・かひぞなき・されば・是は・夢か
や・うつつかや・うつゝかと・おもはんと・すれば・さながら・夢のごとくなり・去程に・二人の・人

人は・喜申の・熊野詣をぞ・し給ひける・僧都・日來は・おぼろけにても・參り給はぬ・人の・少
將の袖に・すがり・康頼入道が・たもとにとりつき・泣々まゐり給ひ・相構て・此事人のうへと・おも
ひ給ふべからず・俊寛が今・かゝるうきめに・あふ事も・故大納言殿の・よしなき謀叛の・ゆゑぞ
かし・都までと・申さばこそ・かたからめ・此舟に打のせて・九國の・地まで・つけ給ひて・其後は・
捨置・給べしと・かきくどきて・宣ひければ・少將・それは・さぞおぼしめされ候らん・成經・都
を出・はる〳〵と・八重の・鹽路を・漕過て・かゝるうきしまに・流され・一日片時・ながらふべし
とは・存せざりしかども・露の命・消やらで・いまめし還さるゝ・うれしさも・さる事にては・候へ
共・一人・殘され給ふ・いたはしさ・申ばかりも・候はず・この舟に・打のせ・奉つて・九國の地ま
で・つけまゐらせん事・いとやすき御事にては・候へ共・お使も・いかにもかなふまじきよしを・申
候うへ・都よりも・御ゆるされも・候はざらんに・三人ともに・島をば・出たりなんど・聞え候ひ
ては・中々〳〵あしう候べし・今度はまづ・成經・都にのぼり・人々にも・よきやうに・申あはせ・又
は入道相國の・氣色をも・うかゞうて・やがて人を・むかひに奉るべし・相構て・よしなき事共・思
召たゝんで・都のつてを・まち給ふべしなんど・やう〳〵に・こしらへ・宣ひけれ共・僧都はいさゝか・
くつろぐ心ちも・し給はず・去程に・順風・出きに・しかば・舟をいだす・少將の・形見には・よる
の衣・康頼入道が・形見には・一部の・法花經を・とゞめ・おきたりけれ共・僧都は・なほなぐさむ・

心ちも・し給はず・かねてより・舟にのつては・おり・おりては・のり・あらまし事をぞ・し給ひける・お使・御ゆるされも・候はざらんに・なにしに・お舟には・めさるべきとて・あらけなく・おひおろし・奉つて・やがて舟をば・出しけり・僧都は・猶も・舟の・纜に・取つき・腰になり・脇になり・たけの及ぶ程は・ひかれて・おはしけるが・たけも・およばぬ程にも・なりしかば・又むなしき渚に・およぎかへり・をさなき者どもの・母やめのとを・したふやうに・是・具して・ゆけや・われのせて・ゆけやとて・をめきさけび給へ共・こぎゆく・舟のならひにて・跡は白浪ばかりなり・今いくほども・へだたらね共・涙にくれて・見えざれば・奥の・かたをぞ・まねかれける・かの・松浦さよ姫が・唐舟を・したひつゝ・ひれふりたりけんも・これには・過じとぞ・みえし・少將は萬に・情ある人にて・おはしければ・定てよきやうにぞ・申されんずらんとて・そのせに・身をも・投ざりし・心の程こそ・うたてけれ・僧都・其夜は・柴の庵へも・歸給はず・浪に足打あらはせて・其夜は・そこにて・泣あかす・かのさうり・そくりとて・いつし人・かいかんざんにはなたれて・むなしくなりたりしも・是には過じとぞ・みえし・去程に・二人の人々は・浦づたひ・島づたひして・十月廿日頃には・肥前國鹿瀬の庄にぞ・つき給ひける

あひ

宰相・都より人を下して・年の內は・波風もはげしければ・しばらくそれにて・湯をも浴・身をもいたはり・給ひて・春になりて・上り給ふべしと・の給ひつかはされたりければ・二人の人々・其年をば・肥前國かせの庄にてぞ・おくられける

御産の巻

去程に・都には・同き・十一月・十二日の・寅の刻計より・中宮・御產の氣・わたらせ給ふとて・京中・六波羅・ひしめきけり・去月・廿七日より・折々・其氣・渡らせ・給ひけるが・殊には・けさの・寅の刻ばかりより・とりたてたる・御事共にてぞ・渡らせ給ひける・御產所は・六波羅・なりければ・法皇も・御幸なる・其外・大臣・公卿・殿上の・侍臣・藥醫頭・典藥頭・陰陽頭・みな我も〳〵と・馳參らる・入道殿も・二位殿も・胸に手を・おき給ひて・人の參つて・物申す時は・たゞ何事も・よきやうに〳〵と・計ぞ・宣ひける・さり共・淨海が・軍場なんどへ・出たらんには・是程にしも・臆せじ物をとぞ・後には・宣ひける・小松殿は・なに事にも・騷給はぬ・人にておはしければ・はるかに・日たけて後・御馬十二疋・ひかせつゝ・嫡子權亮・少將維盛・次男・越前少將資盛・以下の・君達の車・やりつゝけさせ・世にも・のどやかげにてぞ・おはしたる・大臣まゐりも・はて給はず・砂金・千兩・南鐐・百銀・劒七・御衣・四十領・廣蓋に・おいて・出されたり・大方・きら〳〵しう

ぞ・みえし・五條の・大納言・國綱卿も・御馬二疋・進上せらる・大臣の・御馬・參らせられ・ける事は・且は・きさいの宮の・御せうとなるうへ・父子の・御契約・あれば・ことわりや・國綱卿の・御馬の・參らせられやうは・志の至りか・又は・德の・餘かとぞ・人々・かたぶき・あはれける・小松殿の・御馬・參らせられける事は・いんじ・寬弘に・一條院の后・上東門院・御産の時・御堂殿の・御馬・參らせられたりし・其例とぞ・聞えし・又大赦・行はれける事は・大治・二年・九月七日の日・鳥羽院の・后・待賢門院・御産の時・ゆるし物・おこなはれて・重科の者・三百餘人・寬宥せられたりし・今度其例とぞ・聞えし・神社には・伊勢・石清水・を・始奉つて・廿二社に・官幣あり・又神馬を・參らせられける事も・賀茂を・はじめ奉つて・安藝の・嚴島に・至るまで・廿三社とぞ・聞えし・佛寺には・東大・興福・延曆・園城寺を・始として・四十二ヶ所へ・御誦經物の・お使には・宮の侍の・中に・有官の・者共・承はつて・評紋の・狩衣に・帶劍したる・者共が・東の・中門より・出て・西の中門へいる・色々の御誦經物・御劍・御衣・もち・つゞいたる・ありさまは・めづらしかりし・見物なり・佛所の・法印に・仰ては・護身・等身の・七佛・藥師の像・幷・五大尊の・像を・作りはじめらる・仁和寺の宮・孔雀經の法・寺の・長吏・金剛童子の法・座主の宮・七佛・藥師の法・其外・一字金輪・五大虛空藏・五壇の法・六字加輪・八字文殊・普賢延命の法に・至るまで都て・大法・秘法・殘る所なく・修せられけり・護摩の烟は・御所中に・みち〳〵・鈴の聲は・雲を響し・修

法の聲には・身の毛よだつ・御驗者には・房覺・性運・兩僧正・春堯法印・豪仙・實專・兩僧都・以下の・御驗者達・年來所持の本尊・本寺・本山の・三寶・としごろの・行劫をもつて・おの〳〵僧伽の句共を・あげ汗をながし・黒けぶりをたてゝ・もみあはれたる・けいき・いかなる・御物怪なり共・おもてを・むかふべし共・みえざりけり・其外・顯はるゝ所の・御物氣共をば・明王よりましの・縛にかけて・せめふせ〳〵・踊くるふ・ありさまは・おそろしなん共・おろかなり・法皇は・今熊野へ・御幸なるべきにて・御精進の御次手・なりければ・御几帳ちかう・御座あつて・千手經を・打あげ打あげ・あそばされけるにぞ・さしもをどりくるふ・御よりまし共も・しばらく・ばくを・しづめて・聽聞仕りける・なによりも・法皇の・仰ける御詞こそ・忝はうけたまはれ・縱いかなる・御物の・け・なり共・この老法師が・かくて候はん程は・いかでか・輒近付奉るべき・但讃岐院の・御靈ばかりなり・それも御追號の後は・御うらみあるべし共・存せず・其外・次ぎさまの・者共は・朝恩をもつてみな・人と成たる・ものぞかし・縱報謝の・心をこそ・存せず共・豈障碍を・なさんや・とう〳〵・まかり退・候へとて・女人・生產しがたからん・時に・のぞんで・邪魔・邪障して・苦・忍びがた・からんときも・心を致て・大悲呪を・稱誦せば・鬼神退散して・安樂に・生せんと・唱させ給ひて・御數珠・さら〳〵と・もませも・果させ・給はぬに・御產・平安のみ・ならず・王子・にてぞ・まし〳〵ける・中にも・本三位の中將重衡卿の・末其比・中宮の亮にて・御前に・候はれけ

るが・御簾の内より・つつと出・御産・平安のみならず・王子・御誕生候・ぞやと・たからかに・申されたりければ・法皇を・はじめ奉つて・各の・助衆・數輩の・御驗者に・至るまで・一同に・あはやと申あはれける・聲々の・はるかに・門外までも・のゝめいて・しばしは・しづまりも・やらざりけり・入道相國・あまりの・うれしさにや・聲をあげてぞ・なかれける・喜泣とは・是を申べきにや・法皇は・今熊野へ・御幸なるべきにて・はるかの・門前に御車・立させられたりければ・急・御退出あり・入道・あまりの・めでたさにや・富士の・綿千兩・おつさまに・法住寺殿へ・進上せらる・法皇・是大きに・無益也とて・急・御驗者の・中へぞ・下されける・其後・法皇は・今熊野へ・御幸なる・七日・御參籠の内に・御庵室のまへに・今度・法皇の・六波羅にての・御驗者の・御請用・ほこりあるべしといふ・落書をぞ・立たりける・いかなる・あどなしものゝ・しわざにてか・ありけんを・かしかりし・事共也・其後・小松殿・御産所へ・まゐらせ給ひ・金銭・九十九文を・王子の・御枕がみの・下に・おき・桑の弓・蓬の・矢を・もつて・天地四方を・射・天をもつては・父とさだめ・地をもつては・母と定む・御心には・天照太神・いりかはらせ給へ・御壽命長遠は・昔の・彭祖・東方朔が・齡を・保たせ給へと・祝まゐらつさせ・給ひて・やがて・御臍の緒・切參らつさせ・給ひけり

公卿揃（あひ）

御乳つけには・平大納言・時忠卿の・北方・帥の佐殿ぞ・參られける・前の右大將宗盛卿の・北方こそ・參らせ・給ふ・べけれ共・去ぬる・七月に・逝去のうへは・大將・大納言・兩官を辭し・申されて・宗盛卿は・籠居とぞ・聞えし・あはれ・今度・出仕あらば・兄弟・左右に相並び・給ひて・いかばかりか・めでたからまし・宗盛の籠居・ほいなかりし・事共なり・されば・古き人々や・局の・女房達の・申あはれけるは・あはれ・故女院・だにも・渡らせ給はんには・是程しも・御かるゝし・き・御事は・よも渡らせ給はじ・太上法皇の・御驗者・上古にも承らず・又末代にも・あるべしとも・存せず・今度の・御産に・めでたかりしは・法皇の・御驗者・優成しは・小松殿の・ふるまひ・思はざりしは・「入道相國の・よろこび泣・ほいなかりしは・宗盛の・籠居・又あやうかりし事は・王子誕生の・ときは・御殿の棟より・こしきを・南へころばかす事の候を・姫宮・誕生の・やうに・聞なして・北へむけて・ころばかす・人々あれは・いかにととよまれて・又からげ・なほして・南へおとし・なほしたりしぞ・是希代の・あやまりなる・又をかしかりし事には・掃部頭・時晴と・申す・陰陽師の・千度のおはらひの・役にめされて・參りけるが・所從なん共・ほく少なりけるに・人のおほき事は・稻・麻・竹・葦の・ごとし・膝をよこたふるに・及ばねば・役人の・參り候・〳〵とて・大勢の中を・おしわけ〳〵・參る程に・いかゝは・したりけむ・右の・履を・ふみぬかれ・うつぶして・とらんと・しけるを・冠をさへに・つきおとされて・束帯・たゝしき・

老者の・もとゞりはなちにて・ゆるぎ・出たりけるにぞ・みな人・腹のわたをば・きられけり・時晴・わが身のうへとは・露しらず・かゝる・めでたき・御産所に・いかなる・けうけいの・出來て候・やらんとて・あきれて・たつたりければ・こらへかねたる・わかき人々は・みな閑所へ・出てぞ・わらはれける・陰陽師は・反陪とて・足をだにも・あらけなく・ふまずとこそ・うけたまはりつるに・其時は・何共思はざりしか共・後にこそ・おもひ合する事ども・多かりけれ・今度・不參の・公卿には・まづ・前の右大將宗盛・大宮の・大納言隆季・七條の修理大夫信隆卿を・先として・以上十三人とぞ・聞えし・此人々は・次の日・烏帽子・直垂にて・御喜申しに・西八條へ・參られけるとぞ・聞えし・去程に・御産所に・參りこもらせ給ふ・人々には・關白・松殿・妙音院の・太政大臣師長・大炊・御門の・左大臣經宗・月輪の・右大臣兼實・小松の內大臣重盛・後德大寺の左大將實定・源大納言定房・三條大納言實房・藤大納言實國・五條大納言國綱・中御門の・中納言宗家・池の中納言賴盛・花山院の・中納言兼雅・別當忠親・按察使資方・源中納言通親・左京大夫長敎・三位の中將知盛・新三位實清・以上・卅三人・右大辨の・外は・皆・直衣也

賴豪

其後內裏には・今度の・御産の・御驗りの・貴僧・高僧達に・勸賞行はれけり・仁和寺の宮は・東寺修造・並に・五七日の御修法・大驗の法・灌頂の・興行あるべしとて・御弟子・圓良法眼を・法印に擧せらる・座主の宮は・二品・並に・牛車を・申させ給ひければ・御弟子・覺譽僧都を・法印に・擧せらる・昔白河院の后は・京極の大殿の御娘なり・主上いかにもして・后腹に・王子・あらまほしうおぼしめされければ・其比・三井寺に・有驗と聞ゆ・實相房の・阿闍梨賴豪を・めされて・汝・后腹に・王子・祈出して・參らせよ・勸賞は・乞によるべしと・仰ければ・賴豪畏つて・承はり・御前を・つい立て・三井寺にかへり・持佛堂に・閉籠り・百日肝膽を・碎て・祷申されたりければ・其しるしにや・后程なう・御懷妊あつて・承保二年・七月九日の日・おぼしめす・さまに・御產・平安・王子・御たんじやうありとかや・主上・斜ならず・御感あつて・やがて・賴豪を・めされて・御願はたやすく・成就しぬ・さて汝が勸賞は・いかにと仰ければ・賴豪かしこまつて・承はり・三井寺に戒壇建立仕るべきよしを・申す・主上こはいかに・一階僧正なんどをも・望申さんするかと・おぼしめされたれば・存外の申やうかな・われ皇子を・まうけ參らせて・祚をつがしめんと・おぼしめすもたゞ海內無爲を・おぼしめす故也・汝が所望・達せば・

兩門・合戰して・天台の・佛法・悉亡びなんず・露思召・よらぬ御事也とて・終に聞し召も・入させ給はず・賴豪・もつての外にいかれる・氣色にて・御前を・ついたつて・三井寺にかへり・持佛堂に・閉こもり・偏に・干死に・せんとぞしける・主上此由をつたへ・聞しめされて・江帥匡房卿の・いまだ其比・美作守にて・おはしけるを・めされて・汝は賴豪に・師檀の・契約あんなれば・三井寺に・行むかひ・やう〳〵に・こしらへて・みよかしと・仰ければ・匡房・畏つて承はり・急・三井寺に・行向ひ・勅定の趣・いひ含けるに・賴豪とみにも・出やらず・やゝあつて・ふすぼつたる・道場の・内より・おそろしげなる・聲をもつて・君子に戲の・言葉なし・綸言・汗の・ごとしとこそ承はれ・申旨を・御承引なからんに・おいては・わが綺出し奉りたる・王子なれば・とり奉つて・魔道へこそ・ゆかんずれとて・其後は・物をも申さず・匡房卿・大きに驚き・急内裏に・歸り參つて・此よしを・奏し申されたりければ・禁中もつての外に・騷せ給ふ・程こそありけれ・十四日と申には・賴豪終に・干死にこそは・したりけれ・其後・皇子・賴豪が・靈とて・常は・なやませ・給ひしがある時は・鈴持たる・老僧・又あるときは・水がめ持たる僧の・王子の・御枕ちかうまゐると・おぼしき時は・御惱いよ〳〵・おもらせ給ひしが・御とし四歳と申し・承曆二年・八月六日の日・終にかくれさせ給ひけり・敦文の親王是也・主上斜ならず・御歎あつて・其比の西京の座主・良信大僧正の・いまだ其ころ圓融坊の僧都にて・おはしけるを・めされて・適々まうけ・參らせたる・皇子を・失ひ・奉りたる由を・仰ければ・圓融坊の・僧都・畏つて承はり・昔より・代々の・御門の・御願は・我山にてこそ・遂させ給ふ・御事にては候へ・されば九條の右丞相も・天台の慈惠僧正に・師檀の契約候ひてこそ・冷泉院の・御產も・平安には渡らせ・給ひけむなれ・我山の佛法・山王の・御威光・今にはじめぬ・御事なりとて・急登山して・持佛堂に閉籠り・肝膽を碎て・祈申されたりければ・其しるしにや・后程なう・御懷妊あつて・承曆三年・十二月廿九日に・おぼしめすさまに・御產・平安・皇子・御誕生ありとかや・八歳より御位に・つかせ給ひ・御在位廿一年・さしも賢王・聖主の・聞え渡らせ給ひしが・是も・賴豪が靈とて・折々なやませ・給ひしが・御年廿九と申し・嘉承二年・七月十九日に・終にかくれさせ給ひけり・堀河の天皇是也・昔も怨靈はかく・おそろしき・事にのみこそ・申傳へたれ・されば今の・鬼界が島の・俊寬をも・ともにめしこそ歸されんずらめ・おそろし〳〵とぞ・人申ける

大塔建立

入道相國の・第二の御娘・中宮とて・內裏に・渡らせし・入道相國夫婦共に・外祖父・外祖母と・いはれ・天下をわがまゝにせむと・おもはれければ・日吉の社へ・百日詣なんどして・籠申されけれども・其しるしも・なかりければ・さらばわが崇奉る・

安藝の嚴島へ・申さんとて・三年月詣なんどして・祈申されたりければ・其しるしにや・后程なく御懐妊あつて・おぼしめすさまに・御産・平安・王子・御誕生ありとかや・抑入道相國の・安藝の嚴島を・信じ始られける・故をいかにと申に・そのかみいまだ・安藝守たりし時・鳥羽院の御願・高野の大塔建立あるべしとて・安藝・周防・長門・三ケ國を給はつて・高野に上り・大塔建立六年に・ことをへて後・きよ盛・奥の院に參り・通夜して・念誦せられけるに・夢うつゝ共・わかざるに・額には・四海の波を・たゝみ・眉には・霜を垂・ふたまたなる・かせ杖にすがつたる・老僧一人出させ・給ひ・清盛に對面あつて・やゝ遙に・御物語あり・われ此山に・密宗を・ひろめて・年久し・大塔建立・事終つたり・天下に又も・候まじさらむにとつては・越前の・氣比の社と・安藝の嚴島の社は・ともに・兩界の・垂跡にて・わたられ給ふ・中にも・金剛界の・垂跡・越前の・氣比の社は・めでたう榮て・ましませ共・胎藏界の垂跡・安藝の嚴島の社の・廢壞して・久しくなきが・ごとくに・候を是をも申て・修造し・給へかし・さだにも候はゝ・御邊の官・加階においては・天下にならぶ・者もあるまじきぞとて・たゝれければ・清盛不思議の思ひをなし・人をつけてみせられければ・一町計は見え給ひて・其後・みえ給はず・使かへつて此由・申たりければ・清盛たつとや・誠の・大師にて・ましけるぞや・其儀ならば・娑婆世界の思出・一せんとて・壇にかへり・兩界の・曼陀羅を・墨繪にこそ・寫させられけれ・西曼陀羅をば・淨妙法印と申す・繪師に・うつさせらる・東曼陀羅をば・清盛みづからかゝれけるが・中にも八葉の・中尊の寶冠をば・かうべより血を・出してかゝれける・とぞうけたまはる・清盛宮こに・上り・院の御所に・參つて・此由を奏し・申されたりければ・法皇・斜ならず・御感あつて・さらば安藝の嚴島をも・修造せよやとて・安藝・周防・長門・三ケ國へ・又任を・のべられけり・清盛承はつて・嚴島に渡り・鳥居を・立かへ・社々を作り改らる・百八十間の廻廊・事故なう遂て後・清盛・明神の御前に參り・通夜して・念誦せられけるに・夢うつゝとも・わかざるに・御寶殿の・御戸・おしひらき・內より十二三ばかりなる・世にうつくしき童子一人・出させ給ひ・やゝ・汝・天下をば是をもつて・治べしとて・銀にて・ひるまきしたる・白柄の小長刀を給はると見て・打驚いて見給へば・則枕にぞ候ひける・清盛やがて神樂を・參らせられければ・明神ないしに・乘移らせ給ひて・汝しれりや・忘れりや・ある聖をもつて・いはせし事は・但惡行あらば・子孫までは・かなふまじとて・明神あがらせ給ひけり・有がたかりし御事なり・同き・十二月・十六日に・主上御產所へ・行幸なる・やがて還幸とぞ・聞えし・おなじき・廿日の日・王子親王の・宣旨を蒙らせ給ふには・小松の內大臣重盛公とぞ・聞えし御產ありて後・わづか卅餘日・人いつしかも也とぞ申ける・日數ふれば中宮內裏へ・參らせ給ふ・去程に年暮て・治承も・三年になりにけり

少將の都がへり

治承三年・正月十日の日・丹波の少將成經・平判官康頼入道と・二人は・肥前國・鹿瀬の庄をたつて・宮古へとは・急れけれ共・餘寒もいまだはげしくて・海上もいたくあれければ・舟の内にて日數を送り・衣更着廿日比にぞ・備前の兒島には・着給ひける・それより・地に渡り・有木の・別所に尋いり・父大納言殿の・住給ひし所におはして・見給ふに・あやしの賤が・家なれば・葎茂りて垣をとぢ・松の葉つもりて・軒をうづむ・庵のうち木葉かきしく・宿なれや・ふるき障子・竹の柱に・書おき給ひし・筆のすさみを・見給ふに涙せきあへ給はず・安元三年七月廿日の日・出家・同き廿五日に・信俊下向とも・かゝれたり・扨こそ源左衞門尉・信俊が參りたるをも・知れけれ・そばなる壁には・三尊來迎・たよりあり・九品往生・疑なし共・かゝれたり・さすが此人・欣求淨土の望も・おはしけるにやと・限りなき・歎の中にもいさゝか・頼もしくぞおもはれける・哀人の・後の世までの・形見には・手跡に過たる・物あらじ・ろてんかわかず・ふせいなほおなじ・ぬしはおはせねども・はかなき跡は・うせざりけり・かきおき給はずば・いかでか・是をも・知べきとて・康頼入道と・二人・讀てはなき・泣ては讀ぞ・し給ひける・其後墓を・尋奉るに・東へ十餘町・行て松の一村ある中に・甲斐々々しう・壇をつきたる事もなく・辛都婆一本も・見えざりけるに・少將土のすこしたかき所に・袖かき合・生たる人に向て・物を申やうに・かやうに此世にも・渡らせ給はず・遠き御まもりとならせ・給ひたる御事をば・島にて幽に傳へ承はつては候へども・心にまかせぬうき身なれば・急で參る事も候はず・成經都を出・はるゞゝと八重の・しほ路を漕過て・かゝるうきしまに流され・一日片時ながらふべしとは・存せざりしか共・露の命消やらで・今めしかへさるゝうれしさも・さる事にては候へども・おなじうは・いきて此世に渡らせ・給ふをみ參らせても・候はゞこそ・命ながらへたる甲斐も候はめ・是までこそいそがれつれ・今より後は・急べしとも・おぼえずとて・かきくどいてぞ・なかれける・誠に存生の時ならば・先故大納言殿こそ・いかにやとも宣ふべきに・生を隔つるならひ程・口惜かりける・物あらじ苔の下には・誰かはこたふべき・たゞ嵐にさわぐ松のひゞき計也・其夜は康頼入道も・二人墓のまはりを・行道し・明ければ・墓に壇ゆゝしう・つかせつゝ・釘貫しまはさせ・墓の前には・假屋をうつて・僧をあまた請じ奉り・七日七夜が間・不斷念佛申させ・わが身は經をぞ・かゝれける・結願には・大きなる・卒都婆をたて・過去聖靈・出離生死・證大菩提と・かきとゞめ・年號月日下には・孝子成經とぞ・かゝれたる・三世十方・佛陀の・聖衆も・あはれみ給ひ・亡魂尊靈も・いかにうれしとおもはれけむ・年さり年來れ共・忘がたきは・撫育の昔の恩・夢のごとく・幻のごとし・つきがたきは・戀慕の今の涙也・されば・あやしの・しづ山賤の・心なき物までも・いかなる野のすゑ・山の奥にも・子をばば・持べかりける・ものかなとて・皆なみゐて・袖をぞぬらしける・其後少將・墓の前に・畏り・今しばらくも候ひて・念佛の劫をも・つむべう候へ共・都にまつらん人の・覺束なくも・候らんに・又こそ參り候はめと・亡者に・暇申つゝ・泣々そこを

ぞ・たゝれける・さこそは・大納言も・草の陰にて・名殘をしうや・おもはれけむ・おなじき・三月十六日に・少將鳥羽に着給ふ・大納言の・山莊すはま殿とて・鳥羽にあり・住あらして・年經にければ・築地はあれども・覆もなく・門はあれ共・扉なし・庭に立入見給へば・人跡たえて・草深く・池の汀を・みまはせば・秋の山の・春風に・白浪しきりに・おりかけて・紫鷺・白鷗・逍遙す・興せし人の・戀しさに・つきせぬものは・涙也・家はあれ共・欄門おちて・蔀・格子も・たえてなし・爰は・大納言殿の・住給ひし所・此障子をば・かうこそあり給ひしか・此つま戸をば・かうこそ出合給ひしか・この木をば・みづからこそ・栽おき・給ひしかなんど・父のことを・事に觸て・世にも・なつかしげにこそ・宣ひけれ・彌生・中の六日・なれば・花はいまだ・餘波あり・楊梅桃李の・梢こそ・をり知がほに・色々なれ・昔のあるじは・なけれ共・春を忘ぬ・はなやかなれや・少將花の下に・立よつて・桃李ものいはず・春いくばくか暮ぬ・烟霞跡なし・昔誰か栖し故郷の花の物いふ世なりせば・いかに昔のことをとはまし・

此ふるき詩歌を・詠せられけるにぞ・康頼入道も・そゞろに涙を・流しつゝ・墨染の袖をぞ・ぬらしける・くるゝ程とは・おもはれけれ共・夜更るまでこそ・おはしけれ・あれたる宿の・ならひにて・ふるき軒の・いたまより・もる月影は曲ぞ・なき・けいろうの山・あけなんとすれ共・家路は・猶もいそがれず・さてしも・有べきならねば・涙をおさへて・出られけり・明ければ・都より・面々に・乘物ども・鳥羽の邊まで・つかはされたりけれども・康頼入道は・少將の・御名殘を惜奉つて・ひとつ車にのり・七條河原にて・行わかれけるが・互に・名殘を・をしみつゝ・しばしは・はなれも・やらざりけり・誠に惜かるべし・旅人が・一村雨の過行時・一樹の許に・立やどり・ゆきわかるゝだに・餘波は・したふ・ならひなり・花の本の・半日の客・月のまへの・一夜の友・だにも・名殘はをしき・ならひ也・況此人々は・此三年が間・うかりし島・波のうへ・舟の內の・友なれば・一ごう所感の・契りにて・前世の芳緣も・淺からずや・おもはれけん・去程に・康頼入道は・東山・雙林寺へとて・行ければ・少將・六波羅へ・いり給ふ・少將の・母上靈山におはしけるが・昨日より宰相の許に・おはして・またれけるかあればと・計にて・又引かづきてぞ・なかれける・宰相の內の・上下男女・みなひとつ所に・さしつどひ・よろこびの・涙をば・ながしける・少將の乳人の・六條が・黒かりし・かみも白なり・北の御方の・さしもはなやかなりし・御有樣も・此三年が間の・つきせぬ・御物おもひに・やせくろませ・給ひて・其人共・みえ給はず・又少將の・ながされ・給ひしとき・三歲にならられける・をさなき人も・ことしは・五歲に・ならられける・はるかに・おとなしうなつて・かみゆふ計にぞ・見えられける・又北方の・かたはらに・みつばかりなる・をさなき人の・おはしけるを・少將あれは・いかにと・宣へば・乳人の・女房・是こそと・計にて・涙に・むせびければ・少將誠や・流されし時・胎內にあり

しを・こゝろもとなう・みすてゝ・下りしが・扨は・別の事なう・むまれ・そだちたる事の・不思議さよとぞ・の給ひける・其後・少將二度・君に・めしつかへて・宰相の・中將まで・あがられけるぞ・聞えし・去程に・康頼入道は・東山・雙林寺の・宿に・落ついて・まづとゞめ・おきたりける・母の行方を・問けるに・近きあたりの人の・申けるは・さん候それは・去年の春のころまでは・是に御渡り・候ひしが・それもなほ・人めをつゝませ・給ひて・一條の北・紫野の邊に・忍うで・御渡り候ひしが・御上りのよしを・聞給ひて・斜ならず・喜ばせ・給ひしが・過にし・衣更着の・ころより・御風の・心ちとやらん・聞えさせ・給ひしが・終に・むなしう・ならせ給ひて・けふはやは・五日なりとぞ・申ける・康頼入道・涙をながし・我肥前の・鹿瀬の庄のにて・年を送り・備前の有木の・別所にて・日數をだにも・おくらずば・などか・今一度母を・見奉らざるべき・定なき・世のならひなり・一生はこれ・夢のごとし・誰か百年の・齡を期せん・萬事は・みな空し・いづれか・常住の・おもひをなさんと・詠じつゝ・ふるき・軒の板まより・もる月影の・朧なるをみて・なく〳〵・よみたりけるとぞ

故郷の軒のいたまに苦むして　思ひし程はもらぬ月哉

と・口すさみつゝ・やがてそこに・籠居して・うかりしむかしを・おもひやり・寶物集といへる・物語を・作りけるとぞ・承はる・哀なりし・事共也

蟻王が島くだり

中にも・法勝寺の・執行・俊寛僧都のわらはに・蟻王・龜王とて・候ひけるが・ともにしうの事をぞ・かなしみける・中にも・龜王は・其思ひの・つもりにや・程なう・はかなく成にけり・なほも浮世に蟻王は・粟田口の邊に・忍うで・候ひけるが・二人の人々は・めし還されて・上り給ひぬ・僧都一人・島にとゞまり給ふと・聞えしかば・もしやと・鳥羽の邊まで・行むかうて・見けるに・誠に・二人の人々は・みえ給へ共・我しうは・みえ給はず・人にとへば・島にとゞまり・給ひぬとぞ・申ける・童判官入道の・そばちかう立よつて・事の子細をとひけるに・康頼入道・島の有樣を・こまやかに・語りければ・いとゞせんかたなく・かなしくて・つきせぬは涙なり・童われ・宮古にて・角物をおもはんより・島へ尋まゐらせて參り・かはらぬ御姿をも・今一度・見もし・見え奉らばや・縦・又此世に・なき身と・なり給ひたりとも・御骨をも取て・にには・いはね共・内々は・出立けり・僧都の・姫君の・奈良に・おはしければ・童ならに・下つて・ひめ君に・申けるは・二人の人々は・めしかへされて・のぼり給ひぬ・上の一人・島にとゞまらせ・おはしますが・餘に・淺ましう・存候・かなはぬまでも島へ・たづね參らせて・まゐらばやとこそ・存候へ・御文や候と・申たりければ・姫君・斜ならず・喜給ひて・やがて御文・あそばしてぞ・た

うだりける・童姫君の・御文給はつて・生ながら・冥途に赴く・心地して・思ひければ・よもゆるさじとて・親にも・兄弟にも・知せずして・都の内を・忍びつゝ・まぎれ出・薩摩がたへぞ・おもむきける・もろこし舟の纜は・卯月・五月に・とくなれば・夏衣たつを・遅しと・待かねて・彌生の末に・都をたつて・はる〴〵と・八重の鹽路を・しのぎつゝ・薩摩がたへぞ・下りける童・薩摩の地に・落ついて・島へ渡らんと・便船をこへば・人あやしめ・衣裳を・はぎ取・なんどしけれども・童すこしも・後悔せず・ひめ君の・御文計をこそ・人にしられじと・もとゆひの・中には入たりけれ・兎角して・商人の舟に・便船し・島に渡つて・見けるに・都にて・傳へ聞しは・事の數ならず・田もなく・畠もなく・村もなく・又里もなし・適〳〵あるものも・此土の・人には・似ざりけり・いふ事をも・聞知ず・童ある者の・そばちかう立よつて・是に一年三人・流され給ひしが・二人は・召還されて・上り給ひぬ・一人のこされおはします・法勝寺の・執行・俊寛僧都の・御房の・御行方や・しり給ひたると・とひければ・僧都とも・執行共・しつたらばこそ・返事をもせめ・唯かしらを・ふつて・知ずと・のみぞ答ける・其中に・すこし・心得たる者の・申けるは・いざとよ・さやうの人は・此邊に・ありしが・それも・此ちかうよりは・いづ地へか・行ぬらん・行がた・知らずとぞ申ける・童さてはこの世に・なき人と・なり給ひたるにこそと・思ひければ・いとゞせんかたなく・かなしみて・つきせぬ物は・涙なり・もし・山の方にもや・おはすらんとて・いまだ知ぬ・深山へこそ・わけいりけれ・嶺によぢ・谷に下れども・晴嵐・夢を・やぶつて・其面影も・みえず・白雲あとを・埋て・往來の道も・さだかならず・猶も濱のかたの・覺束なさに・あるもと・法師なりけりと・おぼしくて・かみは・そらざまに・生のぼり・萬のもくづ・取ついて・偏に・藪をいたゞけるがごとし・身にきたる物は・つぎめあらはれ・かはゆたえ・きぬ・布のわけもみえぬが・片手には・なましき魚をもち・片手には・荒和布いそ物をもつて・隨分さきへと・いそげ共・はかゆかず・たゞ一所に・よろ〳〵としてぞ・出來る・童われ・都にておほくの・乞丐人を・みつれ共・かやうの者は・いまだなし・地獄・餓鬼・三惡・四趣は・深山・大海の・ほとりに・ありと・佛の演說給ふなるを知ず・われ生・ながら・餓鬼道へ・まよひ・きたれるやらんと思ひ・やう〳〵・あゆみゆく程に・さすが・人の姿に・見なし・やゝ物申さうといへば・何事と・こたふ・わらはふしぎや是こそ・わがいふ事をも・聞しつたるよと思ひ・そばちかう立よつて・是に・一とせ・三人・流れ給ひしが・二人は・めしかへされて・上り給ひぬ・一人のこされ・おはします・法勝寺の・執行・俊寛僧都の・御房の・御行方や・しり給ひたると・問ければ・わらはこそ・見忘たりけれ共・僧都は何かは・見忘れ・給ふべきなれば・いかに・蟻王よ・我こそ・それよと・宣ひもあへず・手にもち給へる・あらめ・礒ものを・投捨て・すなごのうへに・たふれふし・やがて消入給ひけり・童僧都を・かゝへ奉つて・われ宮古より・はる〴〵と・是まで・尋參らせて・まゐりたるかひもなく・いかにかゝる・

うき目をば・みせさせ給ひ候やらん・縦・定業にて・渡らせ給ひ候共・生ある御聲をも・今一度・きかせたまへと・やう〳〵に・悲しみければ・僧都さすが・定業ならねば・又いきかへり・たまひけり・わらは參つて候・蛾王・參りて候と・申たりければ・僧都いきの下にて・宣ひけるは・われ此島に・流されて後・戀しき者共を・夢にみる時もあり・又幻にたつときもありしが・それも此・ちかうよりは・身もよわり・心もつきはてゝ・さやうの夢・うつゝをも・おもひ・わかぬ也・されば唯今又・汝が下りたるをも・たゞ夢とのみこそ・おもへ・もし此事の・夢ならば・さめての後を・いかゞせん・わらは・是はうつゝにて候・不思議や・此御ありさまにても・只今までも・御命ののびさせ・給ひたる事の・ふしぎさよと・申ければ・僧都・宣ひけるは・われ此島に流されて後・丹波の少將の・舅・平宰相・教盛の所領・肥前の・鹿瀬の庄より・衣食を常は・おくられしかば・其・はぐくみにて・ありしが・二人の人々に・別て後・やがていかにも・なるべかりし・身の・丹波の少將の・よしなき事共を・おもひたてゝ・都のつてを・またなんど・の給ひし程に・もしやと・おろかに・たのみつゝ・今までかくてありつる也・此島には・人の食事絶て・なき所也・山にいりては・いくらもある・硫黄と・いふものをとつて・商人にあひ物に・かへなんどして・過しが・それも・此ちかうよりは・身もよわり・力も・つきはてゝ・左樣のわざも・かなはぬ也・かやうに日の・のどかなる時は・渚に出・たま〳〵越たる・釣人に・あひ・ひざをかゞめ・手をあはせ・なましき魚を・こひ・渚にいくらも・打

よせける・あらめ・磯物をとつて・露の命を・磯の苦地に・かけたる也・さらでは・うき世を・渡るよすがをば・いかにしつるとか・おもふ・これにて・何事をも・いふべけれ共・いざ我家へと・宣へば・童・ふしぎや・あの御ありさまにても・わが家とて・もち給ひたる・事のふしぎさよと思ひ・やう〳〵・歩ゆけ共・僧都さすが・歩も・やり給はねば・童が・肩に・ひつかけて・をしへに・まかせて・行程に・ある山の麓に・二人の人々の・作りおかれたりし・あしやの・松の枝を・柱にし・綾竹を桁梁に渡し・松の落葉・葦の枯葉を・うへにも・下にも・ひしと・取かけられたりけるを・是こそ・我家よとて・立いつて・ふされけれ共・いづくに・雨風の・たまるべし共・みえざりけり・わらは・いとほしや・此人の・都におはせし時は・法勝寺の・寺務職とて・八十餘ケ所の・庄園を・司どり・給ひしかば・棟門・平門の・內にして・おほくの・所從・眷屬等に・圍繞渇仰・せられてこそ・おはせしに・業にさま〴〵あり・順生・順現・順後業と・いへりされば・此人の・一期の間・用ゐたまへる所の・財寶・ひとへに・大伽藍の・寺物・佛物・ならずと・いふ事なし・されば・信施・無慚の・こととわりに・答て・今生にて・前業を感じ・給へるかと・おぼえたり・僧都今は・誠にうつゝなりと・おもひ定て・宣ひけるは・われ・此島に・流されて後・二人の人々の・むかひの時も・一札をことづくる・ものもなし・されば・唯今又・汝が下りたるにも・おとづれの・なきは・よく・我緣・ゆかりの者共は・一人も都に・跡をとゞめぬかと・宣ひければ・童さん候・君西八條殿へ・御出の後・追捕

の官人共が・参りむかひ候ひて・轉傳の・御緣者達を・爰かしこにて・失ひ奉り候ひぬ・北御方ばかりこそ・若公姫君・ひきぐし・參らつさせ給ひて・鞍馬に・忍うで・渡らせ・おはしまし・候ひしが・童常は參り候に・若君は・いかに蟻王よ・父の渡らせ給ふなる・鬼界が島とかやに・我つれてゆけ・〳〵してゆけとて・參り候・たびごとに・むづからせ・おはしまし候つるが・この春世間に・童部のし・候なる・もがさとやらん・申す事を・させおはしまし候つるが・過にし二月九日の日・終にむなしう・ならせ・おはしまし候ひぬ・北の御かたは・日比の御思ひに・又この事さへ・打そひて・御なげき淺からず・まし〳〵候ひつるが・それも・同き・三月二日の日・終に・むなしう・ならせ・おはしまし候ひぬ・今は姫君計こそ・奈良殿に・むかへられ・參らつさせ給ひて・御渡り候へ・その御文は候とて・もとゆひの中より・取出て・奉る・僧都ひらいて・み給へば・げにも童が・申にたがはず・かゝれたり・いまははや・若にもおくれ・さふらひぬ・又はゝうへにさへ・別まゐらせ・さふらひて・當時は・奈良の・伯母御前の・御もとに・むかへられ・まゐらせて・こそさふらへ・などや・二人の・人々は・かへり上り給ふに・一人島に・とゞまらせ・おはしまし・さふらふやらん・あはれ・女子ほど・かなしかりける・物あらじ・われ・男子の身ならば・この・わらはに・具せられて・などか・御迎に參らでは・さふらふべき・今度は此わらはを・供にて・急上らせ・給へなんどぞ・かゝれたる・僧都・姫は見しときよりも・手もはしたなく・詞つゝきも・おとなしけれども・但・はかない

事をも・かいたるものかな・われ心に・まかせたる・身ならば・なにしにか・かくうきしまに一人殘り・とゞまつて・うきめをみんとも・おもふべき・今度は・此童を・ともにて・急上れなんど・かいたる事の・はかなさよ・姫はことしは・十二か・三になるかとこそ・おもへと・宣へば・童も・一定の・御年をば・知參らせ候はずと・申す・僧都・さて・此文の・ところ〴〵の・文字ぎえの・したるは・いかにと・宣へば・わらはそれは・さぞ御渡り候らん・あの御文・あそばすとて・一筆・あそばしてはうつぶし・一筆遊ばしては・うつぶし・斜ならず・むづからせ・おはしまし・候ひつるが・扨は・御涙の・かゝらせ・給ひたるらんにては・候らんと・申せば・僧都も・涙にむせばれけり・僧都・の給ひけるは・われ此島に・流されて後は・月日の・かはりゆくをも・知す・花さき・もみぢて・ちるをもつて・春・秋を・しり・あつきをもつて・夏をわきまへ・さむきをもつて・冬をわきまへ・白月・黒月の・かはりゆくをもつて・一月・三十日を・わきまふ・靜に・ゆびを・をつて・かぞふれば・はや三年に・なるとこそ・おもへ・われ西八條へ・出しとき・我もゆかんと・したひしを・やがて・かへらんずるぞとて・とゞめおきたりし・事の・唯今の・やうに・おぼゆるぞや・わかは・其時・七になりしかば・ことしは・九にこそ・ならんずらめ・親となり・子となり・夫婦の・ちぎりを・こむるも・この世・ひとつの・事ならず・されば・それらが・さやうに・なりけるをば・など・夢・まぼろしにも・みえざりけるぞや・人のおやの・心はやみに・あらね共・子をおもふ・道にまよふ共・今こ

そ・おもひしられけれ・されば・それらを・みんとおもふ・故にこそ・今一度・宮古へも・上りたかりつれ・それらが・さやうに・成たらんに・おいては・歸洛の事をも・おもはぬなり・但・姫が事ばかり也・それも・いきたる身は・ともかうも・してこそ・すごさんずらめ・すゞり・墨・筆も・なければ・返事には・及ばぬなり・島のありさま・わがことをば・汝がみるやうに・かたるべし・又人しもこそ・おほきに・汝が・是まで・はる〳〵と・尋下りたる・志の程こそ・返す〳〵も・神妙なれ・又いつまでか・ながらへて・汝に・うきめをもみすべきとて・おのづからの・食事を・とゞめて・一向・後世・菩提の勤をのみ・し給ひけるが・童島に下つて・三十餘日と・申には・僧都・ねぶるがごとくにて・終に・はかなく・なり給ふ・童・あとにふし・枕につき・かなしみけれ共・甲斐ぞなき・同じくは・後世の御とも・仕りたくは・候へ共・宮古に上り・姫君に・此よし申・御菩提をこそ・とぶらひ・參らせ候はめとて・心のゆく〳〵・泣あきて・松の落葉・あしのかれ葉を・とりおほひ・もしほの・煙と・たきあげ・けぶりすめば・骨を・拾ひ・頸に・かけ・又商人の・舟に・便船して・九國の・地にこそ・著にけれ・童・都に・上り・奈良に・下つて・僧都の・遺骨を・姫君に・奉れば・胸にあて・かほにあて・悲しみ・給へど・甲斐ぞなき・硯・墨・筆も・候はねば・御返事には・及ばせ給ひ候はず・なに事も・思召おく・御事共をば・胸の間に・とゞめさせ・おはしまし・候やらん・今は・多生を・へだて・曠劫を・送らせ給ひ候 共・今生にては・あひ參らつさせ・給はん事・ありがたし・今は・御菩提をこそ・たまはんずれ・なんど申せば・姫君・さてはとて・年十三にて・さまをかへ・奈良の・法花寺に・おこなうて・父の後世をぞ・祈られける・童も・僧都の・遺骨を・頸にかけ・高野へ・のぼり・奥のゐんに・をさめつゝ・蓮花谷にて・法師になり・山々〳〵・寺寺・修行して・主の後世をぞ・祈ける・かやうに・人の・おもひの・つもりける・平家の・するこそ・おそろしけれ

辻風の沙汰（あひ）

同き五月・十二日の・午の剋・ばかりに・辻風・おびたゞしう・吹て・人屋・おほく・顚倒す・風は・中御門・京極より・おこつて・坤を・さして・吹けるに・棟門・平門・吹ぬき〳〵・三町・五町を・隔てつゝ・なげすて・〳〵・しける上は・桁・柱・なげしなどは・虛空に・あがり・檜皮葺・板の類は・冬の・木葉の・風に・みだるゝが・ごとし・人もあまた・命を・うしなひ・牛馬・六畜の類・かずをつくして・打ころさる・これたゞ事に・あらずとて・やがて・神祇官にて・御占あり・天下の・さわぎと・うらなひ申す・但・朝家の・御大事には・あらず・殊には・祿をおもんずる・大臣・百日の内の・愼・別しては・兵革・相續して・飢饉・疫癘の・愁とぞ・神祇官・陰陽寮ともに・占申ける」そのころ・小松の・内大臣重盛公・此よしを・聞給ひて・やがて・熊野參詣とぞ・聞えし・大臣・

本宮・證誠殿の・御まへに・通夜して・よもすがら・敬白・し給ひけるは・父入道相國の・體を見候に・惡逆無道にして・やゝもすれば・君をなやまし・奉る・重盛・その・長子として・しきりに・諫を致といへ共・身不肖の間・かれもつて・服膺せず・其運命をはかるに・一期の榮花・なほ危し・慾に・重盛・その時に・至つて・世に浮沈せんこと・敢て・良臣・孝子の法に・あらずや・枝葉・連續し・身を顯はし・名をあげん事かたし・しかじ名を・のがれ・身を退いて・今生の名望を・なげすてゝ・來世の菩提を・もとめんには・但・凡夫薄智・是非に・まどへるが故に・志を・恣にせず・願は權現・金剛童子・子孫繁榮・絕ずして・つかへて・朝廷に・交はるべくんば・父入道相國の・惡心をやはらげて・天下の安全を・得しめたまへ・もし又榮耀・一期を限つて・後昆恥に・及べくんば・まづ重盛が運命を・縮めて・來世の苦輪(イ苦患)を・たすけ給へ・兩ケの愚願・偏に・冥助を仰と・肝膽を碎て・祷申されけれ共・人これをしり奉らず・ある夜・大臣の・御身より・燈籠のやうなるもの出て・はつときえけるを・見所のものどもみとがめ・奉りけれ共・恐て・人これを・申さず・大臣の・御下向のとき・岩田河を・わたられけるに・嫡子權亮少將維盛・夏の事なりければ・淨衣のしたにうす色の・きぬを・着給ひて・なにとなう・川の水にたはぶれ・給ひけるが・きぬのぬれて・淨衣にうつりたるが・偏に色のごとし・筑後守貞能・此よしを見とがめ奉つて・あの君達のめされて候・御淨衣の・なにとやらん・いまはしう・みえさせ給ひて候・急めしかへらるべうもや・候らんと・申たりければ・大臣・重盛が・所願はや・成就しぬとや・おもはれけん・敢て其淨衣・改むべからずとて・別して・岩田河より・喜の奉幣を・本宮へこそ立られけれ・人あやしと思ひ奉りけれ共・敢て其心を得ず・さればにや・此君達・程なく誠の色に・なられけるこそふしぎなれ・大臣の・御下向の後・いくばくの日數を・經ずして・御病つき給ひしかば・權現はや・御納受あるにこそとて・おのづから療治をも加へられず・又祈禱をも致されず・其比・入道相國は・福原に・おはしけるが・此よしを聞給ひ・急上洛し給ひて・先越中の前司盛俊を・もつて・宣ひつかはされけるは・所勞・日々にそひて・大事なるべきよし・其聞えあり・此程・宗朝より・すぐれたる・名醫・本朝に渡りたるよしをきく・折節是を喜びとす・急かれをめし請じて・醫療を・加しめ給へとなり・大臣世にもくるしげにてふされたりけるが・やう〳〵に・たすけおこされ・盛俊を・御そばぢかうめして・宣ひけるはまづ・醫療の事・畏て・承はりぬと申べし・但・汝・もきけ・むかし・延喜の・聖代はさばかりの賢王にて・渡らせ給ひたりしか共・異國の相人を・王城の内へ・入られたりし事をば・賢王の・御あやまち・又は・我朝の恥とこそ・申傳へたれ・いはゆる・重盛なんどが・身として・此ありさまにて・異國の醫師にまみえん事・いかでか・朝についで其はゞかりの・あひ殘らざるべき・むかし漢の高祖は・三尺の劍を提て・天下ををさめ給ひしに・あるとき・淮南の黥布を・うちしとき・流矢にあたつて・疵をかうぶる・后・呂太后良醫をめして・是を見せしむるに・醫のいはく・此疵治しつべし・但五十斤の金

を賜はつて・治せむと也・高祖の・のたまはく・我むかし・まぼりのつよかりしときは・おほくの矢に・あたりしかとも・死することをえず・今は・運既につきぬ・命は則・天にあり・扁鵲といふ共・何の詮かあらん・しからすば・又・金ををしむに・にたりとて・五十斤の金を醫師にたうで・終に治せられず・先言耳にあり・今もつて是を甘心す・重盛いやしくも・九卿につらなり・三臺に上る・其運命を・はかるに・もつて天心にあり・なんぞ天心をきつせすして・醫療を・おろかにいたはしうせんや・所身もし・定業たらば・療治をくはふ共・益なからんか・所勞又・非業たらば・療治を・くはへす共・たすかるむね候べし・たゞ定業の病を治するに・猶たへざる旨あきらけし・彼耆婆が醫術を・よけすして・大覺世尊滅度を・拔提河のほとりに・唱給ひき・是偏に・定業の病を治するに・猶いやさ・ざることわりを・しめさんがためなりき・治するは佛體療するは耆婆也・しかるに・重盛が身・佛體にあらず・名醫又・彼耆婆におよぶべからず・彼四部の書をかゝみて・百療に長すといふ共・いかでか有待の穢身を・救療せん・縱五經の說は・詳にして・衆病を・いやすといふとも・豈先世の業病を治せんや・若醫術によつて・存命あらば・本朝の醫道・なきににたり・いじゆつ又・効驗なくんば・たい面なんの・詮かあらん・就中本朝の・大臣程の者の・此ありさまにて・異國の醫師にまみえん事・且は國の恥・且は道のれうし(イれうち)なり・縱重盛が命は・亡すといふ共・いかでか國の恥を・おもふ心を存せざらんや・詮する所この旨を申べしとぞ・の給ひける・盛俊かへり參つて・此よし申たりければ・入道相國もつての外に・驚給ひて・むかしよりおほくの・大臣はありつれ共・是程まで國の恥を・おもふ大臣はいまだなし・國に相應せぬ・大臣にて此度定て・うせんず・こはいかゞせんとぞ・さわがれける・同じき七月・廿七日に・大臣出家し給ひて・法名・照空とぞ・名のられける・同き・八月一日の日・大臣終に薨じ給ひぬ・御とし四十三・臨終正念とぞ聞し・凡此大臣の・うせ給ひける事は・一向平家の運命の末に・なるのみならず・世の爲もかなしく惡かりなん・入道相國の・さしも橫紙をやられたりしをも・此大臣こそ・やう〳〵になはし・宥られしか・こはいかゞせんとぞ・他家の人々も・さわがれける・今は御弟・右大將宗盛卿の・御方樣の人ばかりこそ・御世は定て大將殿へぞ・參らんずらんとて・喜あへるもおほかりけり・人の親の・子をおもふならひおろかなるが・先だつだにも恩愛の道は・かなしきぞかし・況此大臣は・當家の棟梁・當世の賢人にておはしけれ・ば・家の衰微といひ・恩愛の別といひ・かなしんでも・猶あまりあり・凡此大臣は・文章うるはしうして・心に忠を存知して・詞に德をかねたまへり・されば世には・良臣を失へる事を・なげき・家には又・武略の・すたれぬる事を・かなしめり

無紋かねわたし

凡此大臣は・未來の事をも・かねてよくさとり給へる人也・其故は・吾朝に・いかなる・大善根を・

したりと・いふ共・子孫あひ續て・弔はれん事・ありがたし・されば・異國に・いかなる事をもして・わが後世・とぶらはればやと・おもはれければ・去ぬる安元のころほひ・鎭西・博多より・妙典と申す・船頭を・召よせ・三千五百兩の・金をたうで・是五百兩をば・汝にたぶ・今三千兩をば・宗朝にもつてわたり・千兩をば・醫王山の・僧にひき・二千兩を御門へ・奉つて・田代をながく・育王山へ・申よせ・我後世とぶらはせよと・宣へば・妙典かけばくも・忝おもひ奉り・かしこまつて・承はり・やがて・鎭西の博多に下り・もろこし舟の纜を・とく程こそありけれ・萬里の遠浪を・しのぎつゝ・大宗國にぞ・著にける・育王山の長老・佛照禪師德光に・あひ奉つて・此よし申たりければ・長老・大きに・隨喜感歎・し給ひて・やがて・千兩をば・育王山の・寺の僧にひき・二千兩を・御門へ奉つて・日本の內府の申さるゝやうを・一々に・かきしるし申されたりければ・御門・斜ならず・御感あつて・五百町の田代を・ながく・育王山へぞ・よせられける・日本の大臣平朝臣重盛公の・後生善所と・いのる事・今にありとぞ・承はる・凡・此大臣は・平家の運命の・末になりなん事をも・かねてより・しり給へる事あり・其故は・ある夜大臣の御夢に・渺々たる濱を・渚にそひて・東へゆけば・大きなる鳥居立給へり・伊豆の三島の・大明神の・御鳥居かと・おぼしくて・とりゐの東の脇には・人いく千萬といふ・數もしらず・ならび居て・唯今切たると・おぼしき・入道の頸を・太刀のさきにさしつらぬき・こなたかなたへ・もてあつかふ・大臣・あれはいかにと・おもひ給へば・是は・平家

大政の入道殿の頸を・伊豆國の三島の・大明神の・めしとらせたまひて・伊豆國の・流人・前の右兵衞權佐頼朝に・たまはすなりとぞ・申ける・大臣・さては・父の御事にこそと・おぼしめし・立よつて・見給へば・誠に・父の・御頸なり・大臣・こはいかにしつる事ぞやとて・急とりゐの外に・立いづるかと・おぼしくて・その夜の御夢・さめにけり・大臣其後は・打も・まどろみたまはず・萬心ぼそう・案じつゝけて・おはしける處に・東の臺の妻戸を・ほと〳〵とたゝく音しけり・大臣あれに事ぞきけとて・人を出されければ・備中國の住人・瀨尾太郎兼康が・いさゝか・申べき事あつて・參つて候と・申ければ・大臣・やがて出合・對面し給ひて・此夜ははるかに・更ぬらんに・そも何事ぞと宣へば・兼康・御まへの人をのけ・御そばちかう參つて・申けるは・今夜西八條殿に・御宿直申て候つれば・かゝる夢を見候が・餘に淺ましさに・今・大臣の・見給ひたる・夢に・少もたがへず・語りければ・大臣・重盛も・只今かゝる夢を・見つるぞとよ・扨は兼康は・重盛が心に通ずる者にこそとて・大きに・感じ給ひけり・次の日のまんだ朝・嫡子權亮・少將維盛・參內のついでに・大臣の・御かたにおはしたり・大臣・やがて出合對面・し給ひて・いつよりも・けふの出仕こそ・優に見えられ候ひしか・あれ〳〵少將殿に・さけ勸奉れとの給へば・筑後守貞能承はつて・酒をすゝめ奉る・大臣・此盃をば・まづこそ申たう候へ共・親に・て候へば・給はつて申さんとて・大臣三度の後・少將殿にさゝれたり・少將三度の後・さしおかれけれ

ば・大臣今ひとつと宣へば・少將殿に・引手物せよと・宣へば・貞能承はつて・障子の内より・唐錦の袋にいりたる・太刀を一振取出し・少將殿に奉る・少將この太刀を・ぬいて見給へば・當家嫡々につたはれる・小烏と言太刀にもあらず・大臣死去のとき・その家をつぐぬしのはいて・ともすなる・無紋といへる太刀也けり・少將今これ程・當家世さかんなるに・貞能が・此太刀をひくは・一向内府を・呪咀し奉るにこそと・おもはれければ・貞能がかたを・世にもあしげに・見給へば・大臣はや心得給ひて・いかにや少將殿・其太刀を・あしうなおもひ給ひそ・それは・入道殿・死去の時・重盛はいて供せんとて・用意せさせて候へ共・今ははや・重盛・入道殿に・先立奉りぬと・おぼゆる間・さてそこへ渡し奉る也・相構て・重盛がなからん後・人々にも・にくまれ給ふなよ・又侍共をも・不便にしたまふべし・かやうに申や・最後のことばにて・候はんずらんとて・はら〳〵と泣給へば・少將殿も・なかれけり・御まへに候ひける・侍共も・みな涙をぞ・流しける・たゞ何となき・かねごとゝこそ・おもひしに・大臣程なう・薨じ給へば・さてははや・御臨終をも・かねてより・さとりたまへる人にこそと・おもふにも・いよ〳〵涙ぞ・すゝみける

あひ

入道相國・たのみきつたる・内府には・おくれ給ひぬ・萬・心ぼそくや・おもはれけむ・急・福原に・

馳下り・閉門してこそ・おはしけれ

法印問答

同き・十一月七日の夜の・いぬの刻計に・都には・大地・おびたゞしう・うごいて・やゝ久し・陰陽頭・安倍の泰親・急・内裏に・馳參つて・奏聞しけるは・只今の・大地震・占文のさす所・その・愼・輕からず・中にも當道・三經のなか・坤儀經の說を・見候に・年を得ては・年を出ず・月をえては・月を出ず・日を得て・日を出ず・もつての外に・火急に候とて・雙眼より涙を・はら〳〵と・流しければ・傳奏の・人々も・色をうしなひ・君も・歎かせ・おはします・わかき・公卿殿上人や・局の女房達は・けしからぬ・泰親が・只今のなきやうや・されば・何事のあるべきとてぞ・笑あはれける・天文は・淵源をきはめ・瑞兆掌を・さすがごとし・一事も・たがはざりしかば・世には人・さすの神子とぞ・申ける・されば・右近の・馬場にして・雷のおちかゝりたりしにも・雷火のために・狩衣の袖は・燒ながら・其身は・恙もなかりけり・上古にも・末代にも・ありがたかりし・者也けり・去程に・入道相國は・福原に・おはしけるが・同き十四日に・數千騎の・軍兵をたなびいて・上洛せらると・聞えしかば・其比の・京中の上下・あはや又・何事の・出こんずらんとて・さわぎのゝしる事・斜ならず・又なに者か・申出したりけん・入道

朝家を・恨奉らるべしと・聞えしかば・天下の人々も・皆・死灰のごとし・關白殿も・内々聞し召る
る旨もや・ありけん・急・御參内あつて・今度相國禪門・入洛の事は・偏に・基房をかたぶくべき・
結構と・うけたまはり・候へば・いかなるうき目にか・あひ候はんずらんと・申させ給ひたりければ・
主上そこに・いかならんめをも・見られんは・たゞちんがみるにてこそ・あれとて・龍顏に・御涙せき
あへさせ給はず・誠に・天下の御政は・君と臣との・御はからひなるに・こはいかにしつる事ぞや・
天照太神・春日の大明神の・神慮の程も・はかりがたし・同き・十五日に・入道朝家をうらみ・奉
らるべき事・既に・必定と聞えしかば・法皇・故少納言・入道信西の・子息・靜憲法印を・御使にて・
入道相國の宿所・西八條へ・仰つかはされけるは・近年朝廷・靜ならずして・人の心も・調らず・世間
も・いまだ・落居せず・なりゆくこと・惣別につけて・歎おぼしめせども・扨そこにあれば・萬事はたの
みおぼしめすに・是體に・嗷々なるさまにて・縱・朝家を・しづむるまでの事こそ・なからめ・剩・
これをうらむべしなんど・聞しめすは・いかに法印・西八條に・おはして・源大夫の判官季貞をもつ
て・勅定の趣・いひいれつゝ・御返事を・またれけれ共・朝より・夕に及まで・入道無音なりければ・
ば・法印さればこそと・無益にて・急・かへり參るべきよしを・言いれつゝ・出られければ・入道・い
かゞおもはれけん・あの法印よべとて・呼かへさせ・出合對面・し給ひて・やゝ・法印の御房・淨海
が申所は・餘事か・内府・身罷すぎ候へば・入道隨分悲涙をおさへてこそ・それに入

道・けふあすをも知ぬ・老の波にのぞんで・かゝるうきめにあひ候・心中をば・いかばかりとか・お
もひ給ふ・御邊の心にも・すゝさつ候へ・保元已後は・亂逆・打つゞいて・君安き御心も・渡らせ・
たまはざりしを・入道・度々の朝敵を・たひらげて・四海の逆鱗を・しづめまゐらせ候ひき・其時も
入道は・たゞ大かたを取おこなひし計也・まさしう・内府こそ手を・おろし・身を碎たる者にても候
へ・されば・萬死に入て・一生をうる事も度々なり・其外臨時の御大事・朝夕の政務・内府程の功臣
は・ありがたうこそ候へ・愛をもつて・いにしへを・おもふに・かの唐の・太宗は・魏徵におくれて・
かなしみのあまりに・昔の殷宗は・良弼を・夢の内に得・今の朕は・賢臣をさめの後に・失ふといふ・
碑の文をかいて・みづから廟にたてゝ・だにこそかなしび・たまひけんなれ・吾朝にも・まのあたり
見候ひし事ぞかし・顯賴の民部卿が・逝去したりしをば・故院殊に・御歎あつて・八幡の行幸を・延
引せられて・御遊なかりき・すべて・臣下の卒する事をば・代々の君も・歎おぼしめす・御事にてこ
そ候へ・されば親よりも・なつかしく・子よりもむつまじきをば・君と臣との・御中とは・申傳へ
たり・それに内府が仲陰に・八幡へ御幸也・剩・法住寺殿にして・御遊あり・御歎の色・一事も是
をみず・たとひ・内府が忠をこそ・おぼしめし忘させ給ひ候共・入道がなげきをば・一度はなどか
あはれませ給はざるべき・縱入道がなげきをこそ・あはれませ給はず共・内府が忠をば・いかでか思
召・捨させ給ふべきに・父子共に・叡慮に背ぬる事・今においては・面目を・失ひ候・先是一・次に・

越前國をば・子々孫々までも・御變改あるまじき由の・御勅約あつて・内府賜はりたりしを・薨逝の後・いくばくの・日數を經ずして・やがてめしかへして・他人にたぶ事・是なんの過怠ぞや・これ一・次に・中納言關の候ひしとき・近衛の二位の中將殿・所望候ひしを・入道ずゐぶんとり申・候ひしかども・終に御承引なくて・關白の息をなされし事はいかに・たとひ・入道・非據を申共・一度はなどか・御用ゐなかるべき・況・位階といひ・家嫡といひ・理運左右なき・事なるを・引ちがへられし事・遺恨の次第也・これ一・次に・俊寛成親以下の・無用の・いたづら者・鹿谷に・城郭をかまへて・當家を・かたぶけんと・仕り候ひし事・全是・私の計略にあらず・只君御許容あるに・よつて也・いまめかしき・申事にて候へ共・此一門をば・いかでか・七代までも・思召捨させ給ふべきに・それに入道・七旬におよんで・餘命いくばくならぬ・一期の内にだにも・やゝもすれば・ほろぼさるべき由の・御はからひあり・況子孫あひついで・朝家に・めしつかへむ事・ありがたし・凡・老て子をうしなふは・枯木の・枝なきがごとし・内府におくれ・候ひぬるをもつて・兩家の運命は・はやおもひしられてこそ候へ・此世・今いくばくならぬに・さのみ心を・つひやしても・なにゝかは・し候べき・されば・いかていにも・ありなんと・おもひなつてこそ候へとて・且は腹立し・且は落涙して・くどかれけるにぞ・法印おそろしくも・又哀にて・汗水にこそ・なられけれ・法印わが身も・近習の仁也・其外・鹿谷にて・人々の・議せられし・事共をも・まさしう・見きかれし・人なれば・我身も・其人數とて・只今・めしやこめられんずらんと・龍の鬚をなで・虎の尾を・ふむこゝちしては・おもはれけれ共・法印も・さるおそろしき人にて・おはしければ・少も騒がず・誠に・度々の御奉公・淺からず・しかりとは申せ共・官位といひ・俸祿といひ・御身にとつては・悉滿足しぬ・功の莫大なる事をば・君も御感なる御事にてこそ候へ・次に・近臣事をみだり・君御許容ありと言事は・いか樣にも・謀臣の凶害と・おぼえ候・凡・耳を・信じて・目を疑ふは・俗の常のへい也・小人の浮言を・信じて・朝恩の・他に異なるに・猥がはしう・君をなみし・參らつさせ・たまはん御事・神慮の程も・はかりがたし・それ天心は・蒼々として・はかりがたしと・いへ共・叡慮定て・其儀にてぞ候らん・下として・上にさかふる事・豈・人臣の・禮たらむや・詮ずる所・此旨をこそ・披露仕り・候はめとて・出られければ・平家の侍共・老少並居たりけるが・あなおそろし・あれほどに・入道相國の・いかり給ふに・すこしも・騒がず・返事して・たゝれけるゆゝしさよと・法印を・ほめぬ人こそ・なかりけれ。

大臣流罪（あひ）

法印・院の御所に・かへり參つて・此よしを・一々に奏し・申されたりければ・法皇も・道理至極しては・おぼしめされけれ共・仰いださるゝ・旨もなし・同じき・十六日に・入道相國・おもひ立たま

へる・事なれば・關白殿を・始奉つて・四十三人の・官職をとゞめて・追こめらる・中にも・關白殿をば・大宰の帥に・うつして・筑紫へ・流し奉らるべき由・聞えしかば・かゝらん世には・とてもかくても・ありなんとて・音羽の邊・古河といふ所にて・御出家あり・今年は・卅五にならせおはします・禮義よく・しろしめされて・曇なき・鏡にて・渡らせ給ひつる・ものをとて・世の・惜奉る事・偏に・月日を・失ひ・奉るがごとし・配所へ赴人の・みちにて・出家したりしをば・約束の國へは・つかはされぬ・事なれば・始は・日向國と・聞えしが・後には・配所をかへて・備前の國府に・とゞめおき奉る・大臣流罪の例は・左大臣曾我のあかゞ・右大臣豐成・左大臣魚名公・右大臣菅原・忝も・北野の天神の御事なり・左大臣高明公・內大臣藤原の・伊周公に・至るまで・其例六人・され共・攝政關白流罪の例は・これはじめとぞ承る

妙音院の琵琶ひき

中にも・六條の攝政殿の御子・近衞の二位の・中將殿をば・入道御聟に・取奉つて・大臣關白・一度に・せさせ奉る・普賢寺殿の・御事也・去ぬる・圓融院の御宇・天祿三年十一月一日の日・一條の攝政・諫德公・俄に・かくれさせ給ひしかば・堀河の關白・忠義公の・御弟・法興院の・大入道殿兼家公の・いまだ其比・從二位の・中納言にて・御伯父れい義公・越かへし奉つて・內大臣正二位し給ひて・內覽の宣旨を・蒙らせ・給ひたりしをこそ・人いつしかなりしと・申しに・是は・それには超過せり・非參議・二位の中將より・大中納言を・へずして・大臣關白の・御例・めづらし・かりし・御事也・大外記の・大夫史弼の宰相に・いたるまで・皆・あきれたる・さま也けり・中にも・妙音院の・太政大臣師長をば・つかさを・とゞめ奉つて・あづまのかたへ・追下し奉る・是は・去ぬる保元に・父惡左府の・御緣座に・よつて・兄弟四人・流罪せられ給ひしに・右大將兼長・左の宰相の中將隆長・範長禪師三人は・歸洛を・またずして・配所にて・うせられぬ・是は・土佐の畑にして・九回の星霜を・送り・長寬二年八月に・召還され・次の年・本に復し・同き三年に・前の中納言より・權大納言にあがられけり・折節・大納言・あかざりければ・かずのほかにぞ・くはゝられける・大納言の・六人ある事も・これ始とぞうけたまはる・又前の中納言より・大納言になる事は・後山科の大臣躬守公・宇治の大納言隆國の卿の・外は・承り及ばず・凡此大臣は・管絃の道に達し・才藝すぐれて・おはしければ・君も臣も・重し奉つて・次第の昇進・とゞこほらず・太政大臣までも・たやすく・へあがり給ふほどの・人の・いかなる・罪のむくいにか・又流罪せられ給ふらん・保元の昔は・南海・土州にうつされ・治承の今は・又・東關尾張國とかや・つみなくして・配所の月を・みんと・いふ事をば・本より・心ある程の人の・好こととなれば・大臣敢て・ことゝもし給はず・彼唐の大臣・賓客・白樂天・九江郡の・司馬に・左遷せられて・潯陽の江の・ほとりに・さすらへ給ひし・其いにし

へを・思ひやり・なるみがた・鹽路はるかに・遠見して・うら風に・嘯き・常は・皎月をのぞみ・琵琶を・彈じ・和歌を詠じて・なほさりがてらに・月日を・送り給ひけり・あるとき・大臣・當國第三の社・熱田の・大明神に・參詣あつて・琵琶ひき・朗詠・し給ひけれ共・所もとより・無智の・俗なれば・哀を・しれる者なし・邑老村女漁人野叟・かうべを・うなだれ・耳を・そばだつと・いへ共・更に・清濁を・わかち・呂律を・しれる者なし・されど共・胡巴琴を彈せしかば・魚鱗をどり・ほとばしり・虞公・歌を發せしかば・梁塵うごき・うごく物の妙なる・曲を極るには・自然に・感を催す・ことわりに・こたへて・滿座涙を流し・諸人奇異の・思ひをなす・遙に・夜漏深更に・およんで・おとどしらべ・秘曲を盡されけり・ふかうてうの內には・花芬馥の氣をふくみ・流泉の曲の間には・月清明の光を・あらそふ・又ねがはくば・今生世俗の・文字の業・狂言綺語の・あやまりをもつてといふ・朗詠しつゝ・琵琶・かきならし給へば・神明感應に・堪ずして・寶殿大きに・震動す・平家の惡行・なかりせばいかでか・今かゝる・瑞相を・をがむべきとて・おとゝ感涙をぞ・流されける・大藏卿・右京大夫・兼伊豫守・高階の康經・參議皇太后宮大夫・兼右兵衞督・藤原の光能・藏人の少將兼中宮の・權の大進・藤原の基親・三官ともに・とゞめらる・按察の大納言資方・藏人の權の少將・兼讃岐守源資時は・二の官を・とゞめらる・按察の大納言資方・殊に・右少將雅方をば・夜の程に・都の內を追出し・奉るべしとて・上卿には・藤大納言實國・武士には・博士の判官範貞・參りむかつて・此よし・申されたりければ・大納言とる物も・とりあへ給はず・三界ひろしといへ共・五尺の身・おき所なし・一生ほどなしと・いへ共・一日暮しがたしとて・夜中に・九重の內をば・まぎれ出・八重だつ雲ゐの・餘所にぞ・おもむかれける・彼大江山や・いく野のみちに・かゝつて・はじめは・丹波國・村雲の里と・聞えしが・後には配所をかへて・信濃の國府と・こそ聞えけれ

院の流され

中にも・按察の大納言資方は・凡管絃の道に・達し・才藝すぐれて・おはしければ・法皇・諸事內外なう・仰合られけるに依て・入道かやうに・あだを・むすばれけるとぞ・聞えし・今度四十餘人の人々の・事に・あはれける・故をいかにと・申に・中納言の中將殿と・近衞の二位の・中將殿と・中納言の・中將殿ばかりこそ・いかなる御目にも・あはせ給ふべきに・四十三人の・人々の・事に・あはれけるこそ・ふしぎなれ・近年・不慮なる事・ども・あつて・世上さわぎ・やまざる事も・是偏に・御靈の・故なりとて・去年・讃岐の院の・御追號あつて・崇德天皇と號し・宇治の惡左府の・贈官贈位の・聞えありしか共・御靈は・いまだ・しづまりも・やまざるにや・入道いよ〳〵・腹をするかね給へりと・聞えしかば・京中の上下・又いかなる事か・出こむずらんとて・騷のゝしる事・なのめならず・其頃・前の左小辨行高と・聞えしは・故中山の中納

言顯隆の卿の・長子にて・二條院の御時は・辨官にて・さもゆゝしう・渡らせ給ひしかども・院崩御の後は・官途を奪はれ・先途を失つて・此十餘年が間は・諸事あるか・なきかの・體にて・おはしけるを・入道行高の許へ・使者を立て・きつと・立よられ候へ・聊・宣ひ合すべき事の候と・宣ひつかはされたりければ・行高・こは・何事を・宣ひ合らるべき・やらん・此十餘年が間は・諸事なに事にも・まじはらざりつる物を・いかさまにも・是は・讒言する者の・あるにこそと・宣へば・北方・乳人の女房を・始奉つて・家の內に・ありとしある人みな・きも・たましひを・うしなつて・聲を・あげてぞ・なげかれける・さるにても・行高・やがて參すべき由の・御返事をば・申されたりけれ共・牛車・出仕の裝束ともに・なかりければ・弟の・左衞門光高の許へ・此よし宣ひ・つかはされたりければ・牛車・出仕の裝束ともに・行高のもとへ・つかはさる・行高車にのり・西八條に・おはして・門前にて・車よりおり・案內を・申されたりければ・入道・思ふにもにず・やがて出合對面・し給ひて・故中納言殿とは・入道・諸事內外なう・申承り候ひしかば・御邊とても・おろかには・思ひ奉らず・年來籠居の事をも・いたはしうは・候ひつれ共・法皇の・御政務なる上・ちから及候はず・今は・とう〳〵出仕・し給ふべし・大かた・官途の事をも・入道はからひ・申べし・其やうを・申さむとてなり・別のやうは・なし・はや〳〵・歸り給へと・宣へば・行高・斜ならず・よろこうで・かへられけるに・入道・跡より・源大夫の・判官季貞が・車に・入道の牛かけさせ・出仕の裝束ともに・行高の・許へ・送りつかはさる・次の日の・まんだ朝・入道・さぞ有らむとて・米を百石・車に積て・行高の許へ・つかはさる・行高・てのまひ・あしの・ふみ所も・おぼえず・こは夢かや・夢かとぞ・あきれ給ひける・同じき十七日に・五位の侍中に・ふせられ・左少辨顯時が・追籠られたるかはりに・前の左少辨に・なりかへり・給ひけり・今年は・五十一・いつしか・わかやぎ給ふぞ哀なる・是もたゞ・片時の・榮花とぞみえし・同き廿日の日の・まんだ朝・六波羅の・兵ども・法住寺殿の・四門を・うち圍奉る・凡其勢・二三千騎は・あるらんとぞ・みえし・一とせ・信賴卿が・三條殿を・なし參らせたるやうに・御所にも・火をかけ・女房達をも・みな燒ころすべし・なんど・聞えしかば・局の女房・めのわらは・物をだにも・打かづかず・門前に走出・みなちり〳〵にこそ・成にけれ・前の右大將宗盛卿・御車よせて・今は・とう〳〵めさるべう候と・申されたりければ・法皇・こはいかに・なし參らせんとは・仕るぞ・主上・さてましませば・政務に・口入する・計なり・それも・さあるまじくは・さらでこそ・有べきに・いかで・かやうに・うき目を・みせ參らせむとは・仕るぞ・いか樣にも・これは・俊寬・成親・なんどがやうに・遠き國・はるかの島へも・流し失はむずるに・こそと・仰ければ・宗盛此仰承はる・忝さに・いかでか・さる御事の・渡らせ給ひ候べき・しばらく・代をしづめん程・鳥羽殿へ・御幸・なし參らすべき由・を・入道・はからひ申され候と・申されたりければ・法皇さらば・御供に・人・一人もなきに・やがて・汝御供に候へかしと・

仰けれ共・入道の權威に・憚つて・參らせられず・法皇・あはれ故内府には・おとりたる者かな・一年も・かかる御めに・あはせ給ふべかりしを・小松の内府が・やう〳〵に申てこそ・今までも・安穩には・渡らせ給ひしか・今はさやうに・諫る者の・なきあひだ・かく心のまゝに・振舞にこそ・行末とても・たのもしからず・さよとぞ・仰ける・御車へは・御經箱・ばかりぞ入られたる・淨土寺の・二位殿の・さまかへて・あませと・めされけるばかりこそ・御車へは參られけれ・御供には・御力者に・金行ばかりぞ・おほくの・人のなかにまぎれては・參りける・其比の・京中の上下・此よしを・見奉つて・あはや・院の流されさせ給ふはとて・みな並ゐて・袖をぞ・ぬらしける・去ぬる七日の夜の・大地震は・はや・かゝる先表にて・十六落叉の・底までも・こたへ・堅牢地神も・定て・驚騷・給ふらむとぞ・おぼえたる・大膳大夫信成が・何としてかは・參りたりけむ・御前ちかう候ひけるを・めされて・やゝ・信成や・夕さり既に・失はるべしとこそ・聞しめされ候へ・さらんにとつては・今一度・御行水を・めさばやと・おぼしめすは・いかゞ有べきと・仰ければ・信成は・今朝・院の御所を出るより・流る涙も・つきざるに・又此仰承はるも・忝さに・つきせぬ物は・涙也・信成・直垂に・たまだすきあげ・小柴垣・こぼち・大床の短柱・わりなんどして・金行に・水あげさせ・かたのごとくの・湯を・し出して・參らせけり・法皇・御行水を・めして・御經箱より・御經とり出させ・給ひ・うちあげ〳〵・あそばされけるにも・今を限りとぞ・おぼしめされける・次の日の・まんだ朝・靜憲法印・西八條に・おはして・誠やらむ・鳥羽殿に・人一人も・なき由を・承り候・哀・御ゆるされを蒙つて・參らばはやと・申されければ・入道御邊は・事すごすまじき・人なれば・とう〳〵とてぞ・ゆるされける・法印車にのり・鳥羽殿に參り・門前にて・車よりおり・門をさし入て・見給へば・鳥羽殿には・野山の嵐・はげしくして・物さびしげなる・折節・法皇の・御經・打あげ〳〵・あそばされける御こゑの・はるかの門の外までも・聞えさせ給ひけるに・法印御前ちかう・參られたりければ・法皇是を・叡覽あつて・あそばされける・御經に・御涙のはら〳〵と・かゝらせ給へば・法印も忍びがたさに・法衣の袖を・かほにあて・泣々・御前へぞ・まゐられける・法印參られたりければ・尼せの・宣ひけるは・君は・昨日の朝七條殿にして・供御聞しめされたる外は・ゆふべもけさも・聞しめされず・さらんにとつては・御命もあやうくこそ・見えさせ給ひたりければ・法印など・それは・聞しめされ候はぬやらん・平家惡行つもつて・年久し・天照太神・正八幡宮も・君をこそ・まぼり參らつさせ・給はんずれ・殊には・君の執しおぼしめす・日吉山王廿一社・一乘守護の・御ちかひ・あらたまらせ給はずば・彼法花八軸に・たち翔らせ給ひて・君をこそ・守護し・參らつさせ・給はんずれ・さらんにとつては・凶徒は・水の泡と・きえ・御政務は・御はからひにこそ・なり參らつさせ・給はんずれなんど・やう〳〵に・申たりければ・其後は・供御をも・聞しめされけるとかや・去程に・主上は・院のながされ・臣下達の・おほく流し・うしなはれし・日より

して・内裏には・臨時の御神事あつて・主上みづから・石灰の壇にして・伊勢太神宮を・御拝あり・是偏に・法皇の・いつとなく・鳥羽殿に・おしこめられて・渡らせ給ふ・御祷の・爲とぞ・覺たる

あひ

二條院は・天子に・父母なしとて・つねは・院の仰をも・申かへさせ・おはします・さればそれは・繼ていの・君にては・渡らせ給はず・是は同じ父子の・御ならひとは・申ながら・御契り殊に・深かりければ・餘所の袂も・おさへがたし

城南の離宮

百行のなかには・孝行をもつて・先とす・明王は・孝をもつて・天下を治むと・みえたり・されば・唐堯は・老衰たる・母をたつとみ・虞舜は・かたくなゝる父を・敬ふと・見えたり・彼・賢王・聖主の・先規を・おはせ・おはします・叡慮の程こそ・めでたけれ・ある時・內裏より・忍びつゝ・鳥羽殿へ・御書あり・かゝらん世には・雲井に跡を・とゞむべしとも・存じ候はず・されば・寛平の・むかしをたづね・花山の・いにしへをも・おひ・山林流浪の身とも・なりぬべうこそ・候へと・申させ給ひ・たりければ・法皇の・御返事には・さなおぼしめされそ・さて渡らせ給へばこそ・一のたのみにても候へ・さやうに跡なく・おぼしめしたちなば・なんのたのみか・候べき・たゞ愚老が・ともかうも・ならんやうを・御覽じはてさせ・給ひてこそと・申させ給ひたりければ・主上・此御書を・龍顏に・おしあて・させ給ひて・御涙いよ〳〵・せきあへさせ・給はず・君は・船・臣は水・水よく・船を・うかべ・水又・舟を・くつがへす・臣よく・君を・たもち・臣又・君をくつがへす・保元・平治の・昔は・入道相國・君をたもち・奉るといへ共・安元治承の・今は又・君を・なみし奉る・これ・史書の文にたがはず・大宮の・大相國・三條の・內大臣・葉室の大納言・中山の中納言・此人々も・うせられぬ・今ふるき人とては・成頼・親範・ばかり也・此人々も・かゝらん世には・朝につかへ・身をたて・大中納言を・經ても・なににかは・せむとて・いまだ・わかう・さかんなつし人の・家を出・世をのがれ・宰相入道成頼は・高野の・霧にまじはり・民部卿入道親範は・小原の霜にともなひ・一向後世菩提の・勤の・外他事なしとぞ・聞えし・昔も・商山の雲にかくれ・潁川の月に・心をすます・人もあり・なむと・聞えしか共・豈・博覽清潔にして・世を遁れたるに・非すや・中にも・高野のお山に・おはします・宰相入道成頼・此よしを・傳へ聞給ひて・あはれ心とうも・世を遁たる・ものかな・かくて・きくも・おなじ事・なれ共・まのあたり・たちまじはつて・見ましかば・いかばかりか・心うからまし・保元・平治の・みだれをこそ・淺ましと・思ひしに・今は世するゐに・なつて・かゝるふしぎの・出くるにや・又いかなる・うき事をか・見きかむ・すらん・されば・雲井を・わけても・の

ぼり・ふかき・山のおくへも・入なばやとぞ・宣ひける・心あらんほどの・人の・跡を・とゞむべき・世とも・見えざりけり・同き廿三日に・先座主・明雲大僧正・天台座主に・なりかへらせ・給ふぞ・有がたき・是も・只・一向平家の・取申されけるに・依て也・入道相國は・關白殿聟なり・中宮又・内裏に渡らせ給へば・萬・何事も・心安くや・思はれけん・一向天下の・御政は・公家の御沙汰たるべう候と・申おき・わが身は・いそぎ・福原へこそ・下られけれ・前の右大將宗盛卿・參内あつて・此由を・奏し申されたりければ・主上・仰なりけるは・法皇より・ゆづりたうだる・世ならばこそ・政務をも・しろしめさめ・たゞ・執柄に・いひ合て・大將・はからへとて・終に・聞し召も・入させ給はず・去程に・法皇は・城南の・離宮にして・冬も・なかば過させ給へば・秋の山の嵐の音のみ・はげしくて・寒庭の月の光ぞ・さやけき・庭には・雪ふり・つもれ共・跡ふみつくる・人もなく・池には・つらゝ・閇重つて・むれゐし・鳥も見えざりけり・大寺の鐘のこゑ・遺愛寺の・きゝ（イひゃきを）驚かし・西山の・雪の色・香爐峯の・望を催す・夜霜に・寒けき・砧の響・幽に・御枕に・つたひ・あかつき・氷をきしる・車の跡・はるかの・門前によこたはれり・ちまたを過る・行人・征馬の・いそがはしげなる・氣色・浮世を渡る・有樣・かつ〳〵・思召・しられて・哀也・宮門をまぼる・蠻夷の・夜・ひる・警固を・勤るも・先の世に・いかなる・契りにて・今緣を・むすぶらんと・おぼしめすぞ・かたじけなき・去まゝには・法王・所々の・御參詣・折々の・御遊覽・御賀の・めでたかりし・事共を・おぼしめし・つゞくるに・懷舊の・御涙おさへがたし・去程に・とし暮て・治承も・四年に・成にけり

巻第四

新院嚴島御幸

治承四年・正月一日の日・鳥羽殿には・元三の御間なりけれ共・入道相國も・ゆるされず・法皇も又・大きに恐させ・おはしましければ・入道の權威に・はばかつて・參入する人もなく・櫻町の・中納言重敎・弟・左京大夫長敎・是二人・ばかりぞ・御ゆるされを・蒙つては・參られける・同き四日の日・六波羅には・春宮の・御はかまぎ・幷に・御まな・聞しめす・なんど・世には・かくめでたき事共・ありしかども・法皇は只・鳥羽殿にして・御耳の餘所にぞ・聞し召れける・同き二月十八日に・春宮御年三歳にて・踐祚あり・主上は・異なる・御恙も・渡らせ給は・ざりしか共・おしおろし奉つて・いつしか・人新院とぞ・申ける・其比の有職の・人々の・いつしか・なる・今度の・御讓位かなと・宜ひあはれける・中にも・平大納言時忠卿ばかりこそ・内の御乳人・帥のすけの・夫たりしかば・今度の御讓位・いつしかなりと・たれやの人か・申さるべき・異國には・周の成王三歳・晋の穆帝二歳・吾朝には・近衛院三歳・六條院二歳・是皆・襁褓の中に・つゝまれて・衣帶をたゞして・せざりしかども・攝政おうて・位につき・或は・母后・抱て・朝にのぞむと・見えたり・後漢の光昭皇帝は・生て百日といへば・踐祚あり・先蹤和漢かくの・ごとしと・申されたりければ・人々あな・おそろし・物な申されそ・されば・それは・よき例かは・とぞ・かたぶきあはれける・東宮踐祚ありしかば・入道相國・夫婦共に・准三后の・宣旨を蒙り・年官年爵を給はつて・上日の者を・めしつかはる・綸かき花つけたる侍共・出いつて・偏に・院宮の・ごとくにてぞ・候ひける・出家の人の・准三后の・宣旨を・かうぶらせ給ふ事は・法興院の・大入道殿兼家公の外は・承及ばず・出家の後も・槃花はなほ・つきせずとこそ・承はれ・同き三月十九日に・新院安藝の・嚴島へ・御幸とぞ聞えし・帝王御位を・さらせ給ひて・のち・諸社の御幸の・始には・或は・八幡・賀茂・春日・なんどへこそ・御幸ならせ給ふに・是ははる〳〵と・安藝の嚴島までの・御幸を・いかにと申に・白河院は・熊野へ御幸・一院は・日吉の社へ・御幸なる・既に知ぬ・叡慮にありとの・告ありとぞ仰ける・當時・安藝の嚴島をば・一向平家の・崇申されければ・上には・平家に御同心・下には・又法皇の・いつとなく・鳥羽殿に・おしこめられて・渡らせ給ふ・其御祈の・御爲とぞ・覺えたる・同き三月十八日の・まんだ朝・新院・前の右大將宗盛を・めして・明日御幸の次でに・鳥羽殿へ・參らばやと・おぼしめすは・禪門に・ふれずしては・惡かりなんやと・仰ければ・宗盛・此仰承はる・忝さに・爭か・さる御事の・渡らせ給ひ・候べきと・申されたりければ・上皇・斜なら

す御威あつて・さらばやがて汝・鳥羽殿に・參り此由を・奏せよかしと仰ければ・宗盛・畏つて承り・やがて・鳥羽殿に・參り・此よしを・奏し申されたりければ・法皇もあまりにおぼしめす御事なればこは夢やらんとぞ・仰ける・同き三月十九日の・曉がた・新院・入道相國の・宿所・西八條を・出御なる・霞にくもる・有明の・月の光も・朧にて・こし路へ歸る・雁がねの・雲井におとづれ行を・聞しめすに・つけても・折節哀に・おぼしめす供奉の人々には・まづ前の・右大將宗盛・三條の大納言實房・藤大納言實國・五條の大納言國綱・土御門の宰相の中將通親・高倉の中將康道・冷泉の少將隆房・宮內少輔宗敎・なんどぞ・參られける・夜もほの〴〵と・明ければ・上皇・鳥羽殿に・參らせ給ひ・まづ門を・さしいつて・叡覽あるに・春も既に・くれなんと・して・夏木立にぞ・成にける・橘の花・色おとろへ・宮の鶯・聲老たり・人稀にして・木ぐらく・物さびしげなる・御有樣を・御らんせらるゝに・つけても・先御涙ぞ・すゝみける・去年の正月・六日の日・主上朝覲の御爲に・法住寺殿へ・行幸なりたりしには・諸衞・陣をひき・諸卿列にたつて・幔門をひらき・院司の公卿・參りむかつて・播部寮・緣道を敷・さしも・ただしかりし儀式・けふは一事もなし・只夢と・のみこそ・おぼしめせ・其後・櫻町の中納言重敎卿・參りむかつて・御氣色・申されたりければ・上皇・入らせ給ひけり・法皇は・寢殿の・はしがくしの間にて・待參らつさせ・給ひけり上皇は・今年・廿にならせおはしましけるが・明がたの月の・光にはへさせ給ひて・玉體も・殊にうつくしく・御母儀建春門院に・すこしもたがはせ給はず・よく・似まゐらつさせ給ひたりければ・法皇はまづ・故女院の・御事を・おぼしめし出て・御涙に・むせばせおはしまします・其後・兩院ちかう・御座あつて・やゝ・はるかに御物語あり・御問答のやう・たれ承るべうもなし・御前には・あませばかりぞ・さぶらはれける・其後遙に日たけて後・上皇・鳥羽殿を・たつてぞ・出させ・給ひける・上皇は・法皇の・城南の離宮の古亭・幽閑寂寞の・物さびしげなる・御有さまを・御覽じ・おかせ給へば・法皇は又・上皇の・いつとなき旅泊皇宮の・波の上・船のうちの・御住居・覺束なくぞ・おぼしめす・誠に宗廟・八幡・賀茂・春日・なんどをば・さしおかせ給ひて・是は遙々と・嚴島までの・御幸をば・神明もなどか・感應なかるべき・御願成就・疑なしとぞ・おぼえたる。

源氏そろへ

同き三月廿六日に・新院・安藝の嚴島へ・御參着あり・入道の・最愛の內侍が・宿所・皇居に・なる・中一兩日・御逗留あつて・經會舞樂なんど・行はれけり・國守藤原の有綱・神主・佐伯の景廣・座主尊榮・勸賞かうふる・神慮もうごき・入道相國の心も・定てはたらくらんとぞ・覺たる・同き四月三日の日・新院還御の次・入道相國の宿所・福原の別業に・いらせ給ふ・入道の・弟・池の中納言賴盛・卿の宿所・皇居になる・同き四日の日・家〳〵の賞とて・除目行はれけり・入道の養子・丹波守清國・正

下の五位・孫に・權亮少將維盛は・四位の從上とぞ・聞し・同き五日の日・上皇・福原をたゝせ給ひて・寺井にいらせ給ひ・同き六日の日・鳥羽に・つかせ給ふ・都よりの御迎の・公卿殿上人・鳥羽の草津まで・參られけり・同き七日の日・都には・新帝の御即位とぞ聞えし・御即位は・大極殿にてこそ・遂らるべけれども・大極殿は・一とせ・やけたりしかば・大政官の廳にて・遂らるべしと・諸卿・御沙汰ありけるに・九條の右の大臣の申させ給ひけるは・大政官の廳は・凡人の家にとつても・公文所體の所也。大極殿なからんうへは、紫宸殿にてぞ遂らるべけれとて、紫宸殿にてぞ遂られける。去ぬる康保四年十一月に、冷泉院の御即位を、紫宸殿にてとげられたりしは、御邪氣に依て、かしこへ行幸もかなはざりし故なり。されば其例いかゞあるべからん。唯後三條院の、延久の嘉例にまかせて、大政官の廳にて有べき物をと、とり〳〵に申されしか共、九條殿の御はからひのうへは、力及ばせ給はず。同き八日の日、中宮弘徽殿より、仁壽殿にうつらせ給ひて、たかみくらへ、參らせ給ひし御有樣、めづらしかりし見物なり。平家の人々も、みな出仕申されけり。中にも小松殿の君達ばかりこそ、去年の八月に、大臣薨じ給ひしかば、いまだ色にて、出仕もなかりけり。前の右大將宗盛、今度の御即位の違亂なく、めでたかりし事共を、こまやかにしるして、福原へ申されたりければ、入道殿も二位殿も、ゑみをふくみてぞおはしける。世にはかく、目出度事共ありしか共、世間はいまだ落居せず。太上法皇の第二の御子、茂仁の王と申し、御母は加賀大納言季成の御娘、三條高倉にましましければ、人高倉の宮とぞ申ける。御年十五と申し、正月十五日に、九重の外、近衞河原の大宮の御所にして、ひそかに御元服あり。まさしう一院第二の御子にて渡らせ給へば、今は太子にもたち、御位にもつかせ給ふべけれ共、當時の御母儀建春門院の御そねみによつて、おしこめられて渡らせ給へば、花の本の春のあそびには、紫毫をふるつて、手づから御製をかき、月の前の秋の宴には、玉笛を吹て、みづから雅音をあやつり、かくて明し暮させ給ふ程に、治承四年には、御年三十にならせおはします。同き卯月九日の日の夜に入て、源三位頼政入道忍びつゝ、宮の御前に參り、ひそかに申されける事こそ、なによりもおそろしけれ。まさしう一院第二の御子にて渡らせ給へば、今は太子にもたち、御位にもつかせ給ふべき人の、いまだ新王の宣旨をだにも、蒙らせ給はぬ御事をば、心うしとはおぼしめされ候はずや、上にこそ隨ふやうに候へども、當時たれか平家を背ぬ者や候、はや〳〵御謀叛おぼしめしたゝせ給ひ、平家を亡させおはしましこめられて渡らせ給ふ、其御憤りをも休め參らつさせ給はんは、御孝行の御至りにてこそ候はんずれ。さだにも候はゞ、入道も、子共一兩人持て候へば、などか一方の御堅めになり參らせでは候べき、其外令旨をだにもたうづる程ならば、喜をなして、馳參らんずる源氏共こそ、國々におほう候へとて、一々に申つゝく。先京都には、出羽守光信が子共に、伊賀守光基、出羽判官光長、源判官光重、出羽の冠者光能、熊野には、爲義が末子十郎義盛とて、新宮の邊にかくれ居て候。攝津國には、多田藏人

行綱、多田の次郎朝實、同き八郎高頼、大田の太郎孝義、豊島の冠者頼基、河内國には、武藏の權守義基入道、子息石河の判官代義兼、大和國には、宇野の七郎親治が子共に、太郎有治、次郎成治、三郎清治、四郎義治、近江國には、山本、柏木、錦織が一黨、美濃尾張には、山田の次郎重廣、河部の太郎重直、泉の次郎重光、浦野の四郎重助、安食の次郎重頼、其子の四郎重澄、回田の判官代重國、木田の三郎重長、矢島の四郎重時、其子の太郎時清、甲斐國には、武田の太郎信義、加賀見の次郎遠光、其子の小次郎長清、一條の次郎忠頼、板垣の三郎兼信、井澤の五郎信光、逸見の冠者有義、安田の三郎義定、信濃國には、大内の太郎維義、木曾の冠者盛義、其子の小四郎義信、伊豆國には、流人前の右兵衞の權佐頼朝、常陸國には、爲義が三男、三郎先生義敎とて、信太の浮島に隱居て候、佐竹の冠者正義が子共に、太郎忠義、次郎高義、三郎義季、四郎義宗、五郎義清、陸奥國には、義朝が末子、九郎冠者義經とて、これらは皆六孫王の御苗裔、多田の滿仲が後胤也。

いたちの沙汰　（あひ）

昔は源平左右に爭ひて、いづれ勝劣も候はざりしか共、今は雲泥交りを隔つゝ、主從の禮にも猶劣れり。國は國司に隨ひ、庄は領家のまゝなりければ、公事雜事にかりたてられて、夜晝やすき心も候はず、彼等に令旨をだにも、くだしたうづる程ならば、喜をなして馳參り、平家をほろぼし、君を御位につけ參らせむ事、時日はめぐらし候まじと、かやうにたのもしげに申されたりければ、宮は此事大きにおぼしめしわづらはせ給ひけるが、其比古阿古麻の大納言資光が孫、備後の前司維光が子に、少納言維長は、ならびなき相人なりければ、人相少納言とぞ申ける。ある時かれが宮を見奉つて、君は御位の相わたらせ給ふ、相構て天下の御事おぼしめし捨させ給ふべからずと申たりしに合て、三位入道今又かやうに申されければ、是偏に天照太神正八幡宮の御はからひにこそと、おぼしめし、まづ熊野に候十郎義盛をめして、藏人になさる。行家と改名して令旨をたぶ。同き四月廿八日に都をたつて、近江國より始て、國々の源氏共に、告知せてこそ通りけれ。同き五月八日の日、伊豆國に下りつき、流人前の右兵衞權佐頼朝に、令旨を奉る。先生義敎は兄なりければ、たばんとて常陸國へも下りけり。木曾義仲は甥なりければ、しらせんとて、それより山道へこそかゝりけれ。去程に法皇は、俊寛成親なんどがやうに、遠き國遙の島へもながし失はんずるにこそと、おぼしめされけれ共、さはなくて、たゞ鳥羽殿にして、今年は二年にならせおはします。同き五月十二日の酉刻ばかりに、鳥羽殿には、大きなるいたちのおびたゞしう鳴て、御所中を走りければ、法皇御うらかたあそばして、近江守仲兼が、いまだ其比鶴藏人にて、御前ちかう候ひけるをめされて、是泰親が許に持てゆき、急度かむがへさせよと仰ければ、仲兼畏て承り、泰親が許に行向ふ。やがてかんがへて參らせけり。仲兼

いそぎ歸り參りけれ共、夜ははやふけぬ。守護の武士きびしうして、門をも明ざりければ、仲兼もとより案内はしつたり、築地を上りこえ、大床の下をくゞつて、きり板より勘狀を奉る。法皇ひらいて叡覽あるに、三日が内の御喜幷に御歎とぞ占ひ申ける。三日がうちの御喜とは何なるらんと思召けれども、いつとなく鳥羽殿に、おしこめられて、渡らせ給ひたりしを、前の右大將宗盛卿をりふし申されしによつて、鳥羽殿を出し奉つて、八條烏丸なる美福門院の御所へいれ奉る。是ぞ御喜なる。又御歎とは何なるらんと思召ければ、同き十四日の酉刻ばかりに、高倉の宮の御謀叛と云事あらはれて、京中の騒動斜ならず、是ぞ御歎なる。前の右大將宗盛卿早馬をたてゝ、福原へ此よしを申されたりければ、入道大きにいかつて、詮ずる所宮をばとり奉つて、土佐の畑へ流し奉るべしとて、上卿には藤大納言實國、武士には出羽の判官光長、源大夫の判官兼綱を先として、都合其勢三百餘騎にてぞ向はれける。此源大夫の判官兼綱と申は、三位入道の次男也。平家かやうに三位入道宮をすゝめ參らせけるとは、夢にもしらざりけるに依て也。宮は五月十五日、夜の雲間の月をながめさせ給ひて、なんの御行衛もおぼしめしよらざりつるに、爰に三位入道の使とて、文もつたる男一人、いそがはしげにて參りたり。

信連合戰

宮の御乳人子、六條の亮の大輔宗信是をよむ。御謀叛既にあらはれさせ給ひて、六波羅より官人共が、別當宣を承はつて、御迎に參り候、とう〳〵御所中を出させ給ひて、三井寺へいらせ給ふべし、入道も子共郎從引具して、やがて參らむずる候とぞ讀あげたる。宮は此事大きにおぼしめし煩はせ給ひければ、長左兵衛尉長谷部の信連が申けるは、別のやうや候べき、たゞ女房の裝束をからせ給ふべしと申たりければ、宮はかさねたる御衣に、いちめがさをぞめされける。黒丸と申すわらはに、つゝみに物入て戴かせらる。亮の大輔宗信は直垂にたまだすきあげて、からかさもつて御供仕る。たとへば青侍が女をむかへてゆくがごとくにて、高倉おもての小門より出させ給ひ、高倉を上りに、近衛を東へ過させ給ひけるに、大きなる溝のありけるを、いと物かるやかに、さつとこえさせ給ひければ、道行人が立留つて、あれはしたなの女房の、溝のこえやうかなと、あやしげに見とがめ參らせければ、宮は、いとゞ足ばやにこそ過させ給ひけれ。宮はなにに事も、とりあへぬ御さまにて、さしもの重寶共を、とり忘させ給ひける中にも、蟬折小枝とて、二の御笛を常の御枕にとり忘させ給ひたりけるを、立歸つてもとらまほしくぞおぼし召れける。去程に御所の御留守には、信連一人候ひけるが、見苦しき物あらば、とりしたゝめんとて、御所中をはしりめぐつて見けるに、此御笛を見付奉つて、あな淺ましし、是は君のさしもの御秘藏にて、あんなる物をとて、五町が内にて、おつつき參らせければ、宮斜ならず御感あつて、われ死なば、この笛を御棺に入よとぞ仰ける。宮やがて、汝も御供に候へかしと

仰ければ、信連畏つて申けるは、あの御所に信連が候事をば、京中の上下みな存知の事にて候に、それも其夜は、落てなかりけりなんどいはれむ事、弓矢とりは、かりにも名こそをしう候へ、官人共にひつとあひしらひあひしらうて、一方打破つて、やがて參らむずる候とて走り歸る。信連が其夜の裝束には、木賊の狩衣のしたに、萠黃の腹卷をき、衞府の太刀をぞはいたりける。三條おもての惣門をも、高倉おもての小門をも、ともにひらいてぞ待かけたる。案のごとく其夜の夜半計に、六波羅の兵共三百餘騎にておしよせたり。中にも源大夫の判官兼綱は、存る旨ありとて、遙の門前にひかへたり。出羽の判官光長は馬に乘ながら、御門のうちにかけいり、大庭にひかへ、あぶみふんばりつつたちあがり、大音聲をあげて、宮の御謀叛既にあらはれさせ給ひて、六波羅より官人共が別當宣をうけたまはつて、御迎に參りて候、とう〳〵御所中を出させ給ふべしと申たりければ、信連大床にたつて、當時は御所にても候はず、御物詣の御留守にて候、何事ぞことの子細を申されよと云ければ、光長、何條此御所ならではいづくにか渡らせ給ふべき、其儀ならば、下部共參つてさがし奉れとぞ申ける。信連大きにいかつて、物にも心得ぬ官人共が物の申やうかな、縱君の朝敵とならせ給ひて、一天下をかたきにうけさせたまはんからに、馬に乘ながら、御門の內へ參るだにも、奇怪なるに、剩下部共參つて、さがし奉れとは爭か申ぞ、御前には左兵衞の丞長谷部の信連が候ぞ、まぢかうよつてあやまちすなとぞ申ける。遙の門前にひかへたりける、源大夫の判官兼綱此よしを聞て、をめいてかけいり、傘鉾が郎等に、金武といふ奴は聞ゆる大力の剛の者なりけるが、打物のさやをはづし、信連を目にかけて、大床の上へきつてのぼる。信連此よしを見るよりも、狩衣の帶紐ひつきつてなげのけ、衞府の太刀とはいへ共、身をばすこし心得てうたせたりけるを、拔あはせ、敵は大太刀大長刀にてふるまへ共、信連が衞府の太刀に切立られて、嵐に木葉のちるやうに、庭へさつとぞおりたりける。比は五月十五日夜の、一村雨の雲間より、有明の月のあらはれ出て、あかゝりけるに、信連は案內者、敵は無案內なり、爰のめんらうにおつかけてははたときり、かしこのつまりにおつつめてはちやうときる。宣旨のお使をば、爭かくは仕るぞといひければ、宣旨とはなんぞとて、散々にこそは切たりけれ。太刀ゆがめばをどりのき、ふみなほし押なほし、もみにもうでぞ切たりける。たち所に究竟の兵共十四五人ぞ切ふせたる。其後太刀のさき五寸ばかり、鞘卷落てなかりければ、力及ばず大手を廣げ、門前のかたへと行程に、爰に手束の八郎が長刀もつて出來たり。信連長刀にのらむと飛でかゝる。いかゞはしたりけむ、惡う乘そんじ、もゝをぬいさまにつらぬかれ、信連心はたけうすゝみけれ共、大勢の中に取籠られて、膚にこそせられけれ。其後御所中をさがし奉りけれ共、宮渡らせ給はざりければ、信連ばかり搦取て、六波羅へこそ歸られけれ。次の日のまんだ朝、前の右大將宗盛卿大床にたつて、信連をお坪の內にめし出し、誠やわ男は、宣旨とはなんぞとて切たるか。信連さん候、此程あの御所を、よな〳〵者がうかゞひ候を、何條事のある

べきと思ひあなづつて、要心をも仕候はぬ處に、此夜の夜半ばかりに、何かは知らず、よろうたる者が參百騎ばかり打入て候へば、宣旨のお使と名乘間、當時は竊盜、強盜、山賊、海賊等なんどいふ奴原共が、或は宣旨のお使、或は君達の御いでなんど、兼々名乘と承つて候間、宣旨とは何ぞとて切た（イ切りたん候）候。右大將、宣旨の御使惡口し、廳の下部及傷殺害、旁以奇怪なり、定て宮の御在所をば、しり參らせたるらん、能々責とうて、其後河原に引出し、かうべをはね候へとぞ宣ひける。信連大きにあざわらつて、宣旨のお使惡口し、廳の下部及傷殺害こともなげに候や、かねよき太刀だにも持て候はば、三百人の官人どもをば、よも一人も安穩にては返し候はじ、是は强盜めらおどさんための衞府の太刀にて候へば、何程の事候べき、事々しうとぞ申ける。その上宮の御在所をばしり參らせず候、縱知參らせて候共、侍程の者が、申さじとおもひ切てんずる事を、糺問に及で申べきや、宮の御爲に、かうべをはねられ參らせん事、今生の面目冥途の思出なるべしとて、其後は物も申さず。平家の侍共老少なみ居たりけるが、あつばれ剛の者の手本かなと、口々にほめければ、ある者の申しけるは、あれが高名は、今にはじめぬ事ぞかし、かれが十六の年、大番しうの留かねたる强盜六人を、二條堀川に、只一人追かけ、四人切ふせ、二人を搦取て、其時なされたりし左兵衞尉ぞかし、きられんことのをしさよ〳〵と、口々に惜みたてられて、右大將もさすがをしうやおもはれけん、もしおもひなほつたらば、當家に奉公をも致せかしとて、伯耆の日野へぞ流れける。その後平家ほろび、源氏の世となつて、鎌倉に下り、梶原平三景時について、事の根元をくはしう申たりければ、鎌倉殿、宮の御爲に、志の深き程を感じ給ひて、能登國に御恩ありとぞ聞えける。

競

宮は高倉を上りに、近衞を東へ、川を渡て、如意山にかゝらせおはします。いつならはせ給ふべきなれば、御足かけぬ、腫ぬ、血あえつゝ、歩ぞかねさせ給ひける。夏草のしげみが本の露けさも、さこそは御ところせくおぼしめされけめ。むかし清見原の天皇の、大友の皇子に恐させ給ひて、大和國吉野の山へ、わけいらせ給ひし御事までも、今こそおぼしめしられけれ。しらぬ山路にかゝらせ給ひて、夜もすがらまよはせおはします。とかくして曉がた三井寺へいらせ給ひけり。宮大衆にむかつて、仰られけるは、甲斐なき命の捨がたさよ、衆徒を賴で是まで來れるなりと仰ければ、大衆畏つてうけたまはり、やがて法輪院に御所しつらうておき奉り、供御したてゝ參らせけり。同き十六日に、近衞河原に候ひける源三位賴政入道、家子郎從引具して、都合其勢三百餘騎、館に火かけ、三井寺へこそ參りけれ。年比日ごろもあればこそありけめ、いかなれば今年しも、三位入道、かゝる謀叛をおもひたゝれける、ゆゑをいかにと申に、後日に聞えしは、前の右大將宗盛卿の、不思議の事をのみし給ひけり。されば人の世にあればとて、言まじき事をいひ、すまじき事をする事をば、兼てよくみな人の

思慮あるべき事共也。たとへば其比三位入道の嫡子、伊豆守仲綱の許に、聞えたる名馬あり。鹿毛なる馬のいつき計なるが、名をば木の下とぞ申ける。右大將此よしを傳へ聞給ひて、伊豆守の許へ使者を立て、それに聞え候木の下を、給はつて見候はゞやと、宣ひつかはされたりければ、伊豆守の御返事には、去馬を持て候ひつるを、此程あまりに乘そんじて、いたはらせんが爲に、田舍へつかはして候、やがて召こそのぼせ候はめと、返事せられたりければ、右大將さてはとておはしける處に、平家の侍ども老少並居たりけるが、ある者の申けるは、あつばれ其馬はをとゝひまでも候ひつる物を、きのふも候ひし、けさも庭乘させ候ひつる物をなんど、口々に申あはれければ、右大將、さてはをしむござんなれ、にくし其馬こへとて、或は侍してはせつ、或は文なんとして、日々に五六度なんどぞ、こはれける。父の三位入道殿此よしを聞給ひて、伊豆守をようで宣ひけるは、縱金をもつて馬にしたりといふ共、さやうに人のこばむを、惜むべきやうやある、はや〳〵其馬六波羅へつかはすべしと宣へば、伊豆守の御返事には、まつたう馬のをしきにては候はず、たゞ權威について、こはるゝとなればこそ、いままでもつかはし候はざりつれとて、力及ばず六波羅へ、此馬をこそつかはされけれ。右大將引まはさせ、見るべき程見て、馬はよき馬、たゞしぬしがをしみつる事こそにくけれ、やがて名乘を、かなやきにし候へとて、伊豆守仲綱といふかなやきをしてぞおかれたる。客人來つて、是に聞え候木の下を、給つて見候はゞやと申時は、あの仲綱めが事候か、あの仲綱め引出せ、仲綱めに轡はげよ、うてはれなんどぞ宣ひける。伊豆守此由を聞給ひて、父の三位入道殿に申されけるは、いつか馬をばうてとはいへ共、はれとはいふ、さしも人の身にかへて惜かりつる馬を、權威についてこはるゝをだにも安からず候に、けふ此ごろ仲綱が馬故に、天下のわらはれ草となり候ひぬる事こそ、返々も口惜う候へ、耻を見むよりは、死にをせよと申事の候物をなんど、やう〳〵に申されたりければ、三位入道まことに、人にさやうにせられては、命生ても何にかはせん、さりながら便宜をうかゞふ身にてこそあれとて、おはしけるが、さすが私にてはおもひもたゝで、宮をすゝめまゐらせけるとぞ承る。これにつけても兄の大臣の事をのみぞ、今更忍び申ける。ある時大臣參內のついでに、中宮の御かたへ參らせ給ひたりけるに、何方よりともしらぬ、大きなるくちなはの、大臣のおはしける指貫の左のりんをはひまはりける間、大臣此由かくと申さば、女房達もさわがせ給ひ、中宮も定て驚かせ給ひなんずと、おもはれければ、左の手にては、尾をおさへ、やはら直衣の袖の內に引いれつゝ、御前をついたつてぞ罷出られける。大臣中門におはして、六位や候〳〵とめされけれ共、折節人壹人も候はざりけるに、伊豆守仲綱の、いまだそのころ衞府の藏人にて候はれけるが、仲綱とおいらへ申て參られたり。大臣此くちなはをたぶ。仲綱たまはつて、殿上の小庭をへて、弓場殿に出、みくらの小舍人をめして、これ給はれと宣へば、きやつかしらをふつて逃さりぬ。其後渡邊の競の、瀧口をめして、此くちなはをたぶ。瀧口たまはつて捨

てんげり。次の日のまんだ朝、大臣よき馬に鞍おかせ、太刀一振そへて、伊豆守の許へ送りつかはさるとて、扨もきのふの振舞こそ、いうに見えられ候へ、此馬は乗一の馬なり、夜陰におよんで、陣外より傾城の許なんどへ通はれんずる時、用ひらるべう候と宣ひつかはされたりければ、伊豆守の御返事には、六位の詞、大臣の御返事なりければ、まづ御馬畏うて承り候ひぬ、さてもきのふの御振舞は、還城樂に似て候ひしかとぞ申されける。いかなれば兄の大臣はかくこそゆゝしうおはせしに、御弟の宗盛は、さしも人のをしむ馬をこひとつて、天下の大事に及びぬるこそ淺ましけれ。中にも渡邊の競の瀧口が宿所は、六波羅のうらかきのうちなりければ、おくればせして、留りたるよしを、右大將聞給ひて、競めせとてめされけり。召れて競參りたり。右大將やがて出合、對面し給ひて、など汝は相傳の主三位入道が供をばせで留りたるぞ、いかさまにもぞんずる旨のあるかと宣へば、競さん候、日比は自然の事も候はゞ、まつさきかけて、討死仕るべう存じ候ひつるが、今度は何と思はれ候ひてやらん、此よしかく共しらせられ候はねば、まかり留り候、右大將、年來汝が此邊を出入つるを、あつばれめしつかはゞやとおぼしつるに、當家に奉公をいたせよかし、三位入道が恩には、少もおとるまじきぞとよ、但朝敵三位入道に同心をやすべき、又當家に奉公を致さんとやおもふと宣へば、競、さん候、縦相傳のよしみ候共、いかでか朝敵に同心をば仕り候べき、善惡當家に奉公をいたさうずる候と申たりければ、右大將斜ならずよろこび給ひて入給ふ。競はあるか候〳〵とて、あしたよりゆふべに及まで祇候す。其日の暮がたに、競申けるは、宮弁に三位入道殿、三井寺にとうけたまはり候が、渡邊黨には、ぞんぢやうそれがしたれがしなんどをもせさせられ候はんずらむ、自然の事も候はゞ、えり打なんどをも仕るべう存候が、此程乘て用にあひぬべき馬をもつて候ひつるを、したしき奴にぬすまれて、馬一疋も持候はず、あはれさも然るべう候はゞ、御馬一疋くだし給はり候はゞやと申たりければ、右大將いかにもして、あらせつけばやと思はれければ、白蘆毛なる馬の名をば、南鎌（イなんちやう）とつけて、さしも秘藏せられたりける名馬に、金覆輪の鞍おいてぞたうだりける。競御馬給はつて、斜ならずよろこび、宿所にかへり、哀さらば、日のとうして暮よかし、此馬に打乘て三井寺にはせ參り、宮弁に三位入道殿のまつさきかけて討死せんと、思ひけるこそおそろしけれ。次第にくらうもなりしかば、妻子共をばしのばせて、水に千鳥をおしたる、ひやうもんの直垂に、菊閇大きらかにしてぞ着たりける。重代のきせながら、緋威の鎧をき、鍬形うつたる五枚甲の緒をしめ、いか物づくりの太刀をはき、廿四さいたる大中黒の矢おひ、塗籠籐の弓持て、瀧口がこつはうをわすれじと、鷹の羽にてはいだりける、的矢一手ぞさしそへたる。下人の男に楯脇はさませ、館に火かけ、三井寺へこそ參りけれ。其後六波羅には、競が宿所より、火出來りとて騒動す。右大將まづ、競はあるか。候はずと申す。すはやきやつにだしぬかれつる事こそやすからね、しやつ追かけ、生捕にせよと宣へば、平家の侍共、老少なみ居たりけるが、い

やいや競は聞ゆる大力の剛の者にて、つよ弓精兵也、廿四の矢にては、まづ廿四人は射殺されなんず、音なせそとて、むかふものこそなかりけれ。其後三井寺には、競が沙汰あつて、あつばれ此者一人をば、召具せらるべう候ひつる物をなんど、口々に申あはれければ、三位入道かねてよつく、競が心の底をやしり給ひたりけむ、いたづらにその者、とらへからめられはよもせじ、見よとたんだ今これへ參らうずるものをとの給ふ處に、競つつと參りたり。さればこそとぞ宣ひける。競申けるは、伊豆のかうのとの丶木の下がかはりに、六波羅の南鎭をこそとつてまゐりて候へと申たりければ、伊豆守斜ならずよろこび給ひて、やがて其馬を競にこうて、尾髮を切捨させ、むかしは南鎭、今は平の宗盛入道淨範といふかなやきをして、おなじ十八日のまんだ朝、六波羅の惣門のうちへ追入られたりければ、平家の侍共、是を見付て騷動す。右大將、今度三井寺へよせたらんには、人をばしるべからず、まづ競めを生捕にせよ、鋸にて頸きらんずる物をとて、踊あがり〳〵いかり給へども、いまだ南鎭が尾髮もおひず、かなやきも又うせざりけり。

三井寺より山門へ牒狀

去程に三井寺には、宮いらせ給ひて後、大關小關ほりきつて、貝鐘ならし、大衆おこつて僉議す。近日世上の體を見るに、佛法の衰微王法の牢籠たゞ此時にあたれり。いま淸盛入道が暴惡を禁ずんば、いづれの日か會稽を雪めんや。然るに高倉の宮當寺へ入御の事、是偏に天照太神、正八幡宮、新羅大明神の冥助にあらずや。天神地類も影向をたれ、佛力神力も定て降伏をくはへ給ふべし。抑北嶺は圓頓一味の敎文也、南都は又夏蘭得度の戒定也、牒送の處などかくみせざるべきとて、奈良へも山へも牒狀をこそ送りけれ。まづ山門への狀にいはく、

園城寺牒す延曆寺の衆殊に合力を致して當寺の佛法破滅を助られんと請狀

右入道淨海が爲に、佛法をほろぼし、王法を傾けむとす。內につけ外につけ、歎をなし恨をなす間、愁歎極りなき處に、今月十五日の夜、一院第二の御子、高倉の宮不慮の難を逃むが爲に、潛に入寺せしめ給ふところなり。爰に院宣と號して、出し奉るべき旨しきりにせめありといへ共、衆徒一向是を惜み奉る。仍彼禪門武士を當寺へいれんとす。當寺の佛法の衰微まさに此時にあたれり。諸衆何ぞ愁歎せざらむや。それ延曆園城兩寺は、門跡二に相分るといへ共、學する所は、同じく圓頓一味の敎文なり。譬鳥の双の翼のごとし。又は車の二の輪に似り。一方闕むにおいては、いかでか其歎なからんやは。殊に合力を蒙つて、當寺の佛法破戒を助らるべくんば、年來の遺恨を忘れて、住山の昔に復せん。衆徒の僉議如斯。

治承四年五月の日

とぞかいたりける。

大衆等

三井寺より南都への牒状

去程に山門には、此狀を披見して、何ぞ當寺の末寺の身として、鳥の雙の翼車の兩輪なむどおさへて、書條狼藉也とて、返牒にも及ばず。次に南都への狀にいはく、

園城寺牒す興福寺の衆徒に合力を蒙つて當寺の佛法破滅を助られんとこふ狀

右佛法の殊勝なる事は、王法による。王法又長久なる事も、必佛法による。爰にしきりの年より此かた、平相國禪門淨海が爲に佛法を亡し、朝政を亂る。內につけ外につけ、歎をなし恨をなす間、愁歎極りなき處に、今月十五日の夜、一院第二の御子、高倉の宮不慮の難を逃れんが爲に、俄に入寺せしめ給ふ所也。爰に院宣と號して出し奉るべき旨、しきりにせめありといへ共、衆徒一向是を惜み奉る。仍官軍をはなちつかはさるべき旨、其聞えあり。佛法と云王法といひ、一時にまさに破滅せんとす。それ唐の惠上天子は、官軍をおこして、佛法をほろぼさしめむとせし時、清凉山の衆徒合戰を致して、是をふせぐ。況謀叛八逆の輩においてをや。なかんづく南京例なくして、つみなき長者を配流せらる。この時にあらずんば、いづれの日か會稽を蒙んや。衆徒願は、內には佛法破滅を助け、外には又惡逆の伴類を退ば、同心の至り、本懷に足ぬべし。衆徒の僉議如斯。

治承四年五月の日　　大衆等

とぞかきたりける。

南都より圓城寺への返牒

其後南都には、此條を披見して、東大興福寺々の大衆、集會して僉議す。僉議事終つて後、やがて參るべきよしの返牒をこそ遣りけれ。其狀にいはく、

興福寺牒す園城寺の衙殊に來牒一紙に載られたり

右前の太政大臣平の朝臣清盛が爲に、貴寺の佛法をほろぼさしめむとするよしの事牒す。玉泉玉花兩家の宗議をたつといへ共、金章金句これみな同じく、一大の敎文より出たり。なかんづく南京北京ともに似て、如來の弟子たり。自寺他寺たがひに調達が魔障を伏すべし。抑清盛入道は平家の糟糠、武家の塵芥なり。祖父正盛、藏人五位の家にめしつかへて、諸國受領の策をとる。大藏卿爲房賀州刺吏の古檢非違所に補し、修理大夫顯季播磨大守たりし昔、御厩の別當職に任ず。然るを忠盛昇殿をゆるされんとせしとき、都鄙の老少蓬壺の瑕瑾をしみ、內外の榮華おの〳〵馬臺の晨門になく。忠盛靑雲の翼を刷といへ共、世の爲なほ白屋のたねをかうんじ、名をしむ靑侍其家にのぞむ事なし。しかるに清盛入道、去ぬる平治元年十二月に、太上天皇一戰の功を感じて、不次の賞を授られ給ひしより此かた、高く相國にあがり、かねて兵杖を賜はる。男子或は臺槐を忝く

し、或は羽林につらなり、女子或は中宮職に備り、或は准后の宣を蒙。群弟庶子みな棘路に歩み、其孫彼甥悉く竹符をさく。かみきうしを棟梁し、百司を進退して、みな奴婢僕従となす。一も心にたがへば、王侯といへど是をとらへ、片言耳にさかふれば、公卿といへど是を搦む。しかりといへ共、或は一旦の身命をのびんがため、或は片時の陵辱をまぬかれんと思ひて、萬乗のせいしなほめんてんのこびをなして、重代の家君かへつて膝行の禮を致す。代々相傳の家領を奪といへ共、じやうさいも恐て舌をまき、宮々相承の庄園をとるといへのるあまり、去年の冬十一月に、太上皇のすみかを追捕して、博陸公の身をおしながす、反逆の甚事誠に古今にたえたり。其時我等すべからくは、賊主に行向て其つみをとふべきなり。然りといへ共、或は神慮にあひはゞかつて、わうけむをしやうじ、或は鬱陶おさへて光陰をおくる間、重て一院第二の親王宮を打奉る處に、八幡三所春日の大明神、ひそかに影向をたれ、仙ひつを捧げ、貴寺に送付け、新羅のとぼそにあづけ奉る所なり。是偏に王法つくべからざる旨明けし。隨而貴寺身命を捨て守護し奉る條、含識の類たれか隨喜せざらむや。その時我等遠域にあつて、その情を感ずるところに、清盛入道なほ凶器をおこして、貴寺に亂いらんとする由の事、ほのかに傳へうけたまはり及によつて、かねてその用意を致す。十七日に大衆にふれ、十八日の辰の一點に諸寺に牒送し、末寺に下知し、軍士を得て後案内を達せんとする處に、青鳥とび來て芳翰を投たり。數日の鬱念、一時に解散す。彼唐家清涼一山の蕊蘂、なほぶそうの官兵をかゝす。況和國南北兩門の衆徒、いかでか謀臣の邪類を拂はざらんや。仍てさうろりやうの陣をあはせて、よろしく我等が進發の告を待べし。はやく狀を察して疑貽なる事なかれ。衆徒の僉議如斯。

治承四年五月の日

大衆等

とぞ書たりける。

大衆そろへ

同き廿二日の暮かたに、源三位頼政入道、宮の御まへに參つて、申されけるは、山門は心替りしぬ、南都はいまだ參らず、此寺ばかりにては、いかにもかなひがたし、今は味方に老少二千餘人はあるらん、いざや今夜六波羅へ夜討にせん、まづ老僧共は如意が峯より搦手にむかふべし、若大衆惡僧共をはや事出來たりとて、定てはせむかはんずらむ、其時岩坂櫻本にひつかけ〳〵、たゝかはんまに、伊豆守を大將として、六波羅におしよせ、風上より火をかけて、一もみもうでせめたらんに、などか太政の入道やき出しうたざるべきとぞ申されける。爰に平家の祈しける、一如坊の阿闍梨眞海といへる者あり。僉議の庭にすゝみ出、かう申せば平家の方人するとや思召れ候らん、それはさも候べし、い

かでか我寺の恥をおもひ、門徒の名をもをしまでは候べき、軍は勢にはよらず、はかりごとによると、昔より申傳へて候へば、よく〳〵御要心あつてよせさせ給ふべしと、態夜をふかさんが爲に、さしもなき事をなが〳〵とぞ僉議しける。爰に乘圓坊の阿闍梨慶秀は、裳裝束にかしらつゝみ、大きなる打かたなおしくつろげてさすまゝに、僉議の庭にすゝみ出、證據を外にひくべからず、わが寺の本願、清見原の天皇、大友の王子におそれさせ給ひし時、其勢纔に十七騎、され共伊賀伊勢にいで、美濃尾張の御勢をもつて、大友の王子を亡し、終に御位につかせ給ふ。究鳥懐にいり、人倫是をあはれぶといふ本文あり、自餘をば知べからず、慶秀が門徒においては、今夜六波羅に押寄て討死せよやとぞ申ける。圓滿院の大輔源覺すゝみ出て、僉議端おほし、いそげやすめ、夜のふくるにとぞ申ける。まづ如意が嶺へむかふ老僧共の大將軍には、源三位入道、乘圓坊の阿闍梨慶秀、律藏坊の阿闍梨日印、帥の法眼禪智が弟子義寶、善養を先として、都合其勢六百餘人、甲の緒をしめてぞうつたちける。松坂より向ふ惡僧共の大將軍には、圓滿院の大輔源覺、律藏坊の伊賀の公、法輪院の鬼王佐、彼等三人は、打物とつては鬼にも神にもあはむといふ、一人當千の兵也。平等院には因幡の竪者强大夫、淨喜院の荒佐渡、角の六郎坊、筒井法師に卿公、惡少納言、北の院には金光院の六天狗、大輔、式部、能登、加賀、佐渡、備後等なり。伽耶の筑後、大矢の俊長、日尾の定音、四郎坊、松井の肥後、五智院の但馬、乘圓坊の阿闍梨慶秀が坊に、六十人が内、加賀光乘、

刑部、俊秀、法師原には、一來法師ぞすゝんだる。堂衆には筒井の淨妙明俊、小倉の尊月、尊永、持慶、樂重、金拳の玄永坊、武士には伊豆守仲綱、源太夫の判官兼綱、六條の藏人仲家、其子藏人太郎仲光、下河部の藤三郎清親、渡邊黨には省、播磨の次郎授、薩摩の兵衞尉、競の瀧口、長七、唱、與の右馬允、清、勸、さわぐ、睦、續の源太を先として、都合其勢一千餘人、てんでに纏松をぞもつたりける。去程に三井寺には、宮いらせ給ひて後、大關小關ほりきつて、逆茂木ゆひふさぎたりければ、堀に橋渡し、逆茂木のけむとしけるまに、時刻おしうつつて、せきの雞悉啼あひぬ。伊豆守此由を聞給ひて、爰にて鳥ないては、六波羅へは白晝にこそよせんずらめ、こはいかがせんと宣ふ處に、圓滿院の大輔源覺、しばしとよ、異國にさるためしあり、漢の昭王の御時、孟嘗君いましめを蒙り、めしこめられしに、はかりごとをもつて、逃まぬかれむとせし時、函谷の關に至る。彼關のならひにて、雞の啼ざる程は、關の戸あけてとほす事なし。孟嘗君三千の客の中に、てんかつといへる兵あり。餘に鷄の啼まねを能しければ、人鷄鳴とぞ申ける。いまだ丑の刻ばかりの事なりけるに、てんかつ高き所にはしり上り、射向の袖を二三度ほと〳〵打たゝき、鷄の啼まねをゆゝしくしたりければ、關の鷄聞つけてなきあひぬ。鳥の空音にはかされて、關の戸あけてとほす事あり。これも定てかたきのはかりごとにてもやなかすらん、たゞよせばやといひけれ共、五月の短夜なりければ、夜はほのぼのとぞ明にける。伊豆守、夜討にはさりともとこそおもひしに、晝軍にてはいかにもかなふまじ、

さらば手共をよびかへせやとて、大手は松坂よりとつてかへし、搦手は如意が峯よりひつかへす。伊豆守宣ひけるは、詮する所これは、一如坊が長僉議によつてこそ夜は明たれ、にく〳〵し其坊きれとて、坊におしよせ散々にこそせめたりけれ。ふせぐ所の弟子同宿十餘人討殺さる。一如坊も痛手おうて、はふ〳〵六波羅に參り、此由を申たりけれ共、平家はいとさわぐけしきもましまさず。同き廿三日のまんだ朝、源三位頼政入道、宮の御前に參つて申されけるは、夜討には、さりともとこそ存候ひつるに、晝軍にてはいかにもかなひ候まじ、いまは南都へいらせ給ふべうもや候らんと申されたりければ、宮も、今はの時にもなりしかば、よろづ御心ぼそくや思召れけん、蟬折小枝とて、ふたつの御笛を、さしも御秘藏有けるを、中にも蟬折をば、金堂の彌勒にこめ參らつさせ給ひけり。抑此御笛と申奉るは、鳥羽院の御時、宗朝の御門へ、金を千兩送らせおはしましたりければ、其御返報かとおぼしくて、正身の蟬のごとくに、節つきたりける漢竹を、一よおくらせおはしましたりければ、御門斜ならず御感あつて、吾朝に類あるべからず、重寶をいかでかたゝはえらせらるべきとて、大納言の法印覺宗に課て、壇上にたて七日加持して、ゑらせられたりし御笛なり。さればおぼろけの御遊には、とりも出されざりけるを、ある時の御遊に、高松の中納言實家卿うけたまはつて、此御笛を吹れけるに、唯よのつねの笛のやうに心得て、取忘て膝よりしもにおかれたりければ、笛やとがめけむ、蟬をれにけり。それよりしてこそ蟬折とは名付られけれ。然るを、此宮のつたはらせ給ひて、いつの世までも御身をはなたじとこそ思召れけれ共、龍花の曉、値遇の御爲にと覺て、哀なりし御事なり。中にも乘圓坊の阿闍梨慶秀は、鳩の杖にすがり、宮の御前に參つて申けるは、いづくのうらわまでも、御供仕るべう存候へ共、七旬にあまり行歩も叶ひがたうて候へば、弟子にて候刑部俊秀を參らせ候、此俊秀と申は、東國相模國の住人、山田の須藤刑部の丞俊通が子にて候也、父の刑部丞は、去ぬる平治に義朝につれて、六條河原にて討死仕り候ひぬ、此俊秀は慶秀にいさゝかゆかりあるによつて、幼少よりあとふところにおほしそだてゝ候へば、心の奥までも、よく存しつて候、いづくのうらわまでも召具せらるべう候と、涙もせきあへず申たりければ、宮も又いつのよしみにか、かくは申すらめとて、御涙に咽ばせおはします。是を始として、老僧共はみないとま申て、まかりとゞまり候惡僧共は、皆御供にぞ候ひける。宮の御勢纔に一千餘人には過ざりけり。宮は、いつか御馬にもめしもならはせ給ふべきなれば、寺と宇治との間にて、六ケ度迄御落馬あり。是は去ぬる夜、うちとけ御寢もならざりつるゆゑなりとて、宇治の平等院へいれ奉り、しばらくこれにて御休息あり。

橋合戰

去程に三位入道仲綱以下の武士共は、宇治橋の中三間ひかせて搔楯にかき、馬ひやさせ、くらがひ行ひなんどしける程に、平家のかたには、此由を聞て、あはや高倉の宮こそ、南都へおもむかせ給ふなれ

れ、にく〳〵し其儀ならば、追かけて打奉れやとて、大將軍には入道の三男左兵衞の頭知盛、甥に中宮の亮通盛、弟に蔭摩守忠敎、侍大將には上總守忠清、嫡子太郎判官忠綱、飛驒守景家、其子大夫の判官景高、越中の前司盛俊、次郎兵衞盛繼、武藏の三郎左衞門有國を先として、都合其勢三萬餘騎、治承四年五月廿三日の午の刻ばかりに、木幡山を打越て、宇治橋の爪にぞ押寄たる。むかひの平等院に、かたきありと見てんげれば、平家の侍共、簱のほうたて打たゝき、天もひゞき、大地もゆるぐばかりに、閧つくる事三ケ度なり。平家をひいたぞ、あやまちすな、橋をひいたぞ、あやまちすなと、いひけれ共、ちかき者こそ聞付けれ、後陣はこれを聞つけず、唯おしにおして渡る程に、先陣二百餘騎おし落され、水に溺て流れけり。其後源平たがひに、橋の左右の爪にうつたつて矢合す。源氏のかたには、渡邊黨の射ける矢ぞ、物にはつよくとほりける。三位入道は、長絹の直垂に、しなかはをどしの鎧を着、弓をつよくひかんとて、態甲は着給はず。嫡子伊豆守仲綱は、紺地の錦の直垂に、黑糸威の鎧を着、けふを最後とたゝかはんとて、是も甲はきざりけり。五智院の但馬は、木蘭地の直垂に、緋威の鎧をき、鍬形うつたる五枚甲の緒をしめ、しら柄の大長刀の鞘をはづし、橋の爪にすゝみ出、向ひの岸より、さしつめ引つめ散散に射ける矢の、あがる矢をばついくゝり、さがる矢をばとり越、むかうてくる矢をば、長刀にて切て落す。諸人目をすます。それよりしてぞ、矢切の但馬とは申ける。筒井の淨妙明俊は、からの直垂に、黑皮縅の鎧を着、鍬形うつたる五枚甲の緒をしめ、いかもの作の太刀をはき、廿四さいたる大中黑の矢おひ、塗籠籐の弓に、このむ白柄の大長刀をぞとりそへたる。橋の爪にすゝみ出、大音聲をあげて、物その者にてはなけれ共、宮の御かたに、筒井の淨妙明俊とて、園城寺においては、其かくれなし、平家のかたに、我とおもはむずる人々は、すゝめやむかへ、見參せんとて、矢たばねといて、おしくつろげさしつめ引つめ散々に射けるに、矢庭にかたき十二騎射落し、十一騎に手負せたれば、ひとつはのこつて簱にあり。今は弓をもからと投捨、簱をもといて川へなげいれ、つらぬきぬいて、はだしになり、甲の緒をつようしめける。敵味方あれはいかにと見る所に、橋のゆきけたを、さら〳〵と走り渡る。人は恐てわたらぬを、淨妙が心ちにには、只一條二條の大路とこそは振舞けれ。まづむかふかたきをば、長刀にて四人なぎ、五人にあたるが、三人切ふせ、四人にあたる時、あまり甲の鉢につよう打あて、目ぬきのもとよりちやうとをれ、ぐつとぬけて、川へざんぶとぞ入にける。たのむ所は腰刀、ひとへにしなんとのみぞくるひける。爰に乘圓坊の阿闍梨慶秀が下法師に、一來法師とて、生年十八歲になりけるが、木蘭地の直垂に萌黃の腹卷を着、三枚甲の緒をしめ、打物ぬいて肩になげかけ、是も橋のゆきけたを、さら〳〵と走り渡り、淨妙は立たり、よくべきやうはなかりけり。爰をせんどと戰ひける淨妙が、甲のてつさきに手打かけ、あしう候淨妙坊とて、肩をゆらりと蹈越てぞ戰ひける。淨妙は一來をうたせじとつゝく、一

來は又敵の中にわつていり、さん〴〵にたゝかひ、分捕あまたして、我身も討死してんげり。其間に淨妙は、橋のゆきけたを、はふ〳〵平等院のしばに歸り、物のぐぬきおき、鎧にたつたる矢目をかぞふれば六十三、うらかく矢は五所なり。され共痛手ならねば、かしらをつゝみ、淨衣を着、弓切折て杖につき、あみだぶ申て南都のかたへぞまかりける。其後淨妙が渡つたるを手本にして、かたき味方橋のゆきけたを走り渡り〳〵勝負をす。とほきをば弓にて射、ちかきをば太刀にてきり、熊手にかけてとるもあり、とらるゝもあり、引くんで差ちがへて川へ入者もあり、橋のうへの軍、火出る程にぞ見えたりける。侍大將上總守忠清、大將軍の御まへに參つて申けるは、今は川をわたさんずるにて候が、折節五月雨の比にて、水かさ遙にまさりたり、されば淀いもあらひ河内路へや參り候べきと申ける所に、爰に下野國の住人、足利の太郎俊綱が子に、又太郎忠綱とて、生年十七歳なりけるが、重目結の直垂に、萌黄縅の鎧を着、鍬形うつたる五枚甲の緒をしめ、足しろの太刀をはき、廿四さいたる切符の矢おひ、重籐の弓もつて、連錢蘆毛なる馬の太逞に、金覆輪の鞍おいて、乘たりけるが、すゝみ出て申けるは、惡うも申させ給ひたる上總殿かな、されば淀芋洗河内路をば、天竺震旦の武士が參つて渡すべきか、それもおもふに、我等こそ渡さんずれ、目の前なる敵をのがし奉つて、南都へ入參らせなば、吉野とつがはの御勢がまゐりては、いよ〳〵味方の御大事なるべし、東國にはとね川と申大川あり、この長井の渡り、杉の渡りとて、ともに大事の渡あり、先年秩父と足利中をたがひ、合戰を仕り候ひしに、足利、新田の入道をかたらうて、大手はこの長井の渡り、杉のわたりへは新田の入道、搦手にまはり候ひしに、すぎの渡りにいくらも用意したりし船共を、秩父が方よりわられて、新田の入道の申しは、川をへだてたる軍に、船がなければとて、淵瀬をきらふやうやある、水に溺て死なばしね、いざわたらむとて、大勢が馬筏をつくつてわたせばこそ、とね川をも渡しけめ、此川の體を見るに、とね川には幾程まさじおとらじな、殿原いざ渡さんとて、手綱かいくり、大勢がまつさきにこそ打いれたれ。續く兵たれ〳〵ぞ、大胡、大室、深須、山上、那波の太郎廣澄、佐貫の四郎大夫、小野寺の禪師太郎、へやこの七郎、郎等には、とねの六四郎、きりやた五郎、宇夫方次郎、大岡の安五郎を先として、都合其勢三百餘騎、鐘ならべて打入たり。足利鐙踏張つゝたちあがり、大音聲をあげて下知しけるは、つよからむ馬をば上手にたてゝ、弱からん馬をば下手になせ、馬の足のおよばん程は、手綱をくれて歩ませよ、はずまばかいくつておよがせよ、さきなる馬の尾に取つけ、鞍つぼに水しどまば、さうづにのりさがつて、馬にはよわく水にはつよくあたるべし、鞍つぼに乘定まつて、鐙をつよくふめ、馬のかしら沈まば引あげよ、いつたうひいてひつかつぐな、川中にて敵射る共相引すな、甲のしころをかたぶけよ、いつたうかたぶけて、てへん射さすな、かねにわたいて、あやまちすな、水にしなうて渡すべし、わたせや〳〵と下知しつゝ、三百餘騎を一騎も流さず、向ひの岸にさつと渡す。

宮の最後

其後足利高き所に打あがり、鞭にて鐙の水なでくだし、鐙踏張つつ立あがり、大音聲をあげて、是はむかし朝敵將門を平げて勸賞蒙りたりし、俵郷太秀卿に五代の末葉、下野國の住人、足利の太郎俊綱が子に、又太郎忠綱とて、生年十七歳にまかりなる、かやうに無官無位なる者の、宮にむかひ奉つて、弓を引矢をはなつ事、冥顯につけて其恐すくなからず候へ共、弓も矢も冥加の程も、平家太政の入道殿の御身のうへにぞ候らん、宮の御かたに我と思はん人々は、すゝめやむかへ、見參せんとて、平等院の芝におしよせ、火出る程にぞ戰ひける。是を始として、二萬餘騎の兵共も、皆打いれ〳〵渡しければ、さしもにはやき宇治川なれ共、馬人にせかれて、水は上にぞたゝへたる。おのづからはづるゝ水には、なんにもたまらず、おし流さる。其中に伊賀伊勢の兵六百餘騎、馬筏おしやぶられ、水に溺れて流れけり。萌黄、緋縅、赤威、色々の鎧甲のうきぬしづみぬながれけるは、神南備山のもみぢばの、峯の嵐にさそはれて、立田の川の秋の暮、井堰にかゝつて流もやらぬにことならず。中にも緋縅の鎧着たりける武者三人、宇治の網代にかゝつてゆられけるを、伊豆守見給ひて、

伊勢武者はみな緋縅の鎧着て宇治の網代にかゝりぬるかな

是は日野の源三、鳥羽の源六、黒田の五郎四郎と申者也。中にも黒田はふる兵なりければ、弓の筈を

岩のあひにねぢたて、我身もあがり、殘り二人をもたすけるとぞ承る。去る程に三位入道は、咏方の軍まけ色に見えしかば、かなはじとや思はれけん、若大衆惡僧共廿餘人つけ奉つて、宮をば南都へ先だて奉り、我身は子供郎從殘留て、防矢射けり。中にも三位入道の次男源大夫の判官兼綱は、赤地の錦の直垂に、黒糸縅の鎧を着、鍬形うつたる五枚甲の緒をしめ、鮫作の太刀をはき、廿四さいた大中黒の矢をおひ、塗籠籐の弓に、白柄の大長刀の鞘をはづいて、父の三位入道殿にかゝりける敵に、返しあはせ〳〵散々にたゝかはれける處に、平家の侍大將上總守忠清がよつぴいて射ける矢に、内甲を健に射させて、ひるみ給ふ所を、上總守が童落やうて、源大夫の判官とむずとくむ。判官は手はおはれたりけれ共、聞ゆるしたゝかな人にておはしければ、とつておさへ、童が頸かききつてなげのけ、おきあがらんとし給ふ處を、上總守が郎等あまた落合て、源大夫の判官のくびをとる。三位入道此よしを見給ひて、萬こゝろぼそくやおもはれけん、弓矢になつゝ打物になつゝ、たゝかはれけるが、かたき四五騎きつておとし、我身も痛手おひければ、平等院の芝に歸り、物具ぬぎおき、渡邊の長七唱をめして、はや〳〵汝かたきの手にかけで、わが頸うてと宣へば、唱なく〳〵、御頸給はつゝ共存候はず、御自害だにも候はゝと、涙もせきあへず申たりければ、三位入道さらばとて西にむき、かうじやうに念佛數百遍となへ給ひけるが、念佛をとゝめ、最後の詞ぞ哀なる。

埋木の花さく事もなかりしにみのなる果ぞかなしかりける

其後太刀のきつさきを腹におしあて、うつぶしにふしつらぬかつてぞうせられける。今年七十五にぞなられける。かならずそこにて歌讀べきにはあらね共、わかうよりすかれたりければ、最後迄もわすれざりけりと哀なり。唱泣々御頸給はつて直垂につゝみ、大きなる石にくゝり合て、宇治川のふかき所にしづめてんげり。去程に三位入道の嫡子、伊豆守仲綱は橋の上にてたゝかはれけるが、敵七八騎切てておとし、我身も痛手おひければ、平等院の芝に歸り、物具ぬぎおき、自害してこそうせたりけれ。其頸をば、下河邊の藤三郎清親とつて、平等院の釣殿のしたへぞなげいれたる。中にも六條の藏人行家、其子藏人太郎仲光は、大勢の中にわつて入、散々にたゝかひ、敵四五騎切て落し、一所に討死してんげり。此藏人と申は、故六條の爲義が次男、故帶刀先生義賢が嫡子、木曾の冠者には兄なりけり。三位入道幼少より扶持して、藏人にもなしたりしかば、其恩を忘れじと、今度同心して討死したりけるこそ哀なれ。中にも渡邊競の瀧口をば、平家いかにもして生どつて、右大將殿の見參にいれんとおもひあはれけるに、競きに心得てんげれば、手にもたまらずかけまはる。大勢の中にわつていり、西より東へ一わたり、北より南へ一わたり、とつてはかへし、わつてはとほり、さんざんに戰ひ、敵十四五騎きつて落し、我身は深手も薄手もおはすして、平等院の芝に歸り、三位入道のむくろの邊にちかづき、日比は一所にと契り奉りし事なればとて、腹十文字にかききつて、同じ枕にふしにけり。中にも圓滿院の大輔源覺は、釣殿にたつたりけるが、長刀の柄くきみじかにとりなし、大勢の中にわつていり、散々に戰ひ、一方打やぶつて、うらへつゝと出、川へざんぶとぞ飛入ける。敵咻方、あはや源覺こそ自害してんげると申けるに、物具をもぬかず、具足ひとつも捨ずして、水の底をくゞつて、向ひの岸に渡りつき、壇にあがり長刀打ふり、いかに平家の人々、是までは御大事かようとて、寺のかたへぞまかりける。中にも平家のかたの侍大將、飛驒守景家は、ふる兵なりければ、今は定て宮は南都へぞさきだたせ給ふらんとて、五百餘騎にて追かけ奉る。案のごとく光明山の鳥居の前にて追付奉り、さしつめ引つめ散々に射奉る。たが射る矢とも見えざるに、しらはの矢一筋來つて、宮の御そば腹にたちければ、やがて御馬より落させ給ひけり。平家の兵あまた落合て、宮の御頸給はりけり。黒丸と申す童も、爰にて討死す。刑部俊秀もうたれにけり。若大衆惡僧共二十餘人つき奉りたりけるも、もるゝは一人もなかりけり。みな一所にてぞうたれにける。中にも宮の御乳人子、六條の佐の大輔宗信は、天下第一の大臆病者なりければ、宮はうたれさせ給ひしか共、自害をもせず討死をもせで、馬にまかせて落行程に、馬はよわし敵はちかづく、かなはじとやおもひけん、にいのが池に飛入て藻引かづき、目わづかに見出してぞ居たりける。池のはたを打過々々しける敵の中に、遙にひきさがつて、五百騎ばかり打とほりける敵の中を見けるに、淨衣き給へる人の頸もなきを、蔀の本にかいてとほる。あれはいかにと見奉るに、是ぞ我しうの宮にて渡らせ給ひける。われ死なば御棺に入よと仰成し小枝と聞えし御笛も、いまだ御腰にぞさゝれたる。やがてはしりも出て、とりつき

奉らばやとはおもひけれ共、それもさすがおそろしければ、唯水の底にて、蛙と共にぞなき居たる。敵みな打とほりてのち、池よりあがり、ぬれたる物共しぼりきて、ゆふべにおよんで都へ入。にくまぬ者こそなかりけれ。去程に南都の大衆、宮の御迎に參りけるが、都合其勢七千餘人、先陣は木津にすゝめば、後陣はいまだ興福寺の南大門にぞさゝへたる。され其宮ははや光明山の鳥居の前にて、うたれさせ給ひぬと聞えしかば、大衆力及ばず、涙をおさへて引かへす。今五十町が間を待つけさせ給はずして、討れさせ給ひける宮の御運の程こそうたてけれ。

若宮の沙汰（あひ）

去程に、平家の侍共は、伊豆守以下、兵五百餘人が、頸とつて、其日の夜に、いつて都へ入、平家のゆかりの人々、勇のゝしり給ふ事、斜ならず、中にも、三位入道の頸は、大きなる石に、くゝりあはせて、宇治川の、ふかき所に、沈めてんげれば、なかりけり、但宮の御頸、見知奉つたる者ぞ、なかりける、典藥頭貞成が、御療治の、御爲にとてつねは、參りたりければ、是ぞ定て、見知奉りたるらんとて、めされけれ共、現所勞とて、參らず、一とせ御額に、あしき御瘡の、出來させ、給ひたりしをも、此貞盛が、やう〳〵に、療治申てこそ、今までも、安穩には、渡らせ給しを、今度あへなう、失ひ奉りけるこそ、淺ましけれ、去程に、伊與守（イ伊豆守）盛敎の娘、三位の局とて、八條の、女院に、さぶらはれけるを、宮、よな〳〵めされければ、打つゞき、若宮三所、出來させ給ひけり、是ぞ定て、見知給ひたるらんとて、尋出し奉る、この女房、ある頸を、一目みて、涙にむせばれけるにぞ、宮の御頸とは、しりてげる、此女房をば、御子の、宮たちをも、我御子のごとく、おぼしめしつさせ、給ひけり、中にも、今年七歳に、ならせ給ひける、若宮の、渡らせ給ひけるを、入道、弟池の中納言賴盛を、もつて、若宮とう〳〵、出し參らつさせ、給ふべきよしを、申されたりければ、女院いざとよ、それはさやうの事の、聞えうる、曉がた、乳人の女房が、心をさなくも、取奉りて、何かたへか、行ぬらん、行方も、しらずとぞ、仰ける、此賴盛の卿と、申は、女院の御乳人、持明院の宰相殿に、あひぐせられたりければ、日比は、さしもむつまじう、おぼしめされけるに、今、この若宮の御事、申されければ、いつしか、あらぬ人の、やうにうとましうぞ、思し召れける、中納言、六波羅に歸り、參つて此よし、申されたりければ、入道、大きに、いかつて何條、その御所ならでは、いづくにか、渡らせ給ふべき、其儀ならば、御所中を、さがし奉れとぞ、宣ひける、中納言、又、御所に參り、門前に、兵おきなんどして、此よし申されたりければ、若宮申させ給ひけるは、なじかは、苦しう候べき、只とく出させ、おはしますべしと、申させ給ひければ、女院いとほしや、われからに、大事の、出來る事を、淺ましう、おぼしめして、たゞとく、出すべしなんど、宣事の、いとふし

さよ・なにしにか・かくうき人を・此六七年・手ならし奉つて・今かくうきめを・見る事よとて・御なみだに・咽ばせおはします・御母儀三位の局の御事は・中々申に及ばず・女官たち・局の女房・めのわらはに至るまで・みな袖をぞ・ぬらしける・中納言も・さすが岩木ならねば・世にも哀に・思はれけれ共・さてしもあるべきならねば・若宮・ひとつ事に・のせ奉つて・六波羅へ具足し奉らる・前の右大將宗盛の卿・此若宮を・み奉つて・哀におもひ・參らせられければ・父の御前におはして・哀此宮の・御命をば・宗盛に・たび候へかしと・申されければ・入道さらば・やがて御出家・せさせ奉れとぞ・宣ひける・右大將・このよしを・女院へ・申されたりければ・女院斜ならず・御よろこばせおはしまして・只ともかうも・よきやうにとぞ・仰ける・やがて仁和寺殿にして・御出家せさせ奉る・安井の宮・道尊と・聞えしは・此若宮の御事也・又奈良にも・一所・わたらせ給ひけれ・是をば・御乳人子の・讃岐守家秀・取奉つて・北國に・落下りしを・木曾これをば・我しうに・し奉らんとて・とり奉つて・越中國宮崎と・いふ所に・御所・しつらうて・おき奉りたりしが・一とせ・木曾上洛の時・具足し奉つて・都に上り・還俗せさせ奉る・さてこそ・還俗の宮とも申し・又は木曾が宮とも・申しき・後には・嵯峨の邊・野依と・云所に・わたらせ給ひければ・人野依の宮とぞ申ける・扨も・少納言維長は・宮をば・あしう見損じ奉りたる物かなと・中比・等從(イ通乘)と・聞えし相人は・大二條殿をば・三代の關白・御年八十・帥の內の・大臣をば・流罪の相・渡せ給ふと・申たりしに・たがはず・むかし聖德太子・崇峻天皇を・見參らつさせ給ひ・君は橫死の相・わたらせたまふと・申させ給ひたりしは・馬子の大臣に・ころされ・させ給ひけり・昔はさせる相人と・しもは・なけれ共・さもしかるべき人は・みなかくこそ・ゆゝしう・渡らせ給ひしに・是は・少納言維長が・僻事也とぞ・人申ける・彼彙明親王・具平親王は・賢王聖主の・御子にて・前中書王・後中書王とて・ともにめでたう・渡らせ給ひたりしかども・いつか・御謀叛おこさせ・たまひたりし

三井寺炎上

後三條院の・第三の王子・資仁の親王と・聞えしは・御心も剛に・御才學も・ゆゝしう渡らせ・給ひしかども・白河院・何とかおもひ參らつさせ給ひたりけむ・終に御位にも・つけ參らつさせ・給はず・されば・其御心を・慰參らせんとにや・御子・花園の左大臣殿に・源氏の姓を・さづけ・參らつさせ給ひて・無位より三位して・やがて・中將に・なし參らつさせ給ひけり・昔より・一世の源氏の・無位より三位に・なる事は・嵯峨の・天皇の御子・陽成院の大納言定の卿の外は・うけたまはり及ばず・同き廿四日に・除目おこなはれて・前の右大將宗盛の御子・侍從清宗・生年十二歲に・ならればれるが・三位して・三位の侍從とぞ・申ける・父の卿は・此齡にては・纔に・兵衞佐にてこそ・おはせしに・ここそ代を・とる人の・子ならんからに・おそろしゝとぞ・人申ける・是は・源の茂仁・三位入道

以下・追討の賞とぞ・聞えし・同き廿五日に・源の茂仁・三位入道以下・調伏せられたりし・貴僧高僧たちに・勘賞おこなはれけり・此源の茂仁と申は・高倉の宮の御事也・まさしく・一院第二の御子にて・わたらせ給ひけるを・九重のうちを・追出し奉つて・失ひ奉るのみならず・凡人に・さへ成・參らせぬる事こそ・口惜けれ・日比は・山門の大衆・聊の事もあれば・猥うつたへ仕るが・今度は・穩便の儀を・存じて・音もせず・しかるに南都・三井寺は・或は宮を・扶持し奉る・或は御迎に・參る・是偏に・朝敵なりとて・奈良をも・寺をも・發向あるべしとぞ・聞えし・平家さらば・まづ・園城寺を・發向せよやとて・大將軍には・入道の三男・左兵衛の頭知盛・弟に薩摩の守忠敎・侍大將には・越中の前司・盛俊・次郎兵衛盛嗣・上總の五郎兵衛忠光を・先として・都合其勢・三千餘騎・同き五月廿七日に・園城寺へ・發向せられけり・寺にも・大關・小關・ほりきつて・逆茂木・ひいて・待かけたり・防ぐ所の・大衆三百餘人・討殺さるる・其後・寺中に亂いつて・火をはなつ・燒る所は・どこ〳〵ぞ・本覺院・眞如院・常喜院・大學院・華音院・普賢院・青龍院・金剛王堂・慶足坊・敎待和尙の本坊幷に・御本尊・護皇善神の・社壇・八間四面の・大講堂・鐘樓・經藏・二階の樓門・灌頂堂・すべて・堂舍塔廟・合て・六百廿七宇・大津の浦の・西の在家・二千八百五十三宇・悉地を拂ふ・其中に・金堂一宇・やけ殘りけるこそ・ふしぎなれ・大師の渡し給へる・一切經・七千餘卷・佛像・二千餘體も・忽に・煙となるこそ・かなしけれ・法文聖敎の・燒る煙には・大梵天王の・眼も・くれ・諸天五妙の・樂も此時・永く亡じ・堅牢地神の膽・頻にこがれ・龍神三熱の苦も・まさるらんとぞ・覺えたる・三井寺は是・近江の義大領が・私の寺たりしを・天智天皇へ・寄奉つて・御願となす・本佛は・彼御門の・御本尊・正身の彌勒とぞ・聞えさせ給ひし・しかるを・敎待和尙・百六拾年・おこなうてのち・智證大師に・附屬し奉る・觀史多天上摩尼寶殿より・天降らせ・給ひて・遙に・龍華下生の・曉を・またせ給ふ・天智・天武・持統・是三代の御門の・御うぶ湯を・召れたりしに・よつてこそ・三井寺とは・名付られけれ・かく・めでたかりし・聖跡も・今は何ならず・顯密須臾に・亡びて・伽藍更に・跡も・なし・三密の導場も・なければ・振鈴の響も・たえ・一夏の佛前も・なければ・閼伽の音も・せざりけり・宿老碩德の・名師は・行學に・別れ・受法相承の・弟子共は・經敎にこそ・わかれんだれ

あひ

僧綱十二人闕官せらる。惡僧共には、筒井の淨妙明俊を先として、卅餘人を禁獄せらる、三位入道宮をば、さしもたのもしげに申て、すゝめ參らせたりけれ共、遠國はしらず、近國の源氏だにも參らねば、宮をもあへなううしなひ奉り、我身も子孫も、悉ほろびぬるこそ淺ましけれ。

鵺

抑源三位頼政入道の、一期の間高名とおぼしき事おほき中にも、殊には近衛院の御時、主上夜な夜なおびえさせ給ふ事あり。件の御惱は、東三條の木村より、黒雲一村御殿のうへに、おしおほふとおぼしき時は、主上いよ〳〵おびえさせ給ひけり。是によつて山門南都の貴僧高僧に仰て、大法秘法修せられけり。又武士をもつても警固あるべしとて、源平兩家の兵をぞ召れける。頼政の卿のいまだ其比兵庫頭たりし時、めしぬかれて參る。是は堀川の天皇の御宇、寛治の比かとよ、主上かやうにおびえさせ給ふ事あり。其時の將軍義家の朝臣をぞ召れける。香の狩衣の袖ながやかにかいつくろひ、南殿に祇候して、鳴弦する事三度の後、是は前の陸奥の國の守源の義家の朝臣ぞやと、高聲に三ケ度まで、のゝしつたりければ、御惱やがておこたらせ給ひけり。今度其例とぞ聞えし。頼政申けるは、朝家に武士おかるゝ事は、違勅の輩をしりぞけ、又は逆叛の者を、しづめられんが爲にてこそあるに、目にも見えぬ變化の物射よとの勅定こそ、しかるべからね、とは申ながら綸言そむきがたうして、白襖の狩衣の袖長やかにかいつくろひ、たのみきつたる郎等、遠江國の住人井の隼人に、ほろのかさきりにてはいだりける矢一腰おほせ、塗籠籐の弓に、山鳥の尾にてはいだりける鏑矢ふたつとりそへ、南殿に祇候して、夜ふくるまゝ世間を窺見る程に、案のごとく、其夜の夜半ばかりに、東三條の木村より黒雲一むら、御殿のうへに五丈計ぞたなびいたる。雲すきに見ければ、雲のなかに姿ある物あり、頼政とがり矢をとつてうちつがひ、よつぴいてひやうと射る。ふつとあたる。頼政えたりやおうと矢さけびをこそしたりけれ。やがて矢たちながら庭上へどうとおつ。井の隼人つゝとよりとつておさへ、腰の刀をぬき、つかも拳もとほれ〳〵と、九刀ぞさいたりける。其後てんでに火をとぼして見給へば、かしらは猿、むぐろはたぬき、尾はくちなは、足手は虎のごとくにて、啼聲鵺にぞにたりける。希代不思議の物なりけり。御惱やがておこたらせ給ひけり。主上御感のあまりに、獅子王と申御劍を、頼政にこそ下されけれ。らいちやうの左府給り、ついで御殿のきざはしを、なから計おり下らせ給ひて、頼政にたまはしける。比は卯月十日餘の事にてもや候ひけん、郭公雲井に二聲三聲おとづれてすぎければ、やがて左大臣殿、

時鳥名をも雲井にあぐるかな

と仰られ懸たりければ、頼政かしこまつて承り、元より好む事なれば、月をそばめにかけて、

弓はり月のいるにまかせて

とつかまつて、御劍を給はつてまかりいづ。其後件の變化の物をば、うつぼ船にいれて、西の海へぞ流されける。其時の勸賞には、丹波の五かの庄をぞ給はりける。又二條院の御宇、應保の比かとよ、鵺と申す化鳥が、よな〳〵陣頭にないて、しば〳〵宸襟をなやまし奉る。先例にまかせて、又頼政を

ぞ召れける。頼政申けるは、源平兩家の中より、めしぬかれて參る事、身の面目とは申ながら、射おふせん事不定、射損せむ事は決定なり、只今射損ずるほどならば、弓きりをつて山林に交るべし、さるにても八幡大菩薩あはれみをたれさせ給へと、心中に祈せいして、又南殿に祇候す。比は五月二十日あまりの事なれば、五月雨さへにかきくれて、目ざす共しらぬ闇なるに、件の化鳥が、たゞ一聲おとづれて、二聲ともなかざれば、いづくにあり共知がたし。姿もかたちも見えざれば、いづくを矢坪と定めがたし。頼政はかりごとに、鏑をとつて打つがひ、よつびいてひやうと射る。鵺かぶらの音に驚いて、虚空にしばらくひゝめいたり。つぎに小鏑をとつて打つがひ、よつびきしぼしたもつて、ひいふつとぞ射落したる。御悩やがておこたらせ給ひけり。主上御感の餘りに、御衣を一領頼政にこそ下されけれ。今度は大炊の御門の右大臣公能公賜り續で、御殿のきざはしを、なから計おり下らせ給ひて、頼政にうちかづけさせらるとて、昔の養由は雲の外なる雁を射、今の頼政は雨の中に鵺を射得たりとぞ仰ける。やがて右大臣公、

五月やみ名をあらはせるこよひかな

と仰られかけたりければ、頼政畏つて承り、

たそがれ時もすぎぬとおもへば

とつかまつて、御衣を給つてまかりいづ。頼政弓矢をとつて天下に名をあぐるのみならず、歌道のかたにも、優にやさしかりけりと、禁中さゝめきあへり。其時の勸賞には、若狹の藤宮川をぞ賜りける。抑此頼政の卿と申は、攝津守頼光に五代の孫、前の參河守頼綱の孫、兵庫頭仲政の朝臣の子なり。保元にまつさきかけたりしか共、させる御恩にもあづからず、平治におほくの親類を捨て味方に參りたりしか共、恩賞これおろそかなり。重代の職なれば、大内の守護承はつて年久し。され共昇殿をばゆるされざりしかば、遙にとしたけ齢かたぶいて後、述懐の和歌一首讀てこそ、昇殿をもゆるされたりしか。

人しれず大内山の山守は木がくれてのみ月を見るかな

と仕つて、四位してしばらく候ひけるが、又三位を心にかけて、

のぼるべき便りなければ木の下に椎を拾ひて世をわたるかな

と仕つて三位になされ、出家して法名性蓮とぞ申ける。丹波の五ケの庄、若狹の藤宮川、伊豆國をも知行して、子息仲綱受領になし、さてあるべかりし人の、よしなき謀叛おもひたち、宮をもあへなう失ひ奉り、我身も子孫悉亡びぬるこそ淺ましけれ。

巻第五

都遷

治承四年・六月三日の日・入道相國の・年來執しえし兼ては・三日と定られたりしか共・今一日引あげて・二日の日の・卯の刻に・行幸なる・主上幼主の時の・御同輿には・母后とて・母の后の・忠卿の・北方・帥の佐殿ぞ・御同輿には・參らせ給ふ事なるに・今度は・其儀なし・平大納言時の弟・池の中納言賴盛の卿の・宿所・皇居になる・同き四日の日・家の賞とて・除目おこなはれける・賴盛の卿・正二位し給ふ・九條殿の御子・右大將能通の卿・越られさせ・給ひけり・昔より・攝籙の君達の・凡人に・加階・越られさせ・給ふ事・是始とぞ・うけたまはる・去程に・法皇は・城南の離宮に・おしこめられて・渡らせ給ひたりしを・前の右大將宗盛の卿・をりふし・申されしによつて・鳥羽殿をば・出し奉つて・八條烏丸の・美福門院の御前へ・入奉りたりしが・今度は・高倉の宮の・御謀叛によつて・福原へ・御幸なし奉り・四面に・はた板おし・口ひとつある・三間の板屋を・作つて・

追籠奉つて・置奉り・守護の武士には・原田の・太夫・種直ばかりぞ・候ひける・童部共は・福原の・籠の・御所とぞ・申ける・聞も・世におそろしう・淺ましかりし御事なり・去まゝには・法皇萬機の御政をば・露しろしめさず・只山々・寺々・修行して・心のまゝに・なぐさまばやとぞ・仰ける・入道相國の・あく行に・おいては・はや皆極りぬ・關白・流し奉つては・聟を關白に・おしなし・剩・一院第二の御子・高倉の宮をば・九重の內を・追出し奉つて・失ひ奉る・のみならず・凡人にさへ・なし參らせぬる・事こそ・口惜けれ・今殘る所とては・都遷しは・これ先蹤・なきにあらす・神武天皇は・地神五代の帝・彦波限建鵜茅不葺合の尊の・第四の王子・御母は・玉依姫・天神七代・地神五代・神の代・十二代の跡を・うけ・人代百王の・帝祖也・辛酉の年・日向國・宮崎の郡にして・皇王の寶祚を・つぎ・五十九年と・いつし・己未の年・十月に・東征して・此比・大和國と・名付たり・豐蘆原・中津國に・とゞまつて・うねびの・山を・點し・舊都(イ帝都)を・たて・柏原の地を・切拂て・宮室を・作り給ふ・是を・柏原の宮とは・名付られけり・爾來此かた・代々の御門の・都を・他國・他所へ・遷さるゝ事・三十度に餘り・四十度に・及べり・神武天皇より・景行天皇まで・十二代は・なほ・同き國・郡々に・都をたてゝ・他國へはうつされず・然るを・成務天皇元年に・近江の國に・うつゝて・志賀の郡に・都を建つ・仲哀天皇二年に・長門國にうつゝて・豐良の郡に・都を建つ・其國の・彼郡にして・御門・かくれさせ給ひしかば・后・神功皇后・女體として・御

譲を・うけさせ給ひ・新羅・百濟・高麗・けい丹を・始として・異國の軍を・平げさせ・給ひて・其後我朝・筑前國・三笠の郡にして・王子・御誕生あり・それよりしてぞ・其處を・うみの宮とも・申也・御位の後は・應神天皇とも・申き・かけはくも・かたじけなく・ましますと・八幡の御事これなり・仁徳天皇元年に・攝津國・難波に・うつゝて・高津の宮に・すみ給ふ・履仲天皇二年に・なほ・大和國に・河内國に・うつゝて・十市の里に・住給ふ・反正天皇元年に・柴垣の里に・宮居・し給ふ・允恭天皇四十二年に・なほ・大和國に・うつゝて・とぶとりの・飛鳥の宮に・住給ふ・雄略天皇廿一年に・なほ・同き國・はつ瀬・朝倉に・都をたつ・繼體天皇五年に・山城國・つゞきに・うつゝて・十二年・其後・乙訓に・住給ふ・宣化天皇元年に・檜隈の・入野の宮に・住給ふ・欽明・敏達・用明・崇峻・推古・舒明・皇極・まで・七代は・なほ大和國に・うつゝて・檜隈の・入野の宮に・住給ふ・欽明・敏達・用明・崇峻・推古・舒明・皇極・まで・七代は・なほ・同き國に・都をたてゝ・他國へは・遷されず・然るを・孝徳天皇・大化元年に・攝津國・長良に・うつゝて・豊崎の郡に・都を・たつ・齊明天皇二年に・なほ・大和國に・うつゝて・岡本の宮に・住給ふ・天智天皇・六年に・近江國に・うつゝて・大津に宮を・造り給ふ・天武天皇・元年に・なほ・大和國に・かへつて・岡本の・南の宮に・住給ふ・持統・文武・二代の聖朝は・なほ・同き國・藤原の宮に・住給ふ・元明元正・聖武・孝謙・廢帝・稱徳・光仁まで・七代は・なほ同き・國・奈良の都に・住給ふ・然るを・桓武天皇・延暦三年・十一月一日の日・奈良の京・春日の里より・山城國・長岡の京に・うつゝて・十年・此都に・住給ふ・同き延暦十三年・正月の三日のこさびを・つかはして・當國葛野の郡・宇多の村を・見せしむるに・兩人共に・奏して・いはく・此地の體を・見候に・左青龍・右白虎・前朱雀・後玄武・四神相應の地なり・尤・帝都を・求るに・足れり・仍乙訓の郡に・おはします・賀茂の大明神に・申させ給ひて・同き延暦十三年・十一月廿日の日・長岡の京より・今の・平安城に・うつゝて・帝王卅二代・星霜・三百八十餘歳の・春秋を・送りむかへてぞ・ましくける・しかつしより・此かた・代々の御門の・都を・他國・他所へ・遷されしかども・かゝる・勝地は・いまだなしとて・桓武天皇・殊執し・おぼしめして・まづ・長久なるべき・術とて・大臣・公卿・諸道の・才人に・仰て・土にて・八尺の・人形を作らせ・鐵の甲冑を・きせ・おなじう・鐵の弓箭を・もたせて・東山の峯に・西向に・たてゝぞ・うづませられける・是は末の世に・此都を・他國へ・遷す者・あらば・かならず守護神と・下に・事の・出こんとては・此塚かならず・鳴動す・將軍が塚とて・今にあり・桓武天皇は・平家の曩祖にてぞ・ましましける・平安城と・名付ては・たひらかにやすき・都と・かけり・尤平家の崇べき都ぞかし・嵯峨の天皇の御時・平城の先帝・世を亂らむと・せさせ給ひしに・大臣・公卿・諸國の人民・悉・おこつて・背・申せしかば・終に・うつさせ給ひし時・大臣・公卿・諸國の人民・悉・おこつて・背・申せしかば・終に・うつさ遷さんと・せさせ給ひしに・都を・他國・他所へ・それで・やみにき・忝も・一天のきみ・萬乗の・あるじだにも・たやすく・うつし得給はぬ・都を・何

ぞ・大政の入道・人臣の身として・輒遷されけるこそ・不思議なれ・いかさまにも・是は諸國の夷賊・責上り・平家・都の内を・追出され・山林に交べき・前表かとぞ・上下さゝやき・あへりける・あはれ舊都は・めでたかりし・都ぞかし・王城守護の鎭守は・四方に光をやはらげ・靈驗殊勝の寺々は・上下に甍を・ならべたり・百姓・萬民・煩なく・五畿・七道も・便りあり・人々の家々をば・賀茂川・桂川に・壞いれ・筏にくみ・浮べ・資財・雜具を・船に積て・福原へ運び下され・たりければ・花の都も・たゞなりに・田舍と・なるこそ・悲しけれ・辻々ほり切・逆茂木・ゆひふさぎ・たりければ・車なんどの・輪のかよふ事もなし・たまゝ〳〵・ゆく人は・みな小車にのつて・道を・へて・こそとほられけれ・又何者がしたりけん・ふるき都の・内裏の柱に・二首の歌をぞ・書ける・

百年を四かへりまでに過來にし・をたぎの里のあれやはてなむ・

咲出る花の都をふりすてゝ・風ふくはらの末ぞあやうき・

されば共・福原には・新都の・事始め・あるべしとて・奉行の辨には・藏人の左小辨行隆頭の・右中辨光政・官人共・相具して・當國和田の・松原の・西の野を點し・九重の地を・わられけるに・一條より始て・五條までは・ありしか共・それより・しもは・なかりけり・行事官・かへり參つて・此由を・奏し・申たりければ・さらば・播磨の印南野か・なほたう國・崑陽野か・なんど・さた有しか共・とみに・事行べし共・みえざりけり・舊都は・既に・うかれぬ・新都は・いまだ・事ゆかず・ありとし・ある人・みな身を・うき雲の・まよひと・なし・もと・その所に・すむ人は・地をうしなつて・うれへ・いまうつりくる人は・みな・土木の・わづらひをぞ・歎かれける・中にも・土御門の・宰相の中將通親の卿の・申されけるは・異國には・三條の廣路を・ひらいて・十二の洞門をたつと・いへり・況我朝に・五條まで・あらむ都に・などか・内裏を・たてざるべきとて・五條の・大納言國綱の卿の・臨時に・周防の國を・給はつて・里内裏・造らせらるる・此國綱の卿と申は・ならびなき・大福長者にて・おはしければ・里内裏造進せらるべき事・左右に及ばずとは・申ながら・まづさしあたつて・行はるべき・御禊・大嘗會をば・さしおかれて・かゝる・世の亂の中に・遷都造内裏・すこしも・相應せず・いにしへの・かしこかりける・御代には・内裏をば・かやにて・葺・軒をだにも・改られず・民のかまどの・ともしきを御覽じては・限りある・御調物をも・ゆるされけり・是ひとへに・國を・たすけ・民を育むに・依てなり・彼唐の玄宗の・驪山宮を・作られしには・甍に松おひ・墻に・苔むすまで・臨幸・なかりけるには・相逢かな・諸將・花臺をたて・黎民あらけ・秦阿房の殿を・おこして・天下亂る共・いへり・茅茨きらず・采椽けづらず・舟車飾らず・衣服文なかりける・世も・ありける物を・おそろし〳〵とぞ・人申ける

月見

同き八月八日の日・福原には・新都の・事始あつて・同き・十月十日の日・御上棟とぞ・聞えし・舊都は・荒ゆけば・今の都は・繁昌す・淺ましかりし・夏もすぎ・秋も・なかばに・なりにけり・福原に・おはしける・人々は・名所の月を・見むとて・或は・源氏の大將の・昔の跡を・たづねつゝ・須磨より・明石の浦傳・しらく（イ白浦）吹上・和歌の浦・住吉・難波江・高砂尾上の月の・あけぼのを・なが めて歸る・人もあり・舊都に殘る人々は・伏見・廣澤の・月をみる・中にも・福原におはしける・後德大寺の左大將・實定の卿は・舊都の月を見んとて・入道相國に・暇こひ・八月十日餘りに・古き都へ・歸り上られけるが・道すがらも・名所々々の月を見る・雲井に曇す・布引の・これや・此・求塚と・名付しは・彼島の・ほとりなり・戀ゆゑ身を失ひし・二人の男の・墓とかや・猪名の湊の曙に・霧たち渡る・難波がた・男山の月影は・石清水にや・宿るらん・六田の夜半の・むしの音に・稻葉に・そよぐ・風の音・秋の山の・紅葉の色・こゝろをくだく・便りとなる・大將舊都に・かへり・見給へば・人々の家々をば・去ぬる・夏・賀茂川・桂川に・こぼちいれ・筏にくみうかべ・資財雜具を・船に積て・福原へ運び・下されたりければ・たま〳〵殘る・家々は・門前草ふかく・庭上露しげく・蓬が・杣・淺茅が原・鳥のふしどと・あれはてゝ・たゞ・黃菊・紫蘭の・野邊とぞなりにける・今ふるき・都の御名殘とては・御妹・近衞河原の・大宮の御所ばかり也・大將かれへ・まゐらせ給ひて・隨身をもつて・惣門を・たゝかせらるれば・內より女房の聲にて・たそやこの蓬生の・露打はらふ人だにも・稀なる處にと・とがむれば・是は・福原より・大將殿の・御參りにて候と・申す・ささふらはゞ・惣門より・參らせ給ふべしと・申たりければ・大將さらばとて・東の門よりぞ・參られける・折節大宮は・月にめでさせ・給ひて・南の・臺にして・御琵琶・源氏の・宇治の卷には・優婆塞の宮の・御娘・秋の餘波を・惜みつゝ・琵琶を調て・夜もすがら・御心をすまさせ・給ひしに・有明の月の・山の端より・出けるを・なほ・たへず・やおぼしめされけむ・撥して・招かせ給ひしも・今こそ・おぼしめしらるれけれ・大宮・御撥さしをさめさせ・給ひて・いかにや・大將是へ〳〵と・仰ければ・大將御前近う參らせ給ひて・良はるかに・御物語あり・其後・大將・待よひの小侍從を・よび出させ・給ひて・昔今の事共を・夜もすがら・語りぞ・明させ給ひける・抑此待よひの小侍從と申は・ある時・大宮・侍從をめして・侍宵と・歸る朝は・いづれかはと・仰ければ・侍從とりあへず・

待よひの更行かねのこゑきけば・あかぬ別の鳥は物かは

と・申たりけるによつてこそ・まつ宵の小侍從とは・召れけれ・其後大將・はるかに夜ふけ・人しづまつて・後・やうでうねとり・さう〳〵枯なんとす・むしのおもひ・ねんごろなりといふ・朗詠して・古き都の・荒ゆくやうを・今樣にこそ・うたはれけれ・

古き都をきてみれば・淺茅が原とぞ・あれにける・
月の光はくまなくて・秋かぜのみぞ・身にはしむ・
と・是を・二三度諳ひ・すまされたりければ・大宮を始參らせて・侍從以下の女房達・みな袖をぞぬらされける・明ければ大將暇申て・福原へこそ・下られけれ・侍從・大將の御名殘を・惜み奉つて・車よせまで・立出・御うしろを遙々と見送り奉り・涙をおさへて留りけり・大將御供に召具せられたりける・藏人をめして・侍從が何とおもひてやらむ・世にも名殘をしげに見えつるに・汝ゆきて何共よきやうに・いひてこよかしと仰ければ・藏人走り歸り・是は・大將殿の申せと候とて
物かはと君がいひけむ鳥の音の・けさしもなどか戀しかるらん・
侍從取あへず
またばこそふけゆく鐘もつらからめ・あかぬ別の鳥の音ぞうき・
藏人歸り參り・此由を申たりければ・さればこそ・汝をばつかはしたりつれとて・大將大きに感せられけり・それよりしてこそ・物かはの藏人とは・めされけれ

物怪

入道相國の・都うつりの後は・夢見も・惡う・又不思議の事共・多かりけり・たとへば・其頃・入道相國の・住れける・坪の內に・秘藏して・植させける・五葉の松の・一夜の・內に・枯にけるこそ・不思議なれ・又うしろなる・松山のかたには・人ならば・四五百・千人計の・聲にて・大木をたをすが・やうに・一度にどつと・わらふ聲しけり・入道墓目の番と・名付て・晝卅人・夜六十人の兵士を・すゑて・墓目鏑を・射させられけるに・射おふせたるかと・おぼしき時は・音もせず・又そぞろなる方へ・射やつたるかと・おぼしき時は・一度にどつとぞ・笑ける・又入道相國の・帳內には・一間に・はゃかる程の物の・おもてが・出來て・入道相國を晛奉る・入道もさる・おそろしき・人にて・おはしければ・すこしもさわがず・晛れけるに・死人・わらうて・失にけり・或時の・ふた朝・入道・中門の廊に・出給ひ・六位や候〳〵と・召されけれ共・をりふし人・一人も候はざりけるに・常の・坪の內を・見やり給へば・しやれたる・頭が・四五百・千ばかり・みち〳〵て・端なるが・中へ入・中なるが・端へ出で・うへなるが・下になり・下なるが・上へあがり・互に・ころびあひ・ころびのき・がらめきけるが・さるかと・すれば・ひとつになつて・十丈ばかりに・そびえあがる・時もあり・又ちつとに・なる時もあり・千萬の眼をもつて・入道相國を・晛め奉る・譬へば・入道も・世間に・童部のめくらべ・なんどを・するがやうに・つて・きゆるが・ごとくに・跡かたもなうぞ・失にける・又入道相國・十四五六の童部を・三百餘人めしあつめ・童と名付て・召つかはれける中に・天狗・まぎれて・あそびけり・又入道相國の・秘藏

して・なでかはれける・馬の尾に・ねずみ巣をくひ・一夜の内に・子をうみにけるこそ・不思議なれ・此馬は東國・相模國の住人・大庭の三郎景親が・許より・八ケ國一の・名馬とて・參らせたりけるが・くろき馬の・額少し・しろかりければ・望月と・名付て・斜ならず・秘藏して・なでかはせられける・馬の尾に・鼠巣をくひ・一夜の内に・子をうみければ・是たゞ事に・あらずとて・八人の博士を・めして・占はせらる・天下の・さわぎと・占ひ申す・やがて此馬をば・安倍の泰親賜りけり・昔天智天皇の御時・れうの御馬の尾に・鼠巣をくひ・一夜の・内に子を・うみに・けるにも・天下穩ならずとぞ・日本紀には・しるされたる・又古き都に・おはしける・源中納言雅賴の卿の許に・候ひける青侍が・見たりし夢こそ・何よりも・ふしぎなれ・たとへば・大内の・神祇官の邊を・通ると・おぼしきに・そくたいし給ひたる・上臈の・いくらも・なみ居させ給ひて・議定なんどの・ありけるを・何事やらむと・立留つて・聞程に・中にも・座上に・おはします・上臈の・ゆゝしう・けだかき・御聲にて・此程・平家に・あづけおきたる・節計を・召還し・伊豆國の流人・前の右兵衛の權の佐賴朝に・たばんとぞ・仰ける・又末座に・おはします・上臈の・平家の・方人し給ふと・おぼしきを・追立らるると・見申て・明て後・人に・かたる程に・此事福原へ・聞えたり・入道・雅賴の卿の許へ・使者を・立て・それに夢見の・男の・候なり・給つて夢のやう・相尋候はんと・宣ひ・つかはされたりければ・此男・惡かりなんとや・おもひけむ・やがて逐電・してんげり・雅賴の卿・まつたう・さるきよじを・陳じ申されたりければ・此上は・入道相國の・いまだ其の給ひける・入道力及ばずとぞ・

比・安藝の守たりし時・嚴島の大明神より・靈夢かうふり・うつつに・たまはられたりける・白柄の小長刀・常の枕を・はなたず・たてられたりけるが・俄に・失にけるこそ・不思議なれ・中にも・高野のお山に・おはしける・宰相入道成賴・此由を・傳へ聞給ひて・すは〳〵・平家の運命は・末に成ぬるは・中にも座上に・おはします・上臈の・此程・平家に・預けおきたる・節度を・召還し・伊豆の國の流人・前の右兵衛の權の佐賴朝に・たばんと・仰の渡らせ給ふは・源氏の氏神・正八幡大菩薩にてぞ・渡らせ給ふらん・又末座に・おはしまして・上臈の・平家の方人・し給ふと・おぼしきを・追立らるゝと・見申たるは・平家の氏神・安藝の嚴島の・大明神にてぞ・渡らせ給ふらん・嚴島の大明神は・婆羯羅龍王の・第三の姫宮・胎藏界の垂跡にて・女神とこそ・承りつるに・さやうに・俗躰にて・見えさせ給ひけるこそ・不思議なれ・但此御神は・三明六通を・得させ給ひたんなれば・もし・左樣の・御事にも・同心し給へるに・こそと・有がたかりし・御事也・憂世を厭ひ・まことの道に・いる人も・善政を・聞いては・よろこび・なげきを・きいては・悲しめり・深き山に・入給ひしより此方・一向・後世菩提の・勤の外は・他事やは・あるべきなれども・其時より・折に隨ふ・ならひとて・かやうの事をも・宣ひけり・平家・代をとつて・廿一年・たのしみ・さかえは・昔も・今も・たのめし・すくなかりし事共也・され共・放逸邪見に・おはしければ・今は節度をも・召還させ給ふに・

こそと・哀なりし・事共也

大場がはや馬（あひ）

同き九月二日の日・東國・相模國の住人・大場の三郎景親が・許より・早馬を・たてゝ・平家へ・申けるは・伊豆國の流人・前の右兵衛の權の佐頼朝・舅北條の四郎時正を・引率して・都合其勢・五十餘騎・去ぬる・八月十七日の夜・當國の目代・和泉の判官兼隆を八牧が館にて・夜討に・しぬ・同き二十日の日・相模の國に・打越え・土肥・土屋・岡崎の・者共・三百五十餘騎にて・石橋の城に・楯籠候ひぬ・同き二十二日に・景親・武藏・相模・二ケ國の・軍兵・三千餘騎を・相具して・石橋の城に押よせ・散々に・責戰ひ候程に・頼朝・軍に・打まけ・主從・七八騎に・討なされ・土肥の・杉山に・逃かくれ候ひぬ・同き廿四日に・三浦の大介が一黨・五百餘騎にて・源氏がたす・畠山・五百餘騎にて・由井小坪にて・合戰す・畠山・軍に打まけ・武藏國に・引退候ひぬ・なほ・畠山・腹をたて・江戸・葛西・品川の者共・三千餘騎を・引具して・同き廿六日に・三浦衣笠の城に・押よせ・散々に責戰ひ候程に・大介討れ候ひぬ・子共孫共は・三百餘騎に・討なされ・三浦くりばまより舟にとりのり・兵衛の佐が・跡を尋て安房上總へ・渡りぬとこそ・たてたりけれ

朝敵揃

其比福原に・候ひける・平家の侍共・此よしを・聞て・哀さらば・源氏が・とうして・寄來よかし・われ討手に・むかはんなんど・いふぞ・はかなき・其比福原に・候ひける・東國の大名には・畠山の庄司重能・弟小山田の別當有重・宇津の宮の左衛門朝綱也・入道彼等をめして・宣ひけるは・汝等が子共・東國に・あんなれば・源氏に・定て・同心するらん・など・宣へば・是等畏つて・申けるは・北條は・したしうなつて候へば・左樣の・御事もや候らん・其外の者共は・まつたう・さなきよしを・陳じ申たりければ・入道さらば・起請文に・及べかしと・宣へば・各畏つて承り・熊野の牛王を申おろし・七枚の起請文を・書て・奉る・實もと・申人もあり・いや〳〵此事・大事にや・及ばんずらんと・さゝやく者も・おほかりけり・入道重て・宣ひけるは・抑彼・兵衛佐頼朝と・いつば・去ぬる平治に・父義朝が・謀叛によつて・生捕に・せられ・既に誅せらるべかりしを・故池の禪尼の・をりふし・宣ひしに・よつてこそ・死罪を・流罪に・處する所なれ・いつしか・其恩を忘て・當家に・向つて・弓を・ひき・いかでか・矢をも・はなつべき・當時こそ・王位も無下に・かるけれ・昔は・宣旨を・むかへて・讀しかば・枯たる・草木にも・葉はり・花さき・とぶ鳥も・隨ひ・奉たりしが・昔延喜の聖代・しんせん苑に・御幸なつて・池の・みぎはに・鷺の・候ひけるを・藏人をめして・あ

の鷺・とつて・參らせ候へと・仰ければ・藏人・いかで・取べきとは・おもひけれ共・綸言なれば・まかりむかふ・鷺はね・つくろひを・して・立んとす・藏人・いかに・宣旨ぞ・まかりたつなと・いはれて・鷺・ひらみて・とびさらず・藏人かれを・いだいて・御前へ・參りたりければ・御門・斜ならず・御感あつて・汝が・宣旨に・隨ひ・參らせて・參りたるこそ・神妙なれ・やがて五位に・なせとて・五位に・なさる・けふより後・鷺の中の・王たるべしと・いふ・御札を・遊ばして・鷺の・頸にかけて・はなたせ・おはしましけり・まつたう是は・鷺の・御用には・あらず・たゞ・王位の程を・しろし召れむが・爲なりき・それ・朝敵の始には・紀伊國・名草の郡・高尾の村に・一の土蜘あり・足手ながく・身みじかく・力人に・すぐれたり・人民おほく・害せられしかば・官軍發向し・かづらの・あみを・結びつゝ・宣旨を・よみかけて・終に是を・おほひ・ころす・しかつしより・此方・野心を・さしはさむ者・大石の山丸・大山の王子・大友の・まとり・もりやの大臣・曾我の・いるか・山田・石河・文屋の宮田・大矢の・左衞門・太宰の大貳廣嗣・左大臣ながや・右大臣豐成・藤みの大臣おしかつ・いがみの・くわうぐう・さあらの太子・橘の逸成・藤原・仲成・平の將門・藤原の純友・安倍の貞任・宗任對馬守・源の義親・惡左府・惡衞門の督に・至まで都合其例・廿餘人也・され共・是等は・いつかは・素懷を・遂たりし・かばねを・龍門原上の・土に埋み・頭を・獄門にかけられし・者なりき

咸陽宮

遠く異朝の・先蹤を・とぶらふに・昔燕の・太子丹は・秦の始皇帝に・とらはれて・いましめを・蒙る事・十二年・ある時・太子丹・始皇帝に・申けるは・我にしばらくの・暇を・給はれかし・我古里に・一人の老母あり・我本國にかへつて・今一度母を・みむと・申たりければ・始皇帝・大きに・あざわらつて・汝に・暇たばん事・馬に・角おひ・烏の・頭の・白くならむを・待べしとぞ・宣ける・時に太子丹・天に・あふぎ・地にふして・願は・冥顯の三寶・孝行の志を・あはれませ給ひて・馬に角生ひ・烏のかしら白く・なし給へ・われ本國に・かへつて・今一度・母を見むとぞ・祈ける・彼妙音大士は・靈山淨土に・詣して・不孝の罪を・いましめ・孔子老子は・大唐震旦に・出て・忠孝の道を・はじめ給ふ・冥顯の三寶・孝行の志を・あはれませ・給ふ事なれば・馬に角おひて・宮中に來り・烏の頭・白くなつて・庭前の木に・いたり・烏頭・馬角の・變に・驚き・綸言・かへらざる事を・始皇帝思召て・太子丹を・ゆるして・本國へこそ・かへされけれ・始皇帝・太子丹をゆるして・本國へ・かへされける事を・なほやすからず・おぼしめされければ・秦の國と・燕の國の境に・そ國と・申國あり・彼國に大河あり・大河の上に・高き橋あり・則そ國の・橋とぞ申ける・始皇帝かしこへ・人をつかはして・太子丹が・渡らん時・落べき・はかりごとを・めぐらされ・たりけるを・太子

丹は・夢にもしらずして・渡る程に・なじかは・よかるべき・中の程にて・落に・けり・され共・水にも・溺れず・子細なく・向ひの岸に・渡りつゝ・太子丹・大きに・不思議の・おもひを・なし・後を・かへり見れば・大きなる・龜の・甲にぞ・乘たりける・是も只・孝行の・志の・深かりけるに・よつて也・太子丹・これによつて・猶恨をふくみ・始皇帝にも・隨がはず還て・始皇帝・うつべき・はかりごとをぞ・めぐらしける・始皇帝・四海に・宣旨を・下し・太子丹を・討べき・はかり事を・めぐらされたりければ・太子丹・荊軻大臣を・始として・兵あまた・かたらはれけり・又奚に・田光先生と・いへる・兵あり・荊軻かれが・許にゆきて・かたらはれければ・先生が申けるは・麒麟は千里をとべりと・いへ共・年老ぬれば・駑馬にも・おとれり・君は此身の・若う・さかんなつし・事を・おぼしめして・かやうに・頼み仰候が・いか樣にも・別の兵を・かたらつて・奉らむとて・出けれ　ば・荊軻・かれが・袖をひかへて・あなかしこ・此事天下に・もらし給ふなよと・言ければ・先生・立歸つて・何よりも・人に・うたがはれぬる・過たる恥はなし・われいはず共・此事・天下に・もれなば・定て・うたがはれなんず・人の口より・洩ぬさきに・心やすう・おもひ給へとて・荊軻が・前にて・自害してこそ・失にけれ・又奚に・樊於期と・申兵あり・是はもと・秦の國の・者なりけるが・親・をぢ・兄弟を・始皇帝に・ほろぼされて・燕の國に・逃籠たり・始皇帝・四海に宣旨を・下して・樊於期が・かうべ・幷に燕の・指圖もつて・參りたらむする・者には・五百斤の・金をあたふべしと・觸られ・たりければ・荊軻・かれが許に・行て・我きく・汝が・かうべ・五百斤の金に・ほうせられたん也・誠に汝・始皇帝・亡すべき・志ならば・汝がかうべ・われにかせ・始皇の・内裏に・もつてゆき・叡覽を・經られん時・劒を胸に・さゝんは・安かるべしと・いひければ・樊於期・踊あがり・息をついて・申けるは・われ・親・をぢ・兄弟を・始皇帝に・亡され・夜晝・是を・思ふに・骨髓に・とほつて・忍びがたし・誠に・汝始皇帝・亡すべき志ならば・我・頸・汝に・あたへん事・塵灰よりも・なほ・やすかるべしとて・荊軻が前にて・みづから・頸かき落し・失にけり・又奚に・秦舞陽と・申兵あり・是ももとは・秦の國の・者也けるが・十三のとし・親の・敵を討て・燕の國に・逃籠りたり・かれが・いかつて・向ふ時は・大の男も・絕入し・又笑うて・向ふ時は・みどり子も・いだかれけり・かれに・樊於期が・頸を・もたせ・我が身は・燕の差圖の・入たりける・櫃を・もつて・秦の國へぞ・むかひける・蒼天・ゆるし給はねば・白虹・日を貫て・とほさず・されば・我本意・遂がたしとぞ・太子丹は・宣ひける程なう・秦の國に至りぬ・樊於期が・かうべ幷に・燕の差圖・持て・參りたる由を・奏聞す・始皇帝・人して・うけとらむと・宣へば・人しては・かなふまじ・直に・奉るべき由を・申たりければ・始皇帝・さらばとて・俄に・節會の儀を・とゝのへて・燕の・使をぞ・召れける・咸陽宮と・申は・都のめぐり・一萬八千三百七十餘里と・かや・內裏をば・地より・三里たかく・築あげ・くろがねの築地・高さ百餘丈・方四十里に・つかせ・其內に・作られ

たり・秋は・たのむの雁・春は・かならず・都より・越路へ歸る・物なれば・飛行・自在の・さはりありとて・築地には・雁門と・いへる門を・あけてぞ・とほされける・銀子をもつて・月を・つくり・金を・もつて・日を・作れり・眞珠の砂・瑠璃の沙・金の砂を・敷充り・長生殿あり・不老門あり・四十八殿の・其中に・始皇帝の・常に・住れける・殿あり・阿房宮とて・口・六尺の・銅の柱を・高さ・卅六丈に・たてさせ・東西へ九町・南北五町に・作られたり・大床の下には・五丈の・はたほこを・立たれ共・なほ・及ばぬ・程なり・かしこに・玉の・きざはし・あり・秦舞陽・これを・のぼる程に・臆してもや・ありけん・膝のふし・わな〳〵と・ふるつて・のぼり・わづらふ・臣下・あやしみを・なし・舞陽は・謀叛の志・あり・君は刑人に・近付ず・刑人をば・又・君のかたはらに・おかずと・いひければ・荊軻立歸つて・舞陽は・謀叛の志なし・燕の國の・いやしきに・ならつて・かゝる皇居を・はじめて・みるあひだ・迷惑すと・いはれて・臣下・各しづまりぬ・其後・樊於期が・かうべ幷に・燕の差圖共に・披見せらる・差圖の・入たりける・櫃の底に・劒の・氷りなんどの・やうにて・みえければ・始皇帝・大きに・恐れをのゝいて・急・にげんと・し給ひけるを・御衣の・袂を・むんずと・ひかへ奉つて・劒を・胸にさしあて・奉る・既に・かうとぞ・みえたりける・千萬の兵共庭上に膝をつらねけれ共すくはんとするに・力なし・たゞこのきみ・逆臣に・をかされ給はん事を・悲しみけりとぞ・承る・始皇帝は・三千人の・后を・持給へり・其中にも・花陽夫人とて・ならびなき・琴の上手にて・まし〳〵けり・始皇帝・荊軻にむかつて・宣ひけるは・われに片時の暇を得させよ・最愛の后の・琴のねを・今一度・きかんと・宣へば・荊軻ゆるし奉る・后は・七尺の屏風を・へだてゝ・琴を・しらべ・まし〳〵けり・凡此后の・琴の音には・武士の・たけく・怒れるも・しづまり・とぶ鳥も・おち・草木も・なびく計也・況けふを限り・只今ばかりの・叡聞に・そなへむと・しらべまし〳〵ければ・さこそは・おもしろかりけめ・荊軻も・謀臣の・必失はて・頭をうなだれ・耳を・そばだてゝ・是をきく・其時后・始て・一曲をそなふ・七尺の屏風は高く共・をどらば・越ぬべし・一重の・羅穀は・つよく共・ひかば・たえぬべしと・しらべ・まし〳〵けるを・荊軻は・是を聞しらず・始皇帝は・聞しつて・まし〳〵ければ・ひかへたりける・御衣の・袂を・ふつつと・引ちぎつて・七尺の屏風を・をとり越・銅の柱の・陰に・かくれ給ふ・荊軻・大きに・いかつて・劒を・投かけ奉る・折節・御前に番の醫師の・候ひけるが・藥の袋を・投かけたり・劒藥の袋を・懸られながら・口六尺の・銅の柱を・なからまでこそ・切たりけれ・荊軻は・劒の・あまたもなければ・つゞいても・なげず・始皇帝・立歸り・ひしゆと申・御劒を・めしよせて・荊軻を・八裂にこそ・し給ひけれ・秦舞陽も・うたれにけり・其後討手をつかはして・太子丹をも・ほろぼさる・昔も今も・恩を忘れ・契りを變せし者は・終には・かくこそ・有しか・されば今の・兵衛佐も・さこそは・あらんずらむと・しきだいする人も・おほかりけり

文覺の勸進帳

抑彼兵衛佐頼朝といつぱ、御年十四と申し、永暦元年三月廿日の日、伊豆國北條蛭島に流されて、廿餘年の春秋を送り、今年は既に卅四にぞなられける。とし比日比もあればこそ有けれ、いかなればことしくも、かゝる謀叛をおもひ立れける、故をいかにと申に、後日に聞えしは、高雄の文覺上人の御すゝめなりけるとぞ聞えし。此文覺上人と申は、渡邊の遠藤左近將監大夫持遠が子に、遠藤武者盛遠とて、上西門院の衆なり。然るに盛遠十九の年、淺からずおもひける女におくれ、堅固の道心おこして、山々寺々修行しけるが、有時大峯を行せばやとおもひ、先達かたらうて熊野へ參り、那智に千日籠り、大峯ことゆゑなう行じて後、さすが故郷や戀しかりけむ、都にのぼり、高雄と申所にしばらく行てぞ候ひける。先年高雄に、神護寺と申山寺あり。久しく修造なくしてあれ廢せり。扉は風にたふれて、むなしく落葉の下に朽、軒端は雨に侵されて、佛壇さらにあらは也。文覺われたま〳〵人間に生をうけ、幸に出家遁世の身となれり。あたらしう堂塔をたてんより、ふるきを建立したらむにはしかじと、大經にも見えたり。詮ずる所修造せばやとおもひ、勸進帳を書て、十方檀那をすゝめありきけるが、或時院の御所法住寺殿に參り、奉加の由を申ければ、人々興なる聖の御坊かな、御遊の折節ぞ、渡るに參れと仰ければ、文覺これは申せ共人が奏せぬぞと心得て、もとより不敵第一のあら

聖にては候ひけり。御坪の內にやぶりいつて、大慈大悲の君にてわたらせ給へば、などか御奉加のなかるべきとて、懷より勸進帳をおつとり出し、おそろしげなる聲をもつて、高らかにこそ讀たりけれ。

沙彌文覺敬て白す、殊には十方檀那の御助成を蒙て、高雄山の異地に一院を建立し、現當二世安樂の大利を、勸行せしめんとこふ勸進の狀。

夫惟ば、眞如廣大なり。正佛の假名をたつといへ共、法性隨妄の雲厚覆て、遙に十二因緣の峯にたなびきしより此かた、本有心蓮の月の光幽にして、いまだ三毒四幔の空にあらはれず、悲哉、佛日はるかに沒して、生死流轉の巷冥々たり。色に耽り、香に誇る、たれか狂象跳猿のまどひを謝せん。人を謗し法を謗す、豈閻羅獄卒のせめをまぬがれんや。爰に文覺、たま〳〵俗塵を擺て、法衣を儆といへ共、惡行猶心に逞して日夜に移り、善因又耳に逆て朝暮にすたる、痛哉、再三途の火坑に歸つて、重て生死の苦輪をめぐらんことを、此故に無二の願章千萬軸、軸々に佛種の因をあらはし、隨緣至誠の法、皆以菩提の彼岸に到ずと云事なし。故に文覺無二の觀門に涙を落し、上下眞俗の結緣を催し、上品蓮臺に跌を勵して、等妙覺王の靈場をたてんと也。それ高雄山は、山堆して鷲峰の山のこずゑをまなび、谷閑にして商山洞の苔をしく。岩泉咽で布をひき、嶺猿叫で枝にあそぶ。人里遠して囂塵なく、咫尺ことなうして信心のみあり。地景すぐれたり。尤佛天を崇べし。側聞聚沙爲佛塔功德、忽に佛因を感ず、況一紙半錢の奉財に於てをや。願は建立成就して、金

闕鳳暦御願圓滿、乃至都鄙遠近隣民親疎、よりてくわんじんしゆぎやうおもひきりだしもつてかくのごとし
ん。兼又聖靈幽儀前後大小、ともに一佛眞門の臺に入て、おなじく三(イ三身)萬德の月を翫ばんや。
仍勸進修行の趣蓋以如斯。
治承三年三月廿日の日
敬白　とぞ讀あげたる。

文覺の流され

去程に・法住寺殿には・妙音院の大政大臣師長・琵琶・かきならし・按察の大納言助方の卿・拍子を打て・風俗・催馬樂・うたはれけり・源少將雅賢・和琴を・しらべ・四位の侍從師定・いまやう・とり〳〵に・うたうて・玉の簾も・れい〳〵と・して誠に・おもしろかりければ・法皇も・御感のあまり・御つけ歌なんど・候ひけるに・それに・文覺が・もつての外大聲に・調子も・はや・悉亂ぬ・法皇・あれ何者ぞ・狼藉也・追放せよと・仰下さるゝ・程こそありけれ・あはれ何事かな・事にあはばやと・思ふ・はやりうの・者共・走寄て・いかに・けうの聖・御遊の折節ぞ・後日に參れと・仰ければ・文覺あなこと〳〵し・高雄の神護寺に・おいて・國にても・庄にても・一所・よせ給はざらん外は・まつたう罷出まじとぞ・申ける・其後・資行判官は・文覺が・外顎・突んとて・よりけるを・文覺勸進帳をば・左の手に・おつとりなほし・右のかひなを・さし出し・資行判官が・烏帽子を・うつて打落し・胸を・ばぐと・ついて・のけに・つきたふす・資行判官は・文覺に・烏帽子・打おとされ・をめ〳〵と・成て・大床の上へぞ・にげ・上りける・其後・文覺は・馬の尾にて・柄まいたる・刀の・其たけ・七寸ばかり・有けるが・余處よりは・氷なんどの・やうに・みえけるを・ぬきもつて・よりくる者・あらば・つかんとこそは・待かけたれ・文覺・左の手には・勸進帳をもち・右の手には・彼刀を・もつて・走りありきければ・おもひもかけぬ・俄事にては・候ひけり・人目には只・左右の手に・刀をもつたる・やうにぞ・みえし・法皇も・叡慮を・驚かさせ・おはします・わかき・公卿殿上人や・局の女房達に・いたるまで・こは・いかなるべし共・おぼえさせ給はず・爰に信濃國の住人・安藤右宗が・當職にて・武者所に・候ひけるが・太刀を・ぬいて・つゝと出・勸進の聖を・切ては・詮なしとてや・おもひけん・文覺が・刀持たる方の・かひなを・太刀の峯にて・肩かけて・したゝかにうつ・うたれてひるむ所を・太刀をなげ捨・走り懸つて・むずとだく・文覺は・だかれながら・右宗が・かひなをぞ・ついたりける・右宗は・つかれながらぞ・しめたりける・文覺もつよし・右宗も・つよかりければ・互に・上になり・下になり・ころびあふ所を・こゝかしこへ・にげ・ちりたりつるもの共・わが・高名がうに・ちぎり木・さいぼうを・もつて・より・文覺が・はたらく所の・ちやうを・さん〳〵に・がうしてんげり・されど共文覺は・ちつとも・色も變せず・わるびれたる・け

しきも・なく・ゐをり・いよ〳〵惡口・放言をぞ・しける・縱奉加をこそ・し給はざらめ・是程に・勸進の聖に・からき目を・見せ給ひぬれば・たんだいま・おもひしらせ・申さんずる物を・三界は・皆これ火宅なり・王宮とても・逃るべからず・縱今こそ・十善の帝位に・ほこつたう共・黃泉の旅に・趣給ひなん後は・牛頭馬頭の責をば・よにしまぬがれたらじ物を・〳〵と・をどり上り〳〵ぞ・申ける・其後文覺をば・廳の者に・給はつて・七八人が・中に・ひつたてゝ・出けるが・廳の者共は・文覺を・ひつたてゝ・出ると・おもひけれ共・人目には・たゞ・廳の者共が・文覺に・ひつたてられて・出るとぞ・見えし・文覺をば・やがて・獄定せらる・其後・資行判官は・文覺に・ゐぼし・打落され・面目なくや・おもひけむ・しばしは・出仕も・せざりけり・安藤右宗は・文覺に・組たる・勸賞に・當座に・一萬を・經すして・右馬の丞にぞなされける・その比・美福門院・俄に・かくれさせ・給ひしかば・文覺・やがて・獄をば・出されけり・文覺なほも・こりぬ樣にて・又勸進帳を書て・十方檀那を・すゝめ・ありきけるが・平家の人々の・あたり・とほると・おぼしき時は・あつばれ・朝恩に・ほこりたる・平家の人々の・たんだ今・世のみだれ・出來て・失はてに・あはうずる物を・〳〵と・かやうに・のろ〳〵しき事を・いひ・行きければ・すべて・此法師・都の・內には・かなふまじ・さらば・遠流せよやとて・伊豆の國へぞ・流されける・是ぞ・平家の運の・きはめなる・海道は・かなふまじ・船にのせて・下せやとて・伊勢の國・阿野の津より・船に・のせて・下す程に・遠江の國・天龍灘・九十九匹の駒がたつて・船既に・入海せんとす・水主梶取共・櫓・搔・梶を・たてなほせ共・かなはず・或は・觀音の名號を・唱へ・或は・最後の・十念に・及けれ共・文覺は・ちつ共・さわがず・舟底に・座禪してこそ・ゐたりけれ・水主梶取共・いかに・聖の御坊・これ程に・大風大浪・たつて・舟既に・入海せんと・するに・など經をもよみ・念佛をも・申て・龍神に・手向・命たすからんとは・おもひ給はぬぞと・いひければ・文覺實もとや・おもひけん・かつばと・起なほり・舟ばたに・あゆみ出・大の眼に・かどをたて・海のおもてを・はつたと・にらまへて・いかに龍王やある・〳〵・是程に・大願・おこしたる・聖を・いかで・沈て・見んとは・するぞ・たんだ今・天のせめ・蒙らんずる・龍神共哉と・よばはつ・たりければ・龍神此詞にや・恐けん・波風しづまつて・事故なく・伊豆の國にぞ・着にける・文覺大願を・おこす事あり・われ再・都に上り・高雄の神護寺を・修造すべくば・死ぬまじ・さらずば・死ぬべしとて・都を・出し日よりして・伊豆國に・着まで・二十一日が間は・湯水を・だにも飮入ず・斷食してこそ・下りけれ・され共氣力すこしも・おとろへず・坐禪・行法をも・おこたらずして・伊豆の國にぞ・着にける・其外・只人ならずと・おもふ事共・多かりけり

福原院宣

去程に・文覺をば・當國の在廳・近藤四郎國高・請取つて・那古屋が岡にぞ・おきたりける・それより兵衛の佐の・おはする所も・程ちかかりければ・常は寄あひ・京・田舍・昔・今の事共を・語りあはせて・互に・懇あはれけり・或時・文覺・兵衛佐に・申けるは・平氏には・小松殿・ばかりこそ・御心も・剛に御才覺も・ゆゝしう・渡らせ給ひたりしか共・夫も・平家の運命を・はかつて・去年の八月に・薨じ給ひぬ・今は・源平兩家の中を・みるに・御邊程・將軍の相・もちたる人も・おはせぬぞ・はや〳〵おもひ立つて・平家を亡し・日本の將軍とならむとは・おもひ給はずやと・云ければ・兵衛佐・それおもひも・よらぬ事也・其故は・去ぬる・平治に・生捕に・せられて・既に・誅せらるべかりしを・故池の禪尼に・命助られ・參らせし後は・毎日・法華經を・二部ようで・一部をば・父母孝養・一部をば・彼禪尼の爲に・手向奉るより外は・又他事なしとぞ・宣ひける・文覺重て・申けるは・天のあたふるを・取ざれば・還て其咎を・うけ・時いたつて・おこなはざれば・其禍を・うくといふ・本文あり・御邊に・志の・あり・なきをば・是にて・よく・しり給へとて・懷より・布の袋に・入たる・しやれたる・頭を・投出し・兵衛佐に奉る・兵衛佐・あれは・いかにと宣へば・是こそ・御邊の父・故左馬の頭の殿の・御頸よ・去ぬる・平治に・獄所の邊に・うづもれて・おはしけるを・文覺餘の・いたはしさに・ほり起し・奉つて・此二十餘年が間身を・はなたず・とぶらひ奉りぬれば・今は定て・一劫も・うかび給ひぬらむ・されば・文覺は・故左馬の頭の殿の・御爲には・奉公の者にて・候ものをなんど・やう〳〵に・申たりければ・兵衛佐・是を・誠とは・思はれざりけれ共・父の頸と・きくが・なつかしさに・左の袖に・うけとつて・まづ・涙をぞ・流されける・それよりしてぞ・謀叛をば・やう〳〵・思ひ立給ひける・縦左樣の事・おもひたつとも・勅勘を・ゆるされ・參らせずしては・いかゞあるべきと・宣へば・文覺・それは・我都に上り・申て・ゆるし奉らん・兵衛佐・大きに・あざ笑つて・御邊も・流人の身として・人の勅勘を・申て・ゆるさんと・宣ふこそ・大きに・まことしからねと・宣へば・文覺・やらそれは・わが・ゆりんと・申さばこそ・人の・勅勘を・申て・ゆるし奉らむは・なじかは・くるしかるべき・是より・福原の新都へ・三日・院宣・うかゞはんに・一日・上下・七日八日には・よも過じ・相構て・其間は・待給ふべしと・て・させる・領掌は・なけれども・文覺・坊に・歸り・弟子共に・あうて・語りけるは・われ・伊豆の御山に・七日參籠の志あり・縦人・尋る共・相構て・此よし角と・語るべからずとて・笈を・かけ・坊をいで・夜を日に繼で・上る程に・三日と申・酉の刻ばかりに・福原の新都に・上りつき・右兵衛督光義の・許に・いさゝか・ゆかりありければ・文覺・かしこに落つき・光義にあうて・かたりけるは・伊豆國の流人・前の・右兵衛權の佐頼朝こそ・勅勘を・だにも・ゆるされ・參らせば・平家をほろぼさんと・申せなんど・語りければ・光義・當時は・君も・平家に・おしこめられさせ給ひて・月日の光を・だにも・はか〳〵しう・御らんせず・光義も・三官ともに・おしとゞめられて・心ぐる

しき・折節なりとは・宣へ共・文覺重て・申ければ・光義御前に・參り・此よしを・奏し・申されたりければ・法皇・斜ならず・御感なつて・やがて院宣・あそばしてぞ・たうだりける・文覺・院宣・賜はつて・斜ならず・よろこび・又夜を日に繼で・下る程に・兵衞佐・あはれ・此聖の・慈なる事・申出し・又いかなる・憂目にか・あはんずらむ・なんど・おもはじなき・事もなう・案じつゞけて・おはしける・七日と申・戌刻ばかりに・文覺・伊豆國に・落つき・給ひて・くは・や殿・兵衞佐・院宣よ・とて投出す・兵衞佐・院宣ときくが・かたじけなさに・あたらしき・淨衣を着・てうづ・うがひして・其後彼院宣をぞ・ひらかれける・其狀に・いはく

平氏・王化を・蔑如して・政道に憚る事なし・夫我朝は・神國也・宗廟・あひならむで・神德是あらたなり・故に・朝廷開基の後・數千餘歲の間・帝位を・かたぶけ・國家を・あやぶめんと・せし者・皆以・敗北せずと・言事なし・是によつて・且は・神道の冥助に・まかせ・且は・勅宣の・旨趣に・まかせて・はやく・平氏の・一類を・亡して・朝の怨敵を・退て・譜代弓箭の・兵略を續て・身を・たて・家を・おこすべし・者院宣・かくのごとく・仍執筆如件

治承四年・七月九日の日・右兵衞督光義が・承り奉て・兵衞佐殿へとぞ・被遣たる

富士川合戰

其後・彼院宣をば・錦の・袋に入て・石橋の・合戰の時も・兵衞佐の・頸に・かけられけるとぞ・聞えし・去程に・福原には・さらばまづ・東國へ・討手を・むけよやとて・大將軍には・小松の權の亮少將維盛・副將軍には・薩摩守忠敎・侍大將には・上總守忠清・嫡子太郎判官忠綱・飛驒守景家・其子大夫の判官景高・河内判官秀國・高橋の判官長綱・伊東九郎祐氏・俣野の五郎景久・武藏の三郎左衞門有國・長井の齋藤別當實盛を・先として・都合其勢・三萬餘騎・同き九月十八日に・福原を立て・明る十九日に・舊都に・つき・同き二十日の日・東國へ・發向せられけり・中にも・小松の權の亮少將維盛は・生年・廿三に・なられけるが・容儀・たいはい・世に・すぐれ馬鞍・物具に至る迄・あたりも・てりかゝやく程にぞ・見えられける・其外・われも〳〵と・出立れ・たりし・有樣・めづらしかりし・見物なり・戰場へ・向ふ・大將軍・三の存知あり・節度を・賜る時・家を・わすれ・家を出る時・妻子を・忘れ・敵と・たゝかふ時・身をわすれ・いふ本文あり・此人々も・さこそは・おもはれけめと・哀なり・中にも・副將軍・薩摩守忠敎の・年來・通うて・あそばされける・宮腹の女房の・許より・小袖を一重・送られけるが・千里の餘波を・惜みつゝ・一首の歌をぞ・送られける・

東路の草葉をわけて袖よりも・たゝぬ袂はなほぞ露けき

忠敎の・返事には

東路を何となげかん越てゆく・關を昔の跡とおもへば・

關を昔の跡と思へばと・讀る歌の心は・此人々の・先祖・平將軍貞盛・相馬の將門・追討の爲に・東八ヶ國へ・越られたりし心を・おもひ出てや・よまれたりけむ・いと・やさしうぞ・聞えし・朝敵を・たひらげに・外都へ・むかふ將軍は・まづ・參內して・節刀を・賜る物なれば・主上・宸儀南殿に・出御なつて・內辨外辨の公卿・參列して・ちう儀の節會を・行はる・承平天慶の・證跡も・年久しくして・準へがたし・是は・堀川の天皇の御時・讃岐守政盛が・いまだ因幡守・たりし時・對馬守・源の義親・追討の爲に・出雲へ・下向・したりし例とて・鈴ばかりを・賜はつて・彼袋に・いれ雜色が頸に・かけさせてぞ・下られける・去程に・平家は・九重の都を・立て・野原の露に・やどをかり・高ねの・雲に・旅ねして・山を・かさね・川をへだてつゝ・やう〳〵・下り給ふ程に・十月十六日には・駿河國・清見が關にぞ・つき給ひける・路次の兵・かりぐして・都合其勢・七萬餘騎・先陣は・富士川・蒲原に・さゝへければ・後陣は・いまだ・手越宇津の山にこそ・みち〳〵たれ・次の日・少將・侍大將・上總守忠清を・めして・同じうは・足柄を・打越・八ヶ國に・ついて・合戰・せばやと・思ふは・いかゞ・あるべきと・宣へば・上總守・畏つて・申けるは・東國は・草も木も・みな・兵衞佐に・隨ひ・つきて・候へば・凡・二三十萬騎に・おとる事は・候まじ・味方は僅に・七萬餘騎とは・申せども・或は・雜兵・或は・國々の・かり武者共にて・長旅に・責つかれては・いかにも・叶ひ候まじ・只此度も・山を・前にあて・川をへだてゝ・味方の御勢を・待せ給ふ・べうもや・候らんと・申たりければ・此上は・少將も・力及給はず・中にも・副將軍・薩摩守忠教・あはれ人の心の・延たる程・口惜かりける・物あらじ・入道の・今一日も・さきに・討手を・むけられたらんには・大庭や・畠山が一黨は・まつさきに・こそ參らんずれ・是程に・心うき事あらじとぞ・宣ひける・其後・少將・東國の案內者に・召具せられたりける・長井の齋藤別當實盛を・めして・東國に・汝程の・大矢射る者は・いか程あるぞと・宣へば・實盛・大きに・あざわらつて・君は・實盛をも・大矢・射る者と・おぼし召れ候か・總に・十三束をこそ・仕り候へ・東國に・大矢と・申ぢやうの者は・十五束に・おとつて・ひくは・候まじ・弓は・三人・五人して・おしかゝる・大弓・おほ矢を・もつて・仕り候へば・鎧の・二三領は・かけず・とほり候・東國に・大名と・申ぢやうの者の・五百騎に・おとつて・つるゝは・候まじ・馬を乘に・おつる事を・しらず・惡所を・はするに・馬を・たふさず・西國武士・畿內の兵共こそ・親・うたれ候へば・子は・引しりぞき・いみ・あひて・よせ・子・討れ候へば・親は・引退き・孝養しては・よせ候へ・東國には・都て・其儀候まじ・親うたれんと・すれば・子は・さきに・死なんと・すゝみ・主討れんとすれば・家子・郎等は・さきに死なんと・すゝみ候・親も・討れよ・子もうたれよ・死人を・のぼりこえ〳〵・戰う候・甲斐・信濃の・源氏・山の案內は・知たり・搦手定て・まはり候らん・殊に源氏は・夜討を・このみ候・かやうに・申せばとて・君を・臆せ・させ・まゐらせんとには・候はず・軍は・勢にはよらず・はかり・ごとによると・昔よ

り・申傳て候へば・能々御用心・有べしと・かやうに・おびたゞしげに・申たりければ・平家の兵共・みな色を・うしなつてぞ・ふるひける・去程に・鎌倉の・兵衞佐賴朝は・同き十八日に・十八萬騎にて・足柄を・こえ・給ふ・甲斐源氏・南部・武田・小笠原・一萬騎にて・富士の腰を・傳うて・兵衞佐と・一つになる・信濃源氏・大內・平賀・木曾の冠者・是も・一萬餘騎にて・兵衞佐と・一つになる・源氏程なく・廿萬騎に・成にけり・同き廿日の日・源氏廿萬騎・富士川の端に・打出・むかひの岸に・陣をとる・源平たがひに・川をへだてゝ・さゝへたり・同き廿三日の・卯の刻に・源平互に・矢合と・定てんげる・平家のかたには・此由を聞いて・軍は・今明の程にては・よも候はじ・いざや旅の・餘波を・惜まんとて・其邊ちかき・宿々より・遊君・遊女共・よびむかへ・或は簱をといて・枕とし・或は・甲をふせて・枕とし・前後も・しらずぞ・打とけたる・長井の齋藤別當實盛・此よしを見て・行末・たのもしからずや・おもひけん・又家の名を・をらじとや・手勢五十餘騎を・ひきわけて・さきに・京へぞ上りける・少將・こは・いかに・實盛が・なき所にては・軍は・せられぬ事かとぞ・宣ひける・去程に・源平互に・矢合と・定てんげる・其夜の夜半ばかりに・富士沼に・いくらも・むれゐたりける・水鳥共が・何にかは・驚たりけむ・千萬・たつ・羽音の・大風大浪・なんどの・やうに・聞えければ・平家の兵共・此よしを・聞いて・あはや・實盛が・いひつる・やうに・源氏は・夜討このみと・きくに・あはせて・只今・よせたるにこそ我等・無案內なり・是にて・取籠られては・かなふまじ・墨俣・あじかを・ふせげや・とて・我さきにとぞ・上りける・餘りに・あわてたる者共は・弓一張に・二三人・太刀一振に・一二人・とり付・わがよ・人のよと・奪やう・なほも・あわてたる者共は・つなぎ馬に・のつたりければ・うて共〳〵・只・くひを・のみこそ・まはりけれ・猶も・あわてたる者共は・さかさまむまに・のつたりければ・ぬしは・西へと・心ざせば・馬は・ひんがしへ・はしるも・あり・その邊近き・宿々より・遊君・遊女共・よびむかへ・たりければ・かゝる騒動に・或は・腰・ふみぬかれ・或は・かしら蹴わられ・をめき・さけぶ・ありさま・をかしかりし事共なり・同き廿三日の・卯の刻に・源氏廿萬騎・富士川の端に・打出・時をどつとつくつたりけれ共・平家の・方には・靜まり・かへつて音も・せず・兵衞佐・大きに・不思議の思ひをなし・人をつかはして・みせられければ・平家は落て・候はずと申・或は・鎧わすれて候・或は・甲わすれて候・或は・大幕忘て候・或は・簱わすれて候とて・てん手に・もつて參る・兵衞佐王城のかたを・ふしをがみ・是賴朝が・威勢に・あらず・氏神八幡大菩薩の・御はからひにてぞ・渡らせ給ふらん・やがて・つゞいても・せむべけれ共・跡の事も・覺束なければ・とて・それより鎌倉へこそ・歸られけれ・平家は・ただにげにして・京へのぼる・其邊・近き宿々の者共・此よしをみて・昔より・見にげと・云事は・あれ共・聞にげと・いふ事は・いまだなし・戰場へ・むかふ・大將軍・矢ひとつを・だにも・射すてず・逃上る・行末とても・たのもし・からずさよとぞ・申ける・中にも・上總守忠清が・富士川に鎧わす

れたりければ・忠清が・たゝをとつて
富士川に鐙はすてつすみぞめの・衣たゝきよのちの世のため
ふじ川の岩こす瀬々の水よりも・早くもおつるいせ瓶子かな
忠清はにげの馬にぞのりてけるかづさしりがひかけて止めよ
平家をひらやに讀なして

平家なるむねもりいかに騒ぐらんはしらとたのむ亮を落して
入道相國・此よしを・聞給ひて・大きに腹を・立・詮ずる所・少將をば・鬼界が島へ・流すべし・上
總守には・腹を切せんと・いかられけるを・人々やう〳〵に・取申され・たりければ・此上は・入道
も・力及給はず・され共・福原には・新都の・事始有べしとて・里内裏・きら〳〵しう・作り出し奉
つて・同き十一月七日の日・御遷幸とぞ・聞えし・され共・此都は・北は山に・そうてたかく・南は・
海ちかくて・くだれり・常は・波の音・鹽風はげしくして・喧き・所也・内裏は・山の・中なれば・木
の丸どのも・かくやと・おぼえて・中々・優なる所もあり・人々の家々は・野中・田中なり・ければ・
あさの衣は・うたね共・十市の里とも・いつゝべし

五節の沙汰（あひ）

今年は・大嘗會あるべしとて・天下みな・其いとなみなり・大嘗會と・申は・十月の末に・主上・東河
原へ・御幸なつて・御禊あり・大内の・北の野に・在廳所を・つくつて・神服・神供を・とゝのふ・龍尾
道の壇上に・廻龍殿を・たてゝ・御湯をめす・同き壇の幷に・大政宮を・つくつて・神饌を・そなふ・
宸宴あり・御遊あり・清暑堂の・御神樂あり・さされ共・福原には・大極殿なければ・大禮・行はる事
もなく・清暑堂も・なければ・御神樂をも・奏せず・今年は・五節新嘗會・ばかり・有べしとて・な
ほ新都の・御政をば・舊都の・神祇官にてぞ・遂られける・五節は・これ・昔・清見原の・天皇の・
御門・琴を・しらべ給ひしに・神女・忽に・あまくだつて・乙女子が・をとめ・さびしも・からだまや・
大友の王子に・恐させ給ひて・大和國吉野の奥に・住せ給ひし時・月・白く・さえ・嵐はげしき・夜・
そのからだまや・からだまと・五反是を・うたうて・五たび・袖を・ひるがへす・これぞ・五節の・
始なる・今度の・都遷しの事をば・君も臣も・大きに・歎思召れける・うへ・別して・山門の大衆・た
びたび・奏狀を持て・歎申けり・第三ケ度の奏狀に・入道・道理至極してや・思はれけん・同き十二
月十日の日・都がへり・有べしとぞ・聞えし・平家の人々の・かく歸りのぼられける・うへは・まし
て・他家の人々の・たれか・心うかるべき・福原の新都に・一日も・やすらふべきに・あらず・とて・
我さきにとぞ・上られける・人々の家々をば・去ぬる・夏・賀茂川・桂河に・こぼち入・筏にくみう
かべ・資財雜具を・舟に積て・福原へ・運下されたりげれば・內々・取立られ・けれども・今は・なに

事の・沙汰にも・及ばず・みな・うち捨〳〵ぞ・上られける・各〳〵すみかも・なければ・或は・八幡・賀茂・日吉・嵯峨・太秦・西山・東山の・方ほとりに・ついて・或は・社の寶前・或は御堂の・廻廊に・さも然るべき・人はみな・たちやどつてぞ・おはしける

奈良炎上

今度の・都うつりの・本意を・いかにと・申に・舊都は・山門・南都・ちかくして・聊の事も・あれば・或は・南都の・神木を・捧奉つて・上洛し・或は・日吉の・神輿を・舁捧奉つて・つねは・下洛する間・福原は・えも遙にへだたり・道の程も・遠ければ・さやうの事に・よも輒からじと・入道・はからひ出して・うつされけるとぞ・聞えし・今度・高倉の宮の・御謀叛の・同心によつて・南都の・鬱憤いまだ・やまず・攝政殿よりは・衆徒を・召れて・何事にても・存ずる旨あらば・奏聞に・及べかしと・仰ければ・大衆畏つて承り・只太政の入道にあうて・死にたう候とぞ・申ける・其後・南都には・法師原に・仰て・大きなる・ぎつちやうの・玉を・つくらせ・是は・清盛入道が・頸と・名付て・うて・ふめ・なんどぞ・申ける・又土にて・八尺の人形を・つくらせ・般若寺の・大卒都婆に・釘付にして・これこそ・太政の入道を・はつ付に・あはすれなんどぞ・申ける・此人悉も・柏原の天王の・御末・御門の・御外戚にて・太政大臣までも・輒へあがりたまふ程の・人を・かやうに申・南都の・大衆に・天魔・入かはれりとぞ・人申ける・事の・もらし・やすきは・禍をまねく・媒と・愼ざるは・やぶれを・とる基共・かやうの・事をや・申べき・其後内裏には・藏人少將親政に・仰て・南都・しづめよとて・下されければ・大衆・木津川の端に・行むかひ・都よりの・御使を・散々に・凌礫し・剩・勸學院の・雜色二人が・もとゞり・きり・御使親政が・もとゞりも・きれや・切れとの〳〵しりければ・親政大きに・色を・うしなつて・逃上る・入道又・瀬尾の太郎兼康を・大和國の・檢非違所に・補して・南都しづめよとて・下されけるが・わざと弓矢・打物・腰の刀をも・帶すべからずと・宣へば・承つて・兼康五百餘騎にて・むかひけるが・みな白裝束なり・大衆又・木津川の端に・行むかひ・兼康が・手勢・五百餘騎を・散々に・蹴ちらし・剩・兵六十餘人が・頸を・きつて・猿澤の池の端にぞ・かけさせける・平家・かやうの事共を・なじかは・よしと・おもはるべき・さらばまづ・南都をも・發向せよやとて・大將軍には・入道の四男・藏人の頭重衡・侍大將には・越中の前司盛俊・次郎兵衞盛嗣・上總の五郎兵衞忠光・ゑひの次郎盛賢を先として・都合其勢・四萬餘騎・治承四年十二月廿八日に・南都へこそ・發向せられけれ・南都にも・奈良坂・般若寺・ふたつの道を・切ふたぎ・在々所々に・矢倉を・かいて・待かけたり・官軍は・四萬餘騎・馬武者共が・さしつめ・引つめ・散々に・射る・大衆は・七千餘人・みな打物・歩立なり・ければ・其日・一日・戰ひ暮し・夜に入ければ・奈良・般若寺・二ケ所の城郭・やぶれにけり・恥をもおもひ・名をも・惜む・

大衆は・奈良坂にて・討死し・般若寺にて・自害す・行歩も・かなはぬ・老僧・あゆみも・やらぬ・修學者は・庭に出・おほく・自害してんげり・爰に・落行勢の・中に・坂の四郎坊永覺とて・打物とつては・七大寺・十五大寺にも・すぐれたり・萌黄の腹巻に・黒糸縅の鎧を・重て・き・帽子甲に・五枚甲を・おなじく・重て・きるまゝに・かた手には・白柄の・大長刀の・鞘を・はづし・かた手には・大太刀を・ぬきもち・我に・おとらぬ・弟子・同宿・十餘人・前後左右に・たて・てんかいの・門よりうつて出・西に・むけてしんばし・さゝへたりけるにぞ・馬の足・ながれて・官軍・おほく・亡びにける・同き廿八日の・夜の事なりければ・くらさはくらし・敵も味方も・みえわかず・大將軍・藏人の頭重衡・法花寺の・鳥居の前に・打立て・火を出せ・やと・下知せられ・たりければ・播磨の國の住人・福井の庄の・下司・二郎大夫友方が・手よりも・楯を・わつて・績松にし・てんかいの南なる・にしの・在家に・火をぞかけたりける・ほもとは・ひとつなりけれども・吹まよふ風に・おほくの伽藍に・おしかけかけたり・佛像・經巻・法文・聖教の・たぐひ・一巻も殘らず・回祿既に・他に・異にして・盛陽一朝の・煙を・なす・尋常なる・兒・女房や・道俗・男女の・きらひなく・或は山科寺・東大寺へ・われ・さきに・とぞ・逃籠りける・大佛殿の・二階にも・老少・二千人・ばかりにげのぼり・敵を上せじと・やがて橋をば・ひかせけり・さりともと・こそ・思ひしに・猛火は・まさしく・おしかけたり・をめきさけぶ有樣・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱・無間阿鼻ほのほの庭の・

罪人共の・かなしびも・是には・過じとぞみえし・興福寺は・是・淡海公の御願・藤氏累代の寺也・東金堂に・おはします・佛法最初の・釋迦の像・西金堂に・おはします・自然涌出の・觀世音・瑠璃を・ならべし・四面の廊・朱丹を・まじへし・二階の樓・九輪高く・かゝやける・二基の塔も・忽に煙と・なるこそ・悲しけれ・東大寺は・是常在不滅・實法寂光の・生身の如來と・なぞらへて・聖武皇帝・手づから・みづから・鑄寫し・參らつさせ給へる・金銅十六丈の・盧遮那佛・烏瑟高く・聳ては・半天の雲に・かくれ・白毫あらたに・磨かれ・給ふ・滿月の・御粧・みぐしは・燒落て・大地にあり・御身は・涌あひて・塚の・ごとし・八萬四千の相好は・秋の月・はやく五重の・雲にかくれ・四十一地の瓔珞は・夜の星・むなしく・十惡の風にたゝよひ・けぶりは・中天に・みち〳〵て・猛火は・こくうに・ひまぞ・なき・まのあたり・みる物は・さらに眼を・あてず・かすかに・傳へきく人は・肝魂を・うしなへり・天竺震旦は・しらず・日本我朝においては・かゝる・法滅は・まだなし・梵釋四王・龍神八部・冥官冥衆も・定て・驚き・さわぎ・給ふらんとぞ・覺たる・法相擁護の・春日の大明神も・いかなる事をか・思召れけん・神慮の程も・はかりがたし・さればにや・春日野の露・色かはり・三笠山の・嵐の音までも・皆うらむる・さまにぞ聞えける・同廿九日に・大將軍・藏人の頭重衡・南都亡して・北京へこそ・歸られけれ・今度張本の・惡僧共の頸をば・獄門に・かけらるべし・なんど・御沙汰有しか共・南都亡して・面目なくや・思はれけん・こくさう院の・南なる・堀や

溝にぞ・捨られける・今度戰場にて・うたるゝ大衆・數をしらず・やけ死ぬる者・四千人・或は・山科寺にて・六百餘人・或は・御堂にて三百餘人・又ある御堂にて・五百餘人・大佛殿の二階にも・一千七百餘人とかや・以上・四千餘人とぞ・注されける・今度・南都亡して・平家ばかり憤り・はれて・思はれけん・一院・新院・攝政殿の御歎・申ばかりも・なかりけり・縱・惡僧共をこそ・ほろぼすといふ共・伽藍を・破滅すべしやはとぞ・御歎ありける・されば・聖武皇帝の・宸筆の・御起請文にも・わが寺・興復せば・天下も・必・衰徴すべし・我寺・興復せば・天下もかならず・興復すべしとこそ・あそばされけんなれ・今是程に・塵灰と・なりぬる上は・天下の滅亡・疑なし・去程に・年くれて・治承も五年に・成にけり

卷第六

新院の崩御

治承五年・正月一日の日・內裏には・東國の兵革・南都の火災によつて・拜禮なし・小朝拜も・行なはれず・二日の日・殿上の宴酔もなし・新院の御所には・御惱と・聞えさせ給ひしかば・男女・打ひそめて・禁中のありさま・忌々しき程なり・法皇も・內々〳〵仰けるは・四代の帝王・おもへば子也・孫也・しかるに・政務をも・しろしめさずして・年月を・送らむ・心うしとぞ仰ける・南都の僧綱・三十四人を・解官せらる・惡徒共をば・禁獄せらる・衆徒は・戰場にて・討れ・或は・燒殺され・或は・流し・失なはれしかば・たま〳〵のこる者共も・家かまどを捨て・みな山林にこそ・交りけれ・中にも・興福寺の別當・花林院の僧正・永圓は・法文學敎の・けぶりとなるを・見給ひし・日よりして・病つき程なう・失給ひぬ・此永圓は・やさしき人にてぞ・まし〳〵ける・或時・郭公の鳴を聞給ひて

きくたびにめづらしければ時鳥・いつも初音の心地こそすれ

と・よまれたりけるに・よつてこそ・初音の僧正とは・召れけれ・同き四日の日・僧名の沙汰・あり

しか共・南都は・解官せられぬ・さらば・天台宗の・衆徒ばかりを・めさるべきか・さらずは・御延引あるべきか・なんど御沙汰ありしか共・今年は・御齋會ばかりを・召れてぞ・形のごとくの・御齋會をば・遂に・成法王講とて・勸修寺に・候はれける・老僧ばかりを・召れてぞ・形のごとくの・御齋會をば・遂られけり・其程に・新院の御所は・去年の冬より・御惱と・聞えさせ給ひしが・東國の兵革・南都の火災に・よつて・なほおもらせ給ひしが・同き正月十二日に・御年二十一にて・終に・かくれさせ給ひけり・やがて其夜・東山清閑寺へ・送り奉り・夕部のけぶりに・たぐへつゝ・春の霞とともに立ぞ・消させ給ひける・八歳より御位に・つかせ給ひ・御宇・十二年・德政・千萬端・詩書仁義の・すたれだる道をおこし・理世安樂の・たえたる・跡をつぎ給ふ・慈悲の御めぐみは・一天を照し・平等の・いつくしみは・四海の外に・流れたり・三明六通の羅漢も・まぬかれず・現術變化の權者も・のがるゝかたなき・道なれ共・生死無常の・悲しみは・こと〻わり過てぞ・覺たる

紅葉

抑・高倉の院と・申奉るは・人の從ひ付奉る事も・おそらくは・延喜天曆の御門と申共・是には・爭か・まさらせ給ふべきとぞ・人申ける・大かたは・賢王の名をあげ・仁德の行をほどこさせ・おはしまします事も・君御成人の後は・清濁を・分たせ給ひて・其上の事にてこそあるに・無下に此君は・幼稚に・渡らせ給ひしより・此かた・性を柔和にうけさせおはします・承安のころほひは・御在位の・初つかたにて・御年纔に・十歳ばかりにもや・ならせおはしましけん・紅葉を殊に・叡覽あるに・或時・櫨・鷄冠木の・誠に・色うつくしう・もみぢたりけるが・參りたりけるを・主上・斜ならず・御感あつて・北の陣に・小山をつかせ・是をうゑさせ・紅葉の山と・名付て・終日に・叡覽あるに・なほあきたらせ・おはしまさず・しかる・を・ある夜・嵐はげしう吹て・紅葉をみな・吹ちらし・落葉・顏・狼藉・なり・とのもりの・とものみやつこ・あさぎよめすとて・悉く・これを・とり捨てんげり・殘れる枝・ちれる木葉を・かきあつめて・嵐すさまじき・朝なれば・縫殿の陣にて・酒あたゝめて・たべける・薪にこそは・したりけれ・大膳の大夫信成が・いまだ其ころ・藏人にて・紅葉の奉行・承つて・候ひけるが・御幸より・さきにと・かしこへ行て・見けるに・一もなし・いかにと・とひければ・しかん〳〵とこたふ・信成大きに・色をうしなつて・しらず・汝等・いかなる・禁獄・流罪にも・あうたり・信成も又・いかなる逆鱗にか預からむ・ずらむと・とゞしく・夜のおとゞを・御出あつて・御あさまつりごとより・さきにと・かしこへ行幸なつて・叡覽あらんと・するに・跡かたなし・主上・さて・いかにやと・御尋ありければ・信成・奏すべきやうはなし・ありのまゝにぞ・申ける・主上天氣殊に・御心よげに・打ゑませ給ひて・林間に・酒・煖て・紅葉を・燒といふ・詩の心をば・是等には・たがをしへけるぞや・やさしうも・仕つたる・ものか

なとて・却て・えいかんに・預かつし上は・敢て・勅勘は・なかりけり・又安元二年の・冬の末に・主上ある處へ・御方違の行幸の・成たりけるに・さらでだに・鶏人・暁・唱ふ聲・明王眠を・驚かす・ころにも成しかば・主上は・いつも・御寝覺がちにて・打とけ・御寝も・ならざりけり・況さゆる霜夜の・天氣殊に・はげしき時は・むかし・延喜の・聖代・國土の民共が・いかに寒かりつらんとて・夜の・おとゝより・御衣をぬがせ給ひて・おし出させ給ひし・御事までも・思召出て・わが帝徳の・いたらぬ事をのみ・歎かせおはします・其後・はるかに・夜ふけ・人しづまつて・程とほく・女の・さけぶ音の・しければ・供奉の公卿・殿上人は・聞も出されざりけるを・主上は・聞召出して・只今・さげたるが・泣にてぞ・ありける・上日の者・立よりて・いかにと・問ければ・さ候らへばこそ・しうの女房の・やう〳〵にして・したてられて・さふらひつる・お裝束を・御所へ持て・參りさふらふを・只今・おそろしげなる・男・二・三人がほど・出來つて・奪取つて・まかりぬるぞや・今は・お裝束が・さふらはゝこそ・御所にも渡らせ・給はめ・又はかばかしう・立よらせ給ふべきを・したしき人もましまさねば・是をおもふに・泣なりとぞ・申ける・上日の者・彼めのわらはを・具足して・御所に歸り參り・此よしを奏し・申たりければ・主上・あなむざん・何ものゝ・しわざにてか・ありつらむ・昔の・堯の・代の民は・堯の心をもつて・心とする故に・みな・すなほなりき・今の朕が代の・民は・朕が心をもつて・心とする故に・かだましき者・朝に・あつて・つみををかす・是わが・恥にあらずやとぞ・仰ける・さてその・とられつる・きぬは・何色ぞと・仰ければ・しか〳〵と申す・中宮の御かたに・左樣の色したる・御衣や候と・仰つかはされたりければ・はるかに色うつくしきが・參りたりけるを・主上・彼めのわらはに・くだし・給はすとて・なほも・夜ふかし・さやうの・めにもや・あふとて・上日の者・あまたつけさせ・おはしまして・主の女房の・局まで・送らせ給ふぞ・忝き・されば・あやしの・賤男・賤女に・いたるまで・只此君・千秋萬歳の・寶算を・祷り奉る

葵の前（あひ）

なによりも其比・優に・やさしき・ためしに・申侍りしは・中宮の御かたに・さふらはれける・局の女房達の・めしつかはれける・上童の中に・葵のまひとて・龍顔に・咫尺し奉る・事あり・只白地の・事にてもなうて・主上・常は・召れければ・主の女房も・めしつかはず・かへつて・しうのごとくにぞ・もてなしける・そのかみの・諺詠に・いかで・女をうんでも・悲歎する事なかれ・女は・妃たり・ひは后とも・なれり・しらず此人・女御后とも・や・いはれ・給はんずらんとて・内々は・葵女御なんどぞ・さゝやき申ける・主上此よしを・傳へ聞召れて・其後はあへて・めされざりけり・是はまつ

たう・御志の・つきさせ・給へるにはあらず・只世の・そしりを・思召はゝからせ給ふに・依て・なり・され共・御志の盡させ・給はざりしかば・供御をも・つや〳〵・聞し召れず・御寢も・打とけならず・其時の・攝籙松殿・此由を・傳聞給ひて・さては・左樣に・御心ぐるしき御事の・渡らせ給ふにこそ・まかつて・なぐさめ奉らむとて・急御參內あつて・さやうに・叡慮に・かけて・おぼし召れむする・御事を・御憚あつて・なんの詮か候べき・只・件の仁を・めさるべし・俗姓・あひ尋らるゝに及ばず・やがて基房が・やう〳〵に仕るべきよしを・申させ給ひたりければ・主上・仰なりけるは・位を・しりぞいてのちは・まゝ・さるためしありとは・しろしめせ共・まさしう・在位の時・かやうの者・召れたる・例なし・わが代に・はじめたらむは・後代のそしり・なるべしとて・終に聞召も・入させ給はず・急御車にめして・御退出あり・或時主上御手習のついでに・みどんの薄樣の・にほひ殊に・深かりけるに・故歌なりけれ共・かゝる折節を・思召出て

しのぶれど色に出にけり我戀は・物やおもふと人のとふまで・

御心しりの・殿上人・給りついて・あふひのまひに・たぶ・あふひのまひ・給はつて・例ならぬ・心地出來たりとて・里に歸り・障子の內に・たふれふし・この御書を・胸にあて・かほにあて・かなしみけるが・十四日と申すに・終に・はかなく・成にけり・主上・此よしを・傳へ聞し召れて・斜ならず・御歎に・沈ませおはします・君が・一日の恩のために・妾が・百年の身を誤共・かやうの事を・申べき・彼唐の太宗の・鄭仁基が・娘を・元觀殿に・いれしめんと・せし時・魏徵がいはく・貞女既に・陸氏に約せりと・諫しによつて・殿へ入られんと・せし事を・やめられ・たりしにも・まさらせ給ふ・御心ばせかなとぞ・人申ける・君は・あふひのまひが・事に・思召しづませ給ひて・御惱と・聞えさせ給ひしかば・中宮の御かたより・御かいしやくの・女房達・あまた・參らせられけり

小督

其比・櫻町の中納言・重敎の卿の・御娘・小督の殿と・申て・禁中一の・美人ならびなき・琴の上手・おはしけり・冷泉の大納言隆房の卿の・いまだ其比・少將にて・節會に・參られたりけるが・此女房を・一目見そめ・奉つて・思に心を・そめ・歌をよみ・文を盡し・とし月・戀かなしまれけれ共・なびく給ひけり・少將・寵愛して・ひくけしきも・なかりしに・さすが・情によわる心にや・終には・なびき給ひけり・少將・寵愛して・わりなく・思はれけれ共・程なう・內へ召れ參らせて・あかぬ・別の涙にや・袖しほぬれて・ほしあへず・少將・餘所ながらも・見奉る事もや・とて・常は・其事となく・參內せられけり・小督の殿の・住給ひける・局の前を・かなた・こなたへ・とほり・みすの外に・たゝずみ・ありかれけれ共・つての情をだにも・懸られず・少將・なさけなく・思ひ給ひて・或時・一首の歌を書て・みすの內へぞ・

入られける

思ひかね心は空にみちのくの・ちかの鹽竈ちかきかひなし・

小督の殿・やがて・返事をも・せばやとは・思はれけれ共・われかやうに・君に・めしおかれ・參らせぬる・上は・少將・いかにいふ共・言葉をかはし・返事を・すべきにあらずとて・文をば・上童にとらせて・みすの外へぞ・投出されける・少將情なくも・うらめしうは・思はれけれ共・さすが・人目も・空おそろしくて・此文を・懐に引入つゝ・あゆみ出られけるが・さるにてもとて・又立かへり

玉づさを今は手にだにとらじとや・さこそ心におもひすつとも・

今は・今生にてあひみん事も・かたければ・いきてゐて・人を戀しと・思はんより・只死なんとのみぞ・の給ひける・あうて・あはざる・戀もあり・あはで・思ひ・ふかき・恨もあり・あはで・思ふ・戀よりも・逢てあはざる・恨こそ・せんかたなくは・おもはれけれ・此冷泉の少將と・申も・入道相國の聟なり・又中宮・内裏に・渡らせ給へば・ふたりの聟を・小督の殿に・とられて・入道いや〳〵・此小督が・あらむかぎりは・世中よかるまじ・さればこそ・此小督を・とらへて・何共・なさばやとぞ・宣ひける・小督殿・此よしを・傳へ聞給ひて・わが身の・ともかうも・ならんは・いかにも成なん・君の御事こそ・御心ぐるしけれとて・あるくれがたに・内裏をば・忍びつゝ・まぎれ出・行方しらずぞ・失られける・君は・小督が事に・思召沈ませ給ひて・供御なんども・聞し召す・御寢も・打とけならず・入道相國・此よしを・傳へ聞給ひて・君は・小督が事に・思召沈ませ・給ひたんなれ・さらむにとつては・とて・御介錯の・女房達・一人も・參らせられず・參内せられける・臣下たちをも・それまれければ・入道の・權威に・憚て・參内する人なし・禁中のありさま・いたゞ〳〵しき程也・君は・小督が事に・思召しづませ・給ひて・晝は・夜の・おとゝにのみ・いらせ給ひ・よるは・南殿に・出御なつて・月の光に・御心をすまさせ・おはします・比は八月十日あまりの・事なれば・さしも・くまなき・空なれ共・御涙に・くもりて・月の光ぞ・朧なる・主上・人や候〳〵と・仰けれ共・御いらへ申者も・なかりけるに・やゝあつて・彈正の大弼・仲國其夜しも・御前ちかう・御宿直申て・候ひけるが・仲國と・おいらへ申て・參りたり・いかに仲國ちかう・參れ・仰合べき・事ありと・仰ければ・仲國御前・ちかうぞ・參りたる・おもひもかけぬ・事なれ共・もし・小督が・行衞や・知りたるかと・仰ければ・いかでか・たやすく・知り參らせ・候べき・主上・まことや・嵯峨のおく・かた折戸とやらんしたる内に・ありと申・者のあるぞとよ・あるじが・名をば・知らず共・尋て・まゐらせなんやとぞ・仰ける・仲國申けるは・あるじが名を・知り候はでは・いかで・たやすく・尋參らせ候べき・主上・まことにもとて・龍顏に・御涙せきあへさせ給はず・仲國此仰・承るかたじけなさに・つく〳〵物を・案ずるに・誠や・其人の・内裏にて・琴ひき給ひしとき・つねは・笛の役に・召れて參りし物を・縦いづくにも・おはせよ・此月の曲なさに・君の御事・思召出して・琴ひき給はぬ・事あらじ・

嵯峨の在家・いく程なし・打まはつて・たづね奉らんに・其人の・琴の音ならば・いづくにても・聞しらんずる物をと・おもひければ・さ候はゞ・尋參らせて・見まゐらせ候はゞや・縱尋あひ參らせて・候共・御書を・給り候はでは・うはの空にてもや・候はんずらんと・申たりければ・主上・まことにもとて・やがて・御書あそばしてぞ・たうだりける・料の御馬にのつて・ゆけとぞ・仰ける・仲國・御馬給はつて・明月に鞭をあげて・そこはかとなく・あこがれゆく・をしかなく・この山里と・詠じけむ・嵯峨のあたりの・秋の暮・さこそは・哀におもひけめ・片折戸したる所を・み付ては・もし是にもや・おはすらんとて・ひかへ〳〵・聞けれ共・琴ひく音は・せざりけり・此月のくまなさに・月の光に・さそはれて・もし御堂なんどへもや・參り給ひたるらんとて・釋迦堂を始とし・堂々を・まはつて・尋參らせけれ共・小督の殿に・似たる人だにも・なかりけり・內裏をば・さしも・たのもしげに・申て出ぬ・尋る人には・いまだあはず・むなしう・歸參りたらんは・中々あしかりなん・是より・何方へも・落ゆかばやとは・おもへ共・いづくか・王土ならぬ・身をかくすべき・やどもなし・法輪は・程ちかければ・法輪の・かたへと・行程に・龜山のあたりちかく・松の一村あるかたに・かすかに・琴ぞ・聞えける・嶺の嵐か・松風か・尋る人の・琴のねか・覺束なくは・おもへ共・駒をはやめて・うつ程に・かた折戸・したる內に・琴をぞ・ひきすましける・少も・まがふべからず・小督の殿の・爪音なり・樂は・何ぞと聞ければ・男思うて・戀ふとよむ・想夫戀をぞ・ひかれける・樂しもこそ・おほきに・只今・この樂を・ひき給ふ事よ・仲國いとほしや・此人も・いまだ君の・御事をば・思召・忘ざりけりと・うれしくて・やうでう・すこし音とり・馬より・とんでおり・門をほと〳〵と・敲ければ・琴をば・はやひき・やみ給ひぬ・是は・內裏より・仲國と・申者が・御使に・參つて候・明ら・れ候へ〳〵とて・敲共々々・とがむる・音もせざりけり・やゝあつて・內より・人の來るおとの・しければ・嬉敷て・待處に・鎖をはづし・門をあけ・いたいけしたる・小女房の・かほばかりを・さし出して・是は・內裏なんどより・御使・給りぬべき・所にてもさふらはず・いかさまにも・門違にてもや・さふらふらんと・申ければ・仲國・返事せば・かどたてられ・鎖さゝれては・あしかり・なんとや・思ひけん・やがて・おしあけてぞ・入にける・小督の殿の・すみ給ひける・妻戸の間の・緣に・よりゐて・申けるは・いかで・かゝる・御住ひにて・渡らせ給ひ・候ぞや・君は・御事ゆゑに・思召沈ませ・給ひて・供御なんども・聞し召れず・御寢も・打とけならず・只うはの空と・おぼしめされて・候が・御書を・給はつて・參りて候・物をとて・ありつる・女房して・君の御書を・奉る・ひらいてそへて・おし出され・たり・仲國・女房の・裝束・一重・肩に打懸て・申けるは・餘の御使・にても候はゞや・御書の・御返事のうへは・子細候まじ・けれ共・君の內裏にて・お琴ひかせ・給ひし時・常は・笛の役に・めされて・參り候ひし・その御奉公をば・いつしか・思召・忘させ給ひて・候やらん・直の・

御返事・承らざらむは・口惜う・候ひなんずと・申ければ・小督の殿・あるべしとや・思はれけん・身づから・返事し給ひけり・そこにも・定て・しられたるらんやうに・太政の入道殿の・あまりに・おそろしき・事をのみ・宣ふと・聞しが・淺ましさに・あかゝる住ひにて・ありつれば・琴なんど・ひく事も・なかりつるに・あすの比より・小原の邊に・おもひ立事の・さふらふ間・あるじの・女房が・こよひばかりの・名殘を・惜つゝ・夜もはや・ふけぬ・今は・たちぎくものも・あらじなんど・やう〳〵に・こしらへ・おく程に・さぞな・むかしの事も・床敷て・手なれし・琴をひく程に・やすくも・聞出されけるよ・とて御涙に・咽給へば・仲國も・袖をぞ・ぬらしける・仲國申けるは・あすの比より・小原の邊に・思召立御事と・候はゞ・いかさまにも・御樣なんど・かへらるべきにて・候やらん・有べうも・候はず・あるじの・女房・出し奉るべからずとて・召具したりける・めぶ・吉祥なんど・申す・男を・とゞめおき・我身は・內裏へ・歸り參りければ・夜ははや・ほの〴〵とぞ・明にける・料の御馬・つながせつゝ・女房の裝束・はね馬の障子に・なげかけ・今ははや・御寢も・はるかに・なりぬらん・たれしてか・申べき・なんど思ひ・南殿のかたへと・行程に・十六夜の月は・はや南庭を・わたつて・西の中門へ・さしいれ共・君は・よるの・おとゞへも・入せ給はず・仲國を・御待がほにて・夕べの・御座にぞ・まし〳〵ける・南に・かけり・北に・むかふ・寒雲の・秋のかりに・つけがたし・東にいで・西になが・る・たゞせんばうを・曉の月に・よすと・たからかに・詠せさせ給ふ處に・仲國・つゝと參り・小督の殿の・御返事を奉る・主上・斜ならず・御感あつて・仰合すべき者も・なきに・さらばやがて・汝むかへかしと・仰ければ・仲國・平家の・かへりきゝ給はん所をも・憚思ひけれ共・是も又・勅定なりければ・手車・きよげに・さたし・嵯峨に・參り・此由申たりければ・小督の殿・しきりに・參間敷よしを・申されけるを・やう〳〵にして・こしらへ・むかへとり奉り・かすかなる所に・しのばせまゐらせて・主上よな〳〵・召れける程に・姫宮・一所・出來させ給ひけり・此姫宮と申は・坊門の女院の・御事也

九州の早馬（あひ）

一院は・打續き・御歎・淺からず・まづ永萬元年・七月には・第一の御子・二條院・かくれさせ給ひぬ・又安元元年・七月には・御孫・六條院・崩御なりぬ・比翼の鳥・連理の枝と・星をさし・さしも・御契淺からざりし・建春門院は・ゆふべの霧に・をかされ・朝の露と・消ぞ失させ給ひける・又現世・後世・たのみ參らつさせ・給ひたりける・此高倉院に・さへおくれまゐらつさせ給ひしかば・一乘妙典の・御讀誦・三密護摩の・御薰修も・積らせ給ひけり・入道相國も・此日比・心のまゝに・ふるまはれける事を・さすが空おそろしうや・おもはれけん・安藝嚴島の・內侍が腹の・御娘・今年十六に・なられけるを・法皇へ參らせられけり・人々をも・えらまれ・女房達をも・あまたつけ申されけり・

偏に・入内の儀式にたがはず・新院かくれさせ給ひて・いまだ七ケ日だにも・すぎざるに・人いつしか・つねめかしとぞ・申ける・其比・信濃國・木曾と申山なかに・義仲と・いふ源氏ありとぞ・聞えし・是は・故六條の・判官・爲義が・次男故帶刀の先生義賢が・子なりけり・父の義賢は・去ぬる・久壽二年・九月廿三日に・武藏國・大藏が館にして・惡源太義平に組で・討れぬ・其時義仲・纔に・二歳に・なりけるを・母抱て・信濃にこえ・木曾の權の中三兼遠に逢て・此子そだてゝ・人になしてみせ給へと・いひければ・兼遠・甲斐々々敷も・たのまれて・此廿餘年が間・養育したりけるに・生たつまゝに・身ぢからだいにして・力・人にすぐれたり・はかりごとを・めぐらす事も・田村・利仁にもこえ・將門純友にも・なほ過たらむ・さればいかにして平家を・亡し・世を打とらばやなむとぞ・申ける・養父の兼遠・此よしを聞て・誠にさやうに・宣ふこそ・八幡殿の・御末共・おぼゆれと・譽られて・いよ〳〵心猛くなる・先・信濃國には・根の井の・彌太(イ大彌太)・滋野の行親を・先として・國中の者共・木曾につく・上野國には・那波の太郎廣澄を・先として・多故の郡の者ども・故帶刀の先生・義賢が・よしみによつて・木曾につく・木曾と申は・信濃國に・とつても・南のはし・美濃國に・さかうたり・それより・都も・程近かりければ・平家の人々・こはいかがせんとぞ・騒れける・入道相國・此よしを傳へ聞給ひて・信濃・一國は・生國なれば・したがふ共・自餘の者共は・何とか思ふべき・中にも・越後國の住人・城の太郎助長は・餘五將軍の末葉・多勢の者にて・あんなれば・彼

等に討て・參らせよと・仰下されたらんに・などか・討てまゐらせ・ざるべきと・世にも・事もなげにぞ・宣ひける・同き・二月一日の日・城の太郎に・越後をたぶ・同き三日の日・城の太郎・越後守に・任せらる・同き七日の日・大臣の家々に仰て・尊勝陀羅尼・並に・不動明王の・慈救の咒・書供養せさせ奉らる・何としたらば・はか〳〵しき・事のあらんずる・やうに・ともすれば・人ぐるしき・事のみあつてとぞ・上下さゝやき・あへりける・同き八日の日・河内國の住人・武藏の權の守義基入道・子息石河の判官代・義兼・五百餘騎にて・謀叛おこすと聞えしかば・同き九日の日・瀬尾の太郎兼康・一千餘騎にて・河内國に馳下り・長野の城に・押寄て・散々に責ければ・義基入道・討れにけり・子息石河の・判官代は・痛手負て・生捕にこそ・せられけれ・同き十一日に・義基入道が頭・大路を渡さる・諒闇に・賊首・大路を・渡さるゝ事は・堀川の天皇の御時・對馬守・源の義親が頭・大路を渡されたりし・今度其例とぞ・聞えし・抑義基入道と申は・八幡殿に五男・陸奥の五郎兵衛・義時の朝臣の子也・けり・同き十二日に・宇佐の大宮司公光・早馬をたてゝ・平家へ申けるは・臼杵の次郎・維高・緒方の三郎維義・在々所々に・城郭を構て・大宰府の下知にも・從はずとぞ申ける・伊豫國には・河野の四郎通信・五百餘騎にて・謀叛おこすとも・聞えけり・紀伊國には・湯淺の七郎兵衛宗光・熊野の別當湛增・是も平家を背て・源氏に同心すとも聞えけり・東國・北國・蜂のごとくに・おこりあひ・

南海・西海・かくのごとし・四夷既に亂れぬ・世はたんだ今・うせなむず・こはいかゝせんとぞ・騒れける

入道の死去

同き廿日の日・平家の一門・六波羅に・馳あつまつて・抑今度の・軍のやうは・いかゞあるべきと・評定あり・中にも・前の右大將宗盛の卿の・すゝみ出て・申されけるは・度々東國へ・討手をば遣して候へども・はか〴〵しう・しいだしたる事も候はず・今度は・宗盛まかり向ふべきよしを・申されたりければ・人々色代して・ゆゝしう候ひなんず・沙汰にも候はゝ・東國に・おいて・背奉るべき人・一人も候まじと・申あはれければ・入道斜ならず・喜び給ひて・武官に備り・弓箭に・たづさはりぬべき・人はみな・宗盛を・大將として・東國へ・發向すべしとぞ・宣ひける・同き廿六日に・門出して・あかつき既にうつたゝんと・し給ひける・其夜の・夜半ばかりより・入道俄に・御病つき給ひしかば・平家は・門出ばかりにて・東國下向は・やみにけり・同き廿七日に・入道御病つき給ひぬと・聞えしかば・京中の上下・あはや・さみつる・事よ〳〵とぞ・申ける・入道・御病つき給ひし日よりして・湯水をだにも・飲入給はず・身の內のあつき事は・只火をたくに・おなじ・あまりに・あつうたへがたければ・あたり・四五間は・參りちかづく者もなく・たま〳〵參りたる者共も・あわて・さわぎて・走り出・たゞ宣ふ事とては・あつや〳〵と・ばかり也・金銀のたぐひ・綾羅錦繡・牛馬六畜の・たからを惜まず・靈佛靈社へ・なげうたれけれども・佛力も・神力も・つきはてゝ・續る・いのりも・かなはず・たゞ宣ふ事とては・あつや〳〵とばかり也・入道相國の・臥給ひけるうへを・大鹿の・五六・十四五・廿ばかり・かなたへは・こゆる・こなたへは・越ると・ぬれば夢・さむれば・うつゝにぞ・見給ひける・是ひとへに・春日の・大明神の・たち・かけらせ給ふに・こそと・おそろしかりし・御事也・同き・閏二月一日の日・平家の男女・ひとつ所に・さしつどひ・悲しみ給へど・甲斐ぞなき・中にも・入道の北方・二位殿は・あまりに・あつうたへがたけれ共・御枕ちかう・立よつて・今ははや御所勢・たのみすくなう・みえさせ給ひて・さふらふに・何事にても・思召おく・御事さふらはゞ・宣ひおかれ・さふらへかしと・涙もせきあへず・宣ひければ・入道・世にも・くるしげにて・いきを・ついて・宣ひけるは・平家世をとつて・廿一年・樂さかえは・昔も・今も・ためしすくなかりし・事共なり・されば共・生をうくる者の・死を遁るゝ事なし・入道一人に・かぎらねば・今更・驚べきにもあらず・但鎌倉の・兵衛佐が・頭を見ざりつる・事こそ・よみぢの・さはり共・なりぬべう・おぼゆれ・入道いかにも・なりたらんのち・相構て・經をも・かき・佛塔をも・供養すべからず・入道を・入道と・おもひあはれんずる人々は・宗盛を・大將として・東國に發向し・兵衛佐が・頭をきつて・塚の前に・かけさせよ・それぞ・何にもすぐれたる・今生後生の・孝養共・思ふべきと・

宣ひけるにぞ・きく人・罪ふかげには・おもはれける・ある夜・又二位殿の御夢に・牛の面したる物や・馬のおもてしたる者や・夜叉鬼神等が・四五百・千人ばかり・引つれて・八葉の車の・猛火・おびたゝしう・もえたるに・鐵の札に・無といふ文字を・書て・たて・入道相國の・宿所・西八條の・坪のうちへ・からと・やりいれたり・二位殿・あれは・いかにと・宣へば・是は・閻魔大王より・平家・太政の入道殿の・御迎に・夜叉鬼神等が・參りて候と・申たりければ・二位殿夢心に・おそろしうは・思れけれ共・さてあの札は・いかにと問給へば・是は・大伽藍・亡し給へる・咎によつて・八萬劫まで・沈給ふべき・無間の・無也・間の字は・いまだ・あらはれずと・申すと・おぼして・夢醒てのち・二位殿・胸ぐるしう・五體より・汗ながれ・しばしは・物をも・の給はず・その後・熱病・いよ〳〵しきりに・せめければ・千手井より・水をくだし・石の船にいれ・四方より・樋を懸たれども・水ほとなく・湯のごとくに・なりにけり・提に・水を入・胸の間に・おかれけれ共・聊くつろぐ・こゝちも・し給はず・板敷に・水をかけ・其上に・ころび・ふされけれ共・なほたすかる・心ちも・し給はず・たゞ宣ふ事とては・あつや〳〵と・ばかりなり・同き閏二月四日の日・悶絶躃地して・終に・あつち死にこそ・し給ひけれ・同き・五日の日・入道うせ給ひぬと・聞えしかば・京中六波羅に・馬車の・かけちがふおとは・いかづちのごとし・縦・一天の君・万乗の・あるじの・いかなる・御事・渡らせ給ふとも・かぎりあれば・是には・過じとぞ・見えし・今年は・六十四にぞ・ならせける・必是を・老死と・申すべきには・あらね共・天罰を・蒙り・身にかはらむ・命にかはらむと・契りし・兵共・冥途の使をば・防がず・枕をならべ・魂を・かさねし・妻妾も・黄泉の旅へは・友なはず・只日比・つくりおきし・罪業・ばかりや・ともなふらんと・哀なりし・事共也・さてしも・有べきならねば・同き七日の日・をたぎ寺へ・送り奉り・夕部の煙と・なし奉る・骨をば・伯父の・圓實・法眼・頸にかけ・禪原へ・もつてくだり・經の島にぞ・納ける・かゝりける・葬送の夜・入道相國の・宿所西八條より・火出來て・俄に・燒に・けるこそ・不思議なれ・人の家の・やくるは・常のならひなれ共・折節こそ・あるに・是も・たゞ事ならずとぞ・人申ける・あやしの・しづが・なき跡にも・つねは・鐘うちならし・勤おこなふ・事も・あるぞかし・さこそ・遺言からに・只明暮は・軍・合戰の・いとなみの外は・他事なしとぞ・聞えし

慈心坊

入道相國の・最後のありさまこそ・誠に・おそろしかりけれ共・大かたは・神祇を敬ひ・佛法を崇め給ふ事も・世には又・すぐれ給へる・人なり・其故は・攝津國・福原に・經の島を・つかせ・上下・往來の船共の・末代の今に・至るまで・相違なく・着事こそ・めでたけれ・此島と申は・衆僧を集め・一切經を・石の面に・一日一夜に・書寫し・供養して・築籠られけるに・依てこそ・經の島とは・名付

たれ・今の兵庫の島・これなり・その上・入道相國は・たゞ人にては・おはせざりけり・其故は・去ぬる・安元のころほひ・攝津國・有馬郡・清澄寺と申・山寺に・慈心坊・尊惠とて・ならびなき・持經者一人候ひけり・或時・彼が夢に・冥官來つて・告給はく・來十月廿一日に・閻魔宮の・内裏・大極殿にして・十萬國より・十萬人の・僧を請じて・法華轉讀の・事あり・尊惠も・其人數に・入たり・其時に・至つて・必來るべしといふ・告を蒙つて・夢醒てのち・此寺の別當・執行に・語りければ・大きに・不思議の・おもひをなす・げにも・其時に至つて・睡眠の・心ち出來りしかば・持佛堂に・閉籠り・念誦して・候ひけるに・誠に・一日の冥官來つて・具足してゆく・閻魔宮の・内裏大極殿と・おぼしき所に・僧侶なみ居て・法花轉讀・心も詞も・及ばれず・去程に・法會果にしかば・僧侶みな・暇申て・まかりいづ・其中に・尊惠は・いまだ出ざりけり・閻魔大王・など汝は・出ぬぞと・仰ければ・尊惠申けるは・抑法華は・三世の諸佛の・出世の・本懷・一切衆生・成佛の・直道なり・一偈一句の・功德は・五波羅蜜の・善根にもこえ・五十展轉の・隨喜は・八十ケ年の・布施にもこえたりとこそ・見えて候へ・われ幼少より・今に・至るまで・法花怠る事なし・されば共・いまだ・生處を・しらず・何としてか・往生の素懷を遂・候べきやらんと・申されたりければ・閻魔大王・仰けるは・往生不往生は・人の・信・不信に・よるなり・惡を修する・者は・惡道に・墮し・善を修する者は・善處に・うまると・見えたり・但汝が・生處は・頗梨の鏡に・みえたり・行てみよとて・又冥官に・具せられて・行て見けるに・げにも・をさなうよりして・思ひと・思ひせし事の・ひとつとして・あらはれずと・いふ事なし・尊惠も・終には・都率の内院に・うまるべしとぞ・見えたりける・尊惠渴仰の心・肝に・銘し・隨喜の涙・せきあへず・其後・尊惠・閻魔大王の・御まへに參り・暇を・申されたりければ・閻魔大王・仰けるは・汝も定て・知たるらん・汝が國に・平家・太政の入道淨海と・いふ人あり・是は・天台の・慈惠僧正の・再誕なり・末代の衆生に・因果の・ことわりを・しめさんが・爲に・かりに・將軍の身と・あらはれたる也・されば・只今・轉讀し奉る・御經も・此人の爲なり・其願力の・有がたさに・この人を・日々に・三度禮し奉る也・其文にいはく・敬禮・慈惠大僧正・天台佛法・擁護者示現最初將軍身・惡業・衆生同・利益と・此文を三たび唱て・禮する也とぞ・仰ける・尊惠かやうの事共を・本に・復し・清澄寺の・緣起に・寫して・今にありとぞ・承る・彼湯の山と申は・閻魔宮の・東門に・あたれりとぞ・人申ける

祇園女御

其上・入道相國は・忠盛が・子にては・なかりけり・誠は・白河院の・御子なりとぞ・申ける・其故は・去ぬる・永久のころほひ・白河のほとりに・ならびなき・さいはひ仁・一人ましく〳〵けり・白河の院・何としてか・聞召出させ・給ひたりけん・つねは・かしこへ・御幸なる・さてこそ・人・祇園

女御とは・申けれ・或時は・公卿・一兩人・又或時は・殿上人・三四人が程・召具して・ひそかに・かしこへ・御幸ならせ給ひけるに・比は・五月廿日あまりの事なれば・五月雨さへに・かきくれて・目ざすとも・しらぬやみなるに・此女房の・すまれける・あたりちかき・林のなかを・過させ給ふ程に・あるふる堂の・内よりも・ひかり物こそ・出來たれ・ひかり物の・體たらく・かしらには・銀の針を・みがきたてたるが・ごとし・片手には・槌のやうなる・物を持・かた手には・ひかる物を持て・とばかりあつては・さつとは・ひかり〳〵・次第に・近付き奉る・供奉の公卿・殿上人・あな・おそろし・槌のやうなる物は・鬼が持なる・うちでの・小槌なんめり・近づき奉つて・いかなる・御事の・出こんずらん・もしこれを・射もし・切も・止めたらむ・者には・勸賞あるべしと・諸卿御沙汰ありけるに・忠盛の・いまだ其比・備前守にて・北面に・候はれけるが・郎等に・むかつて・宣ひけるは・此邊林の中也・まことの・鬼神にては・よもあらじ・思ふに・狐・狸の・しわざにてぞ・あるらん・おなじうは・くんで・いけどらばやと・おもふなりとて・御堂の内に・はしりいり・ひかり物を・むずとだく・だかれて・こはいかにやと・申聲を・聞ば・人の聲なり・そののち・てん手に・火をしもして・見給へば・六十ばかりなる・法師也・この御堂の・承仕法師にてぞ・候ひける・佛に・みあかし・奉りけるが・てがめに・油を入て・持けるが・槌のやうには・見えにけり・土器に・火を入て・ふきけるが・ひかり物とは・見えにけり・雨しげければ・ぬれじとて・小麥のわらを・あみあつめて・かづきたるぞ・銀の針の・やうには・みえにける・其時・みな人・一度に・どつと・わらひて・のき給ふ・一院是を・叡覽あつて・あはれ武士の・心程・たけうやさしかりける・物・あらじ・誠の鬼神とこそ・思召つるに・もし是を・射もし・きりも・とゞめたらむは・いかばかり・無念ならまし・くまんと・おもひかゝりたる・忠盛が・今夜の・ふるまひ・返々も・神妙なりとて・勸賞には・件の・祇園女御をぞ・給りける・此女房・懷姙し給へり・うめらむ・所の子・男子たらば・汝が子にせよ・女子たらば・我に得させよとぞ・仰ける・程なう產し給へり・まことの・男子にてぞ・まし〳〵ける・忠盛かやうの事をも・奏せばやとは・思はれけれ共・とかく・打まぎれ・此若君・二歲と・申しゝ・秋の比・一院熊野詣の・還御の時・紀伊國・糸賀山と・いふ所に・御輿・かきするさせ・しばらく・是にて・御休息の・候ひける・折節・忠盛奏せばやと・思はれければ・かた藪に・いくらもある・ぬかごと申物を・袖にもりいれ・御前に參り・畏つて・申されけるは

いもが子ははふ程にこそ成にけれ

と・申されたりければ・一院はや御心得あつて・

たゞもりとりてやしなひにせよ

とぞ・仰ける・この若君・餘に・夜泣をし給ひけるをも・忠盛申されたりければ・一院

夜なきすとたゞもりたてよ末の世に・清くさかふる事もこそあれ

と・あそばされたりけるに・依てこそ・清盛とは・名乘られけれ・まことの・王子にてましませば・忠盛斜ならず・もてなし・申されけり・十二にて・叙爵し・十八にて・四位の兵衛の佐とぞ・申ける・まことの王子にて・ましませば・次第の・昇進とゝこほらず・太政大臣までも・輒へあがり給ひけり・鳥羽院・ばかりこそ・清盛が・花族は・人には・おとるまじとは・仰けれ・人は・とかう申けれ共・一期は・おもふ事なくて・すごされけるこそ・めでたけれ

あひ

むかし・天智天皇・はらみ給へる后を・太織冠に・たまはすとて・男子たらば・臣が子にせよ・女子たらば・我に得させよとぞ・仰ける・程なう産し給へり。誠の・男子にてぞ・まし〳〵ける・多武の峯の本願・定惠和尙・是也

國綱の死去

同き・閏二月廿日の日・五條の大納言國綱卿も・うせられけり・此國綱卿と・申は・入道相國に・諸事內外なう・得意申されけるが・同じ年の・おなじ日・病づき・おなじき月に・失られけるこそ・不思議なれ・此國綱卿の・入道相國に・得意始られける・故を・いかにと申に・双なき・大福長者にて・おはしければ・何にても・日に・一種入道の許へ・送られければ・現世の得意・これに・過べからずとて・國綱卿の子息・丹波守清國を・入道の・養子にし・子息・重衡を・國綱の・聟にぞ・なされける・されば・其故にや・正二位の大納言まで・あがられけるこそ・めでたけれ・先年國綱の・母うべ・八幡へ・參り給ひて・願は・我子の國綱藏人頭に・なして・みせ給へと・禱り申されける・夜の夢に・賀茂のかたよりと・おぼしくて・宮人共が・檳榔の車を・國綱の許へ・やり入るといふ・夢をみて・是を人に語り給へば・いかさまにも・公卿の・北の方に・ならせ給はんするに・こそと・申ければ・我身・とし老ぬ・爭かさる事のあるべきと・宣ひけるが・國綱藏人の頭をも・さし過て・正二位の・大納言まで・あがられけるこそ・ふしぎなれ・此國綱卿と申は・入條の中納言・兼助に・八代の孫・前の出羽の守・基助の孫・右馬頭基國の・朝臣の子なり・けり・此人の・いまだ其ころ・進士の雜色にて・近衞院に候はれけるが・仁平三年・四月に・四條內裏に・燒亡の・出來たりしに・主上・南殿に・出御なつて・人や候〳〵と・仰けれ共・折節・せて・參りたり・主上・こはいかなる者ぞと・仰ければ・進士の雜色・藤原の國綱と・名乘申す・主上・腰輿に・召れて・五條の・內裏へ・行幸なる・其後・主上・法性寺殿の許へ・かやうに・さかさかしき者こそ・候へ・それに・召つかはるべしと・仰下されたりければ・法性寺殿・御領たび・なんとして・召つかはれけり・或時主上・八幡へ・行幸なつて・臨時の・御神樂の候ひけるに・人丁が・

放生河へ・落入て・ぬれ鼠のごとくにて・其日の御神樂は・あるまじかりしを・折節國綱・法性寺殿の・御供に・候はれけるが・神妙にこそ・候はね共・人丁が裝束をば・是にも・用意せさせて候とて・取出して・人丁に・きせ・其日の御神樂をぞ・遂られける・程こそすこし・おし移りたりけれ共・歌の聲も・すみ渡り・舞の袖・拍子に・あうて・面白かりけり・物の・面白き事は・神明も・人の心も・おなじ事・むかし・天照御神・あな・面白やと・仰なりし・御事までも・今こそ・思召しられけれ・むかし・寛平法皇・嵯峨の・大井河へ・御幸なつて・御遊の・候ひけるに・勸修寺の・内大臣・高藤公の・御子和泉の大將・國高・小藏山の・嵐・はげしくして・烏帽子を・河へ吹落され・たぶさを・おさへて・せんかたなげにて・其日の・御遊は・あるまじかりしを・山陰の・中納言の・御子・助務僧都・三衣箱より・烏帽子を・とり出し・大將にきせ奉つて・其日の・御遊遂られけり・世あがつてこそ・かゝる不思議は・ありしに・國綱時にとつての・用意・賢かりける・高名かな・治承四年の・五節は・福原にてぞ・遂られける・若き・公卿・殿上人は・中宮の御かたに・推參申し・今やう・朗詠して・あそばれける・中に・ある殿上人の・竹湘浦に斑なり・雲鼓悪の跡に凝ると・いふ朗詠を・せられたりければ・國綱あな・淺まし・さやうの事は・禁忌と・こそ承れ・きゝにも・きかじとて・跼をしてぞ・逃られける・此詩の心は・昔の・堯の・御門・御娘二人・持給へり・姉をば・娥皇・妹を・ば・女英とて・ともに・舜の御門の・后に立給へり・ある時・舜王・かくれさせ給ひしかば・蒼梧の野邊へ・おくり奉り・二人の后・御門の御別を・悲しみ給ひて・蒼梧の野邊にて・泣給ひける涙・湘浦の岸の竹に・かゝつて斑なり・后そこにて・悪を・斑にてたてり・其上・悪を・しらぶる所には・つねに・雲たなびいて・物哀なる・心あり・國綱・させる文章・うるはしき人にては・おはせね共・さかれ・けるとかや・同き閏二月廿二日に・法皇・法住寺殿へ・還御なるべきよしを・仰下さる・此法住寺殿と・申は去ぬる・應保のころ・造り出し奉つて・泉水・木立に至まで・御心に・任たりしか共・此三四年が間は・或は・烏羽殿に・おしこめられさせ給ひ・或は・福原へ御幸なり・なんどして・御所も・みな・あれはてにしかば・前の右大將宗盛卿・造進して・なし・參るべきよしを・申されたりしか共・今は・何事の・沙汰にも・及ばせ給はず・ひそかに・かしこへ・御幸成て・寂寞あるに・岸の松・砌の櫻・年へにけりと・おぼえて・木高く・なりたりけるを・御覽せらるゝに・つけて・まづ・故女院の御事を・思召出て・御涙に・咽ばせ・おはします・太液の芙蓉・未央の柳・これに向ふに・いかでか・涙落ざらん・彼南内西宮の・昔の跡・しげみに・まじる・花鳥を・御覽せらるゝに・つけても・つきせぬ・物は・御涙也

行高の沙汰（あひ）

同き・三月一日の日・南都の大衆・本に復し・庄園・末寺もとのごとくに・知行すべきよしを・仰下さる・同き三日の日・東大寺・造り初らる・奉行辨には・藏人の左少辨行高とぞ・聞し・先年行高・八幡へ參り給ひて・通夜して・念誦せられける・夜の夢に・御寶殿の・御戸おしひらき・內より・ゆゝしう・けだかき御聲にて・やゝ汝・東大寺・奉行の時は・是を帶して・むかふべしとて・金の・笏を給とみて・打驚て・見給へば・則枕にぞ・候ひける・行高・當時なに事に・よつてか・東大寺奉行には・向ふべきとは・思はれけれ共・ふかうをさめて・下向せられたりけるが・遙に程へての ち・平家の・惡行に・よつて・東大寺・炎上し・いま此笏を・帶して・東大寺奉行に・むかはれけるこそ・不思議なれ・八幡大菩薩の・神慮にも・あひ叶ひ給へる・宿執の程こそ・めでたけれ

墨俣合戰

同き三月五日の日・東國より・早馬うつて・平家へ申けるは・十郎藏人行家・惡禪師圓西卿の公義圓・三人ひとつになつて・都合其勢・七千餘騎・尾張の國迄・責上つたるよしを・美濃國の・目代の許より・申たりければ・さらば・まづ・是を防やとて・大將軍には・左兵衞の督知盛・薩摩守忠敎・侍大將には・越中の前司盛俊・次郎兵衞盛嗣・上總の・五郎兵衞忠光・ゑびの次郎盛賢を・先として・都合其勢・一萬餘騎・同き三月十日の日・都を立つて・同き十五日に・美濃國に・馳下り・墨俣河原に陣をとる・十郎藏人・此由を聞給ひて・美濃國まで・責上り・墨俣河に・おしよせ・むかひの岸に・陣をとる・其日の夜に入て・卿公義圓・主從七騎・墨俣川を・打渡・平家の陣へぞ・入たりける・折ふし越中の前司盛俊が・五十騎ばかりにて・夜廻するに・行あうたり・あれは たそ・咏方と・いふ・咏方は・たそ・まことは敵ぞかし・是は義朝が末子 卿公義圓・日比の・鬱憤を達せん爲に・唯今よせたるなりと・いふ・にくし其儀ならば・あますな・もらすな・うてやとて・大勢が・まん中に・取籠て・我討とらんとぞ・すゝみける・十郎藏人・此由を聞給ひて・卿公討すな・義圓討すな・すゝめや者共・つゞけ兵とて・源氏七千餘騎・墨俣川に・打いれてぞ・渡ける・平家の・かたの大將軍・左兵衞督知盛・鎧ふんばり・突立あがり・大音聲を・あげて・源氏・只今河を・渡したれば・ぬれ武者は・皆敵ぞ・あますな・もらすな・うてやとて・馬物具のぬれたるをば・爰におつつめ・かしこに・おさへて・頸をとる・卿公義圓・二時ばかり戰つて・討れにけり・十郎藏人・此由を・み給ひて・かなはじとや・思はれけん・又墨俣河を・渡しかへして・引しりぞく・平家つゞいて・すのまた川を・打渡し・落行者どもを・爰に追つめ・かしこに・懸詰て・討とりけり・源氏のかたには・ふせぎ戰といへども・無勢・多勢に・かなはねば・さん〳〵に・打ちらされて・引退く・水驛を・後にせざれとこそ・申に・今度の源氏の・はかりごと・おろかなりとぞ・人申ける・十郎藏人美濃國にも・こらへ得で・尾張國に・引しりぞく・平家續て・尾張國に・打こえ・散々に・責ければ・

十郎藏人・尾張國にも・こらへ得で・參河國に・引退き・矢はぎ川の・橋を・ひいて・向の岸に・陣をとる・平家つゞいて・參河國に・打こえ・矢はぎ川をも・渡れければ・十郎藏人・參河にも・悚へ得で・遠江國に・引しりぞき・濱名の橋を・引て・向の岸に・陣をとる・平家續て・責られけるが・大將軍・所勞の心地・出來たりとて・高瀨の籠より・とつてかへす・今度も一陣は・やぶれども・殘黨を・やぶらねば・はか〴〵しう・し出したる・事なきがごとし・平家は・去々年・小松のおとゞ・薨じ給ぬ・今年又・入道相國・失給ひしかば・年來恩顧の・輩の外は・まゐり近付る者もなし・中にも・越後國の住人・城の太郎助長は・去ぬる二月に・越後守に・任せし・其朝恩の忝さに・木曾・追討せんとて・越後・出羽・會津四郡を・催しけるに・都合・其勢六萬餘騎・同き五月十五日に・門出して・曉・既に・うつたゝむとしける・其夜の夜半ばかりに・雨風おびたゝしう・ふりくだり・雨風やんでのち・虛空・しばらく・うすぐもつて・候ひけるに・おそろしげなる・聲を・もつて・虛空に・物が・つげてとほる・何物にても・大伽藍ほろぼしたる・平家の方人・したらん者をば・一々に・めしとるべしと・よばはつたりければ・城の太郎・恐ろしさ・きく人・みな身の毛よだつて・おぼえけれ共・弓矢とりのそれには・よるべからずとて・館を・出・十四五町・出たりけるに・城の太郎が・うへに・黒雲一むらおし・おほふとぞ・みえし・忽目くれ・鼻血たつて・たふれふす・馬にても・かなふべうも・みえざりければ・あをたに・かへれて館に歸り・二時ばかりあつて・死にけり・城の四郎・早馬を・たてゝ・此よし申たりければ・平家の・人々・こはいかゞせんとぞ・さわがれける・同き・七月十三日に・改元有て・養和元年とぞ・申ける・同き十四日に・除目おこなはれて・筑後守貞能・肥後守に・成て・鎭西の謀叛・たひらげむとて・三千餘騎にて・都をたつ・同き八月八日の日・將門追討の例とて・官の廳にて・大仁王會行なはる・同き九月九日の日・純友追討の例とて・鐵の甲冑を・伊勢へ・參らつさせ・給ひけるに・祭主神祇の大中臣の貞高・院御所へ參り・鐵の甲冑を・請取て・伊勢へ・もつて・參る程に・近江の驛にて・病づき・伊勢の離宮にて・死にけり・其比・平家は・三井寺にて・三七日の・五壇の法を・行なはせられけるに・初の七日の・第三日に・あたりける夜・降三世の壇の・大阿闍梨・覺算法印・ひぎやうしやの・彼岸所にて・千死(れしに)に・こそは・したりけれ・神明も・三寶も・御納受なしといふ事・いちじるし・其比・安祥寺の・實玄阿闍梨・平家へ・御寄數・奉りけるが・源氏・調伏とは・かゝでれて・いかにと・御尋ありければ・さん候・我等は・天下太平・朝敵調伏の・御祈り仕る・者也・然るに・當世の體を・見候に・平家・もつばら・朝敵と見させ・給ふに・よつて・是を調伏す・然ば・何の僻事か・候可と・申たりければ・其法(イ法師)・死罪か・流罪か・なんど・御沙汰有しか共・天下の大小事に・まぎれて・やみにけり・其後平家亡び・源氏の代と成て・鎌倉殿より・尋出され奉つて・やがて權律師になされ・法印に・擧せらる・同き十二月・廿五日に・中宮・院號蒙らせ給ひて・建禮門

院とぞ・申ける・主上・幼主の時の母公の院號・是初とぞ・承る・去程に・年暮て・養和も・二年に成りにけり

横田河原合戰

同き正月廿三日に・大白・卯星・をかす天文博士・是を・占ひ申す・大白昴星・をかすときんば・將軍・國の堺を・出とも・いへり・おそろしく〳〵とぞ・申ける・同き二月に・山門の・權小僧都顯眞・貴賤上下を・勸て・日吉の社に・おいて・一万部の・法華讀誦の・事あり・懸りければ・法皇も・御結緣の爲に・御幸なる・又何者が・申だしたりけん・一院・山の大衆に仰て・平家・追討・あるべきよし・聞えしかば・平家の人々・こはいかに・せんとぞ・さわがれける・去程に・山門には・平家・山を責べしと・いふ事に・聞なして・山門の騷動・斜ならず・かゝりければ・御結緣も・はやうちさましぬ・法皇・急・都へ・還御なる・中にも・本三位中將重衡・一千餘騎にて・北白河まで・御迎に參り・法皇を・請取・奉つて・急法住寺殿へ・還御なし申されけり・斯りければ・平家・山を・責べしと・いふ事も・又山より・平家を・ほろぼすべしと・いふ事も・跡かた・なき・そら事也・是偏に・天魔の所爲とぞ・覺たる・同き五月八日の日・改元あつて・壽永元年とぞ・申ける・去程に・越後國の住人・城の四郎助茂は・兄助長が・逝去の間・長茂と・改名し・兄が・鬱憤を達せんが爲に・

木曾追討せん・とて今度は・越後ばかりを・催しけるに・都合其勢・二万餘騎・同き九月十一日に・越後の國府をたつて・信濃國に・うちこし・橫田川原に・陣をとる・木曾も・其勢三千余騎・當國・余田の城を・たつて・橫田河原に・おしよせ・向の岸に・陣をとる・木曾・宣ひけるは・義仲が・軍の吉例には・七手にわかつ物なれば・まづ・今井の四郎兼平に・五百餘騎を・さしそへて・橫田河に・打入てぞ・渡させける・殘六手も・各の居たる所より・打入々々渡しけるを・平家は・運のきはめにや・是を大勢とこそ・みてんげれ・まづ城の四郎が・木曾に・手痛う責られて・村雲たつてぞ・ひかへたる・木曾・かつに・のつていよ〳〵り・城の四郎・木曾に・手痛う責られて・村雲たつてぞ・ひかへたる・木曾・かつに・のつていよ〳〵責ければ・城の四郎が・勢二萬餘騎とは・みえしか共・落ぬ・討れぬ・せし程に・たんごぶらいに・成に・けり・城の四郎・只一騎に・なつて・叶じとや・思ひけん・橫田河に・とび入・水の底を・くぐつて・越後堺へぞ・落行ける・城の四郎・はや馬を・たて〳〵・都へ・此よしを・申たりけれ共・平家は・あまりの事にや・いと・さわぐけしきも・ましまさず・同き十月十三日に・前の右大將宗盛卿・內大臣に・あがり給ふ・公卿・六人・前駈あり・殿上人十三人・扈從せらる・みな・我も〳〵と・出たゝれたりし有樣・今幾程ぞやとぞ・みえし・東國・北國・蜂のごとくに・おこりあひ・山陽・山陰・南海・西海の・兵共・既に・都へ責上る・なんど聞えしか共・平家は・風の吹やらん・波のたつらんをも・知らずしてあそび・たはぶれてのみ・おはしけるぞ・偏に平家の・運のきはめなる・去程

に・年暮て・壽永も・二年に・なりにけり

巻第七

清水の冠者のさた

壽永二年・正月廿二日に・前の內大臣・宗盛公・從一位に・あがり給ふ・但・內大臣をば・辭し申されけり・同き廿三日に・伊勢・石清水を・始奉つて・廿二社に・官幣あり・是は今度・東國・兵亂の・御祈りの・御爲とぞ・覺たる・四海に・宣旨を・なしくだし・諸國へ・院宣を下されけれ共・一向・平家の下知と・のみ心得て・參り近付く・者もなし・熊野・金峯山の・僧等・南都・北嶺の大衆・伊勢・石清水の・神人・宮人に至るまで・一向・平家を・背て・源氏に・心をぞかよはしける・其比・鎌倉の兵衞佐と・木曾と・不快の事・あつて・合戰有べしとぞ・聞えし・去程に・鎌倉の・兵衞佐頼朝は・十萬餘騎にて・鎌倉を立て・越後の國府に・着給ふ・木曾も其勢・三千餘騎・當國・余田の城を・たつて・越後と・信濃の・境なる・熊坂山に・陣をとる・木曾兵衞佐のかたへ・使者を立て・爭か・義仲・うたんとは候ぞ・十郎藏人殿こそ・御邊をうらむる子細ありて・當國に打こえて・おはすなるを・義仲さへ・すげなうもてなし・申さんずる事も・いかんぞやなれば・引具しては・候なる・

もし其故か・それならば・意趣あるべしとも・存せず・當時御邊と・義仲と・軍して・平家にわらはれんとは・思ふべきと・宣ひつかはされたりければ・兵衞佐・いゝや今こそ・左樣に申さるれ共・まことは・賴朝・討べきはかりごとを・めぐらされけるに・こそとて・討手の一陣・いよ〳〵近附くよし・聞えしかば・木曾・かなはじとや・思はれけん・子息・清水の冠者義重とて・生年十一歳に・なられけるに・海野・望月・諏訪・藤澤・以下の兵・五百餘騎を・差副て・兵衞佐のかたへ・つかはさる・兵衞佐・此上は・意趣なしとて・清水の冠者を・具足して・鎌倉へこそ歸られけれ・去程に・木曾は・越後國に・うつて出・城の四郎と・合戰す・今度も又・城の四郎・軍に打まけて・出羽堺へぞ・落行ける・去程に・平家は・去年の冬より・明年の・馬の草飼に・ついて・軍あるべしと・觸られたりければ・山陽・山陰・南海・西海の・兵共皆參りけり・東海道には・遠江より・東は・參らず・東山道には・近江・美濃・飛驒の兵・參りけり・北陸道には・若狹・より北は・參らず・其外は・皆參りけり・され共・伊豆國の住人・伊東の九郎祐氏・相模國の住人・俣野の五郎景久・高橋の判官長綱・武藏の三郎左衞門有國・長井の齋藤別當實盛は・平家の・かたにぞ候ひける・さらば・まづ北國へ・發向せよやとて・大將軍には・小松の三位の中將維盛・越前の三位通盛・薩摩守忠敎・參河守知敎・但馬守經政・若狹守經俊・侍大將には・上總の太郎判官忠綱・飛驒の大夫の判官景高・河内判官秀國・高橋の判官長綱・伊東の九郎祐氏・俣野の五郎景久・武藏の三郎左衞門有國・長井の齋藤別當實盛を・

先として・都合其勢・十万餘騎・同き四月十六日に・都を立て・北國へ・發向せられけり・かた道を・給つてんければ・逢坂の關より・はじめて・路次にもてやう・權門・勢家の・正稅官物をいはず・皆一々に・奪とる・まして・志賀・唐崎・眞野・高島・鹽津・海津の・道のほとりの・家々を・追捕して・とほられければ・人民悉・逃散す・先陣は・越前へ・すゝめば・後陣は・未近江の國・海津の浦に・みち〳〵たり

經政の竹生島詣

中にも・後陣の大將軍・皇后宮の亮兼但馬守經政は・凡・管絃の道に・達し・才藝・人に勝れて・おはしければ・かゝる世の・亂の中なれども・渚に立出・漫々たる・海上を見渡せば・一の島あり・あれはいかにと宣へば・あれこそ聞え候・竹生島候よと・申ければ・いざやさらば・渡て見むとて・侍安衞門有敎を・始として・惣じて・侍五六人・小舟に・とり乘・かの島に渡つて・島の景氣を見給ふに・心も詞も・及ばれず・比は卯月十日あまりの・事なれば・松に藤浪・さき懸り・紫の雲かと・うたがはれ・初音ゆかしき郭公・折しりがほに・告渡り・澗谷の・鶯舌の・聲老いんたり・彼・秦皇・童男・嫗女を・つかはして・不死の藥を・もとめしに・我・蓬萊を見すば・いなや・歸らじとて・いたづらに・船のうちにて・年月を・送り・天水・渺々として・求る事を・得ざりけん・彼蓬萊島の有

樣も・是には過じとぞ・見えし・ある經の文にみえたる・南閻浮提・大海の東に・湖あり・其中に・金輪際より・生出たる・水晶輪の・山あり・天女すむ處と・いへり則・かの・竹生島これ也・辨才天は・樹下石上に・あまくだらせ給へりと・いへり・是は・湖水・石上に・一足の・かたちをうつし給ふ・經政・舟よりあがり・明神の御前に・參りをがみを・參らつさせ給ひけり・それ辨才天は・往古の如來・法身の大士なり・妙音辨才天・御名は・各別なりとは・申せ共・衆生濟度の・御めぐみ・ひとしく・一度參詣の輩も・所願成就・圓滿すとこそ・うけたまはれ・たのもしうこそ・候へとて・只かた時の・程とは思はれけれ共・其夜は島にてぞ・明されける・比は卯月・中の八日の・事なれば・居待の月・さし出て・湖上も・照り渡り・宮の內も・かゞやきて・面白かりければ・經政・常住より・琵琶を・申おろし・夜もすがら・しらべ・秘曲を・つくされけり・彼正律の・しらべには・宮の內も・すみ渡り・誠に面白かりければ・明神・感應やし給ひけん・經政の・袖の上に・白龍現じて・見え給ふ・經政・撥さしをさめ・給ひて・

千はやふる神に謄りのかなへばや・しるくも色のあらはれにけり・

我等今度・朝敵を・たひらげて・身をまつたうせん事・疑なしとよろこびて・又舟に・とりのつて・海津のうらにぞ・あがられける

火うち合戰

去程に・木曾は・越後の國府に・ありながら・越前の・火うちが・城をぞ・こしらへさせられける・城の內に・籠る勢・富樫の入道佛誓・林の六郎光明・平泉寺の長吏齋明威儀師・入善・宮崎・石黑・內田の者共を・先として・都合その勢・六千餘騎とぞ・聞えし・平家・かしこにおしよせて・見給へば・火打本より・究竟の・城墎なり・磐石そばたち・めぐつて・四方に峯を・つらね・山を後にし・山を前にあつ・城の前には・能美川・新道川とて・流れたり・二の川の・落あひに・大木を切て・しがらみにかき・大石をたゝみ・あげたりければ・水東西の・山のねを浸して・偏に大海に・のぞむがごとし・影南山を・ひたして・あをうして・滉漾たり・浪西日を沈めて・紅にして・爚淪たり・彼昆明池の・ありさまも・是には・過じとぞ・見えし・舟ならでは・輒わたすべし共・見えざりければ・平家の大勢・むかひの山に・陣をとつて・むなしく日數をぞ・送られける・中にも・城の內に候ひける・平泉寺の長吏・齋明威儀師・平家に・心ざしありければ・夜に入つて・山の根をまはり・文を書て・墓目にいれ・平家の陣へぞ・打入たる・平家の兵・是を見て・こゝなる墓目の・ならぬ事こそ・不思議なれとて・とつて・見けるに・中に文ぞ・候ひける・大將軍に・みせ奉る・ひらいて見給へば・此川は・往古よりの・淵にはあらず・一旦・山河を・せきあげて候・夜に入て・足輕共を・つかはして・し

がらみを・切落させ給はゞ・水は程なく・落べし・馬の・足ざき・究竟の所にて候・いそぎ・寄させ給へ・後矢に・おいては・仕らむずる候・かう申は・平泉寺の長吏・齋明威儀師が・申狀とぞ書たりける・平家・斜ならず・喜び給ひて・夜に入て・足輕共を・つかはして・しがらみを・切落させられたりければ・げにも山河にてはあり・水は程なく落にけり・平家しばしの・遲々にも及ばず・十萬餘騎を・大手・搦手二手に・わけてぞよせられける・中にも・城の內に候らひける・平泉寺の長吏齋明威儀師・手勢三百餘騎を・ひきわけて・平家に忠をぞ・致しける・入善・宮崎・石黒・內田の者共・防戰ふといへ共・無勢・多勢にかなはねばさんざんに打ちらされ・加賀國に・引しりぞき・白山の・一の橋を引て・しら山河內に・楯籠る・平家つゞいて・加賀國に・亂入・富樫林が・二ヶ所の・城郭・燒拂てぞ・とほられける・平家の・かたの大將軍に・小松の三位の中將維盛・早馬をたてゝ都へ・此由を・申されたりければ・殘りとゞまり給へる・平家のゆかりの人々・いさみのゝしり給ふ事・斜ならず・去程に・平家は十萬餘騎を・大手搦手・二手に分てぞむかはれける・まづ・大手の・大將軍には・小松三位の中將維盛・越前の三位通盛・三河守知敎・三人大將軍にて・都合其勢・七萬餘騎・加賀・越中の堺なる・砥波山へぞむかはれける・搦手の・大將軍には・薩摩守忠敎・但馬守經政・若狹守經俊・三人大將軍にて・都合其勢・三萬餘騎・能登・越中の堺なる・鹽の手へこそ・むかはれけれ・中にも・火打が城に・候ひける・林の六郎光明・木曾殿へ・申けるは・さりともと・存候らひつる・火打の城をば・平泉寺の長吏齋明威儀師が・返り忠によつて・念なう・やぶられ候ひぬ・今度は・平家・大勢にて・向はれ候・越中の・ひろみへ・打出る程ならば・いよ〳〵味方の・御大事なるべし・愈寄させ給へと・申たりければ・木曾・さてはとて・同き五月五日の日・五萬餘騎にて・越後の國府をぞ・うつ立れける・木曾・宣ひけるは・平家の大勢・越中のひろみへ・打出る程ならば・定て・懸あひの合戰にてぞ・あらんずらん・懸あひの・軍といふは・勢の多少に・よる事なれば・大勢を・かさにかけては・かなふまじ・まづ・搦手を・むけよやとて・叔父の十郎藏人行家に・壹萬餘騎を・さし副て・鹽の手へこそ・むけられけれ・義仲が・軍の・吉例には・七手に・わかつ物なればとて・殘り四萬餘騎を・六手に・わかつ・先足利の・矢太の判官代義清に・七千餘騎を・さし副て・北黒坂へぞ・むけられける・仁科・高梨・山田の次郎・是も・七千餘騎にて・南黒坂へぞ・むかひける・樋口の次郎兼光・五千餘騎・松長の柳原・ぐみの木ばやしに・ひきかくす・今井の四郎兼平・六千餘騎にて・鷲の島を・打渡り・日の宮ばやしに・たて籠る・木曾は・一萬餘騎にて・黒坂の・北のはづれ・おやへの・渡りをし・羽丹生の森に・陣をとる

木曾の願書

木曾・はかりごとに・旗さしを・さきにたてよやとて・まづ・旗さしを・先だてらる・同き五月十一日の・巳の刻ばかりに・黒坂の峠に・馳ついて・白旗卅ながればかり・一度に・はつと・さし擧たりければ・平家のかたには・これを見て・あはやと・源氏の・一陣こそ・向うたんなれ・弦は・山も・たかう・谷もふかう・四方・岩石なりければ・搦手・左右なう・よもまはさじ・弦に・陣をとれやとて・砥波山の・山中・猿が・馬場と・いふ處に・平家七萬餘騎・おりゐて・陣をぞ・とつたりける・木曾は・八幡の社領・羽丹生の森に・陣どつて・四方を・きつと・見まはせば・夏山の・嶺の・みどんの・木間より・緋の玉垣・ほの見えて・かたそぎ作りの・社あり・まへに・鳥居ぞ・立たりける・木曾・國の・案内者をめして・あれに見えさせ給ふをば・いづれの・社と・申奉るぞ・又は・いかなる神を・崇奉りたるぞと・宣へば・あれこそ・八幡を・遷し奉つて・當國の・新八幡共申し・又は羽丹生の社とも・申候なりとぞ・申ける・木曾・斜ならずよろこび給ひて・手書に・召具せられたりける・大夫坊覺明をめして・義仲こそ・幸に・氏神・八幡大菩薩の・御寶前に・近付奉つて・合戰を・遂むとすれ・さらむにとつては・かつうは・後代の爲・かつうは・當時の・祈禱の爲に・願書を・壹筆參らせばやと・思ふはいかゝあるべきと・宣へば・覺明・此儀尤・ゆゝしう候ひなんとて・馬より・おりてかゝらんとす・覺明が・其日の裝束には・黒糸威の・鎧を着・三尺五寸の・いかもの作りの・太刀をはき・廿四さいたる・大中黒の・矢おひ・塗籠籐の弓・脇にはさみつゝ・箙より・小硯・疊紙を・取出し・木曾が前に・つい跪て・願書を・かく數千の兵・是をみて・あつばれ・文武どもの・達者かなとぞ・譽たりける・此覺明と申は・もとは・儒家の者なり・藏人光弘とて・勸學院に・候ひけるが・出家して・三條房信救と・名乘て・しばらく・南都に・候ひけるが・一とせ・高倉の宮・三井寺へ・入御の時・山門・南都へ・牒狀つかはされし・其返牒をも・此覺明ぞ・書たりける・抑清盛入道は・平氏の糟糠・武家の塵芥なりと・書たりければ・入道大きに・いかつて・詮ずる所・其信救法師・生捕にして・死罪に・おこなへと・宣へば・覺明・南都には・こらへで・北國に・落下り・木曾に・ついて・改名し・其名を・大夫坊覺明とぞ・名乘ける・かゝりし・才人なりければ・なじかは・かきも損すべき・心も及ばずぞ・書たりける・其願書に・いはく・

歸命頂禮・八幡大菩薩は・日域朝廷の本所・累世明君の鼇祖也・寶祚を守らむが爲・蒼生を利せんが爲に・三身の金容を置く・三所の權扉を排給へり・茲に頻の年より以來・平相國といふ者あつて・四海を管領し・萬民を惱亂せしむ・是既に・佛法の怨・王法の敵たり・義仲苟も・弓馬の家に生れて・纔に箕裘の塵を續ぐ・彼暴惡をみるに・思慮顧るに能はず・運を天道に任て・身を國家に抛・誠に義兵を起して・凶器を退けむとす・今鬪戰兩家の・陣を合と・いへ共・士卒いまだ一度の勇みを・得ざるあひだ・區々の心・恐たる處に・今一陣旗を揚ぐ・戰場にして・忽に三所和光の社壇を拜す・機感の純熟・明なり・凶徒誅戮疑なし・歡喜涙・こぼれて・渦仰肝に染・曾

祖父・前の陸奥守・源の義家の朝臣・身を宗廟の・氏族に・寄附して・其名を・八幡太郎と・號せしより以來・其門葉たる者の・歸敬せずと・云事なし・義仲苟も・其後胤として・首を傾て・年久し・今此大功を・興事・譬へば・嬰兒の貝をもつて・巨海を量・蟷螂が斧をとつて・龍車に・向ふがごとし・然りといへ共・家の爲・身の爲にして・是を・おこす・志の至り・神鑒暗に・あらんをや・馮哉・喜哉・伏して願は・冥顯・威を加・靈神力を合て・勝ことを・一時に決し・惡を・四方へ・退給へ・然ば則・丹祈・冥慮に叶ひ・雄權・加護を・成べくんば・先・一の瑞想を・見せしめ給へ

壽永二年五月十一日・

源義仲敬白

とぞ・讀あげたる

倶利伽羅

木曾殿を・始として十三人の・上矢の鏑を・一づつ・願書にそへて・大菩薩の・御寶前にぞ・納ける・八幡大菩薩・誠の志・二つなき所を・遙に照覽や・し給ひけん・雲の中より・山鳩・二・飛來り・源氏の・旗の上に・翩翻す・源氏のかたには・此由を見て・勇氣る事・斜ならず・平家の・兵共は・是を見て・身の毛・よだつてぞ・覺たる・其後は・源氏もすゝみます・平家も・すゝみます・兩方・楯のはをつき合てぞ・さゝへたる・其あひ識に・二町ばかりは・あるらんとぞ・みえし・其後・源氏はかりごとに・精兵十五騎を・出して・十五の鏑を・射返さす・源氏・卅騎を・出して・卅の鏑を・射返す・源氏・五十騎を・出せば・平家も・五十騎を出し・百騎を出せば・百騎を出し・合せ・兩方楯の面に・差出て・勝負をせんと・はやりけるを・源氏制して・勝負をば・せさせず・かやうに・あひしらひ・日を待暮し・平家の大勢を・そばなる谷へ・追落さんと・しけるを・平家は是を・夢にも・しらずして・ともに・あひしらひ・日を待暮しけるこそ・はかなけれ・其夜の・子の刻ばかりに・樋口の次郎兼光・五千餘騎にて・倶利伽羅の堂の後に・まはりあひ・ときを・どつとぞ・つくりける・根井の小彌太・五千餘騎・松長の柳原・ぐみの木林より・をめきさけんで・はせ來る・今井の四郎兼平・六千餘騎にて・日の宮林より・馳近付く・木曾は・一萬餘騎にて・おなじう時のこゑをぞ・合せける・前後・四萬餘騎が・とぞ覺たる・平家は・おもひもかけぬ・時の聲に・驚て・そばなる・谷へぞおとしける・きたなしや・返せや・かへせと・いひけれ共・大勢の・かたぶきぬるはとつて・かへすが・稀なれば・親落せば・子も・おとし・兄が・おとせば・弟もつゞく・主落せば・家の子・郎等も・つゞきけり・馬には人・ひとには馬・落重り〳〵・せし程に・さしもに・ふかき・谷ひとつを・平家の勢・七萬餘騎にて・うめ

あげたり・さればにや・岩泉・血をながし・死骸・岡を・なすとかや・魂に・大將軍・維盛・通盛・ばかりこそ・からき命・たすかつて・加賀國へは・ひかれけれ・入道の・末子三河守知教も・うたれ給ひぬ・忠綱・景高も・討れにけり・さればにや・此谷の底・岩のはざまには・矢の跡・刀の疵跡・殘つて・今にありとぞ・承る・中にも・伊豆國の住人・伊東の九郎祐氏は・年卅四と・名乘て・とつて・かへし・さん〳〵に・たゝかうて・討れにけり・俣野の五郎景久も・一所に討死・してんげり・中にも・備中國の住人・瀨尾の太郎兼康・平泉寺の・長吏・齋明威儀師は・生捕にこそ・せられけれ・妹尾の太郎兼康・をば・木曾・いかゞは・思はれけむ・左右なう・きらで・加賀國の住人・藏光の三郎成澄に・預けおかれたり・平泉寺の・長吏齋明威儀師をば・木曾が・前にひつすゑ・にくし・其法師きれとて・きらせられけり・其外・生捕・三千餘人が・頸きり懸させ・今は・おもふ事なし・但・叔父の十郎藏人行家に・一萬餘騎を・差副て・鹽の・手へむけつるこそ・覺束なけれ・いざや行て・見むとて・四萬餘騎が・中・荒手・二萬餘騎を・引具して・越中の國・ひみの湊を・うちわたさんと・し給ひけるが・折節・鹽さしみちて・深さ・淺さを・しらざりけるに・大夫坊覺明が・はかり事に・鞍置馬・十疋計に・手綱・むすんで・うちかけ・大勢がまつさきに・追入たりければ・鞍つめ・ひたる程にて・向ひの岸に・渡りつゝ・さては・淺かりけるぞや・渡せやとて・木曾・荒手・二萬餘騎・打入てぞ・渡しける・鹽の手に・打のぞんで・見給へば・あんのごとく・十郎藏人・軍に・打まけ・引退き・馬の息を・休給ふ所に・木曾・荒手・二萬餘騎を・入かへて・散々にこそ・責られけれ・平家・木曾に・手いたう・責られて・叶はじとや・思れけん・加賀の國に・引退き・あだか・篠原に・陣をとる・木曾・つゞいて・加賀の國に・亂れいり・あだか・篠原にて・合戰す・五月廿三日・午の刻・ばかりの事なりければ・草も・ゆるがず・てらす日に・源平互に・入みだれ・さん〳〵に・責戰ひけるに・逼身より・汗流れ・水を出すに・異ならず・茲にて・平家・三千餘騎・討れにけり・源氏も・二千餘騎・ほろびにけり・平家は・所々の・軍に打まけて・みなちり〳〵に・なつてぞ・のぼられける

實盛が最後

茲に・落行勢の中に・武者三騎・とつて返し・さん〳〵にこそ・戰けれ・一騎は・高橋の判官長綱・一騎は・武藏の三郎左衞門有國・一騎は・長井の齋藤別當實盛とぞ・聞えし・中にも・高橋の判官長綱は・越中國の住人・入善の小太郎と・くんで・落ける處を・入善が・從父・越後の國の住人・南條の次郎・落あひて・高橋が頸をば・とつてけり・武藏の三郎左衞門有國は・馬をも・射させ・おりたつて・戰ひけるが・矢・二三十筋・射立られ・太刀を杖につき・敵のかたを・にらまへて・立すくみにこそ・したりけれ・いまは・長井の・齋藤別當・只一騎に・なつて・かへしあはせ・〳〵・散々に

こそ・戰ひけれ・茲に・源氏の・かたより・武者一騎・馳來り・味方の勢は・みな・落行候に・只一騎・殘りとゞまつて・軍する人こそ・覺束なけれ・いかなる人ぞ・なのれや・名乘と・いひければ・かういふ・和君は・なに者ぞ・先・なのれと・いはれて・是は・信濃國の・住人・手塚の・太郎・金さしの光盛とぞ・名のりたる・日比より・さる人ありとは・聞及たり・是は・態おもふやうあつて・なのらぬなり・但汝を・さぐるには・あらず・よれあへや・くまんとて・馬打ならべ・ひつくんで・どうとおつ・實盛心は・たけう思へ共・痛手・共をば・おうたりけり・其上・老武者・なりければ・終に・手塚が・下になつてぞ・討れける・手塚の曲者と・あうて・くんで討て參りて候へ・大將軍・かと見候へば・つゞく・勢も・候はず・又・葉武者やらんと・存候へば・錦の・直垂を着て・候ひつる・西國武士・畿内の兵やらんと・聞候へば・聲は・坂東聲にて候と・申たりければ・木曾殿・あなむざん・もしそれは・長井の・齋藤別當實盛にてもや・あるらん・それならば・義仲が・上野へ・こえたりし時・をさな目に・見しかば・しらがの・すこしかすほなり・しが・今は・七十にも・あまり・白髪にこそ・ならむずるに・鬢髪の・くろきは・たれなるらん・樋口の次郎兼光は・年來の得意なれば・見知たるらん・樋口・めせとて・召れけり・樋口・此首を・たゞ一目見て・あなむざん・これは・誠に・長井の齋藤別當實盛にて・候らひけるぞや・木曾・さて・鬢髪の黒きは・如何にと・宣ひければ・樋口の次郎・涙を・はら〳〵と・ながいて・さん候・其やうを・申さんと・仕り候へば・あまりに・哀におぼえて・まづ・兼光が・不覺の涙の・先だち候なり・されば・弓矢とりは・只かりそめの・所にても・後までの・思出の詞をば・かねて・申置べき事にて候なり・實盛・日比・兼光にあうての・常は・うちとけ・物語に・われ六十にあまり・軍場に・出ん時は・鬢髪を・墨に染うと・思ふなり・其故は・若殿原に・あらそつて・さきをかけんも・おとなげなし・又老武者とて・人にあなづられんも・口惜かるべし・なんど申て・候ひしが・さては・染て・候らひけるぞや・あらはせて・御覽じ候へと・涙もせきあへず・申たりければ・木曾殿・誠にもとて・加賀國・なりあひの・池にて・あらはせて・見給へば・げにも・白髪にこそ・成にけれ・實盛・又にしきの・直垂を・き候らひける事は・實盛・都を・出るとて・おほい殿に・申けるは・一とせ・東國の・案内者・仕つて・矢ひとつを・だにも・射捨ずして・駿河の・蒲原より・逃上りて・候事も・實盛一人が・身の上にては・候はね共・老の果の・恥辱只・此事にこそ・候へ・今度・北國に・まかりむかうて・定て・討死・仕るべしあはれ・錦の・直垂を・御ゆるされ・候へかし・其故は・實盛本は・越前のものにて候が・近年所領に・ついて・武藏の長井に・居住仕り・候ひき・さてこそ・長井の齋藤とは・召れ候へ・故郷へは・錦をきて歸れと・申事の候・物をなんど・やう〳〵に・申たりければ・おほい殿は・さる事ありとて・かんじて・許し給ひけり・むかしの・實臣は・錦の袂を・會稽山に・飜し・今の實盛は・錦をきて・其名を北國の・巻にあぐと

かや・平家・去ぬる・四月に・都を出られしには・十萬餘騎・同き五月に歸り上り・給ふには・只三萬餘騎・さしも・花やかにて・都を出し・人々の・朽もせぬ・名をば・うき世にとゞめ置き・其身は・越路の末の塵と・なるこそ・悲しけれ・參河守知敎も・歸り給はず・忠綱・景高も・歸らず・ながれを・つくして・すなどる時は・おほくの・魚・うと・いへ共・明年には・魚なし・林を・燒て・狩時は・多くの・獸・うと・いへども・明年には・獸なし・後を・存じて・少々は・殘さるべかりける物をとぞ・皆人・申あはれける

玄昉の沙汰　（あひ）

上總守忠清は・嫡子・太郎判官忠綱を・討せておほい殿に・暇申・出家遁世・してんげり・弟・飛驒守景家も・嫡子・大夫の判官景高を・討せ是も・出家入道・してんげる・都のうちは・申に及ばず・近國・遠國の・者共も・或は・親を・討せ子に・わかれ・夫に離れ・門戸を・閉て・悲しみけり・是偏に・うむなんの・戰ひに・あひ同じ・同き六月一日の日・內裏には・祭主神祇の大中臣の眞後を・殿上の下口へ・めされて・今度・兵亂しづまらば・伊勢へ・行幸なるべき・よしを・仰下さる・眞俊畏り承つて・まかりいづ・抑伊勢太神宮と・申奉るは・むかし・高天の原より・美濃の國・伊吹の嶽へ・あま下らせ・給ひたりしを・垂仁天皇・廿五年・三月一日の日・伊勢國・度會の郡・五十鈴の河上・下津・磐根にして・大宮柱を・太敷立て・祝初・參らせてより・此方・日本・六十餘州・三千七百・五十餘社の・中には・すぐれ給へる・御神也・去共・代々の御門の・臨幸は・なかりしに・昔・奈良の・御門の御時・左大臣・不比等の孫・式部卿・宇合の子に・大宰の少貳・藤原の・廣嗣といふ人は・おそろしき人なりけり・たとへば・天平十五年・十月に・肥前國松浦の郡にして・數萬の兵革を率して・國家を・あやぶめんと・せし時・御門大野の東人を・大將として・廣嗣追討の・御祈りの御爲に・始て伊勢へ行幸なる・さればその亡靈あれて・常に・おそろしき事共・多かりけり・同き・天平十八年・六月三日の日・筑前國・御笠の郡・太宰府の・觀世音寺・供養の導師は・南都の・玄昉僧正とぞ・聞えし・玄昉・高座に・上り・敬白の鐘・打鳴し・說法せんと・しけるに・俄に・空かきくもり・雷・おびたゝしう・なりさかり・堂の棟を・蹴破つて・玄昉の上に・落懸り・其頸を・取て・雲の中へぞ・入にける・おそろしなん共・おろかなり・是は・玄昉・廣嗣を・調伏・せられたりけるに・よつてなり・同き・天平十九年正月十五日の・午の刻・ばかりに・興福寺の・南大門には・しやれたる・かうべに・玄昉といふ・銘を書て・空より・落し千人ばかりが・聲にて・雲の中に・一度にどつと・わらふこゑ・しけり・聞人みな・身の毛よだつてぞ・覺たる・此・廣嗣と申は・肥前國・松浦より・都へ一日にうつ・馬を・持給へり・されば・最後の時も・彼馬に・打乘て・海中へ・かけ入てぞ・失られける・されば・其靈を崇て・肥前國松浦の郡に・いはゝれ給ふ・

鏡の明神・是なり・此玄昉と申は・昔・吉備の大臣・入唐の時・法相宗を・我朝へ・渡したりし人也・其時に・唐人が・玄昉とは・還て・亡すと・いふこゝろあり・いかさまにも・此人・歸朝の後・事にあふべしと・申たりしに・たがはず・むかし・嵯峨の・天皇の御時・平城の・先帝・世を・亂らんと・せさせ給ひし時・御門・第三の・姫宮を・加茂の・齋院に・たて參らつさせ・給ひけり・それより・齋院・はじまりけり・又朱雀院の御宇・天慶七年に・住友・追討の・御祈りの・御爲に・八幡の・臨時の祭を・始めらる・平家・かやうの事共を・例として・さま〴〵の・御祈り共をぞ・始られける

木曾山門の牒狀

同き六月八日の日・木曾は・越前の國府に・着て・まづ・今井・樋口・楯根井を・めして・われら・今度・近國を・經てこそ・上洛すべきに・例の山門の大衆・平家の・方人して・ふせぐ・事もや・あらんずらん・打やぶつて・とほらん事は・安けれ共・平家こそ・佛法をも・しらじ・君を・なやまし奉れ・其守護の爲に・上洛せん・義仲が・衆徒に・むかつて・合戰せん事・おとらぬ二の舞なるべし・是こそ・ゆゝしきやす大事なれ・こはいかゞ・はからふ・殿原達と・いひければ・大夫坊覺明が・申けるは・山門は是・三千衆徒・一味同心に・あるべからず・內々は・咏方に・志を・存する・衆徒も・少々候らん・まづ・牒狀を・つかはして・御覽じ候へかし・子細は・返牒に・みえ候べしと・申たりければ・木曾・此儀尤とて・やがて・牒狀を・覺明に・かゝせて・山門へこそ・送られけれ・其狀にいはく

源の義仲恐ながら謹而申上候・倩・平家の・惡逆を思ふに・去ぬる・保元・平治より・此かた・ながく・人臣の・禮を失ふ・然りといへ共・貴賤手を束・縞素足を戴く・忩に・帝位を・進退し・飽まで・國郡を・掠領す・道理・非理を・論せず・有罪・無罪を・嫌はず・權門・勢家を・追捕し・其資財を・取て・猥く・郎等に與へ・彼・庄園を・沒收して・忩に・子孫に・省く・就中・往・治承三年十一月に・法皇を・城南・離宮に・押籠奉り・博陸を・西海の・絕域に・移し・奉る・衆庶・言はず・道路・目をもつてす・加之・同き・四年五月に・一院第二の・御子・高倉の宮の・朱閣を・打圍て・九重の・紅塵を・驚さしむ・玆に・帝子・非分の害を・のがれんが爲に・三井寺へ・入御の時・義仲先日・令旨を給はつて・參洛を・企てんと・欲する處・怨敵・巷に・みちて・豫參・路を失ふ・近境の源氏・なほ參候せずに・況我等・遠境においてをや・就中・園城は・分限狹によつて・南都へ・赴しめ給ふ則・源三位賴政入道・宇治橋に於て・命を・かろんじ・義をおもんじて・一戰の功をはげますと・いへ共多勢の責を・まぬかれず・形骸を・古岸の・苔に埋み・生命を・長河の浪に・流し畢ぬ・令旨の趣・肝に銘じ・同類の・悲しみ・魂を失ふ・これに依て・東國・北國の源氏等・參洛を企てんとす・その中に・義仲・其宿意を・達せんが爲に・往・年の秋・旗を

あげ・劒をとつて・信州を出し・日・越後國の住人・城の四郎長持・數萬の兵革を・率して・發向せしむる間・義仲・纔に・三千の兵をもつて・彼二万の・軍兵を破畢ぬ・然るを・風聞・ひろきに及で・重て・平氏の・大將十萬の・兵革を・率して・北陸に發向す・越州・加州・能州・砥波・黒坂・鹽・あだか・篠原・以下の城郭に・おいて・數ケ度の・合戰におよぶ・策を・惟幄の中に・運して・勝事を・咫尺のもとに・得たり・討ては必伏し・攻れば必降る・譬ば・秋の風の・芭蕉をやぶるに・異ならず・冬の霜の・群葉を・枯らすに・相同じ・是・義仲が・武略に非ず・偏に神明佛陀の助也・平氏既に・敗北の上は・參洛を・企てんとす・今叡岳の麓を經て・正に・洛陽の衢に・いるべき也・此時に至つて・竊に・疑貽あり・其故・如何となれば・抑天台・三千衆徒・源氏に・同心か・平家に與力か・若彼惡徒を・たすけらるべくんば・衆徒に向て・合戰すべし・若合戰に及ばゝ・叡岳の滅亡・踵を廻すべからず・悲哉・平家宸襟を惱し・奉り・佛法を亡す間・惡逆を靜めむが爲に・義兵を起す處に・忽に・三千の衆徒にむかつて・不慮の合戰に・及ばむ事を・痛哉・醫王山王に・憚り奉つて・行程に遲留せしめば・朝廷緩怠の臣として・武略瑕瑾の・毀を貽さんことを・進退に迷て・如此・案内を・啓する所也・庶幾は三千衆徒神の爲・佛の爲・君のため・國の爲に・して・源氏に・同心して・平家を・ほろぼし・鴻化に・浴せん・懇丹の至りに・耐ず義仲・恐惶謹言

壽永二年・六月の日

進上　惠光院の律師の御房へとぞかゝれける

山門よりの返牒

其後山門には・此狀を披見して・或は源氏に・同心せむといふ・衆徒もあり・或は・平家に・與力せんといふ・大衆もあり・其中に・老僧共の申けるは・我等は・むねと金輪聖王・天長地久と・禱り奉る者也・然るに・平家は・當代の御外戚・山門に・おいて・歸敬を・致さる・され共・惡逆・法にもれ・萬臣是を・背きたり・近年よりは・國々へ・討手を・つかはすといへ共・平家還て・夷賊の爲に・亡され・運命・既に・つきなんとす・源氏は・所々の軍に・打勝て・運命既に・開なんとす・何ぞ・山門ひとり・宿運つきぬる・平家の方人して・源氏を背かんや・願は・我等・けふよりして・平家・値遇の儀を・飜し・源氏・合力すべき由を・一味同心に・僉議して・其後彼返牒をも・送りける・其狀にいはく・

去ぬる・十日の日の牒狀・同き・十六日到來・披閲の處に・數日の鬱念・一時に解散す・玆に・平家・累年に及で・世上・騒やむ事なし・事人口にあり・違失する事・能はず・（イ詳にあたはず）夫叡山は・帝都東北の神として・國家・靜謐の・請祈を致す・然りといへ共・一天久彼天逆に侵され・四

海鎭に・其安全を得す・顯密の法利・なきが如し・擁護の神威・屢〳〵廢る茲に・貴下適〳〵累代武備の家に・生れて・當時幸に・征戰の仁たり・豫・奇謀を廻して・義兵を起す處に・其勞未・兩年を・過ざるに・其名既に・七道に施す・國家の爲・累家爲・武功を感じ・武略を感す・吾山の衆徒・且々以て・承悅す・如斯ならば・山上の精祈・むなしからざる・事を・よろこび・海内の惠護・息り・なき事を知ぬ・衆徒等が・心中・只賢察を垂よ・自寺・他寺・常住の・佛法・本社・末社・祭尊の・神明・今敎法の・再・榮ん事を・喜び・崇敬の舊きに・復せんことを・定て・隨喜し給ふらむ・冥には又・醫王善逝の使者として・凶賊追討の勇士に・相加り・顯には又・三千衆徒・しばらく・修學鑽仰の勤節を・やめて・惡侶治罰の・官軍を助しめむ・止觀十乘の梵風は・奸侶和朝の外に・はらひ・瑜伽三密の法雨は・時俗を・堯年の舊きに・歸さん・衆徒僉議・かくの如し・倩これを・察せよ

壽永二年・六月の日

とぞ・書たりける

平家の一門日吉の社へ連署の願書

是によつて・源氏の一陣・既に近付しよし・聞えしかば・平家の人々・こは・いかゞせんとぞ・さわがれける・南都・三井寺は・鬱憤を含める・折節なれば・かたらふ共・よもなびかじ山門は・當家において・不忠を存せず・當家又・山門において・惡をむすばねば・日吉の社へ・連署の願書を・籠奉つて・三千衆徒を・かたらはんとて・一門十餘人・連署の願書を・かいて・日吉の社へこそ・送られけれ・其願書に・いはく

敬て白す日吉の社を・氏神と定め・延曆寺を・氏寺と・號して・一向天台の佛法を・仰べき事右當家一族の輩・殊に祈請する旨あり・それ・叡山は・桓武天皇の・御宇・大師入唐歸朝の後・彼當山に攀上り・此處に・遮那の大戒を廣め・給ひしより以來・ふかく佛法繁昌の靈嶋として・專鎭護國家の道場に・そなふ・茲に・伊豆國の流人・前の右兵衞の・權の佐・賴朝・身の咎を悔す・却て朝憲を嘲る・其奸謀に與し・同心を致す源氏等・行家・義仲・以下・黨を結で・數あり・隣境・遠境・數國を惣領し・土宜土貢・萬物を押領せしむ・是によつて・且は・累代勳功の跡を追・且は・當時弓馬の藝に任て・頻に追罪を・こふ魚鱗鶴翼の陣・官軍利を得す・星旄電戟の威・逆類勝に乘に似たり・今神明佛陀の・加被にあらずんば・何れの日か・叛逆の・凶亂を・靜めむ・これに依て・一向天台の・佛法を・仰て・偏に・日吉の神恩を・恃まん・まくのみ・いかに況・臣等が曩祖を・思へば・忝も・本願の・餘裔と・云つべし・彌〳〵崇重すべし・彌恭敬すべし・此子孫に傳へて・永・失墮せし・山門に・喜びあらば・一門の・喜とし・社家に・憤り・あらば・一

大衆等

家の・憤　とし・善につけ・悪につけ・ともに喜をなし・おなじく・愁を抱かん・藤氏は又・春日の社・興福寺を・氏神・氏寺と尊崇して・久く・法相大乘の宗に・歸依す・當家は又・日吉の社・延暦寺を・氏神・氏寺と・歸敬して・あらたに・圓實頓悟の・教に値遇せん・かれは・昔の・遺跡なり・君の爲に・榮幸を思ふ・是は・今の請祈なり・家の爲に・頻に追罰を請・仰願は・山王七社・王子眷屬・東西滿山・護法聖衆・十二大願・日光月光・醫王善逝・十二神將・各無二の丹誠を照・唯一驗應を・垂給へ・邪法逆臣の賊・手を君門に束ね・暴逆・殘害の輩・骸を・京土に殘さんか・我等が懇誠・佛神豈・捨めや・仍當家一族の輩・異口同音に・禮をなし・祈誓かくのごとし・從三位・右近衞の中將・兼・讃岐守・平の資盛・從三位・中宮の・權の中將・兼・越前守・平通盛・正三位・左近衞の中將・兼・伊豫守・平の維盛・正三位左近衞の・中將・兼・播磨權守・平の重衡・正三位・衞門の督・兼・近衞の權の大夫・兼・加賀・越中守・平經盛・征夷大將軍・從二位・行・權中納言・兼・左兵衞の督・平の知盛・從二位行・權中納言・兼肥前守・平の教盛・正二位行・權大納言・兼・左衞門の督・平の時忠・正二位行・權大納言・兼出羽・陸奥守・平の賴盛・從一位前の內大臣・平の宗盛・敬て白す・

壽永二年・六月の日

きん（きん二字愚カ）謹上座主僧正の御房へ　とぞ書れたる

主上の都落

山王・大師あはれみを・垂させ給ひ・おなじう・三千の大衆・力を合よと也・大衆・我等・先日源氏に・同心の上は・今更・蘢すべきに・あらずとて・返牒にも・及ばず・中にも・肥後守貞能は・鎭西の・謀叛・たひらげて・菊地・へつき・松浦黨・三千餘騎を・引具して・同き・七月十八日に・都につく・今度も・鎭西は隨へ共・東國・北國は・いまだ・靜まりも・やらざりけり・同き・廿二日の夜の・子の刻・ばかりに・六波羅邊俄に・大地を・うちかへすが・ごとくに・震動し・馬に鞍おき・腹帶しめ・資財雜具を・東西へ・はこびかくす・明て後・聞えしは・美濃・源氏に・佐渡の・衞門の・尉重俊と・申者あり・これは・去ぬる・保元に・鎭西の・八郎爲朝が・軍に負て・落行けるを・近江國・石塔にて・搦取て・其時衞門の尉には・なされたり・爲朝・搦たりとて・一門の源氏には・にくまれて・平家をかたらひけるが・此夜の・夜半ばかりに・六波羅に・みち〳〵て・人をも・やすくとほさず・楯の六郎・まで・亂れいり・五萬餘騎の・勢にて・東坂本に・親忠・大夫坊覺明・天台山に・競上り・惣持院を・城郭として・山僧等・ひとつに・なつて・既に・都へ亂入候・ぞやと・申たりければ・平家さらば・まづ・是を防げやとて・大將軍には・左兵衞の

督・知盛・本三位の中將・重衡・二人大將軍にて・都合・其勢二千餘人・山科を防ぎに・むかはれけり・薩摩守忠教・但馬守經政・若狹守經俊・三人・大將軍にて・都合其勢・三千餘騎・勢多の・手へこそ・むかはれけれ・越前の三位通盛・能登守教經・二人・大將軍にて・都合其勢・一千餘騎・宇治を防ぎに・むかはれけり・去程に・其藏人行家・一萬餘騎にて・宇治路より・都へ入とも・聞えけり・足利の・彌太の判官代・義清・五千餘騎にて・丹波國より・大江山を經て・上洛すとも・聞えけり・其外・攝津國・河内源氏共・ひとつに成て・淀・河尻より・亂れ入共・聞えけり・平家此上は・都のうちにてこそ・とも角も・ならむずれ・さらば・手どもよびかへせとて・宇治・勢多の手をも・みなよびかへされける・帝都名利の地・鷄鳴て・やすき事なし・治れる世だに・かくのごとし・況亂れたる世に・於てをや・吉野の山の・おくの・奥へも・入なばやとは・思召けれ共・諸國七道・悉・やぶれにしかば・いづくの浦か・穩しかるべき・三界無安・猶如火宅・如來の金言・一乘の・妙文なればこそ・なじかは・少もまがふべき・同き・廿三日の・さ夜ふけがたに・おほい殿・女院の・渡らせ給ひける・六波羅・池殿へ・參らせ給ひて・申させ給ひけるは・此世の中の・ありさまは・今ははや・かうになるべき由を・宣へども・まのあたり人々に・うきめを・見せ參らせん事も・いかんぞや・なれば・ひとまど・なりとも・御かう・行幸をも・西國の・かたへと・おもひなつて・こそ候へと・申させ給ひたりければ・女院・只・とも・かうも・そこの・御

はからひに・こそとて・御衣の御袂に・あまる御涙・せきあへさせ・給はねば・おほい殿も・直衣の袖・しぼる計にぞ・みえられける・平家・院をも・内をも・取奉つて・西國の・かたへと・いふ事を・法皇も・内々しろし召れてもや・ありけむ・同き・廿四日の暮がたに・按察の・大納言資方の卿の・子息・右馬の頭資時・ばかりを・御供にて・窺に・鞍馬のかたへ・御幸なる・人是を・知奉らず・茲に・平家の・侍に・橘内左衞門季安と・いふ者あり・さがさがしきによつて・常は院の御前にも・めしつかはれけるが・其夜しも・院の御所に・所宿直申候らひけるが・つねの御所のかた・何となうさゝめきあひ・女房達の・忍びねに・うちなきなんど・し給ひけるを・何事やらんと・きく程に・法皇の・御所にも渡らせ・給はねば・いづかたへ御幸なりたる・やらむと・申聲に・聞なし・あな・淺ましやと・おもひ・急・六波羅へ・走り參つて・此よし申たりければ・おほい殿・いかでか・さる御事の・渡らせ・給ふべきとは・宣ひけれども・いそぎ御馬に・めし院の・御所に・走り參つて・見まゐらつさせ・給ふに・げにも・法皇・わたらせ給はず女房達には・二位殿・丹後殿を・始奉つて・一所も・渡らせ・給はず・おほい殿・さていかにや・いかにと・御尋ありけれども・誰御行衞・知まゐらせたりと・申人・一人もなかりけり・さる程に・法皇の・御所にも・渡らせ・給はぬと・申ほどこそ・有けれ・京中の・騷動なのめならず・況・平家の・人々の・さわぎ・あはれける・有樣・おのづから・家々に・敵うち入たりとも・限あれば・是には・過じとぞ・見えし・平家・院をも・内をも・

とり奉つて・西國へとは・おもはれけれ共・法王のかく・捨させ・おはしましける上は・たのむ木の本に・雨のたまらぬ・心地ぞ・し給ひける・さてしも・有べきならねば・今は・行幸ばかりを成とも・なし參らせよやとて・同き廿五日の・卯の刻に・玉の御輿を・さしよせまゐらせ・たりければ・主上は・今年・六歳にならせ・おはしましけるが・何心もなうぞ・めされける・平大納言・時忠卿の北方・帥の佐殿ぞ・御同輿には・まゐられける・中にも・平大納言・時忠の卿・承つて・神靈・寶劍・內侍所・印鑰・時の札鈴鹿に・至まで・みな・取奉れやと・下知せられけれ共・餘にあわてゝ・とり落す・物のみおほかりけり・平大納言時忠・內藏の頭信基・讃岐の中將時實・父子三人ばかりこそ・衣冠たゞしうして・行幸には・供奉せられけれ・其外おほ井殿・を・はじめ奉つて・近衞司・御綱の佐に至まで・甲冑をよろひ・弓箭を帶して・供奉せられけり・七條を西へ・朱雀を南へ・行幸なる・夢のやうなる・御事也・さる程に・漢天既に・ひらけて・雲・東嶺に・たなびき・明がたの月白く・さえ・鷄鳴又・いそがはし・一とせ都うつしとて・俄に・あわたゞしかりし・事共は・かゝるべき・前表とも・今こそ・おもひしられけれ

あひ

中にも・攝政殿は・東寺の・南へ門迄・行幸に・供奉せさせおはしまし・けるが・いかなる御事か・渡らせ・給ひけん・春日の大明神の・御告ありとて・それより・御車を・とつてかへし・大宮を・のぼりに・北山の邊・知足院殿へ・いらせ給ひけり

維盛の都落

中にも・小松の三位の中將維盛卿は・ひごろより・おもひまうけられし・事なれ共・さしあたつては・又かなしくぞ・思はれける・此・北の方と・申は・故中の御門の・新大納言成親卿の・御娘にて・おはしけれ共・父にも・母にも・おくれ給ひて・みなし子にては・おはしけれ共・桃顏露に・ほころび・紅粉面に・媚をなし・柳髪・風に・みだるゝ粧・までも・類すくなくぞ・見えられける・若君・六代御前とて・今年十になり給ふ・姫君・夜叉御前とて・八になり給ふ・おはします・ある時・三位の中將・北の方にむかつて・宣ひけるは・維盛こそ・日比申候ひつる樣に・一門に・具せられて・西國のかたへ・落行候へ・いづくまでも・引ぐし・奉るべけれ共・道にも敵・あひ待なれば・たひらかに・とほらん事もかたければ・さて・留置奉る也・若又・いづくの浦わにも・心やすう・落付て・候はゝ・それより人を・迎に奉るべし・縱・維盛・又この世に・なき者と・成たると・聞給ふ共・さまなんど・かへさせ給ふべからず・いかならん人にも・見みえて・身をもたすけ・あの・をさなき者共をも・はごくみ・給ふべし・世のつねの・ならひなれば・情をかけ奉る・人もなどかは・なかるべ

き・なんど・やうやうに・こしらへおき・給へども・北方には・とかくの返事も・し給はず・ひきかつぎてぞ・なかれける・三位の中將・既に・出んと・し給へば・北方・三位の袖に・すがつて・都には・父もなし・母もなし・捨られ奉つて・其故は又・誰にかは・見ゆべきに・いかならん・人にも見えよなんど・承るこそ・うらめしけれ・日比は・御志・淺からぬやうに・もてなし給へば・たれも人しれず・ふかうたのみ奉つて・おなじ野原の露とも・消・おなじ底のみくづとも・ならんとこそ・契りしに・いつの間にかはりぬる・人の心ぞや・されば・小夜の寢覺の・むつごとも・みな僞に・成にけり・せめて・わが身・ひとりならば・すてられ奉る・身のほどを・おもひ知ても・とゞまりなん・あのをさなき者をば・たれに見ゆづり・いかになれとて・留置給ふぞや・情なうも・捨給ふ物かなと・且はうらみ・且はしたひつゝ・なき給ひけるにも・三位の中將又・北方に向つて・宣ひけるは・誠に・維盛十五・人は・十三の年より・互に・見初見えそめ・奉つて・ことしは・既に・十二年・火の中・水の底へも・ともにいり・ともに沈み・限りある・別路までも・おくれ先だたじとこそ・申て候ひしかども・今度はかく・心うき合戰の場へ・打出候へば・あのをさなき者共をさへ・引具して・うき目を・見せん事も・いかんぞやなれば・さて・かまへて・留おき奉る也・其上・今度は・用意も仕らず・相迎を・奉るべしとて・中門にて・物具し・既に出んとし給へば・若君・姫君・はしりいで・父の鎧の・左右の袖・草摺に・取つき給ひて・こは・いづちとて・渡らせ給ひ候ぞや・われも參らん・われもゆかんと・したひつゝ・泣給ひけるにぞ・三位の中將・うき世の繩とは・思はれけり・去程に・三位の弟・新三位の中將・資盛・左中將清經・新少將有盛・丹後の・侍從忠房・備中守師盛・兄弟・五人・馬に乘ながら・大庭にひかへ給ひて・行幸ははや・遙に・延させ給ひて候に・いかにや・今までの遲參と・聲々に・申されたりければ・三位の中將・さてはとて・馬に打乘て・出られけるが・さるにてもとて・又引返し・緣のきはに・駒打よせ・弓の筈にて・御簾をきつと・かきあげ給ひて・あれ御覽せよや・千萬の敵の中をこそ・わつてもとほり・候はめ・あのをさなき・者どもが・餘に慕候を・とかう・こしらへおかんと・仕りつる程に・存外の遲參と・宣ひもあへず・涙にむせび給へば・兄弟五騎の人々も・みな鎧の袖をぞ・ぬらされける・又三位の侍に・齋藤五・齋藤六とて・兄は十九・弟は・十七になる侍あり・是は去ぬる・夏・北國・加賀の國にて・討死に・したりし・長井の・齋藤別當眞盛が・子供なり・三位の・御馬の・七寸に・取つき奉つて・いづくまでも・參るべき由を・申ければ・三位の中將・態・汝等をば・思ふやうあつて・さて留おくなり・あの六代が・又たれをかは・たのむべき・たいまげて・とゞまれと・宣へば・彼等・力及ばず・なみだを・押へて・留りけり・三位中將・既に・打出給へば・北方日比は・これほどまで・情なかりける・人とは・露思ひこそよらざりしかとて・人のきくをも・憚らず・みすのきはに・たふれふし・聲をあげてぞ・なかれける・若君・姫君・女房達の・泣給ひける・聲々の・遙の門外に迄も・聞えければ・三位の中將・心

つよくも・こしらへおきては・出られけれ共・さすが・馬をも・すゝめもやり給はず・たゞ後のみ・引かへす・心地して・ひかへ〳〵ぞ・なかれける・人はいつの日のいつの時には・かならず・歸り來るべしと・其期をさだめおくだにも・さしあたつては・まづかなしきぞかし・況・この人々は・けふをかぎり・只今・ばかりの別なれば・さこそは名殘惜かりけめ・若君・姫君の泣給ひける・聲々の遙の・耳の底に・とゞまつて・今度・西海の・旅の空・吹風たつ浪に・つけても・聞やうにこそ・おもはれけれ

池の大納言都にとどまらるゝ事（あひ）

去程に・入道の弟・池の大納言頼盛は・池殿に・火かけさせ・手勢三百餘騎・旗さゝせ・東寺の・南の門まで・行幸に・供奉せられたり・けるが・いかゞは・おもはれけむ・とつて・かへし・旗をばまいて・持せ・大宮を・のぼりに・北山のほとり・常磐院殿へ・參られけるゆゑを・いかに申に・女院の御めのと・持明院の宰相殿に・相具せられたりけるによつて也・其後・大納言・女院の・御前に參つて・申されけるは・自然の事も・候はゞ・たすけさせ・おはしませと・申されたりければ・女院・いざとよ・當時は世が・世にても・あらばこそと・世にも・たのもしげなうぞ・仰ける・中にも・越中の次郎兵衛盛嗣・おほい殿の御前に・參り・畏つて申けるは・今度池殿の・とゞまらせ給ふによつて・おほくの侍共の・付奉つて・とゞまり候が・あまりに・にくうおぼえ候・池殿までは・大きに恐いつておぼえ候へば・侍共の中へ・矢ひとつ・射かけ候はゞやと・申たりければ・おほい殿・よし〳〵・其儀・さなく共・日比の重恩を・わすれて・とゞまらんずる・奴原は・中々いふに及ばずとぞ・宣ひける・おほい殿・さても松殿の・君達だちは・いかにと・宣へば・それもいまだ・一所も・見えさせ給はずと・申たりければ・新中納言知盛・おほい殿の御まへに・まゐらせ給ひて・申させ給ひけるは・都を出て・いまだ一日をだにも・過ざるに・人の心のかはり行こそ・何よりもつて・うたてけれ・是につけても・都のうちにて・とも・かうも・なりぬべかりつる物をとて・おほい殿の・かたをつらげに見てぞ・なかれける・誠にもとぞ・思はれける・今度頼盛卿の・都にとゞまられける故を・いかにと申に・鎌倉の兵衛佐の・かたより・八幡大菩薩も・御照覧候へ・池殿におき奉つて・意趣思ひ奉らざる由を・たび〳〵宣ひ・のぼせられけるうへ・討手の上る・たびごとに・池殿に・向奉つて・弓ばしひくな・彌平兵衛に・むかつて・矢ばしはなつなと・宣ひけるを・たのみにて・とゞまられけるとぞ・聞えし・縦・兵衛佐こそ・さやうにふとも・自餘の者共は・何とか思ふべき・一門には・おくれ給ひぬ・浪にも・磯にもつかぬ・心ぢぞし給ひける

經政の都落

中にも・皇后宮の亮・兼但馬守經政は・幼少より・仁和寺・御室の御所に・候はれければ・一門の人人には・先だつて・夜に・まぎれ・都を出・仁和寺殿へぞ・參られける・其身・勅勘の身にて・おはしければ・左右なう・御前へは・參られず・人して・事の子細を・申されたりければ・宮・何かは・くるしかるべき・今一度是へと・仰ければ・經政御前に參り・畏り涙をはら〳〵と・ながいて・幼童のいにしへは・此御所に・祇候仕つて・御恩身にあまり・まかり承り・候ひき・舊院に・奉公の時も・つねは・參じ候ひしに・今は一門の・凶徒にさそはれて・西海の浪の上に・たゞよふ落人と・なりぬべう候へば・又いつの世に・歸り參るべきも・其期も定がたう候・さても・十三の年よりくだし・預り候ひつる・御琵琶をば・かた時身をはなたじとこそ・存じ候ひしか共・今・田舍の・塵に・まじへ・蒼海の底の・みくづと・なさむこともと・餘に・口惜う候へば・先かへしおきまゐらせ候なり・若當家の・代ともなつて・二度都へ・歸り上る事も候はゞ・其時は・かならずくだし預り候べしとて・侍・安衞門の尉有教を・めして・唐錦の袋にいれて・持せられたりける・御琵琶を・召寄て・宮の御前に・さしおくとて・世にも名殘をしげに見えられければ・宮かうぞ・仰ける

あかずしてわかるゝ君が名殘をば・のちの形見につゝみてぞおく・

經政・畏て・承り

呉竹の寛の水のかはらねば・なほすみあかぬ宮の中かな・

さてしもあるべき・ならねば・經政・暇申て・出られけり・宮も又・いつの世にか・御覽せらるべきなれば・御涙にむせばせ・おはします・其外御所中の人々・經政の袖にすがり・袂に取つき・みな・涙をぞ・ながされける・中にも・葉室の大納言光頼の卿の子息・大納言の・法印行慶は・經政の・小師にておはしければ・殊に餘波を・をしみ・奉つて・桂川のほとりまで・打送て・歸られけるが・經政の・袖をひかへて

哀なり老木若木も山櫻・おくれ先だち(イたつ)花は殘らじ・

經政引返し

旅衣夜な〳〵袖をかたしきて・おもひとほくも我は行かな・(イ思へば我は遠く行くなり)

法印歸り給へば・經政・紫地の錦の直垂に・萠黄匂ひの・鎧をきて・龍頭の甲の・緒をしめ・足しろの・太刀をはき・廿四さいたる・切符の矢おひ・重籐の弓持つて・月毛なる・馬に金覆輪の・くらおいて・乘給ふ・卷て持せられたりける・赤旗といてはつと・さしあげたりければ・こゝかしこにひかへて・待奉る・二騎・三騎・五騎・十騎・打より〳〵・皆御供仕り・程なう・百騎ばかりになつて・桂川のみぎはを・くだりに・夜のほの〴〵と明ければ・山崎せきとの院に・いで給ふ・凡・此經政は・

管絃の道に達し・才藝すぐれて・おはしければ・何よりも・都に留おかれし・御琵琶の行衛をのみぞ・思はれける・誠に惜かるべし・我朝に又其類・あるべからざる・重寶なり・其故は・昔仁明天皇の御宇・嘉祥三年に・掃部の頭貞敏が・入唐して・大唐の・琵琶の博士・廉承武にあひ・三曲を相傳して・歸朝の時・玄象・青山・師子丸とて・三面のびはを・相傳してこそ・渡りけれ・渡海にて・浪風・はげしかりければ・龍神の恐ありとて・中にも・師子丸をば・海底に・沈む・玄象・青山は・事故なくぞ・渡りける・それより・内裏に・とゞまつて・代々の・御門の御寶となる・中にも・村上の天皇の御宇・天德四年の秋の半に・御門清涼殿の・月の宴にして・彼玄象を・あそばされけるに・三五夜中の・新月しろくさえ・涼風・颯々の・夜ふかきに・化人あまくだつて・唱歌ゆゝしく仕る・御門・いつ御覽じなれたる・者共おぼし・めされねば・そも汝は・いかなる者ぞと・仰ければ・彼化人・是は・大唐の・琵琶のはかせ・廉承武と申・者なり・掃部の頭貞敏が・入唐して・三曲を傳へしに・今一曲を惜みて・傳へざりしによつて・魔道に落て・沈淪す・いまかしこを・過行に・御門の・御びはを承つて・參りよりて候なり・則彼秘曲をば・忝も・天子に授奉つて・魔道の苦をば・遁べしとて・御前に・たてられたる・青山をとつて・かきならし・上原・石上の・しらべと申・秘曲をば・忝も・天子に・授奉つて・かきけすやうにぞ・失にける・それより・彼青山をば・彌御秘藏・有けるを・或時・内裏より・御室へ・參らつさせ・給ひけり然るを・幼童の・御最愛のうへ・道の達者にておはしければ・くだしあづかられけるとぞ・承る・此人十七の年・宇佐の・放生會の・勅使にたつて・彼御びはをともなひ・九州に下向し・八幡大菩薩の・御寶前の・月の宴にして・彼青山を・ひかれけるに・あやしの輩も・耳をおどろかし・ともの宮人も・みな・綠衣の袖をぞ・ぬらしける・青山は・是・紫檀のかふ・羊の皮の・撥面の繪に・夏山の・木の間もりくる・有明の月を・かゝれたりしに・依て・こそ・青山とは・名付られけれ

薩摩守の都落

中にも・さつまの守忠敎は・いづくよりかは・歸られけむ・侍五騎わらは一人・召具して・五條の三位俊成の卿の許に・おはして・み給ふに・門戸を閉たり・薩摩守・馬よりおり・門を・ほと〳〵と敲て・是は忠敎と申者が・聊申べき事・あつて・參つて候・門をばな・明られ候ひそ・此きはまで・たちよらせ給ふべうもや候らんと・申されければ・三位其人ならば・くるしかるまじ・門をあけよとて・ひらいて對面ある・薩摩守は・紺地の錦の直垂に・小具足ばかりせられ・たりけるが・なほ・小具足をも・とつて・人に持せられたり・事の體・何となう物哀なり・薩摩守・申されけるは・年來申・承り候ひし・後は・疎略を・存ぜずとは・申ながら・此兩三年は・京都のさわぎ・國々の・みだれ偏に・當家の・身の上にて候へば・常は參りよる事も・候はず・君・都を出させ給ひぬる・うへは・

今は野邊に・骸をさらさむずる・より外は・又・期するかたも・候はず・偖も・勅撰あるべき由・承り候しに・幾程なうて・世の亂れ・出來・其沙汰なく候事・たゞ一身の歎と・こそ存じ候へ・若世しづまつてのち・勅撰のさた候はゞ・此中に一首なり共・御恩に・蒙つて・草の陰にても・とほき御まぼりと・なりまゐらせ候はめとて・懷より・卷物・ひとつ・取出し・俊成卿に・奉らる・披て見給へば・百首の歌をぞ・かゝれたる・三位今に始ぬ・御事とは・申ながら・かゝる・忽劇の・中にも・思召忘れぬ・御志こそ・優に・有がたう候へ・存じ候へ・勅撰に・おいては・愚身うけたまはり候へば・疎略を・存ずまじう候と・申されたりければ・薩摩守・斜ならず・喜び給ひて・今は野べに・骸を・曝さばさらせ・蒼海の底に・しづまば・沈め・今生におもひ置事も・候はず・縱・此世の・別こそ・唯今ばかりにて候共・來世にては・さらば・暇申てとて・涙を・おさへて・出られけり・三位も・哀にて・薩摩守の・うしろをはる〳〵と・見送り・涙をおさへている・其後・薩摩守は・門前にて・物具し・馬に打乘て・出られければ・いづくよりか・來りけん・侍二三百騎が程・出來つて・薩摩守を中に・とりこめ奉つて・おとし奉る時に・忠敎の聲と・おぼしくて・前途程遠し・思ひを・雁山の夕の雲に馳すと・高らかに・詠せられ・たりけるにぞ・誠にすごく・身にしみて・後の世までも・忘形見と・なられけるこそ・哀なれ・實も・世しづまつてのち・勅撰の沙汰あり・今の千載集・是なり・其中に・薩摩守のうた一首ぞ・入られたる・

志切なりしかば・あまたも・入ばやとは・おもはれけれ共・其身・勅勘の人にて・おはしければ・態名字をば・あらはされず・讀人しらずとぞ・いれられたる・故郷の・花といふ・題をもつて・よまれたりし・歌なり

さゝ浪や志賀の都はあれにしを・むかしながらの山櫻かな・

福原落

おほい殿・三位の中將を・見付給ひて・などや・今までの遲參と・宣へば・三位の中將・さればこそ・其身勤勘の人とは・申ながら・口惜かりし・事共也・去程に・小松の三位の中將維盛・兄弟・六騎打つれて・都合其勢・五百餘騎・つくり道に・うつて出・駒をはやめて・打ほどに・淀のむつだ川原のあのをさなき者共が・あまりに・慕候を・とかうこしらへ・おかんと・仕りつる程に・と・宣へば・あな心つよや・など・引具し給はぬぞと・宣へば・三位の中將・行末とても・たのもし・からず候へばとて・とふに・つらさの涙をぞ・ながされけるこそ・哀なれ・平家都を・落るとて・六波羅殿・小松殿・西八條に・火をかけたりければ・黑煙・天にみち〳〵て・日の光も・見えざりけり・或は・聖主・臨幸の地なり・鳳闕・むなしく・礎をのこし・鷲輿・たゞ跡をとゞむ・或は・后妃遊宴の砌なり・

椒房の嵐・聲かなしみ・腋庭の露・色うれふ・或は・霜郷風帳の基・弋林釣渚の館・燕鴛の栖・多日の經營・むなしくして・片時の・灰燼となれり・況郎從の屋舍に・おいてをや・況雜人の・蓬草に・おいてをや・餘焰の・およぶ所・在々〳〵處々數十町也・強吳亡びて・荊棘あり・姑蘇臺の露・滾々たり・暴秦おとろへて・虎狼なし・咸陽宮の・煙・眸睨を・かくしけむも・是には・過じとぞ・見えし・日ごろは・函谷・二肴の・さかしきを・かたくせしかども・北狄の爲に・是を破られ・洪河・涇渭の・ふかきを・おもんしかども・東夷の爲に・これを・とられたり・豈はかりきや・忽に・禮儀の都を・責出され・なく〳〵・無智の境に・身をよせむとは・昨日は・雲の上にして・雨を・くだす・神龍たり・今日は・肆の・ほとりにして・水をうしなふ・枯魚たり・保元・平治の・昔は・平家春の花と・さかえしが・壽永二年の今は・又・秋のもみぢと・落はてぬ・其比・都に候ひける・東國の・大名には・畠山の庄司重能・弟・小山田の別當有重・宇津宮の左衞門朝綱なり・去ぬる・治承の比より・囚人にて・都に・候ひけるを・おほい殿・都を出るとて・彼等・三人が・頸をはねんと・宣ひけるを・平大納言と・新中納言の・申されけるは・縦・彼等・十人百人が・首を・はねさせ・給ひて候共・御運つきさせ給ひなば・御代を・めされん事・有がたし其上・彼等は・東國に・子共あまたもつて・候へば・彼等が・歎かんずる・跡こそ・誠に・不便に候へば・只枉て・たすけさせおはしませと・宣ひあはれければ・おほい殿も・此上は・力及給はず・彼等・三人淀の・相撲の辻まで・行幸の・御供仕り・いづくまでも・參るべきよしを・申ければ・おほい殿・彼等が子共は・東國にのみ・あんなれば・汝が・魂は・一向東國にのみぞ・あるらん・からだばかり・召具して・何の詮か・あるべき・もし・當家の・代とも・なつて・ふたゝび・都へ歸のぼる・事あらば・其時は・急・參るべし・只枉て・といまれと・宣へば・かれら力及ばず・涙を・おさへて・留りけり・是も・此廿餘年の・主なりければ・さこそ名殘・惜かりけめ・平家は・山崎せきどの院にして・玉の御輿を・かきすゑて・男山を・ふしをがみ・南無歸命頂禮・八幡大菩薩・主上を始奉つて・我等を・今一度・都へ・かへし・入させ給へと・申させ給ふぞ・哀なる・落行平家は・たれ〳〵ぞ・まづ・先の內大臣宗盛・衞門の督清宗・平大納言時忠・平中納言敎盛・新中納言知盛・修理の大夫經盛・本三位の中將重衡・小松の三位中將維盛・越前の三位通盛・新三位の中將資盛・殿上人には・內藏頭信基・讃岐の中將時實・兵部の少輔政明・左馬頭行盛・左中將清經・新少將有盛・丹後の侍從忠房・薩摩守忠敎・但馬守經政・若狹守經俊・淡路守清房・尾張守清定・能登守敎經・備中守師盛・武藏守知章・藏人の大夫業盛・大夫敦盛・僧綱には・二位の僧都專進・法勝寺執行能圓・中納言律師・忠快・輕壽坊の阿闍梨祐圓・侍には・源大夫の判官季貞・攝津の判官盛澄・橘內左衞門季安・藤內兵衞季國を・先として・一門百六十三人・宗徒の侍・三百餘人・都合其勢・七千餘人・是等は・此二三ヶ年が間・東國・北國・度々の軍に・打洩されて・讒に殘る所なり・中にも・小松の三位の中將維盛の外は・おほい殿を・始奉つて・みな・

妻子を・引具してぞ・下られける・其外次ざまの者共は・後會・其期を・知ざれば・みな打すて〳〵ぞ・下りける・或は・年の・日比の・よしみ・なじかは・忘るべきなれば・ゆくもとゞまるも・只・うしろをのみ・かへりみて・さきへは・すゝみも・やらざりける・おの〳〵・うしろをかへりみ給へば・黒煙・天に・みち〳〵たり・中にも・薩摩守忠敎

はかなしな主は雲井を別るれば・宿は煙と立のぼるかな・（イのぼるなり）

修理の大夫經盛

故郷を燒野の原とかへりみて・末も煙の浪路をぞ行く・

都をば只・一片の煙塵に・へだてつゝ・前途・萬里の雲路に・おもむき給ふ・心の中・おしはかられ・あはれなり・中にも・筑後守貞能は・河尻に・源氏ありと聞て・蹴ちらさんとて・七千餘騎にて・むかうたりけるが・僻事なりければ・とつてかへし・都をさして・のぼる程に・淀の大渡りの邊にて・行幸に參り・あひ・急・馬より飛でおり・おほい殿の・御まへに參り・畏つて申けるは・こはいづくを・さして・いらせ給ひ候やらん・西國のかたへ・いらせ給ひて候はゞ・落人とて・かしこ・茲の野邊に・骸をさらさせ・給はんずる・御事をば・心うしとは・おぼしめされ候はずやと・申たりければ・おほい殿眞能は・いまだ・しらずや・木曾義仲・近江國まで・亂れいり・五萬餘騎の勢にて・東坂本に・みち〳〵て・人をも・輙とはさず・楯の六郎親忠・大夫坊覺明・一千餘騎にて・天臺山に・競のぼり・惣持院を・城廓として・山僧等・一に成て・既に都へ・亂入あひだ・人々は・都の内にて・とも・かうも・なるべきやうを・宣へども・まのあたり・人々にうき目を・見せまゐらせん事も・いかんぞやなれば・ひとまど・なり共・西國のかたへと・思ふまでにて・こそあれと・宣へば・さ候はゞ・貞能には・暇たび候へかしとて・手勢・三百餘騎を・引わけて・都にのぼり・西八條の・燒跡に・大幕・ひきまはさせ・一夜宿し・たりけれ共・歸り上り給ふ・平家の・君達・一人も・おはせざりければ・行末たのもし・からずや・思ひけむ・又源氏の蹈に・かけじとや・小松殿の・墓・ほらせ・あたりの・土をば・賀茂川へ・流し・骨をば・高野山へ送り・わが身をば・平家と・うしろ・あはせに・なつて・東國のかたへぞ・下りける中にも・宇津宮の左衞門朝綱は・去ぬる・治承の比・より・囚人にて・都に・候ひけるを・眞能・あづかつて・事外に・芳心・ほどこし・たりしかば・其恩を・わすれじと・東國に・具しくだり・斜ならず・いとほしみ・けるとぞ・聞えし・去程に・平家は・西の海・八重の鹽路に・日を暮し・磯邊の床の・草枕・入江・潮行・かいの雫・露も・涙にあらそひて・袂もろごころに・落ぞゆく・其日の暮がたに・攝津國・福原にこそ・着給へ・去程に・平家は・福原の舊里に・落つき・給ひて・おほい殿・まづ・宗徒の侍・三百餘人をめして・積善の家に・餘慶つき・積惡の・餘殃・身におよぶ・ゆゑに・神明にも・はなれ・奉り君にも・捨られ・參らせて・都の外に・い

で浪の上に・たゆふ・落人と成ぬる上は・何のたのみか・あるべき・され共・或は・近臣の，好他に・異なるもあり・或は・重代芳恩の・是ふかきもあり・一樹の陰に・やどるも・前世の契り・淺からず・一河の流を・むすぶも・多生の・縁なほふかし・況・汝等・一旦かたらひをなす・門客に・あらず・既に・累祖・相傳の家人なり・家門繁昌の・いにしへは・恩波に・よつて・私を願ひき・樂つきて・かなしみ來る・何ぞ・思慮を・めぐらして・芳恩を・酬ざらむや・主上都を・出させ・給ふとは・申せ共・神璽・寶劍・内侍所・三種の・神器を・帶して・ましませば・野のするぶ・山の奥までも・行幸の・御供仕らんとは・おもはずやと・かきくどいて・宣ひければ・侍共も・みな・愁涙して・申けるは・いかなる・心なき・鳥・獸に・至り候までも・恩を報じ・德を酬・こゝろざしは・みな候なる物を・況我等・人として・いかでか・御恩を・忘れ參らせ候べき・此廿餘年が間・妻子を・はごくみ・所從をかへりみ候・事も・ひとつとして・御恩ならずと・いふ事なし・されば・雲のはて・海のはて・までも・行幸の御供・仕るべきよしを・異口同音に・申たりければ・おほい殿も・二位殿も・力つきてこそ・おもはれけれ・平家其夜は・福原の・舊里・にて・一夜をこそ・明されけれ・折節・秋のはじめの月は・下の弓はり也・深更・空夜・靜にして・旅寢の床の・草枕・露も・涙に・あらそひて・只物のみぞ・かなしき・いつ歸るべし共・おぼえねば・故入道相國の・作りおき給ひし・春は花見の・岡の御所・秋は月見の・濱の御所・馬場殿・二階の棧敷殿・雪の御所・萱の御所・人々の・

家々・五條の大納言・國綱卿・の承つて・造らせられし・里内裏・いつしか三とせに・あれはてゝ・秋の草・門を閉・舊苔みちを・ふさぐ・瓦に・松生ひ・垣に・蔦しげり・臺・かたぶいて・苔むせり・松風のみや・かよふらん・簾たえ・閨あらはにて・月影のみぞ・さし入ける・明ければ・主上を・始奉つて・平家皆・舟にとりのり・海にぞ・浮び給ひける・都を出し程こそ・なけれ共・是も・名殘は・惜かりけり・中にも・但馬守經政は・行幸に・供奉すとて

御幸する末も都と思へども・猶なぐさまぬ浪の上かな・

昨日は東山の關の麓に・衙を・ならべて・十萬餘騎・けふは・西海の浪の上にして・纜をといて・七千餘人・浦々〳〵・島々・過行ば・海士のたくものゝ・夕けぶり・尾上の・鹿の・曉の聲・渚々に・よする波の音・袖にやどかる・夜半の月・ち草にすだく・虫の聲・すべて・目に見・耳にふるゝ・事のひとつとして・哀を・催し・心をいたましめずと・いふ事なし・雲海・沈々・として・青天・既に・暮なんとす・孤島に・夕霧隔つゝ・月海上にうかぶ・極浦の浪を分・鹽にひかれて・行舟は・半天の・雲に・さかのぼる・日數ふれば・都は・山川程を隔てつゝ・遠國は又・ちかくなる・はる〳〵きぬと・思ふにも・つきせぬ物は・涙なり・浪の上に・しろき鳥の・むれいるを見ては・彼ならん・むかし・在原の中將の・墨田河原にて・こと問けん・名もむつまじき・都鳥にやと・あはれなり・壽永二年・七月廿五日の・卯の刻に・平家・都を落はてぬ

巻第八

法皇の山門御幸

去程に法皇は・鞍馬に忍うで・渡らせ給ひけるが・茲はなほ都近くて・玉鉾の道行人の・人目も繁ければとて・篠の峯・薬王坂なんど申す・嶮難を凌がせ給ひ・山門へ・御幸成・横河の解脱谷・寂場坊・御所になる・かゝりければ・衆只東塔へこそ・いらせ給ふべけれなんど申せば・東塔の南谷・圓融坊・御所になる・かゝりければ・衆徒も武士も・圓融坊の・御所ちかう参つて・君を守護し奉る・院は天台山へ・主上は・外戚の平家に・とらはれて・西國に・攝政殿は・吉野の奥とかや其外女院・宮々は・西山・東山の・かたほとりに・ついて・かくれ忍びてぞ・おはしける・平家は・都を落ぬれ共・源氏はいまだ入かはらず・既に此都・主なき里とぞ成にける・天地開闢より以來・かゝる例は・未なし・聖徳太子の・未來記にも・けふの事こそ・床しけれ・去程に法皇は・天台山に・渡らせ給ふと・申程こそあれ・はせ参らせ給ふ人々には・入道殿とは・前の關白杉殿・攝政殿とは近衛殿・大政大臣・左右の大臣・大納言・中納言・宰相・三位・四位・五位の・殿上人・都て・官加階に・望をかけ・所帯所職を・帯する程の人の・もるゝは一人も・なかりけり・圓融坊の・堂上堂下・門外門内に至るまで・透はざまもなくぞ・みちゝたる・山門の繁昌・これ偏に・門跡の面目とぞ・見えし・同き廿八日に・法皇・都に還御なる・木曾義仲・五萬餘騎にて・供奉仕る・近江源氏・山本の冠者義高・一千餘騎にて・白旗さゝせ・先陣に・候ひけり・昨日までも・平家の・赤旗赤じるし・京中に・みちゝたりしが・いつしか今日は・白旗・白じるしに・成にけり・此廿餘年・絶たりし・白旗の今日はじめて・都へいる・めづらしかりし見物なり・同き廿九日に・行家・義仲を・院の御所へ・めされて・平家追討の爲に・西國へ・發向すべきよしを・仰下さる・各畏て承り・次をもつて・宿所も・なき由を・申ければ・木曾義仲には・大膳の大夫成忠が宿所・六條西の洞院を給り・十郎藏人行家には・法住寺殿の・南殿と申す・萱の御所をぞ・給りける・同き八月一日の日・主上幷に・神璽・寶劔・内侍所・三種の神器を・事故なう・都へかへし・入奉るべき由を・平大納言時忠卿の許へ・仰下さる・主上の外・高倉院の王子・三所ましゝけり・中にも二の宮をば・平家・儲君に・し奉らむとて・とり奉つて・西國に下りぬ・いまだ・三四の宮は・都に・渡らせ給ひけり・同き三日の日・しかるべき・公卿・參内あつて・抑いづれの宮をか・御位に・つけ參らつさせ給ふべきと・議定あり・おなじき三日の日・法皇・此宮達を・請じ・參らつさせ給ひて・まづ三の宮の・今年五歳に・ならせ給ひけるを・法皇・これへと・仰ければ・あながちに・むつからせ給へば・とう〳〵とて・御乳人して・出し參らつ

させ・給ひけり・其後・四の宮の・今年四歳に・ならせ給ひけるを・法皇・これへと・仰ければ・急・御膝へ・參らせ給ひて・世にもなつかしげに・見參らつさせ・給ひけり・法皇誠に・そゝろならむ・人の子の・此老法師を・見給ひては・何とか・おもひ給ふべき・是こそ誠の・わが・御孫にて・渡らせ給へ・故高倉院の・をさな・おひに・すこしも・たがはせ給はず・是程の・忘形見を・持ながら・今迄・見奉らざりつる事よとて・御涙に・むせばせ・おはします・御前には・淨土寺の二位殿の・さまかへて・あませと召れけるが・さて此宮の・御位には・つかせ給ふべきにて・さふらふやらんと・申させ給ひたりければ・法皇・子細にやとぞ・仰ける・たび〳〵・みうらの・ありけるにも・四の宮・御位に・つかせ給はゝ・天下・おだやか・なるべしとぞ・申ける・此宮達の・御母儀は・七條の・修理の大夫信隆の卿の・御娘なり・此信隆卿と申は・御娘あまた・持給へり・いづれにても・一人・后にたて・參らせばや・なんど・おもはれけるに・ある人の・申けるは・白き鷄・千そろへて・かへば・御娘・かならず・后に・たゝせ給ふなんど・語りければ信隆卿・さもや有らんとて・白き鷄・千揃て・かはれけるが・其故にや・御娘一人・中宮の・御かたに・さぶらはれけるが・程なう・うちへ・召れ參らせて・うち續き・若宮・三所・出來させ給ひけり・信隆卿うれしうは・おもはれけれ共・且は・中宮に・恐參らせ・且は・平家に・憚て・いともてなし・申されざりけるに・八條の女院ばかりこそ・何かは・くるしかるべきとて・人あまた・つけ奉つて・もてなし申されけり・中にも・四の宮の・御乳人は・法勝寺の・執行・能圓法印とぞ・聞えし・法印・都を落るとて・あまりに・あわてゝ・宮をも・女房をも・とり忘て・出られけるが・道より人を・のぼせて・宮いざなひ・參らせて・とう〳〵・下り給ふべき由を・宣ひ・つかはされたりければ・此女房・宮いざなひまゐらせて・西の京まで・出られたりけるを・此女房の・せうと・紀伊守教道・こは・物のつゐて・くるひ給ふか・此宮の御運は・たんだ今・ひらけさせ給はんする物をとて・とり留め奉りたりける・次の日ぞ・法皇よりの・御迎の・御乘物は・參りける・只何事も・しからしめたる御事とは・申ながら・紀伊守教通は・四の宮の御爲には・奉公の者とぞ・聞えける

名虎

同き九日の日・都には・除目・おこなはれて・木曾義仲・左馬頭に・なつて・越後をたぶ・十郎藏人行家をば・備後になさる・木曾義仲・越後を・嫌へば・備前になさる・同き十六日に・平家の一門・百六十三人を・殿上の御簡を・けづらる・中にも・平大納言時忠・内藏頭信基・讃岐の中將時實・父子三人をば・削られず・是は今度・主上・幷に・神璽・寶劍・內侍所・三種の神器を・事故なう・都へかへし・入奉るべき由を・此卿の許へ・仰下されけるに・よつてなり・去程に・平家は・浦づたひ・島づたひして・同き八月十七日には・筑前國・御笠の・郡・

大宰府にこそ・つき給ひけれ・都より御供に・候ひける・菊池の二郎高直・おほど山の・關かためて・參らせんとて・手勢・一千餘騎を・引具して・肥後國に・打越・おのが城に・たてこもつて・めせ共・めせ共・參らず・今は味方には・岩戸の諸境・大藏の大夫・原田の大夫種直・ばかりぞ候らひける・同き十九日に・平家の一門・安樂寺に・詣でつゝ・天神法樂の爲に・歌よみ・朗詠して・あそばれける・中にも・本三位の中將重衡

住なれしふるき都の戀しさに・神もむかしをおもひ出らめ

と・泣々詠れたりけるにぞ・皆人袖をぱ・ぬらされける・おなじき廿日の日・都には・法皇の・御宣命によつて・高倉院の・四の宮・閑院殿にして・御位に・つかせ給ふ・尤二の宮・三の宮こそ・御位には・つかせ給ふべきに・はるかの・四の宮の・御位につかせ・給ひけるこそ・不思議なれ・神璽・寶劍・なくして・踐祚の例・是始とぞ・承る・後鳥羽院の御事なり・天に・二の・日なし・國に・ふたりの・王なしとは申せ共・平家の惡行に・よつてこそ・京田舍に・二人の御門は・たち給へ・攝政は・もとの攝政近衞殿・是は・平家の御聟にて・渡らせ給ひしかども・今度西國へ・下らせ給はで・とゞまらせ給ふによつてなり・三の宮の・御乳人・泣かなしみ・後悔すれ共・甲斐ぞなき・帝王御位に・つかせ給ふ御事は・凡夫のとかう・申には・よらざんなり・天照太神・正八幡大菩薩の・御計ひなりとぞ・人申ける・かやうの事共は・今に限らず・昔もかゝる・ためしの有けるにや・文德天皇は・天

安二年・八月廿三日に・崩御なりぬ・かゝりければ・御子の宮達・あまた・御位に・望を・かけさせ給ふ・御事あり・一の宮・惟喬の親王は・御嫡帝にて・ましませば・天子の位は・我こそとぞ・仰げる・二の宮惟仁の親王は・天子の位を・ふませ給はん御事は・兄にも・よらせ給ふべからず・又弟にも・よるべからず・天子の位は・我こそとぞ・仰げる・かゝりければ・互に・さま〴〵の・御祈共を・ぞ・始られける・一の宮惟喬の・親王の・御祈の師には・弘法大師の御弟子・東寺の柿の本の・紀僧正信濟とぞ・聞えし・二の宮惟仁の親王の・御祈の師には・外祖忠仁公の・御持僧・山門の惠亮和尙ぞ・承はられける・いづれも・おとらぬ・高僧達にて・とみに・事ゆかずもや・あらんとぞ・見えし・然に惠亮は・はかりごとに・失たりと云・披露をなす・信濟すこし・たゆむ心もや・有けん・惠亮は・失たりといふ・披露をなして・いよ〳〵肝膽を・碎てぞ・祈られける・去程に・月卿・二つに・引分て・抑いづれの宮をか・御位には・つけ奉るべきと・議定あり・詮ずる處は・相撲の節を遂て・勝負にまかせ・御位定あるべきと・議定畢ぬ・餘に相撲ばかりにては・念なかるべし・十番の競馬・有べしとて・十番の・くらべ馬の・候ひけるにも・始め・四番をぱ・一の宮・かたせ給ふ・後六番をぱ・二の宮・かたせ・給ひけり・既に・相撲の節にも・成しかば・一の宮の・御方よりは・名虎の右兵衞督とて・凡・六十人が・力もつたる・大力をぞ・出されける・二の宮の・御かたよりは・出すべき相撲がなくして・良雄の少將とて・誠に・せい・ちひさう・たへにして・片手にも・あひぬまじき人・さ

れ共・御夢想の・御告ありとて・みづから申こうてぞ・出られける・名虎・良雄・寄あうて・既に勝負を・とげむとす・先・色代なれば・つまどり・ひし〳〵として・離ぬ・次に名虎・つゝとより・良雄を・とつて・ひつさげ・中に・さしあげ・二振三ふり・打ふつて・えいやつと・云て・二丈ばかりぞ・投たりける・されども・良雄たちなほつて・たふれず・ちから足をふんで・つつたち・あがる・次の度・良雄又・つゝとより・えい〳〵聲を・あげて・名虎をとつて・ふせむとす・名虎もともに・聲をあげ・良雄を・とつてふせむとす・いづれ・おとれり共・見えざりけり・されども共・名虎は・大の男の・島のごとくなるが・かさにまはる・良雄・うつつてに・入てぞ・見えたりける・門前市をなして・是を見る・二の宮の・御母儀・染殿の后の・御かたより・御使の・たつ事は・楠のはの・ごとし・壇下に・走りつゝいて・いかにや・惠亮唯今こそ・限りなれ・偖いかにや・〳〵と・仰ければ・惠亮今は・我山の佛法・山王大師の・御力の外は・又たのみ・奉るかたなしとぞ・申されける・惠亮さるにても・こは・心うき事かなとて・獨鈷を・とりなほしかうべを・つきわり・なづきを・碎て・血を出し・芥子に・まぜ・護摩にくべ・汗を流し・黒煙をたてゝ・ひつともみ・もまれたりければ・大威德明王の・めされたりける・畫像の牛が・おつと吼て・壇上を・走り・ありきけれ共・さしも・かさにまはりつる・名虎は・相撲にまけにけり・かゝりければ・二の宮惟仁の親王は・御年九歳にして・御位に卽せ・給ふ清和の御門是なり・又は・水の尾の帝共・申き・それよりして・

山門には・いさゝかの事も・あれば・惠亮なづきを・くだけば・次帝位に・卽給ひ・尊意・智劍を振しかば・菅相靈を・とゞむ共・申傳たり・されば・惟高の親王は・かゝらん世には・とても・かくても・ありなむとて・御年十一歳にして御世を・いとはせ給ひ・叡山の西の麓・小野の里と・言所に・移りぞ・住せ給ひける・小野の山里・おのづから・問くる人も・なかりしに・行平（イ業平）の中納言ばかりこそ・ましろの鷹を・手に居て・雪ふみ分ては・參られけれ

大蛇の沙汰

其ころ・豐後國の國司は・刑部卿三位賴資なり・代官には・子息の少將賴綱をぞ・おかれける・あるとき・刑部卿三位少將の許へ・使者をたてゝ・平家は・宿報つきて・神明にも・はなたれ奉り・君にも・すてられ・參らせて・都の外に出・西海の波の上に・たゞよふ・落人となれり・しかるを・九國の者共が・請取て・もてなす事こそ・しかるべからね・只すみやかに・九國の內を・追出し奉るべし・是賴資が・下知にはあらず・偏に・一院の仰にて・有ぞと・宣ひ・つかはされたりければ・或時・少將・當國の住人・尾形の三郎・維義を・めして・宣ひあはせられけり・尾形の三郎・院宣と・號して・九國二島を・催しけるに・尾形の三郎に・從ひ付て所の勢・三萬餘騎とぞ・聞えし・此尾形の三郎と・申は・おそろしき・者の末なり・けり・たとへば其比・豐後國の・かた山里に・ある者・娘一人持たり・

いまだ夫も・なかりけるが許へ・夜な〳〵・かよふ者あり・女程なく懐姙す・母これを・あやしめ・汝が許へ・夜な〳〵・通ふ者は・いかなる者ぞと・とひければ・來るをばみれ共・歸るをばしらずと云・母さらば・是をもつて・繋で・見よとて・しづの・をだまきといふ物に・はりをつけてぞ・とらせける・或時又きて・歸るを見れば・水色(イにぶ色)の・狩衣をぞ・着たりける・狩衣のくびかみと・おぼしき所に・はりをさし・へて行・かたを・つないで・見けるに・豐後と・日向の境なる・優婆嶽と・いふ山の・麓なる・大き成・岩屋の内へぞ・つなぎ入たりける・女岩屋の口に・たゝずんで・聞ければ・遙の奥に・おそろしげなる・聲をもつて・にようおと・しけり・女わらはこそ・是まで・參りてさふらへ・出させ給へ・見奉らんと・言ければ・われは是・人の妻にあらず・我すがたを・見る程にては・汝が氣も魂も・身にそふまじきぞ・われは今夜・汝が許にて・疵をかうぶり・命すでに・終るべきなり・汝が・うめらん所の子は・男子たるべし・弓矢をとつては・九國二島に・ならぶ者も・有まじきぞ・よくそだてよとぞ・をしへける・其後・岩屋の奥よりも・太刀を・一振投出す・女重て・此日比・あひなれ奉りぬる上は・なんの御憚か・さふらふべき・只いでさせ給へ・見奉らむと・云ければ・さあらばといひて・はひ出たるを・みれば・ふしたけ・四丈ばかりなる・大蛇の・眼は・日月のごとくにて・口には・朱をさせるか・ごとし・舌は・紅のはかまを・ふるに同じ・狩衣の・くびかみと・おぼしき所は・則・大蛇の喉ぶえにてぞ・候ひける・さいたる針をば・引扳て・捨ながら・

をめき叫んで・逃歸る・其後大蛇は・程なく・死にけり・件の大蛇と申は・豐後と日向の境に・いはれたまふ・優婆嶽の大明神・是なり・又はたかちほの・明神共・申き・女は程なく・產したり・男子にてぞ・候ひける・生たつまゝに・身ちから・大にして・力人に・勝れたり・九の・とし・母かたの伯父・大太輔・元服させ・名をば・大太とぞ・申ける・夏も・冬も・野山を・跳にて・走り・あるきければ・手にも・足にも・大きなる・あかゝりの・きれたりければ・皆人・あかゝり大太とぞ・申ける・此尾形の三郎と申は・其あかゝりの末なりければ・九國二島をも・たゝ一人して・打とらばやなむと・申程の・おほけなき・者にてぞ・候ひける・去程に平家は・大宰府に・おはしけるが・此由を・聞給ひて・こはいかゝせんとぞ・さわがれける・此尾形の三郎と・申は・もと小松殿に・めしつかはれける所の・侍也・いづれにても・君達一人・打こえ・よきやうにこしらへて・見給へかし・なんど・宣ひあはれければ・人々此儀・尤と・て大將軍に・新三位の中將資盛・左中將清經・新少將有盛・丹後の侍從忠房・侍大將には・越中の前司盛俊を・先として・都合其勢・五百餘騎・豐後國に・打越・やう〳〵に・こしらへ・宣ひけれ共・尾形の三郎・一切・これを用ゐ奉らず・剩・君達をも・是にて・討留參らせたくは・候へども・それも・おもふに・何程の事か・渡らせ給ふべきにもならせ・給ふべしとて・それより大宰府へ・追歸し奉り・其後尾形の三郎・子息の・野尻の二

郎維村を・もつて・平家へ・申けるは・尤先祖の主にて・渡らせ給へば・弓を・はづし・甲を・ぬいて・降人に參りたくは・候へ共・是も又・一院の・仰にて候へば・力及ずたゞ・速に・九國のうちを・御出あるべう候と・申送りたりければ・平太納言時忠・氷魚くゝりの・直垂に・糸葛の・袴を着・維村に・出あひ・對面し給ひて・それ我君は・天孫四十九世の正統・人王八十一代に・あひ當らせ給へば・天照太神・正八幡宮も・定て・君をこそ・守護し・まねらつさせ・給ふらんに・行家・義仲等が・もし此事・しおふする程ならば・國をあづけん・庄を・とらせむと・言を・誠ぞと心得て・其鼻豐後が・下知にのみ・從ふ事こそ・大きに・こゝろえられねとぞ・宣ひける・此刑部卿三位と申は・世にすぐれて・鼻の大きに・おはしければ・人・鼻豐後とぞ申ける・維村歸つて・父に・角と・語りければ・尾形の三郎・大きに嗔て・昔はむかし・今は今・にくし其儀ならば・九國の・内を・追出し奉れやとて・大勢にて・むかふよし・聞えしかば・平家・さらばまづ・是を防やとて・大將軍には・新中納言知盛・薩摩守忠敎・能登守敎經・侍大將には・越中の前司盛俊・次郎兵衞盛嗣・上總五郎兵衞忠光・ゑひの次郎盛方を・先として・都合其勢・三千餘騎・豐後と・筑後の境なる・高野の本庄と・云所に・おし寄て・散々に・責けれ共・無勢・多勢に・かなはねば・平家散々に・打ちらされ又・大宰府へこそ・引退き給ひけれ・平家・重て・討手を・むくべけれ共・おもへば是は・わたくし事・源氏と・軍せんとて・太宰府へこそ・歸られけれ

太宰府落

去程に平家は・筑前國・御笠の郡・太宰府に・おはしけるが・尾形の三郎維義・三萬餘騎にて・既に・よすと聞えしかば・とる物も・とりあへ給はず・太宰府をこそ・落られけれ・折節・駕輿丁も・參らねば・玉の御輿を・打捨て・主上は・腰輿に・めされけり・國母を始奉つて・二位殿以下の・卿相雲客は・指貫の・そばをとり・おはい殿以下の・女房達は・袴の・そばをとり・おはい殿以下の・やごとなき女房達は・袴の・そばをとり・われさきに〳〵と・みづきの・とを過て・箱崎の津へこそ・落られけれ・折節くだる雨・車軸のごとし・吹風砂を・あぐとかや・落る涙・ふる雨・分て・いづれも・見えざりけり・彼玄弉三藏の・流沙・葱嶺の・嶮難を凌がれけむ・くるしみも・是には過じとぞ・見えし・され共・それは・求法の爲なれば・後世の・たのみもあり・是は怨敵のゆゑなれば・後世の・くるしみ・且おもふこそ・悲しけれ・新羅・百濟・高麗・契丹・までも渡りなばやとは・思はれけれ共・波風むかうて・かなはねば・兵藤次秀遠に・具せられて・山鹿の城にぞ・こもられける・山鹿へも又・敵よすと・聞えしかば・急蜑小舟に・取のつて・夜もすがら・豐前國・柳の浦へぞ・渡られける・去程に・九月も・十日餘りに・成にけり・荻の葉むけの・夕嵐・ひとりまろねの・床の上・かたしく袖も・しをれつゝ・更行秋の・哀さは・いづくもとは・いひながら・旅の空こそ・忍びがたけれ・十三夜は・殊に名を得たる・月なれ共・其夜

は・都を・思ひ出る涙にや・我からくもりて・さやかならず・かゝりける中なれ共・海邊の旅泊・珍しくや・思はれけむ・中にも・薩摩守忠敎
月を見し去年のこよひの友のみや・都に我を思ひ出らむ・
修理の大夫經盛
戀しとよ去年のこよひの終夜・契りし人の思ひ出られて・
左馬の頭行盛
君すめばこれも雲井の月なれど・獨戀しきは都なりけり・
それより宇佐へ・行幸なる・社頭は・主上の・皇居となり・廻廊は・月卿雲客の居所となる・庭上には・五位六位の官人・大鳥居には・四國鎭西の兵共・甲冑をよろひ・弓箭を帶して・なみ居たり・ふりにし緋の玉がきを・ふたゝび・かざるとぞ・見えし・七日さんろうの曉がた・おほい殿の御爲に・御夢想あつて・御寶殿の御戸・おしひらき・內よりゆゝしう・けだかき御聲にて・一首の歌をぞ・あそばされける

世中の宇佐には神もなき物を・なに驕るらん心つくしに（イ心つくしに何いのるらん）・

おほい殿・打驚き・胸さわぎ・こは・いかなるべし共・覺えさせ給はず・古歌なりけれ共・かゝる折節を・思出給ひて

さりともとおもふ心もむしの音も・よわりはてぬる秋の暮かな・

柳の浦に・內裏作らるべしなんど・聞えしか共・分限なければ・かなはず・又船にとり乘つて・海にぞ・浮び給ひける・中にも・小松殿の・三男・左中將清經は・都を出るとて・最愛の北方を・留おきて・出られけるが・せめての名殘に・鬢のかみを・一むらきつて・留置てぞ・出られける・或時風の便の・おとづれに・北の方より・御文あり・ひらいて見給へば・文の奧に・鬢の髮を・ひとむら・卷具して・一首の歌をぞ・かゝれたる

見るたびにこゝろつくしのかみなれば・宇佐にぞかへすもとのやしろへ・

中將・かやうの事共を・おもひ給ひ・舟の屋形に・立出・月の夜・心をすまし・歌よみ・朗詠して・あそばれけるが・中將は・若けれ共・よろづ・何事をも・おもひ入給へる・人にて・都をば・源氏のために・落されぬ・鎭西をば・維義が爲に・責出されて・網にかゝれる・魚のごとし・いづくへゆかば・遁るべきか・終に又・ながらへはつべき・身ならずとて・靜に・經よみ・念佛し給ひ・年二十一と・申には・海にぞ・しづみ給ひける・男女の君達・さしつどひ・悲しみ給へど・甲斐ぞなき

あ　ひ

其頃長門は・新中納言の・國なりけるが・代官は・紀の刑部の大輔通助とぞ・聞えし・平家小船に・

乘給ふ由を聞て・安藝・周防・長門・三ヶ國に柾つみける船・五百餘艘を・點領して・平家へ奉る・平家是に・取乘て・讃岐の八島へぞ・渡られける・阿波の民部重能が・沙汰として・四國の・内を催し・讃岐の八島に・形のごとくの・板屋の御所や・内裏をぞ・作られける・あやしの賤が・屋を・皇居と・すべきにあらざれば・船を御所とぞ・宣ける・おほい殿以下の・卿相雲客の・螯の蓬屋に・日を暮し・賤士が伏屋に・夜をあかす・龍頭鷁首を・海中に・うかべ・波の上の皇居は・靜なる時なし・月を涸す・潮のふかき愁に・沈み・霜を覆る・蘆の葉の・もろき・命をあやぶめり・洲崎にさわぐ・千鳥のこゑ・曉うらみを殘し・そば井に・かゝる梶の音・夜はに・心を痛しむ・白鷺の遠松に・むれゐるを見ては・源氏旗を・あぐるかと・うたがはれ・蒼海の・夜雁の啼を聞ては・敵船を・漕かと・驚かる・清嵐膚を侵し・翠黛紅顏の色・やう〳〵おとろへ・蒼波眼を穿て・外都望郷の涙・おさへがたし・翠帳紅閨に・ことなる・埴生小屋の蘆簾・薫爐の煙に・かはれる・蘆火たく屋の・いやしきに・付ても・女房達の盡せぬ・御物思ひに・くれなゐの・御涙・せきあへさせ給はねば・翠の黛も・みだれつゝ・其人共・見え給はず

征夷將軍の院宣

其比鎌倉の・兵衞佐・賴朝・征夷大將軍の院宣を・給る・御使は・廳官左史生・中原の泰定とぞ聞えし・壽永二年・十月四日に・關東に下着す・兵衞佐宣ひけるは・賴朝・武勇の名譽・長せるによつて・居ながら・征夷將軍の院宣を・給る・されば私にては・いかでか・給るべき・八幡大菩薩の御寶前にして・請取奉るべしと・宣へば・泰定・若宮へ・むかふ・若宮は・鶴岡にたゝせ給ふ・本社に・すこしも・たがはせ給はず・宿院あり・廻廊あり・作り道・十餘町・見くだせり・御使の泰定は・家子五人・郎等十人・召具したり・抑今度の院宣をば・誰してか・請取奉るべき・三浦の介義澄して・請取奉るべし・其故は・彼が父・義明が・黄泉の冥闇を・照さんが爲とぞ・おぼえたる・請取手の義澄は・家子二人・郎等十人・召具したり・家子二人は・一人は・和田の三郎宗實・一人は・比企の藤四郎義員とぞ・聞えし・郎等十人をば・大名十人して・俄に・一人づつ・出したてられたり・都合十二人は・直甲なり・義澄は・熊甲をぞ着す・かちの直垂に・黒糸縅の鎧を着・三尺五寸の・いか物作りの太刀をはき・廿四さいたる・大中黒の矢おひ・ぬりごめ籐の弓・脇にはさみつゝ・おきみちよりあゆみいで・御使の前に畏る・泰定・御使は・たそと・とはれければ・兵衞佐の字に・はゝかつてや・ありけん・三浦介とは・なのらで・本名・三浦の荒次郎・平の義澄と・名乘申・やがて院宣袋・らん箱に入て・出されたり・らん箱をばやがて・返されけり・泰定是を見給へば・まづ砂金百兩・入られたり・其後兵衞佐・手洗・うがひして・彼院宣をぞ・ひらかたける・其狀に曰

たらしむべき事・右・左大臣專奉勅・早・源の朝臣を以て・諸國を靜治し・宣によつて・是を行・者院宣如斯・仍執達如件

壽永貳年九月の日

左大史小槻祇繩・右中辨藤原朝臣とぞ・あそばされたる・其後廻廊には・高麗縁の疊を敷て・泰定に・酒を勸らる・高坏に・肴おかれたり・齋院の次官親義・承つて・是を勸盃す・五位一人・役送を勤・工藤左衛門祐經・承つて・馬十疋ひかせらる・三疋には・入られず・ふかき萱屋を・しつらうて・おかれたり・誠に盃飯・ゆたかにして・美麗なる・あつ綿の衣二領・小袖十重・長持に・いれて設たり・美絹百疋・次の絹三百疋・藍摺紺・五百端・白布千端を・つませらる・次の日・泰定・兵衛佐の館へ・まかり向ふ・内外に侍あり・ともに十六間なり・内侍には・源氏・上座して・末座には・鎌倉うちの・諸大名・並居たり・外侍には・源氏の兵共・肩をならべ・膝を組て・なみ居たり・珍しかりし見物なり・其後廣廂には・紫縁の疊を敷て・泰定に・上座せさせらる・御簾を半に・まかれたり・兵衛佐は・布衣に・立烏帽子・くゝす袴にて・出られたり・兵衛佐は・せい・ちひさく・容貌優美にして・言語分明なり・其後・兵衛佐宣ひけるは・抑平家・頼朝が命に恐て・都を落ぬる其跡へ・行家・義仲等が・わが高名がうに打入て・國を嫌ひ申・官を望申條・餘に奇怪に候・其時の聞書到來す・頼朝大きに心得ず・又十郎藏人殿へ・木曾の冠者と・書て候ひし時も・返事をば・してこそ・候ひしか・又奥の秀衡が・陸奥國守になり・佐竹の冠者政義が・常陸守に・なつて・候とて・頼朝が・下知にも・從ふまじき由を・申候・哀此序に・院宣を給つて・これらをも・追討・したうこそ候へと・の給へば・泰定是もやがて・みやうぶをも・參らせ度は候へども・私にては・いかにも・かなひ候まじ・弟にて候・史の大夫重泰も・此よし申せとこそ・候つれ・いかさまにも・今度は・先まかり上るべきよしを・申されたりければ・兵衛佐・大きにあざ笑て・爭か・頼朝なんどが身として・各の名簿をば・給るべき・去にても・けふは・先逗留あれとて・其日は留らる・次の日泰定・兵衛佐の館へ・暇申に罷向ふ・馬三疋・ひかせらる一疋に・鞍おかれたり・鎧三領・腹巻一領・金作の太刀一振・九さいたる箙矢一腰・塗籠籐の弓一張・泰定に是をたぶ・其外・家子郎等共に・至るまで・大口・直垂・沓・行縢に・及けり・泰定・鎌倉出の日よりして・近江の・鏡につくまで・宿々に・十石の米を設させられたりければ・餘に澤山なるまゝに・道すがら・施行引てぞ・上られける・泰定都にのぼり・院の御所に・參つて・此由を・奏し申たりければ・法皇を始奉つて・公卿殿上人や・局の女房達に至るまで・皆ゑみをぞ・ふくみてぞ・おはしける

猫間（あひ）

去程に木曾は・都の守護にて・ありながら・全分の・あらゑびすにてぞ・候ひける・其頃・猫間の中

納言光高の卿と申人・木曾に聊・宣ひあはすべき事ありて・おはしたりければ・人參つて・猫間の中納言殿と・申人・聊御見參の爲に・いらせ給ひて候と・申たりければ・木曾・どこなる・や殿・猫の人に・見ざうする・やうや・あると・宣へば・いゝや是は・猫間の中納言殿と申て・公家にて・御渡り候・如何樣にも・猫間殿とは・御宿所の名と・おぼえ候と・申けれ共・木曾なほ・猫間殿とは・えいはて・猫殿の・適々・わいたに・飯よそはせよと・宣へば・中納言・いかでか・さる事の・有べきとて・急出むと・し給ひけるを・木曾・どこなる・や殿・猫殿の・たま〳〵・わいたに・飯よそはせでは・いかゞ・有べき・しかも・けどきなり・なましき物をば・なにをもみな・無鹽と・いふぞと・心得て・折節・無鹽の・平茸・もつたり・とう〳〵とてぞ・いそがせける・やゝあつて・毛立したる・飯を・うづだかに・よそひなし・あはせ三種して・根井の小彌太・配膳し・木曾が前にも・おなじ體にぞ・すゑたりける・木曾・箸おつとり・それめせ猫殿・中納言・くはでも・あしかりなむと・思はれければ・引入の・はたに・口を・よせむが・いぶせさに・なかを・えりめす・木曾・その合子・きたなしと・おもひ給ふな・義仲が・精進合子にて・さう物を・かい給へや・猫殿・かい給へや・猫殿とて・わが身は・さしわり・つきわり・殘りすくなに・せめなす・中納言すこし・くうて・さしおき給へば・木曾あつばれ・きこゆる・猫おろしをこそ・し給ひたれとぞ・笑ひける・中納言は・木曾に・聊・宣ひあはすべき・事あつて・おはしたりけれ共・木曾が振舞・餘りに・傍若無人なりければ・何事の・さたにも・及ばずしてぞ・出られける・其後木曾は・院參申さんと・し給ひけるが・官なり・加階したる者の・直垂にて・出仕すべき・やうなしとて・はじめて・衣冠・取つくろふ・やゝあつて・木曾は・車に・こがみ・のつてぞ・出られける・木曾殿の御車仕る者は・日比八島の・おほい殿の・めしつかはれし・彌二郎丸とぞ・聞えし・木曾に・せめしたがへられて・めしつかはれける事を・安からず・おもひければ・門を出るとて牛に・ひつと・ずはえ・あてたらむに・なじかは・よかるべき・牛は・とんで出・木曾は・いつか・車に・乘ならふべきなれば・まのけに・たふれ・蝶の・はねを・ひろげたるが・ごとくにて・やれ・牛こんでいめよ・〳〵と宣へども・耳にも・聞入ず・五六町が程ぞ・あがらせたる・牛飼・こゝにて・木曾と・中なほり・せむとや・おもひけむ・車をとゞめ・それに候・手形と申物に・取つかせ給へと・申たりければ・あつばれ・支度や・是は八島の・おほい殿の・御はからひか・又は・牛こんでいめが・しわざかとぞ・宣ひける・かゝりける處に・今井の四郎兼平・急ぎ鞭鐙・あはせて・馳來り・いかで・かやうに・御車をば・仕るぞと・云ければ・あまりに・牛の鼻のこはう候とぞ・のべたりける・其後木曾・院參申て・車より・おりむと・し給ひけるに・雜色は・京の者なりければ・御車には・めされ候御時こそ・後よりは・召れ候へ・おりさせ給ふ御時には・前上りおりさせ給ふ御事にて候と・申たりければ・木曾・どこなるや殿・車なればとて・すどほり・すべき・やうなしとて・なほ・はつて・後よりこそ・

おりられけれ・木曾は・みめよき男の・色のしろきが・鎧とつて・打着・甲の緒をしめ・馬に・打のつて・出たるには・似ず・わるかりけり・冠の着ぎは・指貫の蹴まはしに至るまで・よろづ・かたくなる事・おほかりけれ共・おそれて・人是を申さず

水島合戦

木曾は・其比西國へ・討手をぞ・むけられける・討手の大將軍には・足利の・矢田の判官義清・副將軍には・海野の彌平四郎行親を・先として・都合其勢五千餘騎・同き十月十五日に・都をたつて・播磨國に馳下り・室山に・陣をぞ・とつたりける・平家の方にも・此よしを聞て・さらばまづ・是を防やとて・大將軍には・能登守教經・侍大將には・越中の前司盛俊・次郎兵衞盛嗣・上總の五郎兵衞忠光・ゑひの次郎盛方を・先として・都合其勢・一萬餘騎・千餘艘の船に・取乘・備中國に・おし渡り・水島がとに・陣をとる・同き廿九日に・源氏も又・備中國に・はせ下り・水島潟に・陣をとる・明れば・閏十月一日の・まんだくらきに・水島が・とより・小船一艘いで來り・あま舟・釣船・やらんと・見る處に・平家のかたよりの・牒の使の・船成けり・源氏も・陸も・ほしあげ・おいたりける・舟共を・をめき・さけんで・おしおろす・去程に平家の・かたの大將軍・左兵衞督知盛・舟の舳に・進出・大音聲をあげて・此二三ケ年が間・東國北國の奴原に・いきなぶりに・

せられつる事をば・心うしとは・思はずや・咏方の舟を・くめやとて・千餘艘の舟の・艫舳をならべて・組合せ・なかに・もやひの綱を・いれあよみの板を・引ならべ〳〵渡したりければ・舟の上は・へい〳〵たり・源氏の兵どもは・平家の舟に・乘うつり〳〵てぞ・戰ひける・平家の舟に・乘移て・戰ひけるが・いかゞは・したりけん・大勢の中に・取籠られ・さん〳〵に戰ひて・討れにけり・源氏の大將軍・足利の矢田の判官代義清は・此由を・見給ひて・大きに・腹を立・主從七八人・小船に・取乘・平家の舟の・あたりを・おしまはさせ・さしつめ・ひきつめ・さん〳〵に射給ひけるが・いかゞは・せられたりけむ・舟くるりと・ふみかへして・人・一人も・たすからず・源氏の・方には・大將軍・副將軍も・討れにければ・かなはじとや・おもひけむ・又水島潟に・引しりぞく・平家の・かたには・此由を・見給ひて・舟共・乘かたぶけ〳〵・馬共・海へ・追おろし〳〵・舷にひきつけ〳〵・およがせて・鞍づめ・ひたる程にも・成しかば・ひた〳〵と・打乘て・陸へ・をめいて・かけあがり・落ゆく者共を・茲に追つめ・かしこにかけつめて・討捕けり・源氏の・方には・防戰ふといへ共・無勢・多勢に・かなはねば・さん〳〵に打ちらされ・殘りすくなに・成にけり・平家は・水島が戶の・軍に・打かつてぞ・會稽の恥をば・雪ける

妹尾が最後

木曾殿此よしを・聞給ひて・大きに腹を立・今度は義仲・むかふべしとて・三千餘騎にてぞ・打立れける・中にも・平家の侍に・備中の國の住人・妹尾の太郎兼康をば・去ぬる夏・北國・砥波山にて・生捕に・せられたりけるを・木曾・いかゞは・おもはれけむ・左右なうきらで・加賀國の住人・倉光の三郎成澄に・預け・おかれたりけるが・或時妹尾・倉光にあうて・まことや殿は・西國下向とやらん・承る・さらむに・とつては・備中の妹尾は・年來兼康が・知行の所にて・さうが・馬の草かひ・究竟の所にて・さうぞ・御邊申て・預り給へかしと・云ければ・倉光・木曾殿に・此由を申す・木曾殿さらば・御邊さきに下つて・馬の糠をも・用意せよかしと・宣へば・倉光・妹尾を・案内者としてて・備中の・妹尾へこそ・下りけれ・蘇子卿が・胡國に・とらはれ・李少卿が・漢朝へ歸らざりしがごとし・遠く異國に・つける事をば・むかしの・人のかなしめりしが・ごとしといへり・韋の環・鴨の幕・もつて風雨を禦・腥肉・酪の漿・もつて・飢渇にあつ・然るに夜は・いぬる事なく・晝は・木をこり・草をからぬと・いふばかりに・隨ひつき・いかにもして・身を全し今一度・平家へ・參らんと・おもひける・兼康が心の・うちこそ・おそろしけれ・去程に・妹尾が嫡子・小太郎宗康は・備中の妹尾に・ゐたりけるが・父が下る由を・聞て・十四五騎にて・迎に上る程に・播磨の國府にて・行あひ・それより・打つれ下程に・備前國・三石の宿に・着たりける夜・小太郎宗康・雜餉かまへ・倉光に・酒をぞ・しひたりける・倉光・酒に酔て・前後も・しらず・臥たりける所に・妹尾・親子して・刺ころしてんげり・是を始として・戰ふ者をば討捕・落行者をば・たすけけり・其比備前は・十郎藏人の・國なりけるが・代官の・國府の邊に・候らひけるをも・打過るとて・夜討にしてこそ・とほりけれ・其後妹尾・備前・備中・兩國を・觸けるは・兼康こそ・不思議の命・たすかつて・是まで・下りたれ・平家に・志・おもひあはれんずる人々は・兼康を・大將として・木曾殿の下るに・一矢射よとぞ・ふれたりける・其比備前・備中・兩國の者共は・家子郎等・三人持たる者・二人をば・平家へ參らせ・五人もつたる者は・三人をば平家へ・參らせたりければ・折節人も物具も・なかりけり・適々殘る者共は・布の小袖に・東織・柿の直垂に・つめ紕し・くさり腹卷・つゞりきて・或は高籠に・すがりまた・五つ六つ・或は・山うつぼに・竹の根の征矢・十四五・かしら高に・おふまゝに・都合其勢・二千餘人・備前國・福輪寺・畔・篠の迫を・ほりきつて・城郭構て・楯こもる・去程に・十郎藏人の・代官の・家子と・倉光が・討洩されの郎等と・木曾殿に・此よし申さんとて・それより・打つれ・上る程に・播磨と・攝津國の境なる・舟坂といふ所にて・木曾殿に・參りあひ・此由申たりければ・今井の四郎兼平が・申けるは・さ候へばこそ・きやつが・つらたましひ・眼ざし・けの奴にて・候らひつるを・急切せ給へと・申候ひつるは・茲候ふかし・木曾よし〳〵・しやつが事ならば・何ほどの・事か有べき・御邊むかうて・うてかしと・宣へば・今井の四郎承つて・五百餘騎にてはせ下り・備前國・福輪寺畔・篠の迫に・押寄たり・彼篠の迫と申は・三方は沼・一方は・堀なり

けり・今井・堀の・かたより・押寄て・時を・どつとぞ・作りける・口一の・所なりければ・今井が勢・五百騎・的になつてぞ・射られける・今井かなはじとや・おもひけむ・そばなる・沼へぞ・打入たる・馬の・草わき・胸懸つくしに・たちけれども・今井そを・事共せず・すゝかひさまに・むらめかしてぞ・よせたりける・城の内にも・高矢倉より・さしつめ・引つめ・さん〴〵に・射けるが・その後・矢だねつきければ・打物の鞘をはづし・城戸を・ひらいて・切て出・さん〴〵に戰けるが・妹尾が勢・二千餘人とは・見えしか共・落ぬ・討れぬ・せし程に・篠の迫も・やぶれにけり・妹尾・百騎ばかりに・討成れ・板倉川を・打渡し・向の岸に・陣をとる・今井つゞいて・板倉川をも・渡しければ・妹尾・主從三人に・打なされ・みどろ山（イみとの山）へぞ・逃入ける・去程に・妹尾が・嫡子・小太郎宗康は・生年二十三に・なりけるが・ふとりせめたる・大の男・馬にはなれては・一町共・働得ず・郎等が申けるは・只小太郎殿と・御一所にて・いかにも・ならせ給へと・いひけれども・妹尾かれを・打捨・十餘町ぞ・逃延たる・妹尾・郎等に向て・云けるは・日比傳康が・敵の中に・かけ入て・軍を・するには・四方晴て・おぼゆるが・いつしか・けふは・小太郎を・捨て・ゆけばにやらん・四方暗なつて・おぼゆるぞ・茲を・落のび・平家へ・參らん事は・やすけれども・西國のどうれい共が・あの年にて・子を・すてたりなんど・いはれむ事こそ・口惜けれ・只小太郎と・一所にて・討死・せばやとおもふぞ・いかゞ有べきと・云ければ・郎等・さ候へばこそ・小太郎殿と・御一所にて・いかにも・ならせ給へと・申つるは・茲候ぞかし・かへさせ給へと・申ければ・妹尾さらばとて・とつて返して・見けるに・案のごとく・小太郎宗康は・足・かばかに・腫てぞ・寢ぬたりける・小太郎が・申けるは・縱宗康こそ・無器量の者にて・是にて・討死・仕り候共・などや・ひとまど成とも・延させ給ひ・候はぬやらんと・申たりければ・妹尾・汝と一所にて・討死・せんとおもふなりとて・鎧武者が三人・互に息續て・ゐたりける所へ・今井五百餘騎にて・おしよせたり・あはや敵は・茲にあるはとて・大勢のまん中に・取こめて・我討捕むとぞ・すゝみける・妹尾も・彼是・主從三人・打物の・きつさきをならべて・さん〴〵に戰ひけるが・小太郎宗康・痛手おうて見えければ・妹尾・人手に懸じとや・おもひけむ・頸ふつと・打落して・捨てけり・其後妹尾も・年五十八と・名乘て・敵八騎・切て落し・我身も・討死・してんげり・郎等も・さん〴〵に・戰ひ・分捕あまたして・一所に・討死・してんげり・其後・彼等三人が・頸をとつて・木曾殿に・見せ奉る・あつぱれ・剛の者の・手本かな・一人當千共・是等をこそ・云べけれ・あつたら者・今しばし・生て・見てとぞ・惜まれける・其後・彼等・三人が・頸をば・當國・鷲が森にぞ・かけさせける・妹尾親子・うたれてぞ・兩國の軍は・破にける

室山合戰（あひ）

其後木曾は・當國・萬壽の庄にて・勢揃し・平家と・合戰有べしと・聞えしが・又都の留守に・おか

れたりける・樋口の次郎兼光・早馬をたてゝ・木曾殿に・申けるは・十郎藏人殿こそ・院の寵人して・さま〴〵の・御讒言の・候なる・急上らせ給へと・申たりければ・木曾先・さしあたつたる・軍をば・せさせず・それより・とつて返してぞ・上られける・木曾は・攝津國を・經て・上洛す・十郎藏人・此由を聞給ひて・手勢・一千餘騎を・引具して・丹波國をへて・播磨の國府へぞ・下られける・去程に・平家は・三萬餘騎にて・播磨國まで・責上り・室山に陣をぞ・取たりける・十郎藏人・此由を聞給ひて・茲にて・平家と・一軍し・木曾と・中なほりせんとや・思はれけむ・十郎藏人・室山に・おしよせて・時を・どつとぞ・作りける・平家のかたには・是をみて・雲霞のごとくに・亂出・十郎藏人・一千餘騎にて・三萬騎が中に・かけ入・西より東へ・一わたり・北より・南へ・一渡・とつては・返し・わつては・とほり・さん〴〵に・戰ひ・一方打破て・出たれば・一千餘騎とは・見えしか共・落ぬ討れぬ・せし程に・二百餘騎にぞ・成にける・十郎藏人・都をば・木曾に・おそれ・播磨は・平家に・はゞかり・高砂の浦より・船にとり乘・和泉國に・おし渡り・河内國に・打越・長野の・城にたてこもる・平家は・備中の水島・播磨の室山・二ヶ度の・軍に打勝て・いよ〳〵勢こそ・つきにけれ

法住寺合戰

去程に木曾は・都の守護にて・ありながら・ひたすらの・あらえびす・にてぞ候ひ（脫字アルカ）賀茂・八幡の社領を・いはず・青田を刈て・秣にし・堂塔を・やぶりたく・其比京中に・いくらもある・藏を・破り・財寶を・運びとる・辻々に・白旗・うつたて〳〵・路次に・もてやう・權門勢家の・正税官物を・いはず・奪とる・おのづから・さしあたつたる・食事をも・せさせず・其日を・むなしう・せさせけり・平家の時は・六波羅と申て・おそろしき事ばかりなり・かやうの事は・なかりしに・いつしか・源氏・平家に・かへおとり・したりとぞ・人申ける・其比壹岐守朝高が子に・壹岐の判官朝康は・十能の者の・聞え有しが・中にも・すぐれたる・鼓の・上手なりければ・人鼓判官とぞ・申ける・或時・法皇・朝康をめして・汝・木曾が許に・行て・狼藉しづめよと・いへと・仰ければ・朝康・畏つて・承り・木曾が許に・行むかひ・勅定の趣・云ふくめけるに・木曾先・御返事をば申さず・や殿わ殿を・當時皆人の・鼓判官といふは・よろづの人に・うたれたうか・はられたうか・又なり給ふかといひければ・朝康は・きゝ・はらあしき・をのこにて・急・院の御所に・歸り參つて・木曾は・謀叛の・心ざし候なる物を・急・追討せさせ給はでと・申たりければ・法皇さらば・然べき・公卿・殿上人にも・仰合られず・して・山の座主・寺の長吏に・仰て・山門南都の・惡僧共をぞ・召れける・近江源氏・山本の冠者義隆・信濃源氏・村上の次郎判官代基國は・御所がたにぞ・候ひける・其外・弓とつて・よからんずる者は・みな馳參るべしと・觸られたり・ければ・或はむかひ礫・印地・辻冠者原・もしは・乞食法師に・至るまで・みな御所がたへぞ・まゐりける・法住寺殿に・參り籠る勢・一

萬餘人と・しるし申す・法住寺殿の・笠じるしには・松の葉をぞ・したりける・去程に・今井の四郎兼平・木曾殿に・申けるは・こは・末代と・申共・いかでか・十善の君に・向奉つて・弓を引・矢をば・はなさせ・給ふべき・たゞ弓をはづし・甲をぬいで・降人に・參らせ給ひ候へと・申たりければ・木曾・どこなるや殿・縦十善の君にても・渡らせ給へ・いかでか・義仲が・弓をはづし・甲をぬいて・降人には・まゐるべき・都の守護にて・あらんずる程の者の・駒一疋・のらざるべきか・それに・いくらもある・青田をかつて・秣に・せむは・なじかは・くるしかるべき・四方の關々・寒がつて・私の年貢も・上らねば・若黨共が・甲斐なき・命たすけんとて・京中に・いくらもある・藏をやぶり・兵粮どり・させんは・なじかは・くるしかるべき・其外・女院・宮々の・渡らせ給ふ・御所中へも・まゐらばこそ・義仲が・狼藉にても・あらんずれ・其上・此法皇は・さるほつかなき・人にて・おはする物を・左右なう參つて・顎うつきられ・申ての・詮のなさよ・義仲が・去年・信濃を・出しより・以來・大小軍・合戰に・あふ事・廿餘度・され共・一度も・不覺をせず・今度ぞ・義仲が・最後の・合戰なるべし・義仲が・軍の吉例には・七手に・わかつ物なれば・とて・まづ今井の四郎兼平に・五百餘騎を・差副て・蓮花王院・今熊野へ・搦手にこそ・むけられけれ・殘り六手も・各・いたらんする所より・打出々々〳〵・一手に・なれや者共とて・比は十一月十九日の・巳の刻ばかりに・木曾が勢・三千餘騎・七條河原に・打たつて・法住寺殿へぞ・さしよせたる・去程に・法住寺殿には・鼓判官朝

康・軍の奉行・承つて・候ひけるが・かちの直垂に・鎧をば・きず・甲ばかり・打きて・甲の四方には・四天を書てぞ・おしたりける・かほには・あかく丹を・ぬり・かた手には・金剛鈴をもち・行手には・劍をぬき・もつて・打ふり〳〵・まふ時もありけり・又謠宣する時もあり・公卿・殿上人・風情なし・いかさまにも・朝康には・天狗・入替たりとぞ・わらはれける・そののち・朝康・御所の東の・つい墻にのぼり・大音聲をあげて・こは末代と・申共・いかでか・十善の君に・向ひ奉つて・弓を引・矢をば・放つべき・はなたむずる矢は・還て身にたち・ぬかんずる劍にては・かへつて身を・きるべしと・よばはつたりければ・木曾・あはや又・例の鼓めが・なりまはると・おぼゆるぞ・にくし・其儀ならば・打やぶつて・くれよやとて・御所の惣門に・おし寄て・火をぞ・かけたりける・朝康は・軍の奉行・承つて候ひけるが・軍をば・せず・此由を見て・築地より・とびおりて・南をさしてぞ・逃たりける・其外の者共は・或は・向礫・印地・辻冠者原・もしは・乞食法師・なりければ・一たまりも・たまらず・我・先にとぞ逃たりける・遲・はしる者に・ふみころされ・味方の太刀・長刀に・跡に・走者に・ふみころされ・味方の太刀・長刀に・しかりし・事共なり・去程に・法皇は・煙に・むせびて・渡らせ給ひけるが・御輿に・召れて・七條を・西へ・御幸なる・兵共・矢を射かけ奉る・公卿・殿上人・狼藉なり・一院の・御幸ぞと・仰ければ・兵共・みな・弓をひらめて・畏る・此陣をば・たが・堅めたるぞと・仰ければ・根井の小彌太候

と申・さらば請取奉つて・何方へなりとも・御幸なし奉れかしと・仰ければ・木曾殿に・此由を申・木曾殿・畏つて承り・法皇を・請取奉つて・五條内裏へ・御幸なし奉る・去程に・主上は・御舟にめして・池のみぎはに・浮ばせ・おはしまし・たりけるを・兵共・矢を・射かけ奉る・公卿・殿上人・狼藉なり・御座舟ぞと・仰ければ・兵共・弓をひらめて畏る・さらば・請取奉つて・何方へなり共・行幸なし奉れかしと・仰ければ・木曾畏て承り・主上を・請取奉つて・閑院殿へ・行幸なし奉る・去程に・山の座主・明雲大僧正も・法住寺殿に・渡らせ給ひけるが・御馬にめして・七條を西へ・落させ給ひける處を・樋口の次郎兼光・よつ・ぴいて・射殺し奉る・主水の頭貞成が子・清大外記親成は・木賊の狩衣の下に・萌黄の腹巻を着・鹿毛なる・馬に・のり・七條を西へ・落ける所を・根井の小彌太・よつぴいて・射殺してんげり・明經道の博士の・射殺されぬるこそ・淺ましけれ・又明經道の博士の・甲冑を・よろふ事も・是始とぞ・承る・中にも・源藏人仲兼・弟河内守仲信は・河原坂にうつて出・さんざんに戰ひ・鹿の加賀坊と・いふ者あり・源藏人に・申けるは・あまりの・えせ馬に・乘て候へば・はか〳〵しう・軍もせられ候はず・哀・御馬に・乘替候はゝやと・申たりければ・源藏人の・馬を・たぶ・主の馬に・乘かへ・大勢の中に・わつて入・さん〳〵に・たゝかうて・討れにけり・源藏人仲兼・弟河内守仲信は・今は御幸・行幸も・他所へなりぬ・誰をかばひて・軍をもすべきとて・一方打破て・南をさしてぞ・落られける・信濃源氏・村上の次郎判官代基國は・手勢・參百餘騎・河原坂に打て出・さんざんに戰ひ一方打破て・南をさしてぞ・落行ける・近江源氏・山本の冠者義隆も・手勢五百餘騎・河原坂に・打て出・さん〳〵に・戰ひ・人あまた・うたせければ・かなはじとや・おもひけむ・是も・南を・さしてぞ・落行ける・中にも・攝政殿は・ふべき・とて・御輿に・召れ・宇治殿をさして・いらせ給ひけるが・武者二騎・木幡の峠にて・參りあふ・こはいかなる者と・仰ければ・源藏人仲兼・弟河内守仲信候と申・さらば御供に・人・一人もなきに・御供に候へかしと・仰ければ・畏つて承り・宇治殿まで・おくり奉つて・其より・所領なりければ・河内國・坪井を・さしてぞ・下られける・其比の・豐後國の國司・刑部卿・三位賴資は・河原坂に・軍の見物して・おはしけるが・まつ裸に・はぎなされ・西向に・たつてぞ・おはしける・比は十一月十九日の・巳刻ばかりの・事なりければ・河原風の・はげしさ・申計も・なかりけり・茲に日比・刑部卿三位をよく・見知奉りける・侍法師の・一人候ひけるが・小袖二つに・衣をぞ・着たりける・さらば・下なる・小袖を・ぬいても・きせ奉らず・上なる・衣をぬいで・うちきせ奉る・刑部卿三位は・長の高き男の・色のしろきが・うつぼ衣・打きて・白衣なる・法師を・さきにたて・南を・さして・おはしけるが・さらば・いそいでも・おはせず・茲は・どこぞ・かしこは・たが宿所

ぞなんど・とはれけるこそ・をかしけれ・是を始として・局の女房・めのわらは・かしこ・茲にて・はぎとられ・をめき・さけぶ事・斜ならず・茲に・源藏人の家子に・信濃の次郎賴綱と・申者あり・河原坂に・打て出て・見けるに・主の馬は・あつて・おはせず・日比は・一所とこそ・契り奉りたるに・はや・討れ給ひぬるに・こそと・おもひければ・大勢の・かたに・かけ向ひ・あぶみ踏張・つつたちあがり・大音聲を・あげて・是は・源藏人の家子に・信濃の次郎賴綱と・名乘て・矢把といて・おしくつろげ・さしつめ引つめ・さん〳〵に・射ける矢に・矢場に・敵三騎・射落し・其後矢だね・つきければ・打物の・鞘をはづいて・散々に・切て・まはりけるが・敵二騎・切ておとし・我身も・よき敵に・引組で落・さしちがへてぞ・死にける・敵も是を見て・惜まぬ者こそ・なかりけれ・是を始として・蓮花王院・今熊野・法性寺大路・柳原・在々所々にて・合戰す・七條がするをば・山法師のかためたりけるが・一矢も射で・逃にけり・八條が末をば・奈良法師の・かためたりけるが・一軍もせで・落にけり・九條が末をば・攝津國源氏の・かためたりけるが・一矢も射で・逃にけり・日比・御所がたより・何物にても・敵の落ゆかんずるをば・討留よと・觸られたりければ・その邊の・在地の者共・攝津國源氏の・落行を・敵の落るぞと・心得て・兩方の・やねねに・あがり・おそひの・石にてぞ・打たりける・是は御所方ぞ・あやまちすなと・いひけれ共・さないはせそと・いふまゝに・拾かけてぞ・うつたりける・攝津國源氏・かなはじとや・おもひけむ・みな・馬・物具を・捨てぞ・落行ける・其後・木曾は・七條川原に・打たつて・八幡の方を・ふしをがみ・生捕共の頸・切かけさせ・中にも・山の座主・寺の長吏は・たつとき・法師なれば・頸を・たかう打て・かけよやとて・たかううつてぞ・かけさせける・其日の・夜に入て・左京の大夫長敎・法皇の・渡らせ給ひける・五條の內裏へ・參られたり・けれ共・守護の武士・きびしうして門をも・明ざりければ・宿所に歸り・出家して・次の日の・まんだ朝・衣袴・にてぞ・參られける・長敎・御前ちかう・參られたりければ・法皇さても・昨日のあわたしう・淺ましかりし・事共を・互に仰合られて・なきぬ・わらひぬぞ・しき給ひける・さても・山の座主・寺の長吏の・うたれぬるこそ・淺ましけれ・是もたゞ・丸がゆるなりとぞ・仰ける・同き廿一日に・法皇をば・五條の內裏を・出し奉つて・大膳の大夫成忠が・宿所・六條西の洞院へ・入奉り・主上をば・閑院殿を・出し奉つて・五條內裏へ・行幸なし奉る・木曾は・いよ〳〵勝に・乘てぞ・振舞ける・同き廿三日に・攝政殿よりは・木曾を召れて・既に・四十九人・さやうに・惡行ばかりにては・いかでか・世をも・治むべきと・仰ければ・木曾・畏て・承り・四十九人の・官職を・ことゞ〳〵く・返し奉る・木曾は・禪定關白の・御聟に・おしなりける・こそ・をかしけれ・木曾さらば・王にならばやと・おもひけるが・その比の主上は・をさなう・わたらせ給へば・王に・ならんずれば・とて今更・わらはしに・ならん事も・かなふまじ・木

曾さらば・院にならばやと・おもひけるが・其比の院は・法皇にて・渡らせ給へば・院に・ならんずればとて・今更・入道せぬも・かなふまじ・木曾・關白とは・えいはで・さらば・はんばくにも・なれかし・人參つて・關白殿には・藤原氏の御人こそ・ならせ給ふ・御事にては候へ・源氏にては・いかにも・かなはせ給ふべからずと・申たりければ・木曾さらばとて・丹波國を・知行して・院の・御厩の別當に・おしなりけるこそ・をかしけれ・同き廿四日に・松殿の御子・師家の殿とて・生年・十二歳に・なられけるを・木曾御聟に・とり奉つて・大臣・關白・一度に・せさせ奉る・折節大臣・明ざりければ・德大寺の・左大臣殿・かり奉つて・大臣・關白・一度に・せさせ奉る・京も田舍も・昔も今も・人の口の・さがなさは・此師家の殿をば・みな人・かるの大臣とぞ・申ける・同廿五日に・法皇宮內判官公時を・御使にて・木曾・追討の院宣を・鎌倉へこそ・くだされけれ・去程に・鎌倉には・此二三ケ年が間は・京都のさわぎ・國々の亂に・よつて・公の御年貢も・奉らねば・其恐有とて・公の御年貢・奉らる・幷・範賴・義經に・一千餘騎を・さし副て・都の守護の爲に・差上せられけるが・尾張國・熱田の・浦にて・逗留あり・宮內判官・熱田に・下り・此由申されたりければ・範賴・義經・私にては・いかにも・かなふまじき由を・申されければ・宮內判官・同き十二月八日の日・鎌倉に・下りつき・木曾・追討の院宣を・兵衞佐に・奉る・兵衞佐・全分の・あらえびすを・都の守護に・居置て・公家・院中の・御さわぎこそ・大きに・恐入て・おぼえ候へ・さらば・やがて木曾・追討せむとて・範賴・義經に・六萬餘騎の・軍兵を差副てぞ・のぼせられける・去程に・四方の關々・ふさがつて・私の年貢も・上らねば・都にお はしける人々は・たゞ少水の・魚のごとし・平家は西海に・兵衞佐は・鎌倉に・木曾は・都にはかりおこなふ・譬ば・後漢の・後・天下三に・別て・魏・蜀・吳と・號せしが如し・あぶなながらに・年くれて・壽永も・三年にぞ・なりにける

卷第九

拜禮の沙汰

壽永三年・正月一日の日・院の御所は・大膳の大夫成忠が・宿所・六條西の洞院なりければ・御所の體・然べからざる上・拜禮なし・院の拜禮も・なければ・八島の磯にて・春をむかへ・あら玉の・年立替り・たりけれ共・先帝ましませば・主上と・仰奉れ共・小朝拜も・行はれず・鰕も・奏せず・吉野の・くずも參らず・ひのためしも・奉らず・さすが・世亂れたりとは・いひしか共・都にて・かくは・なかりし物をと・哀なり・青陽の春も來り・浦吹風も・やはらかに・磯邊も長閑に・成行共・平家の人々は・いつも・氷に閉籠られたる・心地して・たゞ寒苦鳥に・異ならず・東岸西岸の柳・遲速をまじへ・南枝北枝の梅・開落既に・異にして・花の朝・月の夜・詩歌管絃・鞠小弓・扇合・繪合・草づくし・虫づくし・さま〴〵に・興有し事共を・思出・語り合て・ながき日を・暮しかね給ふぞ哀なる

佐々木と・梶原と・生數寄・摺墨を・あらそふ事

同き正月十日の日・木曾の左馬の頭義仲を・院の御所へ・めされて・平家・追討の爲に・西國へ・發向すべき由を・仰下さる・木曾・畏つて承り・同き十六日に・門出して・曉既に・打たゝんと・しけるに・又東國よりの討手・數萬騎にて・美濃國・伊勢國に・着なんと・聞えしかば・木曾は・門出計にて・西國下向は・とゞまりぬ・木曾は・其比・三千餘騎と聞えしが・皆方々へ・わかち・つかはし・折節勢こそ・なかりけれ・先樋口の次郎兼光に・五百餘騎を・差副て・叔父の・十郎藏人行家・河内國・長野の城に・ありと聞て・責させんとて・つかはしぬ・今井の四郎兼平七百餘騎にて・勢多の手へこそ・むけられ・けれ・仁科・高梨・山田の次郎・五百餘騎にて・宇治の手へこそ・向ひけれ・志田の三郎先生義教・ほうどうの三郎義廣・都合三百餘騎にて・淀を防に・向ひけり・其比鎌倉殿には・生數寄・摺墨とて・聞ゆる・名馬あり・中にも生數寄とは・黒栗毛なる馬の・太逞き・馬をも・人をも・よせたてず・くひければ・生數寄とは・名付られたり・長は・八寸の馬とぞ・聞えし・蒲の御曹司・九郎御曹司・此馬を・所望有けれ共・かなはず・或時・梶原源太景季・參つて・此馬を・申ければ・兵衞佐・宣ひけるは・是は・賴朝が・自然の時・一の馬に・たのんであれば・かなふまじ・是もおとらぬ・馬なればとて・摺墨をぞ・給りける・又・佐々木四郎高綱參つて・此馬を・申ければ・

兵衞佐・宣ひけるは・隨分人々の・申されつるうへ・又梶原源太景季が・申つるにも・たばざんなり・但御邊の父・佐々木の源三秀義は・故左馬の頭の殿の・御いとほしみ・淺からざりき・されば・保元・平治・兩度の合戰に・命を捨たりし人なり・相ついで又・御邊の奉公・神妙に候・今度宇治川をば・此馬に乘て・渡すべしとて・生數寄をこそ・たうだりけれ・佐々木・生涯の面目・是には・過じとおもひ・御前を・罷たつて・出けるが・いかゞはおもひけん・又立歸り・今度高綱・宇治川にて・死たりと・聞しめされ候はゞ・はや人に・先を・せられてんげりと・おぼし召れ候べし・又生たりと・聞しめされ候はゞ・先陣は定て・したるらん物をと・おぼし召れ候べしと・申きつて・出ければ・あつばれ・荒涼の・申やうかなとぞ・宣ひける・去程に人々・鎌倉をたつて・谷山を・打越・駿河國・浮島が原に・かゝつて・やう〳〵あゆませ行程に・中にも・梶原源太景季・たかき所に・打あがり・おほくの・馬共を・見けるに・幾千萬と云數を・しらず・おもひ〳〵の鞍おかせ・色々の鞦かけさせて・或は・乘口に・引せ・或は・もろ口に・ひかせつゝ・引とほし〳〵・しける中にも・景季が・摺墨に・まさる馬こそ・なかりけれと・よろこうで・靜に・あよませ行處に・はるかに・引さがつて・佐々木・生數寄に・金覆輪の鞍おかせ・小房の鞦・かけさせて・舍人あまたに・ひかせつゝ・さしもに・廣き・浮島が原を・所もなげに・おとらかさせ（イおどろかさせ）・しらあわ・かませ中に翔て・出來る景季・あたりを・はらつてぞ・見えたりける・梶原・生數寄が・上りけるよ・やあそれは・たが御馬ぞ・佐々木の御馬候・とて・引とほす・梶原・こはいかに・景季が・申つるには・たばで・佐々木に・たうづる事こそ・遺恨なれ・いかさまにも・今度・都に・上り・木曾殿の御内に・四天王と・聞えつる・今井・樋口・樋・根井に・組か・さらすば・西國に下り・平家の・かたに・さしも・鬼神の・やうに・聞えたる・越中の前司盛俊・次郎兵衞盛嗣・上總の惡七兵衞かげ清に・くむか・さらずば・能登殿に・組奉らんとこそ・思ひしに・佐々木に・おもひかへられ奉て・軍して・しなんと・遙々と・京へ・上つて・詮なし・詮ずる所・爰にて・佐々木と・引組で・さしちがへ・恥ある侍・二人死て・只今・大事かゝへ給ふ・鎌倉殿に・そんとらせ奉らむと・おもひて・相待處に・佐々木も・次第に・ちかづいたり・梶原おしならべてや・くむべき・又むかふさまに・あてゝや・落すと・おもひけるが・まづ詞をぞ・かけたりける・いかに候佐々木殿・生數寄・給つてとなう・佐々木・かねて・心得てんげれば・少もさわがず・につこと・わらひ・生數寄をば・給はらぬぞとよ・其故は・隨分人々の・申されつる上にも・たばざんなれば・まして高綱なんどが・申共・よも給はらじ・申て又・給はざらんは・無念なるべし・よし〳〵・かゝる・天下の御大事に・主の御馬屋・物の具なんど・盜たらんは・少もくるしかるまじ・きつくわいの仰をば・後日にこそ・承らんめと・おもひて・たゝむと・しつる曉・舍人男に・心を合て・ぬすんで・のぼるぞ・梶原殿と・いひければ・梶原此詞に・腹がゐて・ねつたい・さらば景季も・ぬすむべかりつる物をと

て・どつとわらつてぞ・退にける

宇治川

去程に・源氏六萬餘騎を・尾張の・熱田より・大手搦手・二手に・わけてぞ・上られける・先大手の大將軍蒲の御曹司範頼に・相隨ふ人々には・武田の太郎信義・かゞみの次郎遠光・其子の小次郎長清・一條の次郎忠頼・板垣の三郎兼信・井澤の五郎信光・逸見の冠者有義・安田の三郎義貞・侍大將には・土肥の次郎實平・嫡子の彌太郎遠平・稻毛の三郎・榛谷の四郎・森の五郎・平山の武者所季重を・先として・都合其勢・三萬五千餘騎にて・近江國野路・篠原に陣をとる・搦手の・大將軍・九郎御曹司義經に・相隨ふ人々には・田代の冠者信綱・大内の太郎維義・山名の三郎義行・侍大將には・畠山の庄司次郎重忠・舍弟・長野の三郎重清・同き氏・河越の太郎重頼・嫡子の・小太郎重房・澁谷の庄司重國・其子の右馬允重資・梶原源太・佐々木四郎・熊谷の次郎直實・嫡子の・小二郎直家・梶原平次・佐々木五郎・精谷の藤太・猪俣の小平六敎綱を・先として・都合其勢・二萬五千餘騎にて・伊勢國をとほり・伊賀國を・經つゝ・宇治橋の爪にぞ・押よせたる・向ひの岸には・亂ぐひうつて・逆茂木・ふさぎ・水の底には・大綱はへ・逆茂木・つないで・流しかけたりければ・岩波・おびたゞしう・瀧なりし・瀬枕・しきりに・漲りて・さかまく水も・はやかりけり・まだ・卯の刻の・事なれば・川霧・ふかく立こめて・馬の毛も・物の具の毛も・さだかには・見えざりけり・比は正月廿日あまりの・事なれば・ひらの高ね・志賀の山・昔ながらの・雪消に・谷々の氷・とけあひて・水かさ遙に・まさりたり・船ならでは・輙渡すべし共・見えざりけり・かゝりける處に・九郎御曹司義經・人々の・心を・みんとや・思はれけん・まづ・川の端に・打のぞんで・こは・いかに・殿原・水の・びんをや・待べきと・宣ふ處に・爰に・武藏國の住人・畠山の庄司次郎重忠・生年廿一に・成けるが・進出て申けるは・こは御諚・共覺え候はぬ物かな・さしも・此川の御沙汰は・鎌倉殿の・御前にても・候ひつる物を・日比も・なき海川が・今日・初て・出來ても・候はゞ・こそ・今更・角共・申させ給はめ・近江の・湖の末なれば・待共々々・水ひまじ・橋をも又たれか・かけても・參らせ候べき・去ぬる治承の・合戰に・足利の・又太郎忠綱が・十七歳にて・爰を渡しけるは・鬼神にては・よも候はじ・今度は・重忠・せぶみ仕り候はん・つゝけや・武藏殿原とて・丹黨・五百餘騎・銜ひし〳〵と・ならぶる爰に・平等院の艮・橘の小島がさき・むすぶの・明神の・御前より・武者こそ・二騎・出來れ・敵味方・あれは・いかにと見る處に・一騎は・梶原源太・一騎は・佐々木四郎・きこゆる・生數寄・摺墨に・乘つれて・引かけ〳〵ぞ・出來る・人目には・何共・見えね共・互に・先を・あらそひけるが・梶原・佐々木に・弓たけ・計ぞ・すゝんだる・佐々木・今は・かなはじとや・おもひけん・先・謀に・なういかに・梶原殿・東國にては・とね川・西國にては・此川を・こそ・日本一二の・大

河とは・申せ・中にも此川は・上も下も・はやうて・馬の足たち・すくなし・あの梶原殿の・馬の腹帶の・はるかにのびて・さうぞ・河中にて・鞍乘返し・あやまち・し給ふな・しめ給へ〳〵と・いはれて・梶原・さもやあるらんとおもひ・手綱をば・馬の・ゆかみ（ィゆみのかみ）に・打おき・左右の鐙を・踏すかし・腹帶を・といて・二しめ・三しめ・ひつしめ〳〵・しけるまに・佐々木一騎・あてゝ・川へ・さつとぞ・打入たる・梶原さては・たばかりけるよ・其儀ならば・一度でも・たばからる・まじきぞとて・おなじう・つゞいて・打入たり・河中までは・互におとらず・渡しけるが・され共・佐々木は・生數寄と・申・無二の馬には・乘たり・川の案内は・しつたりけり・馬の足に・かゝる綱をば・太刀を抜て・ふつ〳〵と・打きり〳〵・さしもに・はやき・宇治川なれ共・一文字に・さつと渡いて・思ふ所に・打あげたり・梶原も・つゞいて・渡しけるが・大綱に・馬・のりかけ・篭ため・かたに・おし落され・遙の・下へぞ・打あげたる・扱こそ・先陣佐々木・二陣梶原と・日記には・しるされたれ・其後・佐々木四郎高綱・高き所に・打あがり・鞭にて・鐙の水・なでくだし・鐙踏張・つつ立上り・大音聲を・あげて・是は・宇多の天皇に・十一代の後胤・近江の國の住人・佐々木の源三秀義が・四男・四郎高綱・今度宇治川の・先陣ぞやとぞ・なのつたる・氣色誠に・あたりを・はらつてぞ・見えたりける・其後・畠山も・つゞいて・渡しけるが・向ひの岸より・山田の次郎が・よつぴいて・射ける矢に・河中にて・馬の額を・篭ぶかに・射させて・馬こらへずして・屏風を・たふすが・やうに・

かつはと・まるびければ・畠山・かなはじとや・おもひけん・弓杖に・すがり・河中にぞ・おりたつたる・岩浪・しきりに・甲の・てつさきに・あたつて・おしあげ〳〵・しけれ共・是を事共・せず・水の底を潜て・向ひの岸に・渡りつく畠山が・うしろの邊に・おもき物の・とりつきければ・何者やらんと・ふりむいて・見けるに・大の男の・重鎧着たりけるがながれかゝつて・取ついたり・畠山・御邊は・たそ・大樒の次郎重綱候・あまりに・よわき馬に・乘て候へば・川中にて・おし落され・ながれかゝつて・みだりに・取つき・參らせて候・たすけ給へと・いひければ・畠山・かしこう・あやまち・しつらう・いつも・御邊たちをば・重忠こそ・たすけ申さんずれと・いふまゝに・めての・腕を・さし出し・大樒が・鎧の上帶・あげまきともに・取具して・ちうに・さしあげ・二ふり三ふり・打ふつて・壇（ィきし）の上へぞ・なげ上たる・大樒・ちうにて・太刀を・ぬき・まつかうに・さしあて・大音聲をあげて・是は武藏國の住人・大樒の次郎平の重綱・今度・宇治川の・歩渡の・先陣ぞやとぞ・なのつたる・敵も・味方も・一度に・どつとぞ・わらひける・其後畠山も・高き所に・打上り・河中にて・馬の額を・射たりつる・山田の次郎に・目をかけて・三尺五寸ありける・衡平と云・太刀をぬき・山田に・うつてかゝる・山田も・ぬき合てぞ・打やうたる・畠山若武者・山田老武者なり・山田・畠山に・きり立られ・うけ太刀にこそ・成にけれ・いかゞはしたりけむ・山田が・うけはづす所を・弓手の肩より・妻手の脇へ・かけず・切てぞ・おとしける・是を・始として・二萬五千餘騎の兵共も・

みな・打入てぞ・渡しける・さしもに・はやき・宇治川なれ共・馬・人に・せかれて・水は・上にぞ・たゝへたる・雑人原は・馬の・下手(イ　したはら)に・取つき〳〵・渡しけるが・膝より・上を・ぬらさぬ・ものも・多かりけり・澁谷の右馬の允重資・梶原平次・佐々木五郎・糟屋の藤太・猪俣の小平六・彼等五人は・馬をも・はなれ・弓杖をつき・橋の桁をぞ・渡りける・むかひの岸より・山田が勢・さしつめ・引詰・さん〳〵に・射けれ共・是を事共せず・甲のしころを・かたぶけ・鎧の袖を・まつかうに・あてゝ・さん〳〵にこそ・戦ひけれ・山田の次郎・五百餘騎にて・防ぎ戦ふといへども・落ぬうたれぬ・せし程に・五十騎計に・うちなされ・或は・木幡山・伏見を・さして・おち行ば・宇治は・程なく・破れにけり・勢田をば・稲毛の三郎重成が・謀に・田上の・供御の瀬をこそ・渡しけれ・今井の四郎・七百餘騎にて・防戦ふと・いへども・無勢多勢に・かなはねば・勢田も・程なく・破れにけり

河原合戦

木曾は・宇治・勢田・やぶれぬと・聞えしかば・院の御所・六條殿に・参り・法皇を・とり奉て・西國に・下り平家と・一に成て・兵衛佐うたんとて・力者廿餘人を・すぐつて・院の御所六條殿へ・馳参られけるが・敵既に・河原表まで・乱入たるよし・聞えしかば・其より・とつて返し・六條高倉なる所に・日比・見そめたる・女房の許に・立よつて・最後の名殘をしまれけるに・爰に・越後の仲太光家とて・今まゐりの・候らひけるが・敵既に・川原表まで・乱入て・候に・さやうに・打とけさせ給ひては・犬死・せさせ・おはしまし・候ひなんず・はや〳〵打立せ給へと・申けれども・木曾猶・出やり給ねば・さ候はゝ・光家には・暇たび候へかし・まづ・さき立・参らせて・しでの山にてこそ・待参らせ候はめとて・腹十文字に・かきやぶつてぞ・失にける・木曾是は・義仲を・すゝむる自害にこそとて・やがて・物具してぞ・打立れける・上野の國の住人・那波の太郎廣澄を・先として・其勢二百餘騎には・過ざりけり・木曾・川原表に・打出て・見給へば・げにも東國の大勢・雲霞のごとくに・みち〳〵たり・中にも・若手の武者とおぼしくて・五十騎ばかりすゝんだり・殊に武者二騎・すぐに扣へて・後陣の勢をや・待べきと・申けれども・鹽谷が申けるは・一陣やぶれぬれば・殘黨まつたからずと・いへり・唯かけよやとて・をめいて・かく・木曾も・其勢・二百餘騎・大勢の・中にわつて入・西より東へ・一わたり・北より南へ・一渡り・とつては返し・わつてはとほり・さん〳〵に・戦ひ・一方打破て・出たれば・二百餘騎とは・見えしか共・落ぬ討れぬ・せし程に・五十騎・ばかりにこそ・成にける・かゝりければ・九郎御曹司義經は・宇治の手・追落して・上られけるが・まづ・御所の・覺束なければとて・主従・六騎・院の御所・六條殿へ・馳参られけるに・御所には・大膳の大夫

成忠・御所の東の・築垣にのぼり・四方・見めぐらして・見けるに・爰に・武者の五六騎・馳參るを・見付て・あはや又・木曾が・歸り參候ぞやと・申したりければ・法皇を・始奉て・公卿・殿上人や・局の女房達に・至まで・今度ぞ・世の・失はてなるべしとて・手を・握り・立ぬ顯も・ましまさず・成忠・よつく・見て・いゝや・是は・木曾にては・候はず・笠じるしの・かはつて・おぼえ候・いかさまにも・是は・今日參る・東國の源氏共と・覺候と・申もはてぬに・九郎御曹司義經・御所の惣門に・うつたつて・大音聲をあげて・是は・鎌倉の・兵衞佐賴朝が・弟九郎冠者義經・宇治の手・追落して・參る由を・申させ給ふべうもや・候らんと・申されたりければ・成忠・此よしを・聞て・急ぎ築垣より飛程に・あまりに・あわてゝ・腰を・つき損じてんげり・餘の嬉しさに・いたさを・忘れ・はふ〳〵・御前に・參り此由を・奏し申たりければ・法皇斜ならず・御感有て・さらば・門をひらいて・入よやとて・惣門をひらいてぞ・入られたる・大將の・其日の裝束には・赤地の錦の直垂に・紅の・末濃の鎧を着・鍬形うつたる・五枚甲の緒をしめ・金作の太刀を・はき・廿四さいたる・そめ羽の矢・おひ・重籐の弓の・鳥打のもとを・檀紙を・一寸に・かゝせ・五分に・たゝんで・左卷に・まいたる・ばかりぞ・大將の・しるしとは・見えし、殘五人も・物具こそ・色々なりけれ共・つらたましひ・骨柄・大將には・おとらず・法皇は・中門の檻子より・叡覽あつて・ゆゝしげなる者共が・ありさまかな・一々に・名乘せよと・仰ければ・成忠・承つて・一々になのらす・さん候一人は・大將・九郎義

經・一人は・近江國の住人・佐々木の源三秀義が四男・四郎高綱・一人は・武藏國の住人・畠山の庄司重能が子に・次郎重忠・一人は・河越の太郎重頼が子に・小太郎重房・一人は・相模國住人・梶原平三景時が子に・源太景季・一人は澁谷の庄司重國が子に・右馬允重資候と・面々に名乘て・畏る・其後・法皇・大將九郎義經を・大床ちかう・めされて・事の子細を・御尋ありけるに・畏つて申けるは・さん候・鎌倉の・兵衞佐賴朝・木曾が・狼藉・承つて・範賴・義經に・六萬餘騎の軍兵を・さし副て・上せ候・範賴は・勢田より參り候が・いまだ・見え候はず・義經は・宇治の手・追落して・上り候へば・木曾は・二百騎計にて・河原表に・見え・候ひつるを・軍をば・兵共に・せさせ・義經は・まづ・御所の・覺束なさに・扨參りて候・今は定て・木曾をば・討捕候ひぬらんと・世にも・事もなげに・申されたりければ・法皇・斜ならず・御感あつて・さらば・汝・やがて・御所中を・守護し・申せよと・仰ければ・義經・畏てうけたまはり・主從六騎・御所の惣門に・打立て・君を・守護し奉る・是を始として・十騎・廿騎・五十騎・百騎・馳參る程に・ほどなう・三千騎に・なつて・御所の・四門を堅て・守護し奉りけるにぞ・法皇も・安堵の・御心つき・おぼしめす・若(イ者字なし)公卿・殿上人や・局の女房達に・至まで・力づきてこそ・おもはれけれ・木曾は・猶も・院の御所・六條殿に參り・法皇を・とり奉つて・西國へとは・おもはれけれ共・御所にも・東國の大勢・參り籠りたるよし・聞えしかば・又五十餘騎とつて返し・大勢の・方に・かけむかひ・爰を最後とぞ・戰はれ

ける・かゝるべしとだに・しりたらば・今井を・勢田へは・やらざらまし・日比は・一所にとこそ・契りしに・所々にて・死なん事こそ・悲しけれ・去にても・今一度・今井が行衞を・尋むとて・川原を・上りに・かけて・ゆく・敵追かくれば・とつては返し・おつかくれば・取ては返し・六條河原と・三條河原の間にて・七八度までこそ・返されけれ・五十騎計ありつる勢も・三十騎計に・なる・されども終には・敵を追拂ひ・三條河原を・打渡り・粟田口へぞ・出られける・木曾が・去年・信濃を出しには・五萬餘騎と・聞えしが・今日・四の宮河原を・過るには・主從七騎に・成にけり・まして・中有の旅の空・思ひやられて・哀也・七騎が中の一騎は・鞆といへる女なり

木曾の最後

木曾は・鞆・歟多とて・二人の女を・めしつかはれけるが・中にも・鞆とは・廿二三の・女の・みめ・かたち・よかりけるが・荒馬乘の・大力・惡所落しの・上手なりければ・木曾・軍の・有度ごとに・よき鎧・きせ・よき馬にのせて・一方の大將に・さし・むけられけるに・一度も・不覺は・せざりけり・去程に木曾は・長坂にかゝつて・北國へ・おつ共・きこゆ・聞ゆ・又龍花越にかゝつて・丹波路へ共・聞ゆ・されど共木曾は・今井が行衞を・尋んとて・勢田の方へと・行程に・大津の・打出の・濱にてぞ・今井の四郎は・出來る・去程に・今井の四郎兼平は・七百餘騎にて・勢田へ・向うたりけるが・其勢落計れ・百騎計に成て・旗をば捲て・持せ・とつて返し・都をさして・上る程に・一町計より・互に・さぞと・見てんげれば・雨方・駒をはやめて・よりあうたり・木曾・馬打ならべ・今井が・手を・とつて・義仲・六條河原にて・いかにも・成べかりつるを・汝が向後の・覺束なさに・多の敵に・後を見せて・是まで・來れるなりと・宣へば・今井・畏て・承り・兼平も・勢田にて・討死仕べう・候ひつるを・御ゆくへの・覺束なさに・是まで・參りたる由を・申たりければ・木曾・さては契りは・いまだ・朽せざりけり・義仲が・旗さしは・六條河原にて・うたれぬ・義仲が勢は・此邊にも・定て・落ちつ(イおちぢり)たるらん・汝が・旗を・あげて・見よかしと・宣へば・今井承つて・卷て持せたりける・白旗といて・ばつと・さしあげたりければ・京より落たる・勢共なく・勢多よりちつたる・勢共なく・今井が旗を・見て・五騎・十騎づつ・馳參る程に・ほどなう・五百餘騎にぞ・成にける・木曾・うれしき物かな・此勢あらば・などか・最後の軍・一軍せざるべき・あれに・しぐらうて・見えたるは・たが手やらん・甲斐の・一條殿の・御手とこそ・うけたまはり候へ・勢は・いか程あるやらん・七千餘騎とこそ・承れ・木曾扨は・敵も・多勢にて・あんなれば・あの大勢の・中へ・かけ入て・討死せん事よとぞ・よろこばれける・木曾殿の・其日の裝束には・赤地の錦の直垂に・薄金と・いふ・唐綾威の鎧を着・鍬形うつたる・五枚甲の緒をしめ・金作の太刀を・帶・廿四さいたる・石打の矢・其日の軍に・討捨て・少々・殘たりけるを・かしら高に・おふまゝに・ぬり籠籐の弓の・眞中持て・木曾の・鬼蘆毛と・聞

ゆる・馬の太逞に・金覆輪の・鞍を置て・打入り・大勢の・方に・かけ向ひ・鐙ふんばり・つつ立あがり・大音聲をあげて・日比は・音にも・聞けん木曾の冠者・今は・目にもみるらん左馬頭・兼伊豫守・朝日の將軍・源の義仲ぞ・敵は・一條の次郎と・こそ・きけ・義仲討捕て・勸賞承れやとぞ・名乘れける・一條の次郎・此よしを聞て・今名乘は・大將木曾ぞ・あますな・もらすな・討やとて・大勢が眞中に・取籠て・討とらんとぞ・すゝみける・木曾も・其勢五百餘騎・大勢の中に・わつていり・西より東へ・一わたり・北より南へ・一わたり・とつては・返し・わつてはとほり・さんざんに戰ひ・一方うちやぶつて・出たれば・五百餘騎とは・見えしか共・五十騎計にぞ成にける・土肥の次郎實平が・三百騎ばかりにて・扣たりける・所をも・かけわつて・出たれば・主從五騎にぞ成にける・五騎が中にても・鞆は・いまだ・討れざりけり・爰に・武藏國の住人に・恩田の八郎爲重とて・凡卅人が力・もつたる・大力の・剛の者あり・かれが・郎等に・むかつて・誠や・木曾殿の御內に・鞆とて・女武者の・あんなるぞ・縱・心こそたけく共・思ふに・何程の事か・有べき・おなじくは・組で・生どらんと・思ふなり・われ・くむと見ば・汝等・透をあらせず・落あへとて・かしこ・爰を・かけまはり〳〵・見ける處に・爰に・練貫に・梅の・たち枝・縫たる・直垂に・萌黃匂の・鎧をき・鍬形の・甲の緒をしめ・足白の太刀をはき・十八さいたる・染羽の矢・負・二所籐の弓持て・月毛なる馬の・太逞に・金覆輪の・鞍おいて・乘たりける・武者を見付・恩田・是や・そなるらんと・おもひ・さしうつぶいて・見ければ・かねぐろに・うすげしやうをぞ・したりける・恩田・さればこそと・おもひ・弓手の・方を・うち過る體に・もてなし・あひつけ・よつて・むずとくむ・鞆此よしを・きつと見て・妻手の・腕を・さし出し・恩田が・さし上・二ふり・三ふり・打ふつて・鞍の前輪に・おしあつるとぞ・みえし・此日比・さしも・聞えたりつる・恩田が・しや頸・ねぢきつて・捨てけり・郎等は・是をみて・おちやうに及ばねば・みなちり〳〵にこそ・成にけれ・其後・木曾・鞆を・めして・いづくまで・敵に・うしろを・見すべきなれば・義仲は・只今是にて・自害・せむとおもふなり・汝は・これより・何方へも・落行べしと・宣へば・鞆・こは・口惜事をも・の給ふものかな・いづく迄も・最後の御供・仕るべき由を・申ければ・木曾汝が・志の程は・嬉しけれ共・弓矢とりの・最後の所にて・女の・死たらんには・後代の聞え・あしかるべし・只是より・何方へも・足に・まかせて・落ゆき・義仲が後世・とぶらうて・得させよ・それぞ・最後の・供したり共・思ふべきと・宣へば・鞆・涙を・ながして・去年・信濃を・出しより以來・大小事・合戰に・あふ事・廿餘度・片時・はなれ參らする事も・さふらは・ざりしに・今・主の最後を・見捨て・いづくを・さして・落行べきぞやとて・さしも・たけき・鞆なれ共・すゝむ涙は・せきあへず・木曾・さるにても・とう〳〵と・宣へば・鞆力及ばず・粟津の・國分寺の・御堂の前に・物具ぬぎおき・太刀脇ばさみ・東をさして・落るとぞ見えしが・行がたしらずぞ・成にける・手塚

の太郎討死す・手塚の別當は・痛手負て・勢田の方へぞ・落行ける・今は木曾と・今井と計なり・木曾殿・今井に・向つて・宣ひけるは・日比は・何共おもはざりつる薄金が・けふは・などやらん・重つて・おぼゆるぞと・宣へば・今井・いまだ・御馬も・つかれ候はず・又御身も・弱らせ給はねば・何事によつてか・一領の御きせながの・重うは・ならせ・給ふべき・今は味方に・つゃく御勢も候はねば・御心細きにてぞ候らん・兼平一騎をば・餘の武者・千騎と・おぼしめされ候べしと・申たりければ・木曾大に嗔て・義仲六條河原にて・いかにも成べかりし身の・是まで落來て・汝と・一所に死なん命の・何事によつてか・をしうては・膿すべき・其儀ならば・討死せんとて・又かけ出むと・しを給ひけるを・今井・急馬より飛で下り・木曾殿の・御馬の七寸に・とり付奉て・弓矢とりは・日比いかなる・高名をして・候へ共・最後の所にて・あしう候へば・ながき弓矢の・御疵なるべし・此日比・日本國に・聞えさせ給ひたる・木曾殿をば・そんぢやう其國の・たれがしが・郎等の手に懸て・うち參らせたりなんど・いはれん事こそ・口惜けれ・あれに見えて候をば・粟津の松原と申候・あの松の中へ・いらせ給ひ・靜に御念佛候て・御自害候べし・兼平が箙に矢七八・射殘して候へば・防矢においては・仕らんずる候とて・御馬の鼻を取て・しきりに・おしむけ〳〵しければ・木曾力及給はず・粟津の松原をさしてぞ・落られける・比は正月廿一日の・入あひ・ばかんの事なれば・粟津の松も・かすみ暮・沼田に・薄氷の・閇塞たるを・しらすして・沼へ馬を・打入・あふれ共〳〵・うてども〳〵・はたらかす・木曾はなはも・今井が行衛の・覺束なさに・後をかへり見給へば・其後今井も・馬をよせ打乘て・大勢の中に・かけむかひ・鐙踏張・つつたちあがり・大音聲をあげて・是は信濃國の住人・木曾の權の仲三兼遠が子に・木曾殿の・御乳人子・今井の四郎兼平とて・鎌倉殿迄も・しろしめされたんなるぞ・兼平討捕て・勸賞承れやとぞ・名乘ける・敵の方には・此由を聞て・只今名乘は・今井の四郎兼平ぞ・あれ射とれや・うつとれとて・さしつめ引詰・さん〳〵にいけれども・今井の四郎兼平は・鎧よければ・うらかゝず・透間を射ねば・手も負ず・今井も死生はしらね共・八の矢にて・敵八騎迄こそ・射落しけれ・爰に東國・相模國の住人・三浦の石田の二郎師久（ためひさ）と名乘て・木曾殿を・目にかけ奉り・矢ごろに・馳近づきて・三人ばりに・十三束の・中ざしとつて打番・よつぴいてひやうと射る・折節ふりむき給へる・内甲を健に・射させて・痛手なりければ・甲のまつかふを・鞍の前輪におし當・うつぶして・おはしける處を・石田が郎等・あまた落あうて・木曾殿の御頸をば・給てんげり・其後頸をば・太刀の切さきに・さしつらぬき・高くさしあげ・大音聲をあげて・此日比日本國に・聞えさせ給ひたる・木曾殿をば・東國相模國の住人・三浦の石田の次郎師久が・かうこそ討奉たれやとぞ・名乘ける・今井此由を聞て・今は誰を・かばはんとて・軍をもすべき・いかに東國の人々・剛の者の・自害するを見て・手本にせよやとて・馬の上にて・鎧の上帶きつてのけ・腹十文字に・かきやぶつたりけれども・なほも死なれざりければ・太刀の きつ さきを・

口にふくみ・むまよりさかさまに・落つらぬかつてぞ・うせにける・木曾殿は卅一・今井の四郎卅三・木曾と今井が・討たれてぞ・粟津の軍は・やぶれにける（イやみにける）

樋口が切れ

去程に・樋口の二郎兼光は・木曾殿の・叔父十郎藏人行家・河内國・長野の城にありと聞て・責むとて・むかうたりけるが・十郎藏人・長野をばたつて・紀伊國・名草に下つて・おはしけるを・樋口つづいて責けるに・又都にも・軍ありと聞て・それよりとつて返して・上る程に・今井が下人の男共・樋口殿に・此よしを申さんとて・河内をさして下りけるが・淀の大渡の邊にて・行あうたり・樋口の二郎・さていかにやと・いひければ・さん候君は・ゆふべ粟津の松原にて・討れさせ・おはしまし候ぬ・今井殿は・御自害と申す・樋口の二郎・打うなづき・涙をはら〳〵と流て・今はかうござんなれ・是聞給へや・人々・君に御志おもひあはれむずる人々は・是より兼光を・大將として・都に上り・討死し給ふべし・又命惜からんずる輩は・是より何方へも・落行べしといひければ・或は爰にて・馬に物かひ・或はかしこにて・甲の緒・しむるなんどして・五騎十騎づつ・落行程に・東寺四塚の邊にては・樋口が勢・わづかに・廿餘騎にぞ・なりにける・樋口の次郎・けふ既に・都へ入と聞しかば・黨も・高家・東寺四塚に・馳むかふ・爰に樋口が勢の中に・茅野の太郎光能と・申者あり・大勢の方

にかけむかひ・あぶみ踏張つつたちあがり・大音聲をあげて・是に甲斐の一條殿の手や・ましますと・のゝしつたりければ・敵味方・どつとわらつて・こはいかに・一條殿の・手にてなきは・軍はせられぬ事かと・いひければ・光能・尤・いはれたり・是は信濃國・諏訪の上の・宮に住居仕る・ちの〳大夫光廣が子に・茅野の太郎光能と・申者にて候なり・又弟にて候・茅野の七郎は・甲斐の一條殿の御內に候ひしなり・又光能が子共二人・諏訪の上の宮に・殘留て候が・我討れたる由を聞て・我父は・七郎が前にて・討死して・語らせんと・思ふ爲にこそあれ・誠は敵をば・きらふまじとて・矢把といて・おしくつろげ・さしつめ引詰め・さん〴〵に射ける矢に・矢場に敵三騎射落し・其後・矢種つきぬれば・打物の鞘をはづいて・さん〴〵に・切てまはりけるが・敵二騎・切て落し・彼是五騎うちとつて・わが身も・よき敵とひつくんで・落・さしもこそ・なかりけれ・去程に樋口の次郎兼光をば・日ごろ兒玉黨いひけるは・弓矢取て・廣き中へ・入といふは・かゝらんとき・一間途の・息をも休め又は・命たすからん爲にこそあれ・いざや樋口が・命をたすけむとて・樋口が許へ・此由を・いひおくりければ・樋口の次郎・日比はさしもの兵なれ共・運やつきけむ・弓をはづし・甲をぬいで・降人にこそ・成にけれ・大將軍へ・此由を申す・範頼・義經・院へ此よしを・奏し申されたりければ・法皇よりは・

既にたすけらるべかりしを・女房達の・申あはれけるは・あなあさまし・木曾が・去年の冬・法住寺殿へ・よせたりし時は・今井樋口と・いつし者の・聲のみこそせしか・さればそれらを・たすけられんには・或はさまをかへん・或は身をなげむなんど・申あはれければ・法皇も力及ばせ給はず・又切べきにぞ・定りける・同き廿二日に・新攝政を・改易せられて・もとの攝政近衛殿・還着し給ふ・昔栗田の關白殿は・御喜申の後七ケ日だにこそ・ありけんなれ・是は六十日とは・申せ共・其間に・節會もあり・除目も行はれき・されば思出なきには・あらずやとぞ・人申ける・同き廿四日に・木曾がかうべ・大路を渡さる・與黨五人とぞ・聞えし・先・井上の九郎・長瀬の判官代・高梨の冠者・根井の小彌太・今井の四郎兼平とぞ聞えし・樋口の次郎兼光は・藍摺の直垂に・折烏帽子きて・木曾がかうべの供して・大路を渡されけり・同き廿五日に・五條西の・朱雀に引出し・終にかうべを・はねられけり・さればこれらを・扶られんには・虎を養ふに・似りと・殊に沙汰あつて・きられけるとぞ・聞えし・つでにきく・虎狼の國・衰て・諸將・蜂のごとくに・おこつし時・沛公さきだつて・咸陽宮へ入といへ共・項羽が來らん事を恐れて・妻和（イ財寶）・美人をも・おかさず・金銀珠玉を・かすめず・いたづらに・關の東を・まぼつて・漸々に・敵を亡し・終に天下を・治する事を・得たまへり・漢の高祖是なり・されば今の義仲も・賴朝にさきだつて・都へ入といふ共・謹で賴朝が・下知をだにも・またましかば・沛公が・謀には・世にし・おとらじ物をとぞ・人申ける・去程に・平家は・讃岐の八島に・おはしけるが・都には・木曾討れたりと聞えしかば・大勢引具して・攝津國・難波潟へぞ・渡られける・東は生田の森を・大手の城戸口と定め・西は一谷を城郭に・構ふ・其あひ・福原・兵庫・板屋戸・須磨に籠る勢・都合十萬餘騎とぞ聞えし・是は去年の冬・備中の水島・播磨の室山・二ケ所の合戰に打勝て・其間に隨ひ付所の・軍兵共なり・彼一谷と申は・口はせばくて・奥ひろし・北は山・南は渚・峯高して・偏に・屏風を・そばだてたるに異ならず・北は・山の麓より・海の遠淺にて・大木を伐て・しがらみにかき・大石をたゝんで・搔楯とす・海の遠淺にも・大舟共・數千艘・そばだて・かたぶけて・搔楯とす・城郭の四方には・鞍置馬ども・十重廿重に・引立たり・城郭の前には・高櫓をかいて・上にも下にも・兵共・所もなく・みち〳〵たり・常は・大鼓を打て・亂聲す・高き所には・赤旗幾千万と言・數もしらず・打立たりければ・春風に・もまれて・天に飜り・偏に・猛火の燃のぼるに・異ならず・敵も是を見て・臆しぬべうぞ・覺えたる

六箇度合戰

去程に・阿波・讃岐の者共・此日比は・平家に・忠を致しけるが・源氏に心替りしてんげり・彼等が申けるは・我等此日比・平家に忠を致したれば・今更源氏へ・參りたり共・よも用ひ給はじ・いざや平家に・一矢射て・それを面にして・參らむとて・門脇の平中納言教盛・越前の三位通盛・能登守教

經・父子三人・備前國・下津井の浦といふ所に・おはしけるを・彼等小舟・廿餘艘に取乘・備前國におし渡り・下津井の浦に・おしよせて・時をどつとぞ作りける・能登殿此由を見給て・此日頃・味方に忠を致したる者共が・源氏に心替してんげり・惡し其儀ならば・あますなもらすな・討や〳〵と・さん〳〵に・討給ひければ・是等能登殿に・手痛責られて・かなはじとや思ひけん・又船に取乘・四國をさして・渡りけるが・折節大風大波・向てたちければ・淡路國におし渡り・ふくらの湊に着にけり・又此所に・源氏二人ありとぞ聞えし・一人は淡路の冠者爲重・一人は賀茂の冠者爲信とて・是等は故六條の・判官爲義が子供也・阿波・讃岐の者共・彼等二人を・大將として・ふくらの湊に・城郭構て楯籠る・能登殿此由を聞給て・小船五十餘艘にとりのり・淡路國におし渡り・ふくらの湊におし寄て・散々に責られければ・淡路の冠者は・痛手負て・生捕にこそ・せられけれ・是を始として・阿波・讃岐の者共・五十餘人が・頸捕て・一谷にぞ・參られける・又淡路國の住人に・天野六郎忠景・是も源氏に志ありければ・小船五艘に取乘・河尻をさして・渡りけるを・能登殿此由を・聞給て・西の宮の奥にて・寄合・天野六郎が舟を・中に取籠て・さん〳〵に責られければ・能登殿に・手痛責られて・かなはじとや思ひけん・和泉國に・おし渡り・ふけいた川にぞ・着にける・又紀伊國の住人に・園邊の兵衞忠安・是も源氏に志ありければ・家子郎等・六十餘人を・引具して・和泉國に打越・安摩の六郎と一に成て・吹井田川に・城郭構て・楯籠る・能登殿此由を・聞給ひて・和泉國におし渡り・吹井田川に・おしよせて・散々に責られければ・安摩の六郎・能登殿に・手痛責られて・かなはじとや思ひけん・雜人原に・防がせ・我身は・夜に入て・京へ上り・源氏と一にぞ・成にける・能登殿・あまの六郎をば・討洩されたりけれ共・防所の者共・百餘人が・頸とつて・一谷へぞ・參らせられける・又伊豫國の住人に・河野の四郎通信・五百餘騎にて・謀叛・おこすと・聞えしかば・能登殿・此由を・聞給ひて・讃岐國に・おし渡り・伊豫國に越給ふ・河野此由を・聞て・小船百餘艘に取乘・安藝國に・おし渡り・母かたの伯父・沼田の次郎と・ひとつに成て・沼田の城に・楯籠る・能登殿・此よし聞給ひて・備後國に・おし渡り・蓑島に着給ふ・次の日・安藝國に・うち越・沼田の城におしよせて・散々に責られければ・沼田の次郎・能登殿に・手痛責られて・かなはじとやおもひけん・弓をはづし・甲をぬいで・降人にこそ・成にけれ・河野五十餘騎に・うちなされ・沼田なはてに遁て・落ける所を・能登殿の・乳人子に・平八兵衞遠重・貳百餘騎にて・追かけたり・河野とつて返し・散々に戰ひ・主從五騎に成て・落ける所を・平八兵衞が子に・平八太郎遠景・五十餘騎にて・追懸たり・河野とつて返し・散々に戰ひ・主從二騎に成て・落ける所を・平八太郎が・家子に・安倍の七郎共成・たゞ一騎にて・追かけたり・河野が郎等とつて返し・安倍の七郎と・引組で・どうとおつ・河野とつて返し・まづ上なる・安倍の七郎が・頸かき切てなげのけ・下なる郎等・とつて引たて・肩に引かけ・浦へつつと出・又舟に取乘て・九國をさしてぞ・落行ける・能登殿

河野をば・討もらされけれ共・防所の家子郎等・武百餘人が頸とつて・一谷へぞ・參らせられける・去程に・九國の住人・臼杵の次郎維高・尾形の三郎維義・河野の四郎通信・三人一になつて・都合其勢・一萬餘騎・千餘艘の舟に・取乘・備前まで・責上り・今木が城に・楯籠る・能登殿・此由を聞給ひて・今度は・一谷へ・御勢を・申させ給ひ・都合其勢・三千餘騎・備前國におし渡り・今木が城におしよせて・時をどつとぞ作りける・城の內には・寄手小勢と・見てんげれば・城戸を開て切て出・散々に戰ひけれ共・能登殿・是を事共し給はず・夜日三日に・散々に責められければ・今木が城も・破れにけり・臼杵の次郎維高・尾形の三郎維義は・九國をさしてぞ・落行ける・河野の四郎通信は・又舟に取乘・四國をさしてぞ落行ける・能登殿・大將共をば・討洩されたりけれ共・防所の兵・五百餘人が頸取て・一谷へぞ・歸られける・おほい殿・今度・能登殿の・所々の高名を・大きに感じ給ひけり・去程に平家の人々は・一谷におはしけるが・それより都も・程近かりければ・たよりの文を通して・互に慰みあはれけるが・中にも・二位の僧都專親は・梶井の宮の・御同宿にて・おはしけるが・度々申されけるに・或時の御返事に・都もいまだおだしからずなんど・あそばされて・奥には・一首の歌をぞ・あそばされたる

人しれずそなたをおもふこゝろをばかたぶく月にたぐえてぞやる・

同き正月廿九日に・都には・範頼・義經を・院の御所へ召れて・平家追討の爲に・西國へ發向すべきよしを・仰下さる・おの〳〵畏つて承り・院の御所をまかりいづ・去程に福原には・二月四日は・入道相國の・忌日とて・平家の一門・一所にさし集ひ・かたのごとくの佛事をぞ・とげられける・朝夕の・軍だちに・過行月日は・しらね共・去年は・今年に・めぐり(イめぐり)きて・憂りし春にも・成にけり・世の世ならましかば・起立塔婆の企・供佛施僧の營も・あるべけれ共・今は何事の沙汰にも・およばず・たゞ男女の・君達・さしつどひ・なくより外の・事ぞなき・同き五日の日・福原には・除目行はれて・大外記師直が子・周防守師澄・大外記になさる・兵部の少輔政明・藏人になつて・藏人少輔とぞ・申ける・其後・大臣殿・門脇の・平中納言敎盛卿の許へ・使者を立て・今度・能登殿の・所々の高名によつて・正二位の大納言に・あがり給ふべきよしを・宣ひつかはされたりければ・敎盛の御返事には

今日までもあればあるかの我身かは・夢のうちにも・夢を見よとや

とて・終になり給はず・むかし・將門が・下總の國・相馬の郡に・都をたて・百官をなしたりしには・曆の博士ぞ・なかりける・されば・是はそれには・似べからず・主上都を・出させ給ふとは申せ共・神器寶劍・內侍所・三種の神器を・帶してましませば・除目行はるゝ事も御僻事ならずとぞ・人申ける

三草の夜討

去程に・源氏の方には・同き二月四日の日・軍有べしと・觸られたりけれ共・二月四日は・入道相國の・忌日と聞て・佛事さまたげんも・つみ深かるべし・五日は・西ふさがり・六日は・道虚日・七日の日の・卯の刻に・一谷生田の森・東西の城戸口にて・源平互に矢合とぞ・定てんげる・され共四日は・吉日なれば・門出ばかりを・せよやとて・源氏六萬餘騎を・大手搦手二手に・わけてぞ・むかはれける・まづ大手の大將軍・蒲の御曹司範頼に・相隨ふ人々には・武田の太郎信義・かゝみの次郎遠光・其子の小次郎長清・一條の二郎忠頼・坂垣の三郎兼信・井澤の五郎信光・逸見の冠者有義・安田の三郎義貞・山名の三郎義行・侍大將には・畠山の庄司次郎重忠・舍弟長野の三郎重清・同き氏・河越の太郎重頼・嫡子の・源太景季・次男平次景高・三郎景家・小山の小四郎友正・長沼の五郎宗政・結城の七郎遠光・佐貫の四郎大夫廣綱・小野寺の禪師太郎通綱・庄の三郎忠家・同き四郎高家・河原太郎高直・同き二郎守直・勅使河原の五三郎有直・鹽谷の五郎維廣・佐々木三郎守綱・同き四郎高綱・弟の五郎義清・中村の太郎時綱・其子の小四郎有綱・推名の小四郎有種・江馬の小四郎義時・曾我の太郎祐信・江戸の四郎信資・久下の次郎重光・小代の八郎廣綱・玉井の四郎重綱を・先として都合其勢・五萬餘騎・壽永三年・二月四日の・寅卯の刻に・京を立て・其日の申酉の刻には・攝津國・昆陽野に・陣をぞ取たりける・搦手の大將軍・九郎御曹司義經に・相隨ふ人々には・田代の冠者信綱・大内の太郎維義・山名の冠者敎義・侍大將には・土肥の次郎實平・嫡子の彌太郎遠平・稻毛の三郎重成・榛谷の四郎重友・森の五郎重行・久下の權の頭直光・天名の十郎直恒・佐原の十郎義連・金子の十郎家忠・弟の與市親敎・岡部の六彌太忠澄・猪俣の小平六敎綱・熊谷の次郎直實・嫡子の小次郎直家・平山の武者所季重・小澤の次郎廣行・大河津の太郎義行・原の三郎清益・渡柳の彌五郎清忠・多々良の五郎時治・其子の四郎光治・ひちやの三郎高助・弟の五郎高光・成田の五郎景重・別府小太郎清重・御曹司の手郎等には・奥州の佐藤三郎次信・同き四郎忠信・片岡の太郎親經・源八廣綱・伊勢の三郎義盛・武藏坊辨慶を・先として・都合其勢・一萬餘騎・同き日の同じ時に・京を立て・二日路を・一日にかけて・丹波と・播磨の・堺なる・三草の山の東の山口・小野原に陣をぞとつたりける・平家の方にも・此由を聞て・さらばまづ・是を防やとて・大將軍には・小松の新三位の中將資盛・新少將有盛・丹後の侍從忠房・備中の守師盛・侍大將には・越中の前司盛俊・次郎兵衞盛嗣・上總の五郎兵衞忠光を・先として・都合其勢・三千餘騎・三草の山の・西の山口に・おしよせて・陣をぞ取たりける・源平互に・三里の山をへだてゝさゝへたり・かゝりける處に・其日の夜に入て・九郎御曹司義經・土肥の次郎をめして・平家は三千餘騎にて・西の山口をかためたんなるぞ・今夜夜討にやすべき・又あすの軍にてもやあるべきと・宣ふ處に・爰に伊豆國の・住人・田代の冠者信綱・すゝみ出て申されけ

るは・敵は三千餘騎・味方は壹萬餘騎・御勢もはるかにまさりたり・畫軍にては・平家の大勢重なつて・いよ〳〵味方の御大事なるべし・今夜夜討よかんぬと覺候・いかに土肥殿・いしうも申させ給ひたる・田代殿かな・實平も隨分・かうこそ申たう候ひつれ・はや〳〵・打立せ給へとて・二日路を・一日に打て・馬も人も・責疲れたりけれ共・又馬の腹帶をかため・甲の緒をしめてぞ・うつたゝれける・抑此田代の冠者と申は・伊豆の先の國司・中納言賴綱の朝臣の子なりけり・伊豆國の住人・狩野の介光茂が娘に・相具して・まうけられたりしを・母方の祖父に・あづけられてぞ・弓矢とりとはなされたる・其先祖をたづぬるに・後三條の院の・第三の王子・貴仁の親王には・五代の末成けり・俗姓もよかりけるうへ・弓矢をとつても・ゆゝしかりけり・されば石橋の合戰の時も・一方打やぶつて・はがねを・あらはされし人ぞかし・然るを今度・鎌倉殿・九郎御曹司義經・又土肥の二郎をめして・例の大續松はいかにと・は・添られたりかゝりける處に・九郎御曹司義經・又土肥の二郎をめして・例の大續松はいかにと・宣へば・さる事候とて・楯をわつて・たい松にし・小野原の・在家に火をぞかけたりける・是を始として・野にも山にも・草にも木にも・付たりければ・晝には少も・たがはず・平家は・是をば夢にも知すして・軍に馬・ねぶれば・ゆゝしき大事ぞ・今夜はよくねて・あすの軍をせよやとて・或は・簸をといて枕とし・或は甲をふせて枕とし・前後もしらずぞ・打とけたる・その夜の子刻ばかりに・うへの山より・時をどつと・つくつて・ばつと落す・平家はおもひもかけぬ・ときの聲に驚て・馬よ・

鞍よ・太刀よ・かたなよ・なんど・ひしめきける・眞中を・源氏一萬餘騎・かけ割てこそ・通りけれ・平家の方の兵共・五百餘人ぞ・討れにける・去程に・丹後のかうの殿は・播磨の・高砂の浦より・御舟にめして・讃岐の八島へ・渡らせおはしまし候ひぬ・備中の守の殿計こそ・一谷へ・歸らせ給ひて・おほい殿に・此由申させ給ひたりければ・大臣殿・安藝の右馬の丞をもつて・今度山の手の破て・候に・面々むかはるべう候と・宣ひつかはされたりけれ共・各々辭し申されけり・おほい殿・又能登殿の許へ・使者をたて・今度山の手やぶれて候に・面むかはるべう候と申候へ共・各々辭せられ候・今度も又・能登殿・むかはるべう候と・宣ひつかはされたりければ・能登殿の御返事には・軍のならひ・我が身獨の大事と・思ひきつたるだに・あはひあしければ・敵に後を・見するならひあり・ましてや左樣に・豫より・馬の足ぎら(イ足立)の・よからん方へはむかはむ・あしからん方へは・むかはじなんど・候ひては・軍に勝事は・一度も候まじ・たゞ幾度も・こはからむずる方へは・敎經をさしむけられ候へ・一方打破て・見參にいらうずる候とぞ・宣ひける・使歸て・此由申たりければ・大臣殿斜ならず・よろこび給て・さらば手共を向よやとて・新中納言知盛・本三位の中將重衡・二人大將軍にて・都合其勢・五百餘騎・大手生田の森へぞ・むかはれける・薩摩守忠敎・但馬守經政・若狹守經俊・三人大將軍にて・都合其勢・四萬餘騎・一谷の・西の城戸へぞ・むかはれける・越前の三位通盛・能登守敎盛・二人大將軍にて・都合其勢・一萬餘騎・

一谷の・後鵯越の峠へ・搦手にこそ・むかはれけれ・去程に・越前の三位通盛は・能登殿のかり屋形へ・北の方をむかへて・こしかた行末の事共を・語り合て・互に・戀あはれける處に・能登殿・三位の方へ・使者をたてゝ・爰はこはき所とて・教經を案内者にさしむけられて候が・誠にこはかるべし・上の山より・敵がばつと・落したらば・弓を持たりとも・矢をはげまうけては・かなふまじ・矢をはげ候とも・ひきまうけては・かなふまじ・さやうに打とけさせ給ては・犬死せさせ・おはしまし候なんず・はや〳〵・うつたゝせ給へと・宣ひつかはされたりければ・三位殿は・北方をば・船へ送り・奉つてやがて・物の具してぞ・打立れける・同き五日の日の・夜に入て・雀の松原・御影の松・昆陽野邊を・見渡せば・源氏てん手に・とは火をたく・晴たる空の星のごとし・平家も・むかひ火たけやとて・形のごとくの・陣の儀をぞ・たいたりける・深行まゝに・是をみれば・河邊の螢に・異ならず

鵯越

同き六日の日の・まんだ朝・九郎御曹司義經は・一萬餘騎の勢を・二手にこそ・わかたれけれ・先土肥の次郎實平に・七千餘騎を差副て・播磨路の・波打ぎはより・一谷の西の城戸口へ・まつさきにこそ・さしむけられけれ・我身は三千餘騎の勢にて・一谷の後・鵯越の峠に・打のぞんで・見給ける

に・輒落すべし共・見えざりけり・兵ども・こはいかに・是は聞ゆる・惡所にてあんなるものを・いかゞはせんと・議する處に・爰に武藏國の住人・平山の武者所季重・進出て申けるは・此山の案内をば・季重こそ・よくしつて候へと・申たりければ・御曹司・御邊は・東國武藏國にて・生そだちたる人の・けふ始てむかふ・西國の・山の案内は・まことしからずと宣へば・平山重て申けるは・こは御誤とも覺候はぬ物かな・吉野泊瀬の花紅葉をば・見ね共歌人がしり・敵の籠りたる・城の後の山の案内をば・剛の者が・しり候と申たりければ・御曹司これ・傍若無人なりとてぞ・わらはれける・同國の住人・別府の小太郎清重・生年十八歳に成けるが・進出て申けるは・親の入道の・をしへ候ひしは・山越の狩をもせよ・又敵にもおそはれよ・深山に迷ひたらんずる時は・老馬に手綱むすんで打かけ・大勢が・まつさきに・追立てゆけ・かならず道へ・出るとこそ・をしへ候ひしかと申たりければ・御曹司・是また・やさしうも・申たる物かな・雪は野原を・うづめ共・老たる馬ぞ・道はしるといふ事ありとて・白蘆毛なる・老馬二疋に・手綱むすんで打かけ・大勢がまつさきに・追立て・いまだしらぬ深山へこそ・わけ入けれ・ころは衣更着・初の事なれば・みねの白雪・村ぎえて・花かと見ゆる所もあり・谷の鶯・おとづれて・霞に迷ふ所もあり・上れば・白雲(ィ雪)皚々として・そびえ下れば・青山・峨々として・岸高し・松の雪だに・消やらで・苔のほそ道・かすか也・嵐にたぐふ・折々は・梅花共又・いつつべし・山路に日暮ぬれば・大勢みな・山中におりゐて・陣をぞとつたりける・かゝりける

處に・武藏坊辨慶・其邊なる所より・老翁を一人・尋出して參りたり・御曹司あれは・いかにと宣へば・是は此山の・年比の獵師にて候と申す・御曹司扨は此山の案内をば・能しつたるらん・是より平家の籠りたる・一谷の後・鵯越の峠を・落さばやと・思ふは・いかゞ有べきと宣へば・それ思ひもよらぬ御事候・三十丈の谷・十五丈岩崎なんど申は・偏に屏風を・欹たるがごとし・其外おとし穴ども・ほつて相待・參らせ候なれば・歩にてだにも・ゆゝしき・御大事・まして・御馬にては・思ひもよらぬ・御事候・御曹司・鹿はあるか・鹿はいくらも候・世間あたゝかになり候へば・草のふかみに・ふさんとて・播磨の鹿は・丹波へこえ・世中寒なり候へば・雪のあさりにはまんとて・丹波の鹿は・播磨の・印南野へ・出候とぞ申ける・御曹司・すは〳〵・よかんめるは・鹿の通はむ所・などか馬のかよはざるべき・やうやある・さらば汝やがて・案内者せよやと宣へば・是は年老て・いかにもかなひがたし・御曹司・子はあるか・さん候・さらばそれに・案内者せさせよと・宣へば・承つて・熊王丸とて・生年十六歳になりけるを・御曹司へ奉る・御曹司・斜ならず・よろこび給ひて・よき鎧きせ・能馬にのせて・やがて・案内者にこそ・召具せられけれ・其後・御曹司・鎌倉殿に・御中たがはせ給て・奥州ひらいづみにて・討れさせ給ひし・御時までも・御供申て・討死したりし・鷲尾の四郎義久とは・是なりけり・父をば・鷲尾の庄司武久とぞ申ける・かゝりける處に・武藏國の住人・熊谷の次郎直實は・同き六日の日の夜に入て・嫡子の小次郎直家を・ようでいひけるは・あすはきこゆる・

惡所を落さんずれば・打こみの軍にて・誰さきと言事も有まじ・いざや今夜・よもすがら・播磨路の波打ぎはにうつて出・一谷の・西の城戸口へ・まつさきに・押寄ばやと思ふは・いかゞ有べきと・言ければ・小次郎・此儀尤・ゆゝしう候ひなんず・さらば・やがて打立せ・給へとぞ申ける・熊谷・平山も・打こみの・軍をば・このまぬものなれば・行て見よとて・郎等を・つかはして・見せけるに・案のごとく・平山も・物具して・打立けるが・今度一谷に・寄たらんには・人をばしるべからず・季重においては・ひつと引も・ひくまじき物を・引まじき物をと・獨り言してぞ・出立ける・郎等が馬に・物かふとて・につくい馬の・ながぐらひかなとて・うちければ・平山聞て・かうなせそ・鎌倉殿の・御前を・まかり出る時・今度西國に・まかりむかうて候はゞ・定て討死・仕るべき由を・申きつて・出たる也・されば・其馬の・名殘も・今夜ばかりぞと・言を聞て・郎等走り歸り・此由かくと・語りければ・熊谷が・其夜の・裝束には・かちの直垂に・黒皮威の鎧を着・しろき母衣かけて・權太栗毛にこそ・乘たりけれ・嫡子の小次郎直家は・おもだかを・一入すつたる直垂に・ひをどしの鎧着・せいろうと名付たる・しら月毛にこそ・乘たりけれ・旗指は・黄ちんの直垂に・小櫻を・黄に返したる・鎧をき・しら蘆毛にこそ・乘たりけれ・あすは落さんずる・惡所をば・弓手になし・妻手について・打程に・年比人も通はぬ・田井の畑といふ・古道に懸て・夜もすがら・播磨路の・波打ぎはにぞ・打出たる・土肥の次郎實平が・七千餘騎にて・鹽屋の濱といふ

所に・控て・夜の明るを・待ける所をも・まぎれて打通り・一谷の西の城戸口へ・まつさきにこそ・押寄たれ・いまだ子の刻ばかりの事なりければ・城の内には・火かすかに見えて・しづまり返て・音もせず・餘りに・夜ふかに・寄たれば・後につゞく勢もなく・たま〳〵事とふ物とては・渚によする・浪のおと・洲崎の千鳥の・聲ばかり

熊谷平山が一二の懸

熊谷・いかに小次郎よ・剛の者は・我一人とおもふべからず・此邊にも・さき懸ばやと思ふ者の・いくらも控て・夜の明るを待らんぞ・いざ名乘らんとて・掻楯のきはに・馬の鼻・つかする程におしよせ・鐙踏張・つつたちあがり・大音聲をあげて・是は武藏國の住人・熊谷の次郎直實・嫡子の小次郎直家・今度一谷の・先陣ぞやとぞ名乘たる・熊谷今は・平山も近付ぬらん物を・なうれ小次郎と・言もあへず・後をかへり見ければ・武者こそ二騎出來れ・あれはたそ・平山殿か季重よ・熊谷殿か直實よ・いつよりぞ・宵よりよとぞ答ける・季重もとうに寄べかりつるを・成田五郎に・たばかられて・今まで・遲々してさうつる也・成田が道すがら・言やうぞ・いかに平山殿・あまりにさきかけばやりな・し給ひそ・軍の先を懸ると言は・味方の勢を・後陣に近づけて・我高名をも・人の不覺をも・互に見えたればこそ・せんにてはあれ・深入して・討れて何の・せんぞと言あひだ・季重・げにもとおもひ・小坂のすこし・有つるに・打あげて・馬をくだりかしらに・立て・味方の勢を・あひ待處に・成田もともに・いそがはしげにて・いで來り・いかさまにも・是に季重に・物いはんするかと思ひたれば・さはなくて・季重が方を・すげなげに見なして・打過むとする間・どこをもつて・わ君は・季重をば・謀ぞと・言捨て・三四段・さき立たる・成田を・五段ばかり・引よけて・もみにもうで・寄たてれば・今は其者共・十四五町ぞ・さがりたるらん・後影をだに・よにし見たりし物をと・語つて・熊谷平山彼是・五騎に成てぞ扣たる・熊谷・以前に・名乘つれ共・又平山があるにとおもひて・かいたてのきはに・馬のはなつかする程・おしよせ・鐙踏張・つつ立あがり・大音聲をあげて・是は武藏國の住人・熊谷の次郎直實・嫡子の小次郎直家・今度一谷の・先陣ぞやとぞ名乘たる・城中には・此由を聞て・いざ宵より・なのる・熊谷親子・ひつさげて・こんとて・進む兵には・たれ〳〵ぞ・越中の前司盛俊・次郎兵衛盛嗣・上總の五郎兵衛忠光・後藤内貞綱・眞鍋の四郎を・先として・宗徒の兵廿三騎・城戸をひらかせて・切て出・散々にこそ戰ひけれ・平山が其夜の裝束には・重目結の直垂に・赤皮威の鎧を着・薄紅の縅かけて・千葉介の・旗指は・二引兩の直垂に・洗皮の鎧を着・宿月毛にこそ・乘たりけれ・平山もさらば・なのらばやと・鐙ふんばり・つつ立あがり・大音聲をあげて・是は去ぬる・保元平治・兩度の・合戰に打勝て・高名しきはめたる・武藏國の住人・平山の武者所季重・ありとはしらずやと・聞つたりければ・城の内に

は・此由を聞て・こは熊谷ばかりかと思ひたれば・又平山と名乗は・手こはしとやおもひけん・城の内へ・ばつと引退き・敵を外様になしてぞ・防ける・熊谷親子は・太刀の切先を・眞甲に當て・いよいよ前へは進めども・後へはひつと足もひかざりけり・熊谷は馬を射させて・おりたつてぞ戰ひける・嫡子の小次郎直家も・妻手の小肘を・射させ・馬よりおり・父とならうでぞ立たりける・熊谷いかに・小次郎よ・手負たるか・さん候・矢ぬいてたべと・言ければ・不覺人かな・しばしこらへよ・甲のしころを・つねにうちふれ・てへん射さすな・鎧づきを・つねにせよ・矢にうらかゝすなとぞ・をしへける・熊谷日比・小次郎をば・あらき風にも・當じとこそ思ひしに・いつしかけふ・軍場にては・たゞしねや・しねとぞ・いさめける・其後・熊谷又・大音聲をあげて・去年の冬・備中の水島・播磨の室山・二ヶ度の軍に・うちかつて・高名しきはめたると・のゝしるなる・越中の前司盛俊・次郎兵衛盛嗣・上總の惡七兵衛景清は・なきか・能登殿はおはせぬか・高名をも・不覺をも・人によつてぞする・人ごとに・あうての・高名をば・えせじ物を・熊谷にくめや・平山に落あへやと・匂りけれ共・こたふる者もなかりけり・熊谷は・乘替に乘てぞ・戰ひける・中にも・越中の二郎兵衛盛嗣は・紺村濃の直垂に・緋威の鎧を着・鍬形うつたる・五枚甲の緒をしめ・魏作の太刀を帶・廿四指たる・大中黑の矢負・塗籠籐の弓持て・連錢蘆毛なる馬に・金覆輪の鞍置て・乘たりけるが・城の内へ引ている・熊谷いかに・あれは越中の次郎兵衛とこそみれ・まさなうも敵に・後を見する物かな・返せや・かへせと言けれ共・いゝやさもさうずとて・引て入・上總の五郎兵衛忠光・惡七兵衛景清・くまがへにくまむ・平山に落あはんと・匂けるを・越中の次郎兵衛・君の御大事・是にかぎらじ・あれほどの・ふて者に・あうてくんで討れて・何の詮ぞといふ・間五郎兵衛も・惡七兵衛も・組ざりけり・城の内より・雨のふるやうに・射出しける矢なりけれ共・源氏の勢はすくなく・矢にも當らず・かけまはる・其上城の内には・馬に乘たるはすくなく・歩立は多かりけり・平家の・人々の乘たる馬は・飼事は稀也・乘事は繁かりけり・船に久敷立置たれば・みなすくんでえりきつたるがごとく也・熊谷平山が・乘たる馬は・飼にかうたる大の馬・一鞭あてば・馬も人も・みな蹴倒されぬべかりければ・熊谷にくめや・平山にくめや・組と・匂りけれ共・よつくくむ者更になし・平山は・旗指をうたせて・大きに腹を立・城の内に懸入・分捕してこそ・出にけれ・其間に・熊谷も・馬の息を休め・是も城の内にかけいり・分捕餘多してこそ・出にけれ・熊谷さきに寄つれ共・城戸を開かねば懸入ず・平山後によせたれども・城戸をひらけばかけいりけり・扨こそ熊谷・平山が・一陣・二陣をあらそひけれ・是を始として・成田五郎景重・卅騎ばかりにて出來り・土肥の次郎實平・七千餘騎にて寄來る・白旗・赤旗あひまじはつて・火出る程にぞ戰ける・一谷の軍は・盛り也けれども・大手生田の森の軍は・いまだはじまらず

梶原が二度の懸

去程に・武藏國の住人・河原太郎高直・同き次郎守直とて・今度大手・生田の森に・候ひけるが・同き二月六日の日の・夜に入て・河原太郎・弟の次郎をようで・いひけるは・大名こそ・われと手をおろさゃれ共・郎等の高名によつて・勳功の賞にもあづかれ・我等がやうに・身不肖なる者は・我と手をおろさでは・いかにもかなふまじ・されば卯の刻の矢合とは・定られたりしかども・待が餘りに・久しければ・高直は・一人なりとも・城の中にかけ入・討死せんとおもふなり・御邊は是より・古郷に下て・妻子共に・此由かくと語べしと・いひければ・守直聞て・涙を流し・こは口惜き事をも・宣ふものかな・たゃ兄弟候者が・兄を合戰の場に見捨て・一人ふる里へ下つたらば・何程の事か候べき・是も一所にて・討死候と申・河原太郎・さらばとて・數の形見をば・下人の男に・古郷へ下し・唯兄弟馬をもはなれ・弓杖をつき・生田の森の・逆茂木を・上りこえて・城中へぞ入たりける・未丑の刻ばかりの事なりければ・城の中には・火幽に見えて・しづまりかへつて・音もせず・河原太郎・弓杖をつき・大音聲をあげて・是は武藏國の住人・私の黨に・河原太郎・私市の高直・同き次郎守直と・今度大手生田の森の・先陣ぞやとぞ・名乘たる・城の中には・此由を聞て・あつばれ・東國の兵共ほど・たけうやさしかりけるものあらじ・此大勢の中へ・たんだ二人打入たれば・何程の事か・あるべき・たんだおいて・愛せよやとて・あひしらふ者こそ・なかりけれ・河原太郎・矢把といて・おしくつろげ・さしつめ・引つめ・散々に射けるに・城の中の兵・多く射殺さる・城の中には・是を見て・いやゝ〳〵これらこそ愛しにくけれ・其儀ならば・あますな・もらすな・討捕とて・大勢雲霞のごとく・亂れ出る・其中に・備中國の住人・眞鍋の四郎・五郎とて・兄弟あり・兄の四郎をば・一谷におかれたり・弟の五郎は・生田の森に候ひけるが・三人ばりに・十三束の・中さしとつて・うちつがひ・よつ引て・ひやうと射る・折節河原が・ふりあふのいて・立たりける・内甲を・したゝかに・射させて・ひるむ所を・弟の次郎・つつとより・兄を肩にひつかけて・逆茂木をのぼり・越むとしける所を・眞鍋が二の矢に・膝のふしを健に・射させて・兄弟枕をならべて・どうとふす・其後・眞鍋が郎等・落合て・河原兄弟が・頸を取て・大將軍に見せ奉る・新中納言知盛・あつばれ剛の者の手本哉・一人當千とも・此等をこそ・言ふべけれ・あつたら物・今しばしいけて見てとぞ・をしまれける・其後河原が下人の男共・味方の勢の中に走入て・河原殿こそ・唯今城の中へ・かけいらせ給ひて・うたれさせ・おはしまして・候へと・聲々に・よばはつたりければ・梶原此由を聞て・ぢたい是は・私の黨の・殿原の不覺にてこそ・河原兄弟をば・うたせたれ・其儀ならば・関作れやとて・梶原が手勢・五百餘騎・関を作りければ・味方の五万餘騎も・関をつくる・城の中の・五萬餘騎もおなじう・関の聲をぞ・合たる・互に十萬餘騎が・関の聲には・天も響き・大地もゆるぐばかりなり・互の関の聲も・

しづまりしかば・梶原が次男・平次景高・父には角ともいはずして・城の中へ・をめいてかく・梶原使者を立て・味方の勢・一騎もつゞかざらんに・さき懸たらむずる者には・勳功有まじきぞとの・大將軍よりの・御諚にてあるぞと・いはせければ・平次しばらくひかへて

武士のとりつたへたるあづさ弓・ひいてはかへす・物ならばこそ

と・申させ給へと・言捨て・又をめいてかく・梶原さるにても・平次うたすな・景高うたすな・すゝめや・者共・つゞけ兵とて・梶原が・手勢・五百餘騎・城の内へ・をめいてかく・城の中には・是を見て・梶原は・東國にきこえたる者ぞ・あますなもらすな・討捕とて・大勢がまん中に・取籠たり・され共・梶原事共せず・西より東へ・一わたり・北より南へ・一渡り・取てはかへし・わつては通り・散々に戰ひ・一方打破つて・出たれば・五百餘騎とは・見えしかども・五十騎ばかりにぞ・成にける・梶原こはいかに・源太が見えぬはと言ければ・郎等の申けるは・さ候へばこそ・源太殿は・北の山ぎはに・懸入せ給ひて・敵八騎が中に・取籠られさせ給ひて・候ひつるが・今は定て・討れてぞ・ましまし候らんと・申ければ・梶原聞て・涙を流し・景時軍して・世にあらんとおもふも・子供を思ふ爲なり・源太をうたせて・景時・世にありても・何にかはせん・さるにても・今一度・源太が行衞を・尋むとて・又城の中へ・懸いらんとしけるに・大勢雲霞のごとくに・亂あひて・輙懸入べきやうも・なかりければ・梶原・大勢の方に・かけ向ひ・鐙踏張・つつ立あがり・大音聲をあげて・是は昔・八幡殿の御時・出羽國・千福金澤の城を・責させ給ひし時・十六歳にて・先をかけ・弓手の眼を・射させ・其矢を・ぬかで・をりかけ・當の矢を射て・剛の座式に・つきたりし・鎌倉の權五郎景政には・五代の末葉・相模國の住人・梶原平三景時・ありとはしらずやと・匐たりければ・敵も名にや・恐けん・はつとあけてぞ・とほしける・其後梶原又・城の中へかけ入・かしこ爰を・かけ廻り〳〵・見けるに・實も源太は・北の山ぎはに懸入・敵八騎が中に取籠られて・甲をもはや・打落され・大わらはに成て・二丈計そびえたる・岩をうしろにあて・爰を最後と・戰ひける・梶原いかに源太・景時爰にあり・相構て・死ぬるとも・敵によわげ見すなと・父に詞を懸られて・源太いよ〳〵かなはへて・まつしぐらにこそ・戰ひけれ・梶原さるにても・源太うたすな・景季うたすな・すゝめや者共・つゞけ兵とて・梶原が次男・平次景高・三郎景家・親子四人して・八騎の敵を・討捕弓矢とりは・懸るも引も・折にこそよれ・いざうれ源太とて・かい具してこそ・出にけれ・それよりしてぞ・梶原が・二度のかけとぞ申ける

あひ

是を始として・丹・猪俣・秩父・河越・村山黨の兵ども・名乘かへ〳〵・入替々々・責戰ふ・源平互に・関つくる聲・海をひゞかし・山をうごかす・馬のかけちがふ音は・いかづちのごとし・太刀長

刀の・ひらめく影は・稻妻に異ならず・遠きをば・弓にて射・近きをば・太刀にてきる・熊手にかけて・取もあり・とらるゝもあり・ひつくんで・さしちがへ・死ぬる者もありけり・或は取ておさへ・頸をうるも有・とらるゝもあり・或は痛手負たるを・肩にひつかけ・傍へ引しりぞく・者もあり・いまだ薄手負て・爰を最後と・戰ふ者もありけり・源平兩家の・兵共・いづれ隙ありとも・見えざりけり

坂落し

爰に・武藏國の住人・江戸の四郎信資は・城の內に・味方ありともしらずして・遠矢をよつ引て・射けるに・母方の伯父・藤田の三郎太夫行安が・深入して・戰ひける・內甲を・したゝかに射させて・ひるむ所を・城の內より・阿波の民部重義が弟・櫻場の介義遠・落合て・藤田が頸をば・取てんげり・懸りける處に・一谷・生田の森・東西の・城戶口計にては・いかにもかなふべうも・見えざりけるに・九郎御曹司義經は・三千餘騎の勢にて・同き二月七日の日の・卯の刻に・平家の籠りて・おはしける・一谷の後・鵯越の峠に・打のぞんで・見給ひけるに・輙落すべし共・見えざりけり・勢にや恐たりけむ・雄鹿二・妻鹿一つ・平家の陣へぞ・落たりける・平家の方には・是を見て・こはいかに・里近からん鹿だにも・此大勢に恐ては・山深くこそ・入べきに・山より鹿の・落たる事こそ・あやしけれ・

いかさまにも・是は・搦手の勢の・まはるにこそとて・騒ぎの・しるこなのの・武知の武者所・清敎・それは何物にてもあれ・敵の方より・來らんする物を・のがすべきやうなしとて・弓おしはり・矢かきおひ・馬引よせ打乘て・先まつさきに・走りける・雄鹿のまんなか・射てぞ・とゞめける・そこしも惡所なりければ・手綱を・ひらくに及ばず・弓のもとをや・こしたりけむ・妻手の衝・射削て・次なる鹿も・とゞめけり・めかをば・射てぞ・通しける・心ならず・狩したり・鹿めせや・殿原と・言ければ・越中の前司盛俊・此由を聞て・詮なき殿原の・唯今の鹿の・射やうかな・矢だうなにとぞ申ける・御曹司は・爰を落さんとし給ひけるが・先はかりごとに・鹿毛なる馬一疋・白蘆毛なる馬一疋・二疋に手綱むすんで・打かけ・大勢が・まつさきに・追落されたりければ・鹿毛なる馬は・いかゞはしたりけむ・あしうとんで・腰をつき損じてんげり・白蘆毛なる馬は・越中の前司盛俊が・屋形の前に・相違もなく・落付て・身ぶるひしてこそ・立たりけれ・平家の侍共・此由を見付て・さきに鹿の落たるだに・あやしきに・又ぬしもなき・鞍おき馬の・二疋まで・落たる事こそ・不思議なれ・いかさまにも・是は搦手の・勢の近附にこそとて・大に騒あはれけり・御曹司此由を・見給ひて・馬は主が乘て心得て・落さば・よからんするぞ・くは〳〵義經は・まづ落すぞとて・手綱かいくり・大勢がまつさきにこそ・落されけれ・三千餘騎の兵共も・此よしを見て・續いて落しけるが・そこしも・小石まじりの・すなごなりければ・流れ落しに・二町ばかり・さら〳〵さつと・

落して・すこしだんなる所に・ゆらへたり・それより・後をかへり見ければ・峯高うして・輒かけあがるべしとも・見えざりけり・それより・下を見渡せば・大磐石に・苔むして・つるべおとしに・十四五丈ぞ落したる・兵ども・こはいかに・是は・聞ゆる・惡所にてあんなる物を・敵にあうてこそ・死たけれ・惡所に落ては・死たからず・こはいかゞはせむと・議する處に・爰に相模國の住人・三浦の・佐原の十郎義連・生年十八歳に・成けるが・鐙踏張・つつ立あがつて申けるは・我等が三浦の方にて・狩せし時は・兎一疋見付・小鳥一つ追立てだに・朝夕かやうの所をこそ・馳ありきしか・思へば是は・三浦の方の・馬場やとて・手綱かいくり・大勢が・まつさきにこそ・落しけれ・三千餘騎の兵共も・是を見て・又續て落しけるが・先陣に落す・兵の・甲の鉢は・後陣に落す・兵の・鎧のはなに・からり〳〵とぞ・あたりける・射向の袖を・ひつちがへ・弓の筈を・取ちがへて・餘りのいぶせさに・目をふさぎ・えい〳〵聲を・忍びにして・越中の前司盛俊が・屋形の前に・相違もなく・落付て・白旗三十流計・一度にばつとさしあげ・関をどつとぞ作りける・三千餘騎が聲なりしか共・山びこ答て・十萬餘騎とぞ・聞えける・爰に信濃國住人・村上の次郎判官代・基國が・手よりも・楯をもつて・續松にし・越中の前司盛俊が・屋形に火をぞ懸たりける・折節・北風はげしくして・屋形々々に・黒煙おしかけたり・平家は必・かたきが射落し・切おとさゝれども・煙にむせび・馬より落て・たふれふす・もしや・たすかると・前の渚におり下る・渚には・扶船共・多かりければ・おもひ〳〵人々に・取乗て・落ゆかばよからんするを・船一艘に・物具武者が・四五百人・千人許取乗て・落ゆかんにぞ・なじかは・よかるべき・渚三町ばかりおし出し・大舟三艘沈んで・人一人もたすからず・大臣殿・此由を見給ひて・然べき人をば・乗る共・次ざまの人をば・のすべからずと・宣へば・承つて・然べき人の・乗むとしけるをば・手をさづけ・力を合て・引のせけり・又次ざまの者の・乗むとしけるをば・太刀長刀にて・舷をぞなながせける・角有べしとは・知ながら・敵にあうては・死なずして・のせじとする船に・乗むとて・或は・腕切落され・或は指薙落され・其身はあけに・成て・渚に倒伏・をめきさけぶ事・斜ならず

越中の前司が最後

能登殿は・一度も・不覺し給はぬ人の・今度山の手・やぶられて・面目なくや・おもはれけむ・うす墨と言・馬に乗り・唯一騎・渚を西へ・落られけるが・播磨の高砂より・御舟にめして・讃岐の八島へ・渡らせ・おはしまし・候ひぬ・御兄越前の三位通盛は・栗毛なる馬に・乗侍にくんだ・瀧口時員計を・召具し・主従二騎・打連て・渚を西と名乗て・主従七騎にて・追懸奉る・三位取て返し・散々に戰ひ・敵三騎切て落し・我身は・木村の源三成綱に・組で・うたれ給ひぬ・中にも越中の前司盛俊は・かちの直垂に・緋威の鎧を着・鹿毛

なる馬に乗・唯一騎落を西へ・落けるが・いづくへゆかば・逃るべきかとて・かしこ爰に・ひかへ〳〵しける所を・爰に武藏國の住人・猪俣の小平六・敎綱と名乘て・あつばれよからん敵がな・今一度組ばやと思ひ・かしこ爰を・かけまはり〳〵見ける處に・爰に越中の前司を見付て・會釋もなく・ひつ組で・どうとおつ・越中の前司は・人目には・三十人が力を・あらはしけるが・內々は・六十人して・あげおろしける舟を・唯一人して・輒あげおろしければ・人六十人が・力とぞ申ける・猪俣も・雄鹿の角の・一二の草かりをば・輒引もぎなんどして・東國には・きこえたる・大力の・剛の者なりけるが・越中の前司に・とつて押られ・物をいはんとするに・息出す・刀をぬかんとすれども・手すくんで・ぬかれざりければ・猪俣こゝろに思ふやう・當時敎綱を・是程まで・手籠にすべき者こそ・おぼえね・いかさまにも是は・平家の方に・さしも鬼神のやうに・聞えたる・越中の前司盛俊・次郎兵衞盛嗣・上總の惡七兵衞景清か・さらずば・能登殿にこそと・思ければ・猪俣息の下にて申けるは・敵をば・そんぢやう其國の・某・たれがしなんど・名乘・なのらせて・討たればこそ・せんにては候へ・但・已前になのつつるはし・聞給ひてんやと・言ければ・越中の前司・實もと思ひ・是はもとは・一門たりしが・身不肖なるに依て・侍と成たる・越中の前司盛俊と言者なり・さて汝は・いかなる者ぞと言ければ・さん候・是は武藏國の住人に・猪俣の小平六・敎綱とて・生年十八歲に罷成・越中の前司・さては・安平に思ひ・すこしおしくつろげ・扨聞ゆる大力とは・和君が事か・さん候・今度の軍のやうを・見候に・源氏かち軍・平家まけ色に見えさせ給ひて候へば・あはれ敎綱が・命を助させおはしまし候へかし・御一門いくたりもおはせよ・今度の敎綱が・軍の勳功に・申かへて・助申さんする物をと・言ければ・越中の前司・きたない和君がいひ事かな・平家今更・源氏たのまんとも思はず・源氏も又・平家にたのまれむとは・よも思ひ給はじとて・又とつておさへて・頸を・かゝんとしければ・猪俣も・さるおそろしき者なりければ・少もさわがず・につこと打わらひ・なうまさなや・降人の頸とるやうや・候といはれて・越中の前司・らひ・田のくろのありけるが・後はごみふかき・沼田の・前は・少干あがつて・畠のやうなる所に・腰うちかけ・足さしおろし・鎧武者が・二人亙に・息ついて・居たりける所へ・人見の四郎・三十騎計にて・出來る・越中の前司・來る敵を・目もはなたず・まばりければ・猪俣あれは・少もくるしう候まじ・敎綱が從兄に・人見の四郎と・申者にて候が・定て敎綱をぞ・尋候らんと言けれども・越中の前司・きたる敵を・なほ目もはなたず・まばりければ・猪俣あつばれ・今一度・くまんする物を・人見近づかば・さりとも・よも落合ぬ事あらじと・おもひて・相待處に・人見も次第に近づいたり・猪俣ちから足をふんで・つつ立あがり・思ひもかけぬ・越中の前司が・鎧の胸板・はくとついて・後なる沼田へ・のけにつきたをす・大の男の・重鎧着たりけるが・蝶のはねを・ひろげたるが・ごとくにて・おきん〳〵と・しける所を・猪俣取ておさへ・腰の刀をぬき・草摺を・引あげ・つかもこぶしも・

とほれ〳〵と・三刀さいて・頸をとる・其後頸をば・太刀のきつさきに・さしつらぬき・たかくさしあげ・大音聲をあげて・此日ごろ・平家のかたに・さしも鬼神のやうに・きこえたる・越中の前司盛俊をば・東國武藏國の住人・猪俣の小平六・敎綱が・かうこそ・討たれやとぞ・名乘ける・源氏の兵ども・此由を聞て　いさみ・勾事・斜ならず

薩摩守の最後

中にも・薩摩守忠敎は・紺地の錦の直垂に・紫末濃の鎧を着・鍬形打たる・甲の緒をしめ・金作の太刀を帶・廿四さいたる切符の矢おひ・重籐の弓持て・鵜毛なる馬に・金覆輪の鞍を置て・打乘・唯一騎落を西へ・落られける所を・武藏國の住人・岡部の六彌太忠澄と名乘て・たゞ一騎にて・追懸奉る・薩摩守とつて返し・是は味方ぞ・あやまちすなとてふりむき給へる・内甲を見ければ・かねくろに・うすげしやうをぞ・し給ひける・六彌太當時・味方にさやうの人をば・見ぬ物をとて・いよ〳〵追懸奉る・薩摩守取て返し・につくいやつが・味方といはゞ・いはせよかしとて・取て引よせ・馬の上にて・壹刀・中にて一刀・落る所を一刀・三刀まで・さゝれけれ共・二刀は・鎧の上にて・とほらず・一刀は・右のほうを・つきつらぬかれたりけれ共・痛手ならねば・取ておさへ・頸をかゝむとし給ひける・六彌太がわらは・おくればせに馳來り・打刀の鞘をはづいて・薩摩守の刀・持給へるかたの・腕をふつと・打落し奉る・薩摩守・今はかなはじとや思はれけむ・やれさらば・そこのけ・西をがまんとて・左の御手にて・六彌太が・鎧の上帶・むんずとつかうで・弓だけばかり・なげ退・光明遍照・十方世界・念佛衆生・攝取不捨と・唱へも果させ給はぬに・六彌太・痛手ならねば・起なほり・薩摩守の・頸をうつ・頸つゝまんとて・直垂をときけるに・簏に結び付られたりける・文をといて見ければ・旅宿花といふ題にて・一首の歌をぞ・かゝれける

行くれて木の下かげを宿とせば・花やこよひのあるじならまし・

平の忠敎と・書れたりしによつてこそ・薩摩守とは・しりてんげれ・其後頸をば・太刀のきつさきに・さしつらぬき・たかくさしあげ・大音聲をあげて・此日比・平家のかたに・さしも聞えさせ給ひたる・薩摩守の殿をば・東國武藏國の住人・岡部六彌太忠澄が・かうこそ・討奉つたれやとぞ・名乘ける・敵も味方も・此由を聞て・あつばれ・薩摩守の殿は・歌道にも・武藝にも・優にやさしき・大將軍にて・おはしつる者をとて・惜まぬ人こそなかりけれ・

中にも・但馬守經政は・佐々木四郎高綱に・くんでうたれ給ひぬ・若狹守經俊は・梶原源太景季に・くんでうたれ給ひぬ・尾張守清貞は・金子の十郎家忠に・組で討れ給ひぬ・中にも・藏人の太夫成盛は・黒き馬にのり・只一騎・渚を西へ・落られける所を・常陸國の住人・ひちやの五郎高光と名乘て・只一騎にて・追懸奉る・成盛とつて返し・馬の足たて・なほすや遲き・おしならべて・むず

と組で・どうと落・ひちやも大力・成盛も・聞ゆるしたゝか人にて・おはしければ・互に上になり・下になり・ころびあふ處に・ある小家の前に・ふる井の候ひけるにころび入て・鎗武者が・二人下へも・落つかず・中にはたと・つまつてぞ・候ひける・ひちやの三郎・弟をうしなうて・五郎はいづくにぞ・〳〵と・呼つたりければ・遙の井の底に・爰にといふ・ひちやさしうつぶいて・見ければ・弟の鎧は・搓縄目敵の鎧は・萌黄匂成ければ・弟がきたる甲のしころを・むんずとつかうて・えいやつというて・引あげければ・成盛も・ひちやが腰に・だきついてぞ・あがられける・やがて成盛をば・取ておさへて・頸をとる・今年は・十六にぞ・なられける

知章の濱軍

今度・大手生田の森の・大將軍には・新中納言知盛・本三位の中將重衡卿・都合其勢・五萬餘騎にて・東にむかひて・戰はれける處に・武藏國の住人・猪俣黨の中より・平家へ使者を立て・中納言に申けるは・君は一とせ・武藏の國司にて・渡らせ給へば・其よしみを以て申候・一谷こそ・はややぶれて候へ・いまだ後をば・御覽せられ候はぬ・やらんと申たりければ・中納言を・始奉つて・各後をかへり見給へば・實も黒けぶり・天にみち〳〵たり・五萬餘騎の兵共も・此由を見て・よろづ心ぼそくやおもひけん・みなちり〳〵にこそ・成にけれ・中にも・本三位の中將・重衡卿は・かちにしろう・黄なる糸をもつて・岩に村千鳥ぬうたる直垂に・紫末濃の鎧を着・八島の大臣殿より・給られたりける・童子鹿毛に・乘給ふ・御乳人子の・後藤兵衛盛長をば・日比の夜目なし・鶴毛にぞのらせける・主從二騎・打連て・渚を西へ・落られけるく・乘べき隙もなかりければ・力及ばず・湊川・かるも河をも・打渡り・こまの林を・弓手になし・蓮の池をば・めてに見て・板屋戸・須磨をも打過て・明石をさしてぞ・落られける・かゝりける處に・武藏國の住人・庄の四郎・高家と名乘て・主從五騎にて・追懸奉る・三位のめされたる・童子鹿毛は・究竟の名馬なりければ・輒追付べしとも・見えざりけり・庄の四郎・かなはじとや・思ひけむ・矢ごろに馳近づき・三人ばりに十三束の・中さしとつてうちつがひ・よつびいてひやうと射る・三位のめされたりける・童子鹿毛が・さうづに矢たちければ　御乳人子の・後藤兵衛盛長・此由を見奉つて・わが馬召れ・參らせなんとや思ひけむ・取て返し・東をさして・落て行・三位いかにやうれ・盛長よ・日比は・さはちぎらざりし物を・其馬參らせよと・宣へども・耳にも・聞入ず・むちをあげて・馳行・三位・今はかなはじとや・思はれけん・海へうちうち入られ・けれども・そこしも・遠淺にて・さうなう・しづむべきやうも・なかりければ・又渚にうちあがり・馬よりおり・上帶きつてのけ・高紐はづし・既に腹をきらんとし給ふ所に・庄の四郎高家・鞭鐙を合て・馳來り・急馬より飛でおり・長刀おつ取なほし・まさなうも・御自害候物かな・たすけ參らせむとて・わが馬にかきのせ奉つて・帶に

て・鞍の前輪に・したゝかにしめ付奉り・我身は・乗替にのつて・味方の勢の中へぞ・入にける・
平家の方に・さしも聞えさせ給ひぬる・本三位の中將殿の・生捕にせられ給ひぬるこそ・口惜けれ・
新中納言知盛は・黃魚綾の直垂に・はじの匂ひの・鎧を着・是も八島の大臣殿より・給はられたりけ
る・井上黒に乘給ふ・御子武藏守知章は・浮織物の直垂に・つま匂ひの鎧を着・黃河原毛にこそ・乘給
ひけれ・御乳人子の・監物太郎賴賢は・ひしたすきの直垂に・肩白の鎧を着・白蘆毛にこそ・乘たり
けれ・主從三騎・打連て・渚を西へ・落られける處に・爰に兒玉黨とおぼしくて・圓扇の旗さゝせた
る・者・十騎計にて・追懸奉る・監物太郎賴賢は・聞ゆる弓の上手なりければ・取て返し・まづ・ま
つさきにすゝんだる・旗指が・頸の骨射て・射落しけり・其後・大將とおぼしき者・中納言にかゝり
奉る・御子武藏守知章・中にへだたり・敵と引くんで・どうとおち・敵の頸・かききつて・おきあが
らんとし給ふ處を・敵がわらは落合て・武藏守の頸をとる・監物太郎落重て・武藏守の御頸・給つた
る・わらはが・頸をも・とつてんげり・其後賴賢も・膝のふしを・したゝかに射させて・たゝれざり
ければ・居ながら・敵三騎切て落し・我身も討死してんげり・其間に・中納言は・究竟の名馬には・
乘り給ひぬ・海のおもて・廿餘町を・およがせて・大臣殿の御船へぞ・參られける・舟に所なくして・
馬立べきやうも・なかりければ・其より馬をば・追返さる・阿波の民部重義・此由を見奉つて・唯今あ
の御馬・敵の物と成候ひなんず・給つて射殺し候はんとて・よつ引て向ひければ・中納言由々それは・
なにの物にも・ならばなれ・只今我を・たすけたらんずる物を・爭か惜なう・射殺べき・にあるべから
ずと宣へば・力及ばず・はげたる矢を・さしはづす・此馬主の名殘を・惜むかとおぼしくて・舟のあ
たりを・およぎまはり〳〵・しけれども・乘る者もなかりければ・力及ず・又渚に游歸り・なほも此
馬・ぬしの餘波を・をしむかと・おぼえて・沖の方をまぼり・高いなゝきをしつゝ・足かきしてこそ・
立たりけれ・やがて此馬を・河越の小太郎重房取て・御曹司へ奉る・それよりしてぞ河越黒とは・
召れける・此馬は・信濃國・井上より・參たりければ・井上黒と名付て・院の御厩に・立させられた
りしを・八島の大臣殿の・內大臣にあがり給ひて・御喜申しの候ひし時・院より下し給られたりし
を・御弟の中納言に・預け申されけり・中納言餘りに・此馬を秘藏して・毎月朔日ごとに・泰山府
君をぞ・まつられける・其後新中納言知盛・大臣殿の御前に・參らせ給ひて・申させ給ひけるは・今
はゝや・武藏守にも・おくれ候ぬ・又賴賢も・討れ候ぬ・いかなれば・子は親に・組敵の中に・へ
だたるに・いかなる親なれば・兩人ともなき・子のうたるゝを・見捨て・とつて返し・候はざりつる
事こそ・身ながらも・能命は惜かりけりと・おぼえて・返々も・口惜うこそ候へ・人の上に・かやう
の事を・見聞候はんには・いかばかりか・もどかしうもこそ・候はんずらめと・申もはてず・なき給
へば・大臣殿・武藏守は・心も剛にして・よき大將軍にて・候ひつる物をとて・御子衞門の督の・今
年十六に成給ひけるが・御そばに・おはしける方を・見給ひて・武藏守は・あの衞門督と・同年なと

て・泣給へば・舟のうちの侍どもゝ・みな鎧の袖をぞ・ぬらしける・

備中守の最後　（あひ）

懸りける處に・小松殿の末の子に・備中守師盛は・主從七八人・小舟にとり乘・沖にうかうで・軍の成行やうを・見給ふ處に・爰に・新中納言の侍に・衞門の尉重貞と・申者あり・敵に追懸られ・渚へむいて・馳くだり・沖なる船を・まぼつて・いかにあれは・備中の守の殿の・御舟とこそ・見まねらせて候へ・哀參り候はゝやと・申たりければ・備中守あれはいかに・重貞か・うたすな・のせやとて・船を渚へ・よせられたり・そこしも遠淺にて・舟よらざりければ・馬のふとはらひたる程に・打入て・見けるに・其あひ・纔に・ゆんだけばかりは・あるらんとぞ・見えし・備中守・今は敵の・近づくに・とうのれかしと宣へば・承つて・大の男の・重鎧着たりけるが・さしもなき・小舟へ・おもひのまゝにかはと飛乘らむには・なじかは・よかるべき・舟ふみかへして・人壹人もたすからず・畠山が郎等に・本田の次郎が・落あひて・熊手をおろし・備中守を・引あげ奉つて・頸を取る・今年は・十四歳にぞ・なられける・

敦盛

かゝりける處に・武藏國の住人・熊谷の次郎直實は・あつばれよからん敵がな・今一度組ばやと思ひ・かしこ爰を・かけまはり〳〵・見ける處に・こゝに・練貫に・鶴ぬうたる直垂に・萌黃匂ひの鎧を着・鍬形の甲の緒をしめ・金作の太刀を帶・廿四さいたるきり符の矢おひ・重籐の弓持て・連錢蘆毛なる馬の・太逞に・金覆輪の・鞍を置て・打乘り・沖なる舟をまぼつて・海の面・七八段が程・うち游せて・おはしける・武者を見つけ・熊谷あつばれ・よき大將軍とこそ・見參らせて候へ・まさなうも・敵に後をば・見せさせ給ふ物かな・かへさせ給へ〳〵と・扇をあげて・まねきければ・まねかれて・やがて・取てぞ・返されける・渚に打あがらんと・し給ふ處に・熊谷馬の足たて・なほすやおそき・おし幷べて・むずと組で・どうとおつ・やがてとつて・わうおぼえければ・內甲をおしあふのけて・見るに・いまだ十六か・七かと見えたる・小上臈の・かねぐろに・うすげしやうをぞ・し給ひたる・其時・熊谷・涙をはら〳〵と・ながいて・いとふしやの・此人の父母・定てましますらん・軍場へ・出したてゝ・いかばかりの事をか・思ひ給ふらんに・はやうたれたりと・聞給ひたらば・さこそは・なげかせ給はむずらめ・直實が・小次郎と・打連て・軍をするだにも・覺束なきぞかし・けさ一谷の西の城戶へ・寄たりつるに・小次郎が妻手の小肘を・篦ぶかに射させて・矢ぬいてたべといひつるを・不覺仁かな・今しばし・こらへとて・ぬかざりつるが・其後は・大勢に・おしへだてられて・死生しらず・人の親の・子を思ふならひ・直實が・小次郎を思

ふやうにこそ・思ひ給ふらんに・此人一人うち奉りたればとて・まくべき軍に・かたんずるにもあらず・又たすけ申たればとて・それにはよるべからず・あつぱれ扶け參らせばやと思ひ・抑いかなる人にて・御渡り候ぞ・名乘らせ給へ・扶まゐらせんと・申たりければ・かういふわ君は・何物ぞ・まづなのれと・いはれて・是は武藏國の住人・熊谷の次郎直實と申者にて候なり・扨ははや・汝が爲には・よき敵ぞ・是は態思ふやうあつて・名乘らぬなり・但汝をさくるにはあらず・なのらずといふとも・はや〳〵頸を取て・人にとへ・世には又・見しりたる者もあらんずるぞとて・終に名乘給はず・熊谷餘に・此人のしづまり・剛におはする程を感じて・あつぱれたすけ參らせばやとおもひ・後をきつとみければ・土肥の次郎・三百餘騎ばかりにてつゞく・さきは畠山五百騎ばかりにて・支たり・弓手のかたを見ければ・梶原五拾騎計にて・扣たり・其外河越・室岡の兵共・六七百騎にてかけまはる・熊谷いとふしや・助參らせんと・仕り候へど・此大勢の中にては・縱直實が手をこそ・遁させ給ひて候共・終には御命の・延させ給ひ候まじ・同じうは・直實が手にかけ奉つて・御菩提をこそ・とぶらひ・參らせ候はんずれ・是も唯・前世の事と・おぼし召れ候べしと・申たりければ・此人打うなづき・給ひけり・其後・熊谷目をふさぎ・腰の刀を拔・草摺引あげ・三刀さいて・頸をとる・くびつゝまんとて・直垂を・ときければ・笛をぞ腰に・さゝれたる・熊谷・いとふしや・此曉・城の中に・笛の音の・しつるは・はや此人の・吹給ひけり・ねざして殊に・面白かりつる物哉・東國に・千萬の兵有と言とも・軍場なんどへ・笛持者こそ・有まじけれ・哀都の人程・優にやさしかりける・事あらじ・哀弓矢とる身のならひ程・口惜かりける物あらじ・我心に任せたる身ならば・などか此人・一人たすけざるべきとて・片手には・頸をもち・片手には・弓杖にすがり・涙にむせびて・しばしは馬にも・乘ざりけり・後に人に尋れば・修理の大夫・經盛の末の子・大夫敦盛とて・生年十七にぞ・なられける・笛は小枝とて・名譽の笛なりつるを・經盛この人・器量たるによつて・授けられけるとぞうけたまはる・熊谷が發心は・此人ゆゑとぞ承る」去程に・軍やぶれにしかば・平家みな舟にとり乘・或は・蘆屋の沖にかゝつて・紀路へ赴く舟もあり・或は・淡路の迫戸を漕過て・島がくれ行船もあり・未一谷の沖にたゞよふ舟もあり・浦々島々多ければ・互の死生を定難し・平家・海に沈んで・死ぬるは・數しらず・陸に旗棹を・ゆひわたし・かけしるす・頸・三千餘とぞ・聞えし・一谷・生田の森・北の山ぎは・南の渚・東西の城戸口・矢倉の外・逆茂木のもとに・射伏られ・切伏られたる人・馬のしゝむら山のごとし・一谷の・小篠原・綠の色を引かへて・薄紅にぞ・成にける・平家・國をなびくる事も・十四ヶ國・又勢の隨付事も・十萬餘騎・是より都へは・纔に一日の道ぞかし・今度はさり共と・思はれつる・一谷をも・破れて・心ぼそくぞ・おもはれける

小宰相の身なげ

今度・攝津國・一谷にて・討れ給ひし・人々には・越前の三位通盛・薩摩守忠敎・但馬守經政・若狹守經俊・淡路守清房・尾張守清貞・備中守師盛・武藏守知章・藏人太夫成盛・大夫敦盛・十人とぞ聞えし・十の頸・都へ入・幷に・越中の前司盛俊が頭も・同京へぞ上りける・中にも・本三位の中將重衡卿は・一人生捕に・せられ給ひけり・二位殿此よし聞給ひて・弓矢とりの・軍場にて・死ぬるは・常のならひ・なれども・哀やあの・三位の中將が・一人生捕に・せられて・いか計の事をか・思ふらんとてぞ・なかれける・北の方・大納言の佐殿は・樣かへんと・し給ひけるを・大臣殿も・二位殿も・君をば・いかでか・捨參らつさせ・給ふべきと・やう〳〵に・制し給ひし上・今度は・樣をも替給はず・ふししづみてぞ・おはしける・其外・一谷にて・討れ給ひし・人々の北方・大略・さまをぞ・かへられける・中にも・越前の三位通盛の・侍にぐんだ瀧口時員と・申者・北の方の御まへに・參つて申けるは・上にはけさ・湊川のすそにて・敵七騎が中に・取籠られさせ給ひて・討れさせ・おはしまして候ひぬ・殊に・手をおろして・討參らせて・候をば・近江國の住人・木村の源三成綱とこそ・申て候ひつれ・是もやがて・御供申て・いかにも・罷成べう候ひし身の・かねての仰には・我いかに成たり共・後世の御供・仕らんと・思ふべからず・相構へて・北の御方の・御行衞を・みつき參せよと・仰候ひつる程に・甲斐なき命・たすかつて・是まで參りて候と・申たりければ・北方は・とかくの返事をも・し給はず・引かづきてぞ・なかれける・一定此人・討れ給ひぬと・聞ながら・若此事の・

僻事にてもや・あらむずらむ・又生て・歸らるゝ事もや・おはせむずらむと・唯かりそめに・出たる人を・待らむやうに・此三四日が間は・まだれけるこそ・哀なれ・され共・今はむなしき・日數も・過行て・もしやのたのみも・つきければ・心細くぞ・思はれける・二月十三日・一谷より・八島へ・渡られける曉がた・北方・乳人の女房に・むかつて・宣ひけるは・哀や三位のあす・打出んとての夜・さしも・軍場へ・わらはをむかへて・弓矢取の・軍場へ・出るは・常の習なれ共・今度は・しなんずるやらん・世にも心細く・おぼゆるぞや・扨も・通盛が・はかなき情に・都の中を・さそはれ出・なからはぬ旅の空に・赴き・既に二とせを・送らんずるに・聊も思ひこめたる色の・おはせざりつる事こそ・いつの世迄も・わすれがたけれなんと・かく身も(イいひつゞけ身も)たゝならず・さへなりたる事を・よろこびて・通盛三十になるまで・子と言ものも・なかりつるに・さては・うき世の忘形見の・あらんずるにこそ・但かくいつとなき・波の上・舟の中の住居なれば・身々ともならん時の・心ぐるしさをば・いかゝはすべきなんど・言おきし・言の葉は・はかなかりける・かねごとかな・有し六日の・曉を・かぎりとだにも・しりたらば・など後の世と・契らざるべき・あひそめし・其夜の契りさへ・今は中々うらめしくて・彼光る源氏の大將の・朧月夜の內侍のかみ・弘徽殿の・ほそどのも・わが身の上に・思ふぞや・まどろめば・夢に見え・さむれば・面影にたつぞとよ・されば・身々ともなりて・後をさなき者をそだておき・なき人の・形見に・みむ程に・思ひの數は・まさるとも・慰事は・よもあらじ・ながらへ

たれば・おもはぬふしも・あるぞとよ・草の陰にて・みむも・うかるべし・さればかゝる・ついでに・火の中・水の底へも・入なばやと・おもひ定て・あるぞとよ・書おきたる文をば・都へ・奉り給へ・後世の事共申たり・装束をば・いかならん聖にも・たうで我・後世とぶらひ給へ・何よりも・そこの除波こそ・いつの世迄も・忘がたけれなんど・こしかたゆくするゑの事共を・かきくどいて宣へば・乳人の女房・日來は・人の參つて・物申時だにも・はかゝ〳〵しう・御返事のなき人の・こよひしも・かくこしかた・行末の事共を・かき話いて宣ふは・誠に火の中・水の底へも・いり給ふべき・人やらんと・かなしくて・申けるは・今度一谷にて・討れ給ひし・人々の・北方の御歎・いづれか・おろかに・さふらふべき・されどもみな御さまをこそ・かへさせ給ひてさふらへ・六道四生は・まち〳〵に・さふらふなれば・いづれの道へか・おもむかせ給ひて・さふらふらんに・ひとつ道へ・生れあひ・參らつさせ・給はん事は・かたかるべし・中にも・身もたゝならず・さへなりたる人の・死たるは・殊に罪ふかしとこそ・承りさふらへ・されば・身々共ならせ給ひて後・をさなき人を・そだておき・參らつさせ・給ひて・なき人の・御形見に・御覽せむに・それになほも・御心のゆかずは・其時こそ・さまをもかへ・なき人の・御菩提をも・とぶらひ・參らつさせ・給はんずれ・縦ちいろの底に・しづませ給ふとも・ともにわらはを・引具してこそ・入せ給はんずれなんど・やう〳〵に（くさま〴〵に）・悲みければ・北方・あしう聞えぬとや・思はれけん・誠は思ひの餘にこそ・いひつれ・この夜は・遙に・ふけぬらん・いざやねなんと宣へば・乳人の女房・さりともと・うれしくて・御そばに・よりふしたりけるが・しばらく・まどろみたるまに・北方やはらおきなほり・舷へこそ・出られけれ・漫々たる・海上なれば・いづくを西とは・しらねども・月の入さの・山の端を・そなたやらむと・思ひやり・靜に・念佛したまへば・沖の白砂に・なく千鳥・友まよはすかと・おぼしきに・海士の戸渡る・櫂の音・かすかに聞ゆる・えいや聲・いとゞ哀やまさるらん・南無西方・極樂世界の・敎主彌陀如來・あかでわかれし・いもせのならひ・來世にては・かならずひとつはちすと・かき話き・南無と唱ふる聲ともに・波の底にぞ・いり給ふ・二月十三日・一谷より・八島へ・渡られける・曉がたの事なりければ・みな人ねいり・て・是を知ざりけるに・並の舟に・楫取の・一人舟こいで候ひけるが・此由を見奉つて・あはれ淺ましの御船に・女房の唯今・海へいらせ給ひぬるはと・申聲に・乳人おどろき・そばをさぐり・奉れ共・ましまさず・あれ〳〵と・かなしみければ・其時みな人・起合舟をとゞめ・海に入て・さがし奉れ共・ましまさず・さらでだに・春の夜は・なごりかくす・夜はなれや・阿波の鳴戸の・くせとして・滿汐・ひく汐・早ければ・御衣も波も・白くして・かづけ共〳〵・月おぼろにて・見えざりけり・やゝあつて・かづきあげ・奉りければ・練色の二ぎぬに・白き袴を着給へり・髪も袴も・しほたれて・取あげたれ共・甲斐ぞなき・乳人女房・むなしき御手に・取つき奉つて・君の乳の中に・渡らせ給ひしを・取あげいだき・そだて・參らせて

より・此かた・片時はなれ・參らする事も・さふらはず・都を・御出の時も・老たる親をふり捨て・是まで御供申たる・甲斐もなく・爭かゝるうき目をば・見せ給ひさふらふやらん・縱定業にて渡らせ・給ひさふらふとも・生ある御聲をも・有し昔の御姿をも・今一度・みせ給へと・やう〳〵に・かなしみけれ共・纔にかよひし・息もたえ・終に事消・はてさせ給ひけり・いづくをさして・落つくべしとも覺えず・さてしも・有べきならねば・三位のきせながの・一領殘りたりけるに・おし纏奉つて・又海へ返し入奉る・乳人の女房・今度は・おくれじと・續いて・いらむとしけるを・人取とゞめければ・力及ばず・船底に・たふれふし・をめきさけぶ事・斜ならず・せめておもひのあまりにや・みづから髮を・はさみ落し・三位の弟・中納言の律師・忠快にそらせ奉り・啼々戒をぞ・たもちける・男に別る・女のさまをかふるは・常の事・身をなぐるまでの事は・ためしすくなき事ども也・忠臣は二君につかへず・貞女兩夫に・まみえずとも・かやうの事をや・申べき・此北方と申は・故藤の刑部卿敎實の御娘・上西門院に・小宰相殿とぞ・申ける・しかるを・越前の三位通盛・いまだ其ころ・中宮の亮にて・候はれけるが・此女房を・一目見初・奉つて・思ひに心をそめ・歌をよみ・文をつくし・年月・戀かなしまれけれ共・なびくけしきも・なかりしかば・三位三年と申に・今を限の文を書て・年比取傳たりける・女房にたうだりければ・御所へもちて參る程に・折節小宰相殿・里より御所へ參られける・道にて行あひ奉つて・御車のそばを・走過るやうにて・此文を・車の內へ・投入てぞ・忍びける・小宰相殿・唯今此文を・車の內へ・投入たる者は・いかなる者ぞと・御尋ありけれ共・御供の者どもも・皆知ぬよしをぞ申ける・小宰相殿・さすが此文を・車の內に・おくに及ばねば・袴の腰に・はさみつゝ・御所に參りさふらはれける程に・所しもこそおほきに・女院の御前にしも・此文を落されたり・女院是を・御覽じ・つけさせ給ひて・御所中の女房達を召て・めづらしき物をこそ・求たれ・此文の主は・誰なる・覽と・仰ければ・めん〳〵に・萬の神や・佛にかけて・皆知ぬ由をぞ・申されける・其中にも・小宰相殿ばかりこそ・顏うちあかめ・そばむいて・しばしは・物をも申されず・女院重て・扨いかにや・いかにと・御尋ありければ・あの通盛のと・計ぞ申されける・女院も・かねてより・其事ありとは・しろしめされけれ共・文をひらいて・叡覽あるに・薰爐の煙も・なつかしく・筆のたてども・ゆゑびよしあるさまにて・一首の歌をぞ・かゝれたる

わが戀は・ほそ谷河の丸木橋・ふみかへされて・ぬるゝ袖哉・

女院是は・未あはぬを恨たる・文也あな心つよや・などなびき給はぬぞ・あまりに人の・心強きも・身をなき物と・なす成物を・中比・小野の小町と・聞えしは・みめかたち・ならびなく・心ざま・世にすぐれ・たりしかば・みる人・きく人の・心をいたましめずと・いふ事なし・され共・心つよき・名をやとりたりけむ・のちには・人の思ひの積りとて・關寺の邊に・住居して・往來の民に・物をこひ・やどにくもらぬ・月をば・涙に・露に・うかべつゝ・雨をもらさぬ・わざもなく・風をふせぐ・

便もなし・野邊の若菜・澤の根芹を・摘てこそ・露の命は・さゝへけれ・世にはかゝるためしのあるぞとよ・はやなびき給へ・みづから返事せんとて・忝くも・女院より御返事ありとかや

たゞたのめ・細谷川の丸木橋・ふみかへしては・落ざらめやは・

三位忝も・女院より給はらせ給ひて・斜ならず・寵愛せられけるに・又小松殿の次男・新三位の中將資盛・未其比・少將にて・節會に・參られたりけるが・此女房を・一目見そめ奉つて・思ひに心をそめ・歌をよみ・文をつくし・年月戀かなしまれけれ共・なびく氣色も・なかりしに・はや越前の三位の上に・成給ひぬと・聞えしかば・資盛の北方・右京の大夫の局とて・中宮の御かたに・さぶらはれけるが・此由を傳聞給ひて・そねましき心にや・一首の歌をぞ・送られける

いかばかり君歎らん心そめし・山の紅葉を・人にをられて・

資盛の返事には

何とげに人のをりける紅葉々に・心移して・思ひそめけむ・

是も中々・優にやさしきためしにぞ・申傳たる・みめは幸のはな・なれば・三位忝も女院より給らせ給ひて・今度西海の旅の空までも・引具し奉つて・終には同じ道におもむかれけるこそ・哀なれ

卷第十

頸渡

壽永三年二月七日の日津の國・一谷にて・討れさせ給ふ・平氏の頸・同き十日の日・都へ入・并に・越中の前司盛俊が頸も・都へ上・中にも本三位の中將・重衡卿は・一人・生捕に・せられ給ひけり・中にも・小松の・三位の中將維盛卿の・北方は・西山の麓・大覺寺・菖蒲谷の坊と・申所に・忍うで・おはしけるが・三位の中將と云人・生捕にせられて・都へ・入と・聞えしかば・いかさまにも・此人・遁給はじ物をとてぞ・なかれける・人參つて・三位中將殿とは・本三位の中將殿の・御事にて候と申たりければ・扨は・頸共の中にもや・有らんとてぞ・なかれける・其比京中に・殘りとゞまり給へる・平家のゆかりの人々・いつしか・けふ・我等が身の上に・いかなるうき事をか・見聞むずらんとて・やすき心地も・し給はず・同き十二日に・平氏の頸大路を渡し・獄門に懸らるべし・なんど・御沙汰ありしかば・法皇此事・大きに・思召わづらはせ給ひて・然るべき・公卿あまた召て・仰合られけり・中にも・堀河の大納言忠親卿の・申されけるは・凡・此一門は・先朝の・御時より・盛

履の臣として・久敷朝家に仕る・就中・卿相の頸・大路を渡さるゝ事・例なし・されば・範頼・義經が・申狀・あながち・御許容有べからずと・申されたりければ・法皇・此儀尤とて・既に・渡さるまじかりしを・範頼・義經・謹で・申されけるは・命をかろんじ・義をおもんずる事も・且は・勅宣の・おもきがゆゑ・且は・又親の・會稽の耻を・雪めんが爲なり・申旨を御承引なからんに・おいては・何の勇にか・朝敵を・亡し・まゐらせ候べきと・申されたりければ・法皇も力及ばせ給はず・又渡さるべきにぞ・定りける・同き十二日に・平氏の頸・大路を渡さる・日來みなれ奉りし・京中の上下・皆なみ居て・袖をぞぬらしける・況其縁に・ふれ・互に恩を蒙り・あはれし・人々の・心の中・おしはかられて・哀なり・去程に・小松の三位の中將維盛の・侍に・齋藤五・齋藤六は・六代殿につき奉つて・候ひけるが・西山の麓・大覺寺菖蒲谷の坊に・忍うでさふらひけるが・わが主の御頸や・ましますと・見物の人の・中に・まぎれて・みけるに・其御頸はなかりけれ共・日來相馴奉し・御一門の頸・いくらも有ければ・餘に目もあてられず・痛しくて・しきりに涙の進みければ・人に・あやしめられじと・急大覺寺に・歸り參りたり・北の方・扨いかにやと宣へば・さん候・小松殿の君達には・備中の守の殿の・御頸ばかりこそ・見えさせおはしまし候へ・其外は・そんぢやう某・たれがし・なんど・申たりければ・北方・其も・人の上ならばこそ・とてぞ・なかれける・齋藤六が・申けるは・見物の人の中に・申候ひしは・小松殿の君達たちは・播磨の・三草の手を・かためさせ給ひて・候ひつるが・其も源氏に破られ給ひて・新三位殿や・新少將殿や・丹後の守の殿は・播磨の高砂の浦より・御船に召て・讃岐の・八島へ・渡らせおはしまし候ひぬ・備中の守殿計こそ・一谷へ・歸らせ給ひて・討れさせ・おはしまして・候へと・申候程に・扨・小松の三位の中將殿の・御事は・いかにととうて候へば・それは御いたはりにて・今度の軍には・あはせ給はず・讃岐の八島にと・こそ・申て候ひつれと・申たりければ・北方・それも我等が事をのみ・朝な夕な・思ひ給ふぞ・御いたはりとも・ならせ給ひたるらむとて・泣給へば・若君・姫君・扨その御いたはりは・何事の御病ぞと・かへしてこそ・とはましけれとぞ・宣ひける・去程に・小松の三位の中將維盛卿は・讃岐の八島に・在しけるが・或夜の暁がた・ねざめして・與三兵衛重景・童石童丸が・御前近う御宿直申て候ひけるを・召れて・哀都にも・寢覺をば　したるらん物を・縦をさなき者共こそ・わするゝとも・人は・かた時も・忘給はじ物を・むかへも・とりて・なぐさまばやとは・思へども・越前の三位の・うへの事を聞に・つけても・かしこうぞ・留めおきたりける・ひき具し・たらましかば・いか計の事をか・おもはましと・宣ひけるぞ・いとほしき・明ければ・與三兵衛を・御使にて・都へのぼせられけり・北方への・御文には・扨も・見そめ・見えそめ・奉りし後は・片時・はなれ奉らじとこそ・申て候ひしか共・今は・今生にて・逢みん事も・かたければ・來世にては・かならず・一佛淨土の縁と・ねがひ給ふべしと・書とゞめ・奥には・一首の歌をぞ・かゝれたる

いづくともしらぬあふせのもしほ草・書おく跡を形見とも見よ・

扨をさなき人々の・御かたへは・扨も・つれ〴〵をば・何としてか・なぐさむ・急で・むかへとらんずるぞ・六代殿へ維盛・夜叉御前へ・維盛と・年號・月日・こまやかに・こそかゝれたれ・手跡は・いつまでも・かはらぬ物なれば・縦・維盛・此世に・なき物となりたりとも・ながらん後の世の・形見にも・みよかしと・かやうに書ぞ・送られける・與三兵衛御文給て・夜を日に續で上る程に・程なう・都に上りつき・大覺寺に參り・三位の中將殿の・御文を・北方へ奉る・北方・珍しき文をも・みる物かなとて・若君・姫君・三人・一所に・さしつどひ・此文を・ひらいて見給ひて・涙に・むせび給ひけり・若君姫君・さて此御返事をば・何とか申候べき・北方・たゞともかうも・わごせ達の・思ひ給はん・するやうに・書給ふべしと・宣へば・をさなき人々の・扨も・つれ〴〵をば・何とか・おぼしめされ候・急でむかへ・とらせ給へなんどぞ・かゝれたる・與三兵衛・御返事給て・又夜を日につゞいで・下る程に・ほどなう・八島に下りつき・北方の御返事を・三位の中將殿へ・奉る中將・開いて見給へば・北方の水ぐきの跡は・涙にかきくれて・とかく恨・くどき・かゝれたるより・をさなき人々の・いまだ・いとけなき・筆のすさびなるに・戀し〳〵と・書れたるを・見給ひてぞ・いとゞせんかたなくは・思はれける・故郷のいぶせかりける事共は・はや・皆聞はるけ給へ共・戀慕の・思ひは・猶・やすまらず・妻子は・心をつくす物なれば・閻浮は・愛執の網・つよくして・穢土を・いとふに・いさみなく・淨土を・ねがふに懶し・今生は・かくいつとなく・妻子に・心をくだく・のみならず・當來は又・修羅の苦にこそ・責られむずらめ・しかじ・是より・浦づたひ・島傳して・都にのぼり・戀しき者共を・いま一度・みもし・見えもして・妾念はらひ・其後やがて・出家して・火の中・水の底へも・入なんと・思ひぞ・さだめ給ひける

八島院宣

同き十四日に・本三位の中將重衡卿をば・大路を・渡し奉る・土肥の次郎實平・木蘭地の直垂に・緋威の鎧きて・同車しけり・實平が・家子郎等・百騎計にて・車の前後・左右を・打圍奉つて・六條を・東へ・渡し奉る・其比の・京中の上下・此由を見奉つて・あないとふし・あの人の事ぞかし・入道殿にも・二位殿にも・おぼえの君達にて・當家・他家の公卿殿上人の・出仕の所にても・隨分所を・おかれ給ひし・人ぞかし・唯今の御有樣の・いたはしさよとて・皆なみゐて・袖をぞぬらしける・河原まで・渡し奉つて・日もやう〳〵・くれければ・故中御門の・藤中納言家成卿の・作りおかれし・八條堀河の・御堂へ入奉る・其日の夜にいつて・院の御所より・御使有・藏人の衞門の權の亮・貞長とぞ・聞えし・貞長は・赤衣に劔笏・帶して・三位の・中將のかたへ・行向ふ・日來は・何とも思はれざりける・貞長が・いつしかけふは・冥途にて・冥官に・あへる心地ぞ・し給ひける・貞長申けるは・是は勅

定にて候・神璽・寶劍・內侍所・三種の神器を・だにも事故なう・都へ・返し參らつさせ給はゝ・御命は・たすからせ・給ふべきにて候なり・此旨をもつて・然るべきやうに・八島へ・申させ・給ふべうもや・候らんと・申されたりければ・三位の中將の・御返事には・重衡・一谷にて・いかにも罷成べう候ひし身の・一人生捕にせられてうき耻を・さらし候へば・命いきて・一門に面を・向ふべし共・存せず・一門も又・重衡を・たすけて見んとは・よも申候はじ・但母にて候・二位の禪尼計こそ・重衡を・今一度たすけて・見んとや・申候はんずらん・かなふべしとは・存候はね共・院宣だにも候はゝ・給つて・申てこそ・み候はめと・申されたりければ・貞長・院の御所に・歸り參つて・此よしを・奏し申たりければ・法皇斜ならず・御感あつて・頓て院宣をこそ・なされけれ・院宣の御使には・御坪のめしつぎ・花かたとぞ・聞えし・三位の中將の使には・平三左衞門重俊なり・三位の中將・重俊をめして・此文をば二位殿へ・奉れ・北方へは・申べし・一門の・中の・文は・ゆるされ候へ共・私の文をば・ゆるされねば・詞にて申なり・ありしかば・今は・今生にてあひみん事も・かたければ・來世にては・必一佛淨土の緣と・願ひ給ふべしと・申せよとぞ・宣ひける・去程に・院宣の御使・花かた・重俊・讀岐の・八島に・下りつゝ・都より・院宣下されたりとて・平家の一門・みなひとつ所に・さしつどひ・其後・彼院宣をぞ・開かれける・其狀にいはく

一仁（イ一仁二字なし）先帝・北闕の雲を出・九州に・幸しまします・神璽・寶劍・內侍所・遙に・南海四國の・塵に・うづもれて・數年をふる事・且は・朝家の御大事・且は・亡國の基也・抑彼・重衡卿と者・東大寺・破滅の・逆臣たるに依て・忽親族に別・去ぬる七日の日・攝州・一谷の渚に・おいて・一人生捕にせられ畢ぬ・籠鳥・雲を・戀ふるおもひ・遙に・千里南海の波に・浮び・歸鴈・友を忍ぶ志・忽・九重の花洛に・通せむか・須は彼賴朝が・申さしむる義に・任て・死罪せらるべしと・いへ共・神璽・寶劍・內侍所・三種の神器を・だにも・都へ・かへし奉る物ならば・彼重衡卿を以て・寬宥せらるべき者也・者院宣如此・仍執達如件

壽永三年二月十五日

平大納言殿へとぞ・あそばされたる

大膳の大夫成忠が奉て

請文

其後・三位の中將殿の御文を・二位殿へ奉る・披て見給へば・今度重衡・一谷にて・いかにもまかりなるべう・候ひし身の・一人・生捕に・せられてふたゝび都へ・歸り上りて・こそ候へ・院宣かくのごとし・神璽・寶劍・內侍所・三種の神器を・だにも・事故なう・都へ・かへし參らつさせ給はゝ・重衡が命・たすかるべきにて候也・此旨をもつて・然るべきやうに・人々へ・申させ給ふべしとぞ・

かゝれたる・二位殿・此ふみかいまいて・一門の中に・出給ひ・是見給へや人々・三位の中將が・方よりかくこそ・申下したれ・何のやうも・あるまじ・はや〳〵・其御寶・都へ・返し・參らつさせ給ひて・三位の中將を・今一度われに・見せ給へ・世にあらんと・思ふも・子共を・思ふ故にこそとて・ふししづみてぞ・なかれける・誠にもとぞ・思はれける・平家の人々・さて此事いかゞあるべきと・評定あり・中にも・平大納言と・新中納言の・申されけるは・縱ば・君の御代を・しろしめすも・此三種の神器をもつて・さきとし給へり・おほくの一門を・重衡一人に・思召かへらるべきか・縱又・此御寶・都へ返し參らつさせ・給ひたりとも・重衡が・命たすからむ事・不定なりと・申あはれければ・人々・此儀尤と・同じあはれければ・二位殿・力及給はず・又ひきかづきてぞ・なかれける・去にても・御請をば・申さるべきにて・平大納言時忠卿・承つて・御請の狀を・進せらる・花かた御請を給つて・都に上り・院の御所に・參り・大膳の大夫に奉る・成忠是を請とりて・御前に參り・讀進す・其狀にいはく

去ぬる・十五日の院宣・同き廿一日・到來・謹で承るところ・件のごとし・但此趣をもつて・事の意を・案ずるに・去ぬる七日の日・攝州・一谷の渚に・おいて・通盛卿以下・當家數輩・誅せられ畢ぬ・なんぞ重衡一人が・寬宥をよろこぶべきや・それ我君は・故高倉院の・第一の御子・繼體の君として・御在位既に・四ケ年・その恙なしと・いへ共東夷北狄・猥しく・驕を・むすんで・入洛の間・且は・幼帝・母后の御憚・尤ふかく・且は・外戚・外宮の御志・淺からざるに依て・九州に・幸しまします・還幸なからんに・於ては・三種の神器・いかでか玉體を・はなたるべきや・それ君は・臣をもつて・體とし・臣は君をもつて・心とす・心うちに愁て・體ほかに喜ばず・君上に愁る則ば・臣下に樂ます・先祖・平將軍貞盛・相馬の將門を・追討し・東八ケ國を・うちなびけしより・此かた・子々孫々に傳て・ながく・金闕朝家を・護奉る・就中・太政大臣入道淨海・去ぬる・保元・平治・兩度の合戰・愚命を・輕じ・勅命を・重せし事・偏に・君の爲にこそ・つかへて・正に・身の爲にせず・抑彼兵衞佐賴朝と・者ば・去ぬる・平治元年・十二月に・父義朝が・謀叛に依て・頻に・追罰すべきよし・仰下さると・いへど共・故入道相國・慈悲のあまりに・申宥る所なり・いつしか昔の芳恩を忘て・今鴻恩を存せず・忽流人の身を・飜し・凶黨の別に・相加る・是愚なる・至慮の短き所なり・忽神道の・天罰を招き・彌・敗績の・鎭滅を・期せん者歟・且は・功臣嫡々・君數代の奉公・淺からず・且は・己父淨海が・度々の奉公を・おぼし召忘ずんば・一院・忝も・讃州へ・御幸なるべき者歟・爰に臣等・院宣の旨を・承つて・四國・九國の軍兵共・雲のごとく・集り・霞のごとく・たなびいて・ならびに・舊鄕に歸つて・重て・會稽の恥を・雪めんと存ず・若然ずんば・三種の神器・波にひかれて・鬼界・高麗・天竺・震旦に・至らむか・悲しきかな・人王八十一代に・相當て・痛哉・我朝・代々の・御寶を・波の底の・み

くづと・しづめん事を・進退に・まどつて・かくのごとく・案内を・啓する所也・此趣をもつて然べきやうに・洩し・奏聞せしめ給へ・誠惶誠恐謹言・從一位前の内大臣平宗盛・頓首言上とぞかゝれたる

内裏女房

又・三位の侍に・木工右馬の允・正時と・申者あり・或時・八條堀河の・御堂に參り・守護の・武士に・向て・申けるは・是は三位の中將殿の・年來・召つかはれし・侍に・木工右馬允正時と・申者にて候也・都を御出の時も・尤御供仕るべう・存候ひつれ共・八條の女院に・兼參の身にて候・上弓矢のもと・末を・だにも存じ候はねば・暇申て・罷留り候・誠やらん・三位の中將殿の・都に渡らせ給はんも・けふあすばかりと・やらん承り候・哀御ゆるされを・蒙つて・今一度・御目に懸り候はゞ・やと申たりければ・守護の武士共・腰の刀をだにも・おかれ候はゞ・安き御事候とぞ申ける・正時さらばとて・腰の刀をば・土肥の次郎に・預置・三位の中將殿の・見參に入・三位・いかに・あれは・正時か・是へ〳〵と・宣へば・正時・御そば近く參りて・こし方行末の事共を・夜もすがら・語りぞ・明させ給ひける・明ければ・正時・暇申て・罷出・三位の中將・扨も・日外・汝して申通せし・文のぬしは・當時何方・にか・ましますらむなど・宣へば院の御所に・御渡り候とぞ申ける・三位の中將・せめて文を奉つて・返じを成共・見てなぐさまばやと・思ふはいかゞ有べきと・宣へば・正時安き・御事候とぞ申ける・三位の中將・斜ならず・喜給ひて・頓て・御ふみ・遊して・正時に・たぶ・正時給つて・出ければ・守護の武士共・あれは・何方への・御文にて候やらんと・あやしめければ・三位の中將・くるしかるまじ・其文みせよとて・土肥の次郎に・見せられけり・實平・ひらいて見・やゝ是は・女房の御方への・御ふみにて候也・くるしからじとて・出しける・正時・宿所に歸り・其日一日を・待暮らし・軈て夜に入て・院の御所に參り・雲の上の靜に・なる程を・窺て・件の女房の・すまれける局の・やかきの邊に・たゝずんで聞ければ・此女房も・三位の中將殿の事・宣ひ出して・なき給ひければ・正時此人も・未・三位の中將殿の御事をば・思食忘ざりけりと・嬉しくおもひ・つま戸をほと〳〵と・たゝけば・内よりたそと答ふ・是は三位の中將殿の・お使に・正時と・申せば・明られたり・此御文を奉る・ひらいてみ給へば・一首の歌をぞかゝれたる・

涙川うき名を流す身なりとも・今一度のあふせともがな・

軈て御返事・あそばして・正時にたぶ・正時給はつて・八條堀河の御堂に・參り三位の中將殿に・奉る・ひらいてみ給へば・是も一首の歌をぞ・かゝれたる

君ゆゑにわれもうき名をながすとも・底のみくづとともに消なん・

三位の中將・此御返事を・見給ひてぞ・思ひをなぐさめ・給ひける・其後・三位の中將・守護の武士

に・むかつて・宣ひけるは・今一度芳恩に・預らばやと思ふは・いかゝ有べきと・宣へば・守護の武士共・何事にて候やらんと・申たりければ・三位の中將・別のやうはなし・昨日の文のぬしに・對面して・後世の事どもをも・云おかばやと・思ふはいかゝ有べきと宣へば・守護の武士共・やすき・御事候・とぞ申ける・三位の中將・斜ならず喜びて・正時に・此よし宣へば・正時甲斐々々敷も・牛車・清げに・沙汰し・院の御所に參つて・此由・申たりければ・この女房も・餘りに・おもはれし事なれば・斜ならず喜び給ひて・やがて出んと・し給ひけるを・かたへの女房達・あな淺ましと・それには・武士共が・いくらもありて・見ぐるしと・かんなる・物をなんど・宣ひあはれければ・此女房・今ならでは・又いつの世にかは・見ゆべきとて・急・御車にめし・八條堀河の御堂に・おはして・案内を・申されたりければ・三位の中將是には・武士共が・いくらもありて・あまりに・見ぐるしう候へば・車よりは・な・おりられ候そとて・門のほとりに・車をたてゝ・遙に・夜深・人・しづまつて後・三位の中將・車に出あひ・對面し給ひて・こしかた行末の事共を・夜もすがら語りぞ・明させ給ひける・篠目やう〳〵あけ行ば・車の轅をめぐらして・もとの道へぞ・歸られける・いづくを宿とて・急らん・又いつまでとてか・契りけん・忍ぶに・たへぬ涙の色・車の餘所まで・もれぬべし・後朝に正時を・使にて・一首の歌をぞ・送られける

あふことも露の命ももろ共に・こよひばかりや限りならまし・（イ限りなるらん）

此女房墨摺り・筆染て・御返事をかゝれける・がみづから・ひすゐのかんざしを・もとゆひぎはより・おしきつて・返事に・そへてぞ送られける・正時御返事・給つて・又八條堀河の・御堂に參り・三位の中將殿に奉る・中將ひらいて見給へば・これも一首の歌をぞかゝれたる

逢事の（イことも）限ときけば露の身の・君より先に消ぬべきかな・

三位の中將此かんざしを・見給ひて・日比の志の・わりなき色の・あらはれて・たへぬ思ひの・餘りには・聲にも出て・さけぶほどにぞ・おもはれける・やがて・此女房・院の御所をば・まぎれ出・生年廿三と申には・花の袂を引替て・墨染の袖に・やつれはて・東山雙林寺のかたほとりにぞ・すまれける・此女房と申すは小原の・民部入道親範の御娘・左衞門の督の・殿とぞ・申ける

重衡の戒文

去程に・三位の中將重衡卿は・御請の狀到來の由を聞給ひて・さればこそ・いかにも・かなふまじかりつる物を・さこそは・都の人々も・又一門のかた〴〵も・是程まで・重衡をいふかひなき者と・思ひ給ふらめと・後悔し・給へ共・甲斐ぞなき・ある時・三位の中將・土肥の次郎を召て・出家をせばやと思ふは・いかゝ有べきと・宣ひければ・土肥の次郎・大將軍に・此よしを申・範頼・義經・院へ・此由を・奏し申されたりければ・法皇鎌倉の兵衞佐に・みせでは・いかゝ有べきとて・御ゆるさ

れも・なかりけり・或時又・三位の中將・土肥の次郎をめして・出家は・ゆるされねば力及ばず・日來見參に入奉つし・上人の・御目に懸り・後世の事共をも・申おかばやと・思ふは・いかゞ有べきと・宣へば・土肥の次郎・聖は・たれ候やらん・黒谷の・法然坊とぞ宣ひける・土肥の次郎・やゝさて・其上人の・御事ならば・實平も・隨分・信じ申て候・御對面・安き御事候とて・此よしを・東山の・御坊へ・申送たりければ・上人・其人ならば・急行て・對面せんとて・八條堀河の御堂に・おはしたり三位中將・やがて・出合對面し給て・涙に咽びて・しばしは・物をも申されず・良あつて・三位の中將涙を・おさへて・申されけるは・今度重衡・一谷にていかにも・罷成べう候ひし身の・一人生捕にせられて・京田舍・引しろはれ・耻をさらし候事・おもへば・歎の中の喜びなり・其故は當時皆人の・正身の如來とのみ・崇奉る・上人に生て・再御目に・懸り候事・身の幸と存候・偖も・後生をば・何とか仕り候べき・世に候ひし時は・朝につかへ・身をたて・世路にたづさはり・今生の・榮花にのみ誇りて・當來の昇沈を・かつ存せず・況運つき世・亂て後は・爰にあらそひ・かしこに戰ひ・いかにもして・敵を亡し・身をたすけむと・仕り候ひし程に・惡心いよ〳〵遮て・善心曾すゝまず・次に・南都・破滅の事をば・皆人の・重衡一人が・咎とのみ申候へば・上人も定てさぞおぼしめされ候らん・親の命に隨ふならひ・衆徒の惡行を・靜めんが爲に・罷向て候ひしに・惡黨おほき其中に・いかなる凶徒の・中よりか・火を出し候ひけむ・おはくの伽藍を・亡す事・全く是を・本意と存せね共・末の露・本の雫と成ためし・責一人に歸するならひ・重衡一人が・咎にて・ながく阿鼻大焦の底に・しづまん事・唯今なり・倩一生の體を・案ずるに・惡業は・須彌よりも猶高く・善根は・微塵ばかりも・其蓄も・候はず・かゝる惡人も・罪障かるみぬべき・方法や候・示させ給へと・涙もせきあへず・申されたりければ・上人も・哀にて・涙に咽て・しばしは物もの給はず・やゝあつて・上人・涙を押て・宣ひけるは・誠に出離の要道・むなしうせさせおはしまさん事・御歎の・中の御歎なるべし・然りとは・申せ共・一念善心を・發させ給はゞ無量の罪障も・消滅し・一たび・菩提心を・起させ給はば・三世の諸佛も・定て隨喜し給ふべし・凡出離の要道・區なりとは申せ共・末世濁亂の機に・おいては・稱名念佛を以て・先とす・志を九品にむけ行を・六時に縮たり・されば・愚痴闇鈍の者も・持ち易く・破戒重罪の輩も・唱るに・便あり・一念なれども・正業となり・乃至十念往生の因となる・況念々に〳〵・怠らず・時々に・忘させ給はずは・此度・苦域の娑界を・出まし〳〵・安養不退の・寶土に・至らせ給はん御事・何の御疑か・候べきと・宣ひければ・三位の中將殿・斜ならず・喜び給ひて・十念うけ給ひけり・三位の中將・申されけるは・出家はゆるされ候はねば・力及び候はず・いたゞき計に・剃刀あて・戒授給へと・申されたりければ・上人・安き御事候とて・頂斗に・剃刀あて・戒授奉らる・其後三位の中將の・年ごろ執して・あそばれたる侍の許に・預けおかれたりける・草紙箱・御硯を・めし寄て・上人に・奉らる・此硯と申は・鳥羽

院の御時・宗朝より・三渡て・候・中にも・松陰(イ松風)と申て・名譽の硯にて候を・故入道相國下給られて・候ひしを・重衡に・預おかれて候・あひ構て・此硯人にたばせ給はで・上人の・御目の・通はむ所に・おかせ給ひて・御覽せられむたびに・思召出して・念佛申・重衡が後世・とぶらうて・たばせ給へと・涙もせきあへず・申されければ・上人も泣々是を請取て・弟子の僧にぞ・預られける・其夜は留て・淨土九品・觀ずべきやう・安心起行の法文・夜もすがら・宣ひければ・三位の中將の・御事は・中々申に及ばず・實平以下の・武士共も・今夜幸に・是に・しこう仕て・かゝる目出度・御法文・聽聞仕りたる事こそ・何よりも・嬉しけれとて・皆隨喜の涙をぞ・流しける・明ければ・上人暇申て・出られけり・三位の中將・緣迄・立出給ひて・安心起行の御法文は・はやひしと思ひ定て・候ひぬ・縱この世の別こそ・只今ばかりにて候共・來世にては・必一佛淨土の緣と・參會・申いらせ候べし・さらば・暇申てとて・涙を押て・入給ふ・上人も・哀にて・墨染の袖を・顏におしあてゝ・泣々坊へぞ・歸られける

重衡の海道くだり

去程に・本三位の中將重衡卿をば・土肥の次郎實平が・預り奉つて・八條堀河の御堂に・置奉りたりしを・鎌倉の・兵衛佐頼朝・頻に申されければ・さらば・渡し奉れやとて・梶原平三景時・請取奉つて・壽永三年・三月十日の日・關東下向とぞ・聞えし・西國より・生捕にせられて・ふたゝび・都へ・歸り上給ふだにも・心うきに・いつしか又・東路はるかに・赴給ひけん・心の中・おしはかられて・哀なり・賀茂川・白河・うち渡り・松坂四の宮・河原にも・成しかば・爰は昔・延喜第四の王子・蟬丸の・關の麓に捨られて・常は心をすましし・琵琶を彈じ給ひしに・博雅の三位と・いつし人・三年が間・夜を晝す・歩を運び・立聞て・秘曲を傳給ひけん・わらやの床のきうせきも・思ひいれてぞ・下られける・會坂山をうち越て・勢多のからはしこも・踏ならし・野路・篠原の露をわけ・眞野入江の・はまかせに・しがの浦なみ・春かけて・霞にくもる鏡山・夕日西にかたふけば・麓の宿にぞ着給ふ・比良の高根を北にして・伊吹の嶽も・近づきぬ・すりはり山を・打越て・心をとむと・なけれ共・荒て中々・やさしきは・不破の關屋の・いたびさし

みのならば花も咲なんくひせ川・わたりて見ばや春のけしきを

と・打詠・尾張なる・熱田の社を・ふしをがみ・なにと・鳴海の鹽干潟・袖は涙にしをれつゝ・彼在原の中將の・唐衣きつゝなれにしと・詠めけむ・參河なる・八橋にも・なりしかば・蜘手に・物をとあはれなり・うきもつらきも・遠江・濱名の橋のゆふ鹽に・さゝれてのぼる・海士小船・こがれても・のをや・思ふらん・さらでも旅は・物うきに・松の梢に・風さえて・入江に・よする波の音・心をくだく・ゆふ間暮・池田の宿にぞ・着給ふ・其夜は・三位の中將・彼宿の遊君・熊野が娘・侍從が許に・

宿し給へり・侍従三位の・中將を・見付奉つて・こは更に・うつゝ共・覺さふらはぬものかな・日來はかゝるべき・御有樣に・みなし奉るべしとは・つゆ・思ひこそ・よりさふらはざりしかとて・一首の歌をぞ送りける

東路やはにふの小屋のいぶせさに・古郷いかに戀しかるらん・

三位の中將・梶原をめして・あれはいかにと・宣ひければ・梶原畏つてさん候・あれは八島の大臣殿の・未當國の守にて・御渡り候ひし時・おぼしめしめし・御寵愛させ・おはしまして・都へ御上の時も・召具せさせおはしまし・候ひし・古郷に・一人の老母あり・有時かれが・痛はる事の・候ひて・都へ使者を・つかはし・たりしに・侍従いかに・暇を申せ共・大かた・ゆるされ・まゐらする事も・さふらはざりつるに・比は衣更着・廿日あまりの事にて・もや候ひけむ

いかにせむ都の春も惜けれど・なれし東の花やちるらん

と・申名歌・仕つて・ゆるされ參らせて候・海道一の・遊君にて候と・申たりければ・三位の中將・去事ありとて・感じて返事し給ひけり

古郷は戀しくもなし旅の空・いづくも終の住家ならねば・

都を出て日數ふれば・彌生も・半すぎ・春も既に暮なんとす・遠山の花は・のこんの雪かと・疑はれ・浦々島々霞わたり・こしかた行末の事共を案じ・つゞけ給ふに・いかなる・前業のつたなき者ぞと・思召共・甲斐ぞなき・三位の中將に・御子の一人も・おはせざりつる事を・母二位殿も・北方・大納言の佐殿も・大に歎思召して・萬の神や佛に・祈り申されけれ共・終に其しるしなし・されば今は・かしこうぞ・なかりける・あらましかば・いとゞ心くるしう・物を・おもはましと・宣ひけるぞ・いとほしき・葛・楓・葉茂り・心ぼそき・宇津の山・手越を過て行けば・北にとほざかつて・雪ろき・山あり・とへば・甲斐の白根といふ・三位の中將

惜からぬ命なれどもけふあれば・つれなき甲斐の白ねをもみつ・

清見が關をも過しかば・富士の・すそ野にぞ・成にける・北に青山峨々として・松吹風も・颯々たり・南には・蒼海漫々として・峯うつ波も・渺々たり・戀せば・やせぬべし・戀せずも・ありなんと・明神の・うたひはじめ給ひけん・足柄の山を・打越て・日數やう〳〵かさなれば・三位鎌倉へこそ・つき給へ

千手の前

次の日・兵衛佐・三位の中將殿に・出あひ・對面し給ひて・頼朝・親の會稽の・恥を雪め・朝の怨敵を・退けんと・仕り候事は・案の內に候ひき・さ・され共かやうに・まのあたり御目に懸るべしとは・露思ひこそ・より候はざりしか・かゝれば定て・八島の・大臣殿御見舞にも・入つとこそ存じ候へ・

抑〻奈良を・ほろぼされ候事は・故入道相國の・御はからひか・又は・時にとつての御事か・以外の・御罪業にてこそ候はんずれと・宣ひければ・三位の中將の・御返事には・重衡都を出しより・此かた尸をば・山野にも・さらし・蒼海の底の・みくづと・ならんとこそ・思ひしに・命生て・是まで下べしとは・露・思ひこそ・よらざりしか・次に南都炎上の事は・故入道相國の・はからひにもあらず・又重衡が・發起にても候はず・親の・命に隨ふならひ・衆徒の惡行を・靜めんが爲に・罷向うて・候ひしに・不慮に・伽藍の・滅亡する事・力及ばざる次第也・凡朝敵を・平ぐる者の・七代までさかふると・いふ事は・極めたる僻事也・其故は・御邊も定て・しり給ひたるらんやうに・保元已後は・故入道相國・度々の朝敵を・たひらげて・不次の賞を・授られ給ひしより・此かた・當家の榮花・たれ・肩をならぶべしとも・見えざりき・されば其身・一期を・限て・子孫かくなるべしやは・殷湯は・夏臺に・とらはれ・文王は・羑里に・とらはるといへり・されば・いかに武き・兵なれ共・敵の手に・とらはれて・命を捨るならひ・ためし・おほき事共なり・重衡一人に・限らねば・全う恥にて・はちならず・只芳恩には・急頸を・刎らるべしと・宣ひて・其後は・物をもの給はず・梶原を・始として・御前に候ひける侍共・あつばれ大將軍やとて・皆袖をぞ・ぬらしける・されば共・此人は・奈良を亡し給へる・伽藍の敵とて・大衆・定て申旨もや・あらんずらんとて・伊豆國の住人・狩野の介宗持に・預らる・其體・冥途にて・罪人共が・七日々々に・十王の手へ・わたさるらんも・是には・過じとぞ

見えし・狩野の介は・同じ東の武士ながら・萬に・情ある者にて・三位の中將殿を・やう〳〵に・もてなし奉る・或時・湯殿しつらひ・御湯ひかせ奉る・三位の中將・且は嬉しうも・思はれけり・且は又・かやうに・身を清て・近う・きらるゝ事もや・あらんずらんと・思はれけるに・さはなくて・齡二十ばかりなる・女房の・色あはひ・誠に・うつくしかりけるが・目結の帷に・しろき・湯まきして・湯殿の戸・おしあけて・參りたり・三位の中將・あれは・いかにと宣へば・是は兵衞佐殿より・御垢に・參らせ・られて候とぞ・申ける・良あつて・又十四五許なる・めのわらはの・しろき小袖・うちかづき・たりけるが・楾盥に・櫛そへて・持て・參りたり・二人・かいしやくし奉つて・御湯・ひかせ奉り・髮洗ひなんどして・あがられけり・此女房・かへるとて・何事にても・おぼしめされんずる・御事をば・承つて・申せとこそ・兵衞佐殿より・さふらひつれと・申たりければ・三位の中將の・御返事には・重衡今生に・一人の子・なければ・何事をか・思ふべき・但ちかう・きらるゝ事もや・あらんずらん・髮ぞ・そりたきとぞ・宣ひける・此女房・かへり參つて・此由・申たりければ・兵衞佐・それ思ひも・よらぬ事なり・其故は・賴朝が親の敵・とは・いひながら・朝の怨敵と・なれる人を・私にては思ひよらずとぞ・宣ひける・其後・三位の中將・守護の武士に・むかつて宣ひけるは・扨も有つる女は・優に・いたいけしたる物かな・いかなる者ぞ・名をば何と・言やらんと・宣へば・狩野の介・さん候あれは・木瀨河の長者が・娘にて候が・みめかたち・ならびなく・心ざま・世にす

ぐれ・たりしによつて・此三四年が間・兵衞佐殿に・めしつかはれ候名をば・千手の前と・申候成
とぞ・申ける・其後兵衞佐・此よしを聞給ひて・或時千手の前を・花やかに・出立せて・三位の中將
の・かたへつかはさる・其暮ほどに・しも雨すこしふつて・物哀なる・折ふし・千手の前・琵琶・琴
持せて參つたり・狩野の介も・おとなしき・家子・郎等・十餘人・引具して・御そば・ちかう參り・
三位の中將殿に・酒をすゝめ奉る・千手の前・杓をとる・三位の中將・すこしうけて・いと興もな
げに・見えられければ・狩野介・申けるは・能々御宮仕仕れ・懈怠にて・賴朝うらむなとの・仰
を・まかり蒙て候へば・御宮づかへ仕るべし・それ〳〵・や御前・何にて
も・一聲申て・酒すゝめ奉り給へと・申ければ・千手の前・杓さしおき・羅綺重衣たる・情なき事を・
機婦に・妬と云・朗詠をぞ・したりける・三位の中將・此朗詠・せん人をば・北野の・天神の・日々
に三度かけつて・守らんとの・御ちかひ・渡らせ給ふなる・され共・重衡・今生は・かく捨られ奉り
ぬ・今は助音しても・何にかは・せん去ながら・罪障・輕みぬべき事あらば・なびき奉るべしと宣へ
ば・千手の前・しづめて・十惡といふとも・猶引接すといふ・朗詠して・極樂ねがはん人は・皆彌陁
の名號を・唱ふべしと云・今樣を・二三度うたひ・すましたりければ・三位の中將・其時・盃かたぶ
けらる・三位の中將の盃を・千手の前にたぶ・千手の前・給つて・狩野の介にさす・狩野の介が・
飲ける・時・千手の前・琴をぞ・ひきすましたる・三位の中將・あな面白や・普通には・此樂をば・

五常樂とこそ・申せ共・重衡が・今の心には・後生樂とこそ・觀ずべけれ・さらば・往生の急を・ひ
かんと・戲れ給ひ・琵琶を・とり・天柱を・ねぢ・皇鑾の急を・ひきぞ・すまされたる・三位の中將・
琵琶・ひきならし・燈暗うしては・數行虞氏が・涙・夜深うしては・四面楚歌の聲といふ・朗詠をぞ・
し給ひたる・此詩の心は・むかし・漢の高祖と・楚の項羽と・位をあらそひ・八ヶ年が間に・合戰す
る事七十餘度・戰ひ毎には・項羽勝ぬ・され共終に・項羽まけて・亡し時・虞氏といへる后に・餘波
を・をしまれたりし心なり・いとやさしうぞ・聞えし・三位の中將・是は此世の・思出なるべし・何
事にても・今一聲と・宣へば・千手の前・又しづめて・一樹の陰に・やどりあひ・一河の流を・むす
ぶも・是みな・前世の契りなりと言・白拍子を・
御事は・中々申に及ばず・狩野介以下の・武士共も・みな・感涙をぞ流しける・三位の中將の・
はすや・かゝる・東の奥にも・優に・やさしき・女のあるにこそとて・餘波・をしげにぞ・みえられ
ける・明ければ・此女房歸り參りたり・折節・兵衞佐殿は・持佛堂に・法花經讀て・おはしけるが・
千手が歸り參りたる由を・聞給ひて・わう賴朝は・千手に・おもしろくも・仲人をば・したりつる・
物かなと・宣へば・齋院の・次官親能・御前ちかう・物かいて・候ひけるが・筆さしおき・こは・何
事にて・候やらんと・申たりければ・兵衞佐・平家は・代々の歌人・才人と・聞に・あはせて・こよ
ひ・夜もすがら・立聞つるに・三位の中將の・琵琶の撥音・朗詠の曲・誠に面白かりつる・ものかな

と・宣へば・親能さん候・平家は・代々の歌人・才人たる上・一とせ小松の内府を・始奉つて・此人々を・花にたとへて・候ひしに・中にも・此重衡の卿をば・牡丹の花にこそ・たとへて・候ひしか・たれもゆふべ・承るべう候ひつるを・聊まぎるゝ事の・候ひて・承らず候・此のちは・常に・立聞へば・千手の前は・中々に・物思とぞ・成にける

横笛

中にも・小松の三位の中將・維盛卿は・身がらは・八島に有ながら・心は・都へのみぞ・通はれける・古郷に・留置し・をさなき者共を・今一度・見もし・みえばやとは・思はれけれ共・さるべき便りも・なかりければ・與三兵衛重景・わらは石童丸は・船に心得たればとて・舍人武里・彼等三人計を・召具して・壽永三年・三月十五日の夜の・曉がた・八島の館をば・忍びつゝ・まぎれ出させ・給ひて・阿波國・結城の浦より・船に乘つてぞ・出られける・鳴門の奥を・おし渡り・和歌・吹上・衣通姫の神と・あらはれ給ひけん・玉津島の明神・日前國現の・御前の渚を・漕過て・紀伊の湊にこそ着給へ・是より浦づたひ・島づたひして・都へ上らばやとは・思はれけれ共・叔父本三位の中將・重衡卿の一人・生捕に・せられて・京田舍・引しろはれ・うき恥を・さらし・給ふだにも・心うきに・又維盛さへ・とらへ搦られて・父の尸に血を・あやさん事も・心うければとて・都へとは千度・心はすゝまれけれ共・心に心を・からかひて・それより・高野の御山に・のぼり・知たる聖を・尋給ふ・此聖と申は・三條の・齋藤左衞門大夫・茂頼が子に・齋藤瀧口・時頼とて・もとは・小松殿に・候ひけるが・十三の年・本所へ參りたる・建禮門院の雜仕に・横笛と云女あり・瀧口・かれに・最愛して・通ひける由・聞えしかば・父の茂頼・此由を・聞て・或時に瀧口を・ようで云けるは・汝一人・持ぬれば・いかならん人の・緣にもなし・出仕なんどの・便にも・せさせんとこそ・思ひしに・かゝるいふかひなき・横笛とかやに・相具したん也・汝此事・不孝の・至なるべしなんど・やう〳〵に諫ければ・瀧口思ひけるは・西王母と・いつし者も・昔はありて今はなし・又東方朔と・聞えしも・名にのみ・聞て目には・みず・老少不定の境は・石火の光に・異ならず・縱人・定命を・持といへ共・七十八十をば・過さず・其間に・人の身の・さかんなる事は・纔に・廿餘年を・限れり・いく程ならぬ・世中に・おもはしき者を・見んとすれば・親の命を・背に似たり・又親の命に・隨はんとすれば・女の心無慚なり・夢まぼろしの・世中に・見にくき者を・片時もみて・何にかはせん・しかじ善知識なり・浮世を・いとひまことの道に・入なんには・とて・瀧口十九にて・もといりきり・嵯峨の奥・往生院なる所に・念佛してぞ・居たりける・横笛・此よしを聞て・我をこそ・捨め・さまを・かへけん事の無慚さよ・縱さまを・かふる共・などみづからに・此由・かくとは・しらせざりけるぞや・縱人こそ・心

づよく共・今一度尋て・恨ばやと思ひ・ある暮がたに・内裏をば・忍びつゝ・まぎれ出・嵯峨の方へぞ・あこがれ行・末の松山波こさば・うらみむとこそは・思ひしに・會坂山の・さねかづら・なほくる人の・なかるらん・比は衣更着・十日あまりの・事なれば・梅津の里の春風に・餘所の匂ひもなつかしく・大井川の月影は・霞にこめて・朧なり・一かたならぬ・哀さを・たれゆゑ・とこそ・おもひけめ・往生院とは・聞つれ共・さだかに・いづくの坊共・しらざれば・このも・かのもに・たゝずんで・尋かねるぞ・無慚なる・爰に・住あらしたる・僧坊に・念誦の聲の・しけるを・横笛・瀧口が・聲に聞なして・具したりける・女をいれて・いはせける・ことは・横笛こそ・是まで參りて・候へと・云入たりければ・瀧口・胸打さわぎ・淺ましさに・障子のひまより・みければ・ねくたれがみの・たえまより・涙の露ぞ・ところせく・こよひ・夜もすがら・ねざりけりと・おぼえて・おもやせたる・けいき・尋かねたる・ありさま・誠に見るも・いたはしくて・いかなる・道心者なり共・心よわくも・なりつべし・瀧口・やがて・人を出して・是には・さやうの事も候はず・いかさまにも・門違にてもや・候らんとて・終に・あはでぞ・かへしける・其後・瀧口入道・あるじの僧に・むかつて・申るは・是も世に・靜なる所にて・念佛に・障碍は・候はね共・あかで別し・女に・住居を・見えて・候へば・縦一度こそ・候とも・なほも・したふ事・あらば・定て・心もはたらきぬべし・さらば暇申てとて・往生院をば・泣々立出・それよりも・高野のお山に・上り・法憧院・梨の坊なる所に・行すましてぞ・ねたりける・横笛も・扨しも・有べきならねば・都に歸り・さまをかへ・奈良の・法華寺に・行ふよしし・聞えしかば・瀧口入道・此由を・傳へ聞て・斜ならずよろこび・高野の御山より・一首の歌をぞ・送ける

そるまでは恨しか共梓弓・まことの道に入ぞうれしき・

横笛が・返事には

そるとても何か恨ん梓弓・ひきとゞむべき心ならねば・

横笛は・其思ひの積りにや・程なう・はかなく・成にけり・瀧口入道・いよ〳〵おこなひ・すましてぞ・ゐたりける・父も不孝を・ゆるしけり・したしき人は・高野の・御山の・聖の御坊とて・もてなしければ・知たる人は・瀧口入道・とぞ・申ける・其後三位の中將・瀧口に・尋あひて・み給へば・都に有し時は・布衣に・立烏帽子・衣紋を・つくろひ・鬢を・なで・さしも・花やかなりし男ぞかし・出家の後は・けふぞ・はじめて・見給ひける・いまだ・卅に・だにも・ならぬが・老僧姿に・やせおとろへ・濃墨染に・おなじ袈裟・香の煙に・しみかをる・さかしうも・行いりたる・道心者・羨しくぞ・思はれける・晋の七賢が・竹林寺・漢の四皓が・籠りけん・商山籠の・住居も・是には・過じとぞみえし

高野の巻

其後・瀧口入道・三位の中將を・見奉つて・こはさらに・うつゝ共・覺候はぬ・ものかな・日來は・讃岐の・八島に・とこそ・傳へ承りつるに・唯今・何として・是までは・つたはらせ・おはしましたるやらんと・申たりければ・三位の中將・さればとよ・都をば・人なみ〳〵に・まぎれ出・西國のかた迄は・落ゆきつれ共・大かたの・うらめしさも・去事にて・古郷に・留置し・をさなき者共の・事をのみ・あさな・ゆふな・思ひゐたれば・物思ふ色の・いはぬに・しるうやありけん・大臣殿も・二位殿も・いかさまにも・是は・池の大納言が・やうに・源氏に・二心ありとて・終に打とけ・給はねば・いとゞ心も・とゞまらずして・八島の館をば・忍びつゝ・まぎれ出・是まで・迷ひきたれる也・さればかゝる・ついでに・火の中・水の底へも・入なばやと・思ひ定てあるぞとよ・又熊野へ・參らんと・思ふ宿願もありと・宣ひも・あへず・涙に咽び給へば・瀧口入道申けるは・憂世の中の・有樣は・とても・角ても・候ひなん・唯ながき世の・やみこそ・心うく候へとぞ・申ける・やがて・瀧口入道を・先達にて・堂々順禮し給ひつゝ・奥の院に參り・石室の・やうを・をがみ・給ふに・心も言葉も・及ばれず・昔・延喜の聖代・御夢想の・御告あつて・檜皮色の・御衣を・此御山へ・送らせ給ひて・勅使中納言資澄卿・般若寺の僧正・觀賢・二人此御山へ・參らせ給ひ・奥の院に參り・石室の

御戸おしひらき・御衣を・きせ奉らんと・し給ふに・霧あつく・へだたつて・大師・をがまれさせ給はず・時に僧正・ふかく愁涙・し給ひて・此かたいまだ・十重禁戒を・犯せず・されば・などか・をがまれさせ給はざるべき・とて・五體を・地になげ・發露・啼泣・し給へば・やう〳〵・霧晴て・山の端より・月の出るが・ごとくにて・大師・をがまれさせ給ひけり・時に僧正・隨喜の涙を・流し・御ぐしの・ながう・おひのびさせ・給ひたりけるを・そり・おろし奉つて・御衣を・きせ奉らせ・給ひけり・彼御弟子・石山の・內供奉祐の・いまだ其ころ・童形にて・供奉せられ・たりけるが・是も大師を・をがみ奉らずして・ふかく涙に・しづんで・おはしけるを・僧正・彼手をとつて・大師の御膝のほどに・おしあて給へば・異香薰じて・一期うせず・則・石山の聖敎に・とゞまつて・今にありとぞ承る・大師・御門の・御返事に・の給はく・我昔・薩埵に・あうて・まのあたり・悉・印明を・傳へき・無比の・誓願を・おこして・邊地の異域に侍り・晝夜に・萬民を・あはれんで・普賢の・悲願に・住す・肉身に・三昧を稱して・慈氏の下生を・待と・云々・彼摩訶迦葉の・雞足の洞に・籠て・四頭の・春の風を・期し給ひけむも・是には・過じとぞ・見えし・高野山は・帝城をさつて・二百里・鄕里を離て・無人城・晴嵐・梢を・鳴しては・夕日の影・靜なり・八葉の峯・八の谷・峨々として聳え・瀏々として・峰高し・花の色は・林霧の底に・綻び・鈴の聲は・尾上の雲に・響けり・瓦に・松おひ・墻に苔むして・誠星霜久しく覺

たり・御入定は・承和二年・三月廿一日・寅の一點の事なれば・過にしかたも・三百餘歳・今五十六億・七千萬歳の後・二尊の出世・三會の曉を・またせ給ふらん・久しさよ

維盛の出家

維盛が・命の・いまだ・卅にだにもならぬが・雪山に・啼らん・鳥のやうに・けふとも・あす共・しらぬ事こそ・かなしけれとて・涙ぐみ給ふぞ・哀なる・其夜は・三位の中將・瀧口入道が・庵室に・とゞまつて・昔・今の事共を・互に・語り合て・なきぬ・わらひぬ・し給ひける・深行まゝに・聖が行儀を・見給ふに・心も言葉も及ばれず・至極・甚深の・床の・上には・心地(イしりん)の玉を・琢らんとも・疑はれ・後夜・晨朝の・鐘の・聲には・生死の眠を・醒らんとも・覺えたり・通ぬべくは・角てもあらまほしくぞ・思はれける・明ければ・三位の中將・戒の師・請じ・さまかへむと・し給ひけるが・輿三兵衞重景・わらは・石童丸を・めして・宣ひけるは・縱維盛こそ・道せばき・者にて・かくなる共・汝等は・是より都に上り・いかならん人にも・宮づかうて・身をも・たすけよ・かしと・宣へば・二人の者共・涙に咽て・しばしは・御返事をも申さず・良あつて・重景涙を・おさへて申けるは・父にて候ひし・與三左衞門景安は・去ぬる平治に・故大臣殿の・御供仕つて・二條堀河の・御戰ひの時・鎌田兵衞政清と・くんで・惡源太に討れ候ひぬ・其時・重景・二歳七歳にて・母には・おくれ候ひぬ・

たれ不便と申者も・候はざりつるに・故大臣殿の・わが身に・かはりたる者の・子なればとて・斜ならず・御不便にせさせ・おはしまして・君九の御時・御元服の・候ひけるに・かたじけなくも・ともに・もといり・とりあげられ・參らせて・盛の字をば・五代に・つけん重の字をば・松王に・たぶとて・扨こそ・重景とは・めされ候ひしか・又童名を・松王と・申事も・生れて五十日と・申に・父が抱て・參りければ・故大臣殿・此家を・小松と・いへば・いはうて・松王と・つけんとて・かやうにも・めされ候ひき・されば・御往生の御時も・此世の・御事共をば・はや・思召忘させ給ひて・一事も・仰出され候は・ざりつるにも・中にも・重景は・少將殿の・御かたに候ひて・よく〳〵御宮づかひ仕れ・相構て・御心に・たがひまゐらすなと・最後の仰にも・候ひき・されば・取分・此御かたに・候て・ことしは既に・十七年・上下・なう・遊びたはぶれ・參らせ候ひぬ・されば・君の神にも・佛にも・ならせ給ひて後・我等のたのしみ・さかえ・世に・あらば・千年の・齡をたもつべきか・縱萬年を・送る共・終には・をはりの・なかるべきか・とて・みづから・もとどり・おしきつて・瀧口入道に・そらせて戒をぞ・たもちける・わらは・石童丸も・八より・つき奉つて・ことしは既に・十二年・重景にも・おとらず・思はれ・參らせ・候ひき・とて・是もみづから・もとゆひぎはより・髮をきる・三位の中將・二人の・者共の・かくさきだつ・有樣を・見給ふに・つけても・いとゞ・心ぼそくぞ・思はれける・流轉三界中・恩愛不能斷・棄恩入無爲・眞實報恩者と・此文を・三たび唱て・そ

り給ひけるに・つけても・故郷に・とゞめ置し・をさなき者共を・今一度・みもし見えも・して・かくならば・いかばかりか・心やすかりなんと・宣ひけるぞ・いとほしき・其後・三位の中將・舍人武里をめして・宣ひけるは・日比・汝をば・都へ上せんと・いひつれ共・今は八島へ・參るべし・抑唐皮といふ鎧・小烏といふ太刀は・當家嫡々に・つたはつて・維盛までは・九代なり・新三位殿に・預申たる也・もし當家の代と・なつてふたゝび・都へ歸り上る事あらば・急六代に・たぶべしと・申せよとぞ・宣ひける・其後・三位の中將・山伏修行の・まねをし・笈をかけ・瀧口入道を・先達にて・熊野へ參り給ひけり・高野の御山をたつて・山東へこそ・出られけれ・藤代の王子の・御前より・始て・王子々々を・ふしをがみ・やう〳〵・さし給ふ程に・千里の濱の北・岩代の王子の・御前にて・かり裝束したる武士・十四五騎・三位の中將殿に・行あひ奉る・三位の中將・唯今是にて・とらへ搦られ・もやせんすらん・其儀ならば・人手に・かゝるなとて・かたはらに・立より・刀の柄に・手を懸て・相待れける處に・是等・思ひの外に・馬よりおり・ふかう畏てぞ・候ひける・三位の中將・はやみしりたるにこそ・たれなるらんと・思はれければ・いとゞあしはやにこそ・過させ給ひけれ・是は・當國の住人・湯淺の權の頭・宗重入道が子・湯淺の七郎兵衞宗光と・申者也・郎等共が・唯今の・修行者は・たれなるらんと・問ければ・あれこそ・平家の嫡々・小松の・三位の中將殿にてましませ・日來は讃岐の・八島にとこそ・傳へ承りつるに・唯今何として・是までは・つたはらせ・おはしまし・たるやらん・はや・さまかへ給ひけり・與三兵衞重景・わらは石童丸も・つき奉つて・出家したりけるぞや・參りて・御目に懸らばやとは・存じつれ共・定て・御憚りもやあらんすらんと思ひて・さてとほりたりつる也・いとほしの・御有樣やとて・涙に咽びければ・郎等共も・みな袖をぞ・ぬらしける

維盛の熊野參詣

三位の中將・やう〳〵さし給ふ程に・岩田川にも・なりしかば・此川の・ながれを・一度も・渡る者は・惡業煩惱・無始の罪障も・消なる物をと・世にも・たのもしげにこそ・宣ひけれ・瀧の尻・高原・十でう・熊瀨河・柚の川・御輿が嵩をも・過行ば・發心門にぞ・成にける・本宮に參り・拜を・參らつさせ・給ひけるが・法施を・とゞめて・此山の地景を・見給ふに・心も言葉も及ばれず・大悲擁護の霞は・熊野山に・たなびき・靈驗無雙の神明は・音無川に・跡を垂・一乘修行の峰には・感應の月・曲なし・六根懺悔の底には・忘想・露を・むすばず・いづれも〳〵頼しからずと・言事なし・其夜は・三位の中將・本宮・證誠殿の・御まへに通夜して・夜もすがら・敬白し給ひけるは・父の・大臣も・此御前にてこそ・命をめして・後生を・たすけさせおはしませと・申させ給ひし・御事までも・思召出して・本地・彌陀如來にて・ましませば・攝取不捨の本願・あやまり給はず・九品安養の淨土へ・

引接し給へと・申されける・中にも・故郷に・とゞめおきし・妻子安穩にと・祷られけるぞ・浮世を・いとひ・實の道に・入給ふとは・申せども・安執・猶・つきせずと・おぼえて・かなしき・明ければ・三位の中將・御前の津より・船にのり・新宮に參り・神の倉を・をがみたまふに・心も詞も・及ばれず・岩松高く聳えては・嵐・妄想の夢を・やぶり・流水清く・流ては・波煩惱の垢を・すゝぐらむ共・覺えたり・飛鳥の社を・ふしをがみ・佐野の松原・さし過て・野徑の露に・袖ぬらし・那智へぞ・參り給ひける・三の御山は・いづれも・とり〳〵なりとは・申せ共・那智山・殊にすぐれたり・三重に・みなぎりおつる瀧の水・數千丈まで・よぢのぼれり・觀音の靈像は・岩の上に・あらはれて・補陀落山とも・いつつべし・霞の底には・法華讀誦の聲・聞ゆ・靈鷲山共・申つべし・昔花山の法皇・寛和の夏のころ・十善の帝位を・すべらせ給ひて・此御山にして・九品の淨刹を・行はせ給ひし・御庵室の・きう跡には・昔を忍ぶばかりにて・老木の櫻のみぞ・のこれる

維盛の入水

其夜は・三位の中將・瀧本に・詣でつゝ・千手堂に・念誦して・おはしける庵に・那智籠りの僧の中に・三位の中將を・よく見知奉りたりける・老僧の一人・候ひけるが・爰なる・修行者を・たれ成らんと・おもひ給へれば・平家の嫡々・小松の・三位の中將殿にて・ましく〳〵けるぞや・あの人の事ぞかし・過にし安元元年・三月十三日に・法皇・法住寺殿にして・臨時の御經供養・幷に・五十の御賀の・有し時・あの人の・いまだ其比・四位の少將にて・十八か・九に・なられしが・當家にも・他家にも・みめよき・殿上人に・ゑらまれ・櫻をかざして・青海波をまはれし・階下には・大臣・關白・つき給ひ・父の大臣は・大納言の・右大將・叔父の・宗盛・中納言にて・着座せられ・たりし・景氣・たれ肩をならぶ・べし共・見えざりき・女房達は・太山木の中の・楊梅とこそ・戲給ひしか・嵐に・たぐふ花の・匂ひ・風に飜す・舞の袖・天をも照し・地をかゝやかす・計也・唯今に・大臣の・大將を・待うけ給へる・人よとこそ・我も・人も・申あひたりしに・夜の間に・かはるならひ程・口惜かりける事・あらじ・只今の御有樣の・いたはしさよとて・涙に咽ければ・參籠の・行者達も・皆うちごろもの・袖をぞ・ぬらしける・明ければ・三位の中將・濱の宮の・お前より・一葉の船に・棹さして・萬里の蒼海に・浮び給ふ・漕行船の・跡のしら浪・羨しくぞ・立歸る・遙の奥に・おし出して・見給へば・一の島あり・あれは・いかにと・宣へば・あれこそ・帆立島共・申・又大平石共・申候なりと申・三位の中將・彼島に船を・寄させ・船よりあがり・松の枝を削て・指の・さきより・血をあやし・泣々・名跡をこそ・書れけれ・祖父・太政大臣平の朝臣清盛公・法名・淨海・其嫡子・小松の内大臣重盛公・法名・照空（イ淨蓮）・其子・小松の三位の中將維盛・法名圓淨（イ淨圓）・年廿七と・申・三月廿九日に・那智の奥にして・沈畢ぬと・書とゞめ・奥には・一首の歌をぞ・かゝれたる

故郷の松風いかに恨らん・底のみくづと沈む我身を・

又船に・とりのつて・海にぞ浮び給ひける・海路遥にみ渡せば・哀を催すたよりあり・海士の釣船の・波の上に・うきぬ・しづみぬ・ゆられけるを・見給ふに・つけても・我身の上とぞ・思はれける・比は三月廿九日の・事なれば・春も・既に・暮なんとして・けふを限りの・春なれば・さこそは・餘波・惜かりけめ・昔は・九重の・内にして・春の花に・歌をよみ・今はきうしに・夙夜して・秋の月に・詩を作れり・或は・八島の磯の・苫屋に・旅ねして・波間の月に・心をくだき・或は・門司・赤間の波の上に・うきねして・唐櫓の音に・夢を醒し・歸る鴈の・雲井に・おとづれ行を・み給ふに・付ても・古里へ・言傳せまほしく・蘇武が胡國の・恨までも・おもひ殘せる・曲ぞなき・其後・三位の中將・西に向つて・最後の十念・し給ひけるが・合掌を亂り・念佛を・とゞめて・聖にむかつて・宣ひけるは・哀・人の身に・妻子をば・持まじかりけるぞや・今生は・かく妻子に・心をつくす・のみならず・後世菩提までの・妨となる・心うさよ・唯今も又・思ひ出るぞや・おもふ事を・心にこむれば・罪深からんなれば・懺悔するなりとぞ・宣ひける・瀧口入道・誠に・其は・さぞおぼしめされ候らん・高きも・賤も・恩愛の道は・力及ばず候・一夜の契りを・こむるも・前世の宿緣・淺からず・まして夫婦は・五百生迄の・宿緣とこそ・承り候へ・生者必滅・會者定離・うき世の・ならひにて候へば・縦・遅速こそ・候共・おくれ・さきだつ事の・終になくて・しもや・候べき・中にも・大六天

の魔王は・欲界を・我まゝに・領して・其中の・衆生の生死を・はなれんと・する事をば・極て・をしみ・或は・親となり・子となり・或は・夫となり・妻となつて・諸の・方便を・めぐらして・さまたげんと・仕候を・三世の諸佛は・一切の衆生を・御子のごとく・おぼしめされて・極樂淨土の・不退の寶土に・すゝめいれんと・し給ふを・人の身に・妻子と・申者が・生死を・はなれぬ・繩なるによつて・佛の大きに・禁め給ふ是なり・源氏の先祖・伊與入道賴義は・貞任・宗任を・責し十二年の・合戰の間に・人の頸を・きる事も・一萬五千人・其外山野の獸・江河の鱗・その命をたつ事・幾千萬と言・數をしらず・されば共・一念・善提心を・おこすによつて・往生する事を・得たり・かく罪深かりし賴義も・心つよきが故に・往生をとぐ・まして君は・させる罪業も・渡らせ給はねば・などか淨土へ・參らせ給はでは候べき・御先祖・平將軍貞盛・相馬の將門を・追討し・東八ヶ國を・打なびけ・させ給ひしに・あたらせ給へば・君こそ・日本の將軍とも・ならせ給ふべけれども・御運つきさせ給ひぬる上は・力及ばせ給はず・中にも・出家の功德は・莫大なれば・前世の罪業も・定て亡びさせ・給ひなんず・百千歲・百羅漢を・供養し・縦人あつて・七寶の・塔婆なたてん事・高さ三十三天に・至ると言共・一日の出家の功德には・なほ及ばずとこそ・見えて候へ・其上・彌陀如來は・西方淨土を・莊嚴し・一念十念をも・嫌はず・十惡五逆罪をも・導かんといふ・悲願ましますなり・彼願力に・乘せんに・廿五の菩薩は・妓樂歌詠して・法性の御戸を・おしひらき・

唯今西方より・來りたまふべし・觀世音菩薩は・金蓮臺を捧げ・大勢至菩薩は・百福莊嚴の・御手を
のべ・無量の聖衆と共に・御手を授て・むかへ・參らつさせ給ふべし・唯今こそ・千尋の・底に・沈
むと・おぼしめされ候共・終には・紫雲の上にこそ・のぼらせ給はんずれ・成佛得脫して・さとりを
ひらかせ給はゞ・娑婆の故郷に・立歸り・さりがたく・おぼしめされし・人々をも・又わりなく・思
ひ參らつさせ・給はん御かたをも・むかへ・參らせ・給はんは・何の御疑か・候べき・相構て・餘
念おこさせ給ふなとて・頻に・鐘打ならし・念佛をすゝめ奉る・三位の中將・忽妄念・飜し・高
聲に・念佛數百反・唱へ給ひて・南　と唱る・聲とともに・海にぞ・沈給ひける・與三兵衞重景・わ
らは・石童丸も・つゞいて入・舍人武里も・つゞいていらんとしけるを・聖いかで・莫大の御遺言を
ば・たがへ參らせんとは・仕るぞとて・取留ければ・力及ばず・舟底に・たふれ伏・をめきさけぶ事・
斜ならず・もしも・うきもや・あがり給ふらんと・しばしは見奉りけれ共・三人ながら・終に・しづ
んで・みえ給はず・日もやう〳〵暮なんとして・海上もくらく・成しかば・むなしき船を・漕もどす・
落る涙・かいのしづく・わきて・いづれも・みえざりけり・扨しも・有べきならねば・聖は・高野の・
お山へと・行ければ・舍人は・八島へ參りける・心の中おしはかられて・あはれなり

維盛の北方の出家（あひ）

去程に・舍人・武里・讃岐の・八島に・參つて・此由申たりければ・大臣殿も・二位殿も・さればこ
そ・日來は・都の事をのみ・朝な・夕な・宣ひし程に・如何樣にも・是は・池の大納言がやうに・源
氏と・ひとつに・なつて・都へ・上らせ給ふに・こそと・世にも・心許なく・思ひしに・扨は・さや
うに・成給ひたる事よとて・涙に咽ばせ・おはします・三位の弟・新三位殿や・少將殿や・丹後の守
殿は・三人ひとつ所に・さしつどひ・故大臣殿に・はなれ奉つて後は・此人をこそ・高き山・ふかき
海共・賴參らせつるに・扨は・左樣に・成給ひたる事よとて・涙に・咽給ひけり・其後新三位殿・舍
人武里をめして・御文は・なきかと宣へば・御文は・候はず・御詞にて・仰られ候ひしは・左中將殿・
備中の守の殿も・所々にて・うせ給ひぬ・又維盛さへ・角なりゆけば・さこそは・人々の・心ぼそう・
思ひ給ふらめ・其外・唐皮・小鳥の事迄も・一日片時・ながらふべし共・覺えずとて・ふししづみてぞ・なかれける・去程に・小松の・三位
の中將維盛卿の・北方は・西山の麓・大覺寺・菖蒲谷の坊に・忍うでおはしけるが・或夜の曉か
た・ね覺して・宣ひけるは・あはれや・三位の日來は・月に一度の・おとづれも・有つるが・此程・かきたえ・たる事よ・せめて文を・奉つて・返事を・成とも見て・なぐさ
まばやと・思ふなりとて・次の日・齋藤五を・お使にて・讃岐の八島へ・下されけり・齋藤五・程な
う歸り參り・たり・北方・さていかにやと・宣へば・さん候・上には・はや・去ぬる三月十五日の夜

の・暁がた・八島の館をば・忍びつゝ・こぎれ出させ給ひて・阿波國・ゆきの浦より・お船にめして・紀伊の湊に・あがらせ給ひ・それより高野へ・御參りあつて・瀧口入道に・尋あはせ給ひて・堂々・順禮・せさせ給ひ・其後・瀧口入道を・先達にて・熊野へ・御參りあつて・三のお山の・御參詣・事故なう・遂させ給ひて・のち・那智の・奥にして・靜に・念佛候ひて・海に沈ませ・おはしまし候と・是は・舍人武里が・申候なりと・申たりければ・北の方・さればこそ・日ごろは・月に一度の・おとづれも・有つるが・此程・かきたえたるよと・思ひしに・扨は・左樣に・なり給ひたる事よとて・たふれ伏てぞ・なかれける・良あつて・乳人の女房・涙を押て・申けるは・上には・去ぬる・三月十五日の・夜の・暁がた・八島の館をば・こぎれ出させ・給ひて・紀の路に・つかせ給ひ・其より・高野へ・御參りあつて・其後・瀧口入道を・先達にて・熊野へ・參らせ給ひ・那智の奥にして・靜に・御念佛候らひて・海に沈ませ・おはしまし・さふらふなれば・今は中々・御歎の中の・御よろこびにてこそ・さふらへ・たれとても・終に又・ながらへ・果させ・給ふべき・御身にても・渡らせ給はず・今の御菩提をこそ・とぶらひ參らつさせ・給はんずれなんど・申せば・北方扨は・とて・御年廿五と申には・法界寺より・聖請じて・樣かへ・一向三位の中將の・後生善所をぞ・祈られける

池の大納言の・關東下向（あひ）

壽永三年・四月一日の日・改元あつて・元暦元年とぞ申ける・其比都には・崇德院神と・崇奉らんとて・大炊の御門河原に・社を作つて・同き三日の日・宮遷し有べしとぞ・聞えし・賀茂の・祭已前なりければ・法皇の沙汰として・內裏には・しろしめされずとぞ・承る・同き五月五日の日・池の大納言賴盛卿を・鎌倉より・呼下し奉るとぞ・聞えし・或時大納言・彌平兵衞宗清をめして・鎌倉より・下れと云は・いかゝ有べきと・宣へば・それは・御下候べし・宗清をも供にて・下れといふは・いかにと宣へば・尤御供仕つて・罷下度は候へども・定て・饗應・ひき手物なんどぞ・候はんずらん・西國の同僚共の・かへりきかんずる所も・餘りに・口惜う候へば・今度はまづ・罷下候まじ・宗清はと・尋られ候はゝ・いさゝか・いたはる事ありてと・仰られ候べしと・申たりければ・大納言・こはいかに・賴盛卿が・とし老衰て・ならはぬ旅の・空に趣をば・心うしとは・思はずやと・宣へば・軍場なんどへの・御出にて・だにも候はゝ・尤御供仕るべう候へども・今度は・くるしからじと・存候とて・近江國・野路まで・送奉つて・宗清京へぞ・上りける・同き五月十九日に・池の大納言賴盛卿・鎌倉入と・聞えしかば・鎌倉殿・大勢引具して・相模川の端まで・御迎に・參り・池殿に・對面申て・まづ宗清は候と・問はれければ・聊・いたはる事ありてと・宣へば・兵衞佐こはいかにと・去ぬる平治に・當家の爲に・生捕られ・宗清に・預られて候ひし時・事にふれて・芳心・施したりしかば・いつしか・其事の・忘られで・常は・戀しう候物を・扨は・下

らざりつる・事よとて・世にもほいなげにこそ・宣ひけれ・大納言も日ごろ・知行し給ひける所・少も・相違有まじかりけるうへ・其外に・究竟の所・十ヶ所・すぐつて・奉らる・宗清も下つたらましかば・所知たばんとて・内々所付・なんどして・相待れけれ共・下らざりければ・其儀なし・其後鎌倉殿・大納言を・具足し奉つて・鎌倉に歸り・是こそ頼朝が・一期に・大事の客人なれ・頼朝を・よりともと・思ひあはれんずる人々は・みなもてなし・申さるべしと・觸られたりければ・鎌倉内の・大名小名・みな我も〳〵とぞ・もてなし・申されける・金銀の類・綾羅錦繡牛馬六畜の寶を・つむ・鞍置馬だに・五百疋に及べり・同き六月廿日の日・池の大納言頼盛卿・都へ歸り上り給ひけり・今度大納言・鎌倉に・下り・命たすかり給ふ・のみならず・德付てこそ・上られけれ

藤戸

元暦元年・七月廿五日にも・成しかば・八島には・平家の一門・皆ひとつ・所に・さしつどひ・我等が都を・出しは・去年の・けふにてこそ有しか・その時の・俄にあわたゞしう・淺ましかりし事共を・互に語り合せて・泣ぬ・わらひぬぞ・し給ひける・同き廿六日に・都には・除目おこなはれて・源氏蒲の冠者範頼・參河守になさる・弟九郎義經・判官になる・同き廿八日に・判官の郎等・二人兵衛の尉・靭負の尉になさる・奥州の・佐藤三郎次信は・左兵衛尉になる・弟四郎忠信をば・右兵衛尉

にぞ・なされける・同き八月一日の日・判官は・使の宣を・給つて・五位の尉に・なつて・大夫の判官とぞ・申ける・同き八月十日あまりにも・成しかば・八島には・荻の上風・やう〳〵身にしみ・萩が下露・夜な〳〵・しげし・いつしか・稻葉打そよぎ・木葉・かつちる氣色・物思はざらむ・人だにも・暮行秋のゆふべは・物うかるべし・況平家の・人々の・心の中・おしはかられて哀也・昔は九重の・内にして・春の花を・翫び・今は・八島の磯にして・秋の月にかなしめり・其ころ・都には・西國への討手・數萬騎にて發向すとぞ・聞えし・大將軍には・源氏參河守範頼・足利の藏人義兼・伊豆の藏人の太夫頼兼・江馬の小四郎義時・侍大將には・土肥次郎實平・嫡子の・彌太郎遠平・佐々木三郎守綱・法師武者には・一品坊正賢・常陸坊良從を・先として・都合其勢・三萬餘騎・同き九月十日の日・都を立て・同き十五日に・播磨國に馳下り・室山に・陣をぞ・とつたりける・平家のかたにも・此由を聞て・さらばまづ・是を防やとて・大將軍には・新中納言知盛・副將軍には・能登守教經・侍大將には・越中の次郎兵衛盛嗣・上總の五郎兵衛忠光・衣斐二郎盛賢を・先として・都合其勢・一萬餘騎・千餘艘の船に・とり乘り・備前國に・おし渡り・兒島に・陣をぞ取たりける。源氏も又・備中國に馳下・兒島の・むかひ・藤戸に陣をぞ・取たりける・源平互に海をへだて・さゝへたり・同き廿二日の・まんだ朝・平家の侍共・小船に取乘り・源氏爰を・渡せやと・招けれ共・源氏のかたには・舟がなければ・渡しえず・其日の暮かたに・佐々木三郎守綱・其邊なる所より・男を一人・尋

出して・やとの和殿此邊を・船なくて・輙渡すべき所や・ある・しらせよとて・しろき小袖に・鞘巻そへて・引手物にぞ・したりける・此男申けるは・河の瀬の・樣なる所の候が・月頭には・東に流れ・月末には・西に流候・今は定て・西にぞ・流るらん・此邊にも・この男なくては・案内をしつたる者も・一黨・すくなう候・とぞ申ける・佐々木・いざやさらば渡て・見んとて・裸に・なつて・渡る程に・腰脇に・たつ所もあり・又鬢鬢を・ぬらす所もあり・深き所をば・少およいで・淺き所に・およぎあがる・此男申けるは・これより南次第に・淺うぞ・候らん・敵の陣も・ちかう候・御あやまち・させ・給はんとて・歸らせ給へと・いひければ・佐々木・實もと思ひ・歸りけるが・又思ひけるは・明日は・守綱爰を・先陣して・わたさんするに・下臈の心の・にくさは・又人にもや・しらせん・すらんやとの・よれとて・物いはんずる體にもてなし・とつて引寄・頸かき切て・捨てんげり・返々もなさけなかりし・事共也・同き廿三日の・まんだ朝・平家の侍共・又小舟に取乘り・源氏・爰をわたせやと・招ければ・佐々木三郎守綱が・其日の裝束には・かちの直垂に・鶏威の鎧を着・鍬形うつたる・五枚甲の緒をしめ・いか物・作りの・太刀をはき・廿四さいたる・大中黒の・矢おひ・塗籠籐の・弓もつて・黒き馬の・太逞に・金覆輪の・鞍おいて・打のり・我におとらぬ・家子郎等・廿餘騎・引具して・打入てぞ渡しける・大將軍參河守・範頼・此よしを見給ひて・昔より川を・渡したる事は・あれ共海を渡したる例なし・あれとゞめよと・宣へば・土肥の次郎承つて・急鞭鐙・あはせて・馳來り・いかに・佐々木殿・物の付て・くるひ給ふか・大將軍よりの・御諚にて・ざうぞ・とゞまり給へ・歸らせ給へと・言ければ・佐々木・當家に・おいて・馬の鼻かへしたる例候はずとて・只渡しにこそ渡しけれ・土肥の次郎實平も・留かねて・手勢三百餘騎・打入てぞ・渡しける・馬のくさわき・胸懸づくしに・たつ所もあり・くらづめを・ひたす所も・あり・又鞍つぼを越所もあり・深き所をば・少およがせて・淺き所に・さつと打あげたり平家の兵・是をみて・みな船に・とり乘て・漕むかひてぞ・戰ひける・源氏の兵共は・平家の舟に・乘移り・のりつゝてぞ・戰ひける・中にも上野國の住人・和見の八郎行重・讃岐國の住人・賀部の源次に・ひつくんで・船底にどうと落・和見が頸・かき切て・おきあがらんと・しける所を・和見が從父・越後國の住人・小林の太郎高重・賀部の源次に・落合て・ひつくんで・海へぞ入たりける・小林が郎等に・黒田の源太と・申者・小舟を漕よせ・熊手をおろして・さがしけるに・主も敵も・熊手に・取付てぞ・あがつたる・やがて賀部の源次をば・舩にとつて・おさへて・頸かき切て・捨てんげり・是を始として・源氏・三萬餘騎・打入てぞ渡しける・平家の・かたの兵共・さしつめ・引つめ・散々に・射けれ共・源氏・是を事ともせず・甲のしころをかたむけ・散々に・戰ひければ・平家かなはじとや・思ひけん・又讃岐の八島に・漕退・其間に・源氏も・兒島の地に・打わたり・馬の息をぞ・休ける・されば・佐々木に・兒島をたびける・時の御敎書にも・天竺・震旦は・しらず・日本・我朝に・おいては河を・渡したる

事は・あれ共・海を渡したる例なし・希代不思議の事也とぞ・文章にも・載られたる・同き十月十日あまりにも・成しかば・八島には・鹽風・はげしくして・磯こす波も・高ければ・源氏の船も・寄來らず・商客の・ゆきかふ事も・稀なれば・都のつても・きかまほしく・雪打ふつて・平家の人々は・いとゞ消入・心地ぞ・し給ひける

五節の沙汰（あひ）

同廿六日に・都には・五節・並に・大嘗會・有べしとぞ・聞えし・治承四年の・五節は・福原にてぞ・遂られける・其時は・八島の大臣殿ぞ・節下の・あくよには・參られし・今度は・大炊の御門の・左大臣經宗公ぞ・節下の・あくよには・參られける・九郎大夫の判官義經・かちの直垂に・白羽の矢負て・供奉・仕る・判官は・木曾にもにず・都なれたる人にて・優なる所も・多かりけれ共・平家の選屑には・なほ劣れりとぞ・人申ける・此二三ヶ年が間は・東國北國の・百姓等・或は・源氏に責伏られ・春は東作の・思ひを忘れ・或は・平家に・惱され・秋は西收の・營にも及ばず・家竈を・捨てみな山林に交り・しかば・かゝる大禮をも・爭か・行はるべきなれ共・かくのごとくぞ・遂られける・去程に・源氏ついで・責たらましかば・平家は・其年に・亡ぶべかりしを・大將軍・參河守範頼・播磨國・室高砂に・引退き・都より・遊君遊女共・呼下し・遊び戯て・のみぞ・おはしける・東國・北國の・兵共は・すゝむも・少々ありけれ共・大將の下知に・したがふならひ・力及ばず・唯國の費・民の・わづらひのみあつて・去程に・年暮て・元暦も・二年に・成にけり

巻第十一

逆櫓

元暦二年・正月十日の日・九郎大夫の判官義經・院の御所に參り・大藏卿泰經の朝臣を・以て申されけるは・平家は・宿報つきて・神明にも・はなたれ奉り・君にも・捨られ參らせて・都の外に出・西海の波の上に・たゞよふ落人と・なれり・しかるを・此二三ヶ年が・間・え責落さずして・おほくの・國々を・ふさげ候事こそ・餘に・めざましく候へ・今度・義經においては・鬼界・高麗・天竺・震旦までも・平家のあらん・限りは・責べき由をぞ・申されける・法皇・斜ならず・御感あつて・やがて・院宣・あそばしてぞ・たうだりける・判官・院宣・給つて・院の御所を出・諸國の・侍共に・むかつて・宣ひけるは・今度・義經・鎌倉殿の・御代官として・勅宣を 承つて・平家追討の爲に・西國へ・まかり向ふ・陸は駒の蹄の・かよはん程・海は・櫓掻の・たゞん限りは・責むずる也・但是は・無益・命ぞをしい・妻子ぞ悲しい・なんど・思ひ・あはれんずる・人々は・急是より・鎌倉へ・下らるべしとぞ・宣ひける・さる程に・八島には・ひまゆく・駒の足はやくして・正月もたち・二月にもなりぬ・春草暮ては・秋の風に・おどろき・秋風やんでは・又春の草になりぬ・送りむかへて・三年にもはやなりにけり・同き二月十三日に・都には・伊勢・石清水を・はじめ奉つて・廿二社に・官幣あり・是は・今度・神軍・寶劍・內侍所・三種の神器を・事故なう・都へ・返し入・奉らむとの・御祈誓の・御爲とぞおぼえたる・同き・十四日に・源氏・參河守範頼・攝津國・神崎より・七百餘艘の・舟に取乘・山陽道へ・おもむく・其弟・九郎大夫の判官義經・是も・同き・國・東河・渡邊・福島より・二百餘艘・兵船取乘・南海道へ・發向す・渡邊・神崎・兩所にて・此日頃・揃へたる・舟のとも綱・けぶそとく・折節・北風・木を折て・吹ければ・舟を出すに・及ばず・剩・大かせ・大浪に・舟共・敵わられて・修理の爲にとて・其日は・渡邊に・とゞまりぬ・同き十五日に・渡邊には・東國の大名・寄合て・抑〳〵今度の・船軍のやうは・いかゞ有べきと・評定あり・中にも・相模國の住人・梶原平三景時・すゝみ出て・申けるは・哀舟に・逆櫓を・立候ばやと・申たりければ・判官・逆櫓とは・何物にて候やらん・梶原さん候・馬は懸んと思へばかけ・ひかんと思へば・ひき・弓手へも・妻手へも・まはしやすき物にて候が・船は急度・おしなほすに・たやすからねば・とも・へに・梶を・たて・左右に・櫓を立ならべて・艫へも・舳へも・おさせ候はばやと・申ければ・判官いやいや・門出惡し・軍のならひ・ひつとひきも・ひかじとかねて・約束したるだに・あはひ惡ければ・敵に後を見するならひあり・まして・さやうにかねてより・逆支度を・せんには・なじかは・よかるべき・せんずる所・

逆櫓をも・かいさま櫓とかやをも・立たくは・人の船には・百挺千挺も・たてばたてよ・義經が・船においては・一挺も・立べからずとぞ・宣ひける・梶原重て申けるは・いや〳〵・よき・大將軍と申は・身をまたうして・敵をほろぼす候さやうに・かくべき所をも・引べき所をも・しらぬをば・唯猪武者とこそ・申候へと申たりければ・判官・よしよし・義經は・猪鹿の例はしらず・只敵をば・ひらせめに責て・かつたぞ・心ちはよきと・宣へば・梶原・天性・此殿に付て・軍せじとぞ・つぶやきける・それよりしてぞ・梶原・判官を・にくみそめ・奉つて・鎌倉殿に・讒言して・終に討せ奉りける・とぞ聞し・同き十六日の・酉の刻斗に・判官・今は・舟共・少々あらたまつたるらん・一種物・せさせよやわか黨とて・營む體に・もてなし・物具船へ・運ばせ・馬共のせて・今はとうとう・舟を出せと・宣へば・梶取共が申けるは・此風は・おきは・猶つようぞ・候はん・御あやまち・せさせ給はんとてと申ければ・判官氣色大に噴て・野山のすゑ・海川にて・死ぬるも・是みな前業の所爲也・今度・義經・鎌倉殿の・御代官として・一院の院宣を承つて・平家追討の爲に・西國へ向ふ・義經が下知を・背くおのれらこそ・朝敵よ・一定船をば・出すまじきか・出さずは・一々に・射ころせと・宣ひける・承つて・奥州の・佐藤三郎兵衞次信・同四郎兵衞忠信・片岡の太郎親經・源八廣綱・伊勢三郎義盛・武藏坊辨慶・以下の・一人當千の兵共・片手矢を・はげて・御諚にてあるぞ・一定船をば・出すまじきか・出さずば・一々に・射殺さむとて・よつびいて・向ひければ・梶取共が申けるは・矢にあたつて・死なんも同じ事・風つよくは・奥にて・馳死にしねやとて・二百餘艘の・舟の中より・たんだ五艘ぞ・出しける・五艘の船と申は・まづ・判官の御舟・田代の冠者信綱の舟・後藤兵衞實基が舟・佐藤兄弟が船・淀の江内忠俊が船也けり・但淀の江内は・舟の惣奉行たるによつて也・殘りの舟共は・或は・風におそれ・或は梶原が命にしたがつていださず・其後・判官船のへにすゝみ出・大音聲をあげて・かゝる大風・大浪に・敵打とけたらん所へ・よせてこそ・思ふ敵はうたんずれ・今は四國の浦浦へ・平家の軍兵共・さしむけたるらんぞ・ふね〳〵に・篝たいて・敵に・舟數見するな・義經が船を本舟にして・篝をまはれやとて・とりかち・おもかちに・はしりならべて・行程に・餘りに風のつよき時は・大綱おろして・ひかせけり・おすには・三日にわたる所を・唯三時に・十六日の丑の刻に・渡邊を立て・明る十七日の卯刻に・阿波の勝浦につき給ふ

櫻　場（あひ）

夜の・ほの〳〵と・明ければ・渚に・赤旗・さしあげたり・判官・あはや・爰にも・義經がまうけは・したるらんぞ・舟共ひらつけにつけて・敵の的になつて・射らるな・渚ちかうもならば・船共のり傾け〳〵・馬共海へ・追下し〳〵・舷にひきつけ〳〵・おとがせて・鞍づめひたる程に・ならば・ひたひたと・打のつて・陸へをめいて・懸よやとて・渚三町ばかりより・船共のり傾・馬共・海へおひお

ろし・舟ばたに・ひきつけ〳〵・およがせて・鞍づめ・ひたる程にも・なりしかば・ひた〳〵と・打のつて・陸へをめいてぞ・懸られける・五艘の舟に・馬五十匹・立られたり・陸にも・五十騎・ばかり有けるが・此よしを・見て・二町斗・はつと引てぞ・のきにける・判官・伊勢三郎義盛をめして・きやつ原は・けしかる者と・覺るぞ・あの中に・しかるべき者やある・一人・具してまゐれと・宣へば・承つて・義盛・五十騎ばかりが中へ・唯一騎歩ませ入て・何とか申たりけん・齢四十ばかりなる男の・裾縄目の・鎧着たりけるを・弓をはづさせ　甲を・ぬかせ乗たりける・馬をば・下人に・ひかせて・具して參る・判官あれは・いかにと・宣へば是は・當國の在廳・坂西の近藤六親家候・判官・よし〳〵・なに家にても・あらばあれ・八島の案内者に・めし具すべき也・やがて・義盛に・あづくるぞ・物具ばし・ぬがすな・にげて行ば・しやつ射ころせとぞ・宣ひける・その後・判官・親家をめして・爰をば・いづくと云ぞと・問ひ給へば・爰こそ・かつ浦・候文字には・勝浦と・書て候へ共・下臈共の・申やすきまゝにこそ・かつらとは申候に・かつ浦・候へ・判官・是聞給てや・人々軍しに・きたる・義經が・勝浦につく・めでたさよ・其後・判官・又親家をめして・當時八島に・勢は・いか程有らんなと・宣へば・千騎ばかりは・候らん・などすくなきぞ・さん候・かやうに・四國の浦々へ・五十騎百騎づつ・さしむけられて候中にも・阿波の民部重義が・嫡子・田内左衛門教義が・河野を責に・三千餘騎にて・伊與國へ越て候也とぞ申ける・判官さて・此

邊に・平家の後矢・射つべき者はなきか・などかなうては候べき・阿波の民部重義が弟・櫻場の介義遠こそ候へ・判官さらばやがて・義遠うつて・軍神にまつれやとて・櫻場が城へぞ・押よせたる・彼櫻場が城と申は・三方はぬま・一方は・堀なりけり・源氏・堀の方より・押寄て・関をどつとぞ・つくりける・義遠さんざんに・防戰ふといへ共・判官に・手痛う・責られて・叶はじとや思ひけん・究竟の馬は・持たり・打乗て・そばなるぬまより・落にけり・防所の・家子・郎等・廿餘人が首とつて・よろこび申しの・関つくり・軍神にぞ・まつられける

觀音講

其後・判官・又・親家をめして・是より・八島へは・いか程の・道ぞと・問給へば・二日路候と申・さらば・敵のしらぬさきに・よせよやとて・大坂越に・かゝつて・かけ足になつつ・あよませつ・夜もすがら・坂東・坂西・打越て・明る・十八日のまんだ朝・讃岐國・比氣田と云・所に・落着て・馬の息をぞ・休られける・爰に・京の方よりとて・おぼしくて・蓑笠・糧料・文共・少々したゝめ持たる・男一人・いそがはしげにて・出來る・判官こは・何者ぞと・宣へば・是は・都より八島へ・參り候・判官・八島へは・どれへ參るぞ・大臣殿へ參り候・判官こは・何事のお使にてか・有らむなと宣へば・此男申けるは・下臈は・御使つかまつる迄にて・こそ候へ・何事のお使をば・いかでか・しり參ら

せ候べきと・申たりければ・判官・げにもとて・おはしけるが・是も・や殿・阿波國の在廳なるが・けふ始て・平家へめされて・參るが・いまだ・八島への・案内をしらず・汝は定て・たび〳〵罷下つてぞ・有らん・是より八島への・案内者せよかしと・宣へば・此男さん候・度々罷下つて候へば・八島の案内においては・よく存知・しつて候とぞ・申ける・其後・判官・糒くはせなんど・し給ひて・さるにても・こは何事の・御使にてか・有らんなと・宣へば・此男さん候・別のやうや・候べき・當時攝津國・川尻に・源氏共・おほううかうて候を・女房の・御方より・大臣殿の・御かたへ・申され候・ごさんなれ・扨其・源氏の大將をば・たれとかきく・さん候・一人は・三河督の殿・一人は・九郎大夫判官殿とこそ・承り候へ・判官・さて其大將・判官殿ばし・よく見知奉りたるかと・宣へば・さん候・中にも・大將判官殿は・せいのちひさき男の・色の白きが・むかばのふたつさしあらはれて・殊に・しるうまし〳〵候が・殿こそよく似させ給ひて候へとぞ・申ける・判官・どこなるや殿・冥加・ばかさむとて・から〳〵と・わらはれけるが・あの男・かなたへも・こなたへも・ゆかぬやうに・はからへと・宣へば・伊勢の三郎・承つて・文共奪取・海道より・二町ばかり・ひきいれて・大きなる・松の木に・したゝかに・しめつけてこそ・通られけれ・其後・判官・文をひらいて見給へば・誠に女房の手と・覺しくて・九郎は・すゝどきをのこにて・さふらへば・いかなる・大風・大波をも・きらひさふらふまじきぞ・相構て・御勢共・ちらさで・よく〳〵御用心・さふらふべし・其外・旅の空の事までも・こまやかにこそ・かゝれたれ・判官・是見給へや・人々是こそ・天の與へ給へる・所の文よ・鎌倉殿にみせ奉らんとて・ふかう治めてぞ・寄られける・にうの屋・しろとり・高松の鄕をも・打過々々・寄給ふ程に・ある松の中に・人音餘多して・聞えければ・判官あはや・爰にも・敵の籠りたるにこそとて・人をつかはして・見せられければ・敵にてはなかりけり・比は・二月十八日・まんだ・朝の事成ければ・ある御堂に・其邊の・在地の者・寄相て・觀音講をぞ・行ひける・使歸つて・此よし・申たりければ・判官扨は・義經が・まうけにこそは・したるらめとて・かしこに・おしよせ・彼等を・おつぱらひ・酒飯を・行はれけるが・判官・講の座敷に・つきながら・式よまでは・いかゞ有べき・辨慶よめと・宣へば・承つて・物具しながら・高座にのぼり・敬白の鐘うちならし・もとよりふる山法師・なりければ・觀音講の式をば・うちわすれ・山王講の・式をぞ・ようだりける・判官・たゝば只も・立給はず・來頭は・義經さうぞ・ようとてぞ・出られける・其後・判官・又親家を・めして・扨八島の城の體は・いかにと宣へば・無下にあさまに候・鹽のひて候時は・馬の太腹もぬれず候とぞ・申ける・判官さらば・汐のひんを・まつべしとて・汐干潟よりぞ・よせられける・比は二月十八日の・午の刻ばかりの・事なれば・蹴あぐる汐の・霞とともに・しぐらうだる・中より・源氏はかりごとに・五騎・十騎・うちむれ〳〵・よせけるを・平家は・運のきはめにや・是を大勢とこそ・見てんげれ・去程に・八島には・阿波の・民部重義が嫡子・田内左衞門敎義が・河野をせめに・三千餘

騎にて・伊豫國へ・向うたんなるが・兵百餘人が頸・とつて昨日・八島へ參らせたりけるを・今日大臣殿の・御宿所にて・御實檢あり・去程に・源氏の方には・此よしを聞て・さらばまづ火を・懸よやとて・あたりの在家に・火をかけければ・物ども燒亡・出來りとて・ひしめきけるが・よつく見て・いゝや・是は敵のよせて覺候・我等無勢なり・是にて・取籠られては・かなふまじ・さらば・お舟に・めさるべしとて・陸に・ほしあげおいたりける・五百餘艘の舟共を・をめきさけんで・おしおろす・國母を・はじめ奉つて・二位殿以下の・やごとなき・女房達は・御所の御舟にぞ・めされける・大臣殿父子も・御所の御舟へぞ・參られける・其外・平大納言・平中納言・新中納言・修理の大夫・以下の人々は・思ひ〳〵・こゝろ〳〵の・船に取乘・或は・七八段・或は一町ばかり・おし出して・見給へば・源氏繼に・百騎ばかりには・過ざりけり・中にも荒手の・武者と・おぼしくて・三十騎ばかりすんだり・殊に武者一騎すゝんだり・大將とぞ見えし・大將の・其日の裝束には・赤地の錦の直垂に・紅・末濃の鎧を着・鍬形うつたる・五枚甲の・緒をしめ・金づくりの・太刀を・帶・二十四さいたる・染羽の矢おひ・重籐の弓持て・黒き馬の太逞に・金覆輪の・鞍を置て・打のり・沖のかたに・懸向ひ・鐙ふんばり・つつ立あがり・大音聲をあげて・是は・清和天皇に十代の後胤・鎌倉の兵衞佐賴朝が弟・一院の・御使檢非違使・五位の尉・九郎太夫の判官義經ぞ・平家の方に我と・思はん人々は・すゝめや・むかへ・見參せんとぞ・名のられける・奥には平家・これをみて・只今名乘は・源九郎義經ぞ・あれ射捕や・うつとれとて・さしつめ・引つめ・さん〳〵に・射るつゞいて・名乘は・田代の冠者信綱・後藤兵衞實基・子息新兵衞の尉基清・金子の十郎家忠・弟の與一親數と・名乘る・源氏はかりごとに・五騎・十騎・うちむれ〳〵・よせけるに・又續て名乘るは・奥州の・佐藤三郎兵衞次信・同き四郎兵衞忠信・片岡の太郎親經・源八廣綱・伊勢の三郎義盛・武藏坊辨慶と・名乘る・沖には・平家・是を見て・さし矢に射る・船もあり・源氏も陸に・ほしあげおいたりける・船共を・小楯にとつて・弓手になしては・射て通り・妻手に・なしては・射て通る・中にも・後藤兵衞實基は・古兵なりければ・磯の軍をば・せず・阿波の民部重義が・此三年が・あひだやうやうにして・作り立たる・八島の御所や・內裏に・火をかけて・只片時が間の・灰燼とぞなりにける

あひ

大臣殿・此よしを・見給ひて・源氏の勢・幾程もなかりける物を・餘に・あわてゝ・御所や・內裏を・やかせつる事こそ・やすからね・能登殿は・おはせぬか・陸にあがつて・一軍し給へかしと宣へば・承つて・小舟百艘ばかり・渚によす

次信が最期

中にも・越中の・二郎兵衛盛嗣・からの直垂に・黒皮の鎧を着・白柄の大長刀の・鞘をはづいて・杖につき・船の艫へ・すゝみ出・大音聲をあげて・以前に・名のつたりけれ共・海上遙に隔て・假名實名・さだかならず・いかなる人ぞ・なのれや・なのれと・いひければ・伊勢の三郎義盛・すゝみ出て・あな事も・おろかや・清和天皇に・十代の御末・鎌倉殿の御弟・九郎大夫の判官殿ぞ・盛嗣聞て・あなこと〳〵し・扨は・それは・金商人が・所從にてこそ・あんなれ・父義朝は・去ぬる・平治に・討れぬ・母常磐が・懐に・抱れて・大和・山城・まどひありきしが・其後は・捨置たりしを・故太政の入道殿の・をさなければ・不便さに・そだておき・鞍馬の寺に・兒にて・十四五までは・有しが・其後は・金商人が・糧料背負て・奥のかたへ・まどひたりし・其小冠者にこそ・とぞ申ける・義盛・わう舌の根のやはらかなるまゝに・さやうの事な・申されそ・さては・御邊は・北國砥波山の合戰に・打まけて・乞食をして・京へ逃のぼりけるとこそきけ・それをばよもあらがはじとぞ・申ける・盛嗣是は・幼少より・君の御恩を・飽まで・遙たる身の・何の不足に・乞食をば・せむ・さてわ君は・伊勢國・鈴鹿山の・山だちして・世を渡りけるとこそきけ・それをば・よもあらがはじなとぞ・申ける・金子の十郎家忠・すゝみ出て・殿原達の・雜言無益・兩方・口のきいたるまゝに・僻事を・申あはむに・夜はあけ・日は暮る共・つきすまじ・但去年の二月攝津國一谷にて・武藏・相模の・若殿原の・手なみの程は・よくしつたるらんと・いはせも果ず・後に・ひかへたる・弟の與一親敎・中さしとつて・つがひ・よつびいて・ひやうと射る・盛嗣が鎧の・胸板・うらかく程に・射させてぞ・詞戰ひは・やみにける・能登殿・此よしを見給ひて・からまき染の・小袖に・黒糸縅の鎧を着・五枚甲の緒をしめて・廿四指たる・大中黒の・矢おひ・塗籠籐の・弓持て・船のへに・すゝみ出・今度の・源氏の・大將を・射落さむとぞ・うかゝはれける・能登殿は・東國迄も・聞え給へる・つよ弓・精兵矢つぎばやの・手きゝにて・おはしければ・能登殿の・矢さきに・判官を・懸奉らじと・源氏の・兵ども・御前に・むんずと・ふさがつてぞ・候ひける・能登殿・大音聲をあげて・御前に候ひけるは・雜人原共・あまりに・見ぐるしう候・のけられ候へ・〳〵とて・さしつめ・ひきつめ・さんざんに・射給ひけるに・究竟の・兵共・五騎まで・こそ射落されけれ・中にも・判官の・身にかへて・思はれける・奥州の・佐藤三郎兵衛次信は・かちの・直垂に黒皮縅の・鎧を着・鹿毛なる馬に・のつて・御前に・むんずと・ふさがつて・候ひける・鎧のひき合・後へつつと・射出されて・馬よりまつさかさまに・どうとおつ・能登殿のわらはに・菊王丸とて・生年十八歳に・なりけるが・重目結の・直垂に・萌黄の・腹巻を着・白柄の大長刀の・鞘をはづいて・杖につき・手負たる・次信が・頸とらむと・すする所を・弟の忠信・につくき・奴のとて・中さしとつてつがひ・よつびいて・ひやうと射る・是も腹巻の引合・うしろへつつと・射出されて・いぬるにこそは・まろびけれ・能登殿・わらはが・頸敵にとられじと・急ぎ船より飛でおり・わらはを・ひつさ

げてぞ・のり給ひける・童が頸・敵にはとられね共・痛手なりければ・舟の中にて・死にけり・此菊王と申は・能登殿の御兄・越前の三位・通盛の童なり・三位討れ・給ひて・後然るべき御形見にもと・思はれける・菊王を・うたせて・よろづ・心ばそくや・おもはれけん・其後は・軍をも・し給はず・船をば・沖におし出さす・其のち・判官も・手負たる・次信を・陣の後に・かき出させ・急馬よりおり・次信が手を取て・さて・いかにやいかにと・宣へば・今はかう候とぞ・申ける・今生に・思ひおく事は・なきか・思ひおく事あらば・何事にても・義經に・云おけかしと・宣ひければ・次信・世にも・くるしげにて・息をついて・申けるは・今生に・思ひおく事の・などかは・なうて・候べき・先は・君の平家を亡して・世に渡らせ・給はむを・見奉らぬ事・扨は・奥州にとゞめおきし・老母を見候はぬ事こそ・よみぢの・さはりとも・なりぬべう候へ・さりながら・御命に・かはり參らせ候へば・弓矢とりの本意・只此事に候・弟にて・候ひける・忠信をば・相構て・御不便に・せさせ・おはしますべしと・是を最後の詞にて・次信廿八と申し・二月十八日の・酉の刻に・八島の礒にて・終には・かなく・成にけり・判官大きに・あきれさせ・給ひて・伊勢の三郎義盛をめして・此邊に・僧やある・尋て・得させよと・宣ひければ・義盛承つて・其邊なる・所より・住僧一人・尋出して・參りたり・判官・僧に向て・宣ひけるは・只今・終る手負の爲に・一日經を書て・とぶらひ給へとて・去年の二月・攝津國一谷・のつて・落されける・馬を・此僧にぞ・ひかれける・此馬と申は・黒き馬の・ふとう還・かりければ・判官・我五位の尉に・ならられし時・五位をば・此馬に・ゆづるとて・大夫黒と・めされける・かやうに・身にかへて・おもはれける・御馬なりけれ共・只今次信が爲に・ひかれければ・諸國の侍・此由を見奉つて・此君の・御爲に・捨んずる・命はさらに・をしからずと・感じて皆鎧の袖をぞ・ぬらしける

那須の與一

阿波・讃岐に・平家を・背て・源氏を待ける・兵共・爰の谷・彼所の・洞より・二騎・三騎・五騎・十騎・打より〳〵・判官の勢に・加る・源氏程なく・三百騎ばかりにぞ・成にける・けふは日暮ぬ・勝負は・決せじとて・源平互に・引退所に・沖のかたより・儲り尋常にしたる・小舟を一艘・渚にとよす・渚一町許より・船を横さまになす・敵・味方・あれは・いかにと見る所に・齢十六か・七かと・みえたる・女の・柳の・五衣に・紅の袴・着たりけるが・皆紅の・扇のつまに・日出したりけるを・船のせがいに・はさみたて・陸へむけてぞ・招ける・判官・後藤兵衛實基をめして・あれは・いかにと・宣へば・射よとにこそ候らめ・但敵の・はかりごとにこそ・存じ候へ・その故は・大將軍の・矢おもてに・すゝんで・傾城を・みんずらん・其時・手だれをもつて・射落さんとの・はかり事とこそ・相存じ候へ・但扇をば・急射させらるべうもや候らんと・申たりければ・判官・咏方に・射つべき

者は・なきか・などか・なうては候べき・強弓・精兵・いくらも候へ共・下野國の住人・那須の太郎資高が子に・與一資宗こそ・小兵には候へ共・手はきいて候と・申たりければ・判官・證據はあるか・さん候・かけ鳥なんどをも・三矢に・二矢は・輙く仕り候と・申ければ・判官さらば・與一めせとて・めされけり・其ころ與一は・十八九のをのこの・赤地の錦を以て・おほくびはた袖・いろへたる・かちのひたゝれに・赤糸縅の・鎧を着・星白の甲の・緒をしめ・三尺五寸有ける・足しろの・太刀を帯・廿四さいたる切斑の矢・其日の軍に・射捨て・少々のこりたりけるが・うす切斑に・鷹の羽はぎませたる・ぬだめの・鏑をぞ・さしそへたる・二所籐の弓・脇にはさみつゝ・甲をばぬいで・高紐にかけ・判官の・御前に畏る・判官・いかに與一・あの扇の・まん中・射て・人に見物・せさせよ・かしと宣ひければ・與一畏て・申けるは・あの扇・射おふせむ事不定・射損せむ事は・決定なり・只今射損ずる・程ならば・永く・味方の・弓矢の・御恥たるべう候・されば・自餘の仁にも・仰付らるべうや・候らんと・申ければ・判官・氣色・大にかはつて・今度・義經・一院の・院宣を承つて・平家追討の爲に・西國へむかふ・義經か下知を・そむかれんずる・人々は・急・是より・鎌倉へ・下らるべしとぞ・宣ひける・與一重て・辭し申ては・惡かりなんとや・思ひけん・左候はゞ・はづれんは・存候はね共・仕つてこそ・見候はめとて・御前を・罷たち・那須の小黒とて・聞ゆる・名馬に・金覆輪の鞍を置て・打のり・なぎさの方へ・しんづ〳〵とあゆませ行・人々・與一が・うしろを・見送つて・一定・此若者・つかまつらうと・存じ候と・申あはれければ・判官も・たのもしげに・思はれたる景氣なり・與一・渚にうちのぞんで・見ければ・遥かりければ・馬のふとばらひたる程に・うち入て・見けるに・其あひ・纔に・七八段は・有らんとぞ・見えし・折ふし・北風吹て・船ゆりあげ・ゆりすゑ・扇座敷にも・たまらず・ひらめいたり・沖には・平家・舟を一めんに・ならべて・見物す・陸には・味方の兵・三百餘騎・衝をならべて・是を見る・いづれも〳〵・晴ならずと・云事なし・與一・目をふさぎ・歸命頂禮・八幡大菩薩・殊には・我國の・神明・日光の權現・宇津の宮の大明神・那須の・由善大菩薩は・氏子一人をは・千金にも・かへじとの・御らかひ・渡らせ給ふなる・只今あの扇・射損ずる・程ならば・弓切折て・海にしづみ・大龍の・眷屬となつて・ながく武士の・怨となるべう候・さるにても・今一度・本國に・むかつて・御覽せられむと・おぼしめされ候はゝ・あの扇の・まん中・射させて・たばせ給へと・心中に・祈誓して・目を・見あげて・見けるに・風すこし・やうで・扇座敷に・たまつてやう・十二束・二ぶせ・ありける・小鏑をとつて・打つがひ・よつびいて・ひやうと射る・弓つよかりければ・浦ひゞく程に・鳴渡り・扇のかなめ・一寸ばかり・おいて・ひいふつとぞ・射切たる・扇・こらへず・三にさけ・空へ・あがり・風に・一もみ・ふたもみ・もまれて・海へさつとぞ・ちつたりける・皆紅の扇の・夕日に・かゝやいて・波の上に・うきぬ・しづみぬ・ゆられければ・沖には・

平家舩を敵て・鬨じけり・陸には・味方の兵・三百餘騎簸を敵て・のゝめきける

弓流し

是を感かと・おぼしくて・齢四十八ばかりなる・男の・裃縄目の・鎧着たりけるが・扇たてたる・座敷に出・舞まひすましてぞ・たつたりける・判官・伊勢の三郎義盛をめして・につくい奴が・二の舞かな・あれ仕れといへと・宣へば・伊勢の三郎・與一がうしろに・歩ませよつて・御諚にて有ぞ・あれ仕れと・云ければ・與一扇をだにも・射損ぜず・なじかは・射損ずべきなれば・今度は中さしとつて・打つがひ・よつぴいて・まひ男が・頸の骨したゝかに・射させて・舟へ舞たふれに・こそしたりけれ・敵味方是を見て・あゝ射たりと・いふ者もあり・いや〳〵・是まで・は・餘に・情なしと・云者も・おほかりけり・平家の方には・是を・ほいなしとや・おもはれけむ・又小船を一艘・渚に寄・楯ついて・一人・弓もつて・一人・長刀持て一人・三人舟よりあがり・源氏爰を・よせよやとぞ・招いたる・判官・此由を見給ひて・馬つよからむ・若者共・行向て・一々に・蹴散せかしと・宣へば・承つて・武藏國の住人・三穂屋の十郎・同き藤七・上野國の住人に・生の（イにったの）四郎・同き八郎・信濃國の住人・木曾の・仲太を・先として・五騎つれてぞ・懸たりける・爰に・楯のかげより・ぬり篭に・くろほろ・はいだりける・大矢を・塗ごめ籐の・弓にとつて・打つがひ・よつぴいて・ひやうと

射る・まづ・眞先にすゝんだる・三穂屋が乗たる馬の・左の胸がひづくしを・筈のかくるゝ程に・とつと射こまれ・馬こらへず・屏風を・たふすが・やうに・かつばと・まろびければ・三穂屋・かなはじとや・思ひけむ・馬のかしらに・おりたつて・頓て・太刀をぞ・ぬいたりける・爰に楯の陰より・白柄の大長刀・打ふつて・出來たる・三穂屋・小太刀・あの大長刀に・切立られ・かなはじとや・思ひけむ・かいふいて・にげて行・おうてながむずるかと・みる處に・さはなくして・長刀をば・弓手の脇に・はさみ・めての・かひなを・さし出し・三穂屋が・着たる・甲のしころを・摑まうどする・つかまれじとぞ・逃たりける・三度までは・つかみはづし・四度にあたる時・むんずと・つかうで・えいやつと云て・しんばし・たもつてぞ・みえたりける・されば共・三穂屋も・つよかりければにや・鉢付の・板より・ひきちぎつてぞ・逃たりける・其後・ひきちぎつたる・甲のしころを・長刀のきつ先に・さしつらぬき・高くさしあげ・大音聲をあげて・是は備中の・水島・播磨の・室山・二ヶ度の・合戰に・高名しきはめたる・上總の・惡七兵衛景清ぞや・聞給ひて・只今なのるは・上總の・惡七兵衛景清ぞや・あますな・もらすな・うてやとて・源氏三百餘騎にて・追懸たり・沖には・平家此由を・見給ひて・惡七兵衛・うたすな・景清うたすなと・すゝめやる者ども・つゞけ兵共とて・又小船・百艘ばかり・渚によせ・楯をめんどり羽に・つきならべ・さん〳〵にこそ・戰ひけれ・陸にも・源氏三百餘騎・矢把といておしくつろげ・さしつめ・引つめ・散々に射

ける矢に・平家の楯もたまらず・鎧もかけず・射とほさる・平家・かなはじとや・思はれけん・又船にとり乗て・遙の・沖に・ひきしりぞき・給ひけり・中にも・大將判官殿は・馬の太腹ひたる程に・打いれて・たゝかはれけるが・いかゝはせられたりけむ・波に弓をとり落し・うつぶして・とらんと・し給ひけるを・平家の兵共・小舟を漕よせ・熊手・薙鎌を・おろして・判官の鎧甲に・からりからりとぞ・懸たりける・源氏の兵共・唯その・御たらし・捨て・あがらせ給へ・かへらせ給へと・申けれども・判官耳にも・聞入給はず・終に・鞭のさきに・懸てとつてぞ・あがられける・其後・おとなしき・人々の・縦千金をのべたる・御たらし成とも・御命にはいかでか・かへさせ給ふべきと・涙もせきあへず・申たりければ・判官いやとよ弓の・惜きにあらず・唯名のをしきぞとよ・叔父八郎爲朝なんどが・弓のやうならば・態ともうけて・見すべけれ共・底弱たる・義經が弓を・平家へとられて・是こそ・源氏の大將・九郎が弓の・よわうてなんど・嘲弄せられむが・口惜さに・命にかへて・とつたるなりと・宣へば・人々此御詞をぞ・感じ申ける・けふは日暮ぬ・勝負は・決せじとて・平家は・讃岐國志渡の導場に・籠り給へば・源氏も同き・國・牟禮高松の境なる・野原に陣を

志渡合戰

去程に・源氏は・一昨日・攝津國・渡邊・福島を立て・昨日勝浦に着て・合戰し・こよひ・夜もすがら・大坂こえ打て・けふ又・一日戰ひ暮し・たりければ・馬も・人も・皆・責疲て・或は甲を伏て・枕とし・或は箙をといて・枕とし・前後もしらずぞ・打とけたる・中にも・大將・判官殿と・伊勢の三郎・ばかりぞ・ねざりける・判官は・高き岡に・あがり・遠見を・し給へば・伊勢の三郎は・洞にひかへ・敵よせきたらば・馬の太腹・射むとて・片手矢はげてぞ・待かけたる・去程に・平家は・其夜・源氏を・夜討にせんとぞ・議せられける・夜討の大將軍には・新中納言知盛・副將軍には・能登守教經・侍大將には・越中の次郎兵衛盛嗣・美作國の住人・衣斐二郎盛賢を・先として・五百餘騎にてぞ・打立れける・され共・越中の二郎兵衛と・衣斐の二郎は・軍の先陣を・あらそうて・其夜の夜討は・なかりけり・平家・其夜・源氏を夜討にしたらましかば・源氏は・悉・亡ぶ・べかりしを・其夜の夜討の・なかりけるこそ・偏に・平家の・運のきはめなれ・同き・十九日のまんだ朝・判官・伊勢の三郎義盛をめして・阿波の民部重義が・嫡子・田内左衛門教義が・河野を責に・三千餘騎にて・伊豫國へ・向うたんなるが・八島に軍ありと聞て・定てとつて返してぞ・のぼるらん・御邊向うて・よきやうに・こしらへて・みよかしと・宣へば・伊勢三郎・畏つて・承り・さ候はゞ・旗一流・給はらんと・申ければ・判官やがて・旗一流ぞ・たうだりける・伊勢の三郎・旗給つて・十六騎にて・向ひけるが皆・白裝束也・味方の兵・是を見て・三千餘騎の大將・生捕にむかふ・十六騎の・白裝束大き

に・まことしからずとぞ・笑ひける・案の如く・田内左衛門は・八島に軍ありと聞て・とつて・かへして・上る程に・伊豫と・讃岐の境にて・行あうたり・敵義赤旗さしあげければ・義盛白旗さしあげたり・伊勢の三郎・田内左衛門が許へ・使者を立て・是は・判官殿の・御内に・伊勢の三郎義盛と・申者にて候が・日の大將に・聊申べき事あつて・參りて候と・いひ送たりければ・田内左衛門・此よしを聞て・さらば伊勢の三郎計を・入よやとて・義盛ばかりをぞ・入たりける・伊勢の三郎・田内左衛門に・打ならうで・語りけるは・且は聞給ひてもや候らん・一昨日・勝浦にての合戰に・御邊の叔父櫻場殿は・射れ給ひぬ・昨日・八島にての・合戰に・大臣殿は・生捕・新中納言殿は・御自害・能登殿は・討死・御邊の父・阿波の民部殿も・生捕にせられ給ひて・義盛が預り申て候が・子にて候・田内左衛門は・河野を責に・三千餘騎にて・伊豫國へ・向うて候が・八島に軍ありと聞て・定てとつて・かへしてぞ・上り候らん・あしうまゐつて・討れ參らせなんと・こよひ夜もすがら・歎給ふが・いたましさに・其やうをも・申さむために・さて參つて候・但軍して・討死せむとや・おもひ給ふ・又今一度・父をみむとや・思ひ給ふと・云ければ・田内左衛門・日來はさしもの・兵なれども・今一度・父を見んとや・思ひけん・弓を・はづし・甲をぬいで・降人にこそ・成にけれ・伊勢の三郎・田内左衛門を・具足して・八島に參り・此よし・申たりければ・判官斜ならず・喜び給ひ・やがて・義盛に預るぞ・物具ばし・ぬがすな・逃て行ば・しやつ・射ころせとぞ・宣ひける・判官さ

て・殘りの者共は・いかにと・宣へば・それも・御代を・めされんを・主と・申さむと・申ければ・判官・此義尤とてぞ・召具せられける・去程に・九國の住人・臼杵の次郎維高・尾形の三郎維義・五百餘艘の大船に・取のり・讃岐の・八島へぞ・渡りける・伊豫國の住人・河野四郎通信・五百餘騎にて・讃岐の八島へぞ・參りける・又紀伊國の住人・湯淺の七郎兵衛宗光・熊野の別當堪增・田部の浦より・又十餘艘の・兵船に・取のり・讃岐の八島へぞ・參じける・源氏程なく・六七千騎に・成にけり・同き二十四日に・源氏志渡の・導場に・押寄て・閧をどつとぞ・作りける・平家・散々に防ぎ戰といへ共・無勢・多勢に・叶はねば・志渡の導場も・破て・又舟に・とりのり・海にぞ・うかび・給ひける・平家終には・四國のうちをば・追出され・九國のうちへは・いれられず・いまだ・山陽・西海の・波路に・たゞよひ・給ひけり・去程に・梶原を・始として・殘りとゞまつたりける・二百餘艘の舟共も・波風をしづめ・けふ・八島へ參じたり・判官の侍共・こはいかに・會にあはぬ・花・六日の菖蒲・後の葵かとぞ・笑ひける・同き十九日に・都には・住吉の・神主・長守・急・內裏に・馳參じて・奏聞しけるは・去ぬる・十六日夜の・子の刻ばかりに・住吉の大明神の・第三の神殿より・鏑矢の聲・出て・西をさして・鳴て行・候なりと・奏聞申・たりければ・法皇斜ならず・御感有て・色々の・幣帛・さまん〳〵の・神寶を・調て・住吉の大明神の・第三の神殿へぞ・籠られける・むかし・神功皇后・新羅を責させ・給ひし時・伊勢大神宮より・二神のあらみさきを・差副らる・二神舟の・

舳・艫に・たつて・異國を平げさせ・給ひて後・一神は・信濃國に・いははれ給ふ・諏訪の大明神是なり・一神は・攝津國・難波に・祝れ給ふ・住吉の大明神是なり・上古の・征伐を・思食忘れずして・今又・朝の怨敵を・退させ・給ふにこそと・有難かりし・御事也

壇の浦合戦

去程に・判官は・周防の地に・押渡り・兄の・三河守と・一になる・源氏は・長門の國・追津に着と・聞えしかば・平家は・同き國・引島に・着給ふこそ・不思議なれ・源氏の勢は・かさなれば・平家の勢は・落ぞゆく・源氏の舟は・三千餘艘・平家の舟の中には・唐船もありとかや・同き三月廿四日の・卯の剋に・長門國・門司・赤間・壇の浦にて・源平互に・矢合とぞ・定てんげる・懸りける所に・梶原と判官と・どし軍・せんとする・事出來にけり・梶原・判官に・申けるは・今度の・軍の・先陣をば・侍共の中へ・たび候へかしと・申ければ・判官・義經がなくばこそ・梶原・まさなや君は・大將軍にてこそ・御渡り候へ・鎌倉殿こそ・大將よ・義經は・軍の奉行承つたる・身なれば・唯和殿原とは・同じ事ぞと・宣ひければ・梶原・軍の先陣を・所望しかねて・天性・此殿は・侍の主には・成がたしとぞ・つぶやきける・判官・梶原は・日本一の・をこの者にて・有けるよと・宣ひければ・梶原こはいかに・鎌倉殿より外は・又二人の主をば・もたぬ物をと・申ければ・判官・けしき・かはつて・みえられければ・判官のかたには・奥州の佐藤四郎兵衛忠信・片岡の太郎親經・源八・廣綱・伊勢の三郎義盛・武藏坊辨慶・以下の兵共・片手矢はげて・梶原に・目をかけゝれば・梶原も・親子四人・よりあひて・打物の・さやをぞはづしける・既にかうとみえけるに・梶原が馬の口には・土肥の二郎・つかみつき・判官の御馬の口には・三浦介取付・奉つて・懸る・天下の・御大事に・どし軍・候ひては・いよ〳〵味方の・御よわりなるべし・又鎌倉殿の・かへりきこしめされむずる所も・穩便ならず候と・やう〳〵に申ければ・判官・げにもとや・思はれけむ・しづまり給へば・梶原すゝむに及ばず・それよりしてぞ・梶原・判官をいよ〳〵・にくみ奉つて・鎌倉殿に・讒言して・終に討せ奉りけるとぞ・聞えし・同き三月廿四日の・卯剋に・門司・赤門・壇の浦にて・源平互に・よせあはす・彼はやともが・沖と・申は・たぎつて落る・汐なれば・源氏の舟は・汐に向うて・引落さる・平家の舟は・心ならず・汐につれてぞ・追たりける・源平互に・舷を敲て・関つくる聲空は・梵天までも・聞え・しもは海龍神も・定て・驚き・騒ぎ・給ふらむとぞ・覺たる・沖は汐の・はやければ・渚に・そうて・梶原・漕ぎちがふ・敵の舟に・熊手をかつはと・なげかけ・親子四人・家子郎等・十餘人・敵の・船にのり移り〳〵・さんざんに・きつてまはり・けるに・面を・むかふる・者ぞなき・兵おほく・亡びにけり・扨こそ・其日の・軍の高名は・梶原と・一の筆には・付られけれ・其後・新中納言知盛・舟の艫に・進出・大音聲をあげて・天竺震旦にも・日本我朝にも・隱なき・名將

勇士と・いへ共・運のきはめは・力なし・軍はけふぞ・限りやゝ・侍共・命をば・いつの料にか・たばふべきと・宣へば・飛騨の三郎左衛門景綱みな・此御諚承れとぞ・下知しける・中にも・越中の次郎兵衛盛嗣・進出て申けるは・中坂東の奴原共は・馬の上にてこそ・口はきゝ候とも・船軍には・いつか調練仕り候べき・たゞ魚の木に・のぼらむするやうに・こそ候はんずらめ・一々にとつて・海へつけ候ひなんとぞ・申ける・上總の惡七兵衛景清が・申けるは・源氏の大將九郎は・せいちひさう・色白う・むかばのふたつ・さしあらはれて・殊にしるかんなるぞ・縦心こそたけく共・せいがちひさかんなれば・何程の事か・有べき・唯ひつくゝんで・海へいれよとぞ・申ける・其後・新中納言知盛・大臣殿の御まへに・參らせ給ひて・申させ・給ひけるは・いつよりも・侍共のきそくよげに・見えて候・中にも阿波の民部重義こそ・日來にも・似ず・氣色かはつて・みえて候へ・哀きやつを・切候はゞやと・申させ給ひたりければ・大臣殿見えたる事もなきに・爭かさる事の有べき・去にても・重義めせとて・めされける・重義目結の直垂に・緋威の鎧着て・御前に參り畏る・大臣殿・やゝ・重義や・など日來にも・似ず・侍共に軍の下知をもせぬぞ・心の替りたるか・また臆したるかと・宣へば・何事によつてか・臆し候べきとて・無返事にて・御前をまかりたつ・中納言・哀きやつをゝきらばや・〳〵とは・思はれけれ共・大臣殿の・御ゆるされなければ・力及給はず・去程に・平家は・千餘艘を・三手に・分つ・先陣は・山鹿の兵藤次秀遠・五百艘・二陣は・松浦黨三百餘艘・後陣は・平家の君達二百餘艘に・乘給ふ・中にも・山鹿の兵藤次秀遠は・九州一の・強弓・精兵・矢つぎばやの・手ぎきなりければ・我におとらぬ・精兵・五百餘人・すぐつて・舟々にたて・さしつめ・ひきつめ・散々に・射ける矢に・源氏の楯も・たまらず・鎧もかけず・射とほさる・源氏の方には・防戰ふといへ共・散々に・射しらまされて・澤しりぞく・平家軍に・勝ぬとて・つゝみをうつて・鬨を作る・きされ共・源氏のかたには・群に拔て・戰者こそ・おほかりけれ

遠矢の沙汰（あひ）

去程に・東國・相模國の住人和田の小太郎義盛は・船にはのらず・鹿毛なる馬にのり・陸にひかへ・遠矢を・射けるに・何者にても・三町が内にて・目に懸る程の物を・射落さずと・云事なし・白篦の・大矢を・新中納言の・船の艫の浪に・射うけて・其矢・こなたへ・返し給はらんとぞ・招たる・中納言・此矢をめしよせ・見給へば・白篦に・鵠の羽をもつて・はいだりける・大矢の・十三束ふたつぶせの・中ざし・篦まき一束斗・おいて・東國相模國の住人・和田の小太郎平の義盛と・漆を以てぞ・書付たる・其後・新中納言・伊豫國の住人に・新居の紀四郎親家をめして・此矢射返せと・宣へば・承つて・わが弓にうちつがひ・よつぴいて・ひやうと射る・是も三町餘を・つつと射渡し・和田が後二段ばかり隔て・ひかへたる武藏國の住人・石坂の小太郎が・弓手のかひなに・くつまきせめてぞ・

射こうだる・三浦の人々・是を見て・和田殿は・我程の大矢射る者なしと・宣へ共・射返されて・恥かき給ぬと・わらはれて・和田大きに・腹をたて・主従七八人小舟に・とりのり・平家の・舟のあたりを・おしまはさせ・さしつめ・引詰・散々に射けるに・兵おほく・射ころさる・其後平家の方よりも・白箆の大矢を・判官の・船の艫に・射たてて・是も和田がやうに・扇をあげて・其矢こなたへ・給はらんとぞ・招いたる・判官・此矢を・ぬかせて・見給へば・白箆に鶴の・本白をもつて・はいだりける・大矢の・十四束二ぶせの・中さし・箆まき一束・ばかりおいて・伊豫國の住人・新居の紀四郎・橘の親家と・漆をもつてぞ・書付たる・判官・後藤兵衛實基をめして・此矢・射返しつべき者は・咏方にたれかあると・宣へば・強弓・精兵・いくらも候へども・甲斐・源氏に淺利の與一殿こそ・御渡り候へ・判官さらば・與一めせとて・めされたる・折節・淺利殿は小舟に乗て・おはしたり・判官いかに・淺利殿・此矢・射返し給ひてんやと・宣へば・給はつて・見候はんとて・つまより見て・是は・箆もすこし・よわう候・同じうは・義成が矢をもつて・仕て・見參に・いらうずる候とて・塗箆に・黒ほろはいだりける・大矢の十五束二ぶせの・中さし・塗籠籐の・弓にとつて・打番ひ・よつひいて・ひやうと射る・是は四町餘を・つつと・射渡し・新中納言の船の艫に・すゝんで・立たる・新居の紀四郎が・内甲を箆のかくるゝ程に・とつと・射こまれ・船よりまつさかさまに海へ・だうとぞ・射いれたる・中にも阿波の民部重義は・此日來・平家に忠をいたしけるが・嫡子田内左衞門を・九郎判官に・生捕れ・恩愛の道の・かなしさは・今一度子を見むともや・思ひけん・咏方の赤旗・赤じるし・切すて・かなぐりすてくはゝりける・扨こそ大臣殿も・新中納言も・哀・きやつを・きるべかりつる物をと・後悔し給へども・甲斐ぞなき・其後・空より・しら雲一村・みえけるが・雲にては・なかりけり・主なき・白旗一流・舞さがり・判官の・船の艫に・樟つけの・緒の・つく程に・みえて・又空へ・舞のぼる・源氏の兵共・此由を見奉つて・是程に・八幡大菩薩の・御影向あらん上は・などか・戰に・かたざるべきとて・勇む・る事・斜ならず

先帝の身投

其後海鹿と云・魚一二千が程・平家の・船の下をはうて・とほる・大臣殿・都より・召具せられたりける・掃部頭・晴延と申・陰陽師を・めして・鱘は・常におほけれども・懸る・例は・いまだなし・急度かんがへて・申せと・宣へば・畏つて・承る・勘て・申けるは・此鱘・はみとほり候はゝ・源氏・悉・亡び候ひなんず・又はみ歸らば・咏方の・御軍は危・みえさせ・給ひて候と・申もはてぬに・海鹿は・平家の・舟の下よりも・悉・はみかへりけり・扨こそ・大臣殿も・新中納言も・けふをさいごとは・思はれけれ・其後・平家・はかりごとに・唐船に・雜人をのせ・兵船に平家の君達乘給ふ・

源氏定て・唐船をぞ・せめんずらむ・其時・兵船をもつて・中に・取籠・うたんとは・議せられけれ共・阿波の民部重義が・返り忠のうへは・唐船は・射そ矢だうなに・兵船を射よとぞ・をしへける・支度・相違してんげる・かの岸に・あがらむと・し給へば・源氏矢さきを揃て・待懸たり・日來は身に・かはらん命にかはらむと・契りし・兵共も・けふは・君に向つて・弓をひき・主に對して・太刀をぬく・水手櫂取共は・船底に・射ふせられ・切伏られて・をめき・さけぶ事・斜ならず・源平の國あらそひ・唯けふを・限りとぞ・みえし・其後・新中納言知盛・御所の・御船へ・參らせ給ひて・申させ給ひけるは・今ははや・見ぐるしき物共候はゞ・海へ入させ給へ・とて・はきのごひ・塵ひろひなんど・し給へば・女房達・やゝ・中納言殿・軍は・いかにと・とはれければ・軍はけふぞ限り・今より後こそ・女房達の・めづらしき・東男を・御覽せんずれとて・から〳〵と・打笑給へば・女房達こはいかに・是程に・成ぬる上は・何の御戲ぞやとて・こゑ〴〵に・をめきさけび・給ひける・誠にもとぞ・覺たる・其後二位殿・先帝を・抱き奉つて・帶にて・二所しめ・付奉り是は・後の世迄も・御寶と・ならむずればとて・神璽を・脇にはさみ・寶劍を腰に・さしつゝ・我身は・女なり共・敵の手には・渡るまじ・君の御供に・參るなり・君に御心ざし・思ひあはれんずる・人々は・皆參り給ふべしとて・鈍色のきぬ打かづき・練袴の・そば高くとつて・舷へこそ・出られけれ・先帝は・今年八歳に・ならせ・おはしましけるが・御年の・程よりも・遙に・くまゝせ（イれびさせ）・給ひて・御ぐしも・御せなか・過ぎ給ふ・程なり山鳩色の御衣に・びんづらいはせ・給へり・御涙に・おもれ・させ給ひて・こはいづちへぞ・あませと・仰ければ・二位殿・未いとけなき君に・向ひ奉つて・君はいまだ・しろしめされ・さふらはずや・十善の戒業によつて・今萬乘のあるじとは・生れさせ・給ひて・さふらへ共・惡緣にひかれて・御運既に・つきさせ給ひぬ・今ははや・伊勢大神宮に・御暇申させ給ひ・其後・西にむかはせ給ひて・御念佛さふらへと・涙もせきあへず・申させ給ければ・主上・いまだいとけなき・御心に・まづ東に向はせ給ひ・天照大神に・御暇申させ給ひ・其後・西にむかはせ給ひて・御念佛さふらへと・に・二位殿是は・娑婆世界とて・餘に物うき所にて・さふらへば・西方の淨土とて・目出度所へ・御供申さふらふとて・南無と唱ふる・聲共に・浪の底にぞ・入給ふ・悲哉・無常の春の風・花の御姿を・さそひ奉り・情なきかな・分段の・あらきなみ・龍顏を・しづめ奉る・殿をば・長生と名付・門をば不老とことよせしに・いまだ十歳をだにみたせ・給はで・雲上の・龍くだつて・忽に・海底の魚と・ならせおはします・大梵・高臺の闕の上・釋提・喜見の宮の中・是みな・五衰たいもつのひに・あへり・日來は・槐門・棘路の間にて・九族をなでし御身なれ共・今は海上の・舟のほとりに・御身を・一時に・ほろぼさせ・おはします

能登殿の最後

其後・女院も・つゝいて・海にいらせ給ひけるを・渡邊の・源五右馬允・番と申者・小船を漕よせ・熊手をおろし・御ぐしに懸て・ひきあげ奉る・御衣の・しほたれて・餘に見ぐるしう・わたらせ給ひければ・鎧からうどより・あたらしき・白き小袖一重・取出し奉つて・御衣にめしかへさせ奉る・なをなんど・申あはれければ・番大きに・恐をなし・奉つて・急御所の・御舟へ・送り奉る・中にも・大納言の佐殿は・内侍所の入て・渡らせ・給ひける・櫃を・脇にはさみつゝ・海に入らんと・し給ひける・袴のすそを・舷に・射付られ・是もとらはれ給ひけり・其後・源氏の・兵共・内侍所の・入て渡らせ・給ひける・櫃の鑰を・ねちきつて・蓋をひらかんと・しければ・忽目くれ・鼻血たつて・たふれふす・幷の船に・平大納言時忠卿の・とらはれておはしけるが・あな淺ましあれは・内侍所と申て・神にて・わたらせ給へば・凡夫は左右なう・ちかづかぬ事ぞと・宣へば・判官さる事候とて・本のごとくに・したゝめて・平大納言殿に・あづけ申されけり・中にも・平中納言教盛・修理の大夫經盛・兄弟二人・鎧の上に・碇を負て・海にぞ・しづみ給ひける・小松の新三位の中將資盛・弟に・新少將有盛・從父に・左馬頭行盛三人・手に・手を取くみ・是も海にぞ・沈まれける・人々はかやうに・成行給へ共・大臣殿父子は・さる氣色も・みえ給はず・舷に立出・四方見はるかしてぞ・おはしける・平家の侍共・此由を見奉つて・餘に淺ましく・思ひければ・御そばを・走過るやうにて・まづ衛門督を・海へつき落し奉る・大臣殿も・つゝいて・いり給ふ・大臣殿は・衛門督しづまば・我もしづまんと・おもひ給ひ・衛門督は・大臣殿しづみ給はゞ・われもしづまむと・おもはれければ・互にしづみもやり・給はぬ所を・伊勢の三郎・小舟を漕よせ・熊手を・おろして・まづ・衛門頭を・懸て・引上奉り・大臣殿は・いとゞ・しづみも・やり給はず・是もとらはれ・給ひけり・御乳人子の・飛驒の三郎左衛門景經・何者なれば・我君をば・取奉るぞとて・大太刀をぬいて・打てかゝる・伊勢がわらは・中に・隔たつて・打やうたり・景經が・打太刀に・わらはがくび・打落され・伊勢も・あやうく見えけるを・幷の舟に・立たりける・堀の彌太郎友廣・中ざしとつてつがひ・よつぴいて・ひやうと射る・をりふし三郎左衛門が・ふりあをのいて・立たりける・内甲をしたゝかに・射させて・ひるむ所を・堀伊勢が・船に乘移り・三郎左衛門と・むずと組で・互に・上になり・下になり・ころびあふ所を・堀が郎等・あまた落あうて・景經が頸をば・とつてんげり・大臣殿日來は・さしも身にかへて・おもはれつる・飛驒の三郎左衛門景經さへ・御目の前にて・かくなれば・いとゞ心ぼそくぞ・思はれける・能登殿は・けふを最後とや・おもはれけむ・赤地の錦の・直垂に・緋威の鎧を着・鍬形うつたる・五枚甲の緒をしめ・片手には・白柄の大長刀の・鞘をはづし・片手には・大太刀を・ぬきもち・敵の舟に乘移り〳〵・沖より磯・渚より沖へ・散々にないで・まはられけるに・面を向ふる・者ぞなき・兵おほく・亡びにけり・其後・新中納言知盛・能登殿の方へ・使者を立て・いつたう罪な・つくり給ひ

そ・しやつばらなればとて・いしい奴にても・なかりけりと・宣ひつかはされたりければ・能登殿扨は・大將と・くめと・御ざんなれ・其儀ならば・いでくまんとて・又かたきの舟に・乘移り〳〵・大將を・尋られけるに・あやまたず・判官の舟に・乘うつり・能登殿太刀・長刀をからりとすて・大手をひろげ・につこと・わらうて・懸られければ・判官・あつかなはじとや・思はれけん・二丈ばかり・のいたりける・味方の舟に・つんとこえて・乘移る・能登殿・はやわざやおとられけむ・つゞいても・こえ給はず・能登殿・今是程に・運のつきぬるうへはとて・甲をもぬいで・海へなげ入・鎧の小具足切すて・かなぐりすて・胴ばかり着て・大わらはに・なつてぞ・たゝれたる・其後・能登殿・大音聲をあげて・いかに・東國に・我とおもはん者あらば・敵經を・生捕にして・鎌倉へ・具して下れ・兵衞佐にあうて・物一詞・いはむずるに・よれや・〳〵と宣へ共・あたりを・はらつて・よる者なし・爰に・土佐國の住人に・安藝の郡を・知行しける・安藝大領助光が子に・太郎實光・次郎季光とて・とももに・卅人が・力もつたる・大力の・剛の者あり・郎等の一人・候ひけるも・主には・おとらぬ・くせ者なり・彼等三人が申けるは・縱能登殿・たけ十丈の・鬼にても・おはせよ・我等三人が・寄たらむに・などか・生捕奉らざるべき・いざくまんとて・打物の・切先をならべて・打てかゝる・能登殿・此由を・見給ひて・につくき・奴のとて・まづ・眞先に・すゝんだる・郎等のすそを・あはせて・海へだゞと・蹴入らる・其後・太郎をば・弓手の脇に・二郎をば妻手の脇に・かいはさみ・二しめ・三しめ・ひつしめ・〳〵・し給ひけるが・いざうれさらば・おのれら・死手の・山路の・供せよとて・生年・廿六と・申には・二人の者を・脇ばさみ・海に・飛入給ひけり・其後新中納言知盛・御乳人子の・伊賀の平內左衞門家長を・めして・今ははや・みるべき程の・事をばみつ・日比の契約は・いかにと・宣へば・なじかは・たがへ參らせ候べきとて・主にも・重鎧・二領きせ・奉り・我身も・鎧二領きて・御手に・てをとりくみ・海にぞ・沈み給ひける・中納言の・家子郎等・十餘人・候ひけるが・もるゝは・一人も・なかりけり・皆ひとつ所にぞ・沈みける・むなしき舟は・浪にたゞよひ・風に任て・いづち共なく・ゆられ行・海上には・平家の赤旗・赤じるし・切すてたれば・龍田の・川の・秋ならね共・紅葉流るゝとも・いつゝべし・渚によする・しら浪も・薄紅にぞ・成にける・生捕の人々には・まづ・前の內大臣宗盛・衞門督清宗・平大納言時忠・內藏頭信基・讃岐の中將時實・兵部の少輔政明・僧綱には二位の僧都還眞・法勝寺の執行能圓・中納言の律師忠快・經壽坊の阿闍梨祐圓を・始として・廿八人とぞ・聞えし・女房達には・悉も・國母建禮門院龍の・御方・治部卿の局・帥の佐殿・大納言の佐の局を・始奉つて・四十三人とぞ・聞えし・侍には・源太夫の判官季貞・攝津の判官盛澄・橘內左衞門季康・藤內兵衞季國を先として・以上百六拾三人とぞ・聞えし・元暦二年春の暮・いかなる・年月なれば・一仁海底にしづみ・百官波上に・うかぶらん・國母官女は・東夷・西戎の・手に渡り・月卿雲客は・南蠻・北狄・數百の群侶に・とらはれて・再都へ・歸り上り給ひし

に・彼朱買臣が・錦を着て・故郷へ歸りし事を・うらやみ・王昭君が・夷の手に渡り・故國へ・趣たつし・恨までも・思ひやられて・哀なり

内侍所の歸洛

同き四月三日の日・西國よりの早馬・都に着・源八廣綱とぞ・聞えし・法皇・御坪にめして・直に・きこしめす・平家の生捕共・幷に・神璽・内侍所・入まゐらする由・奏聞したりければ・御感の・あまりに・やがて左兵衛尉にぞ・なされける・猶御ふしんを・さんせられんが・爲に・宗判官信盛を・西國へ・くださる・信盛宿所にもかへらず・寮の・御馬を給つて・鞭をあげて・馳下る・同十四日に・かへり參つて・事のよしをぞ・申ける・同十六日・九郎判官・生捕共・相具して・播磨の明石に・着給ふ・名をえたる・浦なれば・更行まゝに・月さへ上る・秋の空にも・おとらず・女房達・さしつどひて・一年是を・通し舟は・かゝるべしとは・おもはざりしものを・など云て・忍びねに・泣あはれける・帥典侍殿・月をながめて・いと思ひの・ます事なれば・枕も・床も・浮ぬ・計にて・

ながむればぬるゝ袂にやどりけり・月よ雲井の・物がたりせよ・

判官は・同じ東の・武士とは・申ながら・物の情を・知れる人なれば・優に妙なる・心地して・身にしみてぞ・思はれける・同廿五日に・しんじ・内侍所・鳥羽へつかせ・給ふと・聞えしかば・御迎の・人々・公卿には・中の御門の宗家・勘解由小路の中納言・經房・土御門の・宰相中將通親・殿上人には・高倉の中將安通・榎並中將公有・但馬の少將敎能・權左中辨兼光・藏人右衞門尉權亮・近正などぞ・參られける・西國よりの・御供の武士には・九郎大夫判官義經・足利藏人義兼・侍には・土肥次郎實平とぞ・聞えし・其夜の・子の刻に・内侍所・太政官の廳に・いらせ給ふ・しんじと申は・印の御箱なり・二位殿・脇に・はさみ・海にいらせ・給ひしが・波にうかうで・見え給ひしを・片岡の太郎親經・取上奉る・寶劔はながく・失てぞ・なかりける

あひ（爰に劔あり）

二の宮も・都へ・いらせ給ふ・此宮こそ・都に渡らせ給ば・御位に・つかせ給ふ・べかりしか共・平家・儲の君に・仕參らせんとて・取奉つて・西國へ下りぬ・され共・子細なく・歸りのぼらせ給ひけり・ならはぬ・旅の空に・おもむかせ・給ひて・疲・くろませ給ひけれども・別の御事も・なかりければ・御母儀・七條の女院も・御めのと・持明院のさいしやうなども・いかばかりか・うれしく・おもはれけん・やがて・女院の御所・七條坊城殿へ・入參らせられけり・同き廿六日に・平家の・生捕の人・都へ入給ふとぞ・聞えし・大臣殿の御車・仕者は・年來・めしつかはれし・三郎丸とぞ・聞えし・大臣殿は・彌二郎丸・三郎丸とて・二人・めしつかはれけるが・彌二郎丸は・一とせ・木曾

が車・やりそんじて・法師に・なされ・行方しらずぞ・成にける・三郎丸ばかり・男に成て・西の京なる・所に候ひけるが・大臣殿の・今日都へ・入給ふと・聞えしかば・鳥羽に下・判官の・御前に參り・是は・大臣殿の・年來・めしつかはれ候ひし・三郎丸と申者にて候・しかるべくは・御ゆるされを・かうぶりて・大臣殿の最後の・御供を・仕候はんと・申ければ・判官・早々とてぞ・ゆるされける、平家の生捕けふ・都へ・入給ふと・聞えしかば・京中・並に・近き・あたりより・來り・あつまる・上下諸人・鳥羽の・北の門より・東寺の南の門まで・所もなく・つゝいて・車はしぢを・めぐらさず・人はかへり見る・事をえず・去ぬる・治承・養和の・飢饉疫れいに・人種は皆・つきぬと思ひしに・猶殘るは・おほかりけり・佛の御ちゑならでは・かずへつくすべき・やうぞなき・大臣殿には・淨衣をきせ・奉り・車の・前後の・簾をまかせ・左右の・物見を・あげたりけり・父子・一車に・乘り給ふ・御子右衞門督は・涙に咽て・うつぶして・思ひ入たる・氣色も・おはせず・時忠卿の車も・おなじうやりつゝけられたり・三郎丸は・涙に咽て・行先も・さらにおぼえず・內藏頭信基も・同車して・入給ふ・べかりしが・所勞の心ちとて・閑道より・入給ふ讃岐中將時實は・疵を蒙られければ・是も・別の道より・入給ふ・侍には・主馬の判官守國を・初として・百六十三人・白き・直垂をきせ・くらのまへはに・しめつけ・〳〵・渡しけり・六條を東へ・渡し奉る・黃昏に・おょんで・判官の宿所・六條・堀川へ・入奉る・守護の武士には・片岡の太郎近經・伊勢の三郎義盛・江田の源三・源八兵衞などぞ・候ひける・物まゐらせけれ共・御箸をだにも・取上給はず・夜に入けれ共・裝束をも・くつろげ給はず・さてしも・有べき・ならねば・大臣も・よりふし給ひけり・右衞門督も・御傍・ちかく・ふし給ひければ・大臣殿・淨衣の袖を・うちかけ・まゐらせ給ひけり・守護の武士ども・是を見奉つて・あはれ恩愛の道程・かなしかりける・事あらじ・あの御袖を・打かけまゐらせ・給ひたらば・何程の事か有べきとて・武きものゝふなれども・皆袖をぞ・しぼりける・同き廿八日に・鎌倉兵衞佐・從二位・し給ひけり・去る・治承に・從下の五位より・正下の四位に・移り給ひき・越階とて・二階を・あがるだに・ありがたきに・是は既に・三階を越給へり・三位こそ・し給ふべかりしか共・賴政卿の例をいみてなり・今は鎌倉源二位殿とぞ・申ける

廻し文（あひ）

中にも・平大納言時忠卿を・判官の宿所・ちかく・おき奉らる・或時大納言・子息の・讃岐の中將時實に・むかつて・宣ひけるは・扨も・とらるゝ身じき・文を一かう・判官にとられたんなり・此文・鎌倉へ・見えては・人もあまた・命を失ひ・我身も・命たすかるまじ・こはいかゞはせんと・宣ひければ・讃岐の中將の・異見には・判官は・色好にて候へば・御娘あまた・ましませば・いづれにても・

一人・判官に・見せ給へ・したしうなつて・仰られて・御覧じ候へかしと・申されたりければ・大納言・此日比は・娘どもをば・いかなる・女御后にも・立むとこそ・思ひしに・いつしか・今さやうに・なみ〳〵の者に・みすべじとは・露思ひこそ・よらざりしかとて・涙に咽び・給ひけり・讃岐の中將の心には・當腹の・御娘・生年十七に・ならればこそ・判官にとは・思はれけれ共・大納言・それをば・猶いとふしき事に思ひ・給ひて・さきの上の腹の・御娘・生年廿三に・ならればこそ・見せられけり・盛こそ・すこしすぎられたりけれども・手うつくしう・書て・じんじやうに・おはしければ・判官は・さきの上・河越が娘も・有けれ共・是をば・なほいとふしみ奉つて・座敷・じんじやうに・しつらうて・置奉らる・或時・此女房・伴の文の事を・宣ひ出されたりければ・判官さる事候とて・封をも・とゞめずして・平大納言殿へ・返し申されけり・大納言・斜ならず・よろこび給ひて・やがて・火にこそ・たかれけれ・いかなる事をか・書給ひたりけん・おそろしとぞ・人申ける

女院の御出家

建禮門院は・西國より・武き武士の・手に渡り・再・都へ・歸りのぼらせ・給ひては・東山の麓・吉田の法印・慶惠と申・奈良法師の坊・なりけり・住あらして・年經にければ・庭には・草ふかく・軒には・しのぶしげり・簾たえ・閨あらはにて・いづくに・雨風たまる・べしとも・見えざりけり・花は色々にほへども・あるじとたのむ・ぬしもなく・月はよな〳〵・さし入共・ながめてあかす・人もなし・昔は・玉の臺を・みがき・錦の帳に・まとはれて・たへなる御身にて・渡らせ・給ひたりしか共・今は有とし・有人にも皆・別れ果させ・給ひて・淺ましげなる・くち坊に・泣々・立いらせ・給ひける・御心の中・おしはかられて・哀なり・道の程つき・參らせられける・女房達も・身々の・捨がたさに・暇申て・皆・ちり〳〵にこそ・成給ひけれ・魚の・陸に・あがれるが・ごとし・鳥の巢を・離たるより・猶悲・うかりし・島・波の上・舟のうちの・御住居も・今は中々・御戀しうぞ・おぼしめされける・おなじ・底のみくづ共・成ぬべかりし・身の・なにしにか・一人殘り・とゞまつてと・おぼしめせ共・甲斐ぞなき・天人の五衰の悲しみは・人間にもありける・物をとぞ・仰ける・扨しも・渡らせ・給ふべき・ならねば・同き・五月一日の日・女院・御ぐしおろさせ・給ひけり・御戒の・師には・長樂寺の別當・阿照上人印清（イにんせい）とぞ・聞えし・御戒の布施には・先帝の・御直衣とかや・上人・此御衣を・給つて・何と云詞をば・出されね共・御衣を・顏に・おしあてゝ・涙に・咽び給ひけり・其期までも・めされたりし・御衣なれば・御うつりがも・いまだ・つきさせ給はず・しかるべき・御形見にもと・おぼしめされて・西國より・遙々と・もたせられたりしか共・今は・御戒の・布施に・なりぬべき物の・なきうへ・且又・彼菩提の御爲にもと・おぼしめされて・なく〳〵・とり

ぞ・出させ給ひける・上人・此御衣を・旗に縫て・長樂寺の正面に・懸られて・今にありとぞ・承る・女院十五にて・内へ參らせ給ひ・十六にて・后妃の位に・備り・君王の・傍に・さぶらはせ・給ひて・夜は・よを・もつぱらに・せさせ・おはします・朝には・あさまつりごとを・すゝめ・參らつさせ・給ふばかりなり・廿二にて・王子・御誕生あつて・皇太子に・たゝせ給ひ・廿五にて・院號・蒙らせ・給ひて・建禮門院とぞ・申ける・今年は・廿九に・ならせ・おはします・桃李の御粧・なほ・濃に・芙蓉の・御容の・いまだ・衰させ・給はねど・今は・翡翠の・御簪を・つけても・何にかは・せさせ給ふべき・なれば・なく〳〵・御ぐし・おろさせ・給ひけり・御世を・いとひ・まことの道に・いらせ給ふとは・申せ共・御歎は・いまだ・つきさせ・給はず・人々の・今はかうとて・海に・沈み給ひし・ありさま・先帝の・御面影・いつの世にか・忘參らつさせ・給ふべきなれば・五月の・短夜なれ共・あかしかねさせ・給ひて・おのづから・うちも・まどろませ・給はねば・昔の事を・夢にだにも・御覽せず・かべにそむけたる・殘りの燈の影・かすかにかゝげつゝ・夜もすがら・くらき・窓を・うつ雨の音・靜なり・上陽人が・上陽宮に・閉籠られたる・さびしさも・是には・すぎじとぞ・みえし・昔を忍ぶ・つまとなれ・とてや・もとの・あるじが・栽おきし・花橘の有ける・風なつかしく・かをりける・折節・山時鳥・しきりに・おとづれて・過ければ・女院・時鳥花　橘の香をとめて・なくはむかしの人や戀しき・

女房達は・二位殿のやうに・さのみ・たけく・海にも・しづませ・給はねば・たけき武士の・手に渡り・再・都へ・歸りのぼらせ・給ひても・有にも・あられぬ・さまにて・或は・容をやつし・樣をかへ・思ひもかけぬ・谷のそこ・岩のはざまにて・あかしぞ・暮させ・給ひける・住居し宿はみな・煙とのみ・立のぼりにしかば・むなしき跡のみ・殘つて・しげき野べとぞ・成にける・日來見なれし・人の問くるも・なく・唯仙家より歸つて・七世の孫に・あひけむも・是には・過じぞと・見えし

あ　ひ

平家・亡びて・後は・國々も靜に・道を通ふに・煩なく・都も穩しかりければ・あはれ・此判官程の・人こそ・おはせね・されば・鎌倉の源二位殿は・何事か・し出し給へる・高名ある・判官の世にて・あはれ・しばらくも・あらばやなんど・上下申あへりけり・鎌倉の源二位殿・此由を・傳聞給ひて・是にて・賴朝が・隨分・はかりごとを・廻したればこそ・平家は轅・亡びたれ・九郎一人しては・爭かかゝなふべき・しかるに・さしもの・朝敵・平大納言の・聟になる事・心得られず・又大納言の・聟どりも・大きに・しかるべからず・いかさまにも・今度・くだつたらば・定て・過分の・ふるまひをぞ・せむずらんと・内々心よからずぞ・聞えし

副將

同き・五月七日の日・九郎大夫の判官義經は・大臣殿父子を・具足し・奉つて・關東へ・下らるべしとぞ・聞えし・同き六日の日の・暮かたに・大臣殿・判官の許へ・使者を立て・誠にて候や・明日既に・關東へ・下らるべしとやらん・承り候・さらんにとつては・壇の浦の・生捕の中に・八歳のわらはと・注されて候は・いまだ・此世に候やらん・あはれ・御ゆるされを・蒙つて・今一度見候はゝやと・の給ひつかはされたりければ・判官は候とぞ・宣ひける・此若君をは・河越の小太郎重房が・預り奉つて・乳人・かいしやくとて・女房二人ぞ・つきたりける・判官・此由を・河越が許へ・宣ひつかはされたりければ・若君・二人の女房共・ひとつ車に・のせ奉つて・大臣殿の・御かたへ・入奉る・若君遙に・父を御覽せねば・急御膝へ・參られけり・大臣殿・若君の髮・かきなで・守護の武士に・むかつて・宣ひけるは・是み給へや・人々・此子が母は・此子をうむとて・難產して死ぬ・產をば・たひらかに・したりしか共・やがてうちふし・なやみしが・わらはが・なからむ後・いかならむ人に・相具せさせ・給ひて・をさなき人をまうけて・ましまず共・此子をば・御目の前にて・そだておき・わらはが・なからむ後の・世の・形見にも・御らんせよ・なんど・いつしが・不便さに・天下に・事の出來たらむずる時は・あの衛門の頭に・大將軍を・せさせ・是には・副將軍を・せさせむずれば・名を副將と・付んなんど・いつしかば・斜ならず・よろこび・今はの時までも・名をよび・なんとして・愛せしが・七日といつしに・終にはかなく・成たるぞとよ・されば・此子をみる度に・其事のおもはれてとて・涙に咽び給へば・衞門督も・なかれけり・二人の・女房も・なみだをながし・守護の武士共もみな・鎧の袖をぞ・濡しける・衞門督たつて・いかに・副將よ・こよひは・是に・見ぐるしき事の・あらむずるぞ・まづ歸つて・明日とく・參るべしと・宣へ共・若君いなや・歸らじとて・父の御淨衣の・袖に・ひしと・取つ

いてぞ・なかれける・さてしも・有べきならねば・若君・二人の女房共に・ひとつ車にのせ・奉つて・出し・奉る・大臣殿・若君の・御後を・はるばると・御覽じ・送らせ・給ひて・日比の・思ひ歎は・事の數ならずとてぞ・なかれける・母の遺言が・不便さに・乳人なんどのかたへ・さしはなつても・つかはさず・目の前にて・そだて・三歳の年・かぶり給はつて・義宗とぞ・名乘せける・おひたち給ふまゝに・みめかたち・ならびなく・心ざま・すぐれて・おはしければ・大臣殿殊に・最愛し・給ひて・今度・西海の・旅の空・船のうち迄も・引具し奉つて・終に片時も・はなれ給はざりしが・軍破て・四十餘日と申には・けふぞ始て・見給ひける・同き七日の日の・まんだ朝・河越・判官に申けるは・さて・あのをさなき人をば・何とし奉る・べき人にて候・やらんと・申たりければ・判官・此あつ

きなかに・をさなき者を・はる〳〵と・鎌倉まで・具して下るに・及ばねば・爰にて・何共・よきやうに・はからへしと・宣へば・河越・よきやうに・はからへとは・愈〻失ひ奉るべき・人ぞと・心得て・宿に歸つて・見ければ・若君は・いまだ・二人の女房と・ね給へり・河越・二人の女房に・むかつて・申けるは・大臣殿は今日既に・關東へ・御下候・重房も・判官の・供にて罷下候が・若君をば・けさよりして・尾形の三郎維義が・預り奉るべきにて・御迎の御車・用意仕つて候・と〳〵と・申たりければ・二人の・女房是を・誠ぞと・心得て・未ねいり・給へる・をさなき人・おしおどろかし・奉つて・いざさせ給へ・御迎の御車の參りて・さふらふにと・申たりければ・若君さては・きのふのやうに・父の御方へ・參らんずるが・うれしさよ・とくいでむとぞ・宣ひける・去程に・若君・二人の女房共・ひとつ車にのせ奉り・六條を東へ・河原に・車をやりとゞめ・敷皮しいて・わか君既に・だきおろし・奉らんとすれば・二人の女房・日來より・かゝるべしとは・思ひまうけし事なれ共・さしあたつては・かなしくて・聲をあげてぞ・かなしみける・若君大に・あきれさせ給ひて・大臣殿は・いづくにぞと・宣へば・只今いらせ給ひ候・是にて・待參らつさせ・給ふべしとて・御車より・だきおろし奉つて・敷皮の・うへに・おき奉る河越が・郎等・太刀をぬいて・ひきそばめ・御うしろに・立まはりければ・若君これを・御覽じて・いま幾程・たすかり給ふべきやうに・急逃させ給ひ・乳人が・懷に・かほさしいれてぞ・なかれける・二人の女房・さらばまづ・我をうしなひて・扨をさなき人をば・ともかうも・なし參らつさせ・給ふべしとて・をめきさけぶ事・斜ならず・川越も・さすが・岩木ならねば・哀に・思ひ參らせ・けれ共・さてしも・有べき・ならねば・郎等に・目を・おそしと・見合ければ・今度は・太刀にては・かなはじとや・おもひけむ・腰の刀をぬき・乳人が・懷に・かほさし入て・なかれける・をさなき人を・あらけなく・引出し奉つて・三刀さいて・頸を・とる・今年は・八歳にぞ・ならせ給ひ・乳人が・身を投たらむは・いかゞせん・かいしやくの・女房さへ・身を投けるこそ・哀なれ

腰越

去程に・九郎大夫判官義經は・大臣殿父子を・具足し奉つて・鎌倉へこそ・下られけれ・道すがら・

大臣殿・判官へ・宣ひけるは・哀今度・宗盛親子が命を・申てたすけさせ・おはしまし候へかしと・宣ひければ・判官さん候・今度の・軍の勳功には・御兩所の・御命を申て・たすけ奉らばやとこそ・存じ候へ・但奥のかたへ・流し奉らるべう・もや候らんと・申されたりければ・大臣殿・縦いかなる・あくる(イろくろ)・津輕・外の濱・夷・が・すむなる・千島なり共・宗盛親子が・命だにあらばと・宣ひけるぞ・いとほしき・角て國々・宿々・打過・打過・下り給ふ程に・尾張國・野間の内海にも・成しかば・判官は・爰父・義朝の・亡び給ひし所なればとて・大臣殿父子を・馬より・おろし奉つて・墓の前を・かなた・こなたへ・七度迄・ひきまはし奉り・其後・判官・墓の前に・畏り・願は・過去聖靈・此志をもつて・九品安養の淨土へ・引接し給へと・申されけるこそ・哀なれ・又大臣殿父子を・馬にかきのせ奉つて・やうやう・下給ふ程に・駿河國・浮島が原にも・成しかば・大臣殿・駒をひかへて

鹽路より絶す思ひを駿河なる・身は浮島に名をば富士のね(イ名は浮島に身をば富士の嶺)

御子衞門頭

我なれや思ひにもゆるふじの根の・むなしき空の煙ばかりは・

去程に・判官は・三日路より・人を先だてゝ・鎌倉へ案内を・申されたりければ・源二位殿・まづ・梶原をめして・けふ・九郎が・鎌倉入すなるぞ・いか樣にも・過分の振舞をぞ・せんずらん・侍共めすべしと・の給へば・梶原承つて・鎌倉中を・馳廻て・催しけるに・鎌倉中の・大名・小名・馳あつまつて・源二位殿を・守護し奉る・源二位殿又・梶原を召て・まづ・金洗澤に・關するゑさせよと・宣へば・梶原承つて・父子三騎・五百餘騎にて・行向ひ・金澤に・關するゑさせ・大臣殿父子を請取奉つて・それより・判官をば・腰越へ・おつ返し・奉る・其後・大臣殿父子をば・鎌倉中へ・入奉つて・源二位殿住れける・坪をへだてゝ・對のやに・おき奉り・比企の藤四郎義員をもつて・宣ひ・つかはされけるは・まつたう・賴朝・平家に・意趣・思ひ・奉らず候・其故は・去ぬる・平治に・當家の爲に・生捕れ・既に・誅せらるべかりしを・故池の禪尼の・やう〳〵に・申て・死罪を・流罪に・しよせらるゝ所なり・縦・禪尼計こそ・哀ませ給ひ・候とも・故入道・相國の・御憐なくては・爭か・賴朝が・甲斐なき命の・たすかり候べき・然りとは申せども・加樣に・朝敵となり給ひぬる上は・追討し奉れとの・院宣を蒙つて・悉ほろぼし・參らせ候ひぬ・されども・かやうに・まのあたり・御見參に・いつつとこそ・かねては存じ候はねと・宣ひつかはされたりければ・大臣殿・居なほり・畏つて・きかれけるこそ・口惜けれ・日來・平家に・奉公せし輩共の・今一度世に・あらむとて・鎌倉に・馳下つて・候ひけるが・此由を見奉つて・あな淺ましあの・御心にて・渡らせ・給へばこそ・今度・西海の浪の・底に・しづみ給ふべき・人の・命生きて・是までは・はる〳〵下らせ・給ひたんなれ・されば・唯今・居なほり・畏つて・聞給ひたらば・そも・たすからせ・たまふべき・御身か・な

んど各〻つまはじきをして・あざみ・あへれば・其中に・すこし意得たる・者の・申けるは・猛虎深山に・ある則ば・百獣・震慄・檻穽の・中に・ある時は・尾をうごかして・食を・求といふ・本文あり・されば・いかに武き・兵なれ共・敵の手に・とらはれぬれば・心は・替るならひなり・されば・只今・大臣殿の・わるびれ・給ふも 理也と・申てこそ・恥をば・餘所にて・たすけ けれ・去程に・判官は・腰越に・おはしけるが・いかさまにも・今度鎌倉に・下つたらば・所々の合戦・毎度の高名・たづね感せられんずるかと・思ひたれば・剰・鎌倉中へ・だに・入られざるこそ・存外の・次第なれ・いかさまにも・是は・梶原が・掠申にこそ・あんなれとて・まつたう・御爲に・野心を・さしはさまざる旨を・起請代に・戴られて・數通の狀をかき・進上せらる・中にも・別して・一筆なげき・申さるゝ旨あり・其狀にいはく・

源の義經・恐ながら謹で申上候 意趣者・御代官の其一と・えらばれ・勅宣の御使として・朝敵をたひらげ・會稽の恥を雪・忠賞 行はるべき處に・虎口の讒言に依て・莫大の軍功を・默せらる・義經犯しなうして・咎を蒙り・功あつて・誤なしといへ共・むなしく・紅涙に沈む・讒者の實否を・たゞされず・剰・義經・鎌倉中へだに・入られざるあひだ・しさいを述るに・能はず・徒に數日を送る・此ときに至つて・恩顔を拜し 奉らずんば・骨肉同胞の儀・永絶・宿運 極て・むなしきに・似たるか・將又・前世の・宿因を・感ずるか・故亡魂・尊靈再誕・し給はずんば・いづれの日か・愚意の悲歎を・申ひらかん・たれの人か・哀憐を垂んや・事 新申狀且 述懷に・似たりと・いへ共・義經・身體・髮膚を・父母にうけ・幾の・時節を經ずして・故左馬頭の殿・御他界の間・孤と成果て・母の懷に・抱れ・大和國・宇多の郡・龍門の牧に・趣しより・以來・一日片時も・安堵の思に・住せず・命は存ずと・いへ共・身を・在々所々に・隱し・邊土遠國を・栖として・賤き・土民・百姓等に・ぼくじゆ・せらる・高慶 忽に・純熟して・平氏・追討の討手に・上洛せしむる・手合に・木曾義仲を・誅戮し・平家を・亡さん爲に・西國に・發向して・或時は・峨々たる・巖石に・向つて・駿馬に・策を打て・敵の爲に・身を亡さむことを・病ます・或時は・漫々たる・海上に浮び・風波の・難を凌て・身を海底に・しづめん事を・願ず・屍を・鯨鯢の鰓に・懸んとせし事・度々也・加之・甲冑を枕と・し・弓箭を業とする・本意は・故亡魂尊靈の・御憤りを・休奉らんと・思ふより外は・又他事なし・剰・義經・五位の尉に・補任の條・當家の重職・何事か・是にしかんや・然りといへ共・今愁ふかく・歎き切なり・此時に至て・佛神の御助にあらずんば・いかんか・愁訴を達せむ・全う・御爲に・野心を・持ざる旨・諸寺・諸社の・寶印の裏をもつて・日本國中の・大小の神祇・冥道・請じ・驚し奉つて・數通の・起請文をかき・進上すと・いへ共・猶以・御宥免なくんば・日本は是・神國也・たのむ所・他に非ず・偏に貴殿廣大の慈悲を・仰・便宜を・窺て・高聞に・達せられ・誤なき旨を・宥せられ・御芳免に預らば・積善の餘慶・家門に傳へ・榮華を永く・子孫に殘さむ・仍年來の・愁眉を

開て・正に一期の・安寧をえん・書紙につくさず・偏省略せしめ畢・義經・恐惶謹言・

元暦貳年・六月五日の日　進上　因幡の守殿へとぞかゝれたる

大臣殿のきられ

此狀・上聞に・達せずもや・ありけん・とかうの・御返事も・なかりければ・判官・宣ひけるは・さきに生れたを・兄と云・後に生れたを・弟と云にてこそあれ・代をしらむには・誰かは・おとるべきと・世にも・ほいなげにこそ・宣ひけれ・同き六月十二日に・九郎大夫の判官義經・又・大臣殿父子を・請取奉つて・都へ・歸り上られけり・道すがら・大臣殿衛門督に・むかつて・我等今度・鎌倉にて・きられんずるかと・思ひたれば・思ひの外に・命たすけられぬる事よと・宣へば・衛門督・何事によつてか・助られ候べきとて・大臣殿にも・念佛を・すゝめ奉り・我身も一向・後世菩提の・つとめをのみぞ・し給ひける・美濃・尾張にも・成しかば・大臣殿又・衛門督に・むかつて・今は我等・親子が・命の・たすからむずるに・こそと・宣へば・當時は・あつき比にて候へば・頸の損せぬやうを・はからうて・都ちかき所にてぞ・きられ候はん・すらむとて・一向後世菩提の・つとめをのみぞ・し給ひける・同き・廿二日に・近江國・しの原にこそ・着給ひけれ・其朝より・大臣殿・父子を・ひきわけ奉つて・所々に・おき奉らる・扨こそ・大臣殿も・衛門督も・けふを・最後とは・思はれけれ・

判官は・萬に情ある人にて・おはしければ・一日路より・さきに・都へ人を・のぼせて・善知識の聖を・尋させらる・小原の・本性坊湛豪とぞ・聞えし・大臣殿・善知識の聖に・むかつて・宣ひけるは・我等・今度・西海の底に・沈べかりし身の・生捕にせられて・京・田舍・引しろはれ・恥をさらし候事も・あの衞門督をおもふ故なり・縱頸をこそ・とらるゝ共・むくろは・ひとつ所に・ふさむとこそ・思ひしに・ところ〴〵にて・死なん事こそ・悲しけれと・宣へば・善知識のひじり・さな・おぼしめされ候そ・本より・此所は・盛者必滅の國なれば・生る者は・必死し・あふ者は定て・別るるならひなり・されば・秦の始皇の驕を・きはめしも・終には・驪山の塚に・埋もれ・漢の武帝の・命を惜まれしも・終には・茂陵の苔に・朽にき・樂は是・悲みの基なり・生は則・死の因なり・君は・今年三十九に・ならせ・おはします・其御間の事共を・あんじつゝけて・御覽じ候へ・唯一夜の夢のごとし・縱・今より後・七十・八十を・たもたせ・給ひ候共・それも・程やは・候べき・忝も・御門の・御外戚にて・丞相の位に・至らせ・給ひぬれば・御榮花・殘る所も・候はず・釋尊・いまだ・栴檀のけぶりを・まぬかれ給はず・況・閻浮不定の境に・おいてをや・天人猶・又衰の日にあへり・とこそ見られて候へ・されば・佛も・我心自空・罪福無主・觀心無心・法不住法とも・說れて候なり・いかなる・彌陀なれば・おこしがたき・誓願を起して・我等を・引接し給ふらん・いかなる・我等ぞや・億億萬劫より・此かた・生死に・流轉して・いまだ・出離の期を出ず・今度寶の山に入て・手をむなし

う・せさせおはしまさん事・御歎の中の・御歎なるべし・相構て・餘念・起させ給ふなとて・しきりに・かね打ならし・念佛を・すゝめ奉る・大臣殿・忽妄念飜し・高聲に・念佛數百反・唱へ給ひて・さらばとく・きれやとて・首をのべてぞ・またれける・切手は・橘右馬の允公長とぞ・聞えし・公長太刀をぬいて・ひきそばめ・御後に・立まはりければ・大臣殿・御覽じて・衞門督も・既にかうかと・宣ひもあへず・頸は前にぞ・落にける・此公長と申は・日來・新中納言殿の・召つかはれける所の・侍なり・今一度世に・あらんとて・鎌倉に・馳下つて・いひけるが・一家の主の首を・打・にくまぬ者こそ・なかりけれ・其後・善知識の聖・衞門督の・御方におはしたり・衞門督・善知識の聖にむかつて・宣ひけるは・扨・大臣殿の最後の・御有樣は・いかにと・問ひ給へば・善知識の聖・さもゆゝしうこそ・見えさせ・おはしまして・候ひつれと・宣へば・衞門督・斜ならず・喜び給ひて・十念うけ・さらば・とくきれやとて・頸をのべてぞ・討せられける・切手は・堀の彌太郎朝廣とぞ・聞えし・誠に惜かるべし・今年は・十七にぞ・なられける・頸をば・判官・持せて・都へ・上らる・むくろは・知識の聖と・公長が・沙汰として・ひとつ所に・ほりうづみ・卒都婆を立てぞ・上りける・同き二十三日に檢非違使・二人・三條・河原に・行むかひ・大臣殿父子の・かうべ・請取奉つて・三條を西へ・渡し奉る・懸りければ・法皇も・三條・西の洞院に・御車を立て・叡覽ある・其外・供奉の・公卿・殿上人の・車をも・同じう・立ぞ・ならべられたる・此人々は・此・日來・さしも・御前ちかう・まゐりあはれし・輩なれば・いつしか・哀に・おぼしめして・龍顏に・御涙・せきあへさせ・給はず・大臣以上のかうべ・大路を・渡さるゝ事・天竺震旦はしらず・日本我朝に・おいては・是始とぞ承る・西國より・歸り上らせ給ひては・生きて・六條を東へ・渡され・東國より・歸り給ひては・死で・三條を西へ・わたさる・生ての恥・死んでの恥・申計もなかりけり

巻第十二

重衡のきられ

去程に・本三位の中將重衡 卿 をば・伊豆國の住人・狩野の介・宗持が・預り奉つて・去年より・伊豆にぞ・おはしける・奈良を・亡し給へる・伽藍の敵とて・大衆しきりに・申ければ・さらば・渡し奉れやとて・今度は・源三位・頼政入道の末子・伊豆藏人の大夫頼兼・請取奉つて・南都へこそは・渡しけれ・今度は・都の中へは・入られず・山科より・醍醐路に・懸られければ・日野も・次第に・近くなる・此北方と申は・鳥飼の・中納言維實の卿・御娘・五條の大納言・國綱 卿 の養子・先帝の御乳人・大納言の佐殿とぞ申ける・西國より・たけき武士の手に・渡り・再都へ・歸り上らせ給ひては・姉の大夫三位の局と・同宿して・此日野と云所に・ぞ・おはしける・三位の中將・守護の武士に・むかつて宣ひけるは・此日來各々に・情を懸られて・忘がたうは・おぼゆれ共・今一度・最後の芳恩に・預らばやと・思ふは・いかゞ有べきと宣へば・守護の武士共・何事にて候やらんと・申たりければ・三位の中將・別のやうはなし・日比あひなれし・女房の・此日野と・云所に・ありときく・

打過さまに・たちよつて・後世の・事共も・云おかばやと・思ふは・いかゞ有べきと・宣ひければ・守護の武士共・やすき御事 候 とて・人・さきに參つて・是に・大納言の佐殿と・申・女房や・御渡り候・三位の中將殿の・奈良へ・御通り 候 が・聊・御見參の爲に・いらせ・給ひて候と・申たりければ・北方いづくや・いづらとて・はしり出て・見給へば・藍摺の直垂に・をりゑぼし・着たる男の・やせ・黒みたるが・緣に・より居たるぞ・そなりける・北方・いかにや・是へ〳〵と・宣へば・三位の中將・みす打かづきて・入給ふ・互に・手に手を・取くみ・いかにやと・いはんと・すれば・涙にて・しばしは物をも・の給はず・良あつて・三位の中將・涙を・おさへて・宣ひけるは・今度・重衡・一谷にて・いかにも・罷成べう・候ひし身の・一人・生捕に・せられて・京田舍・引しろはれ・うき恥を・さらし・候だにも・心うきに・はては・奈良を・ほろぼしたる・伽藍の敵とて・只今渡され・候ぞや・いかばかりか・罪・ふかう・候はんずらむ・縦・いかなる・御有樣にても・渡らせ給へ・重衡が・後世・とふらうて・たばせ給へと・涙も・せきあへず・宣ひければ・北方誠に・去年の・二月六日の曉を・限りとも・しらずして・別奉りぬれば・やがて・いかにもなりぬべかりし身の・大臣殿も・二位殿も・君をば・爭か・捨・參らつさせ・給ふべきと・やう〳〵に制し・給ひし上・されば・とて・又・此世に・なき人と・成給ひたり共・聞ざりつる程に・互に・かはらぬ・すがたをも・今一度・見え・奉る事もや・有んずらむと・思ひてこそ・今までも・有つれ・今より後は・ながき別と・なら

ん事こそ・悲しけれと・の給へば・三位の中將・たれも・かはらぬ姿を・互に・見え・奉りぬれば・今は死手の山路をも・輒・こえ行なんと・思ふのみこそ・うれしけれ・名殘は・夜を・かさね・日を・かさぬ共・盡すまじ・是より南都も・程・とほう候へば・武士の・待らんも・心なし・さらば・暇・申てとて・既に出んとし給へば・北方・めしてとゞめ候物の・しほたれて・餘に・見ぐるしう候へば・是を・めせとて・白小袖に・淨衣そへて・奉らる・三位の中將・是を・着かへ給ひて・もと・着給ひたる・物をば・なからん後世の・形見にも・御覽せよ・とて・さしおき給へば・北方なからん後の世の・形見には・むなしき・筆のすさみこそ・ならんずれとて・御硯・取出し給へば・三位の中將・墨すり・筆染て

せきあへず涙のかゝるから衣・後のかたみにぬぎぞかへぬる・

北方の・御返事には

ぬぎかふる衣も今は何ならず・（イ何かせん）けふを限りの形見と思へば・

三位の中將・さらば・暇・申てとて・既に打出給へば・北方・さるにても・今しばしとて・引とゞめ給へば・さのみは・いかゞとて・ひきちぎつてぞ・出られける・三位の中將・心つよくも・引・ちぎつては・出られけれ共・さすが馬をも・すゝめもやり給はず・只・後へ・のみ・引返す・心地して・ひかへひかへぞ・なかれける・かへり見給ふ・日野は・次第に・遠ざかり・南都は又・近くなり・屠所の羊の歩の・近づく心地して・馬に・まかせて・うつほどに・其日の暮がたには・三位・南都にこそ・入給へ・去程に・南都の大衆・三位の中將殿を・請取奉つて・東大・興福・兩寺の大衆・集會して・僉議しけるは・抑・此重衡の卿と・いつば・重犯の・惡人たる上・三遷五刑の・逆罪にもこえ・修因感果の・道理極上せり・詮する・所・兩寺の大垣を・引まはし・其後・堀塹にや・すべき・又鋸にてや・ひくべきと・僉義しける所に・其中に・老僧共の・申けるは・誠に・伽藍破滅せし時・衆徒が・生捕にも・したらば・尤さるべけれ共・遙に・程へて・後・武士が・虜に・したるを・請取て・さやうに・せん事・僧徒の法に・穩便ならず・唯・武士に・とらせて・木津の邊にて・きらすべしと・云ければ・さらばとて・又武士の手へこそ・渡しけれ・爰に・三位の侍に・木工右馬允・正時と申者あり・中將既に・木津川にて・きられさせ・給ふと・聞えしかば・急・鞭鐙あはせて・馳けるが・程なう・木津河に・馳ついて・急・馬より・とんで・おり・大勢の・中を・おしわけ〳〵・御前に參つて・見奉るに・唯今を・限りと・見え給ふ・三位の中將・いかに・あれは・正時か・嬉しうも・見えたる物かな・今一度・佛を拜み奉らばやと・思ふは・いかゞ有べきと・宣ひければ・正時やすき御事候とて・ある御堂に・參つて・見奉るに・幸に彌陀の・三尊の三尺の・立像にて・渡らせ・給ひけるを・とり奉つて・すなごの上に・東向に・する奉り・正時が・直垂の・くゝりを・といて・佛の御手に・ゆひつけ奉り・三位の中將・五色の糸となぞらへて・是をひかへ給ひて・我はからざるに・伽藍燒失

の・餘殃に・まどはされて・極重根本の・ことわりに・こたへて・末の露本の雫と・なるためし・重ね・衡一人が・咎にて・ながく・阿鼻大城の・底に・しづまん事・唯今なり・但傳へきく・達多が・三逆をかし・闍王の無道に・父を害せしも・かへつて・天王如來の・記別に預る・極重惡人・無他方便・唯稱彌陀・得生極樂の・御誓ひ・あらたまらせ・給はずは・日比の・惡行を・飜し・九品安養の・淨土へ・引接し給へと・申させ給ひ・さらば・とく・きれやとて・頸をのべてぞ・打せられける・日比の・惡行の・にくさも・さる事にて・切手の武士も・大衆も・みな鎧の・袖をぞぬらしける・其後・頸をば・太刀の・きつさきに・さしつらぬき・高く・さしあげ・大音聲を・あげて・去ぬる・治承の合戰に・法花寺の・鳥居の・本に打立て・火を・出せやと・下知・したりしは・是ぞ・かしとて・盤若寺の大卒都婆に・釘付にこそしたりけれ・去程に・三位の中將の・北方は・日野におはしけるが・哀や三位の・縱頸をこそ・とらるゝ共・むくろは・むなしく・河原にぞ・捨置たるらん・行て・見よとて・觀音冠者・地藏冠者・十力法師なんど申者に・輿をかゝせて・つかはさる・案のごとく・むくろは・むなしう・河原に・捨おきたるを・御輿に・かきのせ奉つて・日野へ・歸り參りたり・北方・むなしき御手に・とりつき・給ひて・かなしみ・給へど・甲斐ぞ・なき・扨しも・有べきならねば・野の邊へ・送り奉り・頸をば・南都の・俊乘上人・衆徒に・乞て・日野へ・つかはさる・ひとつ・薪に・つみこめて・煙となし・奉る・骨をば高野へ・送り・塚をば・日野にぞ・つかせける・其後・北方は・法界寺より・聖を・請じて・樣かへ・一向・三位の中將の・後生善處をぞ・祈られける

大地震の沙汰（あひ）

平家・亡びて後は・國は・國司に從ひ・庄は領家のまゝ也ければ・道を・かよふに・煩・なく都もおだしかりければ・上下安堵の思ひを・なす所に・元暦二年・七月九日の日の・午の刻ばかりに・大地おびたゝしう・動て・やゝ久し・白河の・うち・赤縣の・ほとり・九重の塔よりはじめて・堂舍佛閣・人屋おほく・或は・やぶれ・くづれ・或はたふれ・かたぶいて・またきは・一宇もなかりけり・三十三間の・德長壽院をも・十七間まで・ふりたふす・あがる・ほこりは・烟に・同じ・天くらうして・日の光も・見えず・老少・魂を・失ひ・鳥獸・肝を・まどはす・都のうちは・申に及ばず・近國遠國も・皆かくのごとし・大地・裂ては・水を出し・海・傾て・濱を・ひたす・山くづれては・谷をうづみ・いはほ・くづれて・河をうづむ・渚漕舟は・波にたゞよひ・陸をゆく・蹄は・足のたてどを・まどはす・鳥にあらざれば・天をも・翔がたし・龍にあらざれば・雲へも又・入がたし・洪水・漲り出こば・高き岡に・あがりても・しばしは・さりぬべし・猛火・もえ來らば・川を・へだてゝも・などか・たすからざるべき・唯せんかたなきは・大地震なり・又何物か・申だしたりけむ・陰陽頭・安倍の泰親・急・內裏に・馳參じて・奏聞しけるは・夕さりの・亥子の刻・あすの・巳午の刻には・大地かならず・

打かへすべしなんど・奏聞すと・聞えしかば・其時に・いたつて・家の鳴り・蔀格子の・ゆるぎはたたくを・見ては・おとなしき者の・をめきければ・をさなき者共も・同じう・つれてぞ・咽びける・去程に・主上はお舟に・めして・池のみぎはに・うかばせ・おはします・其外女院・宮々は・或は御輿に・めされ・或は御車に・めして・いづち共なく・ぎやうけいなる・昔・文徳天皇の御宇・齊衡三年・三月三日の・大地震には・東大寺の御佛の・みぐし落させ給ひけむなり・又朱雀院の御宇天慶四年・四月の・大地震には・主上・御座所を・出させ給ひて・大極殿の前・常寧殿の南に・五丈の幄屋を・つくつて・すませ給ひけむ也・其時は・四月より・はじめて・七月に至るまで・日々に七八度・乃至十四五度・廿度ばかり・ゆりけるなんどは・聞えしか共・それは昔の事なれば・しらず・七八十・乃至九十の人までも・世の滅すると・云事は・さすが・昨日今日とは・きかざりつる物を・いかさまにも是は・平家の怨霊か・又は世の損すべき・前表かとぞ・上下・申あへりける・去程に・法皇は・今熊野に・七日・御花・参らつさせ・給ひけるが・今度の・大地震に・御庵室・ふりたふされさせ給ひ・人おほく・打ころされ・觸穢・あまた・出來にしかば・急・都へ・還御なる・去程に・建禮門院は・東山の麓・吉田の御所に・渡らせ給ひけるが・今度の大地震に・御所も破れ・築地も・崩にしかば・綠衣の監使・宮門をまぼるだに・なし荒たる庭の雜は・しげき野邊よりも・露ふかく・恨むる虫の・聲までも・殊に・物あはれに・聞え・夜も・ながく・成行まゝに・いとゞ・御寢覺がちにて・おのづから・打も・まどろませ・給はねば・むかしの事をば・夢にだにも・御覽せず

平大納言の流され

元暦二年・八月一日の日・改元あつて・文治元年とぞ申ける・同き十日の日・都には・除目行はれて・源氏六人・受領に・なるまづ・九郎大夫の判官義經・伊豫守・武田の太郎信義・駿河守・かゞみの次郎遠光・相模守・逸見の冠者有義・武藏守・安田の三郎吉貞・遠江守・大内太郎維義・信濃守・とぞ聞えし・同き廿三日に・平家の生捕・國々へ・流しつかはさる・まづ・平大納言時忠・能登國・内藏頭信基佐渡國・讃岐の中將時實・土佐國・兵部少輔政明讃岐國・二位の僧都還眞安藝の國・法勝寺の執行能圓石見國・中納言の律師忠快武藏國・慶壽坊の阿闍梨祐圓は・備後國とぞ・聞えし・同き廿二日の暮がたに・平大納言時忠・女院の・渡らせ給ひける・吉田の御所に・參つて・申されけるは・あり甲斐なき・身にて候へ共・都に・候ひしに・今はせめ・おもうして・配所に・趣候べし（イなり）・今より後・いかなる・御有樣にか・聞なし奉らん・すらむと・行空も・覺ず・候と・涙も・せきあへず・申されたりければ・女院・誠に・昔の名殘とては・そこ・ばかりこそ・おはせしに・今より後・又たれやの人か・問とぶらひ・さふらふべきとて・御涙に・咽ばせ・おはします・此時忠卿と・申は・前の出羽守基信の孫・刑部の權の少輔（イ兵部權大輔）時信の朝臣の子

なりけり・建春門院の御弟・故高倉院にも・御外戚にて・おはしければ・彼楊貴妃が・さいはひし時・楊國忠が・榮えたりしが・ごとし・入道相國の・北方二位殿にも・御弟にて・おはしければ・天下の大小事共に・此卿に・宣ひ合られければ・人平關白とぞ・申ける・今・しばらくも・平家の・代ならましかば・大臣の左右・うたがひあらましかは・父時信の朝臣にも・贈左大臣をぞ・送られける・子息實家・時實も・中少將まで・あがられけり・されば檢非違使別當にも・第三ケ度まで・成かへらせ給ひけり・此卿の廳務の時は・諸國七道の・竊盜强盜・山賊海賊等を・めしあつめ・右の肘を・打切打切・追放されければ・人惡別當とぞ・申ける・一とせ・平家・讃岐の八島に・おはせし時・都よりの院宣の・御使花がたが・顏に・波形と・いふ・火印を・さゝれたりしも・此卿の・しわざ也・さる程に・法皇は・故女院の御事を・おぼしめされけるに・つけても・いかにもして・此卿をば・都の・内に・たすけ・おかばやと・おぼしめされけれ共・日來の振舞・餘に・傍若無人なりければ・御憤り・深かりけり・判官も・したしう・なつて・おはしければ・何共して・此卿をば・都の中に・おき奉らばやとは・思はれけれども・我身さへ・鎌倉の・源二位殿に・心よからざる上・法皇の御憤り・深かりければ・力及ばせ給はず・北方・帥の佐殿も・日比より・かゝるべしとは・おもひ・まうけられし・事なれ共・さしあたつては・又かなしくぞ・おもはれける・遙に年たけ・齡・かたぶいて・後・都の・うちを・出られけるに・一まども・うち・送り奉る人・一人も・付奉らず・けふを・限りに・都の外へ・出られける・心の中・おしはかられて・哀なり・やう〳〵・下り給ふ程に・近江國にも・成しかば・爰をば・いづくと・云ぞと・問給へば・堅田の浦とぞ・申ける・漫々たる・沖に・ひく網を・見給ひて・大納言

かへりこむことも(イは)堅田に引網の・目にもたまらぬ我涙かな

又やう〳〵・下り給ふ程に・能登國にも・成しかば・大納言の・おはする所は・浦のあたりちかき・所なりければ・岩の上々・松の一本・そびえ・立たるを・見給ひて・大納言

白波のうち驚かす岩の上に・ねいらで松の幾代へぬらん・

昨日は西海の浪の上にして・怨憎會苦の・くるしみを・扁舟の中につみ・けふは・北國の・雪の下に・うづもれて・愛別離苦の・かなしみを・故郷の雲に・重ねたりと・詠明し・詠暮して・年月を・送りぞ・かさねさせ・給ひける

小原いり

建禮門院は・東山の麓・吉田の御所に・渡らせ給ひけるが・爰は猶・都近くて玉ぼこの・道行人の・人目もしげかりなん・されば・露の御命・風を・またせ給はん程も・いかならむ・山の奥の・おくへも・入なばやとは・おぼしめされけれ共・さるべき便りも・ましまさゝり・けるにある女房の・參つて・申

けるは・小原の奥寂光院と・申所こそ・きはめて静なる所にて・さふらへと・申ければ・女院・是は・然るべき佛の・御告にこそと・思召・山里は・物の・さびしき事こそ・あんなれ共・世のうきよりは・住よかんなる物を・とて・なく〳〵思召たゝせ・給ひけり・何事も・昔に・かはり行事共にて・おのづから情を懸奉る・人も・なかりけるに・今は冷泉の・大納言隆房の卿の・北方・七條の修理の大夫信隆の・女房よりぞ・常は・御乘物なんどをも・沙汰し・參らつさせ・給ひける・比は文治元年・長月廿日あまりの・事なれば・四方の梢の色々なるを・御覽じて・遙々と・過させ給ふに・山陰なればにや・日もはや・暮にけり・いつしか・空かきくもり・うち時雨つゝ・木葉・みだりがはし・野寺の鐘の・入逢の音すごく・鹿の音・かすかに・おとづれて・虫の聲々・たえ〴〵なり・女院寂光院に・參らせ給ひて・見參らつさせ給ふに・幸に・彌陁の・三尊にてぞ・渡らせ給ひける・忝も・わがたのみを・かけ奉る本尊・然るべき事に・思召て・拜を・參らつさせ給ひけるが・法施を・留て・かうぞ・申させ・給ひける・天子・聖靈・一門幽儀・頓證菩提・成等正覺とぞ・申させ給ひける・きのふは・東にむかはせ給ひて・天照太神・玉體安隱にと・御祈誓あり・けふは・西にむかつて・彌陁如來・往生極樂と・申させ給ふぞ・哀なる・西の山の端を・御覽せらるれば・下紅葉・ところ〴〵に・見え渡り・綠羅の墻・紅葉の山・繪に・かく共・筆も及がたし・東には・細谷川・流れつゝ・岩に苔むして・さびたる所なれば・誠に・すまゝほしくぞ・おぼしめす・庭の萩原・霜がれて・籬の菊の・かれ〴〵に・うつろふ色を・御覽じても・唯御身のうへとぞ・思召・方丈なる・御庵室を・むすばせ給ひて・かたはらを・御寢所に・こしらへ・一間を・佛所に・しつらはれたり・晝夜朝夕の・御つとめ・定時不斷の・御念佛・怠らせ給はずして・月日を・送らせ給ひけり・かくて・神無月・中の五日の・暮かたに・庭に散しく・楢の葉を・物ふみ・ならして・聞ゆれは・女院晝だにも・人目稀なる・山里へ・唯今・なに物の・來るやらん・忍ぶべき物ならば・しのばゝやと・仰ければ・大納言の佐殿・立出て・み給ふに・人にては・なかりけり・世にうつくしき・小鹿の・三つつれたるが・渡るにてぞ・ありける・大納言の佐殿・歸り參らせ・給ひて

岩ねふみ誰かはとはむならのはの・そよぐは鹿の渡るなりけり

と・申させ給ひたりければ・女院・なく〳〵・窓の御障子に・あそばしぞ・付させ給ひける・かゝる御つれ〴〵の・中にも・なほ昔に・思召なぞらふる・御事共・おほかりけり・軒にならべる・うゑ木をば・七重寶樹にかたどり・岩間に・つもる水をば・八功德水とぞ・おぼしめす・長秋宮に・花を・もてあそんし朝・風來つて・にほひを・さそひ・清涼殿に・月をながめし・ゆふべ・雲覆て・光をかくす・昔は玉樓金殿の・妙なる・御住居なりしかども・今は・柴引むすぶ・庵の內・餘所の袂も・おさへがたし

參河守の最後（あひ）

其比鎌倉には・九郎大夫の判官・うたるべしとぞ・聞えし・或時・源二位殿・參河守を・ようで・御邊・都に上り・九郎討給へと・宣ひければ・參河守・申されけるは・是は同じ兄弟の・中とは・申ながら殊に契りを・ふかうなし・西國所々の・合戰の・はかりごと迄も・九郎には過す候・されば・我が手にかけて・討む事・餘に・不便に・存じ候へば・自餘の仁に・仰付らるべうもや・候らんと・申されたりければ・源二位殿・扨は・御邊も・九郎同心の・人やとて・急障子をちやうと・たてゝぞ・いり給ひける・參河守・かなはじとや・思はれけん・まつたう・さなきよしを・起請文を・もつて・申されたりければ・さらば・やがて伊豆に越・修善寺にこそ・おはしけれ・懸りける所に・梶原・源二位殿に・申けるは・參河守殿と・九郎大夫の判官と・御一所に・ならせ給ひては・ゆゝしき・御大事にてこそ・候はんずれ・こはいかゞ・御はからひ候・やらんと・申たりければ・さらば・汝・伊豆に・こえ・參河守・うてと・宣へば・梶原・承つて・父子三騎・五百餘騎にて・伊豆に・こえ・修善寺にこそ・押寄たれ・參河守は・ある坊に・おはしけるが・小袖に・大口ばかりにて・妻戸の間に・おはしけるが・矢把・といて・おしくつろげ・さし詰・引つめ・散々に・射給ひけるに・寄手・おほく・射ころさる・其後・矢種つきければ・人手に・かゝらじとや・思はれけん・坊に・火かけ・自害・してこそ・失られけれ・其後・梶原・煙を・しづめ・參河守の・やけ頸とつて・鎌倉に・持てゆき・源二位殿に・見せ奉る・神妙也と・宣ひける

土佐坊が夜討

或時・源二位殿・土佐坊昌俊を・めして・わ僧・都に・上り・九郎うてと・宣へば・土佐坊・畏て申けるは・さぞ・大勢にては・いかにも・叶ひ候まじ・昌俊が・手勢斗にて・罷上候はんとて・頓て・五十餘騎にてぞ・打立ける・道すがらをば・熊野詣の體に・事よせて・都に上り・三條・油の小路なる所に・宿打取てぞ・居たりける・判官・何としてか・聞出させ・給ひたりけん・土佐坊が・のぼつたんなれば・定て參らむずる・物をとて・其日・一日・待れけれ共・參らず・次の日一日・またれけれ共・參らざりければ・判官・武藏坊辨慶を・めして・土佐坊が・上つたんなるが・參らぬ事こそ・不思議なれ・汝行て・土佐坊を・具して參れと・宣へば・武藏坊・畏て・承り・土佐坊が宿に・行向ひ・昌俊を・具して・參りたり・判官・やがて・出あひ・對面し給ひて・いかに・わ僧は・義經うてとの・使なと・宣へば・土佐坊申けるは・是は・年來・七大所詣の・望・候ひしか共・此兩三年は・京都の・さわぎ・國々の・みだれに・よつて・其儀なく候・今は・世間も・靜に成候へば・其宿願・はたさん爲に・罷上つて候間・鎌倉殿にも・此由・かく共・申候はねば・御文なんども・

候はず・いかさま・下向の道に・参らむずる心ちして・さて参らず候と・申たりければ・判官・いやとよ・誠は義經うてとの・使なと・宣ひて・けしき・大きに・かはつて・みえられければ・土佐坊・かなはじとや・思ひけん・熊野の・牛王を・申おろし・七枚の・起請文を書て・奉る・判官・此上は・權現にこそ・任せ申さんずれとて・土佐坊を・ゆるして・かへされけり・土佐坊・宿に歸り・いや〳〵・此事・延ては・かなふまじ・今夜・夜討に・し奉らんとて・道すがら・忍うで・持せたる・兵具取出し・やがて・五十餘騎にてぞ・打立ける・判官の宿所・六條堀川の御所に・押寄・油の小路表なる・門をどう〳〵とたゝいて・是は・鎌倉殿より・討手の大將・承つて・土佐坊昌俊が・參つて候・あけられ候へ〳〵とぞ・申ける・比は・十月十七日の夜の・事なりければ・判官の侍共は・みな清水寺詣して・一人もなかりけり・御傍には・靜と・申・白拍子・只一人ぞ・候ひける・折節判官は・酒にゑひて・臥給へり・靜・判官を・おし・おどろかし・奉つて・晝の・起請法師が・參りて・さふらふに・おきさせ給へと・申たりければ・判官・さては・とて・おき給ふ・まに・鎧・とつて奉る・上帶しめ給ふまに・太刀・とつて奉る・甲とつて・奉る・緒・しめ給ふ・まに弓とつて・奉る・はり給ふ・まに・矢とつて・奉る・判官・弓おしはり・矢かき負・中門に・出られたりければ・雜兵が・馬に鞍おいて・ひつたてたり・判官・馬に打乘り・大庭に・懸向ひ・鐙・踏張つつたち・あがり・大音聲を・あげて・天竺・震旦にも・日本我朝にも・當時義經を・敵とて・むかはんずる者

こそ・おぼえね・いかなる者ぞ・名乘や・なのれと・宣ひて・左右なう・門をば・ひらかれず・築地を・へだて射合たり・判官の侍共は・みな・清水寺詣・したりけるが・當時は君の・御用心の折節ぞ・いざや・參らむとて・打連々々〳〵・參る程に・案のごとく・六條表に・矢叫の音・しければ・されば・こそとて・馳集・土佐坊を・中に・取籠てぞ・戰ひける・江田の源三・熊井太郎・内甲射させて・ひきしりぞく・其後判官・門をひらかせて・切て出・散々に・責られたりければ・土佐坊が・勢・五十餘騎とは・見えしか共・落ぬ討れぬせし程に・たんごぶらいに・成にけり・土佐坊・只一騎に・なつて・馬をも・はなれ・おりたつて・戰ひけるが・かなはじとや・思ひけん・油の小路を・のぼりに・逃てゆく・武藏坊・只一人・つゞいたり・きたなしや・かへせや・かへせとて・追懸たり・五條を東へ・東の洞院を・のぼりに・逃ゆく・三條を東へ・萬里の小路を・上りに・鞍馬山へぞ・逃入ける・判官は・もと・此寺の兒にて・渡らせ給へば・其よしみをもつて・大衆おこつて・土佐坊を・生捕て・武藏坊にぞ・とらせける・武藏坊・昌俊を・搦とつて・都にかへり・判官の宿所・六條堀川の・御所の・御坪の内にぞ・ひつすゑたる・判官・御覽じて・わ僧は・はやくも・起請には・うてたる物かなと・宣へば・土佐坊・申けるは・うつるこそ・道理候よ・ある事に・書て・候へばとぞ・申ける・判官・やがて・汝をば・切ても・捨べけれ共・故左馬の・頭殿の・御時・金王丸とて・さしも・不便に・せさせ・給ひたりしかば・其御菩提の・御爲に・命をば・たすくるぞ・は

や〳〵・鎌倉へ・下べしと・宣へば・土佐坊・申けるは・こは・口惜き事をも・仰られ候物かな・鎌倉殿の・御前を・罷出る時・君を・討奉らすは・まつたう・罷下らじと・申切つて・罷上つて・候に・君をこそ・うち奉らざらめ・剰へ・命助られ・参らせて・再・鎌倉へ・罷下つて・候はゝ・何程の栄花をか・仕り候べき・只御恩には・急・頭を・刎させ給へと・申たりければ・判官さらばとて・やがて・河原に・引出し・西向にぞ・ひつすゑたる・土佐坊・申けるは・昌俊は唯・神共仏とも・鎌倉殿をこそ・頼奉つては候へ〳〵・同じうは・東向にぞ・きられたう候と・申たりければ・さらばとて・又東向にぞ・ひつすゑたる・其時・土佐坊・手を合せ・南無鎌倉の・源二位殿と・三度唱てぞ・きられける

吉野軍

去程に・鎌倉には・都にて・土佐坊・討れたりと・聞えしかば・北條の四郎時政に・六萬餘騎の・軍兵を差副てぞ・上せられける・同き十一月一日の日・九郎大夫の判官義経・院の御所に・参り・大藏卿・泰経の朝臣をもつて・申されけるは・義経・鎌倉の源二位に・心よからざるに・よつて・北條の四郎時政に・六萬餘騎の軍兵を・差副て・上せ候・宇治・勢田の橋を・ひき・都の・内にて・さゝへたらむは・公家院中の・御さわぎ・なるべし・哀・西國・鎮西の・御家人の中へ・義経・見放つべからざる・由の・鷹の御下文をぞ・下されける・判官・院宣給つて・院の御所を出・先生義敦・藏人行家・三人ひとつに・なつて・都合其勢・五百餘騎・同き十一月三日の日・都をたつて・西國へこそ・下られけれ・判官は・河越が娘・平大納言時忠卿の御娘を・先として・北方十二人・持給へり・いづれをも・見はなちがたう・思はれければ・皆・引具して・下られける・懸りける處に・攝津國の住人・大田の太郎高能・豊島の冠者頼基・此由を聞て・あはや判官殿こそ・鎌倉殿に・御中・たがはせ給ひて・西國へ・下らせ給ふなれ・にくし・其儀ならば・是にて・討留奉らんとて・便宜の輩・五百餘人を・あひ催し・攝津國・みぞくひと・云所に・城郭構て・待うけ奉る・判官・此由聞給ひて・かしこに・押寄・彼等を散々に・蹴ちらし・其日は・攝津國・大物の浦にぞ・着給ひける・次の日卅餘艘の舟に・取乗り・西國へ・下らむと・し給ひけるに・一の洲の沖にして・平家の死靈や・おこりけん・武庫山の嵐・はげしくして・舟共散々に・吹ちらされ・算を・みだすがごとくにぞ・成に・ける・十郎藏人

経・見放つべからざる・由の・鷹の御下文を・くだし給はり候はじやと・申されたりければ・法皇・此事・大きに・思召わづらはせ給ひて・しかるべき公卿・あまためして・仰合られけり・中にも・堀河の大納言忠親の卿の・申されけるは・誠に・義経・都の・うちにて・さゝへたらむは・公家院中の・さわぎ・なるべし・國々の亂れは・不便に候へども・院宣を・だにも・下され候はじ・都の・うちは・おだし・かるべき由を・申されたりければ・法皇・此義・尤・とて・やがて・義経・見放つ・べからざる由の・鷹の御下文をぞ・下されける・判官・院宣給つて・院の御所を出・先生義敦・藏人行家・三人ひとつに・なつて・都合其勢・五百餘騎・同き十一月三日の日・都をたつて・西國へこそ・下られけれ・判官は・河越が娘・平大納言時忠卿の御娘を・先として・北方十二人・持給へり・いづれをも・見はなちがたう・思はれければ・皆・引具して・下られける・懸りける處に・攝津國の住人・大田の太郎高能・豊島の冠者頼基・此由を聞て・あはや判官殿こそ・鎌倉殿に・御中・たがはせ給ひて・西國へ・下らせ給ふなれ・にくし・其儀ならば・是にて・討留奉らんとて・便宜の輩・五百餘人を・あひ催し・攝津國・みぞくひと・云所に・城郭構て・待うけ奉る・判官・此由聞給ひて・かしこに・押寄・彼等を散々に・蹴ちらし・其日は・攝津國・大物の浦にぞ・着給ひける・次の日卅餘艘の舟に・取乗り・西國へ・下らむと・し給ひけるに・一の洲の沖にして・平家の死靈や・おこりけん・武庫山の嵐・はげしくして・舟共散々に・吹ちらされ・算を・みだすがごとくにぞ・成に・ける・十郎藏人

の・舟二艘は・和泉の浦に・吹よせたり・判官船二艘は・摂津國・難波の浦へぞ・打あげたる・判官は・いかにもして・波風をしづめ・西國へとは・思はれけれ共・うちつゞき・荒ければ・其より・浦づたひして・住吉の濱へぞ・あがられける・和泉・河内の者共・此由を聞て・大勢にて・向ふよし聞えしかば・判官かなはじとや・思はれけん・十二人の・女房達をば・住吉の濱に・打捨・其より・兵卅餘人を・引具し・女房には・靜・ばかりを・召具して・吉野山を・さしてぞ・落られける・十二人の女房達は・住吉の松の下に・袖を・かたしき・泣居給ひけるを・其邊の・在地の者共・あはれみ奉つて・御輿にのせ奉り・夜に入て・都へ送り奉りけるとぞ・聞えし・去程に判官は・吉野山に・忍うで・おはしけるを・大衆・おこつて・あはや判官殿こそ・鎌倉殿に・御中・たがはせ給ひて・此山に・忍うで・おはすなる・いれたて申ては・かなふまじ・にくし其儀ならば・追出し奉れや・とて・大勢にて・向ふ由・聞えしかば・判官いづくまで・敵に・後を・見すべきとて・自害せんと・し給ひけるを・奥州の・佐藤四郎兵衛忠信・兄にて候ひし・三郎兵衛次信は・八島にて・御命に・かはり參らせ候ひぬ・けふは・忠信・御命に・替り參らせ候べし・ひとまど・成共・のびさせ給へと・申けれ共・判官・爭か・さる事の・有べきとて・重て自害せんと・し給ひけるを・忠信・やう〳〵に・取とゞめ奉りければ・力及び給はず・それより・兵十餘人を・引具して・又吉野山をぞ・忍ばれける・忠信は・判官の・御きせながを・給つてぞ・着たりける・殘り十七人の兵共も・寄くる敵を・今や〳〵とぞ・待かけたる・案のごとく・吉野のすげうり・其後・忠信・高き所に・走あがり・是は・鎌倉の源二位殿の・弟・九郎大夫の判官義經ぞと・名乘て・矢把・といて・おしくつろげ・差詰・引つめ・散々に・射ける矢に・寄手おほく・射ころさる・寄手の者共・此よしを・みて・あはや・判官殿は・打物・とつてこそ・ゆゝしう・おはすなるに・弓をさへ・よく射給ひけりとぞ・恐ける・其後・矢種・つきければ・打物の・鞘を・はづいて・切て出・散々に・戰ひけるに・十七人は・討れにけり・其後・忠信・又・高き所に・走あがり・是は誠に・判官殿と・思ひ奉るか・それは・はや・きのふより・落給ひぬ・是は・判官の御內に・奥州の・佐藤四郎兵衛忠信と・云者なり・剛の者の・自害するを・見て・手本に・せよやとて・鎧の上帶・きつて・のけ・腹十文字に・かき・やぶる體に・もてなし・そばなる谷へ・とびおりてぞ・落行ける・寄手の者共・此由を・見て・忠信が・頸・とらむとて・爰を・こえ・嶺を・隔てぞ落延たる・其より・都に・のぼり・粟田口の邊に・忍うでぞ・候ひける・去程に・北條の四郎時政は・六萬餘騎の・軍兵を・たなびいて・同き十一月五日の日・都に・上り・六波羅に・落着きて・おはしけるが・此由を聞給ひて・大勢にて・向ふよし・聞えしかば・忠信此よしを聞て・粟田口をば・忍びつゝ・三條萬里の小路なる所に・日比みそめたる・女房の許に・たち・忍うでぞ・候ひける・六波羅には・此由を聞て・大勢にて・押寄たり・忠信は・妻戸の間に・候ひけるが・

矢把・といて・おしくつろげ・さしつめ・引つめ・散々に・射ける矢に・寄手おほく・的に・なつて・射
ころさる・其後・矢種・つきければ・人手に・かゝらじとや・思ひけん・障子の內に・引籠り・腹十
文字に・かきやぶつたりけれ共・猶もしなれざりければ・刀の・切先を・口に・ふくみ・えんより・さ
かさまに・つらぬかつてぞ・失に・ける・今年・廿六・歟も・是を・見て・惜まぬ者こそ・なかりけ
れ・角て・判官は・吉野山の・深雪に・踏まよひ・兎角して・當國宇陁の郡へぞ・出られける・其所・
龍門の牧は・母・常磐が・ゆかり成ければ・判官・かしこに・落着・しばらく・息ついてぞ・おはしけ
る・其より・南都に・上り・東大寺の・邊り・しゆんせ寺と・申山寺に・忍うで・おはしけるが・其
年の暮に・都に上り・伏見・深草・梅津・桂・西山・東山の・かたほとりに・つのて・かくれ忍びて
ぞ・おはしける・次の年の・春の比・山伏修行者の・まねをし・笈を・かけ・秀平入道を・頼みつゝ・
北國に懸り・奥州へぞ・下られけるとぞ・聞えし

十郎藏人の沙汰（あひ）

去程に・先生義敎は・和泉の・浦に・打あげられて・おはしけるが・其より伊賀に・下り・せんどの・
山寺に・忍うで・おはしけるを・服部の下司・平六正綱は・平家の・ゆかりの者なりけるが・此よし
を聞て・便宜の輩・二百餘人・相催し・せんどの山寺に・押寄て・閧を・どつとぞ・つくりける・義

敎は・ある坊に・忍うで・おはしけるが・矢把・といて・おしくつろげ・さし詰・引つめ・散々に・射に
給ひけるに・寄手おほく・射ころさる・其後・矢種つきければ・人手に・懸らじとや・思はれけん・坊
に・火かけ・自害してこそ・失られけれ・其後・正綱・畑に靜め・義敎のやけ頸とつて・鎌倉へ・持
てくだる・扨こそ服部をば・安堵・してんげれ・去程に十郎藏人殿は・紀伊國なぐさを・さして・下
られけるが・和泉國・やげじたと・いふ所にて・下人の男・所勞の・心地・出來たりとて・宿うちと
つて・看病して・おはしけるを・あるじの男・見奉つて・あつばれ・是は・當時・ふす
まの・宣旨・かうぶりおはすなる・十郎藏人殿にこそと・思ひければ・夜に・入て・宿所をば・忍び
つゝ・都に・上り・六波羅に・參つて・此由・申たりければ・北條・神妙成とて・鹿毛なる馬に・鞍
卷そへてぞ・とらせける・其後北條・あるじの男を・めして・當時十郎藏人殿・討ても・溺ても・得
さすべき者は・たれか・有べきと宣へば・あるじの男・さん候・西塔の・北谷法師に・常陸坊正明こ
そ候へ・北條さらば・常陸坊・めせとて・めされける・召れて・正明參りたり・北條やがて・出合・對
面し給ひて・いかに・わ僧は・十郎藏人殿・よく・見知奉りたるかと・宣へば・よく見知奉つて・
候とぞ・申ける・北條さらば・十郎藏人殿・討ても・溺ても・えさせよ・勸賞は・乞に・よるべし
と・宣へば・常陸坊・畏つて承り・さ候はゝ・中間十人を・給らむと・申ければ・北條やがて・下
人の男・十人差副・あるじの男を・案內者として・和泉國・やげじたへこそ・下されけれ・十郎藏人

殿は・もとの宿をば・かへて・むかひなる所に・宿うち・とつて・おはしけるを・あるじの男・是こそと・をしへければ・下人の男共をば・かしこ爰に・かくしおき・我身は・重目結の直垂に・裾繩目の鎧を着・大太刀を・ぬいて・切て入・十郎藏人・此由を・見給ひて・いかに・あれは・常陸坊と・見るは・僻目かと・宣へば・正明候とて・切て・かゝる・十郎藏人も・そばなる・太刀・おつとり・ぬきあはせ・散々に・戰はれけるが・人手に・かゝらじとや・思はれけん・障子の內に・引籠り給へば・正明・まさなや・御自害候か・たすけ申さんずる・物をとて・太刀をなげすて・つつと入て・むずとくむ・十郎藏人も・つよし・常陸坊も・つよかりければ・互に・うべになり・下になり・ころびあふ所を・爰かしこに・かくしおきたりける・下人の男共・はせあつまつて・上なる・常陸坊が足に・繩をぞ・かけたりける・こはいかに・咏方に・繩かくる・やうや・あると・いはれて・さる事・候とて・ふたりが・足に・繩をぞ・かけたりける・其後十郎藏人殿をば・手とり・足とり・もと取・とり・生捕にこそ・したりけれ・其後・互に・息つついて・おはしけるが・ふたりの太刀を・召よせ・み給へば・常陸坊が・太刀は・四十二所まで・きられたりけれ共・十郎藏人の太刀は・一所も・きれず・なんぼう行家は・ふるまうたるぞと・宣へば・正明・いまだ・是程・手ごき・御敵には・あひ參らせず候とぞ・申ける・其後・常陸坊・雨皮に・つゝみ・もたせたりける・糒・取出し・十郎藏人殿にも・すゝめ奉り・我身もくひ・下人の男共にも・くはせ・其後・十郎藏人殿をば・御輿に乘奉つて・具足

し奉り・常陸坊・さきに都へ・人を上せて・六波羅へ・此よし申たりければ・北條斜ならず喜び給ひて・五百餘騎にて・御迎に・參られけるが・淀の大渡の邊にて・參りあひ奉り・十郎藏人殿を・請取奉つて・淀の・赤井河原にて・終に・きり奉つてんげり・やがて・常陸坊をも・十郎藏人の頸に・そへて・かまくらへこそ・下されけれ・鎌倉殿・神妙なり・勸賞には・ながせとて・武藏の・葛西へぞ・流されける・次の年の・春の比・召出し・餘によき・敵・討たる者は・弓矢冥加・なき間・さて流したりつるなり・今は勸賞有べしとて・日比訴訟しける・攝津國・太田の庄を・安堵する・のみならず・但馬國・葉室の庄を・給りけり・同き七日の日北條院參申・義經追討の・院宣を・申されければ・やがて・義經追討の・院宣をぞ・下さる・あしたに・かはり・ゆふべに・變ず・世間の不定こそ・悲しけれ・同き九日の日・北條・又院參申・勸解由の小路の・中納言經房の卿を・もつて・申されけるは・賴朝今度・平家・追討の賞に・宣せられづつの・加徵米を・宛行はる・べき由を・申されたりければ・法皇・此事大きに・思召・わづらはせ給ひて・然るべき・公卿あまた・めして・仰合られけり・中にも・八條の中納言長方の卿の・申されけるは・凡・朝敵を平ぐる者の・半國を・たまふと・云事は・無量義經の說には・見えて候へ共・賴朝の卿の申條・大きに・然るべからざるよし・申されたりけれ共・一向經房の卿の・とり申されける上・法皇綸に・日本國の總追捕使をぞ・下されける・此經房卿と申は・吉田の大納言光房卿の・御

子なり・法皇・諸事・內外なう・仰合られけるに・依て・正二位の大納言まで・あがられけり・されば・法皇・御年六十六にて・御崩の時も・天下の・大小事共に・此卿に・仰おかれけるとぞ承る・されば・鎌倉の・源二位殿も・諸事何事をも・此經房卿して・申されけるとぞ・聞えし

六代

或時・源二位殿・北條の許へ・使者を立て・平家は一門・廣かりしかば・子孫定て・おほかるらん・いかにもして・尋出して・うしなはるべしと・宣ひつかはされたりければ・北條・さてはとて・やがてでん手をわかつて・京中を・觸られけるは・何者にても・平家の子孫・尋出して・參らせたらむ者には・訴訟も・所望も・乞によるべしと・觸られたりければ・訴訟も・所望も・もちたる者は・おほかりけり・平家の子孫や・ましますと・かしこ爰をぞ・尋ける・必平家の子孫ならね共・普通の人の子の・じんじやう成をば・とり出し・あれは・彼・中將殿の・若君・是は・彼・少將殿の・御子なんど申ければ・父母・是を・悲しみて・まつたう・さなき由を・陳じ申ければ・あれは・おち・にてこそ候へ・是は・御めのと・にてこそ候へ・なんど申て・是非をも・いはせず・おとなしきをば・頸を・きり・をさなきをば・水に・いれ・土にうづむ・腹の內を・さがさぬと・云斗なり・母のなげき・乳人が・かなしみ・申ばかりも・なかりけり・其後・北條・鎌倉へ・人を・奉つて・此よし申されたりければ・源二位殿・さやうに・平家の子孫・尋出して・うしなはれ候事・かへすく〳〵も・神妙に候・但・平家の嫡々・小松の三位の中將・維盛卿の嫡子・六代は年も・すこしおとなしかんなれば・いかにもして・尋出して・うしなはるべしと・宣ひつかはされたりければ・北條さてはとて・頓て・てん手を・わかつて・にし山・東山を・尋させられけれ共・なかりければ・力及ばず・曉既に・鎌倉へ・下らんと・出たゝれける・其夜・ある女房の・六波羅に・參つて申けるは・此程・御尋さふらふ・平家の嫡々・小松の・三位の中將維盛卿の・若君・六代御前の・渡らせ給ふ・御行方をこそ・承り出して・さふらへ・其故は・にし山の麓・大覺寺・菖蒲谷の坊と・申所に・北方・若君・姫君・引具し・參らつさせ給ひて・此三年が間・住給ふ由を・申たりければ・北條・さては・とて・關東下向を・とゞめて・次の日の・まんだ朝・人を・つかはして・見せられければ・使・菖蒲谷の坊に・尋入・雛の・ひまより・をさなき人の・御給へる・しろき・ゑのこの・みすの外さして・走出けるを・とらんと・つづいて・出られければ・乳人の女房と・おぼしくて・あな・淺まし・けふ此比・人もこそ・見さふらふにとて・とりとゞめ奉ると・見おふせて・使・六波羅に・歸り・此よし申たりければ・北條さてはとて・頓て・五百餘騎の・勢にて・菖蒲谷の坊に・押よせ坊の四方を・七重・八重に・打かこんで・內へ・人を・奉つて・是に・承り候へば・平家の嫡々・小松の・三位の中將維盛の卿の・若君六代御前の・渡らせ給ふ由を・承り出して・鎌倉の・源二位の代官・北條の

四郎時政と・申者が・御迎に・參つて候・とう〳〵と・申されたりければ・母上・乳人の女房を・始奉つて・家の中に・ありとしある人・みな・肝・たましひを・うしなつて・聲を・あげてぞ・なかれける・此三年が間・住給へ共・あたりの人を・はばかつて・聲をも・忍びつゝ・物をも・たかう・のたまは・ざりしか共・今はの時にも・成しかば・たへ・忍ぶべき・心地も・し給はず・北條も・子共・あまた・持たる・身にて・おはしければ・あな・いとふし・さこそは・思ひ給ふらめとて・さうなうも・みだれいらず・つく〳〵とぞ・まもれける・日も・やう〳〵・暮ければ・北條又・內へ人を・奉つて・是は・別の子細も・わたらせ給ひ候まじ・しばらく・世を・しづめむほど・預り申せと・承つて・御迎の御輿・用意仕つて候・とう〳〵と・申されたりければ・齋藤五齋藤六・坊の四方を・立まはり見て・母上の御まへに・參つて・申けるは・大かた・兵ども・みち〳〵て・今は・何かたへも・忍ばせ給ふべき・やうも・候はず・こはいかゞ・御はからひ候・やらんと申たりけれ　五百六十三

ば・母上・さらば・まづ・我を・うしなひて・扨此子をば・いだせや・とてぞ・なかれける・其後・若君・母上の・御前に・おはして・申されけるは・なにかは・くるしう・候べき・只とく・出ばやとこそ・存じ候へ・其故は・今しばらくも・候はば・おそろしげなる・武士共が・亂入て・人々の・うたてげなる・御有樣を・見奉らんに・つけても・いよ〳〵・心うく・候べし・縱・六波羅へ・出て・候とも・さうなうは・よも・切れ候はじ・今・しばらくも・候はゞ・北條と・かやに・暇こひ・歸り參つて・見え參らせんと・世にも・おとなしやかにてぞ・宣ひける・扨しも・有べきならねば・乳人の女房・おきなほり・裝束・し奉る・二重織物の・直垂に・しろき・大口を・きせ奉る・母上は・くろ木の數珠の・ちひさきを・取出し給ひて・是は・故三位殿の・年比・手なれ給ひし・數珠なり・是にて・いまはの・時までも・念佛申・父の渡らせ・給ふ・ひとつ淨土へ・參らんと・ねがふべしとぞ・宣ひける・若君・さては・母上にこそ・はなれまゐらせ・候共・父の・渡らせ給ふ・ひとつ淨土へ・參らん事こそ・嬉しけれとてぞ・出られける・若君・母上乳人の女房に・立別給ふ・名殘の惜さ・さこそは・思はれけれ共・平家の嫡々・さる人の・子なりければ・武士に・よわげを・見えじと・おさふる袖の下よりも・あまりて淚ぞ・なかれける・若君は・今年十二に・成給ひけるが・みめ容・うつくしく・あたりも・てりかゝやく程に・おはしければ・御迎の武士共も・みな・鎧の袖をぞ・ぬらしける・御妹の姬君・今年十に・成給ひけるが・若君は・いづくへ・ぞや・我も・參らんとて・つゝいて・出んと・し給ひけるを・乳人の女房・取とゞめ・奉る・北條も・岩木ならねば・哀に・思ひ參らせけれ共・扨しも・有べきならねば・若君・御輿に・のせ奉つて・具足し奉る・齋藤五・齋藤六も・かちはだしにて・六波羅へこそ・出にけれ・若君・出させ給ひて後・北方・乳人の女房に・向つて・宣ひけるは・昔人の子を儲て後は・乳人なんどが・かたへ・さしはなつて・つかはす事も・有ぞかし・此子を・儲て後は・よのつねに・人の・もたぬ・子を・もちたるやうに・人しれず・ふたりが

中に・おきてこそ・愛せしが・此子が・年も・すこし・生たつまゝ・に・放三位殿に・すこしも・たがはざりしかば・然るべき・御形見に・もと・思ひ・故三位殿に・離れ奉つて後は・此子共をこそ・ひだり右に・おきても・慰しか・今は・獨は・あれ共・ひとりは・なし・此子は・十二に成まで・旅ねは・こよひはじめ也・おとなしきをば・頸をきり・をさなきをば・水にいれ・土に埋むなれば・此子は・年も・すこし・おとなしかんなれば・定て・切ぞ・せんずらん・夕さりにてや・あらんずらむ・又曉にてもや・あらんずらむ・さこそは・おそろしくも・思ふらめとて・なき明し・給ひける・永き冬の・夜なれ共・限りあればや・あけにける・明ければ・齋藤五・歸り參りたり・北方・さて・いかにやと・宣へば・さん候・今迄は・別の子細も・渡らせ給ひ候はず・若君よりの・御文候とて・取出して・奉る・北方・ひらいて・見給へば・げにも・齋藤が・申に・たがはず・かゝれたり・今迄は・別の子細も・候はず・御心やすく・おぼしめさるべし・いつしか・夜の程も・人々こそ・御戀しう・思ひ・參らせ候へ・なんどぞ・かゝれたる・北方・扨此子は・何と・あるぞと・宣へば・さん候・人の・見參らせ候時は・しらぬ體にて・御渡り候が・又人の見參らせ・候はぬ時は・傍に・うちむき・常は・むつがらせ・おはしまし候と・申たりければ・北方・それは・誠に・さも・有らん・今みる者も・又見る者も・おそろしげなる・武士共にて・日比・見なれたる者・一人も・なし・さこそは・それに・つけても・こなたを・戀しと・思ふらめ・とてぞ・なかれける・齋藤五・今しばらく

も・候へば・御心許なく・思ひ參らせ候に・急歸り參るべきよしを・申たりければ・母上しばしや・返事の・あらんずるぞとて・水ぐきの跡は・泪に・かきくれて・そこはかとは・おぼえね共・思ふ心を・しるべにて・泣々・御文遊ばしてぞ・たうだりける・齋藤五・御返事・給つて・なく〳〵・大覺寺をぞ・出にける・御乳人の女房・角て・あるにも・あられねば・大覺寺をば・忍びつゝ・まぎれ出・かしこ・爰をぞ・泣ありきける・道にて・人ゆきあひ・あないとふし・さこそは思ひ給ふらめ・是より・奥・高雄と申所にこそ・文覺上人と・申て・たつとき聖の・おはす・なるが・しかも・鎌倉殿大事の人に・し給ふなり・さも・然べき・人の子の・じんじやうならんを・御弟子に・せばと・宣ふが・もしやと・參つて・申て・見給へかしと・をしへければ・此女房・是は・然べき・佛の御告に・こそと・思ひければ・いまだ・しらぬ・高雄に・尋のぼり・文覺の坊に・尋入て・見ければ・折節文覺は・つとめ・して・緣に・出られたり・やゝ・物申さうと・云ば・聖・何事と・答ふ・是は・乳の・なかより・取あげ・いだき・そだて・參らせて・さふらふぞや・あはれ・さも然るべく・さふらはゞ・こひうけ・參らつさせ・給ひて・御弟子に・し參らつさせ・給へかしと・申ければ・聖・さてそれは・いかなる人の・御子ぞ・今は何をか・かくし・參らせ・さふらふべき・平家の嫡々・小松の・三位の中將維盛卿の・若君・六代御前と・申て・今年は・十二にならせ・おはしまし・さふらふが・みめ・かたち・ならびなく・心ざま・世に・

すぐれて・おはしまし・さふらへば・殊に・をしうこそとぞ・申ける・聖・扨・其を・こひうけたらば・一定・聖に・たぶべきか・申にや及び・さふらふ・こひうけ・參らつさせ給ひて・だにも・さふらはゞ・只・ともかうも・上人の・御はからひにこそとぞ・申ける・ひじり・さて・其預りの武士をば・たれとか・いひつる・なに・北條と・かや・申人にて・さふらふなる・やゝ・さては・しらぬ人かとこそ思ひたれば・北條をば・しつたる人や・其人の事ならば・かなはぬまでも・申てこそ・見め・心やすう・思ひ給へとて・やがて・打立て・六波羅へこそ・出られけれ・此女房・大覺寺に・歸り參つて・此由申たりければ・北方あはれ・されかし〳〵・此子が命の・助かりたらんぞ・偏に・長谷の觀音の・御利生にても・あるべき・嬉しきにも・又つらきにも・つきせぬ物は・涙なり・其後文覺・六波羅へ・出られたりければ・北條やがて・出あひ・對面し給ひて・此間の事共を・やゝ・遙に・御物語あり・其後・北條申されけるは・聖も定て・しろしめされたるらんやうに・鎌倉殿より・平家の子孫・たづね出して・うしなへと・承つて・候程に・悉く・尋出して・失ひ參らせ候事・時政も・子共・あまた・持たる身にて候へば・まつたう是を・本意とは・存候はね共・世に從ふならひ・力及ばざる次第なり・又平家の嫡々・小松の・三位の中將維盛卿の・嫡子六代・尋出して・うしなへと・承つて・昨日より・むかへ申ては・候へ共・し奉るべき・人やらんと・とかく・案じ・煩ひて・こそ候へと・申されたりければ・聖も・其人にこそと・思はれければ・さ候はば・その若君を・ひとめ・見參らせ候はゞやと・宣へば・北條・やすき御事候とて・聖を・若君の御かたへ・入申されけり・聖・障子を・すこしほそ目に・あけて・見給へば・誠にも・聞にも・こえて・みめかたち・ならびなく・あたりも・てり・かゞやく程なり・くろ木の珠數の・ひさきを・くり給ひて・誠に・思ひいれたる・御有樣・いたはしく・見奉る處に・若君・聖を・見付奉つて・何とか・思はれけん・やがて・涙に咽び給へば・聖も・餘の・いたはしさに・目も・あてられず・しきりに涙の・すゝみければ・墨染の袖を・顏に・おしあてゝ・障子を・引たてゝぞ・出られける・其後・文覺・北條の前に・行向ひ・末の世に・いかなる・あたの・敵とも・ならばなれ・爭か・此人の命をば・うしなふべき・詮ずる所・北條殿・此人の命を・廿日が間・のべて・たべ・われ・鎌倉に・下つて・こひうけ・奉らんずるに・源二位殿に・受領の・神つき給は・ざらむ程は・文覺が・申さうずる事をば・いかでか・たがへ給ふべき・其故は・御邊も定て・知給ひたるらん・やうに・あの人の・いまだ・伊豆國・北條・蛭島に・流されて・おはせし時・文覺も・流人の身にては・候ひしか共・あの人を・世に・たて申さんが爲に・院宣申に・福原へ・のぼりし時・人目を・はゞかるならひ・夜は大道にいで・晝は山道にかゝつて・夜を日に・ついで・上る程に・或時は・富士川の水出て・おしながされんと・せし時も・有またある時は・高瀨の籠にて・山賊等に・命を・うしなはれんとせし時も・あり・され共・身を・またうして・都に・上り・福原の新都に・下つて・院宣申て・奉

るのみならず・霊佛霊社に・祈を・かけて・世にたて申たる・文覺が事をば・爭かたがへ給ふべき・あひ構て・廿日が間は・待給ふべしとて・させる領掌は・なけれ共・弟子の僧一人・召具し・急馬に・打のつて・鎌倉へこそ・下られけれ・齋藤五・齋藤六は・聖の御後を・はる〳〵と・見送り奉つて・只生身の・如來と・のみぞ・拜みける・二人の者共・大覺寺に・歸り參つて・此由・申たりければ・北方さればこそ・此三とせが間・長谷の觀音に・歩を運び・祈る禱は・こゝぞ・かし・始終の事は・しらね共・此子が命の二十日が間も・のびん事の・嬉しさよ・とてぞ・なかれける・一日二日と・せし程に・廿日の過るは・夢なれや・聖は・いまだ・みえざりけり・北條も・待かねて・曉既に・鎌倉へ・下らむと・こそ・出立けれ・齋藤五・齋藤六は・手を・にぎれ共・かなはず・さてしも・有べきならねば・最後の暇申に・大覺寺へぞ・參りける・北方・さていかにやと・宣へば・さん候・聖も・廿日が間と・こそ・申て・罷下つて・候へ共・いまだ・上る事も・候はず・北條も・待かねて・曉既に・鎌倉へ・下らんと・こそ・出立げに・候らへと申たりければ・北方・さて此子は・何となるべきぞと・宣へば・さん候・それも・夕さりか・曉の程に・一定と・こそみえさせ・おはしましし候へ・其故は・此ほど・預り申て候・武士をば・のけられて・昨日より・別の兵の・預り申て候が・或は・かたはらに・さゝやく者も候・或は・若君を・見奉つて・涙に・むせぶものも候・又念佛申者も・ありとぞ・申ける・母上・さればとよ・もし此聖の・こひうけて・もや・おそかるらん・又かなはぬ・にてもや・遲かるらん・若・こひうけたらば・縱・我身こそ・おそく共・先に人をば・上すべき物ぞ・かし・哀・北條と・かやが・もちひつべからむずる・おとなしき者の・此子を道にて・聖に・行あはむ所まで・具して・下れと・云者の・あれかし・もし此聖の・こひうけて・もや・上るらんに・此子は・さきに・切れたりと・きかむ事こそ・悲しけれ・鎌倉の源二位と・かやも・我身に・しれて・此子が・命を・たすけんとは・よもの給はじ・されば・觀音も・定業をば・力及ばせ給はず・哀・夢は・たのまれざりける・物ぞや・此曉・此子が・しろき馬に・のつて・來りつるを・いかにやと・いはんと・すれば・其夢の・やがて・さめぬる・うらめしさに・縱夢なり共・しばしが程も・そはずして・さめぬる夢こそ・うたてけれ・扨は・此子が・命の助からんずるかと・思ひたれば・死ぬべき事の・かねてより・みえつる事の・無慚さよ・何よりも・一日出し時・今しばらくも・さふらはば・北條と・かやに・暇乞・歸り參つて・みえ・參らせんと・云おきし・なぐさめ言葉の・おとなしさよ・廿日も既に・過るまで・かなたへも・ゆかず・こなたへも・來らず・一日出しを・限りにて・ながき別と・ならむ事こそ悲しけれ・北方・さて・汝等は・何となるべきぞと・宣へば・さん候・是も・若君の・ともかうも・ならせ給はん所まで・御供申て・候はん程に・共にうしなはれんは・本意也・縱又・たすけられて候共・やがてもとどり・きつて・若君の御菩提を・とぶらひ參らせんと・彼等二人は・おもひなつて・こそ候へと・申たりければ・北方・いしうも・思うたり・さらば・とく・

歸つて・此子が行末を・しらせよと・宣へば・二人の者共・最後の暇申て・泣々・大覺寺をぞ・出にける・去程に・北條の四郎時政は・六萬餘騎の・軍兵を・だなびいて・文治元年・十二月十六日に・都をたつて・鎌倉へこそ・下られけれ・北條・若君をば・御輿に・乘奉つて・具足し奉る・齋藤五・齋藤六をも・乘替に・のれと・いひけれ共・けふを限りの・御供なれば・とて・かちはだしにてぞ・下りける・其比の・京中の上下・此よしを・見奉つて・あな・いとふし・若君の・有爲無常の境・けふ既に・越行給ひなんず・とて・みな・並居て・袖をぞ・ぬらしける・粟田口にも・成しかば・わかふしとぞ・見給ひける・駒を・はやむる・武士あれを・けし・かたはらに・さゝやく・者あれば・唯今・四の宮河原にて・一定と聞えしか共・關山・關寺・打過て・大津の・うちでに・なりにけり・粟津の原・勢田の橋にて・一定と聞えしか共・野路・篠原をも・うち過て・其日は鏡に・着給ふ・夕さり・一定と聞しか共・其日も・きらでぞ・暮にける・北條は・いかにもして・年の內に・鎌倉までと・急がれければ・夜を日に續でぞ・下られける・美濃尾張にも・成しかば・いとゞ心細ぞ・思はれける・參河國をも・打過て・遠江國・さよの中山・過るにも・又こゆべし共・おぼえねば・いとゞ・涙ぞ落まさる・宇津の山邊の・うつゝにも・夢に・道行心ちして・日數やう〳〵・かさなれば・駿河國・千本の松原にこそ・着給へ・さる程に千本の松の下に・大幕・引まはさせ・敷皮しいて・若君・御輿より・だきおろし奉つて・敷皮の上に・おき奉る・其後・北條・齋藤五・齋藤六を・傍へ・呼離して・宣ひけるは・若君をば・只今是にて・失ひ奉るべきにて候也・御邊達は・別の子細有べからず・是より・都に・上り・若君の御菩提を・とぶらひ申さるべしと・宣へば・二人の者共・日ごろより・かく・有べしとは・思ひまけうし事なれども・只今既にと・聞からに・胸ふさがつて・目くれつゝ・とかうの・返事にも・及ばず・其後・北條・若君の御前に・參つて・申されけるは・且・きこしめされ候・ごとく・聖も・廿日が間とこそ申て・罷下て候へ共・いまだ・上る事も・候はず・兼又・近江の鏡にて・失ひ奉れと・承つては・候ひつれ共・もしやと聖に行あはん所までと存じ・是まで・御供申て候也・同じうは・足柄をも・こし申たうは・候へ共・關東の聞え・然るべからざるうへ・源二位殿も・一業所感の若君を・助け參らせんとは・よも申され候はじ・只今是にて・失ひ奉るべきにて候也・何事も・思召おく御事候はゞ・時政にも・承れ・又二人の人々にも・仰おかれ候べし・さても此間の・御餘波こそと・涙もせきあへず・申されたりければ・若君は・とかくの返事も・し給はず・只打うなづき・給ふ・斗なり・其後・若君・齋藤五・齋藤六を・めして・唯今既にと・きくぞ・汝等は・別の子細あらじと・こそ思へ・是より・都に・上るべし・母上・乳人の女房の・定て・我事をぞ・問ひ給はんずらむ・其時は・我道にて・きられたりと・申べからず・事ゆゑなう・鎌倉まで・下り着て・人に・預けられた

りと・申べし・其故は・われ道にて・きられたりと聞給ひたらば・母上乳人の女房の・人しれず・歎給はんも・中々・罪深かるべし・縦へ・後には・かへり・きこしめさるゝ共・相構て・此よし・角と・申べからず・又人しもこそ・おほきに・汝等が・是まで・はる〳〵と・御供申たる・志の程こそ・返々も・神妙なれ・相構て・それに・つけても・母上・乳人の女房には・能々・御宮づかひ仕れ・それぞ・何にも・すぐれたる・今生後生の・孝養共・思ふべきと・宣へば・二人の者共・若君に・離れ奉つて・一日片時・ながらふべし共・覺ずとて・千本の松の下・すなごの・上に・たふれふし・聲を・あげてぞ・悲しみける・其後・若君・懐よより・観音經を・取出し給ひて・二三反が程・よみ渡し・同じう・觀音の名號を・唱へ・其後・西に向ひ・高聲に・念佛數百反・となへ給ひて・さらば・とく〳〵・きれやとて・頸を・のべてぞ・待れける・切手は・狩野の工藤重茂とぞ・聞えし・重茂・太刀を・ぬいて・ひきそばめ・御後に・立まはりければ・若君・是を御覽じて・御ぐしの・後へ・ゆらゆらと・さがりたりけるを・御前へ・引こし給へば・數千の兵・是を・見て・あな・いとふし・今までも・御心の・渡らせ給ひけるよ・とて・武士・たけしと・申せ共・みな・鎧の袖をぞ・ぬらしける・重茂も・ながるゝ・涙に・かき暮て・太刀の・うちども・覺えず・一定・重茂・不覺・つかまつると・存じ候・されば・自餘の仁に・仰付られ候へとて・涙に・咽びてぞ・立たりける・北條も・せんかたなげにて・あな心うや・いかなる宿執か・かゝる・うき人に・取懸奉つて・今かやうに・心を・くだく・心うさよ・誰も・さこそは・思ふらめ・さらば・あれ・きれ・是きれと・切手を・えらぶ所に・爰に・遙の東の・かたより・こき墨染の衣・着たりける・僧一人・白蘆毛なる馬に・乗てぞ・出來たる・是ぞ文覺が弟子なりける・道にて人・行あひ・あな・いとふし・さこそは・思ひ給ふらめ・あれなる・松の下に・こそ・平家の・君達と・申て十二三斗なる・世にうつくしき・をさなき人を・只今切奉らんと・しつれ・餘の痛はしさに・見奉らずして・とほり・たりつるよ・なんど・語りければ・此僧・さては・若君の・是まで・下らせ給ふなるが・唯今是にて・きられさせ給ふに・こそと・思ひければ・急・鞭鐙・あはせて・馳けるが・大勢の・ののめくを・みて餘の・心許なきに・着たる・檜笠を・ぬいてぞ・招たる・あれは・いかに・やうあり・鎌倉殿よりの御使・ござんあれと・一人二人・申程こそ・ありけれ・切手も・急事なければ・六萬餘騎の兵共も・みな東の・かたをぞ・まぼりける・此僧・程なう來りぬ・急馬より・とんで・おり・大勢の・中を・おしわけ〳〵・北條の前に・行向ひ・鎌倉殿より・御ゆるし文の・候ぞとて・頸に懸たる・文袋より・取出して・奉る北條・ひらいて・見給へば・其狀に・いはく・

中にも・平家の嫡々・小松の三位の中將維盛の・嫡子六代尋出され候事・返々も・神妙に存候・但・高雄の・文覺上人・頻に・申さるゝに・よつて・しばらく・預け奉る所也・是にて・別の疑あるべからず・急・彼聖のかたへ・渡さるべし

文治元年、十二月廿三日

北條の四郎殿へ・賴朝と・こそあそばされたれ・御自筆也・御判也・北條も・たかうは・よまれね共・神妙々々とて・さしおかれければ・齋藤五・齋藤六は・中々申に・及ばず・北條の家子・郎等も・皆喜びの涙をぞ・流しける

初瀬六代

去程に文覺も・やう〳〵・おはしたり・北條やがて出あひ・對面し給ひて・兼ては・廿日の間と・こそ・承つては・候ひつれ共・御上りも・候はず・又鎌倉よりは・人を・上せ・候ひて・近江の鏡にて・失ひ奉れと・承つては・候ひつれ共・もしやと・御坊に行あひ奉らん所までと存じ・是迄御供申ては・候へ共・失ひ奉らんと・仕り候所に・かしこうぞ・あやまち・仕つて・後悔するらんにと・申されければ・文覺されば・とよ・われ鎌倉に・下つて・此事を・申さむと・仕候へばやがて・那須野の狩に・出給ふ・付奉つて・申せば・鎌倉に・歸つて・よきやうに・はからはんと・宣ふ間・鎌倉にて・申せばわ僧・いしうも・下つたり・若宮に・七日籠て・護摩たけ・大御堂に・三日籠て・佛事せよ・なんど・宣ふ間・此人の御心に・すこしも・たがひ奉つては・文覺が所望も・爭か・かなふべきと・思ひかしこ・爰に・參り籠りし・中にも・若君の御祈禱をのみ・仕り候ひき・文覺・源二位殿に・此事を・申候へば・はては・かなふまじと・宣ふ間・文覺・こは・いかに・御邊の・未伊豆國・北條蛭島に・流されて・おはせし時・文覺も・流人の身にては・候ひしか共・御邊を世に・たて・申さむが爲に・院宣申に・福原へ・上りし時・人目を・はばかるならひ・夜は大道に出・晝は・山道に・かゝつて・夜を日に繼で・上る程に・或時は・富士川の・水出て・おし流されんと・せし時もあり・又或時は・高瀬の麓にて・山賊等に・命を・うしなはれんと・せし時も・あり・され共・身を・またうして・都に上り・福原の新都に・下つて・院宣申て・奉るのみならず・靈佛靈社に・祈りをかけて・世に・たて申たる・文覺が所望を・たがへ給はんに・おいては・御邊の冥加も・おはせうずるか・なんど・或時は・おとし奉り・又或時はすかし奉つて・御手に・墨筆を・とりあてがふやうに・してこそ・御ゆるし文も・出たれ・やは・たやすかるべきと・宣へば・北條・誠にも・とぞ思はれける・其後北條・若君の・御前に・參つて・申されけるは・尤御供・仕つて・罷上度は・候へ共・年の内に・關東に・聊沙汰仕るべき・事の候間・今度は・まづ・罷下・べしと・申されたりければ・若君の・御返事には・あの・聖の御坊の・御事は・中々・申に及ばず・さても・そこの芳志こそ・いつの世までも・忘がたけれ・いか程にも・上洛の時は・まづ・見參に・いらうずる候とぞ宣ひける・其後文覺・若君請取奉る・北條の・沙汰として・御輿に・乘奉る・人あまた・つけ奉つて・上せ申されけり・齋藤五・齋藤六をも・乘替に・のせてぞ・上せられける・去程

に・文覺・若君請取奉つて・いかにもして・年の内に・都までとは・いそがれけれ共・つながぬ・月日なり・ければ・尾張國・勢田の浦にて・年暮ぬ・文治も二年に・成にけり・同き正月五日の日・文覺・若君・具足し奉つて・都に・上り・文覺の宿坊・二條猪熊の・岩上の坊へ・入奉る・次の日・若君・齋藤五・齋藤六を・御供にて・母上の・おはしける・菖蒲谷の坊に・おはして・見參らつさせ給ふに・門戸を閉て・敲共々々・音もせず・齋藤五・もとより・案内は・しつたり・築地を・上り・こえ・内へ・參つて見奉るに・ちかう人の住たるけしきも・なかりけり・齋藤五・歸り參て・此よし申たりければ・若君・こは・いかに・われ・道にて・きられたりと・聞給ひて・もし淵川へ・身をもや・投て・おはすらん・我命の・惜かりつるも・今一度・母上を見奉らんと・思ふ爲にこそ・あれ・誠に・さやうに・成給ひたらんに・おいては・有し・千本の・松原にて・ともかうも・なるべかりつる・物をとて・聲を・あげてぞ・なかれける・若君の・御聲を・聞付奉つて・築地の・かげより・尾打ふつてぞ・向ひける・若君・さては汝は・いまだ・是に・ありけるにや・あはれ汝・物いふもの成せば・人々の御行衞を・とはぬか・とてぞ・なかれける・其後・ちかき・あたりの人に・とひ給へば・さん候・それは・冬の比より・長谷へ・御參りにて候と・申たりければ・若君斜ならず・喜び給ひ・急都へ歸らせ給ひて・次の日・齋藤五を・御使にて・長谷へ・下されけり・去程に・北方は・若君の御事・思召出し・涙に・咽び・うつぶして・おはしける所へ・齋藤五・つつと・參りたり・北方・さていかにやと・宣へば・さん候・若君をば・文覺上人の・こひうけ・參らつさせ・給ひて・都へ・御上りにて候と・申たりければ・北方こは・夢かや〳〵とぞ・の給ひける・其後・母上・宣ひけるは・誠に・此觀音は・定業をも・てんじかへさせ・給ふ御事・今にはじめぬ・事ながらとて・やがて・喜びの法施・參らつさせ給ひ・急都へ・御下向あつて・若公を・むかへ參らつさせ給ひて・見まゐらつさせ給ひけるにも・只夢の・心ちぞ・し給ひける・其後・母上・宣ひけるは・今度は・ならはぬ・旅の空に・おもむき・やせくろみたれば・しばらく・是にて・湯をも・あび・身をも・いたはり給へかしとは・思へ共・又聖の御坊の・おぼしめさるゝ所もあり・まづ高雄に・上り給ふべし・是より高雄も・程近かりければ・常は・下つて・見え給へとて・齋藤五・齋藤六を・御供にて・高雄に・のぼせ申されけり・聖も・前世の事にや・若君斜ならず・いとほしみ奉つて・齋藤五・齋藤六をも・扶持し・母上・乳人の女房の・かすかなる・御住居をも・常は・こと問ひ・給ひけり

あひ

其比の攝政・近衞殿・攝政・めしかへされ・させ給ひて・九條殿・新攝政に・ならせ給ふ・されば・此九條殿は・平家の・亡び・世の損じ行事を・大きに・なげき・おぼし召れければ・陰德・むなしからず・

陽報・忽に・ひるがへつて・終には御代を・しろしめされけるこそ・めでたけれ

小原御幸

後白河の法皇は・文治二年の・春の比・女院の閑居の・御住居・御覧せま・ほしくやおぼし召れけむ・御幸と・定られたりしか共・衣更着・彌生は・徐寒も・はげしく・嶺の白雪・消やらで・谷の・つらゝも・うちとけず・角て春過・夏の初・卯月廿日比にぞ・やう〳〵思召立せ・給ひける・忍びの・御幸なりけれ共・徳大寺・花山院・土御門以下・公卿六人・殿上人八人・其外・北面の輩共も・少々めしぞ・具せられける・小原通りを・日吉の社へと・御披露あつて・彼・清原の深養父が・補陀落寺・小野の皇太后宮の・舊跡を・叡覧あつて・其より・御車を停てぞ・御輿には・召れける・始たる・御幸成ければ・御覧じなれたる・かたもなく・舊苔はらふ・人も・なし・人跡絶たる程も・かつ〳〵・思召しられて・芹生の里の・ほそ道も・さこそは御所せく・おぼし召れけめ・とほ山に・かゝる・白雲は・ちりにし花の・形見也・青葉に・みゆる梢には・春の餘波ぞ・惜まるゝ・寂光院は・岩に苔むして・ふるうつくりなせる・泉水・木立・よしあるさまの・御堂なり・甍・破れては・霧不斷の香を・たき・樞・落ては・月・常住の・灯を・挑共・かやうの所をや・申べき・嶺の・青柳露を含て・玉を貫か・とも・疑はれ・池の萍・浪に・ただよひ・錦を・さらすかと・あやまたる・中島の松に・かゝれる・藤なみ・楢の花の殘るも・八重〳〵雲の・たえまより・山郭公の・ひと聲も・けふの・みゆきを・待がほなり・さらでだに・太山がくれの・ならひにて・おほはらや・森の下草・しげく・青葉まじりの・遅櫻・初花よりも・めづらしく・水の面に・ちりしきて・よせくる浪も・白妙なり・法皇・かれを叡覧あつて

池水にみぎはの櫻ちりしきて・浪の花こそ盛なりけれ・

法皇・女院の御庵室を・叡覧あるに・垣には・蘿朝顔・はひかゝり・瓢箪屢むなし・草・顔淵が・巷に・しげし共・云つべし・軒には・しのぶまじりの忘草・庭には・蓬生・しげり・藜藿・ふかく鎖せり・雨原憲が・樞を・うるほす共・又・云つべし・杉の・ふきめも・まばらにて・時雨も・霜も・おく露も・もる月影に・あらそひて・たまるべし共・見えざりけり・後は山・前は野邊・いさゝ小篠に・風そよぎ・世に・たへぬ身の・ならひとて・うきふし・しげき竹柱・都のかたの言傳は・まどほに・ゆへる・ませ垣や・繩に・事問ふ物とては・嶺に木づたふ・猿の聲・しづが爪木の・斧のおと・これらが・音信ならでは・まさきの・かづら・青つゞら・くる人・稀なる所なり・法皇・女院の御庵室に・いらせ給ひて・人や候〳〵と・仰けれ共・折節・御いらへ申者も・なかりけるに・良あつて・老尼・一人出て・さふらふとぞ・申ける・法皇・女院は・何方へ・御幸なりたるぞと・仰ければ・此上の山へ・はなつみにとぞ・申ける・法皇・扨は・花つみて・奉りぬべき人・一人も・付奉らざるに・こそ・さ

こそ・御世を・厭はせ給はんからに・ならはぬ御わざは・いたはしうこそと・仰ければ・此尼申ける
は・いまめかしき・申事にては・さふらへ共・釋迦は・中天竺の・あるじ・淨飯大王の太子也・され
ども・伽耶城を・出させ給ひ・檀特山に・入せ給ひて・高き嶺には・薪を採・ふかき谷には・水を・
むすび・雪を・はらひ・氷を・くだくのみならず・難行苦行の劫・つもつて・終に・正覺遂させ給ひ
き・況・先の世の・宿善をも・又後の世の・宿業をも・思召さとらせ給ひて・捨身の行を・修しまし
まさむは・何の御疑か・さふらふべきとぞ・申ける・法皇・此尼の姿を・つく〳〵と・叡覽あるに・
世にも・うたてげなる・麻の衣をぞ・着たりける・法皇・不思議やあの姿にても・かやうの事を・申
事よと・おぼしめされて・そも汝は・いかなる者ぞと・仰ければ・此尼・涙に咽びて・しばしは・御
返事をも・申さず・法皇重て・扨・いかにや・いかにと・御尋ありければ・やゝあつて・此尼・涙を
おさへて・申けるは・是は故少納言入道信西の娘・阿波の内侍とぞ・申ける・内侍は・紀の二位の娘・
紀の二位は・又法皇の御乳人・是は・御乳人子にて・朝夕・龍顏に・近づき奉りしをば・いつしか・
思召忘て・只今・夢かと・驚きおぼしめすにも・龍顏に・御涙せきあへさせ・給はず・かたはらの
障子を・引あけて・叡覽あるに・御寢所と・おぼしくて・竹の御棹に・懸られたる物は・麻の御衣に
紙の襖・むかしの蘭麝の・にほひを・引かへて・そらだき物と・かをりしは・不斷香の・烟なり・又
かたはらの障子を・引明て・叡覽あれば・來迎の三尊・東向に立給へる・中尊の御手には・五色の糸
を・懸られたり・佛の左に・普賢の繪像・右に・善導和尚の御影・幷に先帝の御影をも・同じう・か
けぞ・そへられたる・御前の机には・三部經・八軸の妙文・九帖の御書をも・おかれたり・中にも・
看經・あそばし懸たると・おぼしくて・半卷計ぞ・まかれたる・其外諸經の要文共・色紙に書て・所
所に・おされたり・中にも・女院の・御詠歌と・おぼしくて

思ひきやみ山の奥に住居して・雲居の月を餘所に見んとは・

中にも・若有重極障・無生・淨土因・乘彌陀願力・必生安樂國とも・あそばされたり・彼大江の定基
法師が・五臺山の麓・清涼山にして・詠じたりけん・筆歌遙に聞ゆ孤雲の上・聖衆來迎す落日の前と
も・あそばされたり・彼淨名居士の・方丈の室にして・三萬三千の床を・ならべ・十方の諸佛を・請
じ・參らつさせ・給ひけん・御有樣も・是には・過じとぞ・見えし・中にも・後德大寺の左大臣實定公・
涙を押て・朝には・紅顏あつて・世路に誇れ共・夕には・白骨となつて・郊原に朽ぬ・

いにしへは月にたとへし君なれど・其光りなき深山邊の里

と・泣々詠せられたりけるにぞ・皆人・袖をばぬらされける・其後・やゝ・はるかに・あつて・上の
山より・濃き墨染の衣着たりける・尼二人・木のねを・つたひ・おりくだる・樒・蹲踞・藤の花・は
なかたみに・いれて・御臂に・懸られたり・一人は・爪木に・薇をりそへて・抱給へり・御はなかた
み・御臂に・懸させ給ひたるは・忝も・女院にてぞ・渡らせ・給ひける・爪木に薇折そへて・抱給へ

るは・先帝の御乳人・大納言の佐殿・是これなり・女院は・法皇の・御幸なりたる由を・きこしめされて・一念の窓の前には・攝取の光明を・期し・十念の柴の樞には・聖衆の來迎をこそ・待つるに・思ひの外に・法皇の御幸なりたる事こそ・心うけれ・霧霞ならば・たちもへだたり・露霜ならば・時のまに・消も・うせばやとぞ・仰ける・よひ〳〵毎の・閼伽の水・むすぶ袂も・しをれつゝ・曉おきの・釉の上には・山路の露も・しげくして・はらひやかねさせ給ひけん・女院は・御庵室へも・いらせ給はず・又後の山へも・たちも歸らせ給はずして・思召わづらはせ給ひて・たたせ給へる所に・内侍の尼・參りてぞ・御花かたみをば給りける

六道

内侍の尼・申けるは・御世を・いとはせ給ひて・まことの道に・いらせ給ひぬる上は・何の御憚りか・さふらふべき・はや〳〵・御對面あつて・いそぎ還御なし・まゐらつさせ・給へかしと・申ければ・女院御庵室に・いらせ給ひて・麻の御衣を・ひきかつがせ・給ひて・泣々御前へは・參らせ給ひたりけれ共・法皇も・仰出さるゝ旨も・なし・女院も又・申出させ給ふ・事もなかりけるに・良・あつて・法皇・仰けるは・扨も・かゝる御あり樣に・見なし奉るべしとは・露思ひこそ・より候はざりしか・當時たれか・事問ひ・參らせ候と・仰ければ・女院今は・事問ひ・さふらふ・かたとては・冷泉の大納言隆房卿の・北方・七條の修理の大夫信隆の・女房よりぞ・常は・事問ひ・さふらふなる・日比は此人々に・問・とぶらはるべしとは・露思ひこそ・よりさふらはざりしかとて・御涙・いよ〳〵・せきあへさせ給はず・女院又・申させ給ひけるは・此人々に・おくれ・さふらひし事は・中々歎の中の喜び也・其故は・五障三從の苦を・はなれ・釋迦の遺弟に・つらなり・比丘の正名を・汚し・三時に六根を・懺悔して・一門の菩提を・とぶらひ・さふらふなり・女院重て・申させ給ひけるは・皆人は・生を・かへてこそ・六道を・見さふらふに・此身は・生ながら・六道をこそ・みて・さふらへと・申させ給ひたりければ・法皇・其こそ・大きに・不審に・存じ候へ・異國の・玄奘三藏は・さとりの前に・六道を・見・我朝の日藏上人は・藏王權現の・御ちかひに・よつてこそ・六道を・見たりとは・傳へ承つて候へ・さやうに・生をかへずして・六道を・御覽せむ事・いかが候べかるらん・女院・御不審は・さる事にては・さふらへ共・六道の趣・あら〳〵・なぞらへ申べし・此身は・平大相國の・娘・天子を・子に持奉りたりしかば・大内山の・春の花・色々の衣がへ・佛名の年の暮・大臣關白以下の・公卿殿上人に・もてなされ・さふらひし有樣・四禪六欲の・雲の上に・して・八萬の諸天に・圍繞渴仰せらるらむも・是には・過じとこそ・おぼえさふらひしか・扨も壽永の秋の初・都をば・木曾義仲と・かやに・追出され・西の海・波路はるかに・ただよひ・さふらひし有樣・天人の五衰と・こそ・覺えさふらひしか・賴つる・九國の中をば・尾形の三郎維義と・かやに・追出され・山野・廣しと・

いへ共・やすまむと・するに・所なし・御調物も・たえて・なければ・民の力も・及ばず・供御は・たま〳〵・備はれ共・水をも・きこしめされず・海に浮べりと・いへ共・それしほなれば・のむに・及ばず・萬水・海にあり・のまんと・すれば・猛火と・なる・苦・餓鬼道の衆生の・くるしみも・是には・過じとぞ・見えし・遠き松に・白鷺の・むれゐるを・みては・源氏の・旗を・あぐるかと・肝を・けし・蒼海に・夜雁の啼を聞ては・敵舟を漕かと・驚かる・扨も備中の水島・播磨の室山・二たびの軍に・勝ぬとて・人々すこし・色をなほして・さふらひしかば・人々の・直衣束帯も・見えわかず・身には・もろもろの獣の皮を・まき・足手には・鐵を・のべて纏ひつつ・朝夕は・軍よばひの・絶ざりし有樣・門十餘人・宗徒の侍三百餘人・亡び・さふらひし程に・帝釋羅睺王の・須彌の嶺にして・互の威勢を・あらそふらんも・是には・過じとぞ・思ひさふらひしか・晝は・磯邊の浪に・たゞよひ・夜は・洲崎の千鳥と〳〵もに・啼明し・鳴暮し・さふらひし程に・長門國・壇の浦と・かやに・して・先帝を・初奉つて・一門皆・今はかうとて・海に・しづみ・さふらひしかば・適々殘る者共は・舟底に・射伏られ・切伏られて・をめきさけび・さふらひし有樣・叫喚大叫喚・無間阿鼻の・炎の・底の・罪人も・是には過じとぞ・覺えさふらひしか・扨も・武き・ものゝふの手に・渡り・ふたゝび都へ・歸り・のぼりさふらひしに・播磨國・赤石の浦と・かやに着て・さふらひし夜の・夢に・渺々たる濱を・渚に・そうて・西へ行ば・瑠璃を・かざつたる・高き・樓の・さ

ふらふを・まぬつて・見さふらへば・先帝を・始奉つて・一門皆・なみ居て・同音に・提婆品を・讀さふらふを・爰をば・いづくと・云ぞと・問うて・さふらへば・二位の尼の・聲とおぼしくて・龍宮城と・申・か程・めでたき・所にも・苦は・あるかととうて・さふらへば・是も・いまだ・畜生の苦を・離れぬ所にて・さふらへば・などか・苦のなうては・さふらふべき・相構て・後世・とぶらうてたばせ給へと・申と・覺えて・夢醒て後は・常は・提婆品を・讀うで・一門の菩提を・とぶらひ・さふらふなり・是少も・六道の趣に・たがひ・さふらはずや・扨は・我身・命・惜からねば・朝夕・是を・祈る事なし・唯・いつの世までも・忘がたきは・先帝の御面影・又心の・をはりの亂れぬ・さきにと・ねがはしきは・往生の望計也と・泣々申させ給ひたりければ・法皇を・始奉つて・供奉の・公卿・殿上人・皆袖をぞ・ぬらされける・去程に・夕陽・西にかたぶけば・寂光院の・鐘の聲・けふも暮ぬと・打知られ・日も入相に・成しかば・法皇都へ・還御なる・女院は・法皇の御後を・はる〳〵と・見送り・參らつさせ・給ひて・御庵室に・歸らせ・おはしましける折節・山時鳥・しきりに・おとづれて・過ければ・女院

いざさらば涙くらべん時鳥・我も浮世に・音をのみぞなく・

其よりしてぞ・法皇より・常は・事問ひ・參らつさせ・給ひけるとぞ承はる・女院も・御念佛・いよ〳〵・おこたらせ給はずして・御年卅九と申には・終には・龍女か・正覺の跡を・おひ・韋提希

夫人の・昔をしたひ・往生の素懐を・遂させ給ひけるとぞ・承る・哀なりし御事也

法性寺合戦

去程に判官は・奥州に・下り・秀衡入道に・尋あはせ給ひて・我身・鎌倉の・源二位殿に・こゝろよからざるに・よつて・汝を・頼て・是迄・來れるなりと宣へば・秀衡入道・甲斐々々敷も・たのまれて・衣川・柳が館に・御所・しつらうて・おき奉る・或時秀衡・判官に・申けるは・詮ずる所・鎌倉殿に・御中・申なほし奉らん・縦又・鎌倉殿・入道が申旨を・御承引なくて・奥を責させ・給ひ候共・奥州・羽州・兩國の兵・廿八萬騎にて・ふせがんするに・などか・支ざるべきと・世にもたのもしげにこそ・申けれ・懸りける所に・判官の・運や盡にけん・文治四年・十二月十二日に・秀衡入道・とし六十六にして・失にけり・嫡子・錦戸の太郎康衡・奥の小次郎頼衡・いつしか・父が命を背て・明る・文治五年五月九日の日・五百餘騎にて・柳が館に・押よせ・判官をば・終に・討奉つてんげり・康衡頼衡・此由を・鎌倉殿・いかがは・思召れけん・さらば・奥をも・責らるべしとて・放生會をば・七月一日に・引あげ・同き七月十八日に・十八萬騎にて・鎌倉を・立て・奥州に發向し・七月より・合戦はじめ・八月・九月・三ヶ月が間に・奥州・羽州・兩國を・責したがへ・康衡頼衡を・先として・戰ふ者をば・討捕・落行者をば・助られけり・其より・郡々に・代官を・

するおき・我身は・急・鎌倉へこそ・歸られけれ・去程に・鎌倉には・此二三ヶ年が間は・京都の・さわぎ國々の亂れに・よつて・公の御年貢も・奉らねば・其恐ありとて・公の御年貢奉る・幷に鎌倉殿は・上洛とぞ聞えし・同き十一月七日の日・都に上り・六波羅に・落着給ひて・同き九日の日・院參申・正二位の・大納言に・あがり給ふ・兵衛の尉十八・靭負の尉十八人・共に三十人を・めしつかはるべき由を・仰下されければ・是頼朝が爲には・餘に過分の至なるべしとて・十五人をば・辭し申されて・殘り十五人をぞ・めしつかはれける・同き廿二日に・小原野の・行幸の・御供仕り・右大將に・あがり給ふ・去程に・鎌倉殿は・大將・大納言・兩官を・辭し申されて・同き十二月三日の日・鎌倉へこそ・下られけれ・去程に・六代殿は・高雄に・おはしけるが・十四五にも・成給ひしかば・いよいよ・みめかたち・ならびなく・心さま世にすぐれて・おはしければ・北方世の世ならましかば・今はやは・近衛づかさにてこそあらんずれ・なんどと・宣ひけるぞ・いとほしき・北方・今は・世のおそろしきに・とう〳〵出家し給へかしなんど・宜ひけれ共・文覺・頻に・惜み奉つて・十七の年の・春の比・出家し給ふべきにて・髪を・肩の・まはりに・きりまはし・齋藤五・齋藤六も・同じ姿に・出たつて・高野に上り・瀧口入道に・尋あはせ給ひて・しかじかと・いつし人の・子なりしが・角なりたる由を・語給へば・瀧口入道・此若君の御姿を・つく〳〵と見奉るに・故三位殿に・すこしも・たがはせ・給はねば・いよ〳〵・いとほしく・思ひ奉つて・二三日・とゞめ奉り・堂々・順禮・し給ひつ

つ・其後・瀧口入道を・先達にて・熊野へ參らせ給ひ・三の御山の・御參詣事ゆゑなう・遂させ給ひて・後・濱の宮の・お前より・漫々たる・沖を見給ひて・父の・しづみ給ひし跡と・聞からに・よせくる・沖の白浪も・なつかしげにぞ・見給ひける・其より都へ・御下向あつて・高雄に上り・出家し給ひて・三位の禪師と・申て・おこなひすましてぞ・おはしける・去程に・小松殿の五男・丹後の侍従忠房は・此五六ヶ年が間は・備中の宮内と・云所に・忍うで・おはしけるが・紀伊國に・打こえ・湯淺の七郎兵衞宗光を・賴みつゝ・湯淺にこそ・おはしけれ・同き國の住人・熊野の別當湛增・此よしを・聞て・大勢にて・押寄たり・湯淺もとより・究竟の城郭なりければ・左右なう落べきやうも・なかりけるに・湊をさしふさぎ・兵粮責にぞ・責けれ・湯淺に向つて・宣ひけるは・縱・我身こそ・あらめ・各をさへ・まどひ者と・なさん事こそ・口惜けれ・只わらはを・鎌倉へ・具して・下り給へと・宣へ共・湯淺爭かさる事の・有べきとて・防けるが・叶はぬせにも・成しかば・丹後の侍従殿を・具足し奉つて・鎌倉に・下りまつたう・さなき由を・陳じ申たりけるに・よつてこそ・湯淺をば・安堵してんげれ・其後鎌倉殿・丹後の侍従殿に・出あひ・對面し給ひて・故左馬の頭の殿の・御菩提の御爲に・御命ばかりをば助奉るべし・はやはや都へ・歸り上り給へと・宣へば・丹後の侍従殿・斜ならず喜び給ひて・都へ歸り・上らせ給ひけるに・鎌倉殿・いかゞは・おぼしめされけん・おつさまに・人を・上せて・丹後の侍従殿をば・近江國・篠原にて・終に・切奉つてけり・去程に・建久三年・三月三日の日・東大寺・供養有るべしとぞ・聞えし・懸りければ・鎌倉殿も・御警固の爲に・上洛とぞ・聞えし・東大寺供養・事故なう・遂させ給ひて後・都へ・上らせ給ひけるに・奈良坂にて・あやしき男・二人有・鎌倉殿・畠山を召て・あの中に・あやしき男二人あり・一々に・召捕て・事の子細を尋候へと・宣へば畠山・畏つて・承り・編笠着たる・男二人を・めしとつて・事の子細を・問けるに・さん候・一人は・上總の五郎兵衞忠光・一人は薩摩の兵衞の尉貞康候・御上洛の道すがらも・ねらひ奉り・たる由を・申けれ・扨は・とて・木津川にてぞ・きられける・去程に・小松殿の末の子に・土佐守宗實は・三歳の年より・大炊の御門の・左府に養せられ・今は他人の・ごとくにて・おはしけるを・鎌倉殿・何としてか・聞出させ給ひたりけん・尋給ふよし・聞えしかば・土佐守・叶はじとや・思はれけん・年十八にて・出家し・奈良に・下り俊乘上人を・頼みつつ・油藏にぞ・おはしける・俊乘上人は・甲斐々々敷も・たのまれ奉つて・油藏におき奉りたりしが・私にては・いかにも・叶ふまじとて・此由を・鎌倉へ・申されたりければ・鎌倉殿・さらば具して・宣ふ間・俊乘上人・土佐の入道を・具足して・鎌倉へこそ・下られけれ・土佐の入道・とても・助かるまじとて・南都を・出し日よりして・湯水をだにも・呑入給はず・十四日と・申には・足柄の山を・こゆるとて・干死に・こそは・し給ひけれ・俊乘上人・此由を・鎌倉へ・申されたりければ・

鎌倉殿・あなおそろし・其心にては・いかなる事をか・思ひ給はんずらむ・おそろし〳〵とぞ・宣ひける・去程に・平家の子孫は・はや・皆絶ぬるかと・思ひたれば・新中納言知盛の・末の子に・伊賀の大夫知忠は・平家都を落られける時・三歳に・ならられけるを・御乳人子の・紀の二郎大夫爲方・取奉つて・伊賀に・下り・せんどの山寺に・忍うで・おはしけるが・十四の年・忍びつつ・都に上り・ひそかに元服し・伊賀の大夫知忠とぞ・名乗られける・其後は・法性寺・一の橋・竹の内なる所に・とゞころを・しめてぞ・おはしける・懸りければ・平家の・討洩されの・一門侍共・此由を聞て・法性寺・一の橋へぞ・參りける・越中の次郎兵衛盛嗣・上總の惡七兵衛景清・紀の二郎大夫が子・兵衛太郎・兵衛次郎を・先として・宗徒の兵・廿九人ぞ・籠りける・畫は・堀の橋を・引・夜は・橋をぞ・渡させける・懸りければ・京中の狼藉・もつての外にぞ・候ひける・其比・一條の・二位殿入道能保の卿の・北方は・鎌倉殿の・御妹にておはしければ・鎌倉へ・人を・くだして・此間の・京中の狼藉・もつての外に・候へば・宿直の者・給はるべき由を・宣ひつかはされ・たりければ・新兵衛の尉基清に・大勢を着副て・上せらる・基清・都に上り・六波羅に・落着て・候ひけるが・此由を聞て・大勢にて・押寄たり・彼一の橋と・申は・究竟の・城郭なりければ・輙・落べきやうぞ・なき・寄手の・射る矢は・竹にはあたれ共・人にはあたらず・城の中より・雨のふるやうに・射ける矢に・寄手おほく・的になつて・射ころさる・基清・かなはじとや・思ひけん・法性寺の・前なる・在家を・こぼつて・堀に・むめ・橋として・切ている・城の中にも・高矢倉より・さしつめ・引つめ・散散に・射けるが・其後・矢種つきければ・打物の鞘を・はづし・城戸を・ひらいて・出・散々に・戰ひけるに・廿五人は・討れにけり・中にも・越中の次郎兵衛盛嗣・上總の惡七兵衛景清は・究竟の・逃上手なりければ・河原坂に・打て出・散々に戰ひ・分捕・あまたして・一方うち破て・南を・さしてぞ・落行ける・伊賀の大夫知忠は・小袖に・大口計にて・妻戸の間に・おはしけるが・人手に・懸らじとや・思はれけん・障子の内に・引籠り・自害してこそ・失られけれ・御乳人子の・紀の次郎大夫爲方も・館に・火かけ・知忠の御死骸に・近付奉り・日比は・一所にと・契り奉りし・事なればとて・腹十文字に・かきやぶり・同じ枕に・臥にけり・其後・基清・けぶりを・しづめ・知忠の・やけ頸とつて・一條に・持て・ゆき・二位入道殿に・見せ奉る・神妙なりとは・宣へ共・知忠の御頸・見知奉りたる者ぞ・なかりける・爰に・新中納言知盛の北方・治部卿の局は・西國より・たけき・もののふの・手に渡り・ふたたび・都へ・歸り・上らせ給ひては・仁和寺の・ほとりに・かくれ忍びてぞ・おはしける・是ぞ定て・見知給ひたるらんとて・尋出し奉る・此女房・ある頸を・一目見て・是も・三歳の年より・わかれたりしかば・今はいかでか・見知べき・さるにても・是や・そなるらんとて・涙に・むせばれけるにぞ・知忠の頸とは・しりてんげる・中にも・越中の二郎兵衛盛嗣は・但馬に・下り・氣比の權の守が・聟に・なつてぞ・ゐたりける・但馬の守護・安達の三郎左衛門遠基・此よしを聞て・大

勢にて・押寄たり・次郎兵衞も・一方請とつて・戰ひけるが・いかゞはしたりけん・大勢の中に・取籠られて・生捕にこそ・せられけれ・やがて・氣比の權の守をも・次郎兵衞に・添て・鎌倉へ・こそ・下しけれ・氣比の權の頭は・まつたう・さなき由を・陳じ申ければ・ゆるされけり・其後・越中の次郎兵衞を・御坪の內に・召出し・鎌倉殿・など・汝ほどの者の・いたづらに・生捕れぬるぞと・宣へば・さん候・いかにもして・身を・まつたうし・君を・討奉らんと・ねらひ申候ひしに・今は・運盡て・いたづらに・生捕れ・候ひぬる上は・力及候はず・只御恩には・急頭を・刎させ給へと・申たりければ・さらばとて・由井の濱にてぞ・きられける・去程に・阿波の民部父子をば・和田に・預け・おかれたりけるが・か程に・平家の侍共・在々所々にて・謀叛おこすと・聞えしかば・行末・然るべからずとて・阿波の民部父子をば・三浦・濱にてぞ・きられける・是は・建久八年・十月の事也去程に・鎌倉殿も・一期かぎり・おはしければにや・正治元年・正月十三日に・御年・五十三にて・失給ふ・かゝりければ・主上・御位を・さらせ給ひて・御子・土御門の院に・授・參らつさせ・給ひけり・上皇御位に・渡らせ給ひし程は・さしも・賢王・聖主の・御聞え・渡らせ給ひしが・御位を・さらせ給ひて後は・いつしか邪に・ならせ・おはしまします・あそびを・このませ給ひては・いやしき婦女に・なすらへ・武藝を・このませ給ひては・諸國の兵共を・召集め・北面と・名付て召・つかはる・吳王・劍客を・このんじかば・天下に・疵を蒙る者・おほく・楚王・細腰を・愛せしかば・禁中に・飢て死ぬる女・おほし・上に好めば・下も・則・したがふならひ・是偏に・世の・損ずべき・前表かとぞ・人・申ける・其比の・叙位除目は・院・內・攝政・關白の・御成敗にも・あらず・一向京の二位の・局の・まゝ・なりければ・都鄙の愁ぞ・多かりける・去程に・つけ奉らむとて・諸國の・武士をぞ・語らひける・上皇・此よしを・傳へ・きこし召れて・官人助兼に・仰て・文覺をば・二條岩上にて・搦捕・隱岐國へぞ・流されける・文覺・配流の事を・安からず・思ひければ・何條此・毬杖冠者に・おいては・我・居たらむずる所へ・むかへんずる物をゝと・踊あがり〳〵ぞ・申ける・此・後鳥羽院と・申奉るは・をさなうより・毬杖の玉に・すかせ給ひければ・皆・人・毬杖冠者とぞ・申ける・さればこそ・其故にや・承久に・事おこり・關東よりの・訴訟の爲に・隱岐へ・流されさせ給ひけり・去程に・文覺は・年八十八に・して・隱岐國にて・干死に・こそしたりけれ・去程に・六代殿は・三位の禪師と・申て・おこなひ・すまして・高尾に・おはしけるを・さる人の子也・さる者の弟子也・行末・然るべからずとて・高尾にて・搦捕・鎌倉に・下し・岡部の三郎左衞門・請とつて・むつら坂にて・きり奉る・十二より廿九まで・たすかり給ふ事は・偏に・長谷の觀音の・御利生とぞ・聞えし・三位の禪師・きられて・平家の子孫は・たえにけり

平家物語 終

附錄大秘事

宗論

されば、嵯峨の天皇の御時、清涼殿にして、四個の大乘宗の碩德をあつめられて、顯密の法文を、論談をいたす事ましましき。法相宗に源仁、三論宗に道昌、天台に義眞、華嚴にたうをう、一々に我が宗のめでたきむねを立て申さる。法相宗に源仁、我宗には、三時宗を立て、一代の聖敎をはんす、所謂有空中是なり。三論宗に道昌、我が宗には二藏を立てゝ、一代の聖敎をおふ、二藏とは、菩薩藏、聲聞藏これなり。天台に、義眞、我宗には四敎五味を立てゝ、一切の聖敎をおふ、藏通別圓これなり。五味とは、乳酪生熟酥醍醐味是なり。華嚴には、たうをう、我宗には五敎を立てゝ、一切聖敎を判ず、五敎は、小乘敎、始敎、終敎、頓敎これなり。其後眞言の弘法、暫く我宗には、しさう、けうさうを據として、卽身成佛のきを立て申さる。其時源仁、凡一代三時の經文を見るに、只三こう成佛の文のみありて、卽身成佛の文なし、何れの文證によつてか、卽身成佛のきを立らるゝや、其文證あらば、備に出され候へ、しゆるの疑網を拂はるべしと宣へば、其時きほふ、なんたちの聖敎の中には、

三こう成佛の文のみありて、卽身成佛の文なし。其時源仁重て、誠に其文證あらば、備に出されよと宣へば、文證を引給ふ。若人具佛慧、通達菩提心、ふもしよしやうしん、そんせうだいかくい、これ等の文をはじめとして、其數已に繁多なり。源仁、文證は出されたり、この文の如く、しうを得たる、其しつせう誰人ぞや。其しつせう遠くは、大日金剛薩陲これなり、近くは、我身卽ち是なりとて、手に密印を結び、口に密嚴を唱へ、心に觀念をこらし給へば、生身の肉身、忽に轉じて、紫磨黃金の肌となり、出家の頭の上には、四念五佛の法冠をげんじ、光明蒼天を照して、日輪の光を奪ひ、朝廷玻璃を輝して、密嚴淨土の儀式を顯す。其時皇帝御座を去りて、禮をなさせ給ふ。臣下卿相、冠の巾子を傾け、南都六宗の淨地に、ひざまづきてけいかくす。成佛きそくのりつはには、たうをう道昌舌を卷き、發心しきさうの難答には、源仁、義眞口を閉づ。四宗歸伏して、終に門葉に交り、一朝信仰して、はじめてほふりうを受く。三密五智の水、四海に滿ちて、くわくちをあらひ、六大無礙の月、一天に輝きて、長夜を照し給へり。御さいしやうの後も、しやうしふべつとして、きねんのほうおんを開召す。六しやうふたいにして、しそんの出世を待給ふ。

寶劍

抑この寶劍と申は、昔神代より傳はれる、三の靈劍あり、天のはやきりの劍、十握の劍、草薙の劍これなり。天のはやきりの劍は、尾張の國、熱田の社に籠られぬ。十握の劍は、大和國、ふるの社にありとかや。中にも草薙の劍は、內裏にとゞまりて、代々の御門の御寶、今の寶劍これなり。この草薙の劍と申すは、昔素盞男尊、出雲の國へ流され給ひし時、そがの里なつきの村と言ふ所に、宮造りありしに、その所に、八色の雲おほへり。尊これを御覽じて、

八雲たつ出雲八重垣つまごめに八重垣つくるその八重垣を

是を三十一字の始めとして、國を出雲と言へる事、それよりして始まれり。其の國の、ひの川上の山に、大蛇あり、尾頭ともに八あり、八の峯、八の谷に、はひはびこれり。脊中には苔むして、諸々の木生ひたり。眼は日月の光の如し。年々に人を呑む。親呑るゝものは、子悲しみ、子呑るゝ者は、親悲しむ。村南村北に、こくする聲絶えざりけり。尊是を憐びて、大蛇を亡さん爲に、八の舟に酒をたゝへて、高き床をかき、尊の御最愛の、稻田姫と申す神女を、裝束かせて、床の上に立られたりしかば、其影八の舟なる酒にうつろふ。大蛇是を呑んと、あくまで酒を呑みて、醉伏せる。其時尊、帶き給へる劍を拔きて、大蛇を、づた〳〵にこそ斬り給へ。八の尾の中に、尾一つ斬れざりけり。是を割りて

見給へば、一の劔あり。取りて、天照大神に奉らせ給へば、これは、我が、高天原にて、落したりし劔なりとて、其後御中なほらせ給ひけり。此劔、蛇の尾の中にありし程は、其の所に、黒雲の常に蔽うて、雨降りければ、天の叢雲の劔とぞ付けられける。天孫あまくだらせ給ひし時、三種の神器譲り給へる、其一なり。第十代の御門、崇神天皇の御時、靈威に恐れ參らせ給ひて、更に劔を作り改め給ひて、彼の劔をば、伊勢太神宮へ、返し入參らせさせ給ひけり。第十二代の御門、景行天皇の御時、東夷多く起りて、闕の東おだしからざりしかば、御門の第二の皇子、日本武尊とて、御心も剛に、御才學もゆゝしく渡らせ給ひしを、東夷征伐の爲に、さしむけ參らせさせ給ひけり。尊、先づ伊勢太神宮へ參らせ給ひて、御妹、齋宮して、天皇の勅命を承り、東夷征伐の爲に、罷向ふ由申させ給ひたりしかば、天照太神、謹んで、怠る事なかれとて、天の村雲の劔を、尊にさづけ參らせさせ給ひけり。尊駿河の國まで下らせ給ひたりしに、彼の國の凶徒等、尊をあやまち奉らん謀に、此國々は、鹿多く侍べる、狩せらるべき由を申す。尊野へ出給ひたりければ、四方の草に火をかけたり。尊帶き給へる劔を拔きて、打振り給へば、四方の草、一里までこそ薙れたれ。折節、風、夷賊の方へ吹き蔽ひて、凶徒多く燒け死ぬ。それよりしてぞ、草薙の劔とは名付けられける。かくて、三ケ年に、東夷を悉く攻め從がへ、夷賊等を生捕りて、都へ歸上らせ給ひけるが、尾張の國にて、御病つかせ給ひしかば、生捕りの凶徒等をば、御子、武彦尊して、御門へ奉らせ給ひ、御身は熱田の宮にして終にかくれさせ御座す。やがて此劔をば、彼の社に籠奉りけり。御魂は、白き鳥となりて、西に向きて飛行きけるが、讃岐の國に祝はれ給ふ、白鳥の大明神これなり。天智天皇の御宇、朱鳥元年に、震旦より、沙門だうきやうと申すもの、我朝に渡りて、此劔を盜み、歸唐せんとしけるに、浪風荒くして、舟既にうちかへさんとしければ、我が本意遂げ難しとて、返つて彼の社に、納め奉るとぞ承る。

神鏡

抑内侍所と申すは、昔天照太神、天の岩戸を閉ぢふさがせ給ひて、天下悉く常闇となりたりしに、八百萬の神たち、岩戸の前に集りて、神樂をせさせ給ひしに、天照太神、これにや愛でさせ給ひけん、岩戸を少し明けて、御覽せられけるに、八百萬の神たちの、面の白う見えければ、神たち喜びて、あな面白やと宣ひけり。面白しと申すことの葉、この時よりぞ始まれる。其時手力男の神と申す、大力の神、寄りて岩戸をがはと押開き給ひし後は、又はたてられず、日月、星宿、現れ給ひて、天下悉く明かなり。天照太神宣はく、我が子孫たらん人は、この鏡を見て、我を見るが如くに思ひ給へ、とて、三の鏡に、御姿を鑄うつさせ給ひけり。この三の御鏡と申すは、一つは、紀の國に渡らせ給ふ、日せんの宮これなり。一つは、內裏にとゞまりて、百王の御守とならせ給ふ、內侍所の御事なり。開化天皇の御宇までは、殿を同じくし、床を並べて住せ給ひしが、第十代の御門、崇神天皇の御時、別の殿に移し奉らる。中頃よりぞ、温明殿には渡らせ給ふ。遷都百六十年の後、村上の天皇の御宇、天德三年九月廿三日の夜、內裏燒亡あり、火元は大だいの、中の衞、左兵衞の陣なりければ、內侍所の、渡らせ給ふ、温明殿も近かりけり。其時の關白、小野の宮殿、急ぎ馳せ參りて、見まゐらせ給へば、女房夜半の事なれば、折節內侍所に、女官も侍ひあはすして、內侍所を、出し奉る人も無し。關白殿、

こは如何し奉るべきと、騒せ給ひけるに、神鏡温明殿をとび出させ給ひて、南殿の櫻の枝に飛びぞ移らせ給ひける。光明赫奕として、朝日の山のはを出でたるが如し。其時左大臣殿、頭を地につけ給ひて、百王往古の御誓ひ、改まらせ給はずは、神鏡、實賴が袖へ、移らせ御座せと、申し給ひたりければ、忽ち左の御袖に、飛びぞ移らせ給ひける。小野の宮殿、すゐきの涙を流しつゝ、みづから御先申させ給ひて、主上の御在所、太政官のあいた所へ、入參らせ給ふ。古はかくこそ目出度御座ましけれ。今は世の末になりて、內侍所も飛び移らせ給ふまじ。受け給ふ臣も、誰か渡らせ給ふべき。只上古こそ有難く、末代こそ悲しけれ。

平家物語附錄 終

承久記

上巻

後鳥羽の院の事

人皇八十二代の帝をば、隱岐の法皇とも申也。顯德院とも號し奉る。後には後鳥羽の院と申けり。御諱は高成、高倉の院の第四の御子、後白河の院の御孫なり。御母は七條の院、正三位藤原信隆の卿の娘なり。治承四年庚子七月十四日に御誕生、壽永二年癸卯八月廿日、御年四歲にて後白河の法皇の命によつて、御踐祚あり。元暦元年甲辰七月廿八日、五歲にして太政官のだうにて御卽位あり。御在位十五年が間、藝能二を學びおはします。建久九年戊午正月二日御位をおりさせ給うて、第一の御子に讓り給ふ。土御門の院これなり。それより以來、あやしのものに御肩をならべ、賤しきげじよを近づけさせ給ふ御事もあり。賢王聖主の道をも御學びありけり。又弓をいてよき兵をも召仕ばや と、叡慮をめぐらし、武勇の者を御尋ねありしかば、國々より進み參りけり。白河の院の御宇に、

北面と云ふものを、始めさせ給うて、侍を玉體に近づけさせ給ふ御事ありき。又この御時より、西面といふ事を始めらる。早業水練にいたるまで、淵源を極めましまします。弓取つてよからむ勇士、十人參らせよと、關東に仰せければ、常陸の筑後の六郎、遠江の原の彌三郎、かにまの丶次郎左衞門時繼を始めとして、武士六人を參らす。相撲の上手、同じく參らせよと仰せられければ、其比岡部の義介五郎、いぬたけの小太郎家光二人參りけるを、義介をばさうして、關東に留め、いぬたけの小太郎を參らせけり。かくて十三年を經て、承元四年庚午十一月廿五日に、一の御子御位をおろし奉り、第二の御子を、御位に立てまゐらせ給ふ。順德院是なり。是當腹御寵愛によつてなり。其後十一年を經て、承久三年四月廿日、又御位をおろし奉りて、新院の御子に讓り奉り給ふ。これによつて新院とも、法皇の御中御不快なり。御在位四ケ月に及ばずして、御位後堀河の院に參りて、王法つきはてさせ給ひ、人臣世に叛きし故を、いかにと尋ぬるに、地頭領家、爭論の故とぞ聞えける。上古には、地頭といふ事なかりしを、こゝ鎌倉の右大將賴朝卿、平家を亡しける勸賞に、文治元年の冬の比、日本國の總追捕使になり給ふ。その後建久三年七月に、征夷大將軍に補し給ふ故に、國々に守護を置き、郡鄕に地頭を居ゑ、既に五升宛の兵粮米をあてとる。これによつて、領家は地頭を嫉み、地頭は領家を輕めけり。

賴家實朝昇進幷薨去の事

賴朝は、伊豆の國の流人たりしが、平家追討の院宣を蒙りて、治承四年の秋の比、謀叛を起して、六ケ年の間、天下安からず。元暦二年の春夏の比、平家を亡しはて、靜謐にしよくする事十三年、世をとる事十九年なり。廿年と申す正治元年正月十三日に、五十三歳にして、卒し給ふ。其御子左衞門の督賴家、世を繼ぎ給ふ。御母は從二位政子、遠江守平時政の娘なり。童名は十幡殿と號す。建久八年十二月十五日に、從五位上に叙し、同き日右少將になり給ふ。御年十六歳なり。同じき九年正月卅日、讃岐の權の佐に任じ給ふ。同き十一月廿八日、正五位下に叙す。同き十年改元あつて、正治と號す。正月廿日、左中將に轉ず。御年十八歳なり。同き廿六日に、諸國の事を奉行すべき由、宣下し給ふ。正治二年正月五日、從四位上に叙し、同き八日、禁色を許さる。同じき十月廿六日、從三位に叙し、左衞門の督に任じ給ふ。御年十九歳なり。同き七月廿二日、從二位に叙し、同じく征夷大將軍たり。おなじき三年七月廿七日、やまふを受け給ふ間、同じき八月廿七日に御跡を、長子一幡殿に讓り給ふ。御年六歳なり。同き九月七日出家し給ふ。同じき廿九日に、伊豆の國修善寺にうつり給ふ。此將軍世を知り給ふ事、正治元年より、建仁三年に至る、其間五ケ年なり。二代の將軍として、世を繼ぎ給ふと雖、ふてうふるまひをし給ひしかば、神慮にも離され、人望にも背く故に、僅に五箇年が中に、建久元年七月十九日、大祖遠江守ときまさが爲に、亡され給ひけり。御年廿三歳なり。こに御おとうと萬壽御前、いまだ幼童にて、長兄の御後を繼ぎ給ふ。建仁三年九月七日に、御年

十二歳にて従五位に叙し、同じき日、征夷大将軍の宣旨を下さる。同じき年十月廿四日に、右兵衛佐に任じ給ふ。御年十三にて、御元服有り、右兵衛の權佐實朝と申しき。同じき四年改元有りて、元久と言ふ。正月五日従五位上に叙し、元久二年正月五日、正五位下に叙し給ふ。同じき廿九日、右中將兼加賀介に任ず。同じき三年、改元ありて、建永と號す。二月廿二日、従四位下に叙す。二年に改元有つて、承元と言ふ。正月五日、従四位上に叙す。承元二年十二月九日、正四位下に叙す。同じき三年四月十日、従三位に叙し、同じき五年改元あつて、建暦と號す。正月五日、正三位に叙し、同じき十八日、美作の權守に任ず。建暦二年十二月十日、従二位に叙し、同じき三年改元有つて、建保といふ。二月廿七日、正二位に叙し、同じき四年六月廿日、權中納言に任ず。中將もとの如く、随身四人を給ふ。御年廿四歳なり。同じき六年正月十三日、權大納言に任じ、同じき三月六日、左大將に任ず。通家の卿の後なり。同じき日、左馬寮の將監たり。同じき十月九日、内大臣に任ず。大將元の如く、同じき十二月二日、右大臣に任じ給ふ。大將本の如し。是公房公の後なり。同じき七年四月十二日、改元有つて、承久と號す。正月に大饗行はる可しとて、尊者の爲に、坊門の大納言忠信卿を、關東に、てうしやうすべき由との聞あり。この事公卿僉議有りけるに、按察使の中納言光親卿、申されけるは、抑例を往代に尋ぬるに及ばず、實朝が親父賴朝、右大將拜任は、卽ち上洛をうけ、格式の如し、何ぞ實朝自由に、其身關東に在りながら、結句卿相を、へんしうの堺に下して、拜賀をすべしや、百官をとていに定められてより此方、未だかゝる例を聞かずと申されければ、其時の攝政は、後京極殿にてましましけるが、仰せられけるは、光親卿の意見、でう〳〵其いはれ有り、但し何共、只實朝が申すまゝに御許し有るべしと覺ゆ、舊規を亂り格式に委せば、官職は、私にあらず、神慮も計ひあるべしと、仰せ有りければ、各此儀に同じ給ひけり。同じき正月廿七日、將軍家、右大將拜賀の爲に、鶴が岡の八幡宮へ、御社參有り、とりの刻に御出ありけるに、まづ牛かひ四人、次に舍人四人、次に一のんしやうそうす。かのの景盛、府しやう狛のもりつ、將監中原の成能以下、束帶なり。次に殿上人には、一條の侍從よしうぢ、藤兵衛佐賴經、伊豫の少將さねまさ、右馬の權守よりのりの朝臣、中宮權の亮のぶよしの朝臣、隨身四人なり。一條の大夫賴氏、一條の少將能房、前の因幡の守もろのりの朝臣、伊賀の少將たかつねの朝臣、文章博士仲章の朝臣なり。つぎに前駈藤勾當賴方、平勾當ときもり、さきの駿河守季時、左近大夫ともちか、相模の權守實定、藏人大夫重綱、左馬の權佐の右近の大夫時廣、前の伯耆守ちかとき、前の武藏守義氏、相模守時房、藏人大夫もとくに、右馬すけゆきみつ、藏人の大夫くにただ、りとし、右馬の權助宗泰、武藏守ちかひろ、修理權大夫これよしの朝臣、右京權大夫義時の朝臣、次に官人はたの兼光、番の長下毛野のあつひで、次に御車、おなじく車添四人、きうたう一人、つぎにすゑひやう二かうなり。小笠原の次郎兵衛長清、小櫻縅の鎧を着す。武田の五郎信光、黒糸縅の鎧

を着す。伊豆左衛門尉頼定、萌黄絲縅の鎧を着す。をかきの左衛門尉もとゆき、緋縅の鎧を着す。大須賀太郎道信、ふち縅の鎧を着す。式部大夫泰時は、小櫻縅の鎧を着す。秋田城介景盛、黒糸縅の鎧を着す。三浦小太郎時村、萌黄糸縅の鎧を着す。河越の次郎重時、緋縅の鎧を着す。隱岐の次郎かげかす、ふちをどしの鎧を着す。次に雜色廿人、次に檢非違使の大夫判官景廉、束帶鞘巻の太刀なり。次に御調度掛、佐々木五郎左衛門尉義清、つぎにけかう、播磨のさだぶん、中臣のちかとほ、かげのゝあつみつ、同じくあつうち、次に公卿には、新大納言忠信、左衛門督實氏、宰相中將くに通、八條三位光盛、刑部卿三位宗長おの〳〵乘車なり。次に左衛門の大夫みつかす、隱岐守ゆきむら、民部の大夫廣綱、壹岐守きよしげ、せきの左衛門尉まさつな、布施の左衛門尉やすさだ、小野寺の左衛門尉秀道、伊賀の左衛門尉光季、天野の左衛門尉政かげ、武藤左衛門尉よりのり、伊東左衛門尉祐時、安立左衛門尉もとはる、いちかはの左衛門の尉すけみつ、宇佐美の左衛門の尉すけまさ、讃岐の左衛門の尉廣綱、後藤の左衛門の尉基綱、そうの左衛門の尉高近、中條の左衛門の尉家長、讃岐の左衛門の尉正廣、源のげん四郎右衛門の尉秀氏、鹽屋の兵衛の尉朝業、宮内の兵衛の尉公氏、若狹の兵衛の尉忠秀、綱島の兵衛の尉俊久、東の兵衛の尉重胤、土屋の兵衛の尉宗長、堺の兵衛の尉常秀、狩野の七郎光廣等なり。路次の隨兵一千餘騎なり。宮寺の樓門にいらしめ給ふとき、右京の大夫義時、俄に心神違例の事ありて、御劔をなか仲のりの朝臣に譲りて、まかり去り給ふ。神宮寺御はいたつの後に於て、こまちの御ていに歸らしめ給ふ。夜陰に及びて、神拜事畢つて、やう〳〵まかり出んとするところに、何處よりともなきに、女房なかのはしの階の邊より、薄衣きたるが、二三人程はしるとも見えし、いつしか寄りけん、石階の間に窺ひきたりて、薄衣うちのけ、細身の太刀を抜くとぞ見えし、右大臣殿を斬り奉る。一の太刀をば笏にてあはさせ給ふ。次の太刀にて、斬られ伏させ給ひぬ。廣元やあるとぞ仰せられける。次の太刀に文章博士斬られぬ。次の太刀に伯耆の守盛憲斬られ、疵を被つて次の日死す。これを見て一同に、「あ」とばかり戰の慄きけり。供奉の公卿殿上人はさておきぬ、辻々の隨兵、所々のかゞり火、東西にあわて、南北に馳走す。其の音億千のいかづちの如し。その後隨兵、宮中にはせかはしすいへども、警敵を求むるにところなし。武田の五郎眞先に進めり。或人申しけるは、かみの宮の砌において、別當公曉父の敵を討つのよし、名乘られけるとぞ申しける。これによつて各くだんの雪の下の本坊に、おそひいたる所に、かの門弟の惡僧等そのうちに籠つて、相戰ふのところに、長尾の新六定景、子息太郎景範、同く次郎種景等、さきがけを爭ひけり。勇士のおもむき戰場の法、まことにもつて美談たり。つひに惡僧等敗北す。公曉は、この所に居給はざりければ、軍兵ども空しく退散す。諸人茫然たるほかなし。こゝに公曉は、彼の御首をもちて、こ[illegible]けんの備中が宿所に向はれけり。雪の下の北谷のたゝちせんのあひだも、なほ手に御首をばはなし給はず。公曉のたまひけるは、我もつばら東關のちやうに當る、早く

けいざを運すべきよし、牒し合せられけり。これは義村の息男駒若まる、門弟に列するによつて、其のよしみを頼れし故なり。義村この事を聞きて、先君の恩くわを忘れざるの間、落涙數行、さらに言語に及ばざりけり。少しさへぎつて、先茅屋に光臨あるべし、御迎の兵士を參らすべきのよしをぞ申しける。使者まかり去つて後、また使者を遣し、件の趣を右京の大夫に申されけり。さても公曉は、かく誅し奉るべき企圖をば知り給はず。さうなく阿闍梨を誅し奉るべきのよし下知し給ふの間、一族らを招きあつめて、評定をこらす。それ阿闍梨といふは、大武勇にたんぬ、すなほにあらざるなり、人たやすくこれをはからふべからず、頗る難義たるよし、おの〳〵相議するところに、義村は勇悍のきを選んで、長尾の新六定景うつて立たれけり。定景辭退に及ばず座を立つて、黒糸威の鎧を着し、さいがの次郎とて大強力の者あり、これら以下郎從五人相具し、公曉の在所、備中阿闍梨の家におもむきけり。折節公曉は、義村が迎の兵士延引せしむるあひだ、鶴が岡のこうめんの峯にのぼつて、義村が家にいたらんとし給ひけるところに、定景と途中にて行遇ひ給ひけり。さいがの次郎よつてかゝり、たちまちに公曉を抱く。互に雌雄を爭ふところに、定景太刀をとつて、公曉の御首を斬り奉る。素絹の衣の下に、腹卷を着給ひけり。生年二十歳なり。そも〳〵この公曉と申すは、右大將賴朝の卿の御孫、金吾將軍賴家の卿の御息なり。御母は加茂の六郎重成のむすめなり。公胤僧正の家にいりて、いきやう僧都しゆ法の御弟子なり。若宮の別當惡禪師の公と號す。無慚なりし事どもなり。御父賴家の卿、御後を長子一幡殿に讓りたまふところに、建仁二年九月に、叔父北條平の時政が沙汰として、義時を大將軍として、發向せしめ、これを討ち奉る。この時御年六歳なり。叔父比企の判官藤原の能員が郎黨百餘人、防ぎ戰ふといへども、かなはずして各自害してけり。これによつて右大臣殿に於ては、親兄の御敵なれば、今度かゝる謀叛をくはだて給ひけり。このほか連枝あり、同じく別當あいちんとて、しやうがん法橋の娘の腹の御子おはします。童名をば千手殿とぞ申しける。これをも同じき年の十月六日に討ち奉りけり。おなじき御腹にせんきやうとて、童名千歳殿とぞ申しけるは、承久二年四月十一日討たれ給へり。また木曾義仲の娘の腹に、たけの御方とておはします。これは賴經將軍の妻室になり給ふ。さるほどに定景は、かの御首を持ちてかへり、即ち義村右京の大夫の御邸に持參す。亭主いでてその御首を見らる。安藤の次郎忠家紙燭を乘り、こゝに式部の大夫申されけるは、まさしくいまだ阿闍梨の面を見奉らず、なほ御首に疑ひありとぞ申しける。そも〳〵稀有の凶事、かねて本意をしめす事、ひとつに非ず。所謂御出立の期に及びて、先の大膳の大夫入道參じて申しけるは、某は成人の後、いまだきう涙の面にうくことを知らず、然るにこんじ昵近申すのところに、落涙禁じがたし、これたゞ事にあらざるなり、事定めて仔細あるべきか、また公氏御髪をかうするところに、みづから御髪を一筋ぬいて、つぎに庭の梅をとりて、禁忌の和歌を詠じ給ひけり。

出でていなば主なきやどとなりぬとも軒端の梅よ春を忘るな

となん。門を御出のとき靈鳩めいてんす。車よりおり給ふきざみは、ゆう鈸を突折りたまひけり。同じき二十八日、御臺所落飾せしめ給ふ。御戒の師は、しやうこん坊の律師きやうゆうなり。また武藏の守近廣、左衞門の大夫時廣、さきの駿河の守秀時、秋田の城介景盛、隱岐の守幸村、大夫尉景廉以下、御家人一百餘人、薨去の哀傷にたへずして、出家をとげらるなり。戌の刻には將軍家長壽院のかたはらに葬し奉る。去ぬる夜、御首のある所を知らざりければ、五體不具、その憚りあるべきによつて、昨日公氏こうすることろの御髮をもつて、御頸にもちひ、棺にいれ奉りけり。さてもこの世の中、いかになるべきぞ、實に闇の夜に燈火を失へるにことならず。鎌倉殿には、誰をかすゑ參らすべきとぞ申しける。さるほどに、公卿殿上人は、空しく歸りのぼり給ふ。駿河の國浮島が原にて、歸雁おとづれて行きければ、左衞門の守實氏の卿

春の雁人にわかれぬならひだに歸る路にはなきてこそゆけ

同じ年の二月八日、右京の大夫義時、大くらの藥師堂に詣で給ふ。この寺は靈夢の告によつて、草創の地なり。去ぬる月の二十七日、戌の刻供奉のとき、夢見るが如くに、白き犬御側にまみえて後、心神惱亂の間、御劍を仲章の朝臣にゆづりて、伊賀の四郎ばかりを相具してまかり出で給ふ。然るに右京の大夫御劍の役たるのよし、禪師かねてもつて存知の間、その役人をすばつて、仲章が首を斬り給ふ。當時この堂、いぬかみ堂中に坐し給はずと申しけり。さても公曉は、今度の企圖のみにあらず、

この兩三年が間、御所中にばけやどり女の姿をして、ゆきいり給ふに、極めて足早く身輕くして、しばしば見え給ふを人みけり。今こそこの人の仕業なりとぞ思ひあはせける。御父には、四歳にてお くれ給ひしをば、二位殿はごくみ奉りて、若宮の別當になり給ひけり。また同じき年二月十五日の未の刻に、二位殿の御帳臺のうちへ、鳩飛びいる事ありけり。かゝる所に、おなじき日の申の刻に、駿河の國より飛脚參りて申して曰く、阿野の次郎冠者頼高、去ぬる十一日より多勢を引率して、城郭を深山に構ふ。これ卽ち宣旨を申したまはつて、東國を管領すべきのよし、相くはだつとぞ申しける。これは故右大將家の御おとうと、阿野の禪師全成の次男なり。母は遠江の守平の時政が娘なり。同じく十九日、二位殿の仰によつて、義時、金が窪兵衞の尉行親以下の家人等を、駿河の國へさしつかはす。阿野の冠者誅戮の爲なり。同じき二十三日、駿河の國より飛脚參着して、あの冠者禦ぎ戰ふといへども、無勢なればかなはずして、自害するのよしをぞ申しける。かくて東國は無異になりにけり。さても將軍の後嗣絕え果て給はん事を、かなしみ思ひたまふ。二位殿の沙汰として、光明峯寺の左大臣道家公の三男、頼經の卿を申しくだし給ひ、源家の將軍の後嗣をつがしめ給ひけり。これによつて二位殿の代として、義時天下の執權たりき。また都には、源三位入道の孫、右馬權守頼範とて、內裏の守護にてありけるを、これも源氏なる上、頼光が末葉なりとおぼしめして、西面の者どもに仰せて、させる罪なきを討たせられける。同じく子息頼氏をいけどられけるこそ不便なれ。陣頭に火を

かけて自害してけり。温明殿につきてけり。内侍所いかゞなり給ひげんと、おぼつかなし。

義時追討御評定の事

およそ院、いかにもして關東を亡さんとのみ、おぼし召しける。京童をあつめさせ給ひて、ぎじちやうとう〳〵たべとて、ものを賜りければ、さなきだに漫言ひ、ぎじちやうとう〳〵とぞ申しける。これは義時首を討てといふ、文字のひゞきなり。また年號を承久とつけられたるも、深きこゝろあり。その上南都北嶺に仰せて、義時を咒咀し給ふ。三條白河に寺を建て、最勝四天王寺となづけて、四天王を安置し、障子に詩歌を詠せらる。實朝討たれ給ひぬと聞し召して、にはかにこの寺をこぼたれぬ。調伏の法成就すれば、やく〳〵する家なり。六條の宮を、鎌倉にする忍奉らんと思しめしけるが、京田舎に二人の聖主、あしかるべしとて留りけり。九條の左大臣氏家公の三男、二歳にならせ給ふを、將軍に定めさせ給ひけり。これは鎌倉殿御妹婿、一條の二位の入道能保の卿の御娘、九條殿の北の政所にてましませば、その御由緣なつかしさに、義時申し下しけるとぞ聞えし。承久二年六月二十五日に、京を立たせ給ひて、同じき七月十九日、關東に下着、たちまちに槐門大かくの窓を出でて、くんけんあしやうの扃にとゞまり給ふ。そも〳〵右京の大夫兼陸奥の守平の義時は、上野の守直方が五代の末葉、北條の遠江の守時政か嫡子、二位殿の御弟、實朝の御叔父なり。權威おもくして、國郡にあふがれ、心正しくして王位を輕くせず。こゝに信濃の國の住人に、信濃次郎盛ともといふものあり。十四五になる子二人もちたり。存知あるによつて、元服もさせず。折節、院熊野參詣の路にて參りあひ、やがて見參にいりたてまつり、しか〳〵と申しければ、卽ち西面に參るべきよし仰せくだされけり。よろこびをなし、父もともに參る。義時傳へ聞いて、關東御恩の者が、義時に案内をへすして、左右なく京家奉公の條、はなはだ以て奇怪なりとて、もりともが所領五百餘町、沒收しをはんぬ。もりとも此のよしを院へ申しければ、還しつくべきよし、義時に院宣を下さる。御請文には、かへすべきよし申しながら、卽ち地頭をするゐられけり。院、奇怪なりと、御氣色斜ならず。またその頃、京に龜菊といふ白拍子あり。院、御こゝろざし淺からずして、攝津の國、倉橋の庄といふところをぞ賜りける。かの所は、關東の地頭あり、ともすれば、鼓うちどもを、さん〳〵にしける間、院に訴へ申しければ、地頭改易すべきよし、院宣をなさる。義時御請文、かの庄の地頭は、故右大將の御時、平家追討の恩賞なり、命にかはり功を積みて、賜りたるところなり、義時が私のはからひにあらずと申しければ、さる事なれども、當時罪科によつて、改易することなり、たゞ沒すべきよし、かさねて仰せくだされけれども、なほもつて叶ひ難きよし御請け申しけり。一院日比の御いきどほりに、もりとも龜菊そゝのかし申しける間、いよ〳〵御腹立てさせ給ひて、仰せられけるは、そも〳〵右大將賴朝を、鎌倉殿となすこと、後白河の法皇の御許なり、卒土王土は、皆これ朕がはからひなり、然るを義時、過

分の所存に住して、院宣違背申すこそ、不思議なれ、天照大神正八幡も、いかで御力を合せ給はざるべきとて、内々仰合せられける人々には、坊門の大納言たゞのぶ、按察使の中納言光親、中御門中納言宗行、日野の中納言有雅、甲斐の中將範茂、一條の宰相義宣、池の三位ひつもり、刑部卿の僧正ちやうこん、二位の法印尊長、武士には、能登の守秀康、三浦の平九郎判官胤義、三科の次郎盛とも、佐々木の彌太郎判官高しげ等也。是は皆義時を恨る者共なりければ、神妙の御計なりとぞ申しける。攝政關白等、位重き人には、仰合せられず、寄々聞き給ひて、思召さるゝは理也。然れ共、たゞ今天下の大事出できて、君も臣もいかなる目をか見給はんと、恐れまします。一院、秀康をめして、先胤義が許にゆきて、所存の旨を尋ねよと仰せありければ、秀康が宿所に、胤義を招いて、そも〳〵御邊、鎌倉の奉公をすてゝ、公家に奉公、いかやうの御心にて候ふぞと尋ねければ、胤義が俗姓、人みなしろし召されたる事なれば、今更申すに及ばず、故右大將家をこそ、重代の主君にも、頼みたてまつりしが、この君におくれ奉りて後、二代の將軍をかたみに存せしに、これにも別れ奉りてのちは、鎌倉に、胤義が主とて見るべき人があらばこそ、別の所存なし、大抵みなこれなるべきに、胤義當時相具して候ふ女は、故右大將殿のとき、一ほんばうと申しゝもの、娘なり、頼家のかうの殿の召されて、若君一人儲けたてまつりしを、若宮の禪師公の御謀叛に同意しつらんとて、義時に誅せられけり、このゆゑに、鎌倉に居住して、つらき事を見じと申す間、かつは心ならぬ奉公、つかまつるなりとぞ申しける。秀康、實に恨も深きもことわりなり、義時がふるまひ、過分ともおろかなり、いかにして、亡すべきといひければ、胤義かさねて申しけるは、京鎌倉に立ち別れて、合戰するには、いかに思ふともかなひ候ふまじ、謀をめぐらしては、などか御本意をとげざるべき、胤義が兄にて候ふ義村は、諸人に勝れて一門はびこつて候、義時がたび〳〵の命にかはりて、こゝろ安き者に思はれたり、胤義内々消息をもつて、義時討つて參らせ給へ、日本國の總御代官は、疑あるべからずと申すならば、世のわづらひになさずして、安らかに討つべきものにて候ふと申しければ、うち首肯いて、げにも然るべしとて、秀康御所へ參りて、このよしを奏す。一院、胤義を小坪に召して、御簾を巻きあげさせ給ひ、密々にぢきに御ものがたりあり。胤義が申す條さきの如し、頗る叡感をすゝめ奉る。既にこの事おぼし召したちて、秀康に仰せて、近江の國信義を召さる。鳥羽の城南院の、流鏑馬の爲にと披露す。承久三年五月十四日、西京の武士、畿内の兵士ども、高陽院殿に召さる。内藏の權の守清範、交名を記す。一千五百餘騎とぞ記したる。ともゑの大將公經を召さる。よの氣色も覺束なく思ひ給ひてければ、後見に、主税の頭長平を召して、伊賀の判官光季が許に馳せゆきて、三井寺の惡僧ちつ明等を召され、そのほか南都、北嶺、熊野の者ども多く催さる。いかさま仔細のあらんずると覺ゆるなり。公經を召されて、たゞ今院參す、かさねて告げしらせん時院參すべし、左右なく參るべからずとぞ、仰せつかはされける。大將殿まゐられければ、二位の法印尊長うけたまはりて、公經のきやうの袖をとりてひ

き、馬場や殿におしこめ奉る。これは御謀叛を領掌せず、いかにも關東亡しがたきよし、御謀叛に與せざるによつてなり。今の西園寺の先祖これなり。さてこそ關東には、西園寺の御子孫をば、かたじけなき事にはし奉りけれ。子息中納言實氏の卿、同じく召し籠められけり。

光季親廣召さるゝ事

また胤義を召して、伊賀の判官光季、少將入道親廣をば討つべきか、また召し籠むべきかと、おほせあはせられけり。胤義申しけるは、親廣入道、弓矢とるものにても候はず、召されて、すかしおかせ給うて、一方にもつかはされべし、光季は源氏にて候ふ上、義時が小舅にて、弓矢をとる家にて候へば、召され候ふとも、よも參り候はじ、討手をさし向けられ候ふべしと覺え候、さりながら、まづ兩人召さるべく候ふかと申す。先少將入道光季が許へ、三井寺の强盜しづめんためにとて、急ぎ參るべきよし仰せくださるゝあひだ參り候。御邊にも、御つかひ候ひけるやらんというたりければ、判官、いまだこれへ使も候はゝ、召に從つて、疾う參り候はめと返事す。親廣入道は、百餘騎にて馳せ參ず。殿上口に召されて、いかに親廣、義時既に朝敵となりたり、鎌倉へつくべきか、味方へ參すべきかと仰せ下されければ、いかでか宣旨をそむき奉るべき由申しければ、誓書を以て申すべき由仰せらる。二枚書きて、君に一枚北野に一枚參らせけり。此上は一方の大將に、賴み思召す由仰せ合せられけり。

其後光季を召さる。判官、院の御使に出合ひ申しけるは、光季は、かたの如く、鎌倉の代官として、京都の守護に候を、先づ光季を召して後、餘の武者をば召さるべきに、今迄召されず候間、大方不審一つに非ず候、聽て參るべき由申し候、御使一時の内に重ねて遲しと召されけれども、過にし比怪しき事を聞し上、大將殿御使も樣あり、人より後に召さるゝも旁以て怪しければ、御返事には、何方へも仰せ蒙りて、直に向ふべく候、御所へは、參るまじき由申しければ、光季めは、心得てけり、急ぎ追討すべし、今日は日暮れぬ、明日向ふべき由、胤義申して其夜は御所を守護し奉りけり。

官兵光季を攻むる事

去る程に、光季も今日は暮れぬ、明日ぞ、討手は向ひ候はんずらんと、思ひければ楯籠る。其夜、家子郎等並居て評定す。人々申けるは、無勢にて、大勢にかなひ難し、私の遺恨にあらず、忝くも、十善の帝王を、御敵に受けさせ給へり、夜の內に、京を紛れ出でさせ給ひて候はゝ、美濃尾張になどかはせのべさせ給はざるべき、又は若狹の國へ馳越して、船に召され、越後の庄に着きて、夫より鎌倉へ傳はせ給へと、口々に詮議す。光季いひけるは、東へも北へも、落べけれども、人こそ、坂東に多けれ、光季を賴みて、代官として京都の守護に置れたる者が、敵も敵により所も所による、流石に十善の帝王を、敵に受け奉り、處は王城、花の都、弓矢取る者の面目にあらずや、今は關をも据ゑられつらん、

愁に落人となりて、此所彼所にて、生捕れん事こそ口惜けれ、義時歸り聞れんも恥かし、若黨共の言はん處もやすからねば、光季は一足も引くまじ、落んと思はん人々おつべし、恨もあるべからずと云ければ、暫しこそありけれど、夜更けければ殘すくなく落ちにけり。思切り止まる者は、郎等に、贄田の餘三郎、鼓の五郎、飯淵の三郎、大住のしんし、山村の次郎、河内の太郎、志武の次郎、うの手の次郎、犬村の又太郎、金王丸、以上廿七人なり。各父母妻子の別は悲し、それとも、年來のよしみ當座の重恩、又未來の恥も悲しければ、屍を九重の土に晒すべしとて、留まりけり。判官の子に、壽王冠者光綱とて十四歳になる者ありけり。判官、汝はありとても戰すべきにあらず、鎌倉へ下り、光季が形見にも見え奉れ、幼からんほどは、千葉の姉の元にて育てとひければ、壽王申けるは、弓矢取るもの丶子となりて、親の討たるゝを見捨て逃る者や候、又千葉介も親を見捨て逃る者を、養育しられべきや、唯御供奉り候べしと云ひければ、さらば、壽王に物具させよと云ひければ、萌黄の小腹卷に、小弓に征矢を負うていでたゝせたり。光季も白き大口に着脊長前に置き、弓二張に、矢を二つ副てゐのまに居たり。白拍子共召し寄せ、終夜酒宴し、夜も曙になりしかば、日比秘藏しける物共、遊君共にとらせつゝ歸しけり。同き十五日午の時に、上京に燒亡いできたりとぞ罵りける。又暫あつて、燒亡には非ず、是へ向ふ官兵の馬の蹴立る烟とぞ申しける。既に院より差遣さるゝ大將軍には、三浦の平九郎判官胤義、少將入道親廣、佐々木の山城守廣綱、彌太郎判官高重、駿河の大夫の判官維家、筑後前司有信、筑後の太郎左衛門有長、都合八百餘騎にて押寄たり。館の内には少しも騒がず最後の酒宴して並居たり。贄田三郎申けるは、京極西の大門をも、高辻西の小門をも、共に開いて、兩方をふせいで、最後の合戰を、人に見せ候はんと、申しければ、贄田右近申しけるは、二の門を開くならば、大勢こみ入て無勢を以て、支へ難し、大門をば差固め、土門計を開きて、入らん敵を暫し支へて、後には自害せんと申。此義はよかりなんとて、京極表をばさし固めたり。辻表計を開きたり。兵共矢前を揃て立並びたり。一番には平九郎判官が手の者進み寄りて、閧をつくる。信濃國の住人志賀の五郎左衛門の、内へ駈入らんと進みけるを、判官の郎等、藤武者の次郎に、膝を射られてのきにけり。山科次郎駈寄つて、にえだの四郎に腕射られて引退く。屋島彌せい太郎、にえだの三郎に、胸板射させて退きにけり。垂井の兵衛太郎、入れかへたり。内より放つ矢に、馬の腹射られて鐙をはづして、緣のきはまでよりたりけるが、高股射貫れて引いて出づる。西面の帶刀左衛門尉、いしらまかされて退きにけり。其後、押寄々々戰へども、打入る者こそ無かりけれ。館の中には、少しも騒がず防ぎけり。土門をば破り得ず、大門を打破れとぞ下知しける。判官之を聞きて、敵に打破られては見苦し、内より開けよと言ひければ、しのぶの次郎押開き、とく〳〵御入候へとぞ申しける。兵共二手に引分けて待つ處に、筑後左衛門押寄せたり。いしらまかされてのきにけり。眞野左衛門時連入れかへたり。内より判官之を見て、日比の詞にも似ぬ者かなと詞を懸けければ、門の外より蒐入りて馬より下り、太刀を抜き、緣の際迄寄

りたり。簾の間に立ち寄り、なにと云ふに人ども、君をすゝめ奉りて、日本一の大事を起すは如何に、大將軍と名乘りつれば、矢一つたてまつらんとて放つ。胤義が弓のもりうちいけづり、弁びたる武者に射立てたり。胤義人を進ませて、思ふ樣ありとて引退ぞく。彌太郎判官高重と名乘りて、門の內へ喚いてかく。壽王冠者、烏帽子親にておはし候へば、恐れ候へども、矢一つ參らせんとて放つ矢に、高重は射向の袖に裏かゝせけり。高重引返すゝみとの馬の丞、志賀の平四郎、射られて引て出づ。內には頼みつるに、贄田の三郎大事の手負うて、腹を切る。治部の四郎自害す。宗徒の二人自害するを見て、殘る者共矢は射盡しつ、內へ入て自害す。敵は亂れ入りければ、二十七人籠りつる兵、十餘人落ちにけり。十人は自害して、判官父子、にえだの右近、政所の太郎、四人にぞなりにける。家に火かけて、自害せんとする處に、備前の前司甥の帶刀の左衞門、二人かけ入るを、にえだの右近、政所の太郎おりあひてうちはらひ歸り入る。二人も手負うて自害して、伏しにけり。壽王丸簾の間に立去りけるを、判官敵に取らるゝな、光季よりさきに、自害せよと云はれて、武具ぬぎ捨て、刀を拔いたりけれ共、腹を切り得ざりけり。さらば火の中へ飛入りて、死ねと云はれて、走り入りつるに、恐しくや思ひけん、二三度走り歸り〳〵しけるを、判官呼び寄せて、膝に据ゑて、目を塞ぎ、腹を掻き切り火の中へ投入れて、吾が身も東へ向きて、南無八幡大菩薩、光季唯今、大夫殿の命に代つて死に候と申す。三度鎌倉の方を拜して、西に向ひ念佛唱へ腹を切り、火に飛入て、壽王が死骸に抱付て伏しにけり。去程に胤

義、親廣以下、御所へ參り合戰の次第をぞ奏す。君も臣も昔も今も、光季程の者こそありがたけれとほめられけり。一院今度勸賞あるべしと仰せければ、胤義申しけるは、光季計にて候はゞ、尤然るべく候、義時程の、大事の朝敵をおかれて唯今の勸賞如何に候べきと奏す。君も臣も、いしう申したりとぞ仰せける。一院仰せけるは、義時が爲に命を捨つるもの東國に如何程ありなん、さすが朝敵と名乘りて後は何程の事あるべきと、問はせ給ひければ、庭上に幷居たる兵共おしはかり候に、いくばく候べきと申あぐる中に、しやう四郎兵衞何がしと云ふ者進み出でて申けるは、式代申させ給ふ人々かな、あやしのうたれ候ふだにも、命を捨つる者五十人百人は、有る習ひにて候、況て代々の將軍の後見、日本國の副將軍にて候ふ時政義時父子二代の間、公樣の御恩と申し、私の志を與ふる事、幾千萬か候はん、就中、建久に畠山を討たれ、建保に三浦を亡し〳〵より以來、義時が權威、彌重うして靡かぬ草木もなし、此人々の爲に命を捨つる者、一二三萬人は候はんずらん、某も東國にだに候はゞ、義時が恩をみたるものにて候へば、死なれずにこそと申せば、御氣色惡しかりけれ共、後には、式代なき兵なりと、覺し召あはせられたり。

公繼公意見の事

大將公經父子、死罪に行はるべき由、仰せければ、諸卿口を閉づる所に、德大寺の大臣公繼の申されける

は、勅命の上は左右に及ばず候へども、後白河法皇の御時知康と申す、前後を知らざる不徳人のもの
の、讒奏につかせ給ひつゝ、義仲を追討せんとせられしが、木曾憤を含み法住寺殿へ向うて、せめ
奉る、味方の戰一時の内に破れて、君も臣も亡び給ひき、今更胤義廣綱が讒により、義時を攻めらる
べきか、敵を亡ぼさんにつきても、味方の亡びんにつけても、大臣以下納言以上の人に、死罪を行は
ん事、能々叡慮を、めぐらさせ給ふべきかと、はゞかる所も無く申されけり。一院げにもとや思召けん
死罪を免めらる。さてこそ、鎌倉にも傳へ承りて、近衞入道殿、德大寺の右大臣殿兩所をば、忝きこ
とに申されけれ。

方々へ宣旨を下さるゝ事

光季追討の後は、急ぎ四方へ宣旨を下すべしと人々申されければ、中納言光近、承りて宣旨を書く。
其狀に曰く、

左辨官下

　應早令追討陸奥守平義時身參廳蒙裁斷諸國庄園守護地頭等事

右大臣宣奉勅。近曾稱關東之成敗。亂天下讒之政務雖帶將軍之名。偏假其詞於命恣致裁斷於都制。剩
耀威如忘皇憲論之政道可謂謀叛。早下知五畿七道諸國。令追討彼義時。兼又諸國庄園守護人地頭

五畿內諸國

等。有可令言上之旨者。各參院廳。宜經上奏。隨狀施行。抑國宰幷領家等亂事於論債。吏勿致監行涉是
嚴密。曾不違越者。諸國承知。依宣行之。

　承久三年五月十五日

大史小槻宿禰謹言

とぞ書きたる。東國の御使に、御厩の舍人おしまつまるを下さる。是につけて、人々の內消息、多く下
しけり。平九郎判官胤義は、私の使を立てゝ、內消息を下しけり。十六日の卯の刻に、東西南北、五
畿七道に綸旨をわけて下され、同き日、南都山門を始めとして、諸寺諸山の一の惡僧共を召す。悉
く參るべき由、領承申す。其外、君に志を運ぶ輩、諸國七道より、馳せ參ず。美濃の國より西は、大
略馳參じけり。東國の宣旨の御使、胤義が私の使、前後を論じて、下りけるが、十九日の未の刻に、
判官の使、片瀨川より先にたて、鎌倉に入りにけり。駿河の守義村が許に行きて、文を差上げたり。急
ぎ取りて見るに、十五日午の刻に、伊賀の判官光季討たれぬ、去ぬる十六日卯の刻に、四方へ宣旨を
下され候、又東國へ御使下り候なりとて、日比の本意をぞ書きつくしたる。義村打頷き、御使下るな
るは、何處にぞ。片瀨川より先に立ちて候ひつれば、今は鎌倉にぞ入り候はんと申す。返事をせんと思
へども、今は鎌倉より、關々も固めらるらんと、義村が狀とて、披見せられんこと、難義治定なり、
申されたることは、さ心得たりと申すべしとて、使者を急ぎ返し上せ、時を移さず、使門を出でければ、
義村勅命にも從はず、胤義が語ひにも付かず、案じすまして、文を持たせて、權大夫殿の許に行き向ふ。

折節侍の見參して、隙もなき中を分けて差寄りて、去ぬる十五日、御所より討手向うて、伊賀の判官討たれ、十六日卯の刻に、宣旨四方へ下さる、東國へ御使も、只今鎌倉へ入り候なり、胤義が内消息にて候ふとて、引き廣げて置きたれば、義時見て、今迄事なかりつるこそ、不思議なれ、宣旨にも、東國の者共、一味同心に、義時も討つて參らせよと候らん、人手に懸けずして、御邊手にかけて、君の見參に入れさせ給へ、近くな寄り給ひそとて、かいつかな、御命に代り奉ること度々なり、建久に、畠山を亡され給ひし時も、義村見捨てゝ、六郎に組付き、けんはうに一門を捨てゝ、味方に參り候ひき、忠賞一にあらず、幾度も、三代將軍の御形見にて、渡らせ給ひ候へば、いかでか捨て奉り候ふべき、全く宣旨にもかたより、胤義が語ひにも付くまじく候、義村二心を存せば、日本國中大小の神祇別して三浦十二天神の、神罰を蒙りて、月日の光に當らぬ身とまかりなるべしと、誓請を立てられければ、今こそ心安く思ひ奉れ、されば三代將軍蘇生りて、渡らせ給ふとこそ見奉れとぞ、宣ひける。

二位殿口説き事並引出物の事

おしまう丸、誇ね出さる。笠井が谷より、引提げて出來る。諸事の宣旨、七通あり。足利、武田、小笠原、笠井、三浦、宇津宮、筑後入道、以上七人にあてらる。此宣旨について、人々の消息多かりける。

權大夫駿河の守相具して、二位殿に參ず。大名、小名、參りこみたり。庭にも隙なくぞ見えし。二位殿妻戸の籠押上げ給ひて、先宇津宮を召されつゝ、其後千葉の介足利殿をぞ召されける。二位殿、秋田の城の介景盛を以て、仰せられけるは、一院こそ、ちやうこん尊長秀康胤義等が讒言につかせ給ひて、義時を討んとて、先づ光季討れて候なり、君をも世をも恨むべきにあらず、只我身の果報の拙きなり、女のめでたき樣には、我身を世には引くなれども、我れ程物を歎き、心を碎くものあらじ、故殿に逢ひ始め奉りしより、父の誡め、誠ならぬ母の嫉み、男の行方、此有樣ととりて苦しかりしに、打續きて國を取り、人を從へ給ひしより、御身を佛神に任せ奉りし事、晝夜怠らず、世を取治め給ひし後は、心安かるべしと思ひしに、大姫御前をば、故殿取分きてもてなし勞りて、后にするぞんと有しに、世を早くせしかば、同じ道にと慕ひしか共、故殿に諫められ奉りて、思を止めて返しゝに、小姫御前にも後れて、思ひ沈みしに、この爲罪深しと、諫められ奉り、夫も理と思ひなぐさひてありしに、故殿に後れ奉り、月日の影を失ふ心地して、こどもの歎きをも、此人にこそ慰みしに、此度思の限なると思ひ弱りしに、二人の公達、未だをさなくて、世のまつりにも不堪にして、二人の公達を育みしに、左衞門の督の殿に後れて後は、世の中に恨めしからぬ物もなく、心よりしに、偏へに死なんとこそ思ひしに、右大臣殿、誰かは子ならぬ、實朝が只一人になりたるを捨てゝ、死なんと仰せ候こそ口惜しう候へと恨みしかば、實にも死したる子を思ひて、生たる子に別れん事をや、これ慈悲にもはづ

れたりと、思返して過ぎし程に、右大臣殿、夢の様にて失せ給ひしかば、今は誰にひかれて、命も惜かるべしなれば、水の底にも入りなばやと思ひ定めたりしを、義時が是を見て、故殿の御名殘とては、御方をこそ仰ぎ參らせ候へ、義時が人に所を置れ候も、全く高名にあらず、然しながら、御事故にこそ候へ、誠に思召しきられ候はゝ、義時先づ自害仕りて、見せ奉り候べし、かた〴〵の御菩提と申し、鎌倉の有樣と申し、空しくなり給はん御事こそ、心よく覺え候へと、泣く〳〵申しゝかば、げにも故殿の末絕え、人事も悲しくて、思にしり給はぬ身となりて、せめての所緣を尋ねて將軍を居奉りて、此二三年は過ぎにき、縱ひ我身なくとも鎌倉の安からんことを、草の蔭にても見んと思ひつるに、忽ち半馬のはなしと、ならんすらんこそ口惜けれ、三代將軍の御墓の、跡方なく失せん事こそ哀れなれ、人々見給はずや、昔東國の殿原が、平家の宮仕へせしには、徒歩跣にて上り下りしぞかし、故殿鎌倉を建てさせ給ひて、京都の宮仕へも止みぬ、恩賞打續き、樂み榮えてあるぞかし、故殿の御恩をば、何時の世にか報盡し奉るべき、身の爲恩のため、三代將軍の御墓をば、いかでか京家の馬の蹄にかくべき、只今各申し切るべし、宣旨に從はんと思はれば、先尼を殺して、鎌倉中を燒き拂ひて後、京へ參り給へと泣き〳〵宣ひければ、大名共、伏目になりて居たる所に、赤地の錦の袋に入りたる、金作の太刀二振、手づから取出して、是こそ故殿の身を離し給はぬ、御帶刀とて、形見に持ちたれども、是鎌倉のあるが果なればとて、足利殿に參らせらる。畏つて賜られけり。宇都宮には、御つぼねと云ふ名馬に鞍置かせて、萌黃糸縅の鎧をひかせ給ふ。千葉の介には、紫糸縅の鎧の、長覆輪の太刀一腰、いづれも畏つて賜りけり。其後、陸奥の六郎有時、城の入道、佐々木四郎左衞門、武田小笠原坂東八ケ國の、宗徒の大名廿三人、代り〴〵召されて、色々の物を賜る。稻葉の廣戶入道、御酌を取りて、御酒を賜るを、各々申しけるは、いかでか三代將軍の御恩をば、思忘れ奉るべき、其上源氏は七代相傳の主君なり、子々孫々迄も、其御よしみを忘れ參らすべきにあらず、やがて明日打立ちて、命を君に參らせて、頭を西に向けてかゝれと申して、各〳〵落涙して、一同に立ちにけり。

關東合戰評定の事

其後入相程に、義時の宿所に會合して、宣旨の御返事、合戰の次第、評定あり。駿河の守義村申しけるは、足柄箱根を打ちふさぎ、支へむとぞ申しける。權大夫殿、此議惡かりなむ、然らば日本國三分二、京方へなりなんず、只明日、驀て馳上り、敵の逢ん處を限りにて、勝負を決すべしとありければ、此計左右におよばずとて、一味同心に打立ちけり。一陣は相模守時房、二陣武藏守泰時、三陣は足利の武藏の前司義氏、四陣駿河守義村、五陣千葉の介胤綱、是は海道の大將たるべし。先登には、一陣小笠原の次郎長清、二陣武田の五郎信光、三陣遠山の左衞門長村、四番生野右馬の入道、北陸道には、式部の大夫朝時、大將にて上るべしと定められる。各申しけるは、明日は餘に取敢ず候、今一日延られ

て、田舍若黨馬物具を召寄せて、登り候はゝやと申されければ、義時大に怒りて、いはれなし、今一日も上るならば、三浦の平九郎判官を先として、打向ひなんず、國々を打取られんこと、惡かりなん、明日は惡日なれば、濱藤澤の左衞門清親が許に、門出して、明後日廿一日、發向すべしと仰せける。去る程に明る日の卯の刻に、既に發向す。海道の大將軍時房、泰時、義氏、義村、胤綱に從ふ兵には、陸奥の六郎、せうの判官代、里見の判官代義直、城の介入道、森の癈人の入道、狩野の介入道、宇都宮の四郎賴仲、大和の入道信房、子息太郎左郎衞門、同じく四郎左衞門、弟の三郎兵衞、孫やくその冠者、峻河の次郎泰村、同じく三郎光村、佐原の次郎兵衞、朔又太郎、天野の三郎左衞門政景、小山の新左衞門朝直、長沼の五郎宗政、土肥の兵衞の丞、結城の七郎左衞門朝光、後藤の左衞門朝綱、佐々木四郎信綱、長井の兵太郎秀胤、筑後の六郎左衞門友重、小笠原の五郎兵衞、相馬の次郎、豐島の平太郎、國府の次郎、大須賀の兵衞、藤の兵衞の尉、たけの次郎、同じく平四、澄定の太郎、おなじく次郎、佐野の太郎三郎、同じく小太郎、同じく四郎、同じく太郎入道、同じく五郎入道、同じく七郎入道、そのの左衞門の入道、若狹の兵衞の入道、小野寺の太郎、同くちうしよ、下河邊の四郎、久家の兵衞の尉、讃岐の兵衞の太郎、おなじく五郎入道、同く六郎、同く七郎、同く八郎、同く九郎、同く十郎、江戸の七郎太郎、同く八郎太郎、北見の次郎、品川の太郎、志村の彌三郎、寺島の太郎、しもの次郎、かといの次郎、渡の左近、足立の太郎、同く三郎、石田の太郎、同じく六郎、あばうの刑部、鹽屋の民部、かちの小次郎、同じくたむない、同く源五郎、荒木の兵衞、目黒の太郎、木村の七郎、同く五郎、笹目の三郎、みかじりの小次郎、厩の次郎、萱原の三郎、熊谷の小次郎兵衞の直家、弟の平左衞門直國、春日の刑部、しせの左近、たの五郎兵衞、引田の小次郎、たの三郎太郎、本間の太郎兵衞、同く次郎、同く三郎、笹目の太郎、岡部の鄕左衞門、せん衞門の太郎、山田の兵衞の入道、同く六郎、飯田の右近の丞、官城野の四郎、子息小次郎、松田、河村、曾我、中村、早川の人々、波多野の五郎信政、金子の十郎、勅使河原の小四郎、新開の兵衞、同く彌五郎、伊東の左衞門、同く六郎、宇佐見の五郎兵衞、きちかはの彌次郎、あまつやの小次郎、高橋の大九郎、たつせの左馬の丞、きしまの太郎、澁河の中務、安東の兵衞忠光を先として、其勢十萬餘騎を差上す。

義時宣旨御返事の事

同く廿七日、仙洞の宣旨の御請文に、詞を以て義時申されけるは、將軍の御後見として、退過候に、王位を輕くし奉る事無し、自勅命を承る事、是非皆道理のおす處重々の評定なり、然るを、尊長種義等が讒言に付かせましまして、卒爾に宣旨を下され、既に誤無きに、朝敵にまかりなり候條、いと不便の至りなり、但し合戰を御好み、武勇を御嗜候間、海道の大將に舍弟時房、嫡子泰時副將軍に、義氏義村胤綱等を始として、十九萬八百餘騎を差進す。仙道より五萬餘騎、北陸道に次男友

時、四萬餘騎にて參り候、此方の兵共に召し向はせて、合戰させて御覽ぜられ可く候、若此勢しらみ候はゝ、義時が三男重時に、先陣うたせ、義時大將として、馳せ參る可く候、其爲古入道共はゝ少々鎌倉に殘し止め候うて、忽に馳せ參り候間、今は坂東三分一の勢を先とし、餘三分二は今日明日こそ馳せ來り候らめと、そう申すべしとて、たびちうあく迄、とらせて遣い出さる。おしまつ、夢の心地し登りけるが、同く六月一日酉の刻計に、高陽院殿に走り參りて、御壺の內に打伏しける。君も臣も、如何に押松物をば申さぬぞ、勞れたるか、義時が頸をば、何者がうつて參るぞ、鎌倉には戰するか、又兩方支へたるかと、口々に問ひ給ふ。あまりに苦しく候て、息次ぎ候とて、暫あつて申ける。五月十九日平九郎判官の御使、片瀨河なり先立て、鎌倉に入り、義村に內の消息つげて候へば、承引たる顏にて、使者をば返し登せ、件の狀を義時に見せられて候ひける間、おし松搦め出されて、繩を付られ候ひき、海道仙道北陸道、大勢上て後、廿七日の曉追出され候、義時かくこそ申されしか、大勢は廿一日に鎌倉を立ち候ひしかども、おくればせの勢を待ちて打て上り候間、五日おくれて鎌倉を立て候へども、御大事にて候ひし程に、夜も走り候あひだ、大勢より先に參り候、今はゝや、近江國へ入り候つらん、海道は一町と馬の足の切たる處候はず、百萬騎も候らんとて、又伏しにけり。之を聞きて皆色を失ひ魂を消す。

京都方々手分の事

院は、おし松が申條、さこそあるらん、おくす可からず、縱又味方に志あらん者も、鎌倉出をば、義時方とこそ名乘らめ、日月は未だ地に墮ち給はず、早く身方よりも討手をも向べし、北陸道には、三科次郎長時、宮崎左衞門尉定盛、糟谷右衞門尉有久、都合一千餘騎を下し遣しつかば、重て差下すに及ばず、海道仙道、此道に討手を、下すべしとぞ仰ける。胤義、廣親、以下の兵共、各存知の旨を申べき由、仰下されけり。中にも、山田次郎重忠、進み出て申けるは、敵の近付かぬ先に、味方より院々宮々を大將として、敵の會はん處迄、御下し候はゝ、其後國々は、身方に參り候べし、此儀惡く候はゝ、宇治瀨田を固められて、人馬の足を勞らかして、靜に都にて御合戰有て、若王法盡きさせ給はゝ、各陣頭にて腹を切り、名をとめ骸を埋むべしと、詞をはなしてぞ申ける。院聞し召され、此やうでうに過ぐべからず、但今は、敵近江國に入りぬらん、討手を差向く共、幾程の國を從へん、宇治瀨田を固めて、都にて合戰も心せはし、唯敵の合ん處迄發向すべきよし、仰下さる。胤義此御計、然るべしとぞ申ける。重忠ばかりぞ、領承申さず呟きける。秀康合戰の總奉行にて、胤義、盛綱、重忠以下、六月三日卯の刻に、都を立て同き四日、尾張河に着き、手なり、此手に修理大夫維義、其子駿河大夫の判官維信、筑後六郎左衞門、糟谷四郎左衞門尉久季、

西面の者少々、其勢二千餘騎、うるまの渡には美濃目代、帶刀左衛門尉、かんちの藏人入道二千餘騎、いきかせには朝日の判官代賴清、關左衛門丞政安一千餘騎、板橋には土岐次郎判官代光行、かいてんの太郎重國一千餘騎、豆戸は大手とて、能登守秀康、三浦平九郎判官、山城守廣綱、胤義、佐々木下總前司賴綱、同く彌太郎判官高重、安藝の宗内左衛門、加賀美右衛門尉久綱、彌二郎左衛門盛時、足助二郎重成、西面輩、少々相具し一萬餘騎、葦島には長瀬判官代しげ太郎左衛門入道五百餘騎、志岐渡に、安藝太郎入道、うすゐの太郎入道、山田左衛門尉五百餘騎、墨俣には、河内判官秀澄、山田次郎重忠、後藤判官基清、錦織判官代義嗣、西面少々相具して其勢三千餘騎、いちわきには加藤伊勢前司光定、伊勢國住人相具して其勢一千餘騎に過ざりけり。東國より上る處の一方の勢の半分にだにも及ばず。勅命の忝き、弓矢の名惜しくて、思ひ切てぞ下りける。院の御旗、赤地の錦にひれとこんがうれうを結付て、中には、不動明王四天王を現はし奉りたる旗十流を、十人にたまはりけり。私の家々の紋の旗さしにそへたり。おびたゞしく見えたりける。

高重討死の事

五月つごもりに、東國よりの大將相模守武藏守、遠江の國橋本に着きたる日、京方下總前司の郎等、筒井四郎太郎高重と云ふ者、其時分東國へ下りけるが、此事を聞きて馳上るに、大勢に道は取られぬ、逃行べき樣なくて、前陣の勢に紛れて橋本に着きにけり。今は遁ればやと思ひて立上り馬の腹帶強くしめ、たかしの山にうちあげ歩ませ行く、其勢十九騎なり。相模守之を見給ひて、此勢の中に時房に案内をば計らずして、馳行くこそ怪しけれ、止よとの給へば、遠江國の住人内田四郎申けるは、駿河の前司の申され候ひし御方の大勢の中に、京方定めてあるらん、道々宿々御用心あるべし、わかげの御事、御心元なきぞと申候ひつるものをと云ひもあへず、鞭を擧げて追ひかくる。筒井是をば知らず、打過ぎ〳〵行く程に、をとがはと言ふ河端に、岡のありけるに下り居て、今は何事か有る可きとて、馬の足休ませて居たる所に、甲着たる者、けはしげに來る者と覺えたりとて、傍に小屋の有りけるに入つて、物具する處に、打ち倒し寄せて、此家に籠りつるは、何處のぢう人、けうみやうをは、如何樣の人にて、おはするぞ、大將の仰を蒙りて、遠江の國の住人、内田の四郎が參りたりと言ひければ、つゝゐ進み出で打ち笑ひて、兼てはよも知り給はじ、佐々木の下總の前司盛綱の郎等に、筒井の四郎太郎平のたかしげと申す者ぞ、彼の大勢を敵にして、京方にさせんとするより、かゝる事案の内なりとて、内田六郎がむないたかけず、元筈の隱るゝ迄射たりければ、少しもたまらず落ちにけり。是を見て六十餘騎、少もひるまず駈入りける。阿波の國の住人、くんしの太郎と言ふ者、小屋に入りければ、たかしげ弓を打捨てゝ組み合ひけるが、刺違へてぞ死しにける。たかしげが郎等七人は、共に討たれにける。殘る十二騎、逃ぐるかと見る處に、さは無くて、大勢の中に

入り、一騎も殘らず討たれにけり。十九人が首、一所に懸けてけり。其後、相模守武藏守通り給ひて、是を見て、主從共に、大剛の健なる者哉と、感じ給ひける。

尾張の國にして官軍合戰の事

六月五日辰の刻に、尾張の一の宮の鳥居の前に、關東の兩將、時房泰時以下、皆控へて、手々を分けてけり。敵既に、尾張參河等に向ひたる、大炊とをば、仙道の手に當つ可し、うるまの渡は、森の入道、いきがせには、足利の武藏の前司賴氏、足助の冠者、板橋には、狩野介入道、豆戸は大手なり迚、武藏守泰時、駿河の前司義村、伊豆駿河兩國の勢、馳懸りて、彌々雲霞の勢に也にけり。墨俣には、相模守時房、城介入道、遠江國の勢にみしまあたり、江戸河越の輩、相具して向ひたり。手々に分けらるゝ時、軍は仙道の手を待ちて、所々の矢合たるべしと、武藏守觸れられけり。大鹽の太郎、浦田の彌三郎、くせの左衞門次郎、渡々に寄せたりけれ共、仙道の手を相待ちて、控へたる所に、豆戸の手、敵向に在と見て、大將の許なきに、左右なく河を馳渡し、驀て打違へけり。武藏守是を見て大に怒りて、軍をするも樣にこそよれ、さしも押へよと、合圖をさしたる甲斐もなく、軍を始めて、渡々を騷せん事、べんござうなしてんず、返々慮外なりとの給へば、鐵りぬ。爰に京方より、朝夷奈三郎平のよしすると名乘つて、矢一つ、武藏守の陣の中へ射わたしたり。取りて見れば、十四束二つ伏なり。泰時此矢を見て、大に笑ひて、朝夷奈は弓は射ざりけり、矢束十二束に少はづみたるばかりなり、是は身方をぐさせんとて、計にしたるなり、誰か返すべきとの給へば、駿河守泰村、仕らんとぞ申されける。泰時ある可からず、御邊達の遠矢のいごと極まりたらんときなり、かはむらの三郎、此矢射返す可きと仰せければ、射返しけり。又せんだうの手に、關の太郎と言ふ者、敵ありと聞いて、三手がひとつになりて馳せ向ふ。小笠原の次郎長清、武士八人、武田の五郎信光、武士七人、なごの太郎、河内の太郎、二宮の太郎、へいの三郎、加々美の五郎、秋山の太郎、兄弟三人、淺利の太郎、南部の太郎、轟木の次郎、逸見の入道、小山の左衞門の尉、伊具の右馬のにふだう、布施のなかつかさ、あその四郎きやうだい三人、甕中三、しがの三郎、矢原の太郎、小山田の太郎、彌五三郎、こみたの太郎、ちゝの太郎、くろがのぎやうぶ、片桐の三郎、長瀨六郎、もゝさはのさゑもん、海野、望月、やまにて馬共馳せ下し、つかの丶大寺に、敵向ふと聞いて、落したれども人も無し。ひとつ河原と言ふ所に、陣を取りて、三つが一手に寄合ひて、軍の評定す。明日大井は渡らんとて、各休む所に、武田の五郎申しけるは、翌日とはの給ひつれども、目に見たる敵を、如何でか一夜まではのがす可き、人をば知らず、信光は、今日此河を渡らんとて、打立つて、武田の小五郎に、心を合せて進みけり。二陣の手が進みければ、先陣後陣如何で控ふべきとて、馳せ行きけり。河端に馳せて見れば、敵河端より、少し引きあけて、陣を取る。河岸に舟を伏せて、逆茂木をひきたり。た

やすく渡るべき樣なし。かはかみの左近、父の彌六、ときはの六郎、あかめの四郎、たいどうの入道これつね等渡りけるを見て、敵の方より、武者一人おこして申しけるは、一番に渡るは誰ぞ、かう申すは、信濃の國の住人、諏訪黨に、大つまの太郎かねすみなりとぞ名乘りたる。坂東より取敢へず、とう國の住人川上の左近父の彌六とぞ答へける。さては一家なれば、父の彌六をば大みやうじんにゆるしたてまつる、左近尉をば申受くるとて、河へさと打ちつけたり。ちの面もふらず喚いてかく。ぬしをこそみやうじんにゆるしたてまつれ、馬をば申受けんとてきつゝけの餘り、はのかくるまで射たり。ちの逆茂木の上に下り立つて、太刀を抜くところを、落合ひて首を取る。ときはの六郎つゝいてよりけるを、五人落合ひて、首を取る。あかめのないとうは、是も馬の腹射させて、徒武者にて河をわたり、向の岸に渡りつゝ、敵是をば知らずしていざりける。武田の五郎渡らんとしけるに、相具して渡る輩、同じく六郎、千野の五郎太郎、やしまの次郎、轟木の次郎五郎を先として、百騎ばかり、河浪白く蹴立てゝ、渡らんとしける。敵是を見て、河岸にあよませ、矢先を揃へて、雨の降る如く射すくめられて、河中にひかへたり。武田の五郎がちゝ信光、鞭をあげて、河の東の岸に控へて、鐙踏張り、いかに小五郎、日頃の口には似ず、かたきに後を見せて、東へ返すものならば、信光こゝにて汝を討たんずるぞ、たゞ其河中にて死ねやしねや、返すなとぞ喚きたる。小五郎のぶまさこれ聞きて、たゞしねや死ねや者共とて、一鞭あてゝ百騎同じ頭に渡す。舟も逆茂木も蹴散し、衝をならべて、向

の岸へさとかけあがる。父是を見て、小五郎討たすなとて、一千餘騎馳渡す。小笠原の次郎長清、小山の左衞門是を見て、鞭を上げて馳せつゝ、是を始として、せんだうの手五百餘騎はたの頭を一にして、一騎も殘らず打ち渡り、駿河の大夫の判官これのぶ、筑後の左衞門ありなか、かすやの四郎左衞門ひさするをはじめとして、名を惜むともがら共、返合はせ〳〵、戰ひ戰ひ立ち行きける。中にも帶刀の左衞門返合せて、深入りして上野の太郎伊豆の次郎に討たれにけり。いぬたけの小太郎濃國の住人いはまの七郎と、組んで落つるところに、岩間が子息二人、落合ひて討つてけり。筑後かすや大將にて、暫しこたへけれども、大勢になびかされて、力なく落行きけり。大つまの太郎は、始めより命惜むとも見えざりけり。大事のておひて、落ちもやらず、なかのゝ四郎と、こしまの三郎と二人連れたりけるが、小笠原の六郎、それよりまはし、討たんとするを見て、大つま言ひけるは、かねすみは敵の手にはかゝらずして、山へ馳せ入りて、自害せん、わどのばら、是よりまめとへ落行きて、合戰の樣を、能登殿以下の人々に語り申せとて、山へ馳せ入りけり。筑後の六郎は、小笠原の七郎をゆんでならべて、聞ゆる御所づくりきくめいの太刀にて、小笠原がどう中を切り落さんとしけるが、討ちはづして馬の頭を打ち落す。其ひまに退きけり。

秀康胤義落行く事

なかの丶四郎、こじまの三郎、まめとへ馳せ行きて、合戦の次第を申しければ、能登守ひでやすをはじめとして、口惜しき事かな、さりともとこそ思ひつるにとて、あわて騒ぐ。たねよし是を聞きて、只今せんだうの手破れぬれば、しもてのでいは、是を聞き、萎れ落ちなん、いざさせ給へ、彌太郎はうぐわん、せんだうの手に向ひて、さゝへて見んとて、ときはの七郎案内者として、五百騎ばかりあまりせけり。其日夜に入りければ、能登の守下總のせんじ以下、寄合ひて、平判官は、たのもしげに言ひて向ひつれども、よあけ、せんだうの手あとへまはり、大手前より渡すならば、かくとも引くとも叶ふまじ、夜に紛れてこゝを退きて、都に參りて、ことの由をも申し入れて、宇治瀬多をかためて、せけんを暫見んと言ひければ、もつとも然るべしとて、落行きければ、たねよしも此こと、我一人たけく思ふとも、心次第に、過ぎもて行かば叶ふまじとて、こゝを打具し落ちて行く。

阿曾沼の渡豆戸の事

同じき六日の曉、まめとに向ひたる坂東勢のうちに、武藏國の住人、あそぬまの小次郎ちかつなと言ふ者あり。河に打臨んで申しけるは、せんだうの軍は、明日と合圖をさしたれども、早やはじまりて候ひけり。死したる馬流れたり。せんどうの手、後陣にひかへんこととこそ口惜しけれと、言ひもあへず打ち入るゝ、二陣に武藏の太郎時氏打入れ給ふ。是を見て、三千餘騎にて、敵の館の中へ、喚いてかけ入りけり。兵共一人も見えず、雜人ども十四五人ぞにげ散りける。

下巻

官軍敗北の事

去程に、夜の曙に、武藏守泰時、小太郎兵衛を使として、只今さめど渡り候ふなり、同じく御急ぎ候ふべしと申されければ、足利卽ち使の見る處にて、渡らんとて、足曲のくわんじや相共に渡りけり。小太郎兵衛も、此手について渡りけり。此所に澁河の六郎と言ふ者の落ちけるを、日頃の言葉にも似ず、返せと言ひて、大勢の中に駈入りけるが、又二度共見ざりけり。池田左近とて、したゝか者有り。是も返し合せけるが、義氏の手に、太郎兵衛と組みて首を取らる。墨俣の手にも、是を聞きてぞ渡しけるに、又太郎さきがけゝり。敵支へ矢ばかり射て、落ちて行く。其外渡々を固めたる官軍を、六月六日午刻以前に、皆追落しけり。京方一騎も殘らず、西を差してぞ落行きける。野山林河をも嫌はず、田の中溝の中とも言はず、打入れ〳〵、山も谷も、關東の勢にて、埋めて行く。京方の者、筵田と言ふ所に、少々控へて相待つ輩有りけり。三日じりの小太郎、京方一人が首を取る。せんゑもんたいの左近せんひやうゑ、各かたき一人宛討つ取る。山田兵衛入道ば、敵二人が首を取る。京方に、尾張國の住人、下寺の太郎が、手の者落ちけるを、追懸けて、紀伊の五郎兵衛入道生捕りけり。

重忠支へ戰ふ事

京方に、尾張の源氏山田の次郎は、味方一人も殘らず落行くを見て、あな心憂や、重忠は矢ひとつ射てこそ、落ちずれとて、杭瀨河の西の端に、九十餘騎にてむまみやめ、まさきかけて川端に打臨みたるが、山田の次郎が旗を見て、如何思ひけん、村雲立つてひかへたる後の陣に歩ませけり。さゝの三郎、波多野の五郎義重、加地の丹內、同じき六郎なかつかさ、たかえの次郎、やへの平次郎、伊佐の三郎行政、三十騎計にて、馳せ來るを見て、きんなり河にうちひたす。西のはしに打上げて言葉をかく。山田が郎等の兵衛父子、山口の兵衛、あら合ひけり。山田の次郎重忠と名乘つて射て、陸へ上りて駈けめぐる。敵ひきて西の方へ馳せ行く。さゝの三郎ひたひを射ぬかれて、若黨の肩にかゝりて歩く。路に憩みて矢を抜くに、から計ぬけて根は止まる。僅かに五分ばかり尻の見えたるを、石にて打ちゆがめて、くはへて引きけれどもぬけず。さゝ如何にもして、早くぬけと噪きけり。弓弦を曲目にゆひつけて、木の枝にかけて、はねきをもてはねたれば、抜けたり。ぬけはつれば、死にけり。しばらくありて息ふきいだす。此上は國へ還すべし、たゞし大將

の御目にかくべしとて、かいてかへるを聞き、眼を見上げて、口をしき事をする奴原かな、西へかくべし、死なば宇治河へ投入れよと言ひければ、力なく又かきのぼる。加地のなかつかさ、波多野の五郎、やへの五郎、射られて河原に止まりけり。殘は敵を追ひける。大將と見えて兵共馳せ行くに眼をかけて、伊佐の三郎おし並べて組む所に、深き堀のありけるを、敵こえけるとて、馬まろびけるに、いさが馬も續いてまろびけり。山田起きなほつて、汝は何者ぞ、我は源の重忠なり。伊佐は、信濃の國の住人、いさの三郎行政なりとぞ答へける。さては耻ある者にこそとて、太刀をぬきけるを見て、山田が郎等に、藤の兵衞といふもの馬より下り、いさの三郎を斬る。三郎尻居にうちはへられて、房ながら太刀をもて合はせけり。いさが乘りかへの郎等二人まかり居たりけるが、主のすでに討たるるを見て、二人走りよりければ、敵太刀を取りなほして、討たんとすれば逃げにけり。又主を討たんと寄せければ、二人走り寄り、かくの如くすること三四度なり。其後うしろより大勢はせ來りにけり。山田をば、藤のしん兵衞馬にかき乘せて落ちて行く。

相模守いくさの僉議方々手分の事

同じき七日、相模守、武藏守、野上の垂井になか一日とゞまりて、山道海道二の手を一所に寄せあはせ、路次の兵共馳せ集めて、都合二十萬騎になりにけり。關が原といふ處にて、合戰のせんぎ、しよ〳〵の手分あり。武藏守申されけるは、今日は宇治勢田の合戰こそ終にてあるべく候、より〳〵戰の僉議も、手分大事たるべく候、駿河の前司殿のはからひに付き奉るべく候、はゞからず計り給へと申されければ、よしむら申けるは、大將の御命により候へば、かた〴〵免し給へ、北陸道の手に未だ見えず候、勢田の大手には、相模の守、城のすけ入道、佐御の淵には武田の五郎、一かの人々ども、甲斐信濃の軍勢、淀の手にはよしむら罷向ふべく候と、定め申しけるに、相模の守の手に、本間の兵衞たゞ家といふ者進み出でて、駿河守殿の御はからひ、さうに及ばす候へども、相模守殿の若黨に、いくさなさせそとの御事おほく候、武藏守殿を勢田へ向け參らせらるべくや候らんとぞさゝへける。いしくも申すものかなとぞ聞えける。駿河の前司義村申されけるは、御申はさる事にて候へども、戰の有無は處には依り候はず、兵の心にはより候へ、又相模の守殿おき參らせて、いかでか武藏の守殿は勢田へは向かせ給ふべき、且は私のしんぎにあらず、平家兵亂の手合に、木曾を追討せられし時も、兄の蒲の御曹司は、追手勢田へ、御弟の九郎御曹司は、宇治へ向はせ給ひて候ひき、かの先規きゝやうにして、今まではあらすとぞ申されける。武藏の守殿今に始めぬ事ながら、此儀に過ぐべからずとて、にしちへ小笠原の次郎、筑後の太郎左衞門、上田の太郎を始として、甲斐の源氏、信濃の國の住人等をさしそへらる。小笠原の次郎進出でて申しけるは、身を惜むには候はず、せき山にて馬共多く馳せ殺し、又大炊と

にて、てのきはの合戰仕りて、馬も人もせめふせて候、ことにもあはぬ人どもをおかれながら、長清むけられしこと、別の御はからひと覺え候ふと申されければ、武藏の守殿のたまひけるは、いたみ申さるゝ處、尤もそのいはれ候へども、心やすく思ひ奉りてこそ、大事の手には向け奉れと宣ひければ、力およばず、重ねて辭し申すにおよばずとて、向はれけり。その勢一萬五千餘騎なり。

朝時北陸道より上洛の事

さるほどに、式部の丞朝時は、五月晦日越後の國府につきて、打立ちけり。北國のともがら、ことくあひ從ふ。五萬餘騎におよべり。京方に、みしなの次郎、宮崎の左衞門、さきかけて下りけれども、おめすに、ゐでの左衞門、石見の前司、やすはらの左衞門、いしぐろの三郎、近藤の四郎、同じき五郎、これ等を召しけり。參らざりけるもの故に、日數を送る處に、宮崎といふ處をも支へず、たのはきといふ處に、さかも木を引きけれども、關東の兵みだれくひのはづれ、海をおよがせて通りにけり。同じき八日に、越中の礪波山を越えつる處に、きやうがた三千餘騎を三手にわけて、支へんとしけれども、追手山のあなたに陣をとりて、夜をこめて五十嵐黨を先として山を越えければ、みしなの宮崎、一いくさもせずして落ちにけり。糟屋ばかりぞ討死しける。はやしの次郎、石黒の三郎、近藤の四郎、同じき五郎、弓をはづして關東方へ參る。北陸道のざい〳〵所々のきやうがた、一こらへもせず皆落ちにけり。せう〳〵あひ戰ふともがらの首ども、みち〳〵に斬りかけて、いづれおもてを向ふべきやうぞなき。

一院坂本へ御出立の事

八日の曉、ひでやす胤義以下、御所へ參りて、去んぬる六日まめとを始めて皆落失せ候、又くひせ河よりほか、はか〳〵しき戰したる處も候はずと申しければ、君も臣もあわて騷がせ給ひき。唯今都に敵うち入れたるやうにひしめきけり。一院は合戰のならひ、一方は必ず負くるなり、さればとて矢も射ぬ事やはある、今は世はかうにこそ、憖ひの戰せんよりは、山門に移りて三千人の大衆をたのみて、我はあひいろはぬよしを、關東へたいでうせんとぞ、仰せられける。すなはち、叡山へ御幸なる。御勢千騎ばかりありしかども、用に立つべきもの、一人もなかりけり。都には君も臣も武士も見えず、關東の勢もいまだ參らず、あきれて居たるけしきなり。ともゐの大將、子息實氏めしぐせらる。二位の法印腹卷に太刀はきて、世みたれば大將のぶし討たんとて、おしならべて目を付け、太刀を抜きかけて歩ばせけれども、一院御目もゆるしまさねば、ひきのき〳〵す。中納言大將につかみつきて、法印が氣色は、しろしめして候か、最期の御念佛候べし、又現世をおぼしめさるべしと宣へば、公經も心得たりと宣へども、惡くぞ見え給ひける。日吉山王、今度ばかり助けさせ給へと、心の中にぞ祈念し給

ひける。法印大將にうちならべ給ふときは、中納言中へうちいり給ひけり。父には似ず能くぞ見えさせ給ひける。

方々責口御固の事

主上上皇は、西坂本梶井の宮にいらせ給ふ。座主大僧正せうゑん參らせ給ひ、ない〳〵御氣色も無く御幸のでう、まつだいの御そしりをもうけさせ給ひぬと覺え候、口をしくも候ものかな、用にも立つべき惡僧共は、みをがさき勢田へ向ひ候、急ぎ還御なりて、宇治勢田を支へて御覽候へ、さりとも神明も御たすけ候はんずらんと、泣く〳〵申されければ、げにもとおぼしめし、十日四辻殿へ還御なる。都には又よろこびあへり。いざ一たび支へて御覽あるべしとて、美濃の律師やくわんけん三をさきの大將なり。其勢一千餘騎、勢田の橋には山田の次郎、伊藤の左衞門の尉大將軍にて、三たうの大衆をさしそへらる。その勢三千餘騎、供御の瀬には、さきの民部のせうしやう、にうだう能登の守、へい九郎はうぐわん、下總の前司、後藤の判官、さいめんのともがらあひそへ二千餘騎、うかひの瀬には、長瀬の判官代、かはらの判官代一千餘騎、宇治には佐々木の中納言、甲斐の宰相中將、右衞門のすけ、大うちの修理の大夫、伊勢の前司清定、小松の法印、佐々木の山城の守、彌太郎判官、西面のともがら、二萬餘騎、牧のしまには、足立のげんさゑもんの尉、いもあらひに、は一條の宰相中將、二位の法印、一千餘騎、淀には坊門の大納言一千騎、廣瀨は阿野の入道五百餘騎、都合御勢三萬三千騎とぞ聞えける。十三日官軍てんでに向ひけり。南都の大衆めされけり。山門の大衆をば宇治にさし向ひ、南都の衆徒をば勢田へ向へらるべきよし、けんしつ既におちやうすると(肝)ころに、遲參いかていのことぞやと、宣旨かさねて下さる。僉議しけるは、治承四年に我が寺平家の爲に滅されしを、賴朝これを悲しみて、寺の敵重衡の卿を渡さるゝのみならず、くやうのごに至るまで、隨分の心ざしを當寺にいたされき、私の事においては評議に及ばず、關東をみつくべき事なれども、これは勅定かたじけなき事なれば、それまでは無し、關東をこえんこと定めて佛意にもそむくべし、たゝいづかたへも參らざらんにしかじとて、勢田へも向はざりけり。しかれども惡僧の申しけるは、このたび我等さし出でざらん事、山門の衆徒の後にいはんこと堪へがたし、日比弓矢たしなむともがらは、せう〳〵かけ出でて戰せばやといひて、但馬の律師、讃岐の阿闍梨以下、平等院の律師等も五百餘人むかひけり。

勢田にて合戰の事

同じき十二日相模守、武藏守十三日後につく。十四日相模守、勢田へよせて見れば、橋板二けんひきて、南都の大衆ども坂東の武士を招きけり。宇都宮の四郎、遠矢に射る。武藏國の住人きたみの太郎、江

戸の八郎、早川の平三郎、押寄せて射しらまかされて退きにけり。村山の太郎、ませの左近、よしみの十郎、その子小次郎、わたりの右近、同じき又太郎兵衛、横田の小次郎も、敵隙もなく射ければ退きにけり。中にも熊谷、久米、吉見、武士五人、橋桁をわたりて寄せたりけり。奈良法師二じうの掻楯にひきのく。大將山田の次郎、使をたて、如何に大衆むげに小勢に追はるゝぞ、鬼神とこそ頼みつるにとぞ笑はれける。大衆いひけるは、逃ぐるにあらず、敵を深くひきいれて、一人も洩さじとするぞといひもあへず、鳥の枝をかけるやうに、廿三人きつてまはる。熊谷たけく思へども、薙刀にあひしらひ兼ね、討手にいる坂東方討すなと喚けども、橋桁は狹し、寄る者ぞなかりける。熊谷播摩の律師とくんで、首をとらんとする所に、播摩が小法師にききちん、熊谷が首をとる。熊谷を始として七人目前にて討たれにけり。よしみの十郎、久米ばかりは遁れてけり。吉見が二十四になるを、肩にかけて歸りけるを、敵射るをかなはじとや思ひけん、子を河に投入れて、つゞいて飛入りて河底にて物具ぬぎ、大將の前にあかはだかにてぞ出きたる。久米の右近、射すくめられて立つたるを見て、平井の三郎、ながはしの四郎、矢表をふせぎ、久米をたすけけり。宇都宮の四郎二日路さがりたるが、勢まちつけて三千餘騎になりにけり。二千餘騎をば父につけて、一千餘騎あひぐして行きけるが、敵に扇にて招かれて、腹を立ちて僅に五六十騎、瀬田の橋へ出來つて、散々に射る。京方よりも雨の降る如くに射けり。一千餘騎遲ればせに着きにけり。熊谷の小次郎左衛門直家は、頼みたる弟射られて、死なんとぞ振舞ひける。馬を射させじとて、矢の及ばぬ所にひきのけけり。信濃の國の住人福地の十郎と書付したる矢を三町餘射越して、山田の次郎が射たる所へ射渡す。三をが崎かためたる、美濃の律師が手の者ども、船にのりて河中よりこれを射る。其中に法師二人、宇都宮に射られて引退く。これを見て相模守平六兵衛を使として、軍は必ず今日に限るまじ、矢種なつくさせ給ひそと仰せられければ、其後は軍もなかりけり。この一兩日は、もとより降りける雨、十三日日盛より車軸の如し。人馬ぬれしをたれ、雜人はたらかず。

宇治橋にて合戰の事

同き十三日、武藏の守宇治に寄せけるが、日暮れければ、田原に陣を取る。酉の刻に、駿河の守、淀へ打わかるところにて、駿河の次郎は、義村に打具せよかしと思ふといひければ、鎌倉より武藏の守殿につき申しては、たゞ今御供仕り候ひなば、親子の中とは申しながら、無下に心なきやうにおぼえ候、三郎光村つき奉り候へば、心安くは思ひ奉り候といひければ、駿河の守うちうなづいて。さもある事なりとぞ申しける。泰村は二百餘騎にて足利につき、山より父に打別れ、宇治の軍のさきを駈けんとや思ひけん、尾張河にて、足利軍よくしたりければ、泰村心地あしく思ひけるを、足利殿も心得て、泰村に打連れ〳〵あゆませけり。泰村が郎等に、佐野太郎、小河太郎、長瀬三郎、十四

五騎打立つて、雨の降り候ふに、宇治に御宿とりて、いれ奉らんとて行く。泰村心得て、若黨共先に立ち候ふが覺束なく候ふとて、武藏の守殿へ使者を立てゝ馳行く。義氏もやがて參るとて打立ちけり。泰村路に逢ふ人に、宇治に軍や始ると問ひければ、十五六騎はしに馳せつきて、只今軍にて候ふといひければ、さればこそとて馳せて行く。先立ちたる若黨共馬より下り、駿河の次郎平の泰村、宇治の先陣也と名のつて、戰ひける所に、泰村馳せ寄りて戰ふ。郎黨共力ついていよ〳〵戰ひけり。足利武藏の前司運馳して、宇治の手の一番也と名乘りて、泰村が旗の手同じ頭に打立てゝ戰ふ。京方橋の板二枚ひきて、山門大衆三千餘人、十重二十重に群集して、橋の上にも下にも、兵船三百餘艘波をうがつて、三方よりいる間、堪へつべうぞなかりける。駿河の次郎馬より下りたつて三方を射る。小河の左衞門といふ郎黨、大將手をくだき戰ふ事や候ふと制しけるが、泰村が矢に敵のさわぐを見て、さらば此所射給へ、あそこあそばせといひけり。熊野法師小松の法印、五十餘騎にて來りけるが、射ちらされて退く。坂東方多く討たれ手負ひければ、足利も駿河の次郎もひき退く。平等院に籠りけれども、敵いさゝか悦びて、かへつて河をも渡りぬべく見えたり。義氏武藏の守の許へ使者を立てゝ、大手に待ちうけて、明日軍仕らんと存じ候ふ所に、駿河の次郎が若黨あまた討たせ、手負數多く候ふ、平等院にこもりて候ふが、無勢と見て寄せられぬべく覺え候ふ、勢をさしそへられべき由申されければ、武藏の守おほきに驚きて、明日のあひづを違へ、この軍を仕りそんじぬるにこそ、今夜

前よりわたされ、背後より奈良法師、吉野十津川の者共、夜討にかけんとおぼゆるなり、平兵衞今夜宇治へはせ寄せ、平等院を固むべきよし觸れられけれども、雨は降る、案内は知らず、いかゞ向ふべき、明日こそ供御の瀨に參り候はめと、口々に申して一騎も進まず。佐々木の四郎左衞門信綱ばかりぞ、向ひ候はんと申しける。平等院には、かたきを棄てゝ引退くに及ばずとて、義氏泰村こらへたり。武藏の守兵どもを催し、かねて敵をこの方へわたらせて、この人どもを討たせては、軍に勝ても詮なし、泰時こゝなりとて馳けいで給ふを見て、一騎もとゞまらず、十八萬餘騎同時にうつたち馳せゆくに、雨車軸ばかりなり。兵ども眼を見開かず、弓をとる手もかゞまりけり。天の責を破るにこそ、十善帝王に弓をひくにやと、心細くぞなりにける。平等院の方より、雷電しきりにして、身の毛よ立つばかりなり。大將軍泰時ばかりぞ、すこしも恐るゝ氣色なく、あつばれ大將やと見えし。平等院に駈入りて、覺束なきあひだ來りたりと宣ひければ、足利駿河の次郎手を合せてぞ悦びける。京方に無勢と見えしかば、はたの新兵衞入道馬もなし。下人もなく、てづから旗さして、大將の御前に、山田の次郎進み出でて、兵ども少々むかへ渡し、かろざしある者ども、などか味方につかざるべきと申す。それは然るべしとて下知すれども、維義、光貞、ひろつ、高しげなど、兵衞の入道を賴みて、軍すべきにあらずとて頷掌せず。同き十四日卯の一點に、足利武藏の前司義氏、駿河の次郎泰村と名乘つて、また橋詰に寄せて引退く。關の右衞門入

道、若狹の兵衛の四郎、たう但馬の四郎、ふせの中務、相馬の五郎、梶の權次郎、鹽屋の民部、同じき左衛門、新開の兵衛、中江の四郎、押寄せて射伏せらる。その中に波多野の五郎、右手の眼射拔かれて、矢を立てながら、大將の御前にぞ參りたる。杭瀨河の額の疵だにも、神妙なるに、誠にあり難し。鎌倉の權五郎再誕かと褒め給ひて、軍功は泰時證人なれば、疑ひなしとぞの給ひける。高橋の大九郎、宮寺の三郎、こみたの左近、末名の右馬の助、高井の小五郎、大高の小五郎、かけ出で、面々にておうて歸りけり。鹽屋の左近家友と名乘つて出づる所に、山法師共散々に射る。左近足を橋桁に射つけられて立ちたり。あな口惜しとて、子の六郎矢面に戰ふまに、矢を拔かんとするに拔けず。太刀にて矢の立ちたる足を、二つに切り割りて、引拔き、肩に引きかけて退きにけるを、人々感じける。成田の兵衛これもておうて引退く。山の僧覺心、圓音、橋の上にて、薙刀振廻してぞ、振舞ける。あれ射よと罵りけり。圓音足を橋に射つけられて、拔けざりければ、薙刀にて足首よりふつと打ち切りて、彌鳥の如くにかけりて狂ひけり。武藏守、安東の兵衛忠家を使として、橋の上の軍やめられ候へ、かやうならば、日數をおくる共、勝負ある可からずと、仰せられければ、罷向うて、大將の仰なりと叫べども、雨は降る、河音打物の音、一方ならざりければ、聞きも入れず、安東も亂れ入りてぞ戰ひける。武藏守見給ひて、結句安東も戰するこさむなれとぞ笑ひける。平六兵衛と言ふ者を、重ねて使に立てられて、和君も二の振舞すなと言はれて、手をたゝいて制すれ共、耳に聞き入るゝ者なし。いよ〳〵亂れあひて戰ふ。平六兵衛力及ばずして歸りけり。びとうのさこんの將監景綱、鎧をば脫ぎおきて、小具足ばかりにて、軍をば誰をまもりてし給ふぞ、橋のいくさは、御いましめなり、此後いくさせん人は、大將の御命背かるゝ上は、敵なり、かう申すは、びとうの景綱なりと申して歸りければ、其後しづまりけり。

信綱兼吉宇治河を渡す事

武藏守、陸奥の國の住人芝田の橘六兼吉を召して、戰は止めつ、河を渡さんと思ふぞと、仰せられければ、兼吉畏りて、うけたまはり、先瀨踏仕りて見候はんとて、河を見れば、夜の雨に、昨日の水より三尺五寸增したり。總じて常よりも、一丈三尺ぞ增りける。兼吉如何思ひけん、檢見をたまはりて、瀨踏を差遣さる。兼吉則ち時定を伴ひ、刀をくはへて渡りけるが、安き處も大事顏に渡りける。槇の島に上りて、あなたを見れば、やすげなく渡るに及ばず、歸りまゐりて、河を御渡あるべき事、相違有る可からずとぞ申しける。武藏の守よろこび給ひて、打ち立ち給ふ。佐々木の四郎左衛門思ひけるは、此芝田がそゝめき申すこそ怪しけれ、此河の先陣せんとする、ござめれ、此河をば代々我家に渡したるを、今度人に渡されんこそ口惜しけれ、忠綱是を知りながら、生きても何かせんと、兼吉打ち出でければ、佐々木馬に打乘りて、芝田が馬に、我馬の頭擦る程、歩ばせて行く。安東

の兵衛尉忠家も、心得打ちならべ、佐々木に連れて打ち出づる。四郎左衛門信綱、芝田に此處は瀬かとぞ問ひける。橘六打笑ひて、御邊こそ、近江の人にておはすれば、河の案内をば知り給はめと言ひければ、信綱ことわりなり、幼少より、坂東に在つて、此河案内知らずと申せば、其後兼吉音もせず、こゝこそとて河の中へ打入れ、水浪高くして、兼吉が馬ためらふ所に、佐々木は二位殿より賜りたる、坂東一の名馬に、鞭もくだけよと打ちて、近江の國の住人、佐々木の四郎左衛門源の信綱、十九萬騎が一番かけて、此河に命を捨てゝ名を後の世にとむるとぞ、喚きて打出す。兼吉が馬も、是に連れて游がせけり。是を見て、安東の兵衛は、打入れけり。兼吉が馬、河中より三段ばかりぞ下りける。信綱向へするゝと渡して、うちあげてぞ名乗りける。兼吉幾程なくうち上りてなのる。佐々木が嫡子太郎重綱、十五になるは、裸にて父が馬の前に立ちて、瀬踏しけるが、敵向より雨の如くに射る間、裸にて叶はずして、とりてかへりけり。

關東の大勢水に溺るゝ事

二番に打入るゝ輩は、佐野の與一、中山の五郎、みその次郎しけつき、臼井の太郎、横溝の五郎祐重、秋庭三郎、白井の太郎、多胡のそうない、七騎打上る。三番に、小笠原の四郎、宇都宮の四郎、佐々木の衛門太郎、河野の九郎、玉の井の四郎、四宮の右馬丞、長江の與一、大山の次郎、勅使河原の次郎、是もさゝいなくうちあぐる。安東の兵衛、渡瀬に臨んで見けるが、身方は多く渡しけり。下頭にて、わたり瀬もとほし。三段ばかりにて、すこしせばみにさしのぞき、爰の狹み渡るならば、直に手よかりなんと、三十騎ばかり打入れけるが、一目も見えず失せにけり。河の狹を見て、安東が渡しければ、先陣の失するをも知らず、大勢打ち入れけり。阿保の刑部丞さねみつ、鹽屋の民部家綱、今年八十四、惜しからざる命かなと入道、さしまの四郎、小野寺中務、若狹兵衛の入道、是も又とも見えず。此中にさしまの四郎馬も強し、死ぬまじかりけるを、帶刀の關入道、弓手の袖に取附くと見えしが、二人ながら見えず。四番に、弓手の左衛門次郎、太山の彌藤太、秋田城の四郎、周防の刑部の四郎、山内の彌五郎、高田の小次郎、成田の兵衛、神崎の次郎、科河次郎、相馬の三郎、子供三人、志村の彌三郎、豊島の彌太郎、物射の次郎、しだの小次郎、佐野次郎、同き小次郎、澁谷の平三郎以下二千餘騎、聲々に名乗つて渡しけるが、一騎も見えず失せにけり。五番てにすがの小太郎、かすがの太郎、長江の四郎、飯田の左近將監、鹽屋の四郎、土肥の三郎、しまの平三郎、同じき四郎太郎、同じき五郎、平のさこの次郎、都合五百餘騎、打ち入れて、二目共見えず。六番に覺島の小次郎、對島の左衛門次郎、大かはとの小次郎、金子の與一、同じき小太郎、讃岐の左衛門の太郎、ゆはらの六郎、いひだかの六郎、齋藤の左近、今泉の七郎、岡部の六郎、糟谷の太郎、飯島の三郎、肥前坊、三百餘騎も沈みけり。七番に荻野の太郎、を

だの橘六、宮の七郎、岡部の彌藤太、城介三郎、飯田の左近、飯沼の三郎、櫻井の次郎、猿澤の次郎、春日の次郎、子二人、石川の三郎、都合八百餘騎渡しけるも、又も見えず失せにけり。武藏守是を見給ひて、泰時が運すでに盡きてけり、帝王に弓を引きたてまつる故なり、此上は生きても有るべからずと、手綱掻繰り、馳せ入らんとし給ふ處に、信濃の國の住人、かすがの刑部の三郎さだゆきと言ふ者、子供二人は先に流れて死ぬ、我身も失す可かりけるを、弓をさし出したるに、取付きて助る。二人の事を思ひて、泣き居たりけるに、武藏守殿、すでに河に打入れ給ふとみて、あな心憂やとて、走りより、衝に取りつきて、こは如何なる御事ぞ、身方の軍兵、今河に沈むといへども、三千騎の內外なり、十が一だにも失せざるに、大將命を捨て給ふことや候ふべき、人こそ多く候へども、大夫殿頼むと候ひつるものを、若し此大勢を置きながら、この大惡所に打ち入れて、見す〳〵死なせ給はん事、誠に口惜しかりぬべし、幾千萬の勢其、君死なせ給はゞ、皆京方につき候ひなん、是甚つて不覺なり、さこそ心細き人候ふらめども、君の御旗をまぼりてこそ候ふらめと、馬の口に取付くを見て、武藏守者共一二千騎、前に馳せふさがりてひかへたる。義時この事のちに聞き給ひて、かすがの刑部、子供二人失ふのみならず、泰時が命をつぎたるものなれば、今度の第一の奉公の者なりとて、上野國七千餘町賜りけり。武藏守泰時の子息小太郎時氏、父渡さんとするが、人にとめらるゝと見て、河に打入れんとするを、安房國の住人、佐久間の太郎家盛なりと名乘りて、馬の衝にむずと取りつき、大

力の者なれば、馬も主も動かず。大夫殿人こそ多く候へども、見放し申すなと仰せ給ひしと申しければ、太郎殿腹を立て、何條去ること有るべき、親のひかへ給ふだに口惜しきに、二人此河を渡さずしては、坂東の者誰をとて渡すべきぞ、惡い奴かなとて、鞭を以て佐久間が面、取りつきたる腕を打ち給ひける。家盛さかしき殿の氣色振舞かな、ゆるすまじとて、さしつめたり。いよ〳〵腹を立ち、打ち給へば、家盛わ殿の事を思ひたてまつりてこそすれ、さらば如何成果て給はむ共、心よとて、馬の尻を礒と打つ。何かはたまるべき、河に打入れけり。佐久間腕は打たれて、痛けれども、見捨つるに及ばず、つゝくぞよと打入れ、進み渡しける。まんねんの九郎秀幸、同じく參りさふらふとて、打入れけり。相模の國の住人かがはの三郎、生年十六歳と名のりて打入るゝ。武藏守これを見て、太郎討たすな、武藏守の殿原はなきか〳〵と宣へば、一騎も殘らず打入れける。廿萬六千餘騎、聲々に名のりて渡しけり。一騎もしづます向の岸にうちあがる。さる程に駿河の次郎やすむら之を見て、今までさがりけるこそ口をしけれとて、をがはの衝門とりつきてしめしけれ共、渡しけるを、やすとき使者を立てゝ、是にこそ候へ、是へ渡り候へと宣へば、やすむらも一所にひかへけり。足利殿も一ところに御い候へと申されければ、家の子郎等はみな河へ打入れさせて、これも扣へてぞおはしけり。かがはの三郎むかひに早やつきて敵におしならべ、組んで落ちにけり。十六歳のものなれば下になる。かゝはが家人、うへなる敵の首をとる。大川の次郎あらてなりかけよと、武藏の太郎にいはれて、まさきか

けて戰ひけり。あまり亂れあひて、敵も味方も見えずといひければ、みかたは河を渡り、楯ぬれたるをしるしにせよと、むさしの太郎に下知せられて、おちあひ〳〵組んだりけり。

宇治の敗るゝ事

京方の大將佐々木の中納言ありまさの卿、甲斐の宰相中將をはじめとして、一騎も控へず落ちにける。卿相には右衞門のすけ、武士には佐々木太郎衞門尉、筑後の六郎左衞門ともなほ、かすやの四郎さゑもん、萩野の次郎、同じき彌次郎さゑもん計なり。おさしの太郎中將のかぶとのはちを射はらひて、後のくひに射たてたり。うすでなれば遁げのぶ。又京方うゑもんのすけともよし、させる弓矢とりて、ともいへに忠をいたすべき身にもあらぬが、のぞみ申してむかひけり。大勢にむかひて、ともとしと名のりてかけられば、とりこめて討つてけり。しいだしたる事はなけれとも、申しゝ言葉ひるがへさずして、討死しけるこそ哀なれ。次に筑後の六郎左衞門ありなか、敵の中をかけわけて落ちゆく。次に萩野の次郎おち行きけるを、しぶえのへい三郎おし並べて組んで落つ。をぎのが首をとる。次に彌次郎さゑもん落ちゆきけるを、陸奥國の住人みやぎのゝ小次郎生年十六歳と名のりて、彌二郎さゑもんと組みけるに、彌二郎さゑもんが乘りかへ、打つてかゝり、みやぎの今はかうと思ひけるところに、身方三百騎ばかり馳せけるが、いかなるものかやとは知らず、耳の根を射ぬく。そのあひだに宮城野の次郎さゑもんが首をとる。小河の太郎京方より出來たる。よき敵と目をかけ組まんとするに、敵太刀をぬいて討つに、目くれて組んで落ち、起きあがりて見れば、わがみ組んだる敵の首は人とりて無し。山城の太郎さゑもん駈けめぐるを、佐々木四郎さゑもんが手にとりこめて生捕りけり。さるほどに坂東方のつはものども、深草、伏見、をかのや、久我、醍醐、日野、勸修寺、吉田、東山、北山、東寺、四塚にはせちらす。或は一二萬騎、あるひは四五千騎、はたの足をひるがへして、みだれはいる。三くぎやう、上、きたのまんどころ、女房、局、うんかく、青侍、くわんぢよ、ゆうぢよ、聲を立てゝをめき叫び立ちまよふ。天地開闢よりわうじやう洛中の、かゝる事いかでかあるべし。かの壽永の昔、平家の都を落ちしも、是程はなかりけり。名をも惜しみ家をも思ふ、重代のもの共は、こまちの冠者原、こかしこの大將にさしつかはされて、あるひは討たれ或は溺めらる。そのほかは青侍、むかひやぶれ、いんぢなどと言ふものなり。いつむまにも乘り、戰したるすべの知らぬ者共が、或は勅命にかりもよほされて、或は見物のためにいできたるやから共、坂東のつはものに追ひせめられたるありさま、たゞ鷹のまへの小鳥の如し、うち射殺し首をとる。そくばくの坂東のつはもの、首ひとつ宛、取らぬものこそなかりけれ。大將軍武藏の守、駿河の次郎、足利殿は、船にておしわたる。信濃の國の住人うちの〳〵次郎、宇治はしのきたの在家に火をかけけり。その煙天に映じておびただし。淀、芋洗、廣瀬、その外のわたり〳〵に之を見て、一いくさもせず皆おちにけり。駿河の前司、

森の入道、野山の左衛門は、或は船に乘り、或は筏を組みて押渡る。淀一くちとうの要害を破り、鳥羽のたかばたけに陣をとる。宇治橋の河端にきりかけたる首七百三十なり。これを實檢して、武藏守ちやくし時氏有時など親しき人々、わづかに五十餘騎にて、深草河原といふところに陣をとる。夜に入りて武藏守これをこそと、駿河守のもとへ使を立てゝ申されければ、泰村二三人うち具して、武藏守の陣に加はりけり。勢田、宇治、みをがさき落ちぬと聞えしかば、一人もいくさするものなく、皆おちうせにける。南都北嶺の大衆も落行きけり。たうにちの大衆たかごゑに念佛まをして、哀なりける王法かなと、高らかに口ずさび、泣く〳〵本山に歸りけり。

秀康胤義等都へ歸り入る事

京方、能登のかみ、へい九郎判官、下總の前司、少將入道、しよ〳〵の戰にうちまけて、都にかへりいる。山田の次郎も同じく京へ入る。同じき十五日卯のこく、四辻殿に參りて秀康、胤義、盛綱、重忠こそ、最後の御とも仕り候はんとて、參りて候へと申しければ、一院いかになるべき身とも思召さぬところへ、四人參りたれば、いよ〳〵騷がせ給ひて、われは武士むかはゞ手を合せて、命ばかりをば乞はんと思召せども、汝等參りこもりて、防ぎ戰ふならば、なか〳〵あしかりなん、いづ方へも落行き候へ、さしものほうこう空しくなしつるこそ不便なれども、今は力およばず、御所のきんりんにあるべからずと仰せ出されければ、各の心の中いふもおろかなり。山田の次郎ばかりこそ、されば何せんに參りけん、かなはぬもの故、一ぞくも引きつるこそ口惜しけれとて、大音聲をあげて門をたゝき、日本第一のふかく人を知らずして、浮沈みつる事の口をしさよと、罵しりて通るぞかひもなき。おのおの言ひけるは、二なし、大勢に馳合せて戰ひて、もし死なれぬものならば、自害するほかは、別の儀なしと申しければ、おの〳〵此儀に同ずとて、又とてかへす。四人の勢三十騎ばかりなり。へい九郎判官申しけるは、おなじき宇治の追手に向ふべきを、宇治勢田、大勢にへだてられては、雜兵にこそうちあはんずれ、これより西とうじは好き城郭なり、こゝにたてこもり候はゞや、駿河の守は淀の手なれば、とうじを通らんずるに、よき軍して死なんと思ふぞといひければ、又此儀しかるべしとて、とうじに馳付き、院にはいれず。そう門のそと、くぎぬきの中に陣をとる。たかばたけに控へたる三浦の介、はやはらの次郎ひやうゑの尉、甥の又太郎、天野のさゑもん、さかゐのへい次郎、ひやうゑの尉、こばたの太郎、同じき彌へい三など聞ゆる者共、三百餘騎をめいてかく。其なかにはやはらの次郎兵衛、天野左衛門、へい九郎判官と見て、かんせんしんちつなりければ、控へてかゝらざりける。弓矢とる者も禮儀はかくぞあるべきに、はやはらの太郎しさいをば知らず、父控へたるを心地あしくや思ひけん、名のりて押よせたりけり。胤義いひけるは、さこそ公のいくさと言ひながら、太郎ぶれいなるものかな、かげよし洩すなとて、高井を始として中にとりこめられて、馬手の田中へかけ

おとされてけり。馳せあがらんとするところに、弓手馬手より攻めければ、馬より落ち、徒になりてぞたゝかひける。かげよしが甥へい兵衛、嫡子兵衛の太郎、こみたきやうだい命をすてゝ、かげよしを後におしなし戰ひけり。かなはずして胤義ひきかへす。これを始として關東の勢、一めんにをめいてかく。つぐりみちを我先にとおしよせければ、秀康もりつなは如何思ひけん、矢一もいず北をさして落ちゆく。山田の次郎ばかりぞ、さゝやせう〳〵射て、それも跡目につきて落ちゆきけり。今はへい九郎判官ばかりなり。胤義はとうじを墓所と定めければ、自餘の者それは落ちも失せよ、一そくも退くまじとて、いれかへ戰ひけり。されども大勢しこみければ、心はたけく思へども、なまじひに一きれにも死をはらず、東をさして落ちゆきけり。こみたのへい二祐親、すくやか者なり、胤義に目をかけて、押並べて組まんとしけるが、祐親かなはじとや思ひけん、胤義がめのと子うへはたけ馳せ通りけるに、組んで落ちけり。すけちかゝ乘りかへ落ちあひて首をとる。胤義これを知らずして、彌太郎兵衛たゝ三四騎になりて、東山をさして落ち行く。次郎兵衛たかゐの兵衛の太郎、これも東へ落ちけるが、六波羅の蓮華王院に馳せいり、小たけの中にて二人念佛となへて、さしちがへて失せにけり。胤義は心ざしつる東山に馳せいりて、物具ぬきすてゝ休みけり。

院宣を泰時に下さるゝ事

十五日巳の刻、やすとき雲霞の如くの勢にて、かみかはちより打立ち、四辻の院の御所へ寄すと聞えけり。一院東西を失はせ給ふ。月卿雲客前後を忘れて、あわて〳〵、せめての御事に、院宣を泰時に遣はされけり。その狀にいはく、

秀康朝臣胤義以下徒黨可令追討之由宣下既畢。又停止先宣旨解部輩可還住之由同被宣下。既凡天下事於于今者雖不及御口入御存知趣畢不仰知畢。就凶徒浮言既及此沙汰後悔不能左右。但天災之時至歟抑亦惡魔結構歟。誠勿論之次第也。於自今以後先携武勇輩者不可召使。又不稟家好武藝者永被停止也。如此故自然及御大事由有御覺知者也。悔前非被仰也。御氣色如此。仍執達如件。

六月十五日　　權中納言定高

武藏守殿

かくこそ遊されけれ。院宣をめしつぎに持せて、泰時に遣はされたり。言葉を以てはおの〳〵まをすべき事あらば、それより申さるべし、御所中にやがて罷向はん事、人民の歎き、こうひさい女の畏れ畏る〻事の、あまりに不便に思召さるゝなり、たゞまげてそれに候へと仰せられければ、泰時馬より下り、院の御つかひに對面して、院宣をひらいて見て、高き處にまきをさめて、畏りて承り候ひをはんぬ、親にて候ふ義時かへり承りて、何とか申し候はんずらん、まづ泰時にあて〳〵、院宣拜領候條かたじけなく存じ候、此うへにさうなく參り候はんことも、その恐候へば、ごしんを知らず罷止まり

候ふとて、叔父相模守時房に申し合されければ、さうに及ばず、六條の北南に陣を取りて居給ひ、大勢みな六波羅にうちいれけり。

胤義自害の事

胤義は東山にて自害せんと思ひけるが、便宜悪しかりければ、太秦に子供を隠置きける所へ、落行きけるが、さきには又大勢いれ亂るゝと申しければ、是に隠れ居て日を暮し、太秦に向はんと、西山このしまの社の内に隠れゐて、車をば傍に立てゝ、女車のよしにて、さうの車をぞ乗せたりける。胤義が年來の郎黨に、とうの四郎入道といふ者、高野に籠りたるが、戰をも見主の行方をも見んと、都へ上りけるが、此處を通るを森の中より見て、出逢ひたれば、とうの四郎入道いかにともいはず涙を流す。さても何としてかは、かくて渡らせ給ふぞと申しければ、西山に幼者共のあるを、一め見て自害せんと思ひて行くに、敵既に亂入ると聞く間、こゝにて日を暮し夜に紛れて行かんとて休むなりと言ひければ、入道敵さきに籠り、御あとに又みちゝたり、いつのひまに公達のもとへは着かせ給ふべき、平判官は當時の戰は能くしたれども、妻子の事を心にかけて、女車にて落行くを、車より引出されて、討れたると言はれさせ給はんこそ口惜しく候へ、昔より三浦の一門にきずやは候、入道ちしき申すべし、此やしろにて御自害候へかしと申しければ、胤義いしくも申したるものかなとて、さらば太郎兵衛まづ自害せよ、心やすく見おかんと言ひければ、嫡子太郎兵衛、腹十文字にかきゝりて死ぬ。たねよし追ひつかんとて、かたみどもを送り、とうの四郎入道は、父子のくびとりて、駿河の守が元へ行きて、軍功の賞にほこり給はんことこそ押しはかられ候へ、たびゝの合戰に、三浦の一家をほろぼし給ふをこそ、人くちびるをかへし候ひしに、たねよし一家をさへ亡し給ひ候へば、いよゝ人の申さんところこそ却つていたはしく候へと、たいま思ひ合せ給はんずらんと申せとて腹かきゝり首をば取りて、もりにひかけ骸をば焼きにけり。其後駿河守のところへ行きて、最後のありさま申しければ、よしむら兄弟ならずば、誰かは首をおくるべき、よしむらなればとて、世のだうりを知らぬにはなけれども、弓矢をとるならひ、親子兄弟たがひに敵となる事、今に始めぬ事なりとて、おとゝゝをひのくび、さうの袖にかゝへて泣き居たり。京より尊き僧請じ奉り、佛事とり行ひ、うづまさの めこ呼びよせて、いたはり慰めけり。

京方の兵誅戮の事

山田の次郎重忠は西山に入りて、さはのはたに本尊をかけ、念佛しけるところに、天野の左衛門おしよせければ、自害すべき隙なかりけるに、嫡子伊豆守しげつき支へつゝ、此間に御自害さふらへと言ひければ、山田は自害して死にけり。伊豆守は生どられぬ。秀康、同じき秀澄、生捕られて斬られぬ。下

總の前司もりつなも生捕られて、かすやきた山にて自害す。天野の四郎左衛門くびをのべて參りたりけれども斬られにけり。山城守ごとうの判官生捕られて斬らる。ごとうをば子息左衛門もとつな申受けて斬りてけり。他人に斬らせて首を申受けて孝養せよかし、これや保元に爲義を義朝きられたりしに恐れず、それはじやう古の事なり、先規なかりき、それをこそ末代までのそしりなるに、二の舞したるもとつなかなと、萬人つまはじきをぞしたりける。近江のにしごりの判官代、六波羅武藏守の前にて、さのゝ小次郎入道兄弟うけたまはる。侍にて手とり足とりして斬られぬ。六條河原にて謀叛のともがらの首を斬るに、劒をさすに暇あらず。駿河の大夫の判官これのぶ、行方もしらず落ちにけり。二位の法印そんちやうは、吉野十津川に逃げこもりて、たうじはからめとられず。清水寺の法師きやうの月その法師弟子常陸房美濃の房三人からめとらる。既に斬らんとするところに、暫く助けさせ給へ、一首の愚詠を仕り候はゝやと申しければ、これ程の隙は給はるべしとてさしおくに、

勅なれば命はすてつ武士の八十氏河の瀬には立たねど

此よし武藏守に、早馬をもて申したりければ、かんくわいの餘、ゆるすべしとて赦されけり。人は能はあるべきものかな、末代といひながら和歌の道もたのみあり、泰時やさしくも赦されたりと、上下かんじけり。熊野法師、田邊の別當も斬られにけり。

京都飛脚の人々評定の事

武藏守關東へ早馬を立つ。合戰の次第討死手負の交名ちうもん、並びに召し置くところのせうみやう、斬らるゝ武士の交名、此ほか院々宮々の御事、月卿雲客のざいじやう、京都の政あらため山門なんどの次第は、泰時が計らひ難し、きやうそくに承りて、ちしやうして歸參すべきよし申しけり。早馬關東に着きたりければ、ごんだいぶ殿二位殿、其外大小名めん〳〵に走出で、戰はいかに御よろこびか何とかあると、口々に問はれけり。いくさは御勝候、三浦の平九郎判官、山田の次郎、能登守ひでやす以下みな斬られぬ、御文候ふとて大まきものさしあげたり。大膳の大夫入道とりあげて、一どうにあつとぞ申されける。中にも二位殿あまりの事に涙を流し、まづ若宮の大菩薩を伏拜み參らせて、やがて若宮へ參らせ給りけり。それより三代將軍の御墓に參らせ給ひて、御喜び申しありければ、大小名はせ集つて、御よろこびども申しあへる。其中にも子うたれ、親うたれぬと聞く人、よろこびにつけ歎きにつけて、關東はさざめきのゝしりあへりけり。評定あるべしとて、大名共みな參りけり。一ばんのくちは大膳の大夫入道とりたりければ、申しけるは、院々宮々をば遠國へ流し奉るべし、月卿雲客は坂東へ召下すべしと披露して、路にて皆うしなはるべし、京都の政はともゑの大將殿御沙汰たるべし、攝籙をば近衞殿へ參せらるべしと存じ候ふと意見を致す。義時此儀一分も相違なし、此儀に同ずる

と仰せければ、大名共しかるべしとぞ申しける。やがて此御返事をこそ書き一通あひ添へて、翌日京へ早馬を立てられけり。さるほどにともゑの大將殿に、六波羅より此よし申されたりければ、われ當將軍のぐわいそにあらず、義時が親むつぶにあらざれども、しやうろをまぼりて、君をいさめ申すによて、うきめを見し故なり、これも夢なり、然しながら山王に申したりし故なりとて、大將公經、日吉をぞあふぎ奉らる。

六百七十

公卿罪科の事

さるほどに、さんぬる廿四日、武藏守しづかに院參して、謀叛をすゝめ申され候ひつらん、張本の雲客を召し給はらんと申されければ、院いそぎ交名をしるし出させましく〳〵けるぞおさましき。御ちうもんにまかせて、皆々六波羅へ搦出され給ふ人々には、坊門の大納言忠信、あづかり千葉介胤綱、あせちの大納言光親、あづかり武田の五郎のぶみつ、中御門の中納言むねゆき、あづかり小山の左衛門尉ともなが、佐々木の中納言むねゆき、あづかり小笠原の次郎ながきよ、甲斐の宰相中將のりもち、あづかり式部丞ともとき、一條の次郎宰相中將ゆきやす、あづかり武田の五郎のぶよし、あづかり遠山の左衛門尉かげとも、各〳〵いきくきやうをちして、坂東武將の家に渡りたまふ。そも〳〵八條の尼御臺所と申せしは、故鎌倉の右大臣の後室にておはしき。坊門の大納言忠信の卿の御妹なりしかば、此謀叛の衆にかゝりいれられて、關東へ下り給ふを知りて、かねて鎌倉へ御使を奉り給ふ。われ右大臣におくれて、彼の菩提をとぶらふよりほか他事なし、みつするが討たれし朝より、宇治の落つる夕まで、女の心のうたてさは、昔のよしみ心にかゝる兄弟をも知らず、君のかたむかせ給ふをも忘れて、三代將軍のあとの亡びん事を悲しみて、なむ八幡大菩薩まもらせ給へと、心の中に祈りて候ひし、此事たゞのぶの卿たすけんとて、僞り申し候はゞ、大菩薩の御心も恥かしかるべし、數ならぬ身の祈にこたへて、かゝるべしとは思はねども、心ざしを申すばかりなり、然るに慈悲心にはうちたえ、知らぬ人をも助けあはれむはならひなり、いかに況んやまさしき兄を助けざるべき、罪の深さはさこそ候ふらめども、これ然しながら我にゆるすと思召すべからず、右大臣殿にゆるし奉ると思ひなして、忠信の卿の命を助けさせ給へと、權大夫殿二位殿へ仰せられたりければ、ゆるし奉れとて、御ゆるし文ありけるに、八月一日遠江の國はしもとにてあひたりければ、あづかりの武士千葉介胤つな、此二位殿義時のでうを見て、ゆるしのぼせ奉る。按察の大納言光親の卿これを聞き給ひて、人して御よろこび申されたりければ、たゞのぶの卿これも夢やらんとこそ覺え候へと、返事し給ふもことわりなり。さる程に八月二日越後の國へ流され給ひぬ。同じき十日、中御門入道前の中納言宗行の卿は、菊川にて、昔南陽縣之菊水汲下流延齡、今東海道菊川宿西岸失命とぞかきつけ給ふ。同じき十三日駿河の國浮島が原にて、

けふすぐる身はうきしまが原にてぞ露の命をきりさだめぬる

同じき十四日のたつの刻に、あひざはと言ふところにて、つひに斬られ給ひぬ。佐々木の中納言ありまさの卿は、小笠原具し奉りて、甲斐の國いなつみの庄なひこせ村といふ所にて斬らんとす。二位殿に申したる旨あり、その御返事今日にあらんずれば、今二時の命をのべ給へと宣ひけるを、たゞ斬りてけり。一時ばかりありて、有雅の卿斬り奉るなと、二位殿の御返事あり。宿業力なしとはいひながら、一時の間をまたすして、斬られけるこそあはれなれ。小笠原も、今二時の命と手を合せて乞ひ給ふを、斬りたるこそ情なく覺ゆれ。三寶のしるべも知り難く、人望にもうたてしとぞ見えし。一條の宰相中將信能は、美濃の國遠山にて斬り奉る。同じき十八日、甲斐の宰相中將範茂は、足柄山の關の東にてじすいせらる。六人の公卿のあとの歎、いふも中々愚なり。

一院隱岐の國へ流され給ふ事

七月六日、泰時嫡子義氏、時房の嫡子時盛、數千騎の軍兵を相具し、院の御所四辻殿に參て、鳥羽殿に移し奉るべき由申さる。御所中の男女をめき叫び、たふれまよふ女房達を、さきさまに出し奉り給ふ。時氏これを見て、御車の內も怪しく候ふとて、弓の筈をもて、簾を掻上げ奉る。御用意は尤さる事なれども、あまりに情なくぞ覺えし。御供に大宮の中納言實氏、宰相中將信成、左衞門の尉義もち、以上三人ぞ參りける。武士前後を圍み、今日を限りの禁闕の御名殘、思ひやり奉るもかたじけなし。同じき八日御出家あるべき由、六波羅より申上ぐるに、御髮おろさせ給ふ。法の御いみなは良然とぞ申しける。太上天皇の玉體、たちまちに變じて、無下の新發意とならせ給ふ。信實の朝臣を召して、御形を似繪にかゝせ給ひて、七條の女院へ參らせ給ひけり。女院御覽じもあへず、御涙を流させ給ひけり。修明門院ひとつ御車にて、鳥羽殿へ御幸なる。御車を大床のきはにさし寄せられたり。一院簾ひかさせ給ひて、御顏ばかり差出させ給ひて、御手をもて歸らせ給へとあふがせ給ふ。御車の內の御歎、申すもなか〳〵愚なり。同き十三日、六波羅より時氏時盛參りて、隱岐の國へ移し奉るべき由を申ければ、御出家の上は、流罪までもあらじと思召しけるに、遠き島と聞し召されて、東西を失はせ給ふぞ悉なき。攝錄は近衞殿にて渡せ給ひけり。君臨關見となりて留めさせ給へと、遊ばされける御書の奥に、

墨染の袖に情をかけよかし涙ばかりはすてもこそすれ

と遊ばされたりければ、攝政の御いほうも、君の君にて渡らせ給ふ時の、ことなりとて、歎き給ひけり。一院の御供には女房兩三輩、龜菊殿、聖一人、醫師一人、出羽の前司廣房、武藏の權の守清範とぞ聞えし。去る平家の亂るゝ世には、後白河の院鳥羽殿に移らせ給ひしをこそ、世の不思議とは申ならはしゝに、遠き國へ流されさせ給ふ、先代にも越えたる事共なり。水無瀨殿を過ぎさせ給ふとて、せ

めてはこゝに置かればやと、思召さるゝも理なり。御心のすむとしもなけれども、御涙のひまにかく
ぞ思しつゞけゝる。

立ちこめて關とはならで水無瀬河霧なほはれぬ行末の空

播摩の明石の浦につかせ給ふ。此處をば何處ぞと御尋ねありければ、明石の浦と申しければ、おとに
聞く處にこそとて、

都をばやみ〳〵にこそ出しかど今日は明石浦にきにけり

龜菊殿

月影はさこそ明石の浦なれど雲井の秋ぞなほも戀しき

彼の保元の昔、新院の御戰破れて、讃岐の國へ遷され給ひしも、こゝを御通りありけるとこそ聞け、
御身の上とは知らざりしものをと思召す。それは王位を論じ、位を望み給ふ御事なり。これはされば
何事ぞとぞ、思召しける。美作と伯耆の中山を越えさせ給ふに、むかひの峰に細道あり。何處へ通ふ
道にやと問はせ給ふに、古き道にて、今は人も通はずと申しければ、

都人誰踏みそめて通ひけむ向ひの道のなつかしきかな

出雲の國大浦と云ふ處につかせ給ふ。三尾が崎といふ處より、都へ便ありければ、修明門院に御消息
あり。

知るらめや憂目を三尾の濱千鳥しま〳〵絞る袖のけしきを

かくて日數重なれば、八月五日、隱岐の國あま郡へぞつかせ給ふ。これなん御所とて、入れ奉る
を御覽すれば、淺增しげなる笘葺の、菰の天上竹のすのこなり。みづから障子の繪などに、かゝるす
まひ書きたるを御覽せしより外は、いつか御目にもかくべき。只これは生をかへたるよと思召すもか
たじけなし。

我こそは新島守よ隱岐の海の荒き浪風こゝろして吹け

都に、定家、家隆、有家、政經、さしもの歌仙たち、此御歌の有樣を傳へ承りて、只胸は焦れ、泣
き悲しみ給へども、罪に恐れて御返事をも申されず。されども正三位家隆、便宜につけて、恐れ〳〵御
歌の御返事を申されけり。

寢覺してきかぬを聞きて悲きは荒磯浪のあかつきの聲

新院宮々流され給ふ事

同き廿の日、新院佐渡の國へ流され給ふ。御供には、定家の卿の息、冷泉中將爲家、花山の院少將藏
人、甲斐の左兵衞の佐敎經、上北面には頭の左衞門の佐殿、帥の佐殿
次下三人なり。冷泉中將はひとつあゆみの御返をもし給はず。殘る三人ぞ參られける。花山の院

少將は、道より所勞とて歸られけり。兵衞の佐は、重やまふを受けて、越後の國にて留まりけり。安光計ぞ候ひける。九條殿へ御書あり。御形見に文庫を奉る由ありけり。中にも執し思召す人[illegible]抄をも、候ひたりし。九條殿へ參らせられける御書の奥に、

ながらへてたとへば末に歸るともうきはこの世の都なりけり

後の便宜に、九條殿より御返事させ給ふ。

いとへども永らへて經る世の中を憂にはいかで春を待つべき

同き廿四日、六條の宮、但馬の國に遷されさせ給ふ。桂河より御輿に移らせ給ふ。大江山生野の道にかゝらせ給ひて、彼の國へぞ著かせ給ふ。同き廿五日冷泉の宮、備前の國豐岡の庄兒島へ遷されさせ給ふ。鳥羽より御船に召し、此外刑部卿の僧正、阿波の宰相中將信成、右大辨光俊なども流されけり。院々宮々流されさせ給ふ。人々御後に殘り止まりて、旅の御裝いかならんと、思ひやり奉るも愚なり。中にも修明門院の御事も、悲しければ、一院新院西へ流され給ひ、北に遷らせ給ひぬ。御兄宰相中納言範茂の朝臣、死罪に當り給ひぬ。新院の御形見に先帝渡らせ給へども、御なぐさみなきが如し。七條の女院と申は、故高倉の院の御后、一院の御母にてぞまし〳〵ける。今一度法皇を見參らせばやと、仰せられけると聞し召して、法皇、

たらちねの消えやらで待つ露の身を風より先にいかでとはまし

七條の女院御返し、

荻の葉はなか〳〵風の絶えねかし通へばこそは露もしをるれ

うへつ方の御歎きたぐひなし。下にも哀のみ多かりけり。

弘綱子息斬らるゝ事

同き十一日、佐々木の山城の守弘綱が子、御室にありしが、六波羅より尋ね出されて、向ひしに、御室御覽じ送りて、

埋れ木の朽ち果つべきは止まりて若木の花の散るぞ悲しき

泰時見て、ゆうけんの稚子なりければ、助けて參らせよと申されければ、母是を聞きて、七代武藏の守殿ましませ、命あらん程は祈り申すべしと、手を合せて拜みけるに、皆人、我子を助くる樣に覺え候ふと喜びけり。車に乘りて歸る所に、叔父四郎左衞門信綱、急ぎ馳參て、此稚子を御助け候はゞ、さしもの奉公空しくなして、信綱出家し候ふべしとさゝへ申しければ、信綱は今度宇治川の先陣成時の妹婿なり、かた〴〵もつてさし置き難き仁なれば、五條土肥の小路に使追付きて、かゝる仔細ある間、力及ばず、泰時を恨むなとて召しかへしけり。此事を聞きて、信綱を憎まぬ者は無かりけり。柳原にて、生年十一歳にて斬られけり。例なしとぞ申しける。京都にも限らず、鎌倉にも哀なること多かりけり。

胤義子供斬らるゝ事

判官胤義が子供、十一九七五三になる五人ありや。人のうばの許に、養ひ置きたるを、權大夫、小河の十郎を使に立て、皆召されけり。尼も力及ばず。今度世の亂れ、偏に胤義がしわざなり、惜み奉るに及ばずとて、十一になる一人をば隱して、弟九七五三を出しけるこそ不便なれ。小河の十郎、せめて幼稚なるをこそ惜みもしたまはめ、成人の者を止め給ふこと然るべからざる由責めければ、小尼上立出でて、手をすりていはれけるは、宣ふ所は理なり、されども五三の者は、生死を知らざれば、あきれたるがごとし、なまじひに十一まで育て、みめかたちも勝れたり、たゞこの事ゆ守護殿へ申し給へ、五人ながら斬らるゝならば、七十になる尼、なにか命の惜しかるべきといひければ、小河なさけある者にて、許してけり。四人の乳母たふれ伏して、天にあふぎ悲みける。保元のむかし、爲義の幼稚の子供斬られけん事、おもひいだされけり。さてあるまじき事なれば首をかく。

中の院阿波の國へ移り給ふ事

閏十月十日、土御門の中の院、土佐の國へ遷させ給ふ。此院は今度御くみなし、その上賢王にて渡らせ給ひければ、鎌倉よりも、なだめ奉りけるを、われかたじけなくも、法皇を配所へやり奉りて、その子として華洛にあらん事、冥の照覽はゞかりあり、また何の益かあらん、承元四年の恨は深しと雖、人界に生を受くる事は、父母の恩報じ難し、一旦の恨によて。永く不孝の身とならんこと、罪深し、されば同じき遠島へ流されんと、度々關東へ申させ給ひければ、惜み奉りながら、力なく流し奉りけり。內々は皆父を恨み給ひければ、誠の時は、いろはせ給はぬと、父の御罪に、遠國へ下らせ給ふぞ哀なる。廳使萬里の小路の御所へ參りければ、御叔父土御門の大納言、なき〳〵出し奉る。御供には女房四人、少將雅具、平侍從俊平、定通、御車寄せられけり。是は思召し立つ道も、一入哀れなれば、京中の貴賤も、悲しみ奉ること限なし。室より御舟に乘せ奉り、四國へ渡らせ給ふ。八島の浦を御覽じて、安德天皇の御事を、思召し出しけり。讃岐の松山、かすかに見えければ、彼の崇德院の御事も、思召し出しけり。土佐へ御著きありけるを、小國なり、御封米なんぼの由守護並に目代申ければ、阿波の國へ遷されさせ給ふ。山路にかゝらせ給ふ折節、雪降りて、東西見えず、誠に詮方なくて、君も御涙に咽ばせ給ふ。

うき世にはかゝれとてこそ生れけめ理知らぬ我なみだかな

と遊ばす。京にて召し使ける醫師、木に登り枝をおろして、御前に來りければ、君も臣も、御心すこしつかせ給ひて、ばんじやう大切の者なりとぞ仰せける。御輿かき少々働きて、彼國へつかせ給ふ。

浦々に寄するさ浪に言問はんおきの事こそ聞かまほしけれ

19140

抑承久如何なる年號ぞや、玉體悉く西北の風にぼつし、卿相皆東夷の鉾先にあたる。天照太神、正八幡の御計なり。王法此時に傾き、東關、天下を行ふべき由緒にてやありつらん。御謀叛企の始め、御夢に黒き犬、御身をとび越ゆると御覽じけるとぞ承る。院のはてさせ給ひしかども、四條の院の御未絶えたりしかば、後の後嵯峨の院に、御くらぬ參りて、後の院と申す。土御門の院の御子なり。御恨はありながら、配所にむかはせ給ひき。この御心ばせを、神慮もうけしめ給ひけるにや、御末めでたくして、今の世にいたるまで、この院の御末かたじけなし。承久三年の秋にこそ、ものゝあはれをとゞめけれ。

土御門

承久記 終

明治四十四年五月八日印刷
明治四十四年五月十一日發行

平家物語 附承久記 〔非賣品〕

（二五〇、一）（印製本）

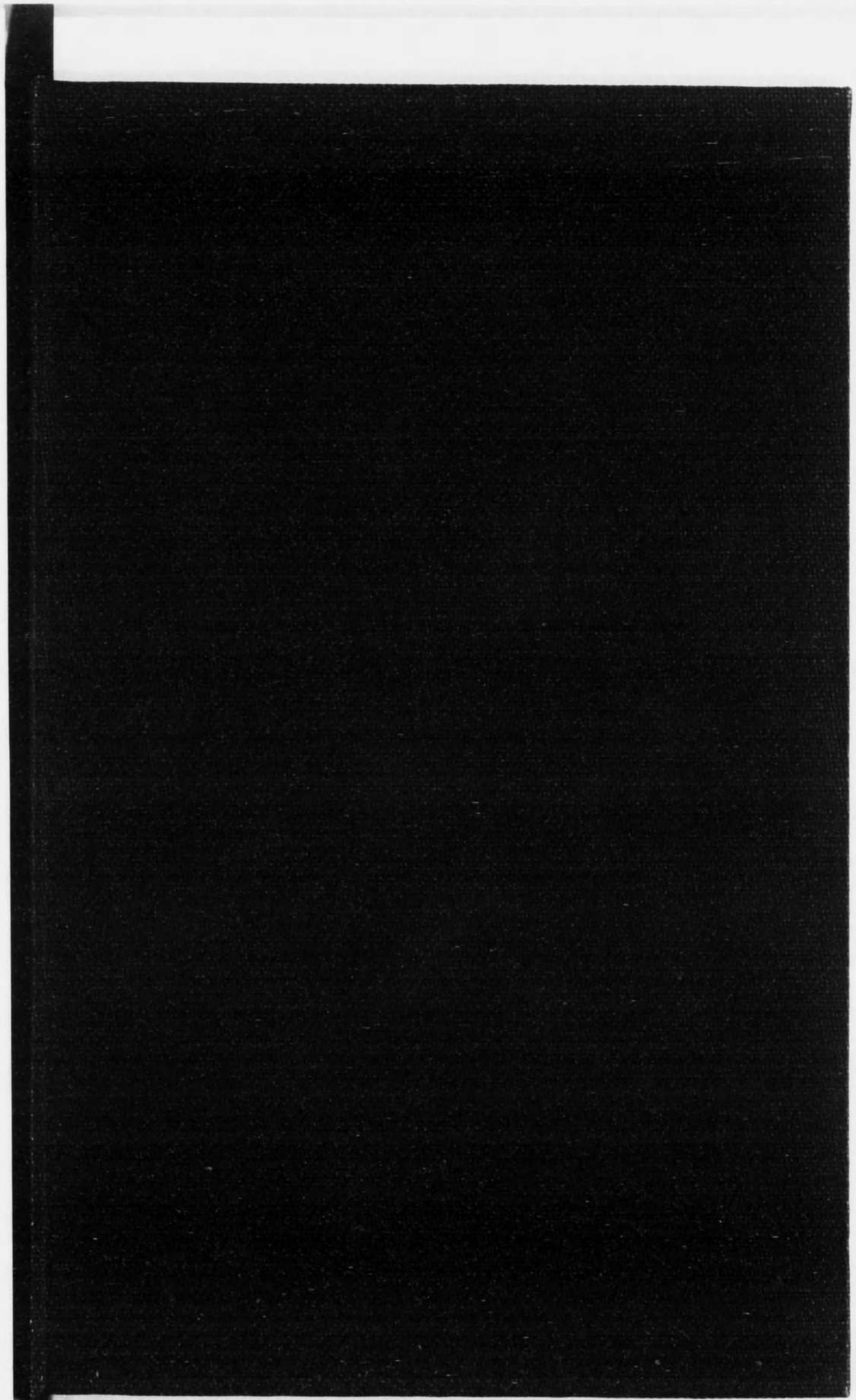
編輯兼發行者　國民文庫刊行會　東京市神田區小川町一番地

右代表者　鶴田久作

印刷者　平井登　東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社本所分工場　東京市本所區番場町四番地

不許複製



終